
空想科学学園都市 井川

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想科学学園都市 井川

【Nコード】

N9346L

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

世界最高の学府が、日本の静岡県静岡市とは名ばかりの山奥、井川に出来たのは、今をさかのぼる事30年前。

21世紀を切り開く人材の育成を目的として開設されたこの機関は、この20年のうちに天才育成機関とかなんとか言われるほどの学園へと成長した。最高の教育陣、最新の教育カリキュラム、最高の施設、国連主体の運営の為に一切学費がかからない。

誰もが求める教育機関といえる。

ただし、受験のオリmppickと言われるだけの事は有る試験内容

は、世界最高の入学競争倍率を誇っていた。

当然である、国連加盟国総てから受験生が集まるのだから。

学園入学試験合格と言うだけで十分なステータスとして、以降の人生の潤いになるというイワクツキのそこは、完全全寮制という古臭いシステムでありながら、毎年定員いっぱいの新入生を飲み込み、少数の卒業生を輩出している。

「ちゃんと」卒業できた少数の人間は、破格の待遇で超一流企業や政府機関に向かい入れられることは有名だけれども、一年や二年いただけの途中卒業者（退学という言葉は使われない）でも、そこいらの大学生など裸足で逃げ出す就職率を誇っている。

現代のガンダーラとも言えるこの学園に入学出来ても学び続けられるものは少ない。

あらゆる意味で。

序章

空想科学学園都市「井川」

序章 幼き日の記憶

東京での夜は、他の地方とは違い明るい。

ネオンやライトアップの影響で、星たちが薄明るい夜空の中に沈んでいるからだ。

見上げててもそこにある物は、疎らな一等星や月ぐらいなものだ。でもその空を、毎日のように彼女は見上げていた。

僕はその彼女の姿をみると、家から飛び出し足にまとわりついたものだった。

彼女はそんな僕を見てにつこり微笑むのだが、僕が彼女の事を呼ぶと少しむっとする。

「ばーちゃん！」

風になびく黒髪がたおやかであっても、その素顔がどう見ても30代といって疑いない顔であっても、彼女は僕の祖母であった。ゆえに拙い言葉で彼女を呼ぶ時は「ばーちゃん」と呼ぶことにしていた。

「リョーコさんと呼び。」

感情の入る隙間すらないかのように間髪入れず彼女は、仕返しに僕の頬を左右にひっぱる。

ゴムのように柔軟な僕の頬は、まるで玩具のように広がる。が、まったく痛くない。

彼女もそれを知ってか、容赦なく伸ばして遊ぶ。

いつも通りのコミニケーション。

そんなやり取りがいつまでも続くものではないが、それを見計らうかのようにお手伝いさんの皇さんが中に入ってくれていた。

「りょうこさま、りょうくんは喜んでいらっしやりますわよ。」

「面白味の無い子供だねえ。」

そっけなく手を離す祖母は、だからといって嫌気の為に手を離れたのではない事を感じさせる笑顔で僕を見る。

いま、そんな笑顔を思うと、辛く、胸が痛い。

二度と見れない風景だけに。

序章（後書き）

神代ふみあきと申します。

追いつめられるとテキスト打ちに逃げる性質なもので、色々と書いています。

気に入っていただければ嬉しいです。

第一話 新学期1

第一章

目を覚ました僕は5才の子供のりょうくんではなく、15才となった僕 リョウ 和泉だった。

身を起こし、ぐっと伸びをすると、ベきベきと背骨が音を鳴らす。祖母の言いつけどうり、寝る時すら掛けつづけている眼鏡の歪みかけたまま直し、視界を整えて外を見ると、白々とする朝を迎えつつある空が見えた。

祖母が消えたのは、僕が小学校に入った夏のことだった。

書き置きを残して、お手伝いさんの皇さんと共に姿を消してしまっただ。

何が原因かわからない失踪だった。

その時は、またいつもの冗談だとももっていたのだけれども、日が経つにつれて現実味が増していった。

夏休みの一ヶ月ほど茫然として、食事をする事すら忘れていた僕を面倒見てくれたのは祖母の親友の墨田じいちゃんだった。

その御陰で今を生きているようなものなのだが、その事を墨田じいちゃんに言くと、こっ酷く怒られる。

「あたしゃーねえ、ご恩のあるリョーコさんからばんを御あずかりしているだけなんですから、そんな言い様はしないでください。ぼん一人を無事育てさせていただいたって返せないほどのご恩を頂いているんですから・・・」

これから長い。

この手の話して3時間はだらだらと怒られる。

じいちゃんは「ご恩」の為だけに世話をしているかのように言っているが、その実、本当の親とても叶わないであろうと言うほどの「情」をもって世話をしてもらっているのを、この身に感じている。口に出さないのは、じいちゃんの照れである事も知っている。それでも僕はこれ以上迷惑をかけたくないと感じていた。

これから僕がやることと、起こるであろう騒動の全てで迷惑をかけたくないと思っていた。そんな色々な理由とその思いを背負って、この学園に入った。

国連学園へ。

世界最高の学府が、日本の静岡県静岡市とは名ばかりの山奥、井川に出来たのは、今をさかのぼる事30年前。

21世紀を切り開く人材の育成を目的として開設されたこの機関は、この20年のうちに天才育成機関とか何とか言われるほどの学園へと成長した。

最高の教育陣、最新の教育カリキュラム、最高の施設、国連主体の運営の為に一切学費がかからない。

誰もが求める教育機関といえる。

ただし、受験のオリンピックと言われるだけの事は有る試験内容は、世界最高の入学競争倍率を誇っていた。

当然である、国連加盟国総てから受験生が集まるのだから。

学園入学試験合格と言うだけで十分なステータスとして、以降の人生の潤いになるというイワクツキのそこは、完全全寮制という古臭いシステムでありながら、毎年定員いっぱいの新入生を飲み込み少数の卒業生を輩出している。

「ちゃんと」卒業できた少数の人間は、破格の待遇で超一流企業や政府機関に向かい入れられることは有名だけれども、一年や二年いただけの途中卒業生（退学という言葉は使われない）でも、そこいらの大学生など裸足で逃げ出す就職率を誇っている。

現代のガンダラとも言えるこの学園に入学出来ても学び続けら

れるものは少ない。
あらゆる意味で。

ベットを抜け出して隣のベットを見るともぬけの殻。
隣のベットの主は暗いうちから拳法の練習をしている、というか、
本当の練習は人に見せるものではないとの事。

流派や絶掌（拳法における決まり手、必殺技なんていう言い方もある）などが外に漏れた時点で負けることもあるからとか。
どうしても知りたいわけじゃないけど、なんとなく気になる秘密
という感じだ。

兵法と理を体现する中国拳法、絶掌ってのは奇策なのかな？
そんなことを思いながら、ささっと着替えて洗顔をしみると、鏡
にメッセージがあつた。

「『いつもの所で7時』か。」

きゅきゅつとペーパータオルでそれを消して、僕は背伸びした。

「中央食堂なら無料だけど、気分の悪いやつらがいるものなあ・・・」

着たきり雀状態で校内制服を着た僕は、寮をあとにした。

あらゆる権力と民族性を排斥したはずの国連学園でも、やはり心の問題はクリアできていなかった。

一応、国の威信や特定団体による掌握が無いように配慮された学園法規や制度があるけれど、集まる人間の心の中までは支配できるものではない。

だから人は集まる。人は群れる。
出身国や宗教や出身学校などで。心のありようで。

無論、そんな行為を馬鹿のことだと感じている人間は多いのだが、集まってしまった人間の結束は強固であり頑なであった。それがどんな意識で集まったものかとしても。

集まってしまった集団の中でも、ある種の白人という集団の結束は強く、且つたちが悪かった。

あたかも自らを優良人種かのように振舞う所業や、他の人間を見下す行為などは無視すればいいのだけれども、自分たち以外の人間に嫌がらせするのは鋭いことだ。

たとえば研究の認められた有色人種に無言電話を繰り返すとか、不幸の手紙を大量に送るとか、部屋に落書きをするとか、中央食堂で嫌がらせをするとか……。

あまりの程度の低さに学園側でも手を焼いている。

しかし、やつらは学園側は自分たちを容認しているがゆえに手を出さないのだと思い込み、さらに嫌がらせに邁進していると言う。

優秀な人間ほど嫌がらせをされるということで、学園裏 MVP だとか言われているそうだが、そんなもの受けた人間からすればうれしいはずも無い。

そのうれしく無さを、何故か実は今僕らは味わっている。

事の原因は、入学試験のときに中途半端な成績をとってしまったためや、入学順位が一桁に入ってしまったことにあると思う。

それを気に入らない某白人集団が入学歓迎式典の懇談会でこう言った。

「白人文化圏ではない人間が入学順位一桁に入るなぞ思い上がりだ」と。

最初に何語を話しているか判らなかったのだけれども、ぐるぐる思考を回して返答を行った。

「……その御意見を素直にお聞きしますと、白人文化圏の方でな

ければ入学順位一桁ではいけないかのように聞こえますが？」

「ふん、そういつているのが判らないとは、国連学園入学試験の質は落ちたものだ。」

その意見を言う男の周囲で、白人在校生の一部がいやな笑いをした。

選民主義もここにきわまれるというところだ。

確かに今はびこっている物質文明の中心をたどればヨーロッパ系に行き着くと思うが、それにしただって時代の変遷の一部であるだけ。冷静な思考はそんなことを考えていたが、何時も過激に発言する攻撃思考はそんな状況で大人しくいることを許さない。

ざっくり切り返す為に牙をむいた。

「なるほど、つまり白人文化圏の方々はその威信を持って入学順位一桁を死守せねばならないわけですか……、ところで先輩方の入学順位は何位でしたか？」

バツサリ！ 正面から切りつける。

その途端、真っ白に周囲が変わった。

そして、徐々に正面の男は色が変わる。

白から赤に、赤から紫に。

あまりに血が上りすぎて顔色が黒くなっていた。

ぶるぶると拳を振るわせた男を、他の在校生が、有色人種の在校生が笑う。

「……だれだ！ 私を笑うのは！！」

首を左右に振る方向での笑いは収まるが、視界の外では誰もが笑っていた。

「きさまら……どうなるか覚えている!!!」

手にしたコップを床にたたきつけ、ずんずんと男は去った。

ベーと僕が舌を出すと、今度はわらわらと有色人種の生徒が集まる。

「きみ、いい度胸だ!」

ばんばんと肩をたたく人は、多分アフリカ系の人だろう。

「あのばか、あそこまで言ったら自分が入学順位三桁だっていえないよなあー」

アジア系の有色人やハーフと思われる有色人がわらわらと集まってくる。

ケタケタと笑う彼らに共感されてもうれしくは感じなかった。

なにせ、この程度の言葉で切り返せる馬鹿を増長させている学園に在籍しているのだから。

国連学園はノーカラーだと思っていたという風に遠まわしに言う
と、誰もがばつの悪そうな顔をした。

曰く、彼ら自体は何も恐ろしくないが、彼らの首魁が恐ろしいのだという。

彼らの首魁は生徒総代（生徒会長のようなもの）で、あらゆる権力を持っているのだそうだ。

そんな、権力とかいったって生徒のもの。そんな恐ろしいものか、
と思ったが、彼の持つ権力のうちで最も恐ろしい権利というのが「
同居権」だとか。

何事かと思いきや、なんとその同居権というのは、任意の誰かと
無理やり同居することが可能なのだとか。

何じゃそりゃと思いきや、一応建前として、素行不良な生徒の更

正に当たるために必要な権利なのだそうだが、それを彼は自分の趣味のために行使するそうだ。

「しゅみ？」

「かれは、生徒総代は・・・ゲイなのだよ。」

ぶっ、と思わず含んだジュースをふいてしまう。

「げ、げい？」

重々しくうなづく先輩方。

「じゃ、じゃあ、もしかして生徒総代の手勢ってみんな・・・」
「それは無い。彼もかれの好みがあるからね。」

ふう、と思わず汗をぬぐう。

あんな阿呆と懇ろになる男性とは、どうやっても気が合わないはずだから。

「で、でもですね、そんな恐ろしい人を野放しにしているいいんですか？」

「・・・」

遠い目でみんなどこかを見ていた。

打つ手が無いらしい。

僕としては深いどん底感を味わっていたのだが、やり込められたほうは根強く恨んでおり、こそこそと嫌がらせが始まった。

たとえば、中央食堂。

入り口でわざわざ入るのを邪魔したり、トレイに乗った食事の上にわざわざ納豆を振りまいたり、人が食事をしている横にわざわざ

デイスポーターを持ってきたり。

たとえば寮の部屋。

ベットを水浸しにしたり、僕たちの部屋の中の人様に見つかりやすいところにエロ本を山の様に置いて評判を落したり、端末にウイルスを送りつけたり、ドアに落書きをしたり。

たいしたことのない嫌がらせだが、低俗であるだけに、いささかうんざりとしていたのだ。

色々嫌がらせがある中で、食事ぐらいは平和にしたい。

そんな訳で静かにできるところを共に嫌がらせを受けている同室の黄と探していたのだが、やっとこさ民間経営の喫茶店があることを見つけ、朝からお邪魔し始めたというわけだ。

奥さんも旦那さんも学園ができる前から井川に住んでおり、学園設置の際に市外に下りずにここで生活することを選んだそうだった。

そういう選択に甘かったころの話なので、今では実現不可能だろう。

静かな食事を所望する僕らは、必然的にそこを根城にし始めた。

「おはようございます。」

カランカランと鳴るベルをくぐって、僕はいつも座っている席に向かった。

四人がけの一番奥の席、そこには黄が座っていたのはいいが、その正面に女生徒が座っているのが判った。

「お、お安くないね、黄。」

そういつて僕は黄と並ぶようにすわり、そして息を呑んだ。

だって、無茶苦茶グレードの高い美少女が二人座っていたから。

僕や黄をみて、悠然と微笑んでいるのだから。

いまや彼女たちを知らない学園生徒はモグリだろう。

今期入学したルーキーながら、今年の学園祭でのミスコン入賞は確実といわれ、そして白人集団にも有色人集団にも熱いラブコールを送られている二人。

そして彼女たちは僕と黄の入学順位の近くのため、入学式典で結構お世話になっていたのだ。

こういうとき、女性に何を話していいのやら・・・。

深い海を思わせる視線の所為で僕の思考は途切れ途切れになって、そして瞬間的にショートした。

だから思いもなかった言葉がすらすらと出始めてしまった。

「おくさん、僕と黄はいつものお願いします」

「はい」

視線を彼女たちからはずせないはずなのに、何気なく体が動く。

「や、おひさしぶり」

すちゃつと片手を挙げると、悠然と微笑んでいた彼女たちの表情が一瞬ゆがみ、そしてぐらりと揺れたかと思うとつつむいた。

ありゃ？ 怒らせたかな、と思ったら、かわいい笑顔で笑っていた。

歳相応の笑顔で。

「聞いたわよ、あなたたちの活躍。」

いい香りのコーヒーをすすりながら美少女のひとり、イブ「ステラ」モイシャンは言った。

活躍といっても何のことやら、と言うと彼女は指折り数える。

「入学式典でバカ白人連合の下っ端をやり込めたり、中央食堂で有色人を通せんぼをする阿呆白人をそのまま引きずって朝食につき合わせたり、納豆嫌いな人間がはじめた嫌がらせの途中にその人間を納豆で洗脳したり・・・」

ちよ、ちよつとまっつてください、すべて降りかかる火の粉を払っていただけで・・・

そういつたら、今度は鈴〓レンファがおかしそうに言う。

「普通だつたら喧嘩をするようなところを、あなたたち二人でいなしちゃうらしいじゃない。聞いたわよ、白人バカがベットを水浸しにしたら、仕掛けたやつらのベットと入れ替えたらしいじゃない。それも、周りのルーキーたちを巻き込んで。どうやって抱き込んだの？」

いえません、いえません、ほほを赤らめるようなエロ本を学園関税を越えて持ち込んだ英雄として見られているだなんて言えませんが、持ち込んだエロ本を回し読みした仲間でするんでいるだなんて言えません。

少なくとも、女子寮の皆様には知られたくない「チーム」です。

「あなたたちが集中攻撃されているおかげで、結構色々な人が被害がなくなつたって感謝しているわよ？」

「君たちも、感謝組？」

「うんうん、もちろん感謝よ」。なんとと言っても、あなたたちとは入学順位で縦続きじゃない？ 色々と聞かれちゃって」

「あ、でもでも、変なことは言っていないわよ？ お互いプライバシーを明かした仲って訳じゃないしね。」

こんなところで軽く肩をすくめる姿でさえも愛らしいのって反則

じやあるまいか。

きらきら光るような彼女たちを見ているうちに、僕は思わず体の力が抜けた。

それと同時に、彼女たちからきらきらが消えた。

いや、彼女たちが美しくなくなつたわけじゃない。

愛らしさは変わらない、しかし何かが急に無くなつて、それを補つて余りある何かがにじみ出てきた。

その正体はわからないけど、僕としてはこちらの雰囲気のほうが好きなので思わず微笑んでしまった。

「っ。」

息を呑む雰囲気でわれに返ると、二人の美少女は僕を見つめていた。

「え、えつとなに？」

僕の言葉に身を一瞬振るわせた二人の美少女は、なぜかしどろもどろ。

「あ、あ、あのさ、あ、あ、あ、あたし達って参加授業の合致確率って結構高いじゃない？」

「そ、そうそう、ほら、さっきエックしてみたんだけど、そ、そ、そう、ね、70%、これすごいと思わない？」

イブの差し出したハンドヘルドPCを持って僕も驚いた。

黄と僕は今期一年まったく同じ選択をしているので合致確率は100%なのだが、そんな人間はほとんどいないといつていいだろう。本来なら合致確率は30%以下で、30%を越えている時点でよく会う人間といえる。

授業でよく会い、息が合う、出身国や民族にかかわらない集まり、意思と意思が繋がる仲間の集まり。

そんな人間関係を学園では「チーム」と呼ぶ。だから、気軽に考えたことを言ってしまった。

「ははは、なんか、水準以上のチームって感じだね。」

そういつて思わずしまったと思った。

彼女たちをナンパしているように見えないだろうか、と。

嫌悪の視線を予想して彼女たちを見ると、二人の瞳は喜色にあふれていた。

「ほ……ほんとにそう思う?!」「それって、本気にしているわね!」

思わず迫力に押された僕がうなずくと、二人の美少女は黄に視線を移す。

「いいわね、いいといいなさい!」「了解よね、追従よね!」

青い顔色の黄もうなずくと、満面の笑みの二人は、ダッシュでその場を去った。

「あ……あのお……。」

か細い僕の声を、黄のため息がふさいだ。

「……ふう……。なんでうちのルームメイトは騒動がすきなんだ……。」

「え……。だって、何か変だった?」

何かを言おうとして、そして再びため息。

「ま、すぐにわかるよ」

三人分おこれよ、となんだかわからない言葉を残して黄も消えた。レジでしようが無く全員分お会計を済ませると、奥さんに相談してみた。

「いまの、なんだったと思います？」

「やった、リョウくん。もう、鈍感なんだから。」

クエスチョンマークを頭に抱えた僕は、おつりを片手にその場を去った。

授業塔に向かう桜並木のなか、僕と黄を見つめる視線の十字砲火。何じやろ、と思って視線のほうに首を向けると、誰もがこちらから視線をそらしていた。

「な、なんだ？」

疑問を口にすると、黄はあきれたようにため息。

「判らないのか？」

「わかるうはずも無い。」

なんでだよ、と肩をすくめる黄とにらみ合いながら進むと、なぜか正面に人だかり。

号外とかいいながらビラをまいているところを見ると、校内新聞の号外なんだろう。

前回の号外は入学順位速報で、あの情報の所為で白人の方々に目をつけられてしまったのだ。

だから号外というやつにいい感情を覚えていない僕だったが、内容は気になったので取りに行こうと一歩踏み出した瞬間、空気が凍った。

物質化したかのような視線の嵐の中、いろんな国の発音で僕の名前が呟かれている。

な、なんだ？

そんな疑問の僕の正面に、一枚のプリントが差し出された。

その紙の中央には、二枚の写真。

隠し撮りと思われる僕と黄の写真と、抱き合ってピースサインをしているイブとレンファ。

その写真を飾る東京スポーツ風味の極悪フォント。

『今期最有力美少女コンビの嫁ぎ先は、なんと！！』

がつくりと脱力した僕は、隣にいるはずの黄をみると、そこには同じアジア系であり、黒髪つややかな長髪・長身の美少女、レンファがいた。

はっとおもって反対を見ると、金色の髪の毛たおやかな美少女、イブがいた。

二人は仲良く号外を取り、そして僕を見つめた。

「あー、もう広まっちゃわー、はずかしい」

「もう、こういうことって隠しておけないものね」

きゅっと左右から腕にぶら下げた僕。

「あのお、我がルームメイトは・・・どこに？」

空いてる手で二人の美少女は授業塔入り口を指差す。

「あ、てめー、にげやがったな！」

「巻き込まれるのはごめんじゃい」

とことこと建物中に逃げ込んだ黄。

僕は二人の美少女という重石を両腕にぶら下げたまま、呆然と立ち尽くしていた。

夕飯を食べようとよつたいつもの喫茶店のテラスで僕はべったり伸びていた。

横に座る黄は、面白そうに笑っているが、正面に座る二人の美少女は申し訳なさそうに座っている。

まあ、なんというか、はめられたらしい。

彼女たち二人は、それこそ学園中からチーム参加要請や集団への加入要請があつたそうだ。それこそ夜討ち朝駆けで。

イブとレンファ二人のチームだという意見をまったく聞いてもらえずに困っていたところで、ふと思ったそうだ。

チームを組んでしまえばいい、と。

「で、なんで僕らかな・・・。」

「な・・・!!」

顔を真っ赤にしたイブとレンファはぐつと二人で身を寄せ囁きあっている。

「・・・判ってないみたいよ、この朴念仁」

「信じられない、あきらかにアピールしてるに・・・」

僕には良く聞こえなかったが、結構険しい表情で囁いた後、何かをあきらめるようにため息の二人。

「・・・少なくとも、あなたたち以上に気の合う人がいなかったから。」

「こんな事話して、許してくれそうなのはあなたたちだけだと思うから。」

僕だって、許すかどうかなんて・・・

そういおうと思ったところで、彼女たちの顔を見た。

そして、負けた。

だめだよ、こんなかわいい顔で「いやって言わないで」って顔されたら。

「・・・君たちとチームになれてうれしいよ。」

だから、こんなことを言ってしまった。

彼女たちの輝くような笑顔につられて。

桜舞う道を、僕とルームメイトの黄は行く。

入学式から毎日で通い慣れた道だ。

男子寮からのこの道は、学園設備北部からの道で、もう暫く歩くと学園設備中央部に位置する女子寮の道とぶつかる。

ちよつと目を凝らせば、朝日に照らされた道の向こうに、まぶしい少女たちの姿が見えるだろう。

いかに、入学受験のオリンピックピックなどと呼ばれる恐ろしい受験倍率を勝ち抜いてきた人間たちでも、高校生程度の年ではリビドーを

押えるほどに達観できるはずも無く、ぎらぎらとその視線を正面に向けている。

普通の学校なら、少女たちはそれを半ば無視していることだろうが、この学園では、国連学園では違う。

女子もまた男子に向けて探るような視線を向けているのだ。

将来有望なボーイフレンドを捕まえるために。

この一週間で何人ものカップルが生まれ、そして早々に破局する中、僕と黄はそういう浮世の時勢から取り残されつつも、途切れることのない情報を得ていた。

それもこれも……。

「はぁーい、元気？」「おはよ、元気そうね？」

この、声をかけられるだけで周囲から数ヶ国語の「殺」という気配を放射されるような相手が色々と教えてくれるのだ。

力なく視線を向けると、そこには実に形容に優しい二人の少女が居る。

簡単にあらわすなら、「美」とつければいい。

しかし、美少女の概念には色々と個人差があると思うので、詳細な形容をすれば……

片や長身でスレンダーボディー、絶対そのままスーパーモデルになれると確信させられる真っ黒な長い髪の毛を後に編んだ中華系美少女。その名を鈴「レンファ」。

片やすこし低い身長だが、メリハリのある体は超セクシー。輝かんなばかりの金髪をふんわりカールさせたヨーロッパ系美少女。その名をイブ「ステラ」モイシャン。

今年の新入生最高ルーキーの美少女と噂名高い彼女たちは、ルーキーはもとより在校生にもアタックされているとか。

今年の学園祭におけるモストビューティーの称号も彼女たちに送られるのではないかとマコトシヤカに囁かれている。

そんな彼女たちから、僕らはなぜか毎日声をかけられる。
彼女たちが仕掛けた罠によって、僕ら四人がチームと目されているからだろう。

「おっはよ。」

「ん、よいあさだな」

こんな風に普通に気軽な挨拶ができてるのは、なによりこの国連学園の標準会話が英語で行われているおかげだ。

日本語だったらドモリまくりだってばさ、相手は超級美形だもの。すすつと近づく彼女たちから、なぜかいつも黄は一步引く。及び腰になるのは致し方ないが、逃がすまじと取り囲む彼女たち。たっぷり接近されて連行というのがこれまでのパターンだ。はてさて、今日の醜聞はいかなる内容か。

国連学園の授業パターンは選択授業制だ。

無論、必須のコア授業はあるけど、それも週何時間も同じ内容でやっているの、コア授業の時間帯はまちまち。そういう点では、完全な選択制といえる。

己の能力と学力と目的にあわせて授業を選択し、修学を行うことをこの学園の生徒には求められる。

ゆえに、普通の学校にあるようなクラスメイトという関係は存在せず、授業の選択分布が近いもの同士やフィーリングが近いもの、ルームメイトがいつの間にか仲良くなって「チーム」と呼ばれるグループになる。

僕と黄は100%同じ選択分布な上にルームメイトということもあり、すんなりチームといえるだろう。

で、結構おなじ授業分布なのが、例の美少女二人なのだ。

それゆえに、僕ら四人はチームとして認識されるようになってき

ているのだが、これがかなりの不評らしく、僕と黄の周辺をさらに不穏なものにしている。

いままで人種的な圧力であった嫌がらせは、人種年齢を問わないバラエティーに富んだものとなってきており、僕らに敵対すること
で一体感を得ているかのようにも見える。

彼女たちとチームと目されるまで散文的であった嫌がらせメールは、詩的な引用や文化背景を感じさせる艶やかなものとなり、各国の世相を感じさせる。

黄と僕は思わず関心半分、殺すとか死なすという直接表現が無いことに寂しさ半分といったところかな？

実際、面白おかしい内容や殺すとかいう内容にどう繋がるかは手紙の目的と意識が一本化した作品といえるもので、どうも一人で見ているにはもったいない気がする。

「こんなもの、すぐ犯人がわかるだろ？」だから仕返しをしようというのが黄の意見だが、僕としては様々な言葉の悪口の図鑑を見ているようで面白いと思う。

ずいぶん後の話だが、これをファイルにまとめてレポートにして提出したら、入学当初に僕へ誹謗厨房メールをした連中からずいぶんと恨まれたもだが、これは別の話。

嫌がらせメールの存在を知った二人の美少女はメールアドレスを公開すべきだといったが、僕は笑顔で断る。

なぜという問いに僕は答えた。

「だって、もうすぐ報復が開始されるもん。」

その日から一週間、学園メールサーバーのトラフィックは近年ま

れに見る物量となり、無視できないほどのメールがハードディスクを埋めた。

学園保安部による調査では、通常時量の2500倍のデータパケットが飛び交い、そして授業などにも使われる回線すらも汚染しつつあったという。

原因は・・・と調べてみると、単純にメールの量が多いことが主な原因であったが、そのメールはほぼ一定の人間を中心に全校生徒を巻き込んでいた。

内容がふるっついていて、主題内容が『不幸の手紙』ときている。

各国語で書かれたそのメールは、人の不快感と恐怖感を掻きたてるものがあり、期限内に友人数名以上に出せという指示は強制力があるように感じられたとのこと。

ともなれば、一通ごとに数倍、数倍がまた数倍といった形に恐ろしい数になったという。

メール巡回の中心に居たであろうと思われるルーキーが倒れた時点で、教授会も事態解決のために重い腰を上げた。

というよりも、事の事態を仕掛けた生徒に対して事情聴取を行うことにしたのだ。

思うほど学園の大人は無能ではないのだ。

というか、人が倒れるまで静観している根性はたいしたものだと思う。

「・・・呼ばれた理由はわかるかね？」

数十名からなる学園首脳陣『教授会』は学園における権力の象徴だ。

彼らが一丸となって発する結論はシバシバ生徒や学園全体を戦々恐々とさせる。

めったに一致などしないが。

その教授会の円卓の中心に座らされた僕は、あたかも戦時裁判の被告のようだ。

「いささかの心当たりもございません。」

このふてぶてしいまでの態度、戦時裁判などであろう事か。

刑事よりも民事に近いこの場を切り抜ける最良は、度胸と根性。

自信に裏打ちされた誠意と、ふてぶてしいまでに筋金を入れた根性こそが勝利の鍵。

相手は軟弱エリート生徒さんの直訴となれば負けませんよ、などと不謹慎な笑顔の僕。

「ならば、ここ何日かで起きているメールサーバーのトラフィックオーバーの原因について知っているかね？」

「まったく知りません。」

「最後にきこう、この事態に陥った生徒たちに何か言うことはないかね？」

まったく知らない、かわりないという証言は完全に無視されているわけだ。

流石は学園体制側、こちらもちよつとはカードを切らざる得ない。

「なんでも噂によりますと、不幸の手紙が蔓延し、受講中でもメールの配信に追われていたとか。それが本当ならば、阿呆としか思えません。全て処理したければ返信用の自動スクリプトを組めばいいだけです、不幸の手紙などというものなどはじめから無視すればいいのですから。」

そう、この事態を招いているのは、はじめに不幸の手紙を送った人間でなければ、途中で増長している人間でもない。はじめに受け

取った人間が、出さないで無視すればよかったのだ。

誰もが忘れたところに犯人探しをするのもいいだろうし、それ自体を研究するのもいいだろう。しかし、客観性を見事に失って事象に飲み込まれるなど、学園の生徒としてあっていい話ではない。

いや、少なくとも僕はそう思う。

そんな意味のことを習い覚えた「上品な言い回し」で発言すると、正面の議長役の教授は微笑んだ。

「・・・君のその胆力と洞察力に免じ、このほどは不問に伏そう。しかし、次があるとは思わなくてくれたまえ。」

ばればれですね。

思わず苦笑すると、議長役の教授が出てゆく。

思いたため息を漏らすと残った教授陣が全員で拍手してくれた。

今までの無表情ではなく、満面の笑みで。

それを見て僕は、教授と言われる人たちもこの場を切り抜けることを願っていてくれたことを感じた。

なんだかとてもうれしかった。

無罪放免を勝ち取った僕であつたが、周囲の視線が今までと違って、いることを感じた。

今までは殺意をこめた羨望であつたが、最近はもうちょっとやわらかい気がする。

女生徒たちからも声がかかることが多くなつたし、男子からも声がかかるようになった。

相変わらず殺気をみなぎらせているやつらも居るけれど、学園内の住み心地はかなり改善したものと感じるべくだった。

第一話 新学期1（後書き）

一話分連投します。

第一話 新学期2

第二章

数少ない、イブとレンファと同じじゃない授業『冶金学』教室での汗をシャワーで流し、さてお昼にしようかといつもの店に行くと、珍しくも結構な盛況であった。

殆どの席は埋まっており、いつも僕と黄が座る席だけあいていた。いつもの席に座って見渡せば、なぜか全員生徒でルーキーだった。中央食堂での嫌がらせが出来ないからって出張してきているのかと思いきや、誰もちよっかいをかけてこなかった。

視線はたびたび向けられているものの殺気や殺意の類のものは無く、名状しがたい生暖かいものが籠もっている。

なんじやるべ、と思っていたが、目の前に無注文で出てくる日替わりが来たので、何も考えず両手を合わせる。

「いただきます」「いただきます」

僕と黄が声をそろえて言うと、周囲からくすくすと笑い声。

忍ぶような笑いだが、嘲りの類ではない気がする。

まあ、先日までを考えれば進歩したものだということで。

そんな思いを感じつつ、黙々と食べていると、ざざっと周囲を囲まれた。

男女合わせて十数名、みんな真剣な顔をしている。

このまま全員で僕をたこ殴りしたうえで、裏山に埋めてもばれないかもしれないなあ。

そんなことをボーっと考えていると、一人が切り出した。

「あ、あの、きみ、君たちって、リヨウ・イズミ君と黄、天翔君ですよね？」

僕が食べかけのエビフライを咥えたままうなずくと、正面で口いっぱいにご飯を入れて頬を膨らませている黄もうなずいた。

なんとも行儀の悪いことだが、食事の時間を削るつもりは無いのでそのまま。

「・・・あの、僕らとチームを組みませんか!!」

「？」

同時に僕と黄は首をかしげた。

いつもの店に集まった15人のルーキーは出席授業重複率が平均15%ほどの集団なんだそうだ。

まあ、コアと呼ばれる必須授業を入れての重複率なので、完全選択授業となるともっと低い率だろうと思う。

そういえば、ちょっと後のほうに学園内報道グループに所属した田所洋行君が居る。

彼とは冶金で一緒だから、全然接点が無いわけじゃない。

しかし、彼と接点があるからって、その仲間全員と接点が出来るかというと、どんなものかと小首をかしげる。

どうしたものかと思っている僕らの前で、彼らはすでにチームとして教務等への出入りを許可されているし何箇所かの研究室に出入りも始めていることをうたい上げた。

如何に自分たちのチームに入ると有利かを説明する姿は、テレビの通販宣伝番組のような胡散臭さをもし出している。

「・・・どうかな、チームにならないかい？」

答えはノーなのは決まっている。

目を見れば、黄も同じ意見だった。

ただ、疑問は残る。

彼らはこれほどまでにアピールしなければならないのか？

どれだけ有利であるかをアピールしているということは、彼らが得られるメリットがそれを越えているということに相違ない。

彼らが感じている優位性に見合うメリットが僕たちにある？

「？」再び首を傾げる僕らを、抱きこむように現れたアメリカン。

「はっはっはっは！ まったくおめーらは自分たちを知らない

よなあ。」

あ、JJだ。

というわけで、僕と黄は左手をすすつと真上に伸ばし、右腕をきゅつと上向きに曲げる。

JJと会ったときに、僕と黄はこうやってポーズをとることにしている。

名づけてJJポーズ。親愛の証だ。

「あのなあ、そのポーズやめろつて。」

「やー、JJ。」「おお、JJ」

「そろそろ、航空物理だぞ」

「おお、ではいこう」「ん、皆のしゅう、これで失礼する。」

呆然とする人たちを置いて、僕らは次の受講先である航空物理の教室に向かった。

JJポーズのまま。

「てめーら、いい加減にしろよ！」

五人のJJポーズに囲まれたJJは、半ば切れていた。

僕・黄がはじめたJJポーズは瞬く間に広まり、終いには担当教授までがJJポーズで教室に入ってくるまでになった。

・・・まー、怒るわな。

「はっはっは。」

ひとしきり笑った僕は、JJの真向かいに座る。

「ところでさっきの話。」

「喫茶店のあれか？」

「そうそう。」

彼らを割って現れたJJは、僕らがそこに居ることがわかっていうようだったし、彼らを取り囲んでいた理由もわかっていったようだった。

誤認でなければ、彼らが僕らを求める理由ってやつもわかってい

るような気がする。

というわけで、率直に聞いてみると、「」に笑われた。それどころか彼のチームメイトにも笑われてしまった。

「本気で言ってるのか、リヨウ「イズミ」」

「真剣な顔だけど、ジョークだよな？ 黄。」

「あ、いま、心外だつて顔してる、二人とも。・・・まじ？」

真剣に頷く僕と黄に、彼らは同時に肩をすくめた。

ああまったく、と彼らは話し出した。

彼らいうところ、僕たち二人への注目は入学当初からあったという。

まあ、入学試験の一部で突出した結果を出したのだからそう言うものかも知れないけど。

下っ端白人グループをあしらったのは、好意的に評価されているらしいが、二人の美少女たちと交流があることから怨嗟をこめた注目も加わった。

これは僕たちの所為ではないといいたいが、基本的に美人は好きなので黙っておく。

それだけ注目が集まれば嫌がらせのひとつでもとということだが、僕らに來た嫌がらせは一つどころではなかった。

リアルとネット両面での嫌がらせを見て、有志各位が自分のチームへ組み込むことで保護が出来ないかと思っていたのだそうだが、突如イズミ「リヨウ・黄」天翔兩名の生活圏が消失し、対応が遅れていたそうだ。

あわや自主退学かと有志各位は恐れていたが、どっこいシブトく曲がらず元気であつた二人。

それどころか猛烈な反撃と共に凱旋してきたというのだから皆目をむいたという。

同情とか哀れみとかではなく、本気でチームを組んでみたいと彼らは思っただけらしい。

というのが「」チームの話であつた。

「だから、これから結構なアプローチがあると思うぜ。」
「げえー。」

「それにさ、リヨウたちとチームを組めば、もれなくもう二人が付いてくるもんね。」

リーガフがいやらしく笑う。

「・・・だれ？」

小首をかしげる僕に、黄は教室の出口を指差した。

そこには美少女二人組み。

「はやく！ 次まで時間が無いわよ！」

「もうう、はやくはやくう！」

思わず顔を見合わせて苦笑の僕と黄だった。

夕暮れのいつもの店。

店内が一杯だったので、むりやり倉庫からテーブルと椅子を引っ張り出してオープンカフェ状態にした。

なぜか昨今人気の喫茶店の薄暗い店先、丸テーブルに椅子は四脚。「ごめんなさいねー、何でか最近お客様がおおくて。」

薄暗い店先でお冷を飲んでいた僕たちに、奥さんが恐縮して現れた。

「いえいえ、こうやって勝手させてもらっているだけでうれしいですよ。」

「奥さん、こちらは勝手にやってますから、中を面倒見てください」僕と黄の言葉に気を良くした奥さんは、一度中に戻って何かを持ってきたようだった。

「結婚式のあまりものだけど、使ってね。」

もってきたのは飴色に光るキャンドルスタンド。

暗くなりつつある風景とあいまっていい雰囲気だった。

「ところで、リヨウ君、黄君。あと二人来るのかしら？」

「ええ、最近は四人で行動しているみたいなものですから」
そういつているところで、ふらりと二人増える。

「こんばんわ、奥様。」「お邪魔します、奥様。」

ちよつと日本式に礼をするイブとレンファ。

「や、待ってたよ。」

僕がそう微笑むと、二人は僕らのテーブルに付いた。

「なんだか雰囲気の良い席ね？」

「僕らの特設常連席さ。」

「中が一杯だね。無理やり開設中」

ふうーん、とローソクを見つめながら彼女たちは微笑む。

その影と光が一緒になった表情が、その表情を見ると、心の奥底がざわめいた。

「でも、ここで食べるのは、いつもの日替わりでしょ？」

「あつたりー」

きやつきやと笑いあう僕らであった。

ひとしきり食事が終わり、コーヒーで一息ついたところで、周囲が囲まれていることに気づいた。

またですか、と眉をひそめると、今度は趣の違う集団であることに気づいた。

おしろいくさいというのが黄の眩き。

なんというか、化粧くさいと僕の眩き。

眉を潜めて見回すと、結構な数の女生徒たちであった。

「みなさん、何か御用ですか？」

微笑と共に周囲を見回すと、なぜか女性たちは険しい顔をしていた。

げげ、今度は女子からのイジメですか？

むー、さほど接点があるわけではない女子だけど、総スキャンは避けたいなあ。

そう思っていたが、彼女たちの視線の先が僕たちではないことに気づいた。

さーてさて、これはどういうことかなー、と思っていると先頭の

女性が口を開く。

「協定違反じゃなくて？ イブさん、レンファさん？」

先手、先頭の女性。

ルーキーはルーキーだが迫力と戦意を持つ人だ。

「後決めのルールなんか縛られるなんてナンセンスだわ。」

「少なくとも、私たちはあなたたちよりも早く気づいて、そして築いてきたわ」

後手、レンファ・イブ。

ゆつくりと立ち上がる二人の美少女は、なんだか気合が入っているように見えた。

双方のやり取りの中身はわからないが、先手不利の雰囲気がある。

ああ、なんだかジ○ンプ格闘路線。

「誰にでも公平に権利があるべきじゃなくて！」

「誰にでも公平じゃないのがこういう事柄よ？ でも常に早くて正確な人間が勝つわ」

「はじめから公平だったわ。あなたたちが価値を認めなかった人間を私たちが欲しただけなもの。」

先手の少女、ぐつと言葉に詰まる。

そしてなぜか僕と黄に流し目を送る先頭の女性。

見回してみれば周囲の女性が潤むような目をしてこっちを見ている。

な、なんだ・・・なんだこれは！ まったく理解できない展開だ。

「わ、私たちが、私たちの目が節穴だったことは認めるけど、それでもー！」

「思うことは公平よ。でも、絶対に報われるわけじゃないわ。」

「だって、あなたたちは、すでに！」

「・・・まだ、なのよ。」

ため息を吐いて、疲れたような笑みで僕を見るレンファ。

イブも肩をすくめて苦笑い。

「えーっと、何の話でしょう？」

僕がそういうと、彼女たちはみんな驚いたような顔になる。そしてその顔のままイブとレンファを見る。

「この三週間ばかりがんばってるけど、この程度なのよ。」

こそこそと近づいてきた、いや、イブとレンファを中心に十数名の女性が集まってくる。

「・・・は、しましたの？」

「完璧に・・・してるのよ。」

「・・・うそ、だって、ほら！」

「ぜんぜん・・・もう信じられない！」

こそこそとなにやら話し合っていた女性たちであったが、暫くするとその人の輪がほぐれた。

手に手にお互いの手を握り合った女性たちは、「がんばろう」とか「負けませんわ」とか口々に言い合っている。

そして僕と黄を見た後、複雑な笑みでイブとレンファを見た。

「何が起こってるんだ、黄」

「こっちに聞くな」

肩をすくめる僕と黄であった。

朝、寮からの道を四人で歩いていると、それとなく女の子が近づいてきてイブやレンファに声をかける。

がんばれとか、応援してるわとか言う台詞は同じルーキー。

まだまだね、油断していると付け入るわよというのは在校の先輩たち。

なにを何を言っているかが解らなかったので聞いてみたが、誰もがあいまいな笑みを浮かべてどこかに行ってしまった。

なんだかなあ。

第一話 新学期3

第三章

深夜といってもいい時間、真っ暗なうちに黄は部屋を出る。

一族に伝わる拳法の訓練に行くためだ。

隣のベットを音も無く抜け出し、僕が朝食に行くところに合流する。今日も出て行ったなあと感じたが、声もかけるまでもないということで、僕は二度寝した。

開け放たれた窓、涼しい風が入ってきているのが解る。

黄のやつ、窓を開けるなら一声かけろ、と思って意識の覚醒を始める、いいにおいがすることに気づいた。

とても丁寧に入れたコーヒーの香り。

この部屋にはちゃんとアメニティー設備もあるが、僕も黄もコーヒーなど人が入れてくれるものと思っているのでこの部屋で入れたことなどない。

では誰が、とおもって身を起こす。

そこには、理解しがたい存在が立っていた。

腰まで届く銀髪、女性かと見まごうばかりの線の細い顔、細身ながら筋金が入ったかのような体、で、全裸。

これが女性ならばどきどきと顔を赤くするところだが、相手が相手だ。僕は自分でもわかるほど血の気が引いていた。

「これはこれはリョウウイズミくん。いい朝だよ？」

謳うかのように僕の名を呼ぶこの人物は、学園一有名な人物だろう。

曰く、学園でもっとも危険な男。曰く、男子寮でもっとも部屋に入れてはいけない男。曰く、背後に立った瞬間に男の貞操を奪う。門泥棒。

二人の美少女は言う、ゲイ・オブ・ザ・ブラックホール。

お気に入りの男子の部屋に忍び込み、媚薬入りのコーヒーを薦め、散々手籠めにしたうえで自分のハーレムに加えるという超絶鬼畜王。

学園における生徒代表者、生徒総代エメットⅡ風御門、そのひとである。

「こんなのが今までの代表なのか!!!」

「いま、芳しき飲み物を入れたんだ。一緒に飲まないかい?」

ぶんぶんと首を横にふり、そのうえで「私は呑む意思がありません」ときっぱり否定。

「遠慮しなくてもいい。私の愛がたっぷり入った特製だ。」

「私は衆道をたしなむ趣味はございません!」

両手を広げゆっくりと近づくと怪人から逃れんと、僕はベットから飛び降りた。

「なに、そんな事を言っているのは最初のうちだけだよ。暫くすれば、君の方から私の所にやってくるようになるさ。私の愛に触れれば、ね。」

ぎりぎりの緊張感の中、思わず反射的に浮かんできた言葉が口から出る。

「なぜ僕なんですか。新入生のなかで、もっと先輩好みのやつは一杯いると思うんですけど? マイクとかステイプだとかジェイジエイとか・・・」

大概こんな状況は他に無いものだが、他の状況でも似たような発言をしてしまい、後々酷い目にあって来ているにもかかわらず、懲りない性格のせいになってしまう。

「何故かは解らないが、今年は君を始めに落とそうと入学式で見てから心に決めてね。そう思っているうちに、なんだか、こう、胸がときめきだしたのだよ。」

見た目で彼の目の色が変わってきていた。

色白な彼の肌も徐々に朱がさしてきている。・・・全身が。

「・・・近づけば近づくほどに、私の心の制御が失われてゆく。あ

あ、こんな気持ちは初めてだ、まるで制御を失った原子炉がメルトダウンを起こしているようだ！ この熱い気持ち、君に解るか？！」
徐々に近づく彼の顔は、なにやら怪しくひきつりだしていた。

「これは・・・、これは、恋だ。恋なんだよ！！ 肉欲に支配されがちな私の弱い心に湧いた、最初の、初めてのルルド泉なのだよ！ 愛と言う名の根源的な力が私に起こした最初の奇跡なのだよ！

今まで知る事すら出来なかった本当の感情が今、君にめがけて弾けようとしているのだ！！ どうか一緒に新たな心之夜明けを祝っておくれ、マイハニイイイ！！」

「誰がハニーだぁー！！！！」

この15年間、これ以上の危機を迎えた事があるだろうか？ いや、ない、絶対に無い。

絶対の窮地・貞操の危機等という言葉は色々あるが、男性でこのての危機を迎えるにあたってどのような言葉を使うべきか？

この場で僕は、痴漢や性犯罪者達に襲われる事を危惧する女性の気持ちが見えた。

目の前にいるような変態性欲者達の荒い息を感じながら夜の町を歩ける女性達を、感動をもって尊敬せざる得ないとおもう。知人に護身用のナイフを持って夜の町を歩いている女性を知っているが、その気持ちも良く解る。将来に渡って女性の味方でありたいと心から思う。

しかし、そんな思いも今の状況には役に立たない。ああ、この窮地を誰に救ってもらえる神様はどこにおわすか！ どのように祈るべきものか！！

ずりずりと後ろに下がる僕に対し、先輩も距離をつめる。

距離を離す、距離をつめる。

距離を離す、距離をつめる。

距離を離す、距離をつめる。

距離を離す、距離をつめる。

距離を離す、距離をつめる。

無限に続くかのような攻防の中で、風御門先輩は徐々に興奮を露にしはじめた。

息を荒くして、肩で息するような状態に有った風御門は、急にその勢いを納めた。

すつと姿勢を正すと、僕に向かって優しく微笑む。

「さあ、僕に触れたまえ。さあ僕に飛び込みたまえ。今日ならば、総てをゆるそうじゃないか。」

寒気をする笑顔が近づいた瞬間、反射的に僕の拳が先輩の顔に叩き込まれていた。

だらだらと鼻血を出した先輩は、真顔になって僕に向き直る。

「ごめんね子猫ちゃん、そんなに恐がらせるつもりはなかったんだ。でも、私もちよつと興奮し過ぎてしまったようだ。この調子では君の涙しか見れそうもない。この続きはまた明日しよう。」

まるで何もなかったかのように彼は部屋のドアを開け去っていった。

鼻血と裸で。

「・・・助かった。」

ぼくはペタリと床にしゃがみこんでしまった。

突然訪れた恐怖と混乱で放心しているところ、同室の黄が入ってくる。

茫然としていた僕を覗きこむ黄は、ニヤリと笑う。

「どうやら無事だったようだな。」

「な・・・なにおう？・・・ああ！ 貴様知ってたのか！！」

急激に活力を取り戻した僕は、黄の胸倉をつかみ上げる。

「しらいでか。朝練に出る時に、こそこそと入り込んでいるところを見たぞ。」

「それを何故教えんのだ、きさまはあ！！ もう少しで変態性欲の泥水を浴びる所だったんだぞお！」

ぶんぶん和黄をゆする僕は、いきなり思い付く。

何の理由もなく、こやつはこんな外道の支援をしたりしない。

しかし、しかるべき理由があればどんな事でもジョークです。
その理由とって考えられるのは……

「……賄賂だな、黄。何を貰った？」

襟首をねじり上げる僕の拳に、びくりと動揺する黄の動きが伝わった。

同時に目を逸らす辺り、まったく嘘のつけない質といっても良い。
こんな弱気になるのならば、始めっからやらなければいいのに。
「な……なんのこと、だ？」

「この後におよんで何をとぼけているんだ、キリキリ薄情せい！」
更にぶんぶんと揺する僕に黄は、ぼつりぼつりと白状しはじめた。
その話を総合して、余計な話を排除して要約すると……

「学園祭のミスコンの審査員の資格につられただとう！！　きさまゆるさあん！！」

「ぐえええええ、ゆるしてええええ！！」

僕は一人で歩いていた。

入学以来殆ど一緒に行動していた黄は、流石に悪いことをしたと思っただけで10mほど後ろを歩いてくる。

「あのさあー、ごめんよあー」

反射的にキツと睨むと、黄は子犬のように身を縮めて街路樹に身を隠した。

そう簡単に許してたまるものか。

ぶんぶんと怒りつつ、女子寮との合流来ると、二人の美少女が遠慮がちに手を振っているのが見えた。

いささかささくれ立っている気分だが、彼女たちにその怒りをぶつけても良いわけではない。

無理やり顔をゆがめたが、はたして笑顔になっているだろうか？

「あのー、どうしたの、二人とも？」

苦笑いのイブに僕は深いため息で答えた。

「あのバカ黄のやつ、ゲイのバカ大将の手引きをしゃがった。」

瞬間、二人の美少女どころか周囲の人間が駆け寄ってきた。

「ええええええええ！！ ミスター風御門が部屋にきたの！？」

「うっそ、ほんと！ ええええ！ じゃありヨウの初めては男にな
っちゃったのお！！」

「うそうそうそうそ、やだやだやだやだあああああ！」

周囲の女子たちは何故か涙を浮かべたり騒いだり、男子たちは沈痛な面持ちで。

中には肩を震わせている人間が居る。

「てめえ、黄！ それでも貴様、リヨウのチームメイトか！！」

「ボコだ、ぼこれ！」

次第に人の輪が黄に固まりだしたところで、思わず僕は背筋が凍った。

「そーいゝえ、黄の家の武術って、一対多が得意だったわけ？」

「ま・・・まったまった！ 怖い目にあったけど、実害なし、実害は無かったんだってば！」

僕のその言葉に、周囲の人間が「あんな悪童でも庇うとは」とか

「純潔は命をもつてもあがなえない」とか囁かれた。

どうも誤解があつたらしい。

「そうじゃなくて、本当に何もされていないの、拳骨で撃退したの！」

-
-
-
-
-
-
-

十秒ほどの沈黙の後、津波のような絶叫が聞こえた。

[illegible]

午前中の授業全てが片っ端から休校になったのは、どうも緊急教授会が開かれたかららしい。

まあ、手持ち無沙汰だったので、僕とイブとレンファ、そしてちよこつと離れて黄はいつもの店でコーヒーしてた。

「しかし、凄いわねえ、リヨウ。あのゲイ・オブ・ザ・ブラック

ホールから逃れるだなんて。」

「ほんとほんと、信じられないわよ。背後のルパン三世の手を逃れて純潔を守る打なんて。」

君たち、僕が無事で残念なのかね？

思わず拗ねそうになったが、彼女たちの次の台詞で気分が立ち直った。

『ほんとうに、よかった……。』

そういう風に言われると、なんとなくうれしかった。

さりげなく席を詰めてきた黄は、しかめっ面で腕を組む。

「さて、今日は良かったとしても、明日が困るな。」

そのまま僕の横に座った黄。

僕も眉をひそめてうなずいた。

まあ、そろそろ許してやらんと、部屋も一緒だしね。

「ほんとだよ。鍵でも変えようかなあ。」

とはいえ、生徒総代は共通鍵を持っているので鍵を変えても意味がないという話もある。

つつかえ棒やバリケード案はあるが、毎日行えるほどのものではない。

地道に拒絶しても聞いてくれそうな雰囲気でもないのが恐ろしい。

「あーあ、何で僕なんだろう……。」

べったりと臥せる僕の頭をイブが撫でてくれた。

「去年は一人も毒牙にかからなかったっていうし、どこか琴線に触れたんじゃないかしら？」

「どこかってどこさあ？」

「そりゃ、やつぱり、山岳踏破試験のあとに宴会をしでかすとか言うふてぶてしさ？」

「教授会を出し抜く抜け目なさ？」

山岳踏破の後は、皆で盛り上がったくせにい。

ええーっと僕が顔を上げると、正面の二人の美少女は身を固めた。ええ、ええっと、なにかな？ と小首をかしげて、初めて自分が眼

鏡をしていないことに気づいた。

あ、いかんいかん、と眼鏡を探すと、いつの間にか隣に居る黄が持っている。

そっぽを向いている黄からとりあげて眼鏡をしようとすると、二人の美少女の手が添えられた。

いやいやと首を振る様が、あまりに淫靡で頭に血が上る。

潤んだ瞳が集中する視界で、黄の手が二人の手をなぎ払い、ささつと僕に眼鏡をかけさせた。

「・・・ハアウンソン・・・！」

同時にイロツポイため息を吐いたイブとレンファは、殺さんばかりの視線で彼女たちの手を振り払った黄を睨む。

「な・・・なんで・・・！」

「あのなあ、あれ、男にも効くんだぜ？」

黄の一言に目をむいた二人の美少女は、テーブルの反対側から僕を抱え込んだ。

「ま、まさか・・・！！！」

「・・・！！！！！」

豊満な胸二組に抱えられた僕には見えなかったが、凄い雰囲気だけ感じられる。

「・・・僕の趣味は違っけど、そっちの趣味の人には堪らないらしいよ？」

その黄の言葉に対し、ぎゅっと二人は僕を抱え込んだ。

く、くるしい・・・ぎぶぎぶ！

かすかにタップする僕を二人は一途に抱きしめていた。

ゆがんだ眼鏡をかけながら直しつつ、正面の二人を見る。

顔を赤く染め、ちらちらとこちらを見ては下を向くという繰り返しだ。

黄およびイブ・レンファの証言では、僕が眼鏡をはずすと「信じられないほど」イイ男に見えるそうだ。

漫画じゃあるまいし・・・と眼鏡を取ろうとすると、正面の二人は本気でビクリと体を揺らす。

どうも演技ではなさそうだと思って黄を見ると、苦笑で答えた。
「いやね、リヨウの眼鏡って伊達の癖に始終つけてるから気になつてさ、はずしてみたら驚いたというわけで・・・ね。」

そういえば、同室になつて二日目あたりで、妙によそよそしい日があつたが・・・。

それか、と聞いてみると「それだ」と短い返答。

「うつそだろお・・・。」

思わず店内の鏡を見る僕。

そこには、流行遅れの丸眼鏡をかけた平凡男が見える。

ぼりぼりと頭を掻いた後、イブに視線を向ける。

「ほんと？」

疑問一杯の僕へ向かつてイブは頬を朱に染めて頷く。

口をへの字に曲げてレンファに視線を移すと、彼女も頷いた。

信じられないが、本当らしい。

短い付き合いだ、その辺の嘘はわかる関係だと思っている。

苦い思いが胸を締め付ける。

「ほんとうなのか・・・。」

なんだか走馬灯のように過去が振り返られるなあ、と思う。

そういえば、子供の頃のこと、初めて公園デビューしたときはいじめられた。

眼鏡をバーちゃんからもらつてからはいじめられなくなったけど、そういうことなんだろうか？

バーちゃんの知り合いに騙されて女装したときは眼鏡をしていなかったのだが、瞬時に誘拐されそうになり大変だった。

近所のいじめっ子たちに助けてもらったときは、何故か名前でももらえなかったことを覚えていた。

もしかして、僕だとわからなかったのだろうか？

「・・・あああああ、どうしよう、このままじゃ・・・。」

このままじゃあ、まともに人と向き合えない。

ため息と共にそうもらすと、正面の少女たちが僕の手を取った。
震える手で僕の手を握り締める。

潤む瞳を意思で押さえ込み、正面から僕を見つめる。

「じ、時間を頂戴、絶対に正面から受けてみせる。」

「おねがい、私たちと向き合って。私たちも絶対に向き合うから！」
その真剣な瞳に、ぼくはぐらつときた。

「あ、あのさ、無理しなくても、僕と関わらなければ・・・」

「ばか！ そんなんじゃない、そんなんじゃない嫌の！！」

「ばかばかばか！！ そんな中途半端だったら、はじめから関わらないわよ！」

骨が折れるんじゃないかという握力で握り締める女の子。

なんだか半分泣いているかのように思える。

だから、おもわずごめんと謝ってしまった。

午後からの授業に向かったイブとレンファは、気丈に微笑んで店を去る。

残されたのは僕と黄。

「で、どうする？」

変わらぬ調子の黄。

流石に常識外の現象続きのせいかな、何時もと同じ調子の黄には助かる。

「彼女たちは・・・まあ、時間が何とかしてくれるだろ。」

あの力強い意志を秘めた視線を思い出し、その献身的な友情に感謝。

「いや、そうじゃなくて、明日の朝の話。」
「があ・・・」

一切の解決案がない問題を忘れていた。

人海戦術でベットをばらして壁に立てかけた僕たちは、部屋の真ん中で車座になっていた。

これで窓からの侵入は有り得なくなったわけだ。

その協力者に感謝と振り向く先には、三つの集団が居る。

一つは、なんとなくつるむ事が多い航空物理教室の「J」たち三人の航空物理組。。

一つは、学園内新聞における輝ける期待の星、田所洋行さんたち三人の報道組。

で、最後の一つがまったく今まで交流の無かった三人だ。

曰く、「前々からリョウイズミくんと話がしたかった」という三人であるが、その特徴は顕著だ。

線の弱そうな感じ、なよつとしたかんじ、全体的な受身感。思わず皆が思った。「耽美」と。

個人的には面と向かって話し合いたいタイプに見えないが、ここは間違いなく使えるカードだ。

どうせミスターの餌食になる僕を覗きにきたのは間違いあるまい。逆に使ってやろうじゃないかと邪悪な思いが胸に渦巻く。

奴らが口々に言う「いやいや心配だ」とか「まず友人関係に相談すべきだ」とか「貞操は大切に」とかいう台詞は信じないぞ。

「ま、こうやって集まってもらったことだし。」と、僕はクローゼットに腕を差し込む。

「そ、だな。感謝の意味を込めて……。」と、黄もクローゼットに差し込む腕。

同時に引つ張り出されたのは数々のグラスと一升瓶。

流れるようにコップを渡して、器を満たす僕と黄。

「かんぱーい！」

恩師直伝の雪崩式宴会であつた。

乾杯のタイミングが命、である。

その後のことを正確に記憶している人間は居ないだろう。

少なくとも僕の意識は3時ぐらいまであったものの、それ以降早朝までの記憶を失っていたし、他の人間も同じようなものだろう。ただ話した内容が色々あったのは覚えている。

「で、リヨウくん。きみの何処を彼は好きだと言ったんだね？」

病弱な耽美系の見た目をしていた「耽美」の筆頭らしき男、マクドナルド「尼崎は真剣な目で僕をにらんでいた。

「知らんよお。」

なんとなく予想が付いているものの、僕は韜晦した。

まだ予想だし、何処かにおいとなった話だから。

「おれはリヨウに目をつけたのは当然だと思ったけれどもね。」といいだしたのは「航物」のJJとステープだった。

「こいつは結構目元が涼しくてよ、上級生にも隠れファンがいるぐらいだぜ。」

初耳である。

吃驚したように黄を見ると、黄も驚いていた。

「言葉使いもわからなくてよ、俺なんか、こいつの話す英語を聞いとると落ち着くもの。」とJJ。

僕の英語の由来は、昔家に下宿していたアメリカ女性によるものなので、やわらかいのはそのせいかもしれない。

「今はやりのアジアンビューティー趣味つやつ・・・ですか？」

ふらふらとしながらメモを片手に話しているのは「報道」の田所たど洋行さん。

この人はかなりお酒に弱いらしくて、僕らの半分ほど呑んでいないのにもうふらふらだ。が、それでもメモを片手に話の内容を書いているのは凄い。

でも、翌朝そのメモを見ても何が書いてあるか解らなかつた。

覗き込んでみれば、既に何が書いてあるか解らないくらいだから。「いや、そういう流行り廃りじゃなくてだな。いわゆる所、中間美つてやつだ。」

「ああ、美形つてやつはその時代の最も中間的な顔だつて話だね。」

「そうそう、それでだな……」

喧々囂々と皆が妙な論争に熱を入れている輪を外れて、僕は部屋の端で休んでいた。

すると横に黄がやってきて耳打ちをする。

「どう思う、りょう？」

「皆も目が腐ってるんだろ？　こんな平凡な顔がいいだなんて。」

「まじめに聞いているんだよ。」

「……わずかだろうと信じがたい。少なくとも学園に来るまでそんな話を聞いたことが無かったぞ。」

「成長と共に美形のレベルが上がっているんじゃないか？」

「おいおい、僕は、平・凡・な・ん・だ。」

「そう思ってるのはリョウだけだつて。」

「くうー。」

冷やかしゃ茶化しにあるようなふざけた語調ではなく、どちらかといえば突き離すような語調は、黄が結構本気で話している証拠だ。ここまで言われれば、眼鏡の有る無しで何らかの見え方の変化があると思うしかない。

また、人によつては、眼鏡がある状態と無い状態で変化があるものの、それなりに好意的に映る可能性があると言つのも認めざる得ないだろう。

まったく信じられないけれども。

「……（げえー）」

力無くうめく僕に、いつの間にか皆の視線が集まっていた。

酒に酔っ払った焦点の無いうつろな視線が総べて、僕の顔に集中していた。

「えっ……と、なにかな、皆の衆？」

にこやかに言う僕に、すすすつとマクドナルド「尼崎が近づき手を取っていった。

「……共に学園祭で、学園祭に向けてチームを組まないかい？　君となら何でも最高なものが出来そうな気がするんだ。」

どこでそんな話しになったんだろう。さすがに酔っぱらい集団である。

すると今度は「Ｊ」がやって来て、僕と黄の間に入って両腕で僕等を引き寄せた。

「何を言ってるんだ、マック。学園祭でリョウと黄がチームを組むのは俺達とに決まっているだろ。なんて言っても同じ教室の仲間・・・そう、チームメイトじゃないか！」

その言い回しが気に入ってか、「Ｊ」は僕等をぶいぶい振り回してご機嫌だった。

「そ・・・そんな。ジャン、たかが一授業が一緒だからってチームメイトだなんて乱暴なんじゃないか？」

「・・・ふつ。一つも授業の接点もないやつに比べれば、遥かに有利じゃないか？ 0と1じゃ無限の開きがあるぜ。なあマック。」

ふと気付くと、ここに集まった連中総てが愛称で呼びあっていた。「そう思わないか、黄？」

にやけた顔の「Ｊ」を見つつ、黄は懷から手帳を取り出した。

「まあ、たしかに0と1とは無限の開きがあるけれども、コンマ数パーセントと70%とでは大きく違うのが解るよね、「Ｊ」。」

黄が見ているのは選択時間表だった。そして黄が何を言わんとしているのかを「Ｊ」も理解したようだ。

ふうと深いため息をついて、「Ｊ」は苦笑をした。

マイクもステイプもベルナルドも肩をすくめている。

事情通の「報道」の田所さんは、ははーん なるほどといった顔をしていた。

事情に疎いのはマクドナルド御一行さまだけらしい。

「どういう事なんだ、ジャン。」

すでにマクドナルドの目は点になっていた。程なく落ちる事だろう。

「ああ、僕から説明しますよ、マック。」

当初の予想に反して、時間が経過するにつれ意識がはつきりして

来たらしい田所さんはにこやかにマクドナルドに話し掛けた。

「黄とリヨウは全く同じ選択をしていますから除外しますが、彼らと70%もの高い確率で授業を同じくしている人達がいるんですよ。誰だとおもいます?」

「ヨーコ、もったいぶるな。」

ようこうと発音しにくい彼らは、なんとなく彼の事を「ヨーコ」と呼び出したようだ。でもヨーコっていうのも何とも言えないものがある気がする。

「ああ、ごめん。・・・その人達って言うのが・・・」
「イブとレンファだろ?」

「ああああ! 一番良い所を!!! 酷いよ 黄!!」

「なになに、遠慮するなって。」

「会話になってなーーーい!!」

どたばたと騒ぐ彼らをよそに、マクドナルドはうわごとのような言葉を発して倒れこんでしまった。

「ば・・・ばかな・・・。」

ふと見ると「耽美」のみなさんは、彼を置いて先にヒュノプス誘いを受けていたらしい。更に見れば「報道」の皆様もマグロ状態になっており、元気なのは「ヨーコ」こと田所さんのみとなっている。
「まあ、学園祭まで長いことあるんだしさ。気長にいこうよ。」

僕はそんな言葉を発した・・・そこまでの記憶のみである。

目を開けると朝だった。

適当に量をセーブして呑んだ御陰か体に残るアルコールも少ない。とはいえ、若さの勝利であると確信している。

見回すとそこにはくんずぼぐれつに絡み合ったマグロ達が苦しげなうめき声を上げている。マクドナルドと田所さんなど抱き合っているように見える。僕や黄や「」は壁に寄り掛かって寝た御陰でその中にはいない。

ともあれ、黄や「」に抱きつかれているんだけど。

なんでこう、なんというか、抱きつき癖のあるやつばかりなんだろう。

見様によつては耽美な風景なんだろうなあとか思っているところで、扉の方でかちやりという妙な音が聞こえた。

良く見ると鍵を閉めていなかったドアが徐々に開こうとしていた。「ふふふ・・・昨日私がやって来たのに今日鍵を付け替えていないとは、かなり期待して良いのかな子猫ちゃん。」そんな身勝手な咳きを聞くまでもなく、その人物がだれなのか理解していた。

「さあ、私の愛を・・・」

そこまで言つた風御門先輩は、部屋の内部に入ろうとした瞬間、体を固くした。

そして部屋の内部を見て絶句していた。

自分好みのナチュラル耽美系の少年や、アメリカな美少年や、童子と言つても良いような幼さを持った亜細亜系の少年達が、くずくづれつの寝姿で目の前にあるのだから。

様子をうかがう僕に全く気付かずに、先輩は暫し茫然とその風景を見ていた。

感無量といった所なのだろうか？

こころなしか頭がちよつと揺れているように見える。

目眩かな？　と思つていた所で、先輩はふらふらと後ろに下がりました。

「き・・・きみたち！！」

大声で部屋に向かって叫ぶ。気持ちうわずっているように聞こえる。

声にならない声を上げて、皆がムクムクと起きだす。

みな睡眠不足の為かクマがすごい。

「あ・・・Mr、オハヨウございます。」

間拔けた事に優雅に挨拶するマクドナルドは、未だ両腕に田所さんがぶら下がっていることに気付いていないようだった。もしかすると彼は何かを抱いて寝るくせがあるのかもしれない。

「き・・・きみたち！つこ・・・こここで、なななんあな何をしていたんだね！」

完全に起き上がったものがぐるりと見回して、首を傾げる。

「Ｊ」や黄も起きたらしいが、なんかぼーとしている。

「あ・・・ああ、みんなで交流会をしていたんですよ。ええ。」

「Ｊ」を引き剥がしながら僕は言った。

「こ・・・交流会・・・かい？」

びくりと僕の方を見た先輩は、何故か赤い顔をしていた。

「ええ、僕等新生は、この学園の事や今までの自分達の生活の事で大きく悩んでいますからね。その悩みを皆で話し合おうじゃないかという集まりなんですよ。」

それを聞いた先輩は、顔色を真っ青に変えてがくがくとうなずきだした。

「そ・・・そうかね・・・それならいいんだ、それなら。は・・・羽目はずさん程度になくなりましたまえ。・・・それじゃあ」

しゅたつと手を挙げた先輩は、形だけでもさわやかに僕等の部屋を後にした。

しばらく経ってから、部屋のあちらこちらで声のきしむ音がしはじめ、限界に達したかみんな爆笑を始めた。

抱き合い、互いを叩きあい笑い転げる姿を忘ぜんと見ていた僕に、皆が握手を求めて来た。「最高だ」「うまきはめられたぜ」「今期最高のシヨーだった」等等。

「なに、何のことだよ。」

ふと皆が笑いを止め、戸惑いに満ちた顔をした僕を見た後に再び爆笑を始めた。

先程なぞ比べ物にならないほどに。

「リヨウ、じゃあ全然知らないであんな事言ったのか？」「いや最高最高、それ以上の言葉が欲しいくらいに最高！！」「Mr.あの顔といったら！！！」

格別の疎外感を覚えていた僕の肩を叩き、黄は言った。

「今の台詞と同じ事を言つて、巡回に来ていた前生徒総代をけむにまいて、新入生だったMr.は、自分のハーレムを作る足掛かりにしたんだつてさ。」

「つまりMr.はその言葉を否定する事も出来なければ、疑う事も出来ないつて寸法さ！」とJは、むくんだからだを上下に揺さぶつて喜んで見せた。

「最高によくできたシナリオだと思つていたけれども、総てが偶然だったとは・・・最高のドラマをこの目に見せてもらったよ。」涙を流して笑っているマクドナルドは、依然田所さんを抱き込んだままだったが、田所さんもそんなことは気にならないらしくけたけたと笑つていた。

「少なくともこの場に居たと言ひ張るやつらがこの人数の3倍は現れる事受けあいの事件だな。」「でもすぐに解るぜ嘘なんてさ。この一体感は虚言じゃでないもんな。」

ふと、そう、何の気も無しに皆が押し黙る。

真剣な面持ちで互いを覗きあう。

「これつて・・・チームつて事だよ・・・ね。」

一言一言を確かめるようにマクドナルドが、いやマックが言うのを聞いてみな笑う。

「チームつて事に決まつてるさ！」

口々に言う彼らは手を組み肩を組み合つていた。

有耶無耶のうちに集まつた男達は今、何となく固い友情を感じていた。

基本的に服装の自由な学園に、パリつとした校内制服、第二礼服をちゃんと着た集団が現れた。

人種や宗教によつて固まりがちな集団とは違い、十数人のその集団は人種もまちまちで、当初は何が支えて集まつた集団なのか皆解らなかった。

しかし、まことしやかな噂がささやかれた途端、それは真実とし

て伝わりつつ彼らの正体を明確にさせた。

「ルーキーのリヨウがまたやった、今度はチームを組んで」

何をどうやったかなんて話しはどうでもよかったのだ。

学園に新たな主役が現れた、その事実だけが彼らを躍らせているかのようにだった。

「よう、おそかったな！」

「Ｊ」は喫茶店の奥で手を振っている。

ここ数日で僕や黄の馴染みの場所や店は、いつのまにはチームの馴染みの場所になっていた。

いつもの喫茶店には、休講になったやつやレポートの作成に追われているやつなど、必ずチームの誰かがいるようになっていくし、寮のレクリエーション室も僕と黄の部屋も同じ様なものだ。なにかいつもひとが周りにいるようで、うざったいようなそれでいて安心感がある。

なんというか、毎日がお祭りの前夜のような、そんな気分だった。僕と黄がドアを抜けた後にやって来た二人を見て、「Ｊ」以下新しいチームメイトの連中はどよめいた。学園期待の新人美少女ペア、イブとレンファが続いて現れたからだ。

しかし、いつも外で見せているような笑顔ではなく、彼らが始めて見るような、ぶすつと不機嫌そうにふくれている顔をしている。

またそんな顔も可愛いのだけれども。

「おっす。」

僕はいつも座っている席に座ると両脇に彼女達が立っていた。

それを見た「Ｊ」とマツクは、ささつと席を譲り、彼女たちを僕の両脇に座らせる。

各々彼女達は二人に微笑むものの、僕から視線をはずしたままだった。

だったら側に座らなければ良いのと思うものの、今日の朝、黄

にいわれた事を思い出さずにはいられない。

「なありヨウ、イブとレンファの機嫌が悪いのに気づいているか？」

「ん？ ああ、なんか不機嫌だよな。」

そう、取ると触ると不機嫌なのだ。

ここ数日、朝も昼も一緒にいるにもかかわらず、一言も口を利きたがらないのだ。

そのくせぴったりと側に寄って来る。

「一応忠告、謝つとけよ。」

「何だよ。僕が何かした？」

「何かしたし、何もしなかったからだよ。」

最近黄は色々と訳の解らない事をいうのだけれども、ここは謝っておくべきである事は知れた。

その当の黄は、この店のマスター直伝の紅茶をと、カウンターの
中で格闘している。

コーヒー以外は泥水にならないらしい。

「あ・・・あのぉ・・・」

そう言葉を発した僕を、殺さんばかりに二人は睨む。

なんでこんなに怒っているのか解らない。しかし・・・

「ごめん」

ばつと動いたかとおもうと、二人は僕のほつたをぐぐーっと両脇から伸ばした。

幼い頃から変わらず、僕の頬は良く伸びる。

「あうあう・・・」

「・・・なんで私達に教えてくれなかったの！」

「・・・どうして私達に話してくれなかったの！」

「そりゃ、私達、女だけれども、一枚かませてくれたって良いじゃ

ない！」

「なんの話もなく、あんな事するなんて水臭いじゃない」

「そんなに私達の事が信用出来ないって言うの?!」

「入学から短い間だったけれどもちゃんとチームしてたと思っていたのに!!」

早口で捲し立てる彼女たちの声は、何となく涙の匂いを感じさせた。

涙ながらに叫ぶ彼女達を見つつ、なるほど思った。

何もしなかったし、何かしたとは良く言ったものだ。

はたから見れば凄惨な風景だろうけれども、こと当事者の目から見れば凄惨な風景に思えてなら無い。どちらも同じだという話もあるが。

「ふぁんふぉふぉふぁふぁ? (何のことかな?)」とは言わなかった。

「ふぉふぁふぁふぁふぁい。(ごめんなさん)」とだけ言い続けた。しばらくしても彼女たちの怒りは収まりそうも無かったので、僕はずっと二人を抱き寄せると、頬を持っていた手が離れる。

「ここに集まった連中は、4つのチームのあるまりなんだ。」と洋行さん達とマツクたちと・・・僕等のね。」

キョトンと彼女達はこちらを見上げる。うつすらと涙に濡れたその顔は、無茶苦茶可愛い。

ああ、だめだ。もう、完全に取り込まれている気がする。

「・・・この前の事は本当に偶然なんだ。マツクなんかは、僕が皆を巻き込んでMr.をはめただなんて思っていたらしいけれども、全くそんなことはないんだ。何の理由にしろいろんな奴等が集まったもんで、ついうれしくなって酒盛りしたら雑魚寝になっちゃって、そうしたらMr.がきて大騒ぎになっただけなんだよ。」

一部真実じゃない部分はあるものの、嘘はいつていない。

一気に言う僕の台詞を聞いて、二人は眉を顰める。

「それだけ?」

「それ以外、どんな噂が立っているかは知らないけれども、本当にそれだけ。」

きっぱりと言いきる僕は、更に言葉を継いだ。

「え……っと、今度何かやると気にはいの一番にお知らせいたします。チームメイトとして。」

よろめくような調子の僕に、彼女たちは明るい言葉で答えた。

「ん！ まあ及第点ね。」

そう言って二人は僕の両頬にキスをして見せる。

みんなのはやし立てるような声が辺りに響く。

孤独に耐えることになるかと思えたこの学園生活は一気に人の輪を広げて行くかのようにだった。

和気あいあいと盛り上がる僕らの話題は、いつのまにか先日酒盛りの時の話に流れて行った。

「またやりたいね。」

誰かがそんな事を言うつと、なにやら又やろうと言う話が「いつやるか」と言う話になってきた。

「今度は私たちも呼んでよ。」

イブのその一言に、ちよつと固まる。

みな心の心の中に浮かべた酒盛りの風景に、両名を加えてみたのだろう。

「いや……ほら……まずいだろ。寮でやるんだし、男子寮だし。」

赤裸々スケベ、アメリカ生まれのイタリアンで通っているJが、思わず言葉を詰まらせながら言うつと、周りの男たちも口々に「女子禁制だし……」とかなんとか言い募っている。

「あら、ご存じないのかしら？ 寮規に『男子、女子寮への進入を原則的に禁ず』とは書いてあつても、その反対については何の記述も無いのよ。」

辺りの人間は「え？」という顔になった。

いつのまにか人の輪の中に戻った黄を見ると、広辞苑クラスの本をめくっている最中だった。

学園周辺の店には、何の理由かは分からないものの、電話帳感覚で学園法規を定めた本が無料で渡されている。

まあ、当然学生用なんだろうけれども。

猛烈な勢いでページをめくっていた黄は、呆然とした顔で僕を見た。

（ないの？）（無い）そんな意味合いの視線が交わされる。

そんな様子に気づいた他の人間も、黄からひつたくるように本を調べるものの、その手の条項は見当たらなかった。

「へへへ、無理無理。以前まであった条項だけれども、4年前にひっそりと廃項となっているんだから。」

おおおお、というどよめきが走る。

少なからず夜這いに入れなくても、引き入れることは可能だったのだ。

勿論学業に勤しむことや国の威信を背負って入学してきた娘達が相手にしてくれるかはべつにして。

「しかし、なんで男子寮だけ廃項になったんだろう？」

耽美系のリーガフは、お絞りで顔を押さえながら言った。

僕と対面に座っている彼の目には、二人の美少女が思いつきり目に入ってきているせいで、冷静ではいられないのかもしれない。

「ああ、それならMrの御陰ね。」

「風御門先輩の？」

「そう、彼が入学した年が5年前。ハーレムを作り出したのを公に阻止出来なかった生徒生活正常化委員達が、寮内の風紀の悪化に苦慮して、正常な意識を呼び込もうと言う発案を元に、密かに廃項になったんだけど・・・みんな気づかなかつたらしいのよね。」

「Mr.の方も、手当たりしだいと言う訳ではなく、彼なりの好みによる選別があるらしく翌年は誰も餌食にならなかったそうなの。みんな気が抜けちゃったのね。」

恐ろしい男である。

学園側をも動かす男色というのはどういうモノなんだろう。

「その生徒生活正常化委員ってなんなんですか？」

洋行さんは手帳を取り出してこちらを向いた。どうやら初耳の名前らしい。

「別名、対男色委員会。Mr.に端を発する攻撃的男色を押え込むために生まれた委員会なんだけれども、今や有名無実ね。」

「なんで？」

僕がレンファに向って聞くと、反対側から手が伸びてそちらを向かせた。

固い笑顔を見せるイブは言う。

「全部Mr.のお手つきになっちゃったからよ。委員会も自分達の身の安全を計りたい連中の集まりだったらしいし。」

ぞおおつと背筋を冷たいものが走った。本当に恐ろしい男だったのだ。

しかし、彼女たちはこんな話を何処から持ってきているのだろうか？

その疑問を口にする、二人はにっこり笑う。

「乙女の秘密よ。」

何だかなあ。

軽い食事を皆で取った後、三々五々に散っていった。

チームだからと言ってもいつも一緒にいる訳ではない。

とはいえ寮ではまた集まって来るのだろうけれども。

じゃあまた後で・・・そういつて皆と別れると、いつもの4人になっていた。

イブとレンファが先に歩き、僕らがそれを追うような、そんな僕らの関係象徴するようないつもの歩きかた。

「なんか、こうして私たちだけで歩くのって久しぶりね。」

うつむきかげんにレンファは言った。なにか寂しげにもみえる顔

だ。

イブもなんだか影のある顔をしているような気がする。

久しぶりも何も、教室の移動のときは大体こんな風に歩いているくせに。

しかし感傷的な気分が、それを口に出させなかった。

「リヨウがいて、黄がいて、レンファがいて、私がいて・・・そんな関係ってずっと前からあるような気がしていた。けれども、出会ってから一ヶ月も経っていなかったのよね。」

言われてみれば何年も彼女たちや黄とは大騒ぎしていたような気がする。

それでも数えてみれば3週間ちよつとしかたっていない。

急に彼女たちは振り返った。

透き通る笑顔がそこに有った。

「ちゃんと私たちも大切にしてくれないと、もう遊んでやらないぞ

！」

「同じ事を黄にも言われたよ。」

僕たちは笑った。お腹のそこから。

軌道に乗りかけたこの生活も、暫くで出番場をくじかれる。

それは学園最初的大型連休が待っているから。

第一話 新学期3（後書き）

新連載、オリジナルの妄想小説ですが、いかがでしょうか？

ご評価いただければ、この先も掲載したいと思います。

掲載ペースは週一程度で、別途連載している「南洋校舎」とはかぶらない予定です。

第二話 調整休暇（前書き）

章ごとに分けなくてもいいんじゃない？という指摘もあり、
まとめ
て見ました。
結構長いw

第二話 調整休暇

第一章 学園で

わりと有名な話であるが、国連学園の休みは非常に多い。

一日の前半講義が休講になる何てこともざらである上に、各国の常識的な休みや長期休暇習慣なども取り入れているので、かなり多い。

で、長期休暇の代表的なものと言えば、夏休み・冬休み・春休み・
・そして五月調整休暇である。

日本的に言えば「ゴールデンウィーク」なのであるが、学園ではそれとは違った意味合いが3つほどある。

一つは、講義に新しく入ってきた新入生達の実力に合わせて講師陣が学習内容を調整出来るようにと言うもの。主に講師用のもので、研究室入りしている生徒達もその過程で講師資格の習得をしている。一つは、新入生が今後学園で生活が出来るかの適正を審査するため。この審査に刎ねられるような人間は、初めから入学出来ないものであるけれども、著しく資格に欠く人材が判明するのもこの時期となっている。

そしてもう一つが一番有名で、入学してはじめて里帰りをするためである。

世界中で一握りの人間しか入学出来ない学園に入学しての帰郷。この五月の連休が、凱旋休暇の名を冠しているのが知れる所だろう。

そんな休み前のひととき。

いつもの喫茶店で僕らは皆、一時出国届けとビザ申請書を書いていた。

面白い事に、この国連学園に入学したものは全て出身国の登録を停止され、国連所属の国連国民となる。

そのため国連国民としてのパスポートも存在してるし、学園圏外に出かける際には出国届けとビザを必要としたりする。

国境や宗教にとらわれない学習環境を、という建前なのである。

まあ有名無実と言ったところだが、ここ一番というところで意味が出てくる。

「いいよねーリヨウやヨーコは。帰郷が楽でさあ。」

日本国への帰郷・出国の際のみ、ノービザ・ノーチェックなのは有名な話。

日本の領土内に出来た外国のはずなのに、政府はアメリカンスクールが出来た程度にしか感じていないのがありありと分かる対応である。

この世界全体を舐めた国の姿勢には頭痛を覚えるが、外出申請だけで外に出られないと、下の町まで買い出しにも行けないので、結局のところはラクはらくだ。

「みんな、おみあげは？」

黄のその問いに、みんな色々と出すわ出すわ。

ひよつとこ・天狗に代表されるお面や、観光地の名前入りの提灯。銘菓・絵葉書・珍味・オーディオカセット・・・何処から出てくるのかと言うほど現れては、皆樂しげに自慢しあっていた。

「おお、演歌か。」「うん、（喫茶店の）奥さんに薦められて」「うひゃ、それココム違反だろ？ そのマシン」「学園関税ではOKだって言ってるよ」「あそこは学園から持ち出しじゃなけりやなんでもいいんだ。」「リヨウは何か買ったのか？」「おいおい、リヨ

ウは地元だぜ。」「ああ、じゃあおみあげは大変だなあ」「静岡県だけに『茶』だろ。」「茶羊羹つてのもあるし……。」

とかなんとか、色々と言い合う彼らに、僕は不敵に笑って見せる。

「ふっふっふ、諸君は甘い。少なくとも出身校の後輩からグロス単位で頼まれているおみあげがあるのさ。」

そういつて取り出したのは銀色のシャープペンシルとボールペン。僕やみんなも愛用している、学園の購買部で売っている物だ。

金属製の割には格安で買えることで人気が高い。

このボールペンの使用度はきわめて高く、僕なぞ入学からこつち二本も使いつぶした。

その使い潰したボールペンにすら価値を見出す後輩も入るのは別の話。

「あああ！その手があったか！」

実はこのシャープペンシルとボールペン、一般の人が買える機会なぞほとんど無く、唯一、一般の人が購入出来る機会は学園祭のときだけで、その特別販売の時も僅か10分で売り切れてしまうほどのものなのだ。

さらに、学園祭への一般入場は煩雑な政治審査・資格審査があり、対テロ・工作活動防止のためとはいえ極めて狭い門となっている。

学園祭以外での入手は困難を極め、定価の数十万倍で売買されているとか何とか。

が、普段は多くの在庫を抱えるアイテムであるために、結構見逃しがち。

僕はこの学園のロゴ入りのシャープペンに加えて消しゴム・ボールペンをセットにして、既に学校の後輩や仲間内に送っており、感謝

のメールでサーバーはいつぱいイッパイ。

「お、おおお・・・、おい、リヨウ。今からでも間に合うかな？」

「さあ、どうかな？ さつき講義の後にイブとレンファに話したら、『買い占めちやる』とかいつて走っていったもの。」

「なにいいいい！」

彼女たちならばやりかねないと、騒がしいおとこたちは、脱兎のごとくに去っていった。テーブルに学生章を置いて。

「あーあ、みんな浮ついてるねえ。」

テーブルの上を掃除しながら、マスターの奥さんは僕に笑った。

「リヨウ君はどうするの、帰るの？」

いいえ、と首を横に振る。

「なんで？ ご両親がお待ちじゃないの？」

まあ、確かに待っている人はいるが、ソレは今じゃないし家でもない。

「誰が待っているようにも、あれを着る勇氣はありません。」

「あははは、あれねえ・・・。いちおう誉ってことになってるわよ？」

「少なくとも、似合う人間には誉れでしょうね。」

「リヨウくんも似合うと思うけどなあ。」

お変わりのコーヒーを入れながらの奥さんに、僕は苦笑い。

似合うわけがあるまい。

国連学園から出国の際に必ず着ることが義務つけられている第三
礼服なんて！！

「あら、結構似合うと思うんだけどなあ。」

「ええ、絶対に似合うと思うわよぉ」

音も無く現れた二人の美少女に僕は反射的に「似合わない」とい
ったが、彼女たちは何やら紙束を取り出した。
見るとアンケート用紙で、内容は怪しげだった。

「なんですか、この『リヨウイズミの第三礼服用時CG感想』
ってアンケートは。」

冷やかに言う僕に、手持ちのPDAを出したレンファ。

「集計結果は見ての通りよ。」

着せたい・見てみたい・無理やりにも着させる……

「あ、ち、違うわよレンファ！」

「あ、ああああ、こっちこっち。」

切り替えられた画面には、「似合う・似合わない・どちらともい
えない」の三項目への投票数が表示されており、似合うがぶっちぎ
りになっていた。

「ところで、この投票数って、重複可？」「不可」

つつことは、この投票に500人も人間が関わっているんです

か？

冷たい汗が背中を走る。

初めに見せられたアンケート結果も背筋に悪い。

なんだか無理やりにも着させるといふ項目が、三桁いた気がする。

「なー、リヨウ。やっぱり、東京観光案内してよ。」

背後からしなだれかかってきた黄に、僕は二つ返事でOKを出すのであった。

「ええええ！なんでえ！」「カナダカナダ、カナダに行こうよー
ー！」

黄を背負って、ダッシュで事務等へ走る僕だった。

それから2日程、殆どの講義を同じくしていた2人の態度はいつものものだった。

だから夢にも思わなかった。

第二章 帰郷一日目

白い、海兵隊の制服と言うものをご存知だろうか？

パリっとした恰好の良いあれだ。

あれに大きなリボン付きの大きな帽子をつけて、金モールをばりばりにして、帯剣して。

もうどうしようもないほど少女趣味三色リボン「タカラヅカ」仕

様になると、国連学園第三礼服になる。いやいや、海兵隊にリボンの騎士か？

連休前、クローゼットから出した瞬間、これを着なければならぬのかと意識が白くなった。

制服と言うものがほとんど存在しないと思われる学園にも、3つつの礼服が存在している。

第一礼服は、学園の正式な行事や冠婚葬祭に着るもの。

第二礼服はもっと簡略化されたもので、制服のように来ても問題無いもの。これを僕らチームは普段にきている

第三礼服は、私事で学園圏を離れる時の移動時に、着用を義務とされているものである。

それが今着ている第三礼服なんだけれども、これが恥ずかしいのなんのって、こういう服が好きな人もいるとは思うけれども、個人的には二度と袖を通したくない服と言うものの代表のような気がする。

そんな恰好の人間が歩いていればいやがおうにも目立つ。

ある程度の張力がありながら軽いリボンはフワフワ揺れるし、腰もとの剣はかちやかちやと音をさせているし。

さらにこの格好でJR静岡駅の新幹線ホームに4人も入れば盛大に目立。

あたかも、人気アイドルや政治家みたいな目立ち方ではなく、チンドンやか獅子舞かという感じに。

一人でも目立ちまくりという人間が四人も並んでいる事自体珍しいのだけれども、その内訳が疑問だ。

僕と黄、それは良いだろう。一緒に東京に行くはずなので問題はない。

しかし、先日夜のうちにカナダへ出発したはずのイブとレンファが、小さなトランクケースを片手に、何故ここにいる。

非常に疑問だった。

「どうしてなの？」

主語の存在しない質問の答えをなかば予想しつつも僕は聞くと、二人はにっこり微笑んで答えてみせた。

「『突然』リヨウの家にお邪魔することにしたの。」

「ちゃんと手続きもしたし、うちの実家の許可も取ってあるし、嫌とは言わせたくないわ。」

自分の家にも学園にも手続き済みだというが、僕の所への連絡は最後らしい。

なんともはや、まるつきり子供の論理である。

これが国連学園合格者なのかと思うと頭が痛い思いだ。

黄に視線を送ると、へらへらと笑っているばかりで何も答えてくれそうも無い。

いざとなると頼りにならない男である。

「あのね、二人とも。いくらチームだとは言え、僕らは男で、君たちは女なんだ。年頃の僕らが同じ家に同衾するのって、とても良くないことだと思っただけれど？」

半ば意図的で意地悪な質問に、顔色も変えずに彼女たちは答えた見せた。

「それって、良くないことをしてくれってこと？」

「どっちが先なのかしら？」

「そ……そういう事じゃなくて!!」

話を振っておいて何だけれども、見事に切りかえされておたついたのは僕。

昔から思うのだけれども、女の子というのは恐ろしい。

こんな大胆な台詞を、こともなげに言えるのだから。

どんなに仲が良くても、彼女たちのようなうら若き女性を同衾するなど論外だろう。

頭の中で自宅の近くのホテルをピックアップしながら、彼女たちの趣味に合うかどうかを考えてしまった。

住宅地域であるため、周辺にホテルなど無く、池袋ぐらいいに出ないと駄目かもしれない。

・・・参った。

そんなうろたえる僕を宥めるように黄は、耳元で囁いた。

「・・・なにか理由がありそうだ。」

そういえば、なんとなくカナダ行きも強引に誘われたような気がする。

全く行く気が無いと言っているのに、僕の分のチケットの手配や一時入国審査請求まで始める始末だった事を考えると、強引誘われたとかいう問題ではないのだけれども。

散々断って、半ば泣かせてしまった後で謝りに行くと、その勢いで連れていかれそうになったりするのだから恐ろしい。

ほぼ、諦めるという事を忘れたような行為は、確かになにか訳がありそうである。

暫く考えた僕は、・・・覚悟を決めた。

今まで十分に逃げを打ってきた。

その上で彼女たちは最終手段を打たれたのだ。

この段階となってしまうては男の負けで、彼女たちの勝ちだろう。それが認められないほど愚かではないつもりだ。

さっきまでの考えは全てキャンセルに決定。

「わかった。・・・じゃあ、お二人さん。僕の家への招待を受け

てもらえるかな？招待状は手元に無いんで勘弁していいんだけども。」

おどけた僕に、いつも以上の微笑みで、彼女たちは答えてくれた。

普通の新幹線に乗ろうと思ったのに、なぜか臨時列車が入ってきた。

車体の横にはUNのマークが入っている。

「こ、国連特別車？」

驚く僕に、イブとレンファは肩をすくめた。

「驚いたわよ、あなたたち。まったく交通申請してないじゃない。」

「本当に普通の電車に乗るつもりだったの？」

僕と黄は思わず視線を交わした。

交通申請って何だ？

「・・・本当に、わからないのね。」

がつくりと肩を落とした二人の美少女が説明してくれたところによると、国連学生が交通移動する際、リニア国連学園線以外は交通移動申請をして警護準備を関係各国へ通達する必要があるそうだ。

ぜんぜん知らなかったけど。

「あなたたちを追って申請して驚いたわよ。新幹線の申請はしてない、在来線をその格好で移動しようとしている、地元駅でお出迎えで歩いて移動ですって？日本の警視庁があまりのことに脳溢血起こすところだったわよ。」

グリーン車四人個室に入った僕たち以外のつていない。
後の空間には、国連情報部の警護要員がみっちり乗っているとの事。

「でもさー、ぼくらなんて国連学園に入学しただけの子供だよ？
そんなに警護にちのりをあげなくても・・・。」

「もう！ あなたはなんで、いつもいつも・・・。」

眉毛を潜めていたイブだが、思わず苦笑した。

「ま、その状況認識の甘さが、あなた達のいいところなのかもね。」

彼女達の笑顔を見ながら、新幹線は一路東京へ。

降り立つと、そこは懐かしき東京。
ぐつと背伸びをして周囲を見回す。

なぜかこちらを見つめる周囲のかたがたの視線が熱い気がする。

「あなたたちの予定だと、このまま地元の電車に乗り換えることになつてたけど、ちょっと手を加えておいたわ。」

なんで、と聞くと、レンファはにこやかに言う。

「国連学生が第三礼服で移動してるって聞けば、馬鹿の2000や3000が集まってきた、身包みはがれるわよ？」

「ば、ばかだなあ、ここは法治国家の首都だよ？」

「・・・髪の毛なんかガンガン抜かれるわね。」

「なんで？」

「日本のことわざには、何々さんのつめの垢でも・・・って言葉があるんでしょ？ 髪の毛や衣服の切れ端を受験のお守りにしたいって考える人がいないとも思っの？」

ぞくつと背中に悪寒が走る。

周囲から差し込まれる視線の大半は・・・主婦か！

「は、早いところ・・・」

そう移動しようとしたときには既に人の輪が、一重二十重に出来ていた。

「申し訳ありませんが、道をあけてもらえませんか？」

そう言う僕を、周りの人たちは何か熱い視線で見つめている。かなり病的な色合いに思える。

いかん、熱心な教育家族か？！

徐々に伸びてくる彼らの手をみて、どうしたものかと思っていると、鋭い警告笛と共に拡声器で大きくされた声が周囲に響いた。

「こちら警視庁です、現在、皆様がいらっしゃいます19番ホームは関係者以外の立ち入りが禁止されております。この禁止は法的な規制によるもので違反者には刑罰が加わることとなります。どうか至急退去なさってください！」

びくりと震えた人々の肩であつたが、のろのろとゆっくり人が拡散していった。

しばらくして閑散としたホームになったところで思わずため息の僕であつたが、二人の美少女は鼻息荒く笑う。

「どう？ なんの申請もせずに移動していたら、こういうバックアップなしだったのよ？」

「感謝してる？」

僕らはおもわず手を合わせて二人の美少女を拝んでしまった。

ありがたや、ありがたや。

移動するに従い人払いエリアが移動する様は、あまりにも心苦しく、なんともいえない苦さがあった。

何も特権や権力を使いたくて帰ってきたわけではないのだけれども、事実上、僕の帰省によって多くの人が迷惑していることだろう。動員された警官たちは休み返上だろうし、駅員たちだって増員されていることだろう。

迷惑以外の何者でもない。

それもこれも無自覚にふらふらしようとしたことへの代償だろう。ここに刻まなければならない事のように思う。

「難しいこと考えてる？」

右となりのレンファは、にこやかであった。

左のイブもにこやか。

その隣の黄もにこやか。

「何でみんな笑顔なの？」

あたかもムービースターかのような振る舞いに、僕は眉を寄せる。

「あのね、リヨウ。私たちはあなたのご招待で東京に来たのよね？」

確認するように言うイブにうなずく僕。

「じゃ、たとえば、あなたと同行している人間が、不機嫌そうな顔をしていたら、周囲の人はどう思うかしら？」

「・・・人ごみがうざったい。」

「そうじゃないでしょ、『意に染まない凱旋休暇だと思っている』といわれるのよ」

「もしかして、僕のため？」

「もしかしくなくても、あなたのための気遣いよ」

にこやかな笑顔のままで言うレンファ。

・・・重ね重ね申し訳ない話だ。

東京駅中央通路を突っ切ろうとしたところで、一箇所の人ごみが警官に静止されず残っている事に気づいた。

こちらの歩みと同期して、その人ごみが近づいてくる。

人ごみの正体はと目を凝らすと、四方からフラッシュで囲まれているところが見える。

つまるところ、どんなシーンだろうと撮らずにはられないスタ―がいるのだらう。

なるほど、と僕。

この人ごみは、国連学生ばかりを追っているわけではないことに気づく。

そりゃそうだ、所詮、如何な権力があるうとも高校一年と同等の年齢と人格だもの。

簡単なネタばらしを見た気がしたもので、思わず表情が緩んだ。

気軽でいいんじゃないか、それでいいんだと思ったとき、周囲がわっと盛り上がる。

きゃーとかわーとかいって、正面の人ごみと僕たちを指差したりなんかする。

なんだなんだと思っていると、人ごみはその騒ぎを聞いてこちら

を見、そして顔を青くした。

周囲の人間に声かけをした途端、ぱつとカメラをかばんにしまつて散っていった。

そしてその人薄身の中心にいた人物を見て驚く。

「き、清音センセ……。」

長身の女性教諭は、にこやかな笑みと共に歩み寄り、そして僕の肩をたたいた。

「よ、言ったとうりになつただろ？」

がつくり肩を落とす僕。

しかし僕の左右から絶叫のような声が上がった。

「ミス・キヨネ!! な、なんで!!」

へ? と思わずチームメイトたちを見た僕だった。

「じゃ、じゃあ、あなただったの! 準備期間わずか六ヶ月で入学を果たしたって言う非常識な人間って!!」

叫ぶように言うレンファにうなずくと、イブはぐいっと僕の顔をつかんで振り向かせる。

「な、な、なんで黙ってたのよ、そう言うこと!」

「で、でも、ほら、出身学校とか出身地でチームが固まるのは、学園法規上好ましくないって言うし、学園長も広く有効を持つために過去が不要となるときもあるって……。」

「それとこれとは別よ!」

右左に分かれて僕をぐいぐい引き合うイブとレンファ。

呆然とそれを見守る清音センセ。

黄はわれ関せずといった感じ。

「あなたがはじめから言っていてくれれば、私たちだってあんな苦
労・・・」

「っ!」

何かを言いかけたイブを遮ってレンファはイブの口を押さえた。
形として僕の背後からレンファがイブを抱きしめているかのよう
な・・・。

「・・・刺激的なカッコウだね。」

思わず漏らした一言に、二人の美少女の平手が応じる。

「・・・いたい。」

真っ赤になった美少女たちに、おもむろな先生の言葉が届く。

「さて、お嬢様方。痴話喧嘩よりこの場から移動するほうが必要
だと思いませんか?」

センセの一言に、思わず周囲を見回した彼女たちは、さらに赤く
なつて僕の背後に隠れた。
いまさらなだけだね。

JR主要駅には必ずあるという特別改札を通り抜けると、一台の

車が止まっていた。

その悪名高きシトロエン社 シトロエンCX。

清音センセの愛車にして、一年を通して故障が無かったことが無い車だ。

それを見て、イブとレンファは感嘆の息を漏らした。

「これが、ミス清音の愛車ですね。」「伝説のCXだわ」

あたかも観光名所の旧跡を見るかのような声に僕は首をかしげる。

「あんな、リヨウ。僕としては自分の価値を良く考えたほうがいいと思うぞ。」

「なにそれ。」

「ほんとうに頑迷なのよ、リヨウ君は。」

黄を助手席に座らせて、後部シートに僕らを座らせた先生は肩をすくめる。

「この前、こっちに帰ってくるって言うから、『周りでお祭り騒ぎになるから気をつけろ』ってちゃんと忠告したのに、まったく信じないのよ。」

珍しく一発でかかったエンジンを、しばらく暖気。

どんなに急いでいてもこの工程ははずせない。

後で痛い目にあうから。

「リヨウ、ミス清音がちゃんと忠告なさっていらっしやるのに！」

怖い顔で二人の美少女が僕をにらむ。

「・・・だって、いかに国連学園だって言っただって、所詮は高校生だよ？」

「あなたがどう思おうとも関係ないの、評価は周囲が決めるんだから！」

脇をつねるレンファ。

「少なくとも、入学一年前まで一般教育しか受けていなかった人間が国連学園に入ったってだけでも国を挙げての歓待があってもおかしくないのよ！」

「でもでも、世界的な有名校に入ったからって・・・。」

「たいしたこと無いだろ？　と言いかけてやめた。まったく価値観が通じていない気がするからだ。」

「あのね、リョウ。たとえば、いままで引きこもりの超オタクだった人が、二・三ヶ月の練習でマラソンのゴールドメダリストになったとするわね？」

「そりゃありえません。という僕を、周囲の人間全員が鼻で笑った。」

「・・・いたとするわね？」

「・・・はい。」

「そんな人が目の前を歩いていたら、興味ない？」

「居たとしたら、化け物だモノ。みたいよねえ、怖いもの見たさで。」

僕がにこやかに言うと、全員がため息をついた。
なぜ？

細かにゆつくりと、暖気中の車の中で説明されたことによると、先ほどの例えは僕のこらししい。

「でもね、僕一人の力じゃなくて、清音センスのお陰なんだよ?」

そう、全てはセンスのお陰だと僕は思っている。

前から国連学園受験のことは、色々な理由から考えていたのだけれども、夏の進路相談の時に初めて「国連学園」に進学するとセンセに打ち明けたのだ。

その時の大騒ぎは凄いもので、僕が狂ったとか、気が触れたとか・
・職員室どころか教室まで大騒ぎとなった。

学校の90%までの人間が、絶対に合格など無理だろうと断言していた中で、担任である清音センスだけはこう言ってくれた。

「何か理由があるのね? なら、やりなさい。私が全面的に応援するから。」

その全面的応援というのが、その日からいきなり始まった。

朝に昼に夜に、センスはあらゆる時間を使って僕に個人教諭をしとくれ、その上各部門の専任教諭達をあらゆる手段を用いても引っぱり出し、各々受験対策勉強を僕に付けさせた。

空き部屋だらけの僕の自宅に夜具まで持ち込み、半ば強制的な合宿生活の成果は、秋の対国連学園模擬試験で靨面に表れることとなる。

全国規模で行われる対学園模擬試験の順位も夏から見てウナギのぼりに上昇。

正月を迎えるころには、合格と言う言葉が現実味を帯びだしていたという結果には、周囲の誰もが驚き、そして興味をかきたてていた。

3学期ともなると、学校のほとんどの人間が僕の受験にたいして協力的に接してくれるようになっていたし、同学年の仲間も勉強に付き合ってくれてた。

この効果かどうかは知らないが、その年の受験結果は非常に優秀なものがあり、卒業組の元PTAからセンセに感謝状が出たという話だ。

僕の合格という個人情報 は国連学園情報機密条例によって保護されているものの、僕の情報が報道に乗らないだけで、センセの情報は世界的に広がってしまった。

ニユースが世界に駆け巡った後にやってきたのは、センセへの賞賛と期待だった。

その期待は数字となって現れ、今年の我が母校の入学人数は例年の5倍にも達したとのこと。

多くの人間が清音センセの受け持ちを望んだとかいう話だが、センセは今年一年、担任を持つことなく研究職員となる事が一昨年から決まっていたので、入学者の多くはため息をもらしたそうだ。

「違う違う、リヨウ君が優秀だっただけで、私はそれに付き合っただけなのよ。本当に優秀なのはリヨウ君なの。」

その言葉にイブとレンファは頷いた。

「もちろんですわ、ミス清音。あなたの優秀さは間違いありませんが、それについてこれる人間もまた優秀に決まっていますもの」とレンファ。

「どうかこの朴念仁に世の中の価値観を教えてやってください!」「はあ……、まったく進歩と言うものが無い。」

暖気を終えた車を運転しながらも、がっくりとうな垂れるセンセ。

「国連学園に入って、超絶な美少女を二人も連れて来ているから少しは変っただろうと思っていたけれども・・・まったく変わっていない。」

がっくりと氣力を失った風のセンスは、ちよいと二人に目を配らせて言う。

「この子はね、私が受け持つてる頃から始終この調子なのよ。」

誰にでも優しくて、誰とでも仲良くなっちゃうの。

その上、男女の隔たり無く仲良くなるものだから始末に悪いわ。過去、中学時代にも上級生・下級生問わずに彼に思いを寄せてる娘はいたけれども、全然駄目、アタックしに行つて気づいてもらえないんですって。

この子つて全然そういう事に鈍いのよ。」

きっとセンスは僕を睨んだ。

にらまれた僕にとっては初めての衝撃的な話だった。

人氣があつたなんて信じられなくて、思わず辺りを見回してしまふ。

僕と同姓同名の誰かの話を聞いている気分で、腰の座りが悪かった。

「近年希に見る、世界最大級の朴念仁にして超級鈍感のこの子の所為で、私は教師生活のかなりの時間を、この子宛ての恋愛相談に使わされたものよ。」

「全くの初耳です。そうだったんですか？」

「初耳に決まつてるでしょ！ その辺の話が直接君の所にいかないように、私が切り盛りしてたんだから。学園受験を志している人間に、そんな事を言えるわけないでしょ？」

「・・・と言う事は、その話して三年の夏以降なんですね。」

「それ以前は、馬鹿らしくて話す気にならなかっただけ。」

鼻で笑ってセンセは、顔をゆがめる。

「夕暮れの校舎裏に呼び出されて来た男が、何気ない無邪気さで世間話しかしない、人の出鼻を挫く天才なんだからしようがないじゃない。」

「えー……っと、それって僕の事ですか？」

「それ以外の誰だって言うのよ。」

別に学校では成績が良かった訳ではない。顔も凡庸、成績は受験の為のものだし、スポーツも人並みと言う僕にどんな魅力が有ったと言うのか？

「最悪なのは、この子は自分がもてる事に気づいていないし、全く信じようともしない事。そんなものだから思いを寄せてきている娘がどんなにモーションをかけても気づかないのよ。そのくせこの子の行動自体が女の子にとってみればモーション以外の何物でもないってのが更に質が悪い。」

「センセ、モーションって言われても、どんな事ですか？ 誰かに何かされた記憶もした記憶もが無いんですが。」

「ほほう。……まアそういう事にしておこうか。」

思いつきり思わせぶりだが、ここでその事をつついても良い事はなさそうだ。

「それにセンセ、僕がそんなに注目を浴びてる理由がわかりませんよ。顔もたいした事ないし、成績もよくなかったし、家柄もいいわけじゃないし、……。」

解らない、そういうつもりであった。が、振り向いた黄の顔を見

て思い出した。

そうか、その頃からそうなのか。

人気があったと言われている期間が何時からなのか、少なくとも小学校の頃にはそんな話はなかったし……いや、もしかしたら僕が知らなかっただけなのかもしれない。

急に神妙な顔で黙った僕を、センセは睨みつけた。

「反省しても駄目よ。それに、迷惑掛けた娘に会おうなんて思わない事。そういう無配慮な思いやりは、その娘にとって毒にしかならないのよ。」

全く思ってもいなかった忠告だったけれども、僕は神妙に肯いた。

「ミス清音。それでも、そこがリョウのいいところなんじゃないですか？」

静かな声でレンファは言う。

「多分、皆そこに引かれているんだと思います。」

合わせてイブも言った。

「あはははは……さすがは学園生徒。短期間に見抜いてるね。」

苦笑をしつつ、センセは二人に視線を送る。

「でもね、君達はまだ若く、そして前途が明るいのよ。それなのに、こんなの相手にしていると、貴重な青春の時間を浪費したーって後で思っ事になるわよ？」

意地悪げに聞くセンチに、二人は微笑む。

「学園での、今の時間は千金に値しています。彼の御陰かもしれませんね。」

イブは穏やかに言った。

「多分、告白をしようとした娘たちも、同じ事を思っているのかもしれないですよ。」

レンファも続けて言う。

さっきまでの痛い雰囲気は消えていた。

「イブさん、レンファさん。あなたたち良い子ね。」

そこはかとなく居心地の悪い車内。

僕は自分への評価が一人歩きしていることに当惑をおぼえていた。本当の僕など、彼女たちに見向きもされない小さい存在のはずなのに。

轟々と吹く風は、庭先の竹林を揺らせる。

東武東上線の始発駅、池袋から数駅のところにある中板橋駅から2分のところにそれはある。

一見してあきらかな純日本建築の典型的な家。

土塀に囲まれ、竹林を抱えたといえは聞こえはいいが、江戸終焉期から全く改良されていない古民家。

それが我が家。

戦前から見られる旧家が、いま板橋区の中ほどの平成の世まで残っているのだから驚きだろう。

先日まで区の重要保護施設にと言う話もあったが、公開義務などがあるのでお流れになっている。

我が家の庭先の、最近では先生専用となっていてしまっている駐車スペースに、CXはエンジンを止めた。

そして僕等は皆、玄関から入って驚いていた。

「すごい！ リョウの家って料亭みたい。」というのが学園からの3人集。

（うげえ・・・なんだ、あの、うずたかく積まれた荷物は！・・・信じられん。）と、これは僕。

センセの表情は読めなかったが、多分僕と同じだろう。

しばらく呆然としていた僕たちだったが、いそいそと手鏡で二人の少女がメイクを直し始めた。

「どうしたの？」

僕がそう聞くと、二人は聊か緊張した面持ちで僕をにらむ。

「リョウのご両親にお会いするんですもの、少しでも粗相が無いほうがいいし」

「と、突然お邪魔するんですから、少しでも印象をよくするほうが・・・。」

ちょっと顔を赤くしているところを見ると、自分達の行為の非常識さを自覚しているらしい。

「あ、それには及ばないよ。この家には誰も住んでいないから。」

当惑気味の僕に、へ？ という顔で二人はこちらを見る。

「両親は昔、飛行機事故で、ね。唯一の肉親の祖母は行方不明、だからこの家には今誰もいないんだ。」

自分で言っているにも、結構悲壮感ある状況であると理解する。

両親不在、肉親行方不明、生活費は両親の生命保険で賄っているけど、高校入学と同時にバイト三昧の予定だったのだ。

固定資産税に、家の補修費に、インフラの支払いにお金はいくらかでも消えて行くのだから。

しかし、国連学園に入学したおかげで、衣食住は保証され、この家は国連管理で保管されているのだからありがたい。

固定資産税などの税金だって国籍停止と共に棚上げなんだから、学園様様だ。

そんなわけで、思わず苦笑してしまった。

そんなことはとうの昔に知っているだろうと思っていたことなので、改めて話していなかったが、彼女達との付き合いは一月ちょっと。自分から話した記憶が無いのだから知っているはずも無い。一瞬の空白のぬった瞬間、二人の少女は滝のような涙を流す。

「ご、ごめんなさい、なんて無神経なことを・・・。」

あー、と僕は困ってしまった。

小さいころから両親はいなかったで居ないのがあたりまえであつた。

だから彼女達の同情は理解できないし、祖母行方不明はそれこそあの人らしいことなのでたいした問題ではない。

両親や肉親以上の愛情を周囲から受けて育った僕は、彼女達が思うような不幸な人生を歩んでいるわけではないのだ。

そんなふうに、身振り手振りで彼女たちに笑いかける。

「・・・」

赤く目を晴らす二人の少女は、不意に黄をにらむ。

「もしかして、全部知ってて東京を案内させようというの、黄!」
「・・・あ、うん」

「この、朴念仁!」「無神経!」「あー、もう、黄のせいでいらない恥をかいたじゃない!!」

がくがくと黄を振り回すイブとレンファ。

照れ隠しなのがありありとわかるが、僕は苦笑していた。
そんな風景を見て、僕はなぜか、東京に帰って着てよかったと感じていた。

誰もいないという割には、庭や室内がきれいなにはわけがある。
僕の国籍停止に伴い、数々の権利や所有物が国連管理下に移行されたが、個人所有物もそれにあたる。

一度国籍停止されると、あらゆる補助や給付を国連から受けるわけだが、その間の所有物の管理の大半も国連が行う。

学園に持ち込めない車、自転車、ペットなどなどの個人が所有し管理していたもの全てが国連管理の下に置かれたりする。

全く前例の無いことだが、僕が現在暫定的に所有しているこの家も管理対象ということで、保持、維持に関する全てをやってもらえていたりする。

国連学生として受けるべき義務なのだそうだ。

実際、国連学生を狙ったテロは後を絶たないし、個人所有物に関する盗難も後を絶たないそうだ。

まあ、土地一式を盗むと言う人間など、アニメの中サル顔三代目

ぐらゐにしか存在しないように思えるが。

塵一つ無い室内を見回して、何だか生活観がないなあとおもったりなんかする。

とはいえ、キッチンにあるものや本棚にあるものなど全く代わり映えしていないもので、維持管理に気を使っていたであろう事は間違いない。

イブとレンファを二階の客間で、僕と黄は土蔵を改装した僕の部屋で着替え、それぞれ思い思いの格好で今に現れた。

黄は僕の服を借りる（彼とはほとんどからだのサイズが同じため、学園でもクロゼットを共有している）ということ以轻装だったが、ダンボール数箱分の荷物を持ち込んだ彼女達は凄かった。

どこのパーティーに出るんだというフォーマルドレスを着て現れたのだ。

「どこに行くんだよ。」と思わず僕は苦笑いで聞いてしまった。
「だ、だって、その・・・正式にご挨拶できると思ってたから・・・。」

「こつという服しか用意してなくて・・・。」

消え入る彼女達の声を聞きながら、思わず吹いてしまった。

彼女達の普段の交友関係ならこれがあたりまえなのだろう。

無理やりお邪魔することになった家での事なのだから、なおさら気合が入ると言うわけだ。

「本当に、目麗しい女の子連れてきたわねえ。」

昆布茶をすすりながら、清音センセはため息をつく。

先生の格好も、普段着を通り越してラフ。

僕と黄はジーパンとタンガリーシャツというラフ。

浮いていることこの上ない。

「あ、あの、あのさ、リヨウ。あたしたちもリヨウの服、かりていい？」

真っ赤になる彼女達にうなずくと、そそくさと離れの土蔵を改造した僕の部屋に飛び込む二人。

それを見つつ、思わずにやけてしまった。

家に帰ってきて、人並みにすけべえ心が舞い戻ってきてしまった僕の脳裏に、彼女達の着替えが想像出来てしまったのだ。

「どんな服着てくると思います？」

センセに聞くと、肩をすくめる。

「まあ、無難なところで、Gパンとシャツだろ？」

ぶなんかあ、とひとこち。

僕より一回り小さいイブならば無難だが、一回り大きいレンファは・・・。

かなり危険な想像になってしまった自分を諫める。

だってなあ、こつちとら平均的健康的男子学生だものなあ。

そんなこんなと考えているところ、静々といなくなった二人が、凄い勢いで走ってやってきた。

二人ともGパンをメインにした服装だったが、かなり凄い格好であつた。

自分より一回り大きなシャツとGパンを無理やり着たイブのその姿は、首の後ろあたりの脳みそを掻き立てる何かがあつたし、全体的に服が小さいせいかレンファの臍だし上胸だしの弾けた格好で西海岸の香りがしたりする。

爆発的な魅力を発する二人の美少女が僕に詰め寄った。

引きつった笑顔で。

突きつけられたのは一枚の写真。

和服の似合う女性。

瞬間、胸の奥がざわついたが、どうにかこうにか飲み込んだ。

その様子を見取ってか、二人は眉毛をひくつかせた。

「リョウ、この人、誰？」

言った瞬間レンファの笑顔が消える。

イブの笑顔も消え、ずずいっと密接する。

本来なら頬を赤らめる状況であるが、写真を見てちょっと涙ぐんでしまった。

二人の少女は「え？」という顔になる。

「これは、バーちゃんの写真だよ。」

それは、初めてバーちゃんから貰ったカメラで写した、唯一の写真。

「ええええええ！！！」

「こんなきれいなプラチナブロンドの！」

「それ白髪」

「小じわひとつ写真に写ってないのに！！！」

「若作りなだけだよ」

「・・・いくつなのよ！！！」

ひー、ふーみーよーと指折り数えて・・・

「多分、当年とって・・・97かな？」

「うそつけえ！！！」

二人の電撃の突っ込みは、僕の胸に直撃。

「ほんとほんと」

「ええええええ！！！」

最初の血相はどこへやら、二人は根掘り葉掘りとバーちゃんのことを聞き出し始めた。

騒ぎすぎたのぼせてしまったイブとレンファにおしほりを渡してひと心地。

玄米茶をすすりつつどうにか二人は我に帰ったようだった。

「いくら東洋人が若く見えるって言っても、これは反則よ……。」

ひっぱりだされた僕のアルバムを見つつ、二人は呟いた。

アルバムは主に僕中心で写されていたが、過去バーちゃんが写っている写真が混ざっているため、彼女達の説得に使った。

少なくとも、バーちゃんの髪の毛が東京オリンピックあたりまでは黒かったのはわかったが、彼女達は胡散臭いものを見るような目で僕とアルバムを見比べている。

「・・・合成写真だって言われたほうが納得できるわ。」

「そうね、でも多分、写真鑑定に持っていても本物と出るのも解る。」

ずずんと俯いた二人は、きつと僕のにらむ。

「リヨウのおバーさまって何者なの！？」

正直な話、僕のほうが聞きたいが聞いたところでまじめに答えてくれないのは解っているので聞いたことは無い。

まあ、人並み以上に非常識な若作りだということだけは断言できるが。

「うつつうつ、全世界の女性がのどから手が出るほど知りたい秘密が目の中にあるのに」

ばんばんとテーブルをたたくレンファ。

「リョウ、どんな手段を使ってもおばあ様を探すわよ!!」

凄い決意の瞳のイブ。

こえーなーと思いつつセンスを見たが、彼女は全く興味なさそうであつた。

「まあ、そのうちあえるよ、そんな気がするんだ。」

彼女達には僕は微笑む。

なんとなく彼女達は、ぼうつとしてみせていた。

「・・・でも、りょう、こっちの黒髪の人だれ？ おかーさま？」

差し出された写真は、黒い髪の毛を肩口まで伸ばした和服姿。

丸めがねをかけたその顔にある唇には、赤いルーージュが引かれている。

ぶはつと飲みかけたお茶を噴出してしまった。

せき込む僕をよそに、彼女達は清音センセにその写真を見せる。

瞬間、彼女も盛大に大笑いを始めた。

「ひゃーはっはっはっは！　なんだ、りょうくん、全部写真は始末したって言ってたくせに、じぶんでもってるんじゃないのおおお~~~~！」

げたげたと笑う大柄美人と言うのはいかなものかと思っただ、むせ込む僕には反撃の余力は無かった。

「何方なんですか？　この女性は？」

「ま、まった、その質問待った！　いわないで~~~~！！！」

そう言った僕を押さえ込んで、わが恩師は口を開く。

「それはね、りょうくんなのよ。」

（ひ、ひどい、いわないでっっていつてるのに〜）

「ええええええええええ！！！」

話の輪から外れていた黄までもが大声をあげる。

すべるような動きでコブラツイストを清音センセが僕に決める。
バーちゃんの妹分と共にプロレス観戦に言っていた名残。

「せんせ、せんせ、はいつてます、はいつてますってば~~~~」

パンパンとギブアップのサインを叩くが、彼女はお構い無しだった。

固定された僕と写真を見比べる、三人。

微妙に顔を赤くする彼女達を視界におさめたまま、僕の意識は暗闇に飲まれていった。

「はい、できあがり」

その言葉を聞いて、僕は気づいた。目覚めると、視界には学園の友人三人と、清音センセがうつりこんできている。

いまだしつかりしない意識のまま体を起こし周囲を見回すと、いまだ居間に居ることがわかった。

清音センセに締め落とされて、どのぐらいの時間が経っているのかを確認しようとしたところで、異変に気づいた。

（この、視界の両端に入ってくる黒い物体はいつたい。）

ちょこつと手を伸ばして触ると、それが鬘である事が判った。

徐々にしつかりしてくる意識の中で、不意に思い出す。

（こ、これは、あれか――！）

思いつきりその手にあるものを、その鬘を取って投げ捨てようとする、両脇の少女が、イブとレンファががっしりとめる。

「だめだめ！　こんなに麗しいんだからだめ――！」「いやいや、もう少しその格好でいていてくれないといやあ――！」

すつと差し出される手鏡を、この手で砕きたかったが、さすがにバーちゃんのものなので無理。

上げるも下げるも出来ない両手をかざした僕に翳された手鏡に映っているのは、黒髪を肩口まで伸ばした、先ほどの写真の姿そのものの。

「いや――ん、おばあ様の写真を見て誰かにそっくりだと思ってた

けれど、リヨウそっくりだったのねえ」

「さすがは孫と祖母、すんごくにてるう」

「リヨウ、おまえって女顔だと思っていたけど、凄い、凄いことになってるな。」

（どこからこの写真が出てきたんだよ）

僕はがつくりとうな垂れた。

「あゝん、その生氣無い顔もいい」

頼寄せる二人の少女をよそに、僕は思考の深みに落ち込んでいた。僕にしてみれば、ただの普通の顔に化粧とウィグをつけただけの顔だと思っただが、殊のほか女性陣に好評だ。

十代という性別的に曖昧な時期がそうさせているのだろうと冷静に考えているのは、すでに現実から僕の意識が遊離しており、イブとレンファにされるがままになっているという事実から逃避したいがため。

バーちゃんの徹底的なフェミニスト教育は、僕を金縛りにし、逆らうことの出来ない逃避状態に置いていた。

眼鏡をさすがに外せない僕の顔を全面的にいじることが出来ないが、有効範囲で産毛をそり、化粧を施すことに彼女達は熱中している。

コブラツイストを極めて満足した清音センセは、楽しそうに黄と世間話をしていると言っのが腹立たしい。

昔から面白いことがあると取っ掛かりをつけ、皆を舞台の上に立たせてから梯子を取り払い、後は下で楽しく見物といった風情があった。

今回も、ウィグを初めから用意していた様子からすると、どんな状況でもこの状況を力づくで作り上げるつもりだったのであろう。

ともなれば、わざわざあの写真を用意するまでも無いわけで、あ

の写真を誰が準備したのか？

ネガもポジもプリントも一切焼却したはずなのに、じつくりと思考の迷路にはまっている僕をよそに、二人の少女は満足げな声を上げた。

「できたあ！」

何が出来たのだろうと、瞬時に意識を戻してみた。

が、それは凄い状況であった。

まず、髭産毛を問わずそり落とされ、眉毛も半分以上そられてしまっている。

顔のあぶらづけはこしとられ、化粧水で補完された顔面にファンデーションと薄紅が踊る。

そられてしまった眉毛を補うように書かれた眉毛の下では、薄めのシャドーが無理やり引かれており、怪しさ爆発を醸し出している。

「どうです、ミスキヨネ！」

「会心の出来ですわよ」

胸を張る彼女達を見て、僕はなんといったら言いかわからない。

明日から毎日眉毛が生えそうまで眉毛を鏡に向かって書かないといけないのかなあ、などと暗い気持ちのさせられてしまった。

そんな僕をよそに清音センセはぐぐつと親指を立てて見せた。

喜ぶ二人を見て、なんだか僕の周りに居る女性はみんな同じのりだなあと感心してしまった。

清音センセやイブ・レンファ、バーちゃん、グッテンねーさんもこんなノリだったであろう記憶があるし、幼馴染の……

そんな僕の回想を中断して、それは突然現れた。

「おにーちゃん、おかえり！ー！！」

センスと同じく、くのいちポニーテールの少女は、化粧をして姿かたちが変わってしまったている僕をまっすぐに見据えている。

その少女の名は墨田 千鶴。

両親不在の上に育ててくれていた祖母まで失踪した後、思わず呆然としていた僕を育ててくれた墨田のじいちゃんの孫娘で、僕の幼なじみだ。

一つ年下の彼女は、子供のころから何処に遊びに行くのでも一緒に、僕等の仲間内でも可愛い妹のような存在である。

が、中学に入ることになってめきめきと成長を始め、いまや身長175センチの立派な体格の少女となってしまうている。

大きく開け放った襖から、飛び込むようにぼくに抱きつく。高低差1m以上の妹ダイブの衝撃が、巻きついた彼女の両腕を通して肩にのしかかる。

さらに、彼女は比較的運動方面に優れ、見た目以上の筋肉質なために質量が高い。

全力の両腕で空手チョップを食らったといっても過言ではない。ぐっとめくと共に涙が出そうになったが気合で引っ込める。が、意識まで引っ込んでしまった。

本日二回目の失神は、誰も意図していないものであった。

楽しそうな談笑、それが耳を打つ中、僕は意識を取り戻す。

ぼうつとして身を起こすと、四人の女性と一人の男性が卓を囲んでいた。

楽しそうに話しているなーと意識を明確にしてゆくと、徐々に話の内容が理解できてきた。

「・・・じゃあ、この写真って、千鶴ちゃんが持っていたの？」

「はい、そうです。こんなにきれいに撮れてるのに、おにーちゃ

んつてば全部燃やすって言つから、一枚だけ取つといたんです。」
「まあ、ありがとうね、千鶴ちゃん。おかげでこんなに麗しいリョウの姿が……」

振り返るレンファは固まった。

無論、不機嫌そうに眉毛をしかめる僕が目に入つたからだろう。

「あのー、おにいちゃん、おこつてる？」

「怒ってますよ、十分に」

「……私たちも、やりすぎたかしら？」

「……自覚していてくれてうれしいよ。」

冷え冷えとした沈黙、僕はさつさとメイクを落として寝てしまおうと思つたのだが、沈黙を破る存在が牙をむく。

「……大体、おにーちゃんもいけないじゃない。」

何が？ そんな視線で彼女を千鶴を見ると、彼女はぼろぼろと泣いていた。

「かえつてこないって、このお休みは帰つてこないっていうから、わたし、どんなに悲しかったか知ってる？ 清音センセから急に帰つてくる事になったって、もう帰つてきてるって聞いてどんなにうれしかったか知ってる？ それなのに、それなのに……」

一呼吸おいた彼女は、きつと僕をにらんだ。

「お兄ちゃんは、おにーちゃんは、あたしに一言も直接電話してくれない。こないって話も、帰ってくるって話も、みんな誰かから聞いた話なんだよ……。清音センセが教えてくれなかったら、ぜ

んぜん知らなかったんだから！」

いやな雲行きになってきたなあと思っていると、いつのまにか千鶴の両脇にイブとレンファが居る。

双方共に僕をにらんでいた。

背中をいやな汗が流れているところで千鶴は爆発した。

「おにーちゃんは、あたしが嫌いであけてるんだあー！！！」

びー、と泣く千鶴の両脇で、びしっと二人の美少女が僕に指を突きつける。

「なんて人なの、身内に対する情報漏洩すら国連情報機密法に抵触するとはいえ、合格発表あとからこつち電話一本もしていないんですって!？」

あのお、彼女自身も年齢的に国連学園受験資格があるので、情報機密レベルが極めて高いんですが・・・。

「季節の挨拶や雑談ぐらいなら直接電話しても検閲を受けるだけじゃない!!！」

検閲と言いましても、リアルタイムで情報部に監視され、後々内容確認のための面接まで受けさせられるのは苦痛じゃありませんか？

「リヨウは鈍い鈍いと思っていたけど、ここまで朴念仁だとは思ってなかった!!！」

きゅうつと千鶴を抱きしめるイブとレンファであったが、抱きしめられた千鶴は徐々に平静を取り戻してきたようであった。

「……ご、ごめんなさい、いいすぎ、だよね、おにいちゃん」
「いいの、千鶴。この朴念仁はもう少し女心の機微を解って貰わないとー!」

びしつと指差す二人の美少女に、千鶴は苦笑を浮かべて。

「おねーちゃんたちがやりにくい?」

ぼつと赤くなるイブとレンファは、子猫のように千鶴とじゃれあうのであった。

逆切れされて話をそらされた僕は、呆然と、あっけに取られているのであった。

どんな流れかわからないが、千鶴はいつのまにかイブとレンファの妹の位置に座り、同じ部屋に泊まるそうだ。

さほど狭い部屋ではないので三人寝ても余裕があるだろうけれども、なかの良いことだと思う。

なんだかなあと疲れ気味にメイクを落としていると、背後で黄が笑っていた。

「ま、リヨウの迂闊さ加減は楽しませてもらったよ。」

「やかましい、・・・と。」

そられてしまった眉毛がそろうまでは、ちょっとだけメイクをしなければならぬ。

さすがに半分眉毛が無い状態って・・・怖いし。

寝るときに顔が変わる女性という話を聞くが、寝るときに顔が変わる男って一体。

「うちのねーさまもかーさまも、眉毛は無いがメイクじゃおちんぞ。」

「？　どういうこと？」

「細い眉毛は女性の憧れだからな、初めから脱毛して刺青にするんだ。」

「おおおおお、なるほど！」

「やってやろうか？」

「おれはナチュラル眉毛が一番、じゃい」

むっとして睨むぼくを、彼は上げたげたと笑って見せた。

完全に他人事になってやがるな。

鏡越しに再び僕は睨んだが、何の気にもしないで黄はさっさと寝てしまった。

その余裕、気に入らんのお・・・。

僕はその夜、ごそごと前後策の対応におわれる事となった。なに、徹夜だって痛くは無いさ。

悪巧みはいつだって心から楽しめるってものだもの。

へっへっへと笑う僕を無視して、黄は眠る。

深く深く眠っている。

「へっへっへっ」

第三章　帰郷二日目

朝は明ける。

ちゅんちゅんとスズメなんかも鳴いていたりする爽快な朝だ。

そんな朝、僕は僕なりのメイクをわざわざして、倉庫から引っ張

り出した髪をつけて朝食を作っていた。

背後のイブ・レンファは僕の背中をポーッとみていたりする。

「ふわ、そのメイクもいいのね。」

「ちゃんとメイクできるんじゃない！」

「おにーちゃんは、学校で演劇部の部長さんだったのよ。」

するりと現れた千鶴が、イブとレンファに並ぶ。

「ええ！？ 演劇部だったの？」

「うん、そうだよ。結構有名で、全国大会にもでたんだから。」

「へ、じゃあ、メイクの技術は自分で持ってたのねえ。」

「まあ、ね」

と、僕は人数分のオムレツを並べる。

振り向きざまにさっと腰まである髪の毛が広がる。

じつは、これは視覚効果を狙ってみている。

「はい、っと、できあがり。」

女性陣の座るテーブルに並べてゆく。

オムレツ人数分、レンファ、イブ、千鶴、あとは僕と黄の分。

どうせセンセは朝食をとらない主義なので、よし。

「黄は？」

「まだ寝てるよ」

ふーん、とレンファは何も感じていないようだが、男子寮に住む住人なら不思議に思うだろう。

黄は寮の誰よりも早起きし、いつも暗いうちから拳法の練習をし

ているからだ。

そんな黄が朝寝坊、何かあると考えるのが普通だ。

無論、そんなことを知らない彼女達は、なにも思わないだろうけれど。

そんなこんなで朝食の準備完了というところで、がたんとか言う音が部屋から聞こえる。

「……うぴゃ~~~~~!!」

なんとも奇怪な叫び声が聞こえたかと思いきや、ものすごい勢いで誰かが廊下を走ってきた。

どどどど、という音はあたかも「怒」という感じに思えるのが面白い。

単純な興味でキッチンの入り口を見ていた女性陣は、不意に僕が右に一步ずれたことに気づいた。

丁度、胸の位置に僕が右手を開くと、一部のすきも無く握りこぶしが大きな音を立てて現れる。

彼女達から見れば、こぶしばかりではなく、こぶしをそこにつきたてて、肩を震わせている人が一人。

僕と同じく鬘つつけられ、さらに寝ているまにメイクまでされてしまった黄 天翔そのひとであった。

「き、きさま……、これはどういつつもりだ……」

「いや、不幸は分け合わないと。」

型も何もあったものではない拳が僕を襲うものの、子供のダダッコパンチごときに遅れをとるわけも無く、全てよけてしまう。

「ぬ~~~~、リョウ、おまえが女装させられるのは良いが、おれまで道ずれにされるいわれは無い!!」

「あれ〜？　じいさまにいわれたんだろ〜？　友達を大事にするんじゃないあ』って。」

僕はすつと身を寄せて、黄の胸でのの字を書く。

ちらりと見つめると、黄は真っ赤になって離れた。

「ば、ば、ば、ばかもの！　俺にはそっちの趣味は無いわい！！」
「僕にも無いよ、でも、黄ってこういう格好の女の子がすきなんだろう？」

さーっと長い黒髪、無造作にきたラフ系ファッション、それでもって気軽な感じのエプロン。メイクはちよっとお姉さん系。
先夜の話と清音センセに色目を使っていることから重度のシスコンまたはマザコンと踏んだのだが、間違いないようであった。

「ま、おとなしく朝ご飯でも食べようよ、ちゃんと準備してるからさ。」

してやった気分で一杯の僕は、僕らを見つめる少女達の目の色の異常さに気づいていなかった。

さて本題の東京案内と言う段になって、いつのまにかショッピングと言う状態になってしまった。

まあ、都心部へ、それも銀座有楽町方面に、女性4人とお供の男二人ともなれば、おのずと知れた結果だろう。

ただ、知れなかった結果と言うのが、僕と黄の両手いっぱい荷物と、千鶴・清音センセ以外の人間が第三礼服を着ていることだろう。

厳密に学園法規を遵守する必要はないが、どうしてもその格好で

と言う女性陣の願いもあり、致し方なくその格好をしているが、人にはどんな風に写っているのだろうか？

「でも、さすがにすごいねえ、国連学生って。」

感心して言う千鶴は、僕らの周囲10メートルほどの位置に離れてこちらをのぞきこんでいる人の輪を見ていった。

「なにが？」

「だって、警察官だって一歩はなれていてここにいて警戒しているだけで、近づいてもこないじゃない」

むーとぼくは眉をひそめた。

実際、僕らを中心に10mほどの空白があり、その空白を人の輪が取り囲んでいる。

これは珍しい珍獣を見にきている人の輪とも見えるわけで。

はたまた、今にも爆発する爆弾が見えるのに離れられないと言ったところだろうか？

どちらにしても国連学生が四人そろって行動しているのだから脅威といって良いだろう。

まだ放射性物質を搬送中というトレーラーのほうが可愛いに違いない。

「あたしも学園に入ろうかな．．．。」

「千鶴ちゃん、あなたの傍に、極めて特殊な国連学生が居るからそんな気になるのだと思うのだけれども、国連学園受験って生易しいものじゃないのよ。」

「そうよ、普通は生まれてすぐから国連学園準備を始めるのが普通だし．．．。」

「でもでも、おにーちゃんは．．．。」

そこまで言ったところで、イブとレンファが彼女の口をふさぐ。

「国連情報機密法に触れるわ」

「……（了解）」

小さくうなづいた彼女の口から二人の手が離れる。

「……でも、その人は、受験勉強を始めるまで、学年でも下から数えたほうが早いって成績だったのよ。」

「……」

短い沈黙のあと、イブとレンファが僕を睨む。

（ほんとなの！？）

僕がうなずくと、彼女達は力なくため息をついたのであった。

「千鶴ちゃん、その人は本当に、本当に例外中の例外だからあてにしちゃだめ」

何だかえらい言われ様であるが、僕の成績が低かったのだって訳があるのだ。

遙か前、色々な面でじいちゃんに世話になっっている事に申し訳なさを感じ出していた僕は、前々から考えていた国連学園受験をすることになっていた。

が、第三諸国以外からの学園への受験には、かなりの額の受験費用と入学支度金が必要としている。どちらも入学または選外となれば戻ってくるのだが。

世話になりたくないのに、受験費用と言う高額な出費で世話にな

るのは本末転倒だと考えた僕は、短期で高額なバイトを始める事にした。

中学1年の中ほどから2年間、知り合いの姉に頼んで紹介してもらった安全な店でのバイトだったが、これには条件が二つあった。

女装する事と、年齢を偽る事。

さすがに中学生を「夜の店の」ウエイトレスとして紹介するわけにはいかなかったからだ。

慣れない化粧と女装に当初戸惑っていたが、これがなんとなく受けられしく、指名が増えたり、チップをもらったりしたのだから世の中って面白い。

日中学校で死ぬほど「隠れて」勉強、夜には女装バイトと言う生活になんとか慣れてきた頃に、運悪く隅田組の若頭の秋野さんが、何故かその店にやってきてしまった。

ストイックでタイトな生活をしているはずの秋野さんが何で来たのか解らないのだけれども、最初は全くばれなかったので安心をしていた。が、僕の不用意な僕の言動と秋野さんの洞察力によってばれてしまい、その場で思いつきりお説教を食らった上に二度こんな事をしないと言う約束をさせられてしまった。

店の従業員控え室で更に2時間程のお説教をくらい、約束を破ればじいちゃんにこの事を報告するとまで言われては、ぐうの音も出ない。

なにも趣味でバイトをしていた訳ではないのだけれども、昔から頭が上がらなかった人であるだけに、更に頭が上がらなくなってしまった。

とはいえ、国連学園受験準備が隅田組・学校に知られないように成績も偽装していたわけだ。

実のところ、知り合いの姉と言う人から渡りわたって清音センセまで情報が回っていたらしいのだが、当時の僕にはそんなことを知る由も無かった。

「で、さあ、まだ買い物かなあ？」

弱音を吐いた黄を見る僕の目には、同感の意味がこめられている。ひと時争ってもルームメイト、心が通じているものよ。

「あ、つかれた？　じゃ、休みましょうか。」

そういつて彼女達が向かったのは、某有名ホテルの喫茶室であつた。

さすがに有名ホテル、ホテルマン達の教育も確かなもので、ひとめたりとも僕たちを奇異な目で見たりはしない。まあ、他のお客さんたちがチロチロこちらを見ているのがご愛嬌。

「いやいや、五月とはいえ暑いからね、息が抜けるよ。」

ふはー、と僕は肩の力を抜くと、不意に席順が変なことに気づいた。

いつもならば僕と黄が並んで、その正面にイブとレンファが来るように座るはずなのに、気づいて見れば僕をはさむように、いや、僕と黄をはさむようにイブとレンファが座り、不自然にもその正面にセンセとちーちゃんが座っている。

部屋の端っこの多人数がけのシートとはいえ、かなり不自然に思えた。

というか、いやーな予感を感じていた。

さて、何が出てくるか、と思っていたところで黄の隣に座るイブが口を開く。

「あの、さ。二人とも、私たちが本当はカナダに行くはずだったのは知ってるわよ、ね？」

無論である。

北米社交界の花である彼女たち自身に加え、北米経済界の重鎮とも言える両親を持つ彼女達の凱旋である。

ここぞとばかりのロビー活動が展開されたであろう事間違いないであろう。

「本当はカナダで入学披露パーティーが開かれるはずだったの。」

やっぱり、というか、当然だろう。

学園内にある「いつもの喫茶店」の奥さんなど、自分の子供が学園に入学できたら、自慢のために近所を一日中引っ張りまわすといっていたぐらいだから。

無言でうなずいている僕と黄を見て、意を決したように彼女達は口を開いた。

「全部、ぶっちぎったつもりだったんだけど……。」

何かをいいにくそうなイブ。

さてさてどうしたものかと僕の隣のレンファを見ると、彼女もなにやらもじもじしている。

普段クールな彼女が、こんなふうにもじもじしているのを見たら、彼女のファンはどう思うだろうか？

たぶん惚れ直すのが関の山だろう、そのぐらいに可愛い。

「どうも話がすすまないようだから、私が話したげるわよ」

そう言い出したのは、引率の先生状態の清音センセ。

「実は彼女達に昨日、彼女達の両親から連絡が入ったの。」
「ほー？」

「それでね、カナダで開くはずだった入学披露パーティーを、日本で開くことにしたから出席するようにって言ってきたんですって。」

僕は思わず天を仰ぐ。

「なんて強引な……。」

そして、やっぱり親子だけ会って強引なことだと思う。

「でも、ま、ご両親がわざわざ日本まで出かけてきて祝ってくれると言っのだから、謹んでお受けすべきじゃないの？」

僕は苦笑で言ったが、彼女達はますます申し訳なさそうであつた。まだ何かあるのか？

そう思っているところで、センセの話が再開。

「出席にあたっては、今回のお休みでお世話になっている家の方も呼びなさい、と。」

ほうほう、さすがは国際コングロマリットの長達だけの事はあると半ば感心しているところで、言葉のその意味が脳みそにしみてきた。

「……さすがにまずいつすよねえ？ 若い男女が一晩とはいえ同衾してたとあっては……。」

「そうねえ、さすがに芳しくは無いわね。離れと母屋で別れていたとはいえ、ね。」

言い訳、すべきかなあ、などと顔をしかめているところで、話が続く。

まだ先があるのだ、いやな予感がする。

「と言うわけで、学園の仲間家に泊まったのではなく、以前からのメールフレンドの家に泊まるという設定で嘘をついたわけなのよ、彼女達。」

なるほど、と二人を見ると、苦々しく微笑んでいる。

「というわけで、君達二人には変装して欲しいのよ。」

なるほど、と理解。

つまるところ、メールフレンドと言うのは千鶴にするのだろう。

僕がその言葉にすると、千鶴は可愛くピースサイン。

それで彼女のドレスを見繕っていたのかと、今日の買い物の中身を思い返す。

ご機嫌なわけである。

「じゃ、僕たちの役割は……」

自分の頭の中でシミュレートしてみたが、十分と言える役割が思いつかなかった。

「千鶴のお兄ちゃんたちじゃ、意味がないよなあ」

「そうだな、じゃ、弟は？」

「一緒だって。やっぱりイブとレンファに道義的な理由で危険が及ばないと言う立場じゃないと。」

「難しいな、それ。兄弟はだめ、……夫婦か？」

不意に千鶴を見ると、彼女もびつくりと言う顔だった。

「二人の夫じゃ重婚だ」

「じゃあ……」

黄と二人でぼそぼそ言い合っていると、ぐっと清音センセが頭を寄せてくる。

「悪いけど、時間が無いの。プランは決まってるから、答えだけきかせて。彼女達を助ける？それとも見捨てる？」

こう聞かれてNoと答えられるほどユーモア感覚に優れていない僕たちは、極めて明確に「助ける」と答えてしまった。

僕らの両脇でしてやったりと微笑む少女達に気付く事無く。

約束は重要だ。

守ると決めた事はさらに重要だ。

そう思っていることを破ることはできない。

だからって……

「何でこんな事になったのかなあ。」

きらめくパーティー会場で、僕と黄と千鶴は呆然と立っていた。

本来なら清音センセにも付き合ってもらうつもりだったのだが、

あの人、結構な有名人なので公の場にはあまり出てこないほうがいいのだと本人談。

今ごろ、鈴・モイシャン両家のつけて、寿司でも食べているのであろう。

悔しいくも羨ましいことだと僕は思う。

「まあ、所詮僕たちと彼女達との役者が違っただけだろ？」

あきらめきつた少年の口調で、中華系美女がため息をついた。その横で千鶴が買ったばかりのドレスに身を包み、うれしそうにしている。

スレンダーな体つきの中華美人は、長い髪の毛を三つ網みにして首筋から前にたらしめている。つややかな輝きの髪もさることながら、黒光りする流練なるドレスは一目をひきつけるらしく、先ほどから何人もの男性に声をかけられている。

「仕方ないか。」

細目の中華美人、変装した黄に微笑む僕も先ほどの第三礼服とは趣の違う格好をしていた。

輝かんばかりの白い和装は立ち羽ばたく鶴があしらわれたもので、リョウコさんが昔着ていた着物だ。

前もって清音センセが変装用に準備していたものだと言う。

髪も用意しており、準備万端といったところだろう。

ま、どうこう言っても仕方ないのであきらめたと言うのが現実だ。普段は芸能人などの結婚披露宴などに使われる某ホテルのパンケツトには、その収容人員を超えるほどの多くの人がいた。

タキシードや礼服に身を包んだ紳士、艶やかなドレスに身を包んだ淑女、有名人、政治家、資産家、会社役員・・・分かる人種はその辺まで、あとはどんな集まりなのだろう。

「しかし、凄い人出だな。」と黄。

「そうですね、なんか政治家の立食パーティーみたい。」

辺りを見回す、ちーちゃん。

確かにそう見えない事も無い。

綺麗なドレスもアクセサリーも、この人口密度では光モノの一つ

ぐらいいにしか見えない程で、逆にシンプルなドレスを選択したちーちゃんなんかの方が目立つように思える。

「それにしても……」

と僕と黄に視線を走らせたちーちゃんは、にやにやと嫌な笑いをしている。

「……もてもてねえ、二人とも。」

そう、悲しい事に、先ほどから僕達の周りに色々と人が集って来るのだ。

中年実業家風の油っぽい男、政治家風の笑顔の裏で色々やってます系のおやじ、ナイスミドル系のキラキラおっさん、イタリアマフエアの系統を汲んでいますタイプ的情熱空回りオヤジ、もう中年の見本市と言った感じ。

殆どが出会いの記念のプレゼントと称して、指輪やネックレス・イヤリング等のアクセサリを手渡していったが、全てに電話番号やホテルの部屋番号を書いたメモを添えていたりする。

既に束となったメモをちーちゃんに見せると、僕らは苦笑して見せた。

「で、それ、どうするの？ おにいちゃん。」

僕は、鼻でっ笑って見せる。

「プレゼントは換金して皆に還元。メモは……」

「メモは？」

「身元を調査の上、奥さんに送り届ける。」

「そいつは酷い。」

顔を顰める黄。

くすくすと、僕とちーちゃんは笑っていた。

そんな中、歩きにくいはずのドレスをきゅっとひらめかせて、黄が僕の陰に隠れる。

「どうしたん？」

「やばい、身内が来てる。・・・なぜだ？」

黄が隠れた方向と反対側に視線を向けると、あでやかなチャイナドレスに身を包んだ二人の女性と、車椅子に乗った老人が一人、いろいろな人に囲まれてにこやかな談笑をしていた。女性の一人は赤のドレス、もう一人は紺のドレス、そして老人は黒のスーツ。

片手のグラスを飲むふりをして視線を凝らすと、赤のドレスの女性と視線が合ってしまった。

まいったなーと思ってゆっくりと視線をずらすと、青いドレスの人にも視線が合ってしまった。

極めて気まずい気分になったので微笑むと、向こうは瞬間的に満面の笑みを浮かんで見せた。

なにかおもしろかったかな？ とそんな風に思っているところで、僕に視線を合わせたままの二人の女性が中央の老人をつつく。

しばらく煩わしそうに無視していた老人であったが、何かを赤のドレスの女性に囁かれたとたん、くわっとこちらを向いて目を開かせた。

ゆるゆると表情を柔らかくしてゆき、老人は女性達に何かを命じる。

青のドレスの女性が前に立ち人を掻き分けつつ、赤のドレスの女性が車椅子を押して、まっすぐにこちらを目指してつきてくる。

誰がどう見ても、人違いとかそういう話じゃなさそうだなあ。

そう思って背後の黄に意識をやると、なんと僕の背後で隠れたま

ま硬直していたりする。

本当にびびってるなあ、とそんなくだらないことを考えて言ううちに、この状況で緊迫していなくてはならないのは黄だけだと理解そんなことを考えていると、僕は急に僕は余裕たつぷりになってしまった。

人ごみを掻き分けてきた青いドレスの女性が僕の正面にきたとき、彼女は両手を出す。

すっと、その手が僕を押して黄の姿でもさらさせるのかと思ったのだけでも、その手は素早く僕を抱きしめた。

『りようこさま、お久しゅうございます!!』

思わず目をぱちくりしてしまった僕。

続いて現れた赤のドレスの女性も僕に抱きつく。

『りようこさま、こんなところでお会いできるとは思ってもおりませんでしたわ!!』

早口の英語であつたが、何とか聞き取れた。

僕の横に立っていた千鶴を指差し『娘さんかしら?』『可愛い娘さんね』とかなんとか言い合っている。

さらに加わったのは老人。

ゆっくりと差し出された両手が僕の両手を包み込み、そつと彼の額がつけられる。

『あなた様にいただいた恩義、一族全てで返しても返しきらぬもの、心よりの感謝を。』

渋い声であつたが、老人の声とは思えぬ張りがある。さて、こまつたぞ、と僕。

どうやらこの人たちは、僕とりょうこさんを間違っているらしい。しかし、黄の身内と思われるこの人たちに、どんな恩義を与えたと言っのでしょうか？ ええ、りょうこさんってば。

『どうかなさいましたか？ りょうこさま』

青のドレスの女性が覗き込んできたので、僕は苦笑いで答えた。

『どなたかは存じませんが、お人違いをなさっておりますか？』
『え？』

『私、申し訳ありませんが、皆様方との面識がございませんのよ。』

その一言で、三人の人たちが真っ青な顔をした。

『ま、またまた、そんなご冗談を・・・』

血の気の引いた顔で老人が言うが、僕は肩をすくめる。

『事実、私は皆さんがどのような方々で、何を恩義と感じているかも存じません。』

けして冷たい言い方にならないように注意を払ったつもりであったが、三人の人たちは非常にショックを受けているようであった。

『こんなにそっくりなのに・・・』

『笑顔も、苦笑も、グラスを持つその姿すらそっくりですよ』
『でも違う、方なのですか？』

僕は気の毒そうにうなずいてみせる。

すると三人とも非常に肩を落とした様子であった。

『何だか申し訳ありませんわ、皆さんのお探しの方じゃなかっただけで、こんなに気を落とされてしまっただなんて。』

『いえ、からこそ申し訳ありませんでした……。』

消え入るように言う青のドレスの女性であつたが、不意に何かを思いついたかのように顔を上げる。

『あの、もしかして、あなた様のご家族でリヨウコというご年配の方は……。』

『おりますわ。当家の宗主は皆リヨウコの名を襲名しております。』

にこやかに微笑む僕に、二人の女性と一人の老人が破顔する。

『では、イズミの家の方なのですね？』

『はい』

無言に深い握手をした後、三人ともが強い礼をする。

『我が家は、あなたのうちの宗主さまに救われました。詳しいことは申せませんが、一族全てが命をなげうつても贖えぬほどの恩でございます。恩義に報いるため、友情のため、あなた様一門には我々黄家が全力を持つて助力をさせていただきます。』

『どのようなことが存じません、ですがリヨウコさんがした事の恩義を私が受けるわけには行きません。神出鬼没なあなたなので、上手くは行かないとは思いますが、何とか本人にしてやってください。本人は望んでいないでしょうが、勝手に人との縁を結んでいるあの人の責任なのですから。』

『……リヨウコさんはすばらしい後継者をお持ちのようだ。』

ふたたび音も無く重ねられる僕と老人の手。

『りようこさまのこと抜きで、我々ができることがお申し付けください。あなた様の背後に居るものが我々となぎを取るでしょう。』

十分に全てを果たせ、天翔』

『あとで、部屋にきなさいね天翔。何でそんな格好をしているか、詳しく聞くから。』『そのメイク、誰に教わったか教えなさいよ、天翔。あと、メーカーもね。』

ゆったりと去る三人をみつっ、背後を振り返ると、黄はがつくりとがつくりと打ちひしがれていた。

「ばればれだな。」

「・・・ばればれだ。」

うるうると涙を流す黄の目元にハンカチを当てて、思わず撫でてしまった。

「で、おまえさん、何人お姉さんが居るんだ？」

「いまのは、ねーさまとかーさまだ。」

僕の目には、どちらが年を取っているかすらわからなかった。

「おまえの母親は、不老不死か？ はたまた後妻か？」

「正真正銘、実の母親だよ。」

思わず苦笑の僕と黄だったが、英語がちんぷんかんぷんであった千鶴は、少々不満げであった。

事の次第をかいつまんに説明すると、彼女は笑顔になった。

「なんで、こんな女装しているのがわかるかなあ。」

「どんなにメイクしてても、身内はわかつちゃうものなんだよ。」

につこり微笑む千鶴。

そんなものだろうかと肩をすくめる。

しかし、そんなものかもしれないと思い直す。

男の子は女親に女の子は男親に似ると言う。

女親から見れば、自分に似た息子が自分と同じように化粧しているのだからわからないはずも無い、かもしれない。

なるほどなるほど……。

そんな風に感心していると、人の波を割るように現れた人々が居る。

「これはこれは、お楽しみいただいておりますかな？」

品の良い見た目のアングロサクソン系ナイスミドルとモンゴロイド系の紳士。

艶やかなチャイナドレスが似合う妙齡の熟女と白い花のようなドレスを着た年齢不祥の女性。

左右にいるイブとレンファの姿が無くても、どのような人物が分かる。

「イブさんとレンファさんの御両親でいらっしゃいますね？」

僕はにつこり微笑んで会釈をして見せる。

それに倣うように黄と千鶴も会釈。

そう、会釈こそ、日本というものが一番出ているのではないだろうか。

そんな風に考えてしまふ自分を、何となく笑う。

「私の身内が皆様方の予定も考えず、かつてに大切なお嬢様方をお招きしてしまい、恐縮していましたの。」

ちよこつと眉を寄せて、困った風の表情を浮かべると、両親に隠れたイブとレンファが『ぐっ』と親指を立てる。

どうやら、とてもいい感じらしい。

すると二人の父親が、つかつかと僕に近づいてきたかと思うと、力強く手を掴んで引き寄せた。

なにかとりつかれたような表情にみえる。

「う・・・うちの、うちの娘がお世話になっているそうで・・・」
「・・・いや、その、うちの娘まで一緒にお世話になってしまっているそうで・・・」

どうやら、千鶴がペンフレンド、僕と黄が保護者と言う話は上手く言っているらしい。

ブンブンと握手を強要する二人であつたが、左右から双方の奥さんから引き剥がしにあい、未練たらたらで元の位置にもどされる。

「申し訳有りません、貴方が余りにもお美しいので、マックも動転してしまつたようで・・・。」

「ご迷惑のかけどうですみません、娘といいこの馬鹿亭主といい・・・。」

逆に前に出てきた二人の女性は、旦那と同じように僕の手を握り、ブンブンと握手を強要してみせたりする。

いつのまにかイブとレンファは、千鶴と黄に合流してこちらの様子をニヤニヤとうかがっている。

同じ女装なのに、黄は高みの見物をしゃれ込んでいる。

いや、両婦人の挨拶にあっている間も、黄が中年親父のナンパに会っているのを見ると、こっちのほうがいいか？などとも思う。

「わたくし、イブの母親のミランダ・ステラ・モイションと申します。これから末永いお付き合いをお願いいたします。」

「わたくしは、鈴 蘭花と申します。本日お会い出来て嬉しいですわ。」

さて、この場合何と答えたものか。

一瞬考えて、答える。

「わたくしは、千鶴の保護者のリョウコと申します。」

すつと会釈をして見せると、いつの間にやら両脇にミランダ・ランファの両名が僕の両脇についていた。

その早業といい、立ち位置といい、なにやらイブとレンファを思わせる感じだ。

「ささ、女は女同士、積もる話もあるでしょうから、こちらにどうですか？」

「先ほどから拝見させていただいていますけれども、男性からのアプローチにご迷惑なさっていらっしゃるご様子で。別室にお茶を御用意させていただいておりますのよ。」

たしかにスケベ中年のナンパも閉口していた。

が、何十年もの間、正真正銘の女をやっている彼女たちの目を、別室に行つてまであざ向け続けられるかというと、正直な話を言えば自信ない。

いやいや、絶対にばれる。

黄に助けを求める視線を送ったが、中年ナンパの渦中であって切れかかっているのが見えた。

「ささ、どうぞこちらに。」

「イブ、レンファ。あなたたちは皆さんのお相手をなさい。」

げげ、やばっ、等と思った僕の目が細まるが、イブやレンファから何のリアクションもないままに、二人の女性に僕は連行されてしまった。

残された二人の父親と娘たちは呆然と見送っただけだった。

・・・あ、黄、逃げやがった！

別室というのは、この施設の貴賓室のような場所で、落ち着いた色合いに統一された部屋だった。

二人の女性は自らの部屋かのように思わせる気軽さで、あたりの調度品からポットやカップを選び出して「茶」を入れたした。

「さ、どうぞお掛けください。」

イブの母ミランダが、僕に席を薦める。

おずおずと座る僕は、どこからぼろが出るかと緊張の思い。

すつと顎を引く仕種や、腕を回す癖などを、ばーちゃんの記憶の中から引き出して、丹念に真似て見せる。

多分、バーチャンそのままに演じきれれば、ばれる事はないだろう。

薦められたお茶を啜りながら、そんな事を考えていた。

「とてもお綺麗でいらっやいますのね。」

「ええ、殿方が血迷うのも無理も無いと思いますわ。」

僕の方を見つめる二人の女性。

非常に美しい二人の女性に見つめられるという状態に、僕は思わずもじもじとしていた。

居心地の悪さのために拳動不審にならないようにと、セルフコントロールをしていたのだけれども、次の瞬間に全てが崩れ去ってしまった。

「こんなに素敵な方が、男性だなんて驚きね、ランファ。」

「ええ、さすがは歌舞伎の国って感じね、ミランダ。」

「・・・ぶつ。」

思わずお茶を吹き出した僕は、思わず彼女たちを見つめ返す。そこには悪戯をして少女のような二人が微笑んでいる。

「大丈夫よ、リョウくん。この事で騒ぎを起こすつもりはないわ。」

にっこり微笑むのは、レンファの母ランファ。

「実は、私たちだけ昨日のうちに娘から聞いていたのよ。『二人の初めてのボーイフレンドを紹介したいんだけど、お父様達に知られると大騒ぎになっちゃうから・・・』て言う風に。」

「でも、さすがに予想を越えた紹介だったわ。」

「はぁ・・・何と言うか、申し訳有りません。」

思わず地声で僕が言うと、あらっという顔で二人は僕を見る。

「まあ、無理に声を作らなくてもその恰好にお似合いよ、その声。」
「ハスキーで、とても素敵だわ。」

急に恥ずかしくなった僕は、顔を赤らめる。

「初めてのボーイフレンドがこんな素敵なお子だなんて、さすがは我が娘たちね。」

にこにこ微笑む二人は、急に真顔になってこちらに顔を寄せる。

『ところでリョウくん。本命はどちらなのかしら？』

まるで打ち合わせていたかのように、二人の声はハモツっていた。その表情の裏には、見た目とは違った感情が渦巻いているのがありありと分かったが、どちらが本命もなにも、そんな事を考えて見た事も無かった。

二人とも魅力的な女の子だし、僕なんかと釣り合いが取れるだなんて思っていなかったから。

僕の眼鏡の下の呪われたような力が失われれば、彼女たちも僕なんかにかまっていた事など後悔するだろう事は確実だし。

「まさか、どちらも本気ですっっていう訳じゃないわよね？」

すうっとランファの手が、僕の顎にかかる。

何と言つか、この仕様だけで顎から体が痺れる思いだ。

「恋愛は自由ですけども、乱れた関係だけは許せないわよ。」

ミランダの手が、僕の眼鏡にかかった。

「あ、だ……駄目ですっ！」

あまりの心地の良さに、想わず反応が遅れてしまった。そういつた瞬間には、すでに外された眼鏡がテーブルに落ちていた。

急いで眼鏡をかけ直してみたが、彼女たちの表情は劇的に変化していた。

いままで年上の女性の余裕を感じさせていたその表情は、何度か僕が見かけた事のある彼女たちの娘達と同じ表情になっていた。

真っ赤になって頬と、泣き出さんばかりに潤んだ瞳。

美しい口紅が引かれた口が、小さく開かれたその表情。

これが何を意味しているものかは分からないが、何となく良くない状態である事は理解出来た。

「あ……あの……。」

僕が声を出すと二人は、びくりと体を震わせて、ゆっくりと伸ばした手を更に僕にあてがった。

「……本当に……本当だったのね。」

「信じられなかったけれども……本当だったわ。」

暫く僕の顔を撫で回していた二人は、感極まったように重いため息について両手をテーブルについた。

「あのー、この事も娘さん方から？」

控えめに声をだす僕に、二人はだるそうに首を縦に振った。

ま、早かったけれども、これでボーイフレンドという件も立ち消えだろうと思う。

眼鏡を外すだけで、誰彼ともなくいい男に見えるような人間を、自分の娘の相手にだなんて考える親がいるとは思えないから。

「・・・確実に子宮に来る顔だわ。」

「・・・娘たちのボーイフレンドじゃなければ、危ない所ね。」

小さく英語のつぶやきを交わし合う二人を見つめる僕。

かなり勉強した筈ではあるものの、日常的会話に通じている訳ではないので良く解らない言葉も多い。

しかし何と無く分かる内容で考えると、なんか非常に大人な会話に聞こえる。

どかり、という表現に感じる勢いで席に座り直した二人の女性の表情には、くつきりと疲労の色が浮かんでいた。

疲労の原因が何なのかは分からないが、多分精神的なものではないかと思う。

それでも笑顔を崩さないのは立派としか言いようが無い。

「リョウくん、あなたがその気になれば、この世界の女の子は・・・女性全てが貴方のものになる筈よ。そんな野望を持った事はないの？」

幾分真剣な問いがランファから発せられる。

「はあ、この顔の事ですか？」

ちよい、と眼鏡に僕が触れた瞬間、彼女たちもビクリと体を震わせた。

「そう、その超絶な美形であるその顔でなら、女の子どころか男性の心も思いのままだと思うわよ。」

「はあ。」

何と答えたものかと、思わず上を向いてしまう。

「この顔は多分、僕にとつては呪いなんです。人とちゃんと付き合えないように誰かがかけた呪いなんですよ。」

たぶんイブやレンファは、この呪いの所為で僕みたいな平凡な男が気になっているんじゃないのかな？

そんなのって嫌じゃないですか。彼女たちみたいに、とても素敵な女の子達と対等に付き合えるように居たいじゃないですか。だから、だから・・・ええつと・・・。」

色々と言葉を搜している僕の口を、遮るようにミランダの手が伸びた。

「・・・うちの娘たちを甘く見ないでちょうだい。」

うちの娘たちは、あなたのその内面で考えている、そんな所に引かれているのよ。

うわべばかりの二枚目なら、実家に居る時に何百人も見ているわでも、誰にもなびかなかった。

何故だと思う？ 見た目がすべてではないと心から思っているからなのよ。

そりゃあ、中身が気に入った上で見た目が気に入れば、尚の事良いけれどもね。」

年齢不祥の美しい婦人、ミランダが軽くウインクを飛ばす。

「あの子達はとても良く出来た子供たちで、小さい頃から私たちを困らせるような事は一つもしなかったのよ。」

だから楽だった反面、ちょっと寂しかったの。でも、貴方の御陰で、あの子達ったら学園に入ってから毎週のよ

うに電話をかけてくるの。

その度に恋の相談を持ち掛けるのよ。

『おかあさま、この前のアプローチは上手く行ったと思うんだけど、彼の反応が良く分からないの。東洋人の表情って良く分からないわ。』とか『あんなにあからさまにアプローチしているのに、なんで気付かないのかしら。』とか『・・・絶対に気付いてないわよ、おかあさま。あれが分かかっていて解らないふりだったら、絞め殺したやりたいぐらいに無反応何ですもの。』とかね。

私たちまでね、年頃の娘になってしまったみたいに感じてるわ。その度にね、娘を産んでよかったわあって、最近良く思わせてもらっているのよ。』

につこりと微笑む二人の女性を見て、どんなに若く見えても、母親である事を実感した。

しかし、心なしか頬が赤らんで見えるのは気のせいだろうか？笑顔の彼女たちへの言葉を搜したが、僕の頭には何も浮かばなかった。

無言の彼女たちに、何かを話さなくてはと思っている所で、背後のドアが勢い良く開かれる。

「おかーさま！ 絶対ないしょだったのに、酷いですわ！」

ばたんと開け放たれた扉の方を向くと、2人の第三礼服とちーちゃんがいいた。

苦笑を浮かべたちーちゃんは首をかしげている。

多分、全て会話が英語で交わされていたので、半ばしか理解出来ていないのだろう。

つかつかと近づいてきたイブとレンファの二人は、両脇から僕を引き上げるように立たせてた。

「自分で、自分たちで伝えるつもりだったんだから！ 絶対自分で話すって決めていたんだから！」

初めてだった。

いつもクールで、僕なんかより一枚も二枚も上手だった彼女たちが、感情そのままに悔しげな涙を見たのは。

僕の両脇を固めた二人の力が、裾を引き千切らんばかりに入れている。

怒っているのか、はたまた悔しいのか、僕には判断つきかねていた。

その中でちょっとした疑問があったので口にしてみた。

「えーっと、そのー。アプローチって何の事？」

首をかしげる僕の両足に、二人に踵が踏みおろされた。

「この朴念仁！」「究極鈍感！！」

主役不在のパーティーも中盤を越え、そろそろ切れもいいという所で、僕らは会場に戻る事が出来た。

相変わらず、イブ・レンファは第三礼服だったが、チーチャンは動き易いドレスに着替えていた。

本当の所、僕は早々に帰リたかったのだけでも、イブリン・ラnfアのタッグチームに捕まってしまい、チーチャンはイブニングドレス姿にされてしまった。

出る所が出て、引つ込む所が引つ込んでいるちーちゃんは、開放度の高いドレスを選ばれて真っ赤になっていたが、いざ着てみれば良く似合う、似合う。

僕は格好を変えていないが、ロングのウィグをアップでまとめて簪を使っていた。

この艶やかな簪は、ランファ婦人からのプレゼントである。

「ああ、これだけメイクし甲斐のある男の子っていいわぁー」と、両女史に弄繰り回された結果は、会場に入った途端知れた。

お義理にでもイブやレンファに挨拶する中年たちが、再び僕にアプローチしてきたし、色々な男達がちーちゃんに近づいて来たりしていた。

英語で色々話し掛けられてパニックになった彼女は、思わず僕の後ろに隠れる。

可愛いとか麗しいとか声をかけている男達へ、僕はにっこりと微笑んだ。

「この子はまだ、自由恋愛を語らせるほどの年ではないの。ごめんあそばせ。」

背中の中ーちゃん共々、僕は男達の円陣を軽く抜けていった。

円陣の中にはイブとレンファが残されてしまう。

まあ彼女たちなら社交場の男達の扱いも慣れたものだろう、と口には出さずに思う事にした。

「お・・・おにいちちゃん、わ・・・わたしビックリした。」

僕と移動していたちーちゃんは、小さく僕にいった。

男勝りといったイメージを自分でも強く感じていた彼女は、この状況にドキマギしていたらしい。

そりゃそうだろう、彼女の周りに集まってきた男達は、どちらかと言えば俳優クラスの美形とか、渋さを感じさせる男性ばかりだっ

たから。

「ま、こんなに可愛いんだから当然ね。」

にやにやしながら作り声で僕が言つと、鈍い衝撃が背中に走る。

「ぐう。」

「・・・ばか。」

思わずよろめく僕は、周囲に親父が固まったような集団がなくなっていることに気付いた。

「黄さん、どこに行つたのかしら？」

千鶴が見回すと、あつと声を発した。

彼女の視線のほうを見ると、先ほど退場した黄の身内と共に黄天翔その人が、第三礼服に身を包んで現れる。

京劇役者のようなりりしいメイクをほどこされている。
会場でたたずむ僕を見つけると、朗らかな笑顔で近づいてきた。

「やあ、おまたせ。」

にこやかな笑顔で口を開くと、耳元で僕に囁く。

「ぜんぶ、ゲロさせられた。・・・すまん。」

げげ、つと眉をひそめる。

「どこまでだよ。」

「学園でルームメイトな事、イブとレンファがチームだって事、な

「ぜ女装しなくてはいけなくなつたかつて事。」

「本当に全部じゃないか。」

「かーさまとねーさまに挟まれて、真実以外を口にできるものか。」

笑顔の黄であつたが、聊か血の気が引いている。

「じゃ、もしかして、あの女性達が凄くいい笑顔で手を振っているのは……。」

「あとでお茶でも一緒にしましょうね、というお誘いだ。……断るなよ。」

「あのなあ、イブとレンファの母親達からも、二次会に誘われてるんだぞ。」

「悪いが、却下だ。こつちの約束にはリヨウの親友の命がかつてるんだ。」

「命？」

「俺の命が、風前の灯なのだ。」

真剣な黄。

間違いないんだろうなあ。

どうしたものかと思つているところ聞き耳を立てていた千鶴が、履きなれないヒールのために、よろめく。

どん、とぶつかられた僕が、背後によろめいてしまった。くるりと振り向いて耐えようとした僕を男が抱きとめる。

「大丈夫ですか？　麗しい方。」

バリトンの響きのよい声を聞いて、僕は眉をひそめた。

何となく聞き覚えのある声。

ふと見てみれば、僕を抱き留めた人物は白い制服のようなものを

着ている。

更に見て見ると、その襟元に口紅をつけてしまった。

「あ、すみません、慣れない場に出てきたもので、はしゃぎ過ぎのようですね。」

2・3歩離れてその人物を視野に押さえた瞬間、僕は固まってしまった。

見慣れに見慣れた第三礼服、流れるような銀色の髪の毛が腰まで届き、女性を思わせる細身の顔。

学園の誰もが知っている最大危険人物にして最強有名人、Mr風御門その人だった。

「あ・・・あの・・・。」

半ば青ざめている事を自覚しつつも、僕は声が出せなかった。

「これは美しい・・・どうです？ 私とパーティーの後でお付き合いになりませんか？」

嫌味無く僕の手を取ったMrは、そつと口付けをした。

この手際、かなりの修羅場をくぐっているのだろうが、彼はゲイじゃなかったのか？

そんな疑問を浮かべている僕へ、辺りの女性たちが羨望の視線をこちらに送っているわ、嫉妬の視線を滾らせているわでもう大変。

今、女性の恨みを一手に背負うの僕が男と解ったら、彼女たちはどんな風に思うだろう。

「申し訳有りません、連れがおりますので・・・。」

そう言つて身を翻そうとした所、風御門先輩の目が細まつて僕の背後を見つめた。

「おや、そこに居るのは黄君ではないか。どうしたんだい、こんな所で。」

しまった、そう思つて振り向くと、黄はバツの悪そうに頬を指で搔いていた。

「おお、Mr風御門。貴方こそ何故ここに？ 私はこのパーティーの主賓たる両嬢に招待されたのですかね。」

「私も似たようなものだよ、黄君。今年も学園に残っていたら、本国の両親にこのパーティーへの出席を頼まれてね。親の名代として学園の先輩としてお祝いに來たのさ。」

肩を竦める仕種も様になるのが面白くない。

が、そんな表情も表に出さず、僕は数歩離れたにじりじりと下がつて事態を見詰めた。

ちーちゃんは僕がゆつくりと位置を変えるのに合わせて、僕の背中に引つづくように立ち位置を変えた。

「誰なの、おにいちゃん。」

「・・・学園最悪の人物。」

「ええ？ だつてあんなにカッコイイのに？」

「あのねちーちゃん、良くお聞き。変態という奴等は信用してはいけないよ。やつらがどんなに社会的立場が良くても高くても、優しくて優秀でも、自分の趣味のためならばどんな汚い真似もへいきつて人種なんだよ。そして少しでも接触を持った人間を自分の方へ取り込むためならばどんな労力も厭わないし、嘘も平気。」

「・・・あの人・・・変態なの？」

「・・・ああ、もう、超がつくほどの変態。ゲイの風御門と言えば学園で知らない者はいない。」

まあ、と両手で口を覆ったちーちゃん。

「で、先ほどからかなり失礼な事を私に向って言っている麗しの御婦人と美少女は君のなんだね？」

あれま、わざわざ日本語の小声で言っていたのに、聞こえていたらしい。

「ああ、彼女たちは主賓の両嬢のペンフレンドとその保護者でいらっしやる。」

よくよく聞いてて思ったのだけれども、黄のこのぞんざいな口振りは久しぶりに聞く。

以前は僕やイブ・レンファ以外にはこういう口振りだったのだけれども、いつのまにかチームの中でも聞かなくなった口調だ。

「ほほう、それはすばらしい。ぜひお名前をお聞きたいですね。」

つかつかと近づくステファン「エミット」風御門。

それに合わせるようににじり離れる僕。

「どうしました御婦人、なにも取って食べようという訳ではありません・
・せんよ。」

ゆっくりと動きを止めたMr・風御門は、なにか奥歯に挟まったような妙な顔になる。

「・・・すみません、御婦人。貴方とは何処かでお会いした事が無かったでしょうか？」

「あら、古典的な口説き文句ですね。」

「プレイボーイの名も高いMr.とは思えせんわ。」

彼の言葉に合わせるように現れたのはイブとレンファだった。

何となく僕とMr. 風御門の間に割って入っているように見える。

「これは学園の最も美しき華たちではありませんか、この度は父に代わってお祝いを申し上げますよ。」

ゆつたりと礼をする風御門先輩に、二人の美少女は一礼をした。

「いえ、Mr. の意志にそぐわぬこの催しに、御本人で出席頂けただけでも私たちの喜びですわ。」

「拙き小さな祝宴ですが、最後までごゆっくりいただきたいものです。」

そのまま庇うように彼女たちは会場を後にしようとするが、それに風御門先輩が追いつがろうとする。

ぐつと強引に手を引いて、僕を振り向かせた風御門先輩は僕に顔を近づけた。

唇が触れようとして、わっと辺りの空気が盛り上がった所で、乾いた音が辺りに響く。

パン！

僕の手が風御門先輩の頬を叩いた音だった。

「な・・・」

言葉も無くよろめく彼に向い、僕は啖呵を切る。

「無礼者、引き際を心得なさい!!」

そのまま、去ろうとした僕に、風御門先輩は掠れた声で追いつた。

「せ・・・せめてお名前だけでも・・・」

消え入りそうな彼の言葉に、僕はちよつと考えて答えた。

「リヨウコ・・・リヨウコさんと呼び。」

明朗な声と笑顔で放たれたそれは、思い出の向こうのバーチャンの台詞だった。

まいった、やりすぎたか、そう思った瞬間、周囲は歓声に包まれた。

お、おお？ そんな風に周囲を見ると、わらわらと握手を求める男女の姿が。

先ほどのギラギラとした視線ではなく、さわやかな憧れをこめた視線の男性。

嫉妬に狂った羨望の視線ではなく、敬意と尊敬をこめた女性の視線。

口々にこの会場の話は語り草になるでしょうといていた。

「本当に胸のすく思いでしたわ」

しきりにイブ・レンファらの両親にパーティー後の会食を薦めら

れたのだけれど、すっぱりサッパリと辞退申し上げて帰路に就くことにした僕だったが、出口で待っていた黄家の車には同乗させられてしまった。

そのことを清音センセに連絡しようとしたら、すでに荷物を抱えて帰ってしまったとのことであつた。

つまり、帰りもこの格好で帰れというわけだ。

渡りに船と乗り込んだロングリムジンの後部座席は広く、六人対面座席が二セットほどあつた。

前側の対面席には黄と老人が対面で座り、後部側の座席には僕と千鶴と女性が二人。

いまだどちらが姉で母かもわからない。

「ほんとうね、あの色男顔に一撃、ですもの。」

ころころと笑う赤のドレスの女性。

「はは、やりすぎたと反省しています。」

女言葉もなしに素直に反省すると、彼女達は僕の手祖取つた。撫でるように僕の手を触っているが、そのときに気付く。

赤のドレスのほうが母親で、青のドレスのほうが姉だろう、と。

女性の年齢を判断する要素の中は色々とあるが、もっとも嘘をつかないのは関節だろう。

肌やつやなどは化粧や手術でどうにでもなるけれど、細かな部分の関節はさほど変更が効かない。

手などはその際たるところだろう。

握手でその年齢が知れると教えてくれたのは、昔の夜のバイトのおネーサンだ。

「でも、ほんとうに、りようこさまにそっくりでらっしゃいますね。」

青のドレスの女性が微笑む。

「ほんとうに、りょうこさんにそっくり。」

隣の千鶴がうつとりと微笑んでいる。

「この少女は、りょうこさんの縁者で？」

「はい、りょうこさんの親友の墨田氏のお孫さんです。」

ちょこりと千鶴がお辞儀すると、二人の女性は目を丸くする。

「では、隅田組の？」

苦笑の千鶴に対して、女性達は感嘆の息を漏らす。

「運命を感じずにいられません」

そういった、赤のドレスの女性は、なんとパーティーの後、隅田組に表敬訪問するつもりだったと言うのだ。

なぜ？ と僕と千鶴が向き合っていると、赤のそれすの女性がにこやかに言う。

「東京進出にあたり、関東で最も権威ある『ヤクザ』にお話を通しておこうかと・・・。」

『ヤクザではありません、任侠です。』

思わずハモる僕と千鶴。

「そもそも、隅田組は関東一円に地をおろす八州連合ではなく、独立した組織です。遠く、徳川幕府開闢時におかれた自治組織を母体にした人の道を極める組織です。非道と人外の行為で力ネにまみれるヤクザなど同一で見ていただいては迷惑千万です。」

一気にそこまで言うと、思わず千鶴は真っ赤になってしまった。

「も、申し訳ありません。立場もわきまえず、失礼なことを言いました。」

ぺこりと頭を下げる千鶴の背後から、老人の笑い声が聞こえてきた。

「・・・すまなかつた、墨田のお嬢さん。我々の認識が甘かったことをお詫びしよう。」

「い、いえ、そんな・・・。」

「いや、本当に申し訳ない。そして大きく感謝せねばらるまい。」

「・・・あの、なぜですか？」

「今までの認識で隅田組組長と会見たのならば、けっしてよい結果が得られなかっただろう。しかし、あなたの忠告によって、我々は見解の相違があることを知った。お互いのよい関係のために、どんな小さな誤解も生みたくないものだ。」

穏やかな表情を思わせる声に、千鶴も笑顔を誘われていた。

懐の深い人物であることをうかがわせる物言いに、僕も感心してしまっている。

僕の実家まで送ってもらえたのだが、黄と千鶴はそのまま隅田組

へ直行した。

なにせ、黄は黄家のご令息だし、千鶴は隅田組のご令嬢だ。

主役は自分たちでないにしろ、それなりに関係あることだろう。

そんなこんなで、僕は自分の部屋へとなだれ込み、さつさと着替えて庭まで行くと、想像を絶する風景が広がっていた。

庭を囲むような紅白垂れ幕、枝振りを無視した植木を中心に広がるちようちんたち、そして正面に広げられた横断幕。

『イズミッリヨウくん 国連学園入学おめでとう！』

達筆な文字は、間違いなく清音センセのものに違いない。

横断幕の下でカラオケをしていた魚政のたっちゃんを蹴倒して、清音センセはマイクをつかむ。

「さあ、本日の主役の登場だあ！ はくしゅー！ー！」

すでにべろべろの状態のセンセは、ふらふらとこっちに近づいてきて、横断幕の前まで僕を連れ出す。

「センセ、これな何事ですか？」

「町内からの心尽くしよお。リヨウ君が帰ってきたって町内で触回ったら、集まる集まるカンパの山。あんまり凄い量になっちゃったから、皆で消費する事にしたの。」

ふと見まわせば、近所の奥さんがたや旦那さん、商店街の店主の人々、更には学校の教師の主だったメンバーまでべろべろに酔っ払っている。

見なれない顔の人間まで多く居たのでよくよく見てみれば、胸に国連情報部徽章がついていたりする。

「あ、あの人たちは……」

「ああ、庭先で隠れていたんで、無理矢理誘っちゃたのよ。まずかったかしら？」

まずいも何も、どうりで僕付きの情報員が今日に限って気配を感じなかった筈だ。

僕的には彼らの情報秘匿性（個人情報の秘匿厳守）を考慮して女装したつもりだったけれども、初めから彼らは付いて来ていなかったのだ。

「あの人たち、国連情報局と公安ですよ。どうやって吞ましたんですか？センセ。」

当然ともいえる僕の疑問に、師匠たるセンセは一言。

「雪崩式宴会。」

「納得。」

さすがは師匠。

大体、宴会と言う物は三つの要素で支えられていると、我が師は教える。

一つは酒。これが切れると自然に解散となる。

一つは人。皆酔いつぶれるとこれまた解散。

最後に勢い。気が萎えたり明日が気になりだすと解散。

三つのうちどれかが絶えたと終わってしまうガラスのように繊細なものこそ宴会なのだけれども、今日この場にある宴会は、一味も二味も違った。

まず酒。

これは信じられないほど差し入れられており、更に言えば消費される側から差し入れが増えるので尽きる事無し。差し入れといえば酒だなんて発想を持っているのはいいが、相手は未成年なんだけどなあ。

次に人。

最初のメンバーは流石に酔いつぶれつつあるものの、店番をしていた息子や奥さんが駆けつけてきたり、学校の仲間なんかも飛び込んできているので人も尽きる事無し。

最後に勢い。

既に突っ走っている泥酔者に追いつこうと呑んでいるので、皆突っ走り。

もう、何の目的で集まったのかもわからない雰囲気だった。

「ぼん、きやしたぜ!!」

地元に愛された任侠、組長墨田寅之助を筆頭にした隅田組の登場に会場が沸く。

ヤクザとは異なり、どちらかといえば民事一般を一通り解決する隅田組への町内の信頼は厚い。

組員の政吉さんなど、スーパーの職員でもあり、セールスから注文受けまで全般的に行い、行った先で老人介護やら家の修繕までしてくれるものだから、その人気言わずもがなである。

どやどやと盛り上がる組員と街の人々を割るように、組長・若頭と僕の前に現れた。

「ぼん、あらためておめでとーござーやす」

「じつちゃん、イの一番に挨拶にいけなくてごめんね」

「何を言ってるんでやすか、ぼん。身内は一番最後つてのが坊ちゃんちの家訓じゃねーですか」

笑顔のじつちゃんと僕は抱擁を交わす。

「秋野さん、これからもじつちゃんをよろしくね。」

「もちろんですよ、リヨウさん。」

こちらは硬い握手。

「じゃ、みんなで軽く飲んでいってよ。なんか訳の解らない量の飲み物が持ち込まれちゃって、どうにもこうにも。」

「……」

硬い笑顔のじつちゃんは、庭の入り口を見て苦笑した。
僕もそれを見て、がつくりとうな垂れる。

「なんで樽酒なの……」

「祝いの席でやすから……」

さて、どうやって消費するか？ 酒屋で一升瓶でも借りてきて、
汲みわけようかしら？

「ま、どうにかなるわよ。」

突如現れた清音センセは、人も物も押しのけて酒樽を中央まで引っ張りだす。

「さ、隅田組のご好意ですわよお！ 一気に行くわよ……！」

その掛け声と共に、おお！と怒声に近い声が周囲に響いた。
みな、コップや升を片手に振り上げる。

「じゃ、鏡割りは・・・」

フラフラとした視界で彼女は何かを見つけて微笑む。

「りょうくんと、黄くん！」

へ？　と思つて背後を振り返ると、なんと先ほど分かれた黄家の方々が立っていた。

「あ、あの、これはとてもお恥ずかしいところを・・・」

ぼりぼりと頬を掻く僕に、黄家の女性達は微笑んで答えてくれた。

「私たちも堅苦しい場合は苦手ですよ。・・・組長さんから本日凱旋パーティーに出席するとお話を聞いて、私たちもご同席させていただければと思ひまして、突然お邪魔させていただきましたの」

柔らかな言葉を聞いて、思わず周囲が静かに拍手を始めた。

「我が家の天翔と、こちらの泉家のお坊ちゃまがルームメイトだといつのも何かの縁、祝いの席、同席させて頂いてかまいませんな？」

老人の言葉に、僕は微笑みながら頷いた。

「格式も何も無い、山賊の夜のような集まりですが、どうぞ御ゆっくりお楽しみください」

そう言った僕のすそがちよいちよいとつつかれる。

割烹着姿の千鶴であった。

「ねーねー、おにーちゃん。今なんていったの？」

「あ、ああ、山賊みたいな宴会だけど、楽しましょっていったんだ。」

それを聞いた瞬間、千鶴は嬉しそうに笑った。

視線の先のじっちゃん和微笑み合う。

何だろう、そう思ったところで、黄の姉と思しき女性が耳元で囁く。

「我々の会合は難航しておりましたの。・・・当然ですわ、当初我々も話をまとめるつもりは無かったのですから。」

驚きで思わず彼女の顔を覗き込むと、思わず彼女は頬を染めた。

「・・・あ、あああ、すみません」

そう言っただけで僕が離れると、頬を染めた女性に並び立つように母親と思える女性が微笑む。

「ぼっちゃんや、リョウコさまが我々を結び付けたんですの。あな達が我々を分け隔てなく受け入れてくれたから、私たちも手を結ぶことが出来ましたのよ」

・・・彼女達の言葉、どんな意味があるのか理解しかねた。

しかし、自分の存在が自分以外の誰かのためになれるのなら、それはそれで幸せなのではないかと思った。

「リョウ、あの組長って何者だ？」

いつのまにか私服に着替えた黄が僕の隣に立っていた。

「・・・何者って、ただの任侠の組長。」

「あのなあ、身びいきな話しだけれども、うちのじいさまってのはアジア社会では結構な実力者なんだぞ。そのじいさまが、車椅子から降りて頭を下げた相手なんだぞ。『ただの』で済む相手じゃないだろ。」

「黄、地位とか名声ってそんなに凄いことか？」

「少なくとも、凄いことじゃないが厳然とした事実だ。」

ふう、と僕はため息をついた。

「ぼくは、僕の知っているじっちゃんは、どこにでもいる孫に弱いじーさんだよ。」

ちょっと無言で、そして黄はため息をつく。

「・・・リヨウはそういう感覚に疎そつだものなあ。」

「悪いか？」

「いや、好ましいよ。」

肩をすくめる黄。

「どちらかと言うと、こういうパーティーの方が好きだしね。」

「ま、肩は凝らないね。」

先ほどまでもイブ・レンファのパーティーを思い出しつつコップの中身を煽っていると、玄関先でわっと盛り上がる雰囲気を感じられた。

何かと覗いて見ると、なんと燕尾服の紳士とドレスの淑女が二組に、見慣れた第三礼服の少女が二人立っていた。

「はい、リヨウ。来ちゃったー。」「へへへ、こっちのパーティーには招待状は要らないわよねー？」

可愛く手を振る彼女らをよそに、二人に紳士の表情は硬い物だった。

何と言つか、硬直と言っのだろうか。

ふと、今自分が女装していない事を猛烈に悔やんだが、一応礼儀的に会釈をして見せる。その姿を見るや否や、二人の紳士は猛烈な勢いで僕の所まで近づき、ずずいとこちらを覗き込むのだった。

「あ、あのおーなにか？」

「そうか、君がリヨウ＝イズミ君か。」

モンゴロイドの紳士が僕に握手を求めて来た。

立ち上がりそれに手を沿えると、隣の白人男性もそれに手を添えた。

「娘から聞いているよ、公立の学校から学園に入学した天才だね。」

ぎゅー、っと力の限り二人は僕の手を握り締めて言った。

「なるほど、リヨウコさんにそっくりだ。流石は親子だね。」

「顎の線などうりふたつだ、お母様に感謝し給え。」

つー、とイヤーな汗が頬を伝い、イブとレンファを覗き見ると、彼女らも引きつった笑顔をしていた。

「み、皆さん。こんなむさ苦しい席においで頂き、誠に有難うございます。・・・ところで、お二人はイブとレンファのお父様でいらっしゃるようで。お二人にはとても良くして頂きありがとうございます。」

一気にそう言うと、ふたりはキョトンとした顔をしていたが急に笑い出した。

「はっはっは、そうか君とは初対面だったな。」「いやはや、何故か君とは初対面だと言う気がしなかったもので自己紹介が遅れたね。」

互いに微笑み合うナイスミドルが二人。

所で二人とも、なぜ僕の手を放してくれないのだろうか？

「ところで・・・」

「お母様は、リョウコさんはどちらにおいでかな？」

ハモリつつも二人は周囲に視線を走らせている。

なんてことだ、こういう魂胆だったのか。

あのあと家族内での食事を済ませた後に、イブとレンファが外出するという話でも切り出したのだろう。

行き先と僕の名前が出た後で、先ほどの自称「リョウコ」との関係に行き着くまでに時間はかからなかったのだろう。なにしろチーちゃんの保護者で家主と紹介しているのだ。

続柄に関して、さすがに祖母とはいえなかった二人は、なんとか僕の母と言ったのだろう。

口元だけ友好的な微笑みで、真剣な瞳が言っていた。

「ぜひとも。このほどのパーティーでの非礼をお詫びせねばと・・・」
「無礼な若者のせいで大変ご立腹の様子で帰られたので、出来る限りのお詫びをせねばと・・・」

まあ、彼らの言葉に嘘はあるまい。

しかし・・・、さすがに呼んでくる訳にはいけないので、無い知恵を絞ってみた。

というか、悪い知恵の類に違いない。

「は、母は、帰って早々逃げるように外出しました。」

「外出？」

「ええ、なにやら困ったような顔で『気合を入れすぎた』って言うて、変装して出て行きましたよ。」

「ど、どこにいらしたか・・・聞いていないのかね？」

「あ、はあ。ああ言う時の母は、CIAでも見つからないでしょう。雲隠れの天才ですから。」

「・・・そこまでご立腹なのか・・・。」

「いやいや、母が雲隠れするときは必ず自分が悪いときですよ。自分が悪くないときは、絶対踏ん返り返っていますから。」

「・・・そうなのかい？」

「ええ。」

自信に満ちた口調で言いきつて見せる僕だった。

そう言ってみて気づいたのだが、ばーちゃんに同じ事が言えると思う。

もしかしてこの10年にわたる失踪と言うのは「雲隠れ」なのか？
そんな思いが表情に出たのか、二人の男性はバンバンと僕の肩をたたいた。

「いやー、実に愉快で麗しい女性じゃないか、大切にしまえよ。」

「素敵な雰囲気を持った女性だ。君は彼女の息子として胸を張り給え。」

『イブにしろレンファにしろ、一筋縄ではいかんからな。困った時には相談に乗ろう。』

耳元で囁く二人の声に、僕は背中を冷たくしていた。

「は、ははははは・・・な、なんのことやら・・・」

「なになに、隠す事はない。私たち男親に嘘を付いてまで転がり込んだ「ペンフレンド」の男の家だ。どんな関係かは直知れる。」

「昔私たちも学生の頃、休暇の時には親を騙してデートや別荘に泊に行ったものだった。」

どかりと僕の両脇に陣取った両紳士は、近所のおばちゃんから渡された酒入りカップをにこやかに受け取り、一気に明けた。

歓声と拍手に迎えられた二人の紳士は、泥酔状態で前後不覚になるまで一氣を続けたのだった。

追加 帰郷三日目

一晩明けて朝日の中。

何も無くなつた庭先を眺めていた。

宴会も酩の午前1時、モイシャン氏と鈴氏がつぶれてしまい、家の空き部屋に放り込まれた後に両婦人の参戦。

墨田組の若い衆と呑み比べとなった。

隅田組対北米企業連合の戦いかと思いきや、黄家の女性たちもすつくと立ち上がる。

視線を絡めた女性達は、お互いをライバルと認めているようであ

った。

視線の応酬に挟まれた隅田組の若い衆が、新たに樽の鏡を割ったところで戦いが始まる。

娘達が止めるのも聞かず、ドレスを振り乱して呑む二人の婦人。止める黄を拳で黙らせた黄家の女性達。

すでに雰囲気にも飲まれた若い衆が、ワンコそばよろしくに彼女達の杯にどんどん酒を流す。

受けた女性達は厚い火花を散らしあっていた。

その姿は、先ほどのパーティーでの楚々としたイメージと異なるもので、「これが地なのよねえ。」というイブの台詞は重いものだった。

二時間にわたる接戦は、酒樽が空になるという恐ろしい結果を持って終結した。

付き合うように飲んでいた隅田組の若い衆が轟沈してしまっているのも印象的。

ああ、片づけを手伝ってもらおうと思っていたのに・・・と呟いた僕に、四人の淑女は親指を立てて「任せなさい」と言ってくれる。あたかも打ち合わせた台詞のようだったので、思わず「はあ？」と思っている所、ミセス・ミランダが何処からとも無く小さな力ードを取り出すと、それに向って二言三言話し掛けた。

同じく、ミセス黄も胸元から引っ張り出したカードに話し掛ける。すると、何処に隠れていたのか、黒いスーツを身に纏った100人はいようかと言う集団が現れ、酔いつぶれたひとや泥酔状態の人を効率的に運び出しはじめた。

「あ、あの、その人たちは・・・」

「大丈夫よりヨウケン、皆さんの身元は分かっているから。明日起きるまでに家に送っておくわ。」

人ばかりではなく机や敷物食器にいたるまで撤収されてゆき、30分もしないうちに庭には彼女たちしか居なくなっていた。

何とも恐ろしい事に、庭先の芝生等も人が居た事を忘れさせるか

のように復元されていたりする。

「ではリヨウくん、私たちもこれでおいとまさせてもらいますわ。」
につこり微笑んだ二人の婦人は、ベロベロの旦那たちを担ぐように連れてその場を去ってゆくのであった。

「私たちもおいとましましょう」

そういつて老人を連れ二人の中華美人も会釈をする。

女性陣全員が、全く酔っているように見えないのが恐ろしい。

まるで風のように去っていた人たち。

僕の両脇で小さくてを振る娘達や息子を残して。

衝撃的な昨夜から、というか三時間ほどしか経っていないにもかかわらず、いつの間にか我が家に集まるご家族様御一行。

黄家の皆様は、極めてラフな着こなし。

モイシヤン・リン両家はシックな着こなし。

まあ、普段着、というよりも我が家の格式にあわせていただいた格好といった感じだろうか。

が、皆がみんな今に集まって、談笑しているというのはどういうことだろうか。

我が家にイブもレンファもおとまりしていることはバレバレで、そのことを責めに来ているわけではないらしいし、女装をさせられた黄のことで抗議にきているわけでもなさそうだ。

さくつと作った大和粥を、皆でおいしそうに啜っているところを見れば、朝食をたかりに來ただけという見解も無いわけではない。

ただ全員に共通なのは、この場にいることを極めて当然かのような雰囲気醸し出している事だろう。

まるで東京の大家族か、異邦人長屋といったところだろうか。

いつの間にか現れた清音センセと共に、どこから取り出したか缶ビールで乾杯などを始めていたりするのが更なる恐怖を感じる。

この女教師、人数が集まると宴会を始めおって。
不埒な。

『それでは、皆さんのであいとこれからをいわいましてえ』

『乾杯！！』

それは凱旋休暇中続く、悪夢のような宴会の始まりであった。
二度と里帰りはせんと、思わず誓う僕だった。

第三話 梅雨

学生寮に奇妙な噂が流れたのは、凱旋休暇の余韻も終わりつつある初夏のことだった。

梅雨が明けたからといって、そうそう暑くはならない井川の町に、一足早い幽霊が出現するというのだ。

出身の民族や国家がバラバラな国連学園内で、統一的な見解の幽霊が出たといわれるのだから、かなりポピュラーなイメージだと思う。

そんな話をチームに持ち込んだのは、広報部の田所「洋行さん。チームのほとんどがレクリエーション室で物好きな事に、わざわざ浴衣姿に着替えて「温泉卓球」を競っていたときのことだった。浴衣のマークは、ちゃんとUN印だったりする。

「で、詰まる所、ヨーコはどうしたいんだ・・・いつ！」

入魂のスマッシュを打ち込むマクドナルド「尼崎の神経は、正面の黄に向けられていた。

「ん。」

なんの気負いも無く返す黄。

すべての衝撃を吸収したかのような、ゆったりとした返球に、マツクはタイミングをずらし空振る。

「おっし、これで黄の優勝！」

「流石は中国出身！！」「でも、リヨウはぼろ負けだったぞ。」「

リヨウは日本人。」「ああ。」

わーと盛り上がる中、緒戦敗退をした洋行さんは、ちよつと大きな声で言う。

「真面目に聞いてくれれば。」

ふと、皆の視線が洋行さんに行く。

「だから、ヨーコはどうしたいんだよ。」

ちよつと荒々しく「」が声を上げる。

「噂は知ってる。銀髪で真つ白な肌の何者かが、夜の学園を徘徊しているって奴だろ?」「おうおう、そう言えば、最近夜のデートをしている奴等の後ろから現れては、何やら呟いて去って行くって奴だろ?」「え?俺の聞いた話じゃあ、木にへばりついて男子寮に向って吠えているって話だぜ。」「いやいや、俺の聞いた話では、夜散歩している男子生徒の背後から抱きすくめる、連続痴漢幽霊だと言う話が……」「美人だったら嬉しいなあ」「幽霊って、男だって話しだぜ。」「げえ、幽霊までゲイなのか、この学園は」

喧々囂々と、どうでも言い話を続けているのも当然。

開けたと発表があつた割には、いまだ梅雨の気配を残した天気が続いており、皆ストレスが溜まっているのだった。

程度よく降る雨を喜んでいたのは初めのうちで、いまでは雨への意識が悪くなっているとか。僕などは結構雨が好きで、音が吸われて行く感覚がたまらないのだけでも。

半ば意地になって話していた皆が、再び洋行さんの方を向く。何となく目が血走っているような気がする。

「で、ヨーコ。どうしたいんだい？」

優しく聞いているが、結構雰囲気はささくれ立っていた。

「いや・・・その・・・、その幽霊を見物に行かないかな、と・・・」

消え去りそうな声の洋行さんに、皆は答えた。

「よっし！ 面白そうだ！！」

要するに、みんな閑なのだ。

早速車座になろうとするチームであった。

いざ行こうかと言う話になったその時に、単に幽霊を見に行くと
言うのでは面白くない、と言い出したのはベルナルド。

母国では有名なサイ・ファイファンだったというのはなしだ。
ではどうするかと言うと・・・。

「なにになにい？ 幽霊の正体を見極め、科学的な立証の足がかりに
する、だと？」

ずいぶん説明的な台詞だったが、JJも短時間に用意された計画
書を読んだだけなので当然だろう。

その計画書には、使用器材と仮受け先・校内使用許可証の申請・
消耗品の入手先・更に言えば映像化して学園祭への出展まで書かれ
ていた。

作戦についても詳細なプランが、5・6通り作成されており、な

んとも手回しの良い事だ。

「で、この作戦計画書にある『図A（確定）』と『図B・C（交渉中）』っていうのは誰のことだい？」

思わず僕はそう声を上げると、ベルナルドは嫌な笑いをした。

「図A（確定）は当然リヨウだな。」

さも当然そうなその言葉に、ちよつと僕もむつとする。

「何で当然なんだよ。」と間髪入れずに切り返す僕だったが、周囲の皆は肯いていた。

「で、リヨウが図になれば、必ずOKが貰える人が二人。実はもう連絡済みなんだ。」

と、ベルナルドがレクリエーション室の入り口を開けると、そこには無心にジャンケンをしているイブとレンファの姿があった。

「な・・・、なにしてるのかなあ、二人ともお。」

思わず呟く僕に、瞬間の勝利を得たレンファが微笑む。

「もちろん、こんな面白いことに加わらない手はないわ。」

悔しげに、自分の出した「チョキ」を見つめるイブも言う。

「今度は私たちも呼んでくれるんでしょ？ チームだし。」

自らの手を見つめる美少女二人を加えて、作戦会議が深く行われ

んとしていた。

「こんにちは、サーモグラフィーを借りに来ましたあー。」

「ちわー、録画デッキを拝借しますう。」

「どもー、紫外線投射機を拝借します。」

「学園長からの許可を取り付けました、メインホストマシンへの直接回線をお借りします。」

「あ、どもども、……ええ、そういうことで、はい、では衣装の貸し出しの件は……ああ、はいはい、勿論交換条件の件は、はい、では。」

「……はい、教授。勿論この研究結果が外に漏れることはありません。単なる応用技術としてこのマシンがお借りしたいだけで……。はあ、その辺は本人に話してみますが……。確約は出来ません。……それでも良い、と？ はあ。」

学園狭しと走り廻る男達の影が囁かれる様になったのは、作戦会議の翌日からだった。

全く事情を知らない人間から見ると、なにかまた事件が起きるのかと、期待のこもった視線を向けないではいられない。

事情を知る僕たちも、余りの大袈裟な器材群に当惑しつつも楽しんでるようだった。それは一足早い学園祭の準備のようにも感じる。

かく言う僕も、学園狭しと走り回った。

「で、これですべてだね。」

既に僕ら専用のように扱っているレクリエーションルームに、機

材を運び込んだ。

山のような器材を目の前にして、黄がそういった。

「しかし、こんなに必要なんかい？」

そういう声も聞こえないでもない。

全て学園の器材なので、生徒である僕らに使用する権利があるのであるが、山となった器材の全ての使用用途が解るかと言うと疑問だ。

手持ちのチェックリストを見てみて、実際の器材を目にしても、本当に必要なのか疑わしい。

「この、遠赤外線カメラと赤外線照射装置は余計なんじゃないのか？」

「でもでも、サーモグラフィーには出ないけれども、実像撮影されただって過去の事例もあるし。」

「じゃあ、このウイグと制服は何だ？」

「変装用だよ。」

「なんで？ 何で変装する必要があるんだ。」

「だって、レンファもリヨウもかなりの有名人だぜ。良いのかい？ 深夜のデートの噂が広まっても。」

ふつと寒気を覚えて背後を見ると、イブがニコニコとしてこちらを見ている。

ちらちらと手を振る彼女の発案らしい。

「いや、ほら、いいのかと聞かれても・・・」

「あら？ 私と噂になるのが嫌なのかしら？」

不意にぼくの後ろから抱き付いてきたレンファと、正面のイブの

視線が絡み合っていた。

「ゴシップのネタは少ないにこした事はないわ。」

「あらあら、ゴシップはいやねえ。でも真実なら歓迎よ。」

いつに無い刺の付いた言葉の応酬に、ぼくは思わず口を挟んでしまった。

「ほ・・・ほら、文化祭での発表は実名が分からない方が面白いし・・・。」

それを聞いた瞬間、二人はキョトンとした顔をしていたが、同時にイヤーな笑顔を浮かべた。

いままで反目の絡み合いだった視線は、いまや共闘の同士の視線へと変わっていた。

まさに絶体絶命の危機が口を開いた事に、僕は気付かなかった。

「いやいや、しかしこれだけの器材を、しかもただで使えるなんて、夢のような所だな、学園って。」

冷や汗を拭いつつ、僕が言うと、皆は「え？」と言う顔になった。

「な、なに？」

「ぜんぜんただじゃないってば。」

「なに？金を取られるのか？」

「そうじゃなくて、各研究室共に、器材の貸し出しの交換条件を出してきているんだよ。」

「はあ？」

あまり気にしなかったのだけれども、これだけの器材をいろんな

研究室から借りてきているのだから、それなりの条件が加わったらしい。

確かに学園生徒である僕らに器材の使用権利はあっても、優先権は研究室などが持っているのだから、完全にただと言う訳にはいかないのだろう。

色々とはかな条件だった為に、目で解るようにと書き出してみた。まず最多数だったのが、研究室へのデータ提出と器材の無事な返還。

かなりマニアックな器材が多い為に、研究室での運用例が少なく、フィールドでのデータも欲しいとのことだった。

次に多かったのは、このお祭り騒ぎに参加させると言うもの。

調整休暇も終わり、夏休みまで大したイベントが無い為か、皆暇を持て余しているのが如実に解る。しかし、無意味に人員が多くなっても、しょうが無いので、その件に関しては遠慮してもらった。

「なんだよ、この、学園祭美人コンテストへの出場依頼って言うのは？」

僕の疑問に、黄が答える。

「ああ、変装用の道具を借りた際に、どうしても頼まれた。」

「黄、おまえなあ・・・。」

「いいじゃない、絶対入賞間違い無しって身内もいるんだし。審査員も身内にいるし。」

と、黄は変装用の髪等をいじっている、イブとレンファを覗き見る。

すると二人はガッツポーズを決めて見せる。

そつえば黄も、審査員の権利を腹立たしい手段で手に入れた。

「・・・なる程な。」

「それに、今年一番間違いないのダークホースも用意しているしね。」

「だれ？ そのダークホースって。」

「秘密。」

こそそと漫才モドキの受け答えをしている所で、真つ先にコンピュータ類の接続にかかった洋行サンたちが歓声を上げた。

「オツケー！ これで学園のメインサーバーに繋がったよお。」

おおーと皆がどよめく中、リーガフがそれに近づく。

「ヨーコ、それからローカルホームページのリンクって出来る？」

「出来ますよ、簡単に。」

というわけで、進行状況についての詳しい状況について知りたいと言う申し入れについても、ホームページを開設し、随時報告と実況映像を流すことにした。

ホームページの開設については、殆ど洋行サンたちにこの場で一任してしまっている。

今回のお祭り騒ぎでメインとなっているベルナルドは、まるで授業担当教授のような厳めしさで交換条件表を見上げている。

列記された要望項目は、全部で223件。

同一傾向にある要望は一括りすることにすれば、その数は56件に減るものの、その数は馬鹿にならなかった。

「・・・次に多かつた『人員参加をさせて欲しい』『収集結果を独占させて欲しい』『@@を通常学科終了後に引き渡せ』等の要求は全て突っぱねました。」

言葉を引き継いだのはリーガフ。

物静かな彼は、かなりサイファイに強いことが今回発覚。

やはり理系文系問わず、SFって共通趣味なんだなあ。

更に事務能力・交渉能力の強力は目を見張るものがあり、今回学園の交渉窓口と丁々発止を繰り返した姿が噂になってか、「@@を通常学科終了後に引き渡せ」という要望の多くは彼に向けられたものだった。

もちろん、イブとレンファを、と言うものを抜いての話だけれども。

「で、一応、今やらないといけないお約束を先にしようよ。」

と声を掛ける僕に、ベルナルドは肯く。

「で、早急に処置すべき点は・・・。」

そういつて彼が丸をつけた項目は次の通り。

- | | | | | |
|------|---------------|--------|--------|-------|
| 1・ | アマンド研究室への人材斡旋 | 2名 | (男子希望) | 期間 |
| 一ヶ月間 | | | | |
| 2・ | 調理実習 | 学生講師依頼 | 要員 2名 | (黄+1) |
| 1日 | *3回 | | | 期間 |
| 3・ | 舞台演劇研究会への協力依頼 | 要員 6名 | (問わず) | |
| 期間 | 作業終了まで | | | |

4・デニモ研究室 収集データ又は映像の解析協力依頼 要員
2人（問わず） 期間半月

「アマンダ教授のところって事は、あれか？」

「うん、奴隷」「げー。」「でも、ちょっと興味あるなあ。」「まてまて。」

「他のものの優先順位は低く、各自授業のついで行えることなので、記憶していて下さい。」

「じゃ、至急項目の人員なんだけれども・・・」

細かい配置や人員配分が決定されていた。

で、器材の設置と交換条件の消化で忙殺されて一週間。

その間にも幽霊らしき噂が、次第に大きく聞こえるように成り、僕たちはやきもきしていた。

レクルームに特設されたサーバーにも、「はやく結果を出せ」とか「とつとと幽霊を見せろ」だのメールが届くようになってきた。そんなこんな週末、どうにか全員の動きが取れるようになり、いざ幽霊見物とあいなったのだ。

「でもさあ、ホームカメラ程度で済ませれば、なんのバーターも要らなかったんだけれどもなあ。」と漏らす僕に、ベルナルドとリーガフは「しまった、気付かれた」と言う顔をして見せやがった

やられた、そんな気分では本番を迎えた。

長雨の中日のように晴れた夜空が広がっている。
僕とレンファは、変装をして学園の道を歩いていた。

ベルナルド曰く、「リョウ、お前は妙に有名だから、変装が必要だ。勿論レンファも。」との話だったけれども、なぜ「この」変装が必要なのかの説明にはなっていない気もする。

そつと僕に耳打ちするのは黄。

「外野が一杯いるんだ、変な噂も立ち易い。気をつけるに越したことはない。」

「と、言うことで、こういう事になっている訳か。」

小さく呟くように僕は言った。

「ん、何か言った？」

長い髪の毛をあつさりと後ろでまとめ、学園の標準男子制服を身に纏ったレンファが僕を覗き込む。

覗き込まれた僕は、困った顔で彼女を見つめ返す。

「金髪ロング、青い瞳の美少女が、そんな顔をしないの。」

苦笑にしても可愛い顔は、多分暗がりでも男には見えないだろうと言うことで、イブ苦心のメイクによって端整な顔立ちの中性人間となった。

「後ろ髪を垂らすだけの、端正な顔つきの美少年は、そんな女言葉はつかわないよ。」

そう僕は今、金髪ロングのウィグを付けさせられ、カラーコンタクトを付けさせられ、学園標準の女子制服を着せられていた。

個人的には、どんなに控えめにも女の子に見える筈も無いと思うのに、なぜかチームの連中には「これならいける」と好評だった。

イブとレンファなど、調子に乗って化粧もしようと言い出した所で、とつとレンファの腕を引いて外に出てきた。

恰好の関係上から、僕の方からレンファに腕を絡ませている。

「ねえ、出るのってこの辺だって話だったっけ？」

周りに聞こえないように彼女が呟く。

一応、手元のオンエアースイッチを入れていないので音声は向こうに伝わっていないが、僕らには集音用のピンマイクは付いているし、校舎の各所から可動式の遠隔カメラでこちらを見られているので、実際には内緒話など存在しない。

「うん、このへんの・・・あのベンチにいた時に出たって噂が一番多い。」

「じゃ、ベンチにすわりましょ。」

組まれた腕ごと僕を引っ張って、二人でベンチに座る。

目の前の夜空に月が浮かび、煌煌と大地を照らしている。

「これだけ月明かりがあれば、本でも読めそう。」

呟き身を寄せるレンファ。

ドキマギとしている僕の耳に、彼女は囁く。

「・・・もう、もっと擦り寄るの。今は熱々のカップルなんだから。」

ぐつと抱き寄せられ、更に僕は高まっていた。

そんな事を言われても、この状況で身動きが出来るのだろうか？
僕的には出来ない。

「・・・なるほど、内気な女の子って訳ね。じゃ、私は・・・」

ぐぐつと僕を自分に向き直らせて、レンファは顔を寄せる。

「ちょっと強引で、積極的な男の子ってことで・・・。」

「ちょ、ちょ、ちょっと・・・、いや、ほら、さあ・・・皆見てるぞ。」

「だめだめ、役に入りきらないと。・・・いまは熱々カップルですよ？」

黒い潤んだ瞳が閉じられる。

ゆつくりと近づく彼女から、えもゆわれぬ良い香りが漂い感じる。ああ、駄目だ、と何となく思っている所で僕の体は、ぐいつと後ろに引つ張られた。

力強い勢いに、思わずそちらを向くと、幽鬼の如くの雰囲気の方が立っていた。

銀髪で真っ白な肌のその男は、げっそりと頬のこけた顔で、こちらに向って何か呟いている。

メインのビデオカメラで監視をしていた人間たちが色めき立つ。

「で、出たぞ！」

レンファとリヨウを監視していた部屋で、ベルナルドは吠えた。今まで休眠中だった器材たちは、急激に光を取り戻し、色艶やかな記録を吐き出しはじめた。

「電磁捕縛機、始動。」

「なんじゃそりゃ？」

「オオギシ教授の『光線質量化理論』の応用。」

「・・・物質変換？」

「ちやうちやう、光線にエネルギー弾性を持たせるだけ。」

「なるほど」

何かなるほどなのかは深く追求出来ない話であった。

6台のビデオカメラ・3台のサーモグラフィー・一台のアクティブパッシブソナーが、一斉にデータを吐き出し始め、カメラからの映像をプロセッサに同時処理させ、遠赤外線カメラの映像が、オーバーラップする。

ディスプレイの表示に「オンエア」というサインが追加された。

「声拾ってるぞ、・・・肉声っぱいな。」

幽霊がどんな形でコミュニケーションを取るのか、わからなかったので、レーザー監視から電波共振等で、あらゆる監視をしていた。

「フレーム映像、出た。各カメラ正常、サーモグラフィー正常、アクティブソナーモニター正常、処理映像、でる。」

リーガフの言葉とともに、プロジェクターへ再現ポリゴン画像が投射される。

いままでワイヤーフレームによる概念図だった映像に、各撮影要素が肉付けされる。

「電磁・温度・超音波、共に実在の存在であることをしましています。」

学園のホスト経由で渡ったデータを見て、多くの研究室が失望のため息を吐いた。

しかし映像の受像は止まらないし、アクセス数はうなぎ上りだった。

「どうやら、話を聞きつけた暇人が、直接アクセスしているみたいね。」

ネットの管制をしていたイブは、ため息交じりである。それだけ皆、閑なのだろう、と。

「熱源分布パターン、人間と酷似している。」

「むー、類人猿の犯行ではない訳だな。」

「・・・だれがそんな事を言い出したんだ？」

「人類学のテルサルアー教授。」

そんな馬鹿な会話の中で、集音機をいじっていた洋行さんが声を上げる。

「・・・声・・・、音声取れた、声が出るぞ！」

一時的にデジタルサンプリングされた声が、徐々にアナログ音声に復元されてゆく。

「・・・あれ？」

モニターを見ていた黄は、首をかしげた。

「・・・似ている。」

呟く男の声は掠れていた。

憑かれたように熱に浮かされていて、それでいて絶望したような声だった。

「その顔を、良く見せてくれ・・・」

ゆらりと近づき、僕の顔を「つい」と上に向かせる。

ひび割れた唇から、うめきとも唸りとも判断出来ない音が漏れ、僕の顔に当てられた手に熱が帯びる。

一瞬の危険を感じた僕は、レンファの手を引き、ぱつと離れた。5歩ほど離れた位置で、思わずレンファを抱きしめるよう立っていると、それは幽鬼のようにゆらりと再び近づこうとした。

病的に白い肌のそれは、何とはなしに赤味がかかっている。

ぼくの中で、なにか嫌なことを思い出しそうになるのが解る。

僕は、その記憶を思い出そうとしたが、駄目だった。

絶対に思い出したいくない事だと、絶叫にも近い声で頭が否定している。

記憶の奥底に、嚴重な封印でロックされている。

「サンプリング成功、照合結果出る！」

取得音声から、過去10年間にわたるデータを解析し、誰に相当する声なのかと、彼らは調べていた。

少なくとも20を超える学園法に引っかかる行為だったが、メ

インホストサーバーを使用する際に学園長からのお墨付きを貰っているので問題はないだろう。

しかしなぜ学園長は彼らのようなルーキーに、そんな事を許可したのか分らない。

もしかすると、誰かに弱みでもあるのかもしれない、と田所洋行は思った。

刻、一刻とデータ検索が為されている時、ホームページ用回線維持機が悲鳴を上げはじめた。

「だめ。回線がパンクする！」

イブは管制用サーバーを、目にも止まらぬ勢いで操作始めた。

「イブ、回線に制限を！」

「やってるわ！」

リーガフとイブは、まるで喧嘩のような勢いでサーバーに向き合った。

周囲の注目は、メインプロジェクターの検索待ちの画面と、サーバー操作をしているイブとリーガフに注がれていた。

息詰まる数秒の後に、悲鳴が上がる。

「駄目、学園のメインホストが落ちる！」

ホームページ用サーバーを通して、学園メインホストへつなぐ回線の増加のため、プロキシとなっていた回線維持機が悲鳴を上げていた。

ホストコンピュータからの検索結果が表示されようとしたとき、イブはホームページの回線を一気に落とす。

「回線オーバーよ。これ以上は学園ホストがダウンしちゃう！」

必死の操作の中、演算結果が確定され、中央のプロジェクターからの表示に声が上がる。

恐ろしいまでのデジャヴに、背筋が寒くなる。

そう、遠い記憶の奥底にしまわれた、忌まわしい思いでが引き出されそうになる。

いつか、いつだったか、こんな風に追いつめられたことがある、そう感じた。

僕はじりじりと後退しようとしていたものの、がっちりと僕を抱きしめるレンファのからだは動こうとしていなかった。

「レンファ」

僕の呼びかけに、彼女は軽く嫌々をするように首を振る。

「レンファ！」

僕の強い呼びかけにも、びくともしない。

異常な状況に体が麻痺しているのかもしれない。

意外な弱しさを垣間見た瞬間だったが、そんな事に気を使っている時ではない。

ゆったりと、ゆらゆらと近づいて来る相手が、あと2・3歩という位置に来た瞬間、僕は根性を決めた。

「レンファ、じっとしてて。」

レンファを抱きかかえる左手に力を入れ、抱き寄せるとともに体を反転。

一瞬相手には、僕が彼女を抱えあげて逃げるように見えただろう。大きく前に出たそれにタイミングを合せ、僕は空いている右手を拳にして繰り出した。

実際にはほんの一瞬のことなのに、拳が相手を捕らえる一撃までが、酷く長く感じられた。

バーちゃんの教えに忠実なタイミングで、十分に体重と腰の回転が頂点に達し、ヒットの瞬間に最大のインパクトを与えるべき拳が最後の瞬間を迎えようとした。

拳の一部が正面の目標にめり込んだその時、相手が誰であるかを本能的に知った。

「風御門先輩？」

バキッ！！！！

室内で皆が叫んだ。

「Mr・風御門！？」

僕の拳が顔面の強襲。

鈍い音とともにゆっくりと崩れ落ちるその顔は、かなりヤバイ感じにやつれて変貌しているものの、風御門先輩のものだった。

艶やかだった銀髪は、白髪といってもおかしくないような色合いに変化しているのが見取れたのだった。

翌日、雨吹雪の中のような抗議の中、全データを集計した数枚のDVD・RAMを学園長に提出し、僕は速攻で器材を返しにまわった。

殆どの所へ情報公開を引き換えに機材を借りたのだから、抗議も来ようと言ったものだったが、学園長直々の「不問に致せ」との書状を手にしていたので、大してトラブルはなかった。

ぎりぎりまで映像公開をしていたくせに、一番良い所で回線切断などと言う暴挙に出た僕らに対して「やらせ」だの「いかさま」だの悪評が付いてまわったが、どうしようもない。

あらゆる場所で、色々と聞かれたのだが、全て喋れませんの一点張り。

僕らですらも、他言無用の御達しを学園長から受けているんだから。

彼らは重要なデータを隠匿していると言う講義の声をあげる研究室もあった。

学園長の一喝のよって吹き飛ばされてしまったのは言うまでも無い話だが、後日そのときの学園長の話を聞く機会があった。

「研究や資料は総合的に処理されるものだろう。ただし、このデータは君達にはまだ早い。いずれ公開の機会が来たら、総合ライブラリーに登録することしよう。」

いずればらすと言うのだろうか？

その時が来ない事を祈るばかりだ。

あれから二週間。

沈静化した騒ぎの中、思い出したように「交換条件」盾にとられ、僕と黄は料理教室とやらをやらされている。

本格中華な黄は、見事な手さばきで料理を仕上げてゆき、僕はそれを解説すると言う段取りになっていた。

「ソメノスケ・ソメタロウだな。」という独り言は、誰にも聞こえなかったようだ。

そんな時間の合間を縫って、僕らは人っ子一人居ない屋上へ来ていた。

「なあ、リヨウ。実際の所、どうだったんだ？」

屋上で呟くように言った。

「ああ？ 風御門先輩のこと？」

「そ。」

「どうやら、どんな名医にも治せない病気らしい。」

「？ そんな難病なのか？」

「ああ、少なくとも、現代医学の結集すれば治る可能性も無い訳ではないって言う奴。」「げ、病名は？」

「恋の病」

「.....」

そう、誰あろう風御門先輩は、誰だか知らない誰かに恋焦がれる

ばかりに夢遊病となり、最近夜の校舎内をうろついていたと言っただ。

現在、本人に許可を受けた上で、学園側が逆行催眠によって証言を取っている。

「じゃあ、Mr・風御門はリョウに恋するあまりに、あんななっちゃたのか？」

思わずむせ込む僕に、黄はたたみかける。

「美しさは罪だな、リョウ。」

「ば、馬鹿者！ 風御門先輩は、休み明けにノーマル宣言をしただらう！」

そう、調整休暇が明けてすぐ、風御門先輩は全校に向けて「非男色」宣言を発した。

今まで付き合いの有った全ての愛人に別れを告げ、想い人に全てをさげると言うのだ。

休み中に何があったかは知らないが、少数の男子生徒の悲しみをよそに、本気で彼は禁欲生活に入ってしまった。

毎朝毎夜の礼拝はかかさず、困っている人には声を掛け、そしてかつての同好のよしみには、異性の素晴らしさとその想いの純粹さを説いてまわっていた。

「少なくとも、あれは本気だな。 休み中に誰が落したのかは知らないけれども。」

料理教室で残った人参をかじりながら、僕は言った。

「ま、彼は本当だったんだろうけれども、本能がそれに追従しなか

「たつて訳なんだろうねえ。」

ふう、と黄がため息を吐く。

「どうした、黄？」

「あのなあ、リヨウ。実はその恋の病の相手について心当たりがあるんだけど……。」

そう言つて、おずおずと黄はMDを差し出した。

「これは？」

「Mrが呟いていた台詞の解析結果。」

「げ、それつて学長命令で公開禁止になつたデータじゃあ……。」

「マスターからも削除してあるよ、内容が内容だしね。」

「げえ……。」

何ともいえない話の展開に、うめき声をあげながら、僕はそのMDを手持ちのプレーヤーで再生してみた。

その瞬間、心底うめき声が漏れる。

「うげえ……。」

この内容については封印しようと心底思った。

間違い無く、彼の呼んでいる相手に心当たりがあつたからだ。

手っ取り早くそのトラックの消去を操作する僕だった。

「で、どうする、リヨウコさん？」

「黙れええええええええええ！」

軽く黄にボディーブローを決め立ち上がると、黄もそれに続く。

「そうそう、まだ罪な事があるぞ。」
「・・・あ？」

かなり不機嫌な顔をしたままで黄を見たが、彼は全く答えていないようだった。

「あの後レンファに、一緒に居た人間について問い合わせが殺到しているそうだ。」

思わず顔を顰めた僕に、黄は畳み掛けるように続ける。

「かの学園トップクラスの美少女コンビの イブとレンファに迫るクオリティーの美少女は誰か！ ってね。」

「黄、きさまぁー！！！」

「きゃー、リヨウに襲われるうー。」

僕は今日始めて、以前黄が言ったダークホースの意味を知った。
黄め、この世に生まれてこなかった方が良かったという目にあわせてやる！

第四話 夏休み

第一章

静けさが学園を占めている。

営業時間の殆どを混乱と喧騒に支配されていた筈の中央食堂にすら、人の影は疎らだ。

学生寮の大半の部屋の鍵が閉められ、多くの人が今は居ない。

五月の調整休暇の時とは違って、夏期休暇は多くの学生達が帰省している。

主無き学生寮、生徒無き学園校舎、夏の暑い日差しの中で、薄ら寒いものを感じないでもない。

とは言え、日中の学園を歩いていると、薄らでも寒い思いが出来るかと言うと、そうでもなかったりする。

殆どのエアコンが止まっているので、暑いものなのって。

そんな茹だる校舎を、僕は一人歩いていた。

いつも一緒の黄は、さすがに里からの帰省命令が出てしまい香港の実家に帰っている。一族を挙げての凱旋祝いとなることとの事。やつの一族って、すごそうだなあ。

イブとレンファも折角夏期休暇を取った両親を思いやり、一時帰国の途についている。

双方ともに「一緒に行こう」と、かなり強引な誘いを展開したものの、僕の意志が強いの見取ったらしく、渋々各々の帰省となった。

正直な話、調整休暇で世話になったからと言う彼女達の誘いに乗りかかったものの、少々気が引ける理由があったもので勘弁してもらった。

他のチームメイトも同様に帰省や旅行にでている。

そういう訳で僕らのチームで学園にいるのは僕だけとなった。

入学から今まで、殆ど独りで過ごした事のない学園生活だったの
で、何となくというか、かなり違和感の在る日々に思える。

いつでも寄り添うように黄がいたし、授業や放課後の合間にイブ
やレンファがいつもいた。

寮やいつもの店では、」」達がいたし。

「なんか一人って閑かもなあ。」

こんな独り言も身についてしまった。

しかし、こんな独り言も英語で喋るようになっていたあたり、自
分の順応性の高さを感じないでもない。

「ん、少年、また閑か？」

いつのまにか管理塔に入っていた僕の背後から声を掛ける人が一
人。

振り返らずとも誰だか知れる。

なにかとここ数日の間、僕の所在を突き止めては自分の研究室で
の研究の手伝いをさせている妙齢の天才女性教授に違いない。

「……なんで僕のいる位置が分かるんでしょうねえ、アマンダ
教授。……って！」

振り返った先に居たのは、カラフルな下着姿の上に白衣を羽織っ
たアマンダ教授だった！

思わず飛びすさった僕を見て、彼女はケタケタと笑っていた。

「なに驚いてる、水着だ、水着。」

言われてみれば、カリブカラーのビキニタイプに見えない事も無

い。

しかし、仮にも教職にあらうと人が・・・と言おうとした所で、彼女は僕を小脇に抱えてズルズルと引きずり出す。

「ち・・・乳が、みつ・・・密着つ・・・！」

何だか良く分からない悲鳴を上げる僕を、アマンド教授は軽やかな笑いとともに引きずって行った。

「嬉しかろう、少年！」

誰かとキャラがかぶってるなあ。

等と言っているうちに着いたのは、ここ最近引つ張り込まれていたアマンド教授の研究室・・・ではなかった。

「で、やってきました屋外プール。」

誰言う訳でもなく、僕は呟いた。

見渡すプールは、100×100mという強大な屋外プールであり、現在の状況は男にとつてのパラダイスである。

ビキニやワンピースの水着を身につけた女生徒たちが、女生徒だけが冷たげなプールを楽しんでいる。

むさい男連中はおらず、どちらを向いても、女女女女女おんなオンナ。

その殆どがアマンド研究室の人間である。

僕を抱えてきたアマンド教授は、既に白衣を脱ぎ捨てて、今すぐにもプールに攻め込まんとしている所だったので、一応聞いてみた。

「・・・僕、水着無いんですけれども。」

するとにつこり笑った教授は、ちょいちょいと手招きして見せる。そこに耳を寄せると、さも面白そうにこう言った。

「今日、ここでボーイ代わりをすれば、例のバーター帳消しにしてやるぞ、どうだ？」

一にも無く、僕はこのプール唯ひとりのボーイをする事となった。

灼熱の太陽の下、プールサイドのギャリソン。

思いの外、死にそうになった事は想像に難くない。

とはいえ十分な見返りと報酬があるのだから、頑張るほかなからう。

小麦色の肌をした女性の間をゆるゆる歩く炎天下の僕だった。

日も落ちたプールサイドで、僕は一息ついていた。

研究室の女性陣は既に研究室に戻り、僕はその後片付けを仰せつかった。

粗方の道具を片づけ終わった僕は、一人で座り込み、そして寝転がる。

昼間の日差しで暖まったプールサイド、薄暗い星空、深いため息が僕から漏れる。

「風邪ひくぞ、少年。」

水着から普段着に着替えたアマンダ教授が、覗き込むように現れ

た。

「見えますよ、スカートの中身」

真っ黒で、すけすけで、なんか黒なのか肌色なのか分からない・
・、やめよう、詳しく形容するとまずい気がする。

「ん、見せる下着してるからOKだ。」

そっいつ問題じゃあ・・・と体を起こすと、その横に教授も座った。

何かを言おうかと思った僕も、何を言って良いか解らず、黙り込む。

「今日は済まなかったな、うちのガス抜きに付き合ってもらって。」

まっすぐ明後日の方を向いたままで教授は言った。

「何言ってるんですか、こっちも楽しませてもらいましたし、その上バーターがチャラだって言っんですから、こちらの方が申し訳ないぐらいですよ。」

肩を竦める僕に教授は軽く苦笑する。そっぽを向いたままで。

「少年、・・・やっぱりいいなあ。」

「何が、です？」

「いや・・・なに、な。」

くつと振り向いた教授の瞳は何か言いたげだった。

「・・・ちよつと聞きたい事があるのだが、いいかな？」
「ええ、何なりと。」

ちよつと考えた風の教授は、意を決したように言葉を紡ぐ。

「しよ、少年は・・・いや、リヨウ＝イズミは、イブとレンファを二股にかけていると言う噂が有るが、本当か？」

ぶつ。

思わずむせ込んだ僕は、涙目で教授を見あげると、彼女はなにやら恥ずかしげだった。

「いや、・・・うちの研究室の娘たちがぜひとも確認して欲しいと、そういうもので、な。」

「二股だなんて、・・・一切有りません、事実無根です！」

とはいえ、二人にかなり引かれているのは事実。
が、二股はしていない。今現在で言えば、真実ではない。
だって、二人と付き合っているわけではないもの。

「じゃあ、どちらかと付き合っているのか？」

「親しい友人です！ チームですってば。」

そう、今は。

そうか、と呟いた教授は、なぜか嬉しげだった。

「どうしましたか？」

「い・・・いや、その、なんだ、うちの・・・そう、うちの研究室の娘たちが、大層気にしていてな、うんうん、いやーそうか、フリーか。」

何となく赤くなった教授は、良かった良かったといいながら、その場を去るのだった。

「アマンダ教授って、身内思いなんだなあ。」

僕の呟きと共に一風が吹き抜ける。

火照った肌には気持ち良かった。

アマンダ教授のバーターが終了した僕のは、実のところ夏休みの予定を失っていた。

実際、彼女のところのバーターが夏休み中続くと思っていたからだ。

チーム連中にもそう言う話をしていたし、この期間に消化できるなら御の字だから。

学園内をフラフラしていると、意味もなくアマンダ教授に捕まりそうだし、部屋でゴロゴロしているのにもそろそろ飽きていた。

そんななか、日課的に見ている学園NETのメールボックスにメールが届いている事に気付いた。

それは珍しく隅田の千鶴からで、暑中見舞いとその他諸々。それを読んだ僕は、急に里心が付いた。

「・・・帰って見ますか」

第二章

夏休みの殆どを、幽霊騒ぎのときに引きつけたバーター消化で費やすつもりだったのだけれども、ひよんな事でそれがクリアーでき

たので、いそいそと一人で実家に帰ってきてみた僕だった。

今回の帰郷はちーちゃんぐらいにしか教えていなかったのも、それなりに静かな帰郷かと思いきや、ホームに下りるや否や隅田組の面々が迎えに来ていたとは恐れ入った。

ほんの2・3ヶ月ぶりだっただけに感動の薄れない人達だと思う。

男衆を割って現れたちーちゃんは、調整休暇のときのように泣いてはいなかったけれども、ウルウルとした目をしていた。

当初センセとちーちゃんだけの出迎えであつたはずなのだが、センセの姿は見えない。

「んで、センセは？」

肩を竦めるちーちゃん曰く、今年の夏休みは全面的に特別講習を行うこととなり、その主任講師となつてしまったため出て来れなくなつてしまったのだそうだ。

足掛け3年と言う長い付き合いだ、そうなつてしまった経緯は我が事のようにわかる。

「オルタネーターがお釈迦になつたんでしょ？」

力なく微笑む彼女を見て正鵠をいているものと察した。

あのクラッシクカーになるまで後十数年というあの車はいつも壊れている。

簡単な部品交換やオーバーホールごときではあの車は治せないのだ。

近年では既にパーツ生産も終わつてしまつているとのこと。

どうやって修理するのだろうかと思つていたのだが、行き付けの工場で部品を図面通りに削り出すと言ひ出す始末。

「やっぱり純正パーツじゃないと。」と常日頃言っていたわりには、パーツの一部分が純正じゃないぐらいはきにならないらしい。

電装関係を全て日本製にすれば、トラブルの半分は無くなると言う風にセンセから借りた本に書いてあったのだけれども、それでも純正にこだわるのが正しいエンスウだそうだ。

とても理解しがたい感覚であるものの、それが彼女を動かす原動力となっていると思えば誰も何も言えまい。

が、その感覚を支えるのには非常に出費が嵩む。

収入の大半を車につぎ込んで入るといっても良いだろう。

そのため、僕が学園にいる間は僕の家に住んで欲しいと言う要請をしたときに本気で悩んでいたぐらいだから。

始終金銭的な渴望に苛まれている彼女は、この夏休みを車三昧でエンジョイしようとしていたにもかかわらず、自分が顧問になっている演劇部が定期公演を予定していたため休みの半분을諦め、そして残りを愛しい車の修理費を稼ぐべく特別教務手当て目当てで夏季講習を引きつけたのだろう。

そんな推理を口にする、ちーちゃんは驚いたように口を開いた。

「すっごーい、ばっちりそのまま。」

少しも外れていないのか……。そう思うと、ちょっとだけ空しかった。

直接実家に帰らずに隅田組に行くと、寝不足であることをありありと感じさせる表情のセンセが待っていた。

講習を半日でぶっちぎってきた彼女は、この後も演劇部の顧問として学校に登校しなければならぬのだと言う。

いやはや忙しいことだ。

隅田組に現れた僕を見て「ん、今回は本当に一人？」といやな質問をする程度は元気があるらしい。

「まあ、帰って早々だけれども、……組長、リョウくんお借りしますわね。」

と言うことで、センスのセカンドマシンに押し込まれた僕とちーちゃんは、一路学校に連れて行かれてしまった。

出来れば第三礼服を着替えたかったのだけれども、常軌を逸した目の色のセンスに逆らっても良いことが無いので連れて行かれるに任せることにした。

何ヶ月ぶりかの校舎は人影が無く、運動場で汗を流す陸上部やプールで騒ぐ水泳部が目につく程度だった。
夏休みってこんな感じだったんだよな、などと感傷的な気分になる。

学園は学校と言うよりも研究機関的な色あいが濃く、こういう開放的な休みは無いといっても良いだろう。学園中歩けば、何処かの研究室が夏休みを通して活動しているし、そこで活動している学生達も少なくない。

研究塔を中心に見れば、学園には休みなど無い。

そんな学園と比べると、いまの母校の姿は安らぎすら覚えるものが有る。

「さ、リョウくん。先輩として後輩達に顔見せして頂戴。」

ぐいぐいと引きずって体育館まで僕を引きこんだセンスは、舞台に座って小休止をしていた後輩達に声をかける。

「ちゅーもーく！」

ぴし！　　と宣言したセンスの周りに、わらわらと生徒が集まる集まる。

その殆どが女性生徒に見えるが、男子部員は何処に行ったのだろうか？

「先輩！」「先輩！！」と口々に集まる姿を見ると、思わず気分が戻ってきてしまう。

「や、皆の衆。元気にやつておるかね？」

思わずアマンド教授を思わせるような口調でひらひらと手を振って見せると、なんとなく氣勢があがったように見える。

でも逆に考えれば、その程度で上がって見えるほど、いままで氣勢が下がっていたと思える訳で。

その理由について思い当たるところが無かった。

「部長も今度の定期公演を見て行って下さりますよね？」

「いまの部長はミナトだろう？」

正面の少女に僕は微笑んだ。

そう、そうなのだ。

入学当初、僕は友人に名前だけでも貸してくれといわれたので入った演劇部の部長を2年間勤めざる得なかったのである。

まあ、色々あったのだ。

「でもよかった、先輩が来てくれて。」

ミナトの頬にほろりと小さな涙が伝う。

こいつはこんなことで泣くような奴じゃなかったはずなのに。

「おいおい、心の汗が出てきてるぞ？」

「…もういいかな、チズ？　もう良いよね。」

ちーちゃんを一目見た後でぶわっと大量の涙を流したミナトは、僕の腕の中に飛び込んできた。

部員達もそれをとがめる風はない。

どちらかといえば共に泣き出しそうな顔をしていた。

僕がいなくなってから何が起こったのか？

徐々に落ち着きを取り戻したミナトは真っ赤な目をしていた。

僕の知る限り、こんな目になったのは部長就任ときに責任感で目を赤くしていたときぐらいだろう。

しかし今の彼女は、その時より遥かに弱々しく頼りなさげだった。

「…だめなんです、私なんかが部長じゃあ・・・。」

搾り出すようにミナトは言ったが、その後が言葉にならなかった。一言一言いうごとに涙を流し、おえつする姿を不思議なものを見るように僕は見ていた。

このミナトと言う娘、弱らない・曲がらない・つぶれない・へこまないという何処かの筆箱のような娘だったはずなのに、今はとても弱々しい一般の少女にしか見えない。

何処をどう間違ったら、いやいや本当は別人なのかもしれないなと思うてしまう罰当たりな僕。

で、彼女の話しを整理すると、新任で派遣された教頭の圧力によって難渋をしているらしい。

演劇などは女子供のするものと男子部員を強制的に退部させ、運動系部活に投入させたり、人数が激減した演劇部に人数配当だと言

いきつて予算を無理やり削ったりとやりたい放題だという。

「そんな馬鹿なことが許されるんですか？」と聞く僕に、センセは苦笑顔で「大人の権力構造って色々有るのよ。」と言葉少なくいい、黙った。

つまり、今度の新任教頭は国家的権力構造に寄生するダニであるらしい。

そう言いきると皆下を向くしかなかった。

「なんでそんな嫌がらせを？」

「……」

押し黙る部員達の中、多分一年生であろう女の子が口を開く。

「…メヌエットのフレイバー少佐です。」

「え？」

ぼくは眉を寄せた。

メヌエットといえば演劇部オリジナルの宝塚風歌劇で、男装の女性軍人フレイバー少佐の話である。彼女は幼き頃より男性と育てられてしまったものの、自らの部下の男に女性として恋をしてしまふと言う話。そのドタバタを描いた作品で、全国大会まで行った作品だった。

「あの全国大会の時のキャストを公開しろって要求してきたので、断わったら……。」

そりゃ断わるしかない。

あのときのキャストは、女性役を含めて出演者の全て男だったの

だから。それも、男性役女性が男装しているという設置だからややこしい。

フレイバー少佐を含めて、町娘、少佐の許婚の少女、軍看護婦・
・全てが男。

当時、我が部には女性部員がいなかったために、苦肉の策として女装恋愛ラブソディーというオカマバーのようなネタで挑むこととなってしまった。

が、その緊張感が受けてか、地方予選と全国大会を勝ち抜き、優勝こそは得票的に伸び悩んだものの審査員特別賞と主演女優性を得ることとなった。

勿論少佐役の人間が。

大爆笑をした僕らだったが、流石に問題があると思い辞退することとなった。

なにせ受賞のときは本名を呼ばれるのだから。

かくして受賞主演女優不在で幕を閉めた全国大会であつたが、その後公演したという記憶はない。

「じゃ、教頭つて、キャストを知りたくつて嫌がらせしてるのかい？」

「・・・、というよりも、そのときの主演女優を個人的に紹介しろといっているのよ、あの超セクハラはゲ親父は。」

「結構有名なんです。・・・そのお、かわいい生徒のお尻をなでたり、教務指導室でセクハラしてるつて・・・。」

「そんなの、セクハラオヤジだつて教育委員会に訴えれば・・・。」

「そのセクハラオヤジ、日本国内国連学園受験生選抜委員会のメンバーズなのよ。」

こと進学をしようと言う人間、進学を考える身内が居る人間にとって日本国内国連学園受験生選抜委員会の名は絶大な威力を持つ。

国連学園に進学しなくても、国内受験をする学生達への影響力は

絶大なものがあり、彼等の審査無しにはままならないと言うものだった。

絶対的な権力者と言えるその委員になるためには、気の遠くなるほどの審査があり、とてもセクハラオヤジなんかが通れるような道のりなんかではなかったはずだ。

とはいえ、最低オヤジが己のものとは違う権力によっている事実是不変。

「つまり、権力を支えられるだけの精神的骨格がなかったのね」

其の時、僕は反射的に懐の電話を取り出した。

手元の取り出した携帯電話に向かってメールを打つ。
打ちながら小さく呟いた。

「・・・自分以上の権力に翻弄される苦しみを教えてやる。」

第三章

定期公演は三日間行われることとなったが、三日目の演目に周囲の注目は集まっていた。

「特別公演『メヌエツト』オリジナルキャスト版」

再演の要請を各所にされながらも逃げつづけた演目であった。

しかし、絶対に許せない、そんな思いが僕達オリジナルメンバーに溢れていた。

「・・・イズミ。こういう面白いことには、もっと速く呼んでくれなくちゃ。」

こんな軽口を叩くやつらであつたが、新任教頭への怒りは隠しきれるものではなかった。

そんな僕らにミナトは恥ずかしさを隠し切れないようにしていたが、おせっかいな先輩達の身勝手を許してくれる度量の大きい部長なんだと元気付けたりして見せる。

「それでさ、どうやって教頭にギャフンと言わせるんだ？」

集まつて直に聞かれたこと。

「ま、細工はりゅうりゅうってね。」

「またこいつの秘密主義が出たよ。」

そして、その細工は、細工達は公演二日目の夜、翌日の公演に備えて舞台稽古をしているところで現れた。

きらびやかな第三礼服が、体育館の入り口に集つて。

まさか、まさま……

「……まさか、チーム全員集合つて事になるとは思わなかったよ。」

学園で最も頼りにしているコミュニティー、僕らのチームがそろいぶんだ瞬間であつた。

軽い自己紹介が部員とチームの間で行われているところで、ちょいちよいと黄が僕のすそを引っ張る。

「どうだ？ 人数足りてるか？」

多すぎだ、最小限三人必要だっただけなのに。

僕は事情説明をして、非常に卑怯な手段を行うため、暇な人間を三人ほど集めて東京に来てほしいと黄にメールを打ったのだけれども、どうやら同じような文面でチーム全員にメールを転送したらしい。

「お祭騒ぎで仲間はずれにすると、最低でも卒業するまで言われるぞ。」

「いいや、卒業しても言う。」

「ああ、ここまでセコイ小悪党が見れるんだ、こんな機会を無にしないね。」

口々に彼らは僕に微笑みかける。

「どうせリョウプラス三人ってことで、例の奴を試すんだろ?」と」。

やはりこいつらチームは話が早い。

「例の奴って?」

首を傾げるレンファに、僕らは腰のサーベルを叩いて見せた。

「・・・男の子って、なんでそこまで事を荒立てたがるのかしら?」

「ま、良いんじゃないの?」

とイブも微笑んでいた。

「ええっと、何をお話ししてらっしゃるんですか?」

部員達を代表してミナトが不安げに僕に聞く。

『ないしょ』

綺麗にハモったチームの日本語だった。

公演三日目。

午後1回だけの公演には予想に反した程の量の人間が動員された。一昨年の全国大会の噂を聞いた演劇関係者、近隣の演劇部、学区が近い高校演劇部など等に加え、近所の奥様連中まで集まっているのだからたいしたものだ。

用意された椅子だけでは足りなかった為に、練習中だった陸上部の力を借りて教室の椅子をそのまま持ち込む始末だった。

それでも入りきれない人間は立ち見でもと入場し、2階展望席まで人が溢れていた。

耐えがたき熱気の中、蒸しかえる視線の中で今、幕は開いた。

劇中脂汗を流していた演劇部員達は、終了と共に行われた観客席のスタンドオベーションに感嘆の声を上げる。

「どう？　これが学生演劇よ。」

緞帳の脇でミナトの言葉に少女達はただただ頷くのであった。

1度閉まった緞帳が再びあがると、フレイバー少佐とその周囲に見慣れぬ衛士姿の人間達がいた。

彼らは一様に帯剣しており、その精巧な細工は学生製作のレベルを超えていた。

彼等の剣が一樣に抜き放たれ、天高く照らしあまねく。

その光に心奪われた観客は、その中心たるフレイバー少佐の声

に現実を感じた。

「みなさん、我らが演劇部の特別公演にいらして頂きありがとうございます。私達も後輩達の熱意に押されたとは言えこのような舞台を持てたことを大変嬉しく思います。この舞台推進の立役者となっていたのが、この学校の教頭先生でいらっしゃいます。舞台までどうぞ！」

ずっと少佐が手を差し伸べる先には、あぶらぎったはげ頭の親父がスポットライトに照らされている。

きらりと光った頭をハンカチでぬぐいながら、卑下たる笑みで壇上まで上がってきた。

少佐がにつこり微笑んで男装の麗人の絵もゆわれぬ色気を発散するさまを見た教頭は、思わず少佐の手を取り下品な笑いを浮かべる。

「こ、こうえい、光栄ですなあ。卒業生からこのようなもてなしを受けるとは、本当に光栄ですなあ。」

ぶんぶんと握手で手を振る。

「一昨年の全国大会でお見かけしたときから、心からのファンとなりましたのに、進学先では活動なさっていらっしゃらないようで・・とても残念でしたが、いや今日この日が来た事を喜ばしく思います。あとでお茶などどうですか？」

ここまでにこやかだった教頭の顔がゆがむ。

「後輩達が自由に活動できるように、お知恵を拝借したいものですな。」

ずっと教頭はキザに笑うのを見て、少佐は頬をはたく。

非常に大きな音と共に教頭の体がキリキリと舞、演台でしりもちを着く。

何が起こったのか理解していない風だった瞳に、一気に燃え上がる怒りの炎が現れる。

「な、なにをするか！ 貴様らこのようなことをしてただで済むと思うな！」

反射的に出た言葉に衛士姿の人間達が互いの剣を合わせて答える。何処かで見たような景色であると誰もが思ったに違いない。

「それは私に対して行った無礼を更に上塗りして、私に宣戦を布告すると言つことですね？」

きりりと引き締まる顔は、朝の冷気のような冷たさを新鮮さを感じさせ、観客はため息を漏らす。

「・・・くそがきども、私がどのような立場の人間かわかっていて行っているのか！」

ぐっと胸をそらすと男の胸には「UN」のマークが光り輝いている。それは日本国内国連学園受験生選抜委員会のマークだった。

「お前達はつまらん感傷で自分の人生を誤ろうとしているんだぞ、判っているのか。」

勝ち誇ったようなその顔に、一抹の不安の影がよぎる。

・・・私は何か間違っているのだろうか？ と。

今までの学生達は、このバッチの威力を知っていた。

卒業しようと退学しようとこのバッチには敬意を抱いたものだった。

しかし彼らは何故か意にも介していないではないか！
忍び寄る不安は、目の前で現実のものになった。

「かの者、我に対する非道、我が縁者に対する非道甚だしく、且つ、我自身への宣戦の布告を確認するものなり。」

浪々とよどみない言葉は英語だった。

少佐の言葉を追うように、背後の衛士も言葉を続けている。

「我らに危害を加えしものは、我が家に危害をくわえしものか？」

『「Yes！」』

「我らの家に危害をくわえしものは何者か？」

『「目の前の愚かなる者」』

「我、我らの力を持つて、目の前の愚かなる者に戦線を布告する。友よ同意せしか？」

『「Yes・Yes・Yes！」』

少佐の抜き放ちし剣に衛士たちの剣が添えられる。

照明を反射していた光が物理的な力を持つて発光したかのようにみえた。

その瞬間、教頭は全てを覚った

「国連・・・学生・・・」

がつくりと頂垂れた教頭に剣が添えられる。

「この場で完全降伏が無き場合、UN関東師団全軍をもって貴方の掃討にあたります。降伏をなさいますか？」

事切れる寸前の教頭はうわ言の様に呟く。

「ば、ばかな、こんな所に国連学生などおる訳が無い……。はったり、そうはったり決まっておる！！」

絶叫にも似た叫びは、彼らの胸に輝く校章を見て絶望へと変わる。

「現在をもつて、目の前の愚かなる者に戦線を布告する。友よ同意の声を響か……。」

そう言いかけた少佐の声を、低空進入したジェット機の爆音が切り裂く。

重低音の戦闘攻撃ヘリコプターの爆音が周囲に響く。

「ああ、貴方の返答が遅いから……。この辺は焦土と化しますねえ。」

第一声のジェットで気を失っていた教頭であった。

即日のうちに政府から僕達国連学生に和平申し入れがあった。

教頭の更迭、文部大臣の更迭等で僕らは手を打つことにした。

実際あのときは国連軍は動いておらず、正式な宣戦布告もされていなかった。

全ては効果音によるものだったのだけれども、国連学生が二桁集まっただけで、さらに戦線の布告も各かでないほどの事態ともなると政府も本腰を入れざる得ないだろう。

正直な話、私情が100%の戦闘行動だったけれども、馬鹿をやっているといつか竹箆返しが来るよと言う教訓にはなったはずだ。

ことは国連学園関連の事件と言うこともあり、完全に報道管制が引かれたものの人の口には戸を立てられる訳でもなく、じんわりと真実は浸透して行った。

なによりご近所では、あの国連学園に入学した@@さんは、女装すると凄いと言うあながちデマでは済ませられない噂が飛び交っている。

無論、僕は黙殺することになっている。

公演の後、僕の家で打ち上げとなった。

うちのチームと演劇部と、会場の手伝いをしてくれた元演劇部の男子やその所属部の人間達。それに差し入れを持ってきた隅田組の面々。

もう、調整休暇のときを超える騒々しさであつたにもかかわらず、近所から文句のひとつも来なかったのは不思議だった。

「せんぱい、ありがとうございます!」

へべれけのミナトは僕にしなだれかかってきた。既に二桁目の感謝である。

「なあミナト、ありがとうはもういいんだけど、ちょっと御願
いがあるんだ。」

「なんでるかあ?」

「化粧、落とさせてくれないかなあ?」

そう、なんと僕は会場からこっち、宴会のさなかでもフレイバー
ル少佐の化粧を落とさせてもらっていないのだ。

ちょこつとでも落そうとするとブーイングの嵐となり、何ともはやというきでいる。

勿論この時の答も・・・

「だめ！」

という僕の声が聞こえる範囲全員からの回答だった。

「こーんなに麗しい殿方の扮装なんでも、じっくり味わいたいわあ。」

と擦り寄る女性はミス・清音。

帰りに車に乗らないと行けないであろう筈なのに、べろべろに酔っ払っている状態だ。

後輩達はこの格好になれているといえはなれているので、あまりじろじろ見たりはしないが、学園のチームの連中は違った。

事あるごとに僕のほうを見てはニヤニヤしている。

マクドナルドなどは妙に赤い顔をしているが、その詳細について問い詰めるような事はしないでおうと思う僕。

終焉の無いかのように思えた酒宴も、調整休暇のときよりは短い時間で1度は御開きとなり、後輩達を帰宅させた。

そのあとはもう、学園ののり。

昨日から家に泊っているチーム連中は朝まで酒盛りをしていたようだった。

ようだったというのは何故かと言うと、僕は見事につぶれてしまったから後の事は分からなかったのだ。

自分の部屋で起きたときに、「J」とマックに添い寝されている状況であったことには驚いた。
まったく。

一癖もふた癖もある人間達を引き連れて東京見物としやれ込んだ

が、今帰りの新幹線の中では後悔しか覚えていない。

あのはげちやびんを黙らせる方法など、ほっと他に色々とおつたに違いなのに、何故皆を集めてしまったのか、そんな考えがぐるぐると回っていた。

第四話 夏休み（後書き）

いかがでしょうか？ 第四話です。

こんな感じで、一年を8～9話でまとめる予定です。

ご意見ご要望をお待ちしています。

第五話 学園祭

第一章

木曜最後の講義となる航空物理学教室で、僕は目を開けたまま意識を失っていた。

寝ていたと言うほど安らかではなかったし、気絶と言うほど壮絶ではなかったから「気を失っていた」、だ。

涎や汗をかいていなかったたので指導官にはバレなかったが、開始から終了まで身じろぎ一つしなかったと言うのだから我ながらたいしたものだと思う。

何語で書いてあるか解らない調子で自動筆記していたノートを閉じた瞬間に、僕の意識は戻ってきたようだった。

「はっ！」

気づいてみれば、JJ・マイク・ステイブ・黄の四人が僕を覗き込んでいた。

黄などは、今まさに僕をつつこうとしている。

「・・・なにかな？ 皆の衆。」

「いや、俺達は何でも無いが、リョウこそどうした？」

「何が？」

「おまえ、爆睡してただろ？ あれだけ見事なのは見たことないけれどもな。」

「・・・いやー、おはずかしい」

へらへらと笑って見せたが、皆の不信そうな視線は避けがたかった。

「悩みがあるなら話に乗るよ。」

いつの間にか現れた学年一のネゴシエーターの異名を持つリーガフは言う。

幽霊騒ぎに端を発した僕らチームの活動は、各方面に色々な波紋を呼んだ。

たとえばJJとマイクは、あのかのバーターで出向していた先の研究室での実績が評判となり、受講教務者免許の取得を勧められるようになった。受講教務者免許というのは、生徒自身が助教授資格を取って、自ら得意な分野で授業を持つことが出来るようになる免許のことで、これの取得を勧められると言うことは、未来の国連学園教授へのみちが開けた事に相違無い。

世界最高学府での研究職だ、一生ものの資格といってもいい。

洋行さんや広報部の面々は、その危機管理能力の高さから学園NETの保安部から熱いラブコールを受けているし、マックやベルナルドたちも各々の研究室からの誘いが絶えないのだと言う。

その大騒ぎ、僕も無縁ではない。

今のところ、アマンダ教授とデニモ教授のところから朝な昼なに熱烈なコンタクトがあり、深夜も関係無しで呼び出されたりもする。通い始めて知ったのだけれども、アマンダ教授とデニモ教授は犬猿の仲だという。

二人の意地がそうさせるのだろうか？ 彼らの勧誘は熾烈を極める。

他の教授からも非常に強力なオファーが有るけれども、問題はそんな事にあるのではない。断じてそんなことでは悩みはしない！
・・・逃げるかもしれないけれども。

「なあ、リヨウ。最近寝てないんじゃないか？」

その通りだ。

余りに事が大きすぎて、夜になると問題が頭の中を占有して寝て
いるところではないのだ。あまつさえ寝ていると、やってくるのだ
から。

・・・あの情景が。

「あれ」を思えば、深夜の教授達の呼び出しなど「へ」でもない。

「・・・ああ、まあ、相談できるようになったら話す。」

ぎぎぎと音がするのではないかと言う調子でうなづく僕に、「」
が余計なことを言う。

「最近、イブとレンファの仲が変なのと関係有るのか？」

ビクリとして僕は「」を見た。

「な・・・な、なんで・・・。」

「何で解るのかって？ 解らないわけ無いだろ。いつもべたべたし
ていた二人が、必ず人一人分空けて、それでも並んで歩いているん
だから。」

「・・・はあ・・・。」

がつくり肩から力が抜ける僕だった。

事の起こりは夏休みが終わるであろう三日前。

一度は東京に来て学園に帰った二人だったが、ふたたび両親の御
機嫌伺いにカナダへ行った。

で、そのカナダの別荘から帰ってきた二人を校門で出迎えた時だ

った。

黄は何か急用が有ると言う事で静岡市外に下りているので、僕一人で彼女達を迎えたのであるが、それが敗因だったのかもしれない。いつもの通りにこやかな会話の仲で、僕は彼女達の荷物を両手に持つて女子寮まで送ることにしたのだが、何処をどうなったのか彼女達が口論を始めた。

軽い口論が何時の間にか劇的なものへと変わってゆき、双方が右手を振り上げた瞬間に僕は二人に割り込んだ。

「ま、まったくまった！！　なにがどうしたか判らないけれども、上げた手を下ろしてくれ！」

しかし止まらぬ勢いは、二人の右手を僕の頬へ吸い込ませた。ばちん！と大きな音がした瞬間、二人は非常に驚いた顔をし、そして非常にうるたえたものへと変わった。

二人で何事かうわ言の様に呟いていたが、腫れ物に触れるように僕の頬に触れ何度も謝罪の言葉を口にしたが、イブもレンファも互いの事を見ようとはしていなかった。

「何してるの、二人とも。」

多少眉を寄せて僕が聞くと、二人はキッと僕を睨んだ。

「私はイブ。」「私はレンファ」

『二人ともじゃない！！』

「はあ？」

呆氣にとられる僕を後にして、二人は肩を怒らせて行ってしまった。

それから二・三週間の間、二人の間に何らかの蟠りを感じるもの

の、まるで何事も無かったかのように過ぎた。
しかし、それから六日後の夜、それは起きた。

月光明るい中庭に呼び出された僕は、二人の美少女と対峙していた。

金色の髪艶やかな美少女と、黒髪艶やかな美少女。
二人とも真剣な表情で僕を見つめていた。

「もう駄目なの。」

そう言ったのはイブだった。

「あなたに負担を掛けなくなかったから、今までどおりに出来る
と思ったから我慢してたけれども、もう駄目なの。」

さつと髪を掻き揚げたレンファは、冷たい笑顔で言った。

「イブとは、小さい頃からの親友で、何時もいつしよにいたわ。こ
れからも一緒だと思う。だからはつきりさせなくちゃいけない事があるの。」

何の事だかわからなかったが、非常に背筋が寒かった。

『あなたが好きなの。誰にも渡したくないの、共有できないの。それが例え（イブ）（レンファ）であっても。』

しんと静まり返った夜。

彼女達の言葉が木霊しているように見える。

「でも、あなたは選べないわ、私達には判っているの。たとえどち

らとも選ばないという選択が私たちを一番傷つけることであってもあなたは選べない。私達が愛したあなたの優しさは、私達が一番知っているから。」

「だから私達が決めるわ。あなたの隣に立つ女の子がどちらなのかを。」

『学園ミスコンで!!』

呆然と立ちすくむ僕を残して、二人は闇の中へと消えた。

翌日から二人は何も無かったように振舞っていたが、けっして僕の両脇に立つことは無かった。

「・・・なるほどな。」

回想を終えた僕は我にかえって驚いた。
皆がうなずいている。

そして、黄がぺらぺらと回想していた内容を話している。

「き、きさまあ!!　なぜ知っているウ!!」

締め上げられた黄は、にこにこ笑いながら言う。

「だって、あそこは俺の修練場所だよ?」

黄は家に伝わる拳法の練習を暗い時間や深夜にやっている。

「ぜ、全部聞いていたのか?」

「うん。」

「で、全部話したのか?」

「うん。」

がつくり頂垂れている僕のところ、更なる混乱が現れた

「やあ、ココだったんだね、君達。」

流れるような銀髪、女性もかくやとばかりの輪郭を持った男、風御門先輩だった。

ぽんぽんと気軽に肩をたたくMr・風御門は、片手に何かを持っていた。

「なんです、そのポスターは？」

気軽に聞くJJに、ミスターは微笑んだ。

「ああ、これは今年のミスコンの告知ポスターだよ。」

私が責任者でねえ、とかどうでも良いことをいいつつ、ざっと広げられたそれには、何故か僕の名前があった。

「・・・副賞：リヨウイズミ・・・って、こりゃ何の真似ですか？」

「え？ これ、君聞いていないのかい？」

「誰から？」

「イブとレンファ。」

僕は短距離走世界新と張れるであろう速度で教室を後にした。

行き先は、彼女達の木曜最後の授業アマンダ教授の光学映像の教室だ！！

僕が駆込むと、丁度授業が終わったところらしく、ほとんどの席が埋まっていた。

全員女性だという教室に首をめぐらせ、見つけた。教壇の一番正面で、未だ教授と何かを話している。周りからかかる声を片手でひらひらとかわして進み出ると、アマ ندا教授が僕に気づいたようだ。

「お、少年。どうした？」

にこやかな彼女を半ば無視して、僕はイブとレンファの正面に立った。

形の上でアマ ندا教授の横に立ったようになる。

「どう言っことなんだい。」

最近イブもレンファも「二人」と言われることを忌避している。

「・・・もう、ばれちゃったの？」

いたずらっ子のような笑顔でレンファは言う。

「ああ、さっき風御門先輩が教えてくれた。」

「怒ってる？」

「無茶苦茶、・・・困惑してる。」

怒っているかといわれれば怒っていないわけがないが、どちらかといえば、そう困惑しているのだ。彼女達は何を考えているのかわからなくて。

「でも、一番の手なの。・・・お願い、最後まで付き合って。」

真剣な、真摯な表情で言われて眩暈を覚えた。

「僕に何も知らせずに、僕の意見も聞かずに、僕をミスコンの景品にすることの、何処が一番の手なんだ！」

おもわず激白の僕の肩を、ちょいちょいと突つく人がいた。

「・・・待っててください。いま忙しいんです。」

しかし、それでもしつこくも止めようとしないその人。

思わず眉をひそめてそちらを向くと、満面の笑顔のアマンダ教授がいた。

「少年、その話は本当か？」

「・・・僕は承知してませんよ。」

遠からず事の肯定をしている自分に気づかない。

「・・・そうか、そうか！」

スキップでもするのではないかと言う調子で教室から出て行くアマンダ教授を、僕達は奇異の目で見つめていた。

その日のうちに告知された学園祭の目玉「学園ミスコン」（正式名称は別に有るが、こちらのほうが通りが良い。）は、大きく注目を集めることとなった。

自薦他薦を問わずと銘打たれた出場資格のほかに、優勝者への褒賞が目を引きこととなったからだ。

成績の底上げ・テストの一定量科目免除などは毎年のことらしいが、そのなかにひとときわ異彩を放つ物があつた。

「一学年 リヨウ・イズミ かの者と交際する権利を与える。」

こんな副賞に何の意味があるか知れたものじゃないけれども、一人の進退を決めようと言うのだから注目を浴びてもおかしくないだろう。

とはいえ、入学したての名も無いルーキーと交際できて何の意味もあるまい、そう思っていた。

その上で、そのように公言したところ、チームの皆から笑われてしまった。

「あのなあ、リヨウ。おまえの人氣って結構なものなんだぜ。」

「前にも言った事があつただろ？ 同じチームだって事で渡りをつけて欲しいって話しが結構有るんだって。」

「そうそう、僕もそう言う話を聞くよ。」

「僕は聞いたことが無い。」そう言う僕に、皆が失笑を浮かべる。「覚えてないの間違いだ。俺達は何度も言ってる。」

苦笑を浮かべるメンバーの中、マイクが肩をすくめる。

「そりゃ、何時でもアノ二人が引つ付いているんだ、聞こえてくるはず無いだろ。」

不意に、ここ数日の間彼女達とまともに話していないことに気づいた。

「リヨウ、今、見て来たんだけどな……」

ふらりとレクルームに入ってきた黄は、多少引きつった顔になっていた。

「あのポスター、色々追加が加わってたぞ。」

ぺらりと引つ張り出したポスターには、びつしりと新規の書きこみが加わっていた。

ルールやなにかはすっ飛ばして、全ての学園在籍者の参加を認めるという項目が目をついた。

「なにこれ？」

「ああ、これな、教授会からの横槍だ。またとない人材確保のタイミングと見た教授会は、自分のところが推薦する参加者が優勝したら、リヨウの人事権をよこせと言ってきたんだ。」

「なんだとおう！」

「学園も主催側了承された。」

「ぎゃー!!」

ほとんど倒れる寸前の僕に、皆の同情の視線が集まる。

「あ、なんか小さくうちのチームのことが書いてある。」

ベルナルドは声をあげて、書いてある名前を読み上げる。

うちのチーム全員の名前だ。

「・・・以上のものの人事権も譲渡されるウ!!!!!!」

「な・・・なんだとお!」「う、うそだろお!」「うひゃー、他人事じゃねー!!」

いままで対岸の火だと高をくくっていた周囲の仲間達は、本気で

度肝を抜かれた。

このイベントの後押しをしている影の存在こそ学園長なので、これを逃れることは出来ない。逃れるとしては学園を辞めるほか無い。学園長こそ、この学園の法律なのだから。

「どうするよ」「うひゃー、どうしようもないじゃん!」「せめてイブかレンファに優勝してもらうしか……。」

そんな事を相談している皆に、黄は暗い笑みを浮かべて発言をした。

「……そんなまどろっこしい事をしなくても、確実な手があるさ。」

「黄、それって……。」

「うちの、最強のダークホースを出すんだよ。」

「……。」

皆の笑顔が暗いものとなって伝播した。

「なるほど」

「おーい、何の話した?」

僕は一人取り残されていた。

第二章

副賞の効果がどの程度有ったのかはわからない。

ただ、開催より十数年のなかで一番の応募があったことは間違いないという。

イブもレンファも何故そんな事をしたのだろう、そんな悩みで頭が一杯になっているところに、僕宛の国際電話が入る。

映像付きの高価な回線だったので、誰かといぶかしんでいると、直に知れた。

「はい、元気だったかしら？」「あら、疲れてるみたいね？」

イブとレンファの母親コンビ、イブリン＆ランファの熟女艶姿が画面に浮かぶ。

「・・・・はあ。まあ、元気です。」

「うそおっしゃい。お宅の娘達に振り回されています、って顔に書いてあるわよ。」

反射的に顔に片手を置いてしまい赤面する。

「やっぱり・・・・。ごめんなさいね。」

ほほえましいばかりの笑顔の彼女達から、なんとなく何かいいたげな雰囲気を感じた。

それを口にすると、彼女達はばつの悪そうに頬をかいたりする。

「あのね、聞いちゃったのよ、娘達から。」

「・・・・何をです？」

「リョウくんを二人で取り合うつて。勝負するって。」

がつくりと肩を落とす僕に、彼女達の言葉は続く。

「それもこれも、うちの馬鹿亭主どもが原因なのよ。」

「夏休みに帰ってきたときに、なぜ君が一緒じゃないのかって話しになってね、ちよっと揉めたのよ。亭主と娘達が。」

なぜつていえば、あの第三礼服を着たくない上に、揉め事を避けなかったに過ぎない。

それを口にしてみたら、彼女達も苦笑した。

「まあ、そんな事だと思っていたわ。でも、亭主達はそう思わなかったらしくて、色々と喧嘩しているうちに、どちらの娘がリヨウくんを落とすかという話になっちゃったのよ。」

「その話しがアノ子達に伝染しちゃったのねえ。」

大きなため息が僕から漏れる。

「でもね、さつさとリヨウくんがどちらかを選べば話はつくのよ、今決めない？」

「いまきめられれば、魅力的な母親に「ママ」って呼ぶ権利を与えるわよ？」

いたずらっぽく微笑む二人に、僕は更に大きなため息をついた。話しはそれだけでは終わらなくなってしまうている。

既に僕との交際やチームの人事権を賭けた、学園全体を巻き込んだ大騒ぎになりつつあるのだ。

そのことを伝えると、暫く爆笑の末に真顔になった。

「で、恋愛はバトルロイヤル突入、人事権は風まかせって状態をどうするの？」

「まさか嵐が終わるまで首をすくめて待っていようと言うわけじゃないわよね？」

そう、まさにそう言うわけではない。

全ては僕以外が納得しているわけの手段が講じられることとなっ

た。

「まさか、自分で出場しようって訳じゃないでしょうねえ？」

ニヤニヤ笑いの彼女達を、思わず僕は見つめた。

「やっぱり、そう言うことなのね。」

「多分そうだと思っていたのよ。あれだけ綺麗になれば優勝も出来るはずですねえ。」

「で、人事権は自らのものに。そして恋愛も元の木阿弥に言う計画でしょ？」

僕は画面を正面に半ば倒れてしまった。
ばればれである。

観念したと言う意味に両手を上げると、二人はケタケタと笑い声を上げた。

「じゃ、私達も協力できそうね。」

「へ？」

「へ？ じゃないわよ。女装用の衣装とか化粧道具はどうするつもりだったの？」

「・・・あ。」

「まさか、うちの娘達からは借りられないでしょう。だから学園祭のときに持って行ってあげる。」

「・・・え、いらっしやるんですか？」

「勿論よお、絶対に遊びに行くって決めてたんだから。」

「綺麗な洋服を用意していくから、楽しみにしててね。」

「あ、あの！」

「じゃあねー。」

真っ暗になつら画面を見ながら、際限無く無限に落ち込みそうになる自分を奮起してみた。少なくとも、完全に忘れ去っていた女装グッズを手に入れられるようになったのだ。

良かったに決まっている。

・・・筈だ。

第三章

学園祭初日。

航空物理の教室で、僕はあくびをしていた。

航空物理では、超リアルフライトシュミレーターが呼び物となっていて、縦横360度回転するうえに、1.5Gまでの擬似加速のシュミレートが可能な筐体が話題を呼んでいた。

まあ何のことはなく、目隠しされている状態で、なんの準備も無く縦にされれば、前方加速している様に感じるわけで。

とは筐体を前後左右にちょっと移動させれば回転感覚を消せてリアルになる。

僕は、その店番をしていた。

一応全日程6日間の内、前2日は非公開日扱いなので息が抜ける。とはいえ、公的な立場の人の訪問は在るので、抜きすぎに注意。

「おーっすりヨウ、交代だよ。」

同じ航空物理の友達と交代で、店番を抜け出たのは昼頃のことだった。

そのまま昼でも食べに行こうかと方向転換すると、何時の間にか黄の姿があつた。

この男、何の前触れも無く現れるのが面白い。

「今から飯、行く？」

と聞くまでも無く、互いに何の打ち合わせも無く例の喫茶店まで歩いた。

一般開放期間は休み、今は開店中の店に入ると、いつも以上に混んでいる。

「あ、リヨウくん、黄くん、いらっしやーい。」

店の奥さんがそう声をかけると、店内がわつと盛り上がった。

良く見れば、店の席のほとんどに教授や助教授、そして綺麗な女の子を連れているのだった。

「何の集まりです？」

そう聞く僕を奥さんは笑った。

「何言ってるのよ、皆あなたに会いたくて朝から待っているのよ。」
「え？」

そう言うか言わないか、いきなりわつと人が押し寄せてきた。

教授達のほとんどが、幽霊騒ぎのバーターで会っている人間であり、助教授達も同じだった。

ただ、それに随行している女性陣のみおぼえが少なく、ちよつと首を傾げる僕だった。

後ほど黄にそのことを話してみると、難しそうな顔をして「傭兵だな」という結論を口にした。

「傭兵？」

「そ、傭兵。研究室の手持ちの生徒ばかりでは負けるかもしれないだろ？」
んで、彼女達も研究室のバックアップを受ければ、票も

纏め易いしな。」

どう言っことなのか判らなかったが、一応納得しておくことにした。

僕の手をかわるがわる握る人達を割って一人の女性が現れた。

それは切れ長の目と優美なボディーラインを従えた美貌の若年教授。

「あ、アマンド教授……。」

絶句をする男性教授たち。 声を失う女生徒たち。

それほどに美しいのだろう。

「少年、うちの研究室は君を必要としている。」

すっととった手は、かなり熱のこもっている。

「……ゆえに、とる！ 君も、学園ミスコンのタイトルも……！」

僕の手ごと握り締めた彼女の手は、奇妙なぐらいに熱いものだった。

「あのー、教授。もしかして……教授が？」

「もしかしくなくても、私自身が出るのだが、文句があるかね？」

にこやかに微笑む彼女への言葉を僕は失っていた。

「優勝して見せるぞ！」

力こむ彼女に僕は微笑む。

「生徒さん思いなんですね、教授って。」

突如、目の前でアマンド教授が、盛大にこける姿を拝むこととなつてしまった。

いつもの席にはいつものチーム仲間が陣取っていた。ひそひそと頭を寄せ合い、良からぬ事を相談しては、げらげら笑っている。

「よー。」「やー」

僕らが近づくと、にへらと笑った彼らだった。

「最大の懸案もクリアーされたよ。」

そう言うのはマクドナルド「尼崎こと、マックだった。彼が懐から取り出したのは、10円玉よりちよつと小さいぐらいのリングで、透明な膜が張られていた。ぽいっと僕に投げてよこす。

「新素材研究室とアンドロイド研究室の成果だよ。」

ぷにぷにと曲がる軟性度の非常に高いリングを見つめつつ、僕は首をひねる。

「人工声帯だよ。」と、マックの耳打ち。

ああ、これが……。そうつぶたいたほくだった。

顔は化粧が出来る、格好もファンデーションで自由自在に変えられると言う状況で、唯一声を変えられないと言うのが問題となっていた。

地声は皆知っているし、作り声ではイブやレンファにばれてしまう。

どうしたものかと思っているところで、新素材・アンドロイド両研究室からのバーター物資が残っていることに気づいた。

彼らが持つ音声データバンクの使用に対するバーター、共同研究品の試験使用の依頼だった。それがこの人工声帯なのだ。

この人工声帯、既存のものとは違い外科手術は必要無く、ごくりと飲み込むと声帯でとどまり、本当の声帯に被さるようにフィットする。

フィットした後の違和感の無さは、まるで自分の声帯の様に……というのが売り文句だったのだが……。

「つけてみる？」

洋行さん独特のイントネーションが耳を打つ。

「皆で耳打ちするんじゃない！」

おもわず声をあげると、周囲の教授連中からの注目が集まった。

「しーしーしー」

みんなに押さえ込まれた僕は、思わず愛想笑い。

「今日はココじゃ落ち着かんから移動だな。」

黄の言葉に皆、賛同するのだった。

所移って学生寮、僕と黄の部屋へ移動した僕らは、大きなダンボール箱が四つも入り口で折り重なっているのを発見した。宛名は「リヨウ・イズミ」送り主は「鈴＆モイシヤン」となっていたが、イブとレンファではないことは明白だ。

「おい、リヨウ。これって・・・」

「まずはベットをばらすのを手伝ってくれ。そのあとは荷物を部屋に放り込む。んで説明はその後だ。」

もくもくと作業を始める僕だった。

「はあー、じゃ化粧道具と衣装は考えなくて良いんだな。」

感心をするJJに苦笑で返す僕。

一応、両婦人の参加を説明するために、色々と東京での事を説明することとなってしまうのだが、女装した事や風御門先輩に会ったことなどは省くしかなかった。

だって、どう説明をしろって言うんだ。

つまるところ、ほとんどが嘘の話しと言うことになる。

「じゃ、イブもレンファもリヨウのところに泊まりに行ったのかあ。」

何やら信じられない速度でメモをとる洋行さんを、軽い調子で蹴り飛ばす。

「じよ、冗談冗談、冗談だよ。」

憎めない雰囲気で見つめた笑いを浮かべる洋行さんを軽く睨み、僕は話を続けた。

「で、一応彼女達が送ってよこした服を検証して、審査用の服でも選考してみようか。」

そう言いつつ、ダンボールに手をつけるとその手をやんわりと止める手が現れた。

ふとそちらを見、体を硬直させる。

「だめよおりょうくん。私たちと一緒に開けないと。」

「せっかちさんね、りょうくんは。」

地味な作業服に身を固めた二人の女性。

荷物の送り主、鈴・モイシャン両婦人であった。

「だあー！ な、なんでお二人とも、こんなところに！！」

「あら、ご挨拶ね。女装もしたことも無い「はず」の男の子達に、化粧や着付けの手ほどきに来てあげたのに。」

「学園入管の手続きじゃあ色々と手間がかかったんだから。さあみんな、着飾るわよ。」

室内で車座になっているチームに向かってモイシャン婦人は言った。

「・・・みんな？」

にっこり微笑む二人。

「勿論みんな、よ。だって、りょうくんだけ女装して皆がそのまま

だつたら、絶対にばれるじゃない。怪しいわよ、リヨウくんだけじゃないこのチームっていうのも。」

「全員雲隠れって言うのも問題が有るのではないでしようか？」

控えめなマイクの意見は、にやかな両婦人に黙殺される。

にやりと笑い周囲を見るべく。

振り向けば皆いやそーな笑顔をしていた。

さて、基本的に僕は化粧をしながらいる。

それは過去の秘密アルバイトの経験が生かされているからだ。むしろチームには公立中学時代に演劇をしていたことを話しているの
で、その辺はその辺で解釈してもらっている。

しかしその化粧は基本的に水商売な化粧であるので、学園祭などには向かない。

というわけで、基礎的な化粧の方法から変更せざる得なかった。

一応目指すのは、男顔の生える中性感を前面に押し出すこと。

黙々と自分の顔と言うキャンバスに、色々と試す僕だったが、背後では更なる地獄絵図が展開されていた。

誰しも脛・脇・髭の処理、眉毛の加工を施され、学園の女生徒用制服を身につけさせられたり、両婦人に化粧をされたりと忙しいものだった

準備の終わったものから歩き方や喋り方、身振り手振りを細かく指導され、ウイグなどを細かく整えたりする。

最初は照れていた皆も、いつの間にやらひとつしかない姿見鏡を取り合うまでとなり、両婦人を満足げにうなずかせるのだった。

中には目つきが怪しい調子になりつつあるやつもいるが、見なかったことにしようと心に誓うばかりだった。

「んで、リヨウくん。そろそろ出来具合は良いかな？」

ちよいつと、小さな鏡に向かう僕を除きこむモイシャン婦人は、
頬のあたりや顎のラインを微妙に刷毛で微調整しているようだった

「あら、ちよつと目の線がきつくないかしら？」

「いや、このぐらいじゃないと素性がばれますから。」

「でも勝てなかったら意味が無いわよ？」

「そうよ、リヨウくん。勝利こそ最終目的なのよ！」

勝利・勝利と妙に力をこめて言う二人に、僕は思わずため息を漏らす。

「リヨウ、人工声帯を使えば、多分ばれないよ。」

「そんなもんか？」

むにやむにやとこねる僕を無視して、二人の女性のメイク談義は続いた。

第四章

その日、学園ミスコンの当日は学園祭三日目、公開日初日最大のイベントとされていた。

本当の最大イベントは、学園グッズの販売だと言う話もあるが、学園内外で一番注目されているイベントといえば、やはりミスコンが一番だろう。

各学年、各研究室、各チーム一番だと言う美人がそろいぶむ舞台は一種壮観な眺めといえるものであり、民族・宗教性を超えた美女達が一堂に会する大イベントだろう。

これはまさに若年ミスユニバースなのだ。

・・・出来れば僕も観客席に居たかった。

痛切痛切な思いが表情に出たのか、隣に立っている女性に声をかけられてしまう。

思わず苦笑するとその人も苦笑いだった。

「あなた一回生ね？」

「はい。」

自分の声だと思えないようなかわいらしい声が口から漏れる。

恐ろしきは人工声帯。

商品化されれば、犯罪への転用があまりにも容易だ。

「やっぱりこのぐらい初々しくないと一回生らしくないわねえ。」

「それってどういうことですか？」

なんかこの声で喋ると、全部ひらがなで喋っているかのような声になってしまう。

「ほら、あの子達を見なさいよ。」

と促された先には、イブとレンファが余所行きの笑顔で周囲に微笑んでいる。

「あ、モイシャンさんと鈴さんですね。」

「そ、あのこたちってば初出場だって言うのに、長年慣れ親しんだみたいに思える風格があるものねえ。」

いやみの無い調子で言う彼女は、「こまったなー」という表情で微笑んでいた。

「・・・噂では、北米の社交界で有名だという話ですから、例え国連学園とは言え学校のミスコンなんか気にするほどの事じゃないんじゃないですか？」

実際、僕はそう思っている。

彼女達の母親の話しでは、北米上流階級で彼女達を知らないのもぐりだと言う風潮になっているそうだ。

「でも思いきってるわよね、彼女達。自分達だけで争えば絶対に他人にわたるはずの無いタイトルまで賭けているんですもの。」
「？」

何の事だろうと思っていると、彼女は苦笑した。

「自分達のボーイフレンドを、同じように彼を思っている女の子達にもアタックできるようにチャンスを与えてるのよ？」

「えーっと、それって・・・」

どう言っことなだろうと、言葉にする前に彼女は言った。

「言わなくても良いわよ。あなたもリョウイズミ狙いなんでしょ？」
「」

がーん、そんな気分の僕だったが、彼女はそんな僕にお構いなしに言葉を続ける。

「東洋系の甘い顔に不撓不屈の根性・判断力、Mrを丸め込む戦略性やそれをおくびにも出さない慎重さ、入学当初に教授会を出し抜いた力量、そして優秀な仲間達。どれをとっても今の国連学園一番の有望株ね。」

「あのおー、それって持ち上げすぎじゃないでしょうか？」

「何言っているのよ、顔だけでも入学からこっちずうつと目をつけてたんだから。少なくともMrを出し抜くって言うだけでも、次期生徒総代だって夢じゃないのに、更にあれだけの仲間を集めているんですもの。あなたもそう思っているから彼のハントにかかってんでしょう？」

ハント、狩猟ですか。

「……生徒総代っていうのは行き過ぎなんじゃないですか？」

「いいえ、今のままじゃ可能性しかないでしょうけれども、私と組めば3年後の学園を治められるわ。」

なにやら野望に満ちた瞳で彼女は虚空を見つめていた。

やばいやばい、結構な美人だがファーストレディー志望の人間に付き合うほど人間は出来ていない。

「……あなた、私のブレインにならない？　あなたの中に何かを感じるわ。」

「えんりよしておきまーす」

無難な笑顔で答えているところで、自己紹介が始まっている事に気付いた。

総勢3桁人に達する出場者は、すべからず会場全てに微笑んでいたが、なんとなく視線が泳いでいることに気づいた。でも僕には何処を見ているのかは判らない。

「皆が何処を見ているのかって顔ね。」

先程のファーストレディー志望の彼女は僕の耳にささやいた。

軽くうなずくと彼女は笑いを含んだ声で言う。

「自分のものにしようとしているリヨウ・イズミとその仲間を探しているのよ。お笑いよね、こんなところの客席なんか来ていないのに。」

おもわずドキッ！と心臓が縮み上がる。

「私は知っているんだから……。」

すうつと近づいた彼女は囁くように言った。

「彼達は昨日から一度も男性寮を出ていないのよ。だからこんなところに居るはずが無いの。」

おもわずあせった僕だったが、思わずため息が漏れた。

「あら、あなたも彼を会場の中に探していたの？」

「……いやですよ、そんないいかたしたら。」

思わず苦笑で答える僕の前に居る司会が、僕の後ろにいるファーストレディー主義の彼女を呼んだ。

「No.289 四期生 マギー・トレモイユ」

ゲッ、と思った僕は彼女を見つめた。

マギー・トレモイユといえば、この3年間のミスコンで必ず優勝か準優勝をしていると言う綺麗どころで、学園の伝説美人と呼ばれる女性の一人だ。

どんな美人かと思っていたが、こんな風に野心的な女性だとは思

わなかった。

「・・・初参加の皆さんに比べれば、はるかにおばさんな私ですが、よろしく願いしますね。」

柔らかな表情で微笑む彼女を見て、思わず「詐欺だあ」等と思っていたが、女性と言うものはそう言うものなのかもしれない。

普通の男はそう言うことに気づかないままに付き合っ
て愛を囁いて結婚とかするのだろ
うけれども、僕はこの段階で気づいてしまっ
た。

まったくをもって恐ろしい。

一通りの挨拶が終了すると、彼女は元の位置に戻ってきて僕に言
った。

「前回優勝者より有望なのが4人も居ると言うのは屈辱ね。」

「？」

「知らないのかしら？ この自己紹介の順番って、審査員の事前審
査で投票数が少なかった順番で決められているのよ。」

ふと気づいてみれば、僕ははまだ呼ばれていない。

で、呼ばれていない他の3人も知らないわけではない。

そのうちの一人が呼ばれる。

「No.156 アマンダ研究室推薦 アマンダ教授」

ぬめるような光沢の有るドレスに身を包んだ彼女が前に出ると、
客席から低く響くような歓声が鳴り渡る。

ぎらぎらとした視線が彼女に絡まりつききったところで、彼女は
ウインクひとつ。

かっ
と燃え盛るような熱気が会場を軋ませる。

「アマンダよ。よろしく。」

その一言だけで去る彼女に、会場の男の視線は釘付けとなった。

「さすがね、アマンダ教授。」

そう呟くのは前回優勝者。

「・・・動きやポーズ、喋り方に至るまで意識誘導効果を全力で投入してるわ。」

「意識誘導効果？」

「そう、意識誘導効果。軽い催眠術みたいなものよ。」

そういえば彼女の専攻は映像解析関係だったはずだ。

「流石は映像専門家ですね。」

「でも、喋り方までは専門じゃないわ。多分デニモ教授と組んだに違いないわ。」

なるほどデニモ教授は音声解析の第一人者だ。

・・・が？

「え？　だって、でも、デニモ教授とは犬猿の仲だって噂が・・・。」

「それでも今回の優勝のために組んだんでしょ？　たいした執念ね。」

妖艶に微笑む彼女は、出場者の女性生徒たちを見回して余裕の笑みを浮かべる。

こんな演出も彼女の計画のうちなのだろう。

「No.23 一期生 イブⅡステラⅡモイション」

イブが呼ばれた。

すぐ横に居たレンファが、ピシッと親指を立てると、イブはそれに舌を出して答える。

「イブⅡステラⅡモイションです。」

名前から始まった自己紹介は、彼女の笑顔で締めくくられた。

その瞬間、アマンダ教授の色気に支配されていた会場が一気に透明な風に吹かれて消え去り、緑の温かさを思わせる雰囲気支配された。

アマンダ教授との違いは、その支配が女性生徒にも及んでいることだろう。

いままで興味半分に見ていた女性生徒たちが、彼女の笑顔に釣られて微笑んでいる。

実際僕も彼女のこんな顔を見たことは無い。

普段の生活の中では使わない顔なのだろうか？

自分の笑顔の効果を十分見渡した彼女は、ゆっくりと自分のもといたばしょに戻った。

次に呼ばれたのはレンファだった。

「No.20 一期生 リンⅡレンファ」

ゆっくりとした動作に見えて一本筋の入った様な彼女の動きは、トップモデルを思わせるもので、会場の女性生徒の目を奪い去った。流れるような動きはマイクまで続き、ずっと手を添えると一言いった。

「優勝したいの、優勝させてね。」

そのまま去る彼女に、会場内の黄色い声援が追いかけた。
男たちは彼女の雰囲気にもまれていたが、女性生徒たちは彼女に熱狂したのだ。

彼女の非公認ファンクラブのものであろう黄色い声援が周囲を満たし、溢れさせる。

「恐ろしい相手だね。」

そう呟いたのは前回優勝者。

「男性票と女性票を満遍なく取れるイブに、熱狂的ファンを抱えるレンファ。二人が組めば在校中のタイトルは完全に彼女達のもの。でも今は彼女達はライバル同士。付け入る隙は大きいわ。」
「なるほど、一番の脅威が仲違いをしていてラッキーと言うわけですね。」

「・・・ちがうわよ、ばかね。」

「？」

「一番の脅威はあなたよ。」

「な・・・なんですか？」

「自己紹介が一番最後になるんだから、事前審査員得票が一番だったって事でしょ？ だったら、あなたが一番の脅威よ。」

挑戦的に彼女の瞳が輝く中で、僕が呼ばれることとなった。

「No.128 一期生 イズミ「アヤ」」

これが僕の変装したときの名前。

なんとなく似ている名前だけでも、ばれることは有るまい。

「イズミ＝アヤです。」

自分の声ではない甘い声と共にぺこりとお辞儀をすると、会場がどよめく。

なにかまずいことでも有ったのだろうかと思って、自分をきよろきよろと見回してみると、どっと明るい調子が会場を支配する。

おや？と思い会場の一部を見ると、学園女性生徒の制服姿の一団が、片手で「グー」とサインを出す。

む、良い感じらしい。

そう思った僕はぺこりと再び頭を下げて、列に戻った。

待ち構えていたマギー・トレモイユは、僕に向けて不敵な笑顔で言った。

「やるわね、流石だわ。」

「・・・えっと、なにがでしょうか？」

「天然だしたら、こちらにも気合を入れないと。」

「なにが、でしょうか？」

「ま、正々堂々とがんばりましょ。」

そう言いきった彼女は、司会の流れのままに会場を後にした。

僕も歩き出そうとしたところで、良く見知った女のこに呼びとめられた。

「ハイ、イズミ」

イブとレンファは、僕の目の前に立つと微笑む。

「同じ一期生のイブとレンファよ。はじめまして。」

そういつて片手を出すイブに、僕も握手をした。

「はじめまして、イズミ＝アヤです。」

ぎこちない笑みで僕も自己紹介をした。

むずかしいだろ、だって、彼女達は僕の女装を何度か見ているんだ。

それを目の前にしてはれないようにすると言っるのは至難の技だろう。

まったくをもって失敗だったのは握手してしまった事。手の関節は嘘をつかない。

「ね、イズミ。私達と何処か会っていない？」

レンファは僕を覗き込みながら言った。

やはり違和感を感じているのだろう。

「・・・いやですよ、レンファさん。お二人ほど有名なら私が知っていてもおかしくないですけども、地味なわたしみたいなのを・・・」

そういつつ、二歩三歩と離れようとすると、彼女達はずっと前に出た。

「なにいつてるの、あなた。私達より紹介が後だって事は、あなたのほうが事前審査員投票で上だって事なのよ。」

「少なくとも、あなたのレベルがあれば、リヨウだってぐらつくかもしれないわ。」

「それはないんじゃない？ あれっつてば世界遺産的に鈍いもの。」

「そりゃそうね。」

あれあつかいですか、苦笑と共に僕が思っていると、再び見知った顔が増える。

「少女達、いつまでもじゃれていないで退場してはどうだね？」

先程の媚態に満ちた動きを忘れたように、いつも道理のぞんざいな口調のアマンダ教授だ。

「はい。」

僕らは声をそろえて返事をするものの、イブやレンファは眉をひそめる。

それに気づかない僕だった。

会場をでた僕を待っていたのは、長身のジェニーこと「J」と東洋系の美少女・洋子こと洋行さんだった。

駆け寄ってきた洋子を片手で抱きとめ、ジェニーと手をパンッと合わせる。

洋子は僕の耳元で「首尾は上々」と呟き離れる。

ジェニーはにっこり微笑んで見せた。

「じゃ、そろそろもどきましょうか？」

疲れきった顔で言う僕に、にこやかな笑顔でジェニーは言う。

「だめよ、イズミ。ママたちが最終日まで戻っちゃ駄目だって。」

「ええ、だって、私達・・・どうするの。」

困ったように言う僕に、洋子はいった。

「学園祭での普段の姿も評価対象になるの、精力的に活動しましょ。戻ってる暇なんか無いわ。」

「うえー！」

そのままの姿で僕は学園内を引き回されることとなった。それを見つめる多くの視線に気づくことなく。

学園祭をひと回りした後によってきたのは、何時もの喫茶店だった。

入り口に定休日と書いてあるのにもかかわらず入って行くと、トレイ一杯のカップを載せた奥さんが出迎えてくれた。

「あら、おかえり、りょうくん。」

この格好では男性寮へ帰ることが出来ないと言うことで、活動拠点を必要とした僕達は、喫茶店の奥さんに隠し立てすることも無く事情を話して協力を願った。

奥さんは快く了解してくれ、この格好で出入りできる安心した場所が確保できたのだ。

いつもの場所には皆が集まっていたが、ひときわ目を引く女性が二人居た。

モイシャン婦人と鈴婦人の姿だった。

「みてたわよあ」

北米を代表するコングロマリットの両婦人とは思えないほどに、下世話な表情で二人は笑う。

「みられました。」

苦笑して答えると、二人はがばりと僕を抱きすくめて撫で回し始めた。

「んーかわいいわぁ。」「あーんかわいすぎるウ。」

非常に刺激的な状態なもので、思わずひるんでしまう。

「んで、どんなもんでした？」

いつもの口調で喋っていても声が全然違うので、いささか違和感はある。

「そうねえ、90点つてところかしら。」

「いえいえ、95点はあげても良いわよ。」

と言い合うにわかオカマ気分の仲間内の中で、真の女性二人は厳しい評価を下した。

「50点」「45点」

一同目が点になる中で、指折り数える彼女達。

「メイクと衣装があつてない」「演技がぎこちなくて不自然」「最初に決めてた自己紹介の内容を一言も言っていない」……などなど、なにやら色々あるようだ。

「あのー、最終的に何が不満だつて言っんですか？」

「そりゃあ、化粧したり無いし」「衣装も色々有るし」

再び色々言い始めた彼女達に、僕は自分を預けることにした。

会場とは違った見た目というのも面白いかもしれない思ったからだ。

が、出来あがりを目にして驚いた。

「こ、この見慣れたメイクは……。」

そう、見慣れたものだった。

なにせこのメイクで僕は彼女達に始めて会ったのだから。

「んー、やっぱりこう言うのが一番似合うじゃない。」

「これで出場すれば、投票なんか無しで楽勝だったのに。」

「その前にイブとレンファにばれてぶち壊しです!!」

柳眉を立てて怒る僕を、彼女達はケタケタと笑って相手にしなかった。

「声も全然違うんだから、そっちのほうがいいわよ。」

「このメイクをベースにしているんでしょ？今までのメイク。だったらこっちのほうがいいわよ。」

「うちの娘達も感づいている様子は無いし、徐々にそのメイクに近づけていくって方が良いんじゃないの？」

なるほど、なんとなく判った。

「そっちのほうが、面白いな。」

「いいんじゃない？面白いにこしたこと無いし。」

ニヤニヤ笑いの仲間内を見ているうちに決心することにした。

辛いことも苦しいことも、楽しんだ者勝ちなのだ。

面白いというほうに乗ることにする僕だった。

イブは、レンファは、やきもきとしていた。

開放日始めから来るといっていた両母親が急用で来れなくなったと言われたことに端を発しているものだと思ってもいた。

が、実際はもつと根本的なことにあることにも気づいている。負けるかもしれないのだ。

確かに彼女達は天狗になっていた。

北米一とも言われた社交界の花であった自分達を思えば、学園のミスコンなど独壇場だと言う思いが無かったわけではない。

少なくとも自分達の自己紹介の順番が来るまでは確信していた。自分達だけでリヨウを奪い合えると。

しかし、事前得票結果1位の人間を見て驚いた。

上には上が居るのだ。

およそ優雅さや可憐さにほど遠いと思われていた少女が、一步ステージに出た瞬間に変わってしまったのだ。

女性である自分が目をそらせない。男性は勿論のこと目を引き付けられる。

それで居て、同性からの強い羨望や嫉妬が感じられない。

イブにはそんな人間をどう表現して良いのかが判らなかった。

しかし時を同じくして同じ事を思ったであろうレンファはこう言った。

「聖母の卵」と。

深い慈愛を感じさせつつも恋人にしたいと願わずに居られない吸引力。

同性であっても並び立ち、共に歩みたいと思わせるだけの魅力を秘めていた。

ステージ最初からマギー・トレモイユ女史が彼女にちよつかいを出している気持ちが良くわかると彼女達は思った。

母となれば理想とも思える母となるのではないかと思わされてしまふ。

そう、もしリヨウと彼女が付き合えば、彼女と私達とリヨウと・
・そんな風に思っている中で、かなり奇妙なことに彼女達は気づいた。

なんとなく、なんとなくであるが、頭の中でリヨウと彼女を並び立てることが出来ないのだ。

嫉妬だとかやきもちで出来ないわけではない。

理由についても判らない。

しかし、彼女とリヨウが学園内を闊歩する姿や、なかむつまじくする姿が想像できないのだ。

少なくとも、同性から見た目で十分な魅力ある人間であるし、その事自体を自然に認めているのに。

ほぼ同じような疑問を抱えた二人は、彼女に近づくことにした。
奇妙な疑問を解き明かすために。

僕は非常に困っていた。

学園祭期間休業中の喫茶店を占拠できた事が、いかに僥倖だったかが知れるほどに。

人目を気にして出入りしているせいか、僕らが本拠地としている喫茶店の存在は知れていないものの、何処にいようと何をしていようと、必ず人だかりが出来てしまふのだ。

周囲に人だかりが出来るのは結構投票につながるからだから良しとしなければならぬのだろけれども、なぜかイブとレンファが引っ付いてきて、それにマギー・トレモイユが加わるという構図と

なってしまうている。

僕を挟んで三人が、押し合いへしあいしているのを見物にきているのが周囲の人ばかりといった感じになっている。

「あー、なぜなのでしょう?」

苦笑いで聞いてみると、三人三様の笑顔で答えた。

「ゲリラ的に活動するより、ぜったいあなたと一緒にの方が宣伝効果が高いわ。うちのブレインもそう言ってるの。」

「あなたって、ちょっと気になる人にそっくりなのよ。替りにさせてね。」

「最近友達がかまってくれないのよ、慰めてね。」

さてさて、どのせりふが誰のものか。

おしくら饅頭状態の僕達に、周囲の人間が直接殺到しないのにもそれなりの理由があった。

「あなたのチームって力強いよね。」

というマギー・トレモイユの言葉に表されるように、うちのチームがガードマンよろしくに周囲を固めているからだ。

本当ならば、色々と安全そうな人間をチョイスして、夜のウェイトレス時代に培った手法を試みるつもりだったのに、朝な夕なに彼女らが張り込んできていて試すことも出来ない。

アジトと化している喫茶店へ、周囲の人間をまきつつも帰ってきた僕は消耗していた。

「で、りょうくん。どうするの?」

ぐちぐちと愚痴をたれていた僕に、二人の夫人はぞきこむようにして問いかけた。

基本姿勢としては彼女達をあしらいつつも付き合っていたので、結構バレソウ二なる事態がしばしばあったのだった。

その度に彼女達の疑念に満ちた視線に晒されていた僕は、かなり神経的に参っていた。

「あしたあたり、元の戻ってストレスを晴らすつもりです。」

ぶつくさと言う僕に、黄は面白がっているとわかる声色で言う。

「……ストレス解消にはならんとと思うぞ。」

審査員の権利を手中にした黄は、ほとんど僕らと別行動をしており、顔を合わせるのも久しい。

「なんでだよ。」

「あのなあ、今、コンテスト参加者の標的つてだれだ？ 俺以外のチームメイトが雲隠れしている中で、どんな目に会っているか知っているか？」

どよーんとした目で彼は僕をのぞき込む。

「……もしかして苦労してる？」

「つるし上げだ、つるし上げ。……中でもアマンド教授の攻撃は執拗を極めるぞ。」

そういえば彼女、僕達が学園祭の中を巡回しているときも一度も会わなかった。

黄以外の人間が姿を消していることに疑問を持った彼女は、黄を

つるし上げて真実に迫ろうとしたのだろう。

まったく恐ろしいほどに知恵が回る。流石は若年国連学園教授である。

「明日日本人が出てきてみる、無茶苦茶な事態になることは間違い無いな。」

「げー。」

脱力でテーブルにうつつぶしそうになる僕を、両婦人の腕が抱きとめる。

「はいはい、今日のお化粧の時間ですよ。」

「さー、最終段階へのバージョンアップをしましょうねえー。」

黄とは違い、実際につるし上げられている僕は、二人の夫人のなされるがままだった。

騒ぐだけ騒いだ学園祭も残すところ後二日。

昨日までの一般公開日の狂乱を過ぎ去って、ミスコンの審査発表は行われようとしている。

最初はどうにか優勝してやるか思っていたが、今日に至りどうでも良くなってしまうていた。

早くこの格好をやめにしたい、と、これしか考えていない状態になっってしまった。

いやはや実際辛いなのって。

コルセットはきついし股下はスースーするし、胸の詰め物は気持ち悪いし化粧が落ちないように物を食べるのは辛いし、笑顔で顔は引きつりっぱなしだしハイヒールは歩きにくいしデルモ立ちは疲れするし…。

不満を上げればきりは無く、とっとと終わりがきて欲しいと心待

ちの状態だった。
が、いま、苦痛の開放のときは来た！

第五章

眩いばかりの照明が照らされる中、司会と思しき人物が中央に立ち、懷から芝居かった仕草で封筒を取り出し封を開ける。
すらりと中身を出した人物は大きく口を開き宣した。

「……準優勝は……」

準優勝は二人選ばれる。

「双方ともに一学年、イブⅡステラⅡモイシャン、リンⅡレンファ。」

熱狂的な喝采のなか、二人は呆然としていた。
真つ青な顔のまま、ふらりと二人とも倒れそうになるのを僕は支えた。

目の焦点が合っておらず、点のようになっている。
僕はそのまま支えていたが、彼女達がそのまま座り込みそうになるのを支えつつ一緒に前に出ていった。

ちよつと横を見れば、マギー・トレモイユが余裕の表情でこちらを見ている。

暗転しているステージの奥なので読み取りにくいが、その表情の意味は「あなたとの一騎打ちね」だと思う。

今日に至るまで多くの出場者が辞退し、最後に残った出場者を見回せば、イブとレンファを越える人気の有る人間など居ないに違いないと僕も思っていただけにショックは大きい。

茫然自失状態の彼女達へ向けられるマイクに、僕は適当なことを言わざる得なかった。

彼女達の意識が、まったくこちらに戻ってくる様子が無かったからだ。

聞こえているのだろうし判断も出来るのだろうが、体が動かないといった雰囲気だった。

「彼女達も準優勝の喜びで呆然としてます。・・・おめでとう。」

にこやかに二人に微笑むと、玉の涙を流しつつ僕にかじりついてきた。

ぎゅーと双方から抱きしめられて、思わず苦笑の僕に記者は聞いた。

「お二人とのご関係は？」

なんと答え様かと思っているところ、司会は自分の役目を思い出したようにそれをさえぎる。

「皆さんお待ちください、本命の優勝者の発表を先にさせていたいただきたいと思います!!」

その声を聞いて轟と会場が沸く。

優勝候補の最有力とされた二人の少女が準優勝だったと言うことは、優勝者はいかなる人物か!!

興奮沸き立つ中で、ドラムロールが響き渡る。

あんなに明るかった照明が消され、ピンスポットがステージを左右に走る。

僕の首にかじりついていた二人の少女の息と鼓動が聞こえて響く。僕も思わず手に汗握る。

会場とドラムロールが頂点を極めたその瞬間、会場は暗闇に包まれた。

「・・・優勝は・・・！」

目の前の暗闇が切り裂かれる。

急に点灯した照明のせいで目がハレーションを起こしているのだ。会場は？ 優勝者は？ 焦りにも似た思いで周囲に顔をめぐらせるが、不意に自分の立つ場所以外が暗いことに気づく。

真っ暗な会場、自分の居るところだけ明るい状態。これの意味するところは・・・

「一学年、イズミ」アヤ！！！！！」

絶叫とも言える声が響き、その瞬間会場がわれんばかりの拍手で埋まる。

ハレーションを起こした視界が徐々に慣れて行く中で、呆然とたたずむ僕の周りにすごい勢いで残りの参加者が集まってきた。

何を言っているのか理解できないまま、いろんな人と握手して、肩をたたかれたり頭をたたかれた利の歓迎を受けた。

暫くそうしているうちに、首っ玉にぶら下がっていた二人は僕の正面に立っていた。

それを見た周囲の参加者は、すうつと僕の周りから離れ周りを囲む。

うつすらと涙も浮かべた二人から声が漏れそうになるところ、僕はぴしつとひとさし指を立てて口に当てる。

何事かと二人がひるんでいるところに、雰囲気を感じない司会が現れて僕にマイクを向けた。

「おめでとございます！ ただいまの気分は？」

にこやかに質問をする司会者に、僕もにこやかに答える。

「最悪。」

十分な時間をかけて、僕の言葉を理解した司会が妙な声を上げる。

「は？」

「一個人の人権や思惑を無視したこの賞品、思いこみの大暴走、青春という言葉だけじゃ騙り尽くせない最悪の展開だと思わない？」

「……あのお」

「少なくとも私はそんな事は許さないし、絶対に享受しない。」

厳しい顔の僕に更に厳しい顔の二人の少女が問い掛ける。

「そ、それじゃあ、リヨウのことなんて興味ないって事かしら？」

先程まで真っ青だった顔を朱に染めた彼女達に、僕は微笑んでいた。

「あなた達の『一番良い手段』、最後まで見せてもらったけれども洒落じゃすまなかったようね。」

一時朱に染まったはずの彼女達の顔の緊張が、瞬時に解ける。

「……え、ええええ！」「ま、ま、ま、まさか！！！！！」

重い音を立てて一歩引く。

それにあわせて僕も一歩出ると、音も立てずに観客席の最前列に居たチームの女性生徒集団が僕を囲む。

マイクを司会からもぎ取り、僕は言葉を続ける。

「優勝者の権利としてここに宣します。

ひとつ、リヨウイズミと彼の所属するチームの人事権を彼らに帰するものとする。

ひとつ、リヨウイズミの交際権は、棚上げとする。

ひとつ、今回優勝の特典は、彼らのチームに帰するものとする。
以上。」

ざわざわと響く人の声。

方向も意思も統一していない声は、まるで波のようだ。

そのなかで一本とおった意思が頭角をあらわし、声を発する。

「審査責任者の風御門だ。」

堂々とした物言いに、会場は水を打ったような静寂に包まれる。

「あなたは優勝者であるがゆえに特典を得ることは出来よう。あなたをバックアップしたチームもその栄誉が得られる。しかし、まったく係わり合いの無いチームへの委譲は前代見物の自体であり前例が無い。認めることは出来ない！」

彼が大きく言いきると、再び会場がざわつきの波となった。

勿論彼の言っていることは正しいのだろう。

出来ればこの発言を認めて欲しかったけれども、そうもいかない
と正面から言われてしまった。仕方が無い、最後の手段だ。

「なるほど、では、彼らが優勝者であれば問題が無いわけですね？」

「なに？」

周りを囲んだ女性生徒から、軽い嘔吐作用でどから人工声帯が吐き出される。

僕も同じように吐き出して、再びマイクを握る。
出る声は懐かしき我が声。

「ならばこの『国連学園主催美人コンテスト』のタイトル、この僕が頂いたあああ！！！！」

周囲を固めた女性生徒たちがウイグに手をかけ一気に外す。薄い化粧を軽く落とす。

それにあわせと僕は、眼鏡をいつもの眼鏡にかけかえると共に、ウイグをイブとレンファに投げかけた。

『あああああああ！！！！』

絶叫が会場を包み、僕らは会心の笑みを浮かべていた。

学園祭最終日。

朝から僕は学園の正門のところに立っていた。

色々あつて忙しかったと言うちーちゃんが、この最終日「招待日」に遊びに来说と言つからだ。

「本当は開放日の三日間ともいきたかつたのに……」と電話口で言っていたが、それが実現しなくて良かった。

少なくとも、この「僕」が相手することは出来なかつたのだから。

「しかし反則よねえ」「本当に詐欺だわ。」

「……まだ言ってるよ。」

いつもの様に、いやいつも以上に強く僕の両脇を固めたイブとレンファは不満顔だった。

僕は女装してコンテストに参加していたこともさる事ながら、その裏で彼女達の母親が手引きしていたと言う事実が彼女達を更に不機嫌にしていた。

まあ彼女達にばれたときは、凄い事になるに違いはないとは思っていたが、まさか泣きながら会場で抱きつかれるとは思っても見なかった。

彼女達の泣く意味がわかっていただけに、僕は彼女達を泣くに任せることにした。

ひんひん泣き続ける彼女達をかばいいつも、勝利宣言をして僕がその場を去ろうとすると、一人の女性が立ちふさがった。

「なつとくいかないわ！！！！！」

彼女の絶叫で会場が再び静まる。

立ちふさがるのはマギー・トレモイユ、前回優勝者だ。

「このコンテストは『ミス』コンテストなのよ！　なんで優勝者が男なのよ！！」

会場に向けて、ちょっとパフォーマンスもまじって彼女は叫んだ。この行動は、僕が相棒となりうる存在かどうかわからないし、そのうえで手の内を知られていることに対する恐怖なのかもしれない。

「それを認めても良いの？！」

誰もが口にするとした言葉だろう。

しかし彼女はそれを口にした。

本当なら僕らは下を向いているところだろうが、実のところ最も

突破しやすい話だったもので思わず僕は笑みを浮かべる。

「このコンテストの正式名称って知ってます？」

「？」

僕らチームは壮絶な笑みを浮かべていった。

「国連学園ナンバーワン・ビューティーコンテスト!!」

まったく女性だとか美女だとか言っていないのだ、単なる美人コンテストなのだ。

美しい人ならば参加の権利があると参加規約にはあるが、女性であることを限定明記した文章は一切存在していないのだ！

「美しいとされるのならば、参加の是非は観客が決めること！」

にこやかに返す僕は彼女は呆然と見送った。

勿論観客の是非に任せる事となったのだが、お祭り好きで集まっている人間の結論など決まっているようなものだ。

万人の支持が集まり、マギー・トレモイユの意見は吞まれた。

悔しそうにしている彼女を横目に僕らは会場を去ったのだった。

そのあといつもの喫茶店で親子対面とあいなり、各々の婦人と共に彼女達の怒りを受けることとなってしまった。

汲々としている所で、奥さんが大きなケーキを持って現れた。

「さ、みなさん。優勝と準優勝のお祝いにどうぞ」

歓声の僕達を苦笑する女性陣。

思わず僕は我に帰った。

「ところでさ、みんな。」

「？」

「いつまでこんな格好をしてればいいんだ？」

スカート姿の男達は、思わず大笑いを始めるのだった。

何時もは閉まっている正門へ、そろそろちーちゃんがやってくる。
彼女には知られたくない話しが山積している国連学園へ招くのは
心苦しい限りである。

第六話 中間試験

第一章 前日

一般的な学校では日常的にテストが行われているだろう。

公立中学に通っていた頃を思い返せば、学期ごとに二回のテストに加えて小テストが乱発。テストとテストの間に授業があるような1年が過ぎるといっても良い状態だった。

それは、テストを行うことにより学習要点を絞り込ませることが目的なのだろうけれども、勉強の上に立つテストではなくてテストのための勉強になっているあたりが本末転倒と言うか、日本教育の日本教育らしい所と言うかなんというか。

そんな体制に慣れていた僕には、学園の1年二回しかないテストは新鮮だった。

秋に一回、年度末に一回の合計二回しかないテストというものに、僕は恐れおののいてしまった。

だってそうだろう？ 成績の基準や個人評価のもろもろを年二回のテストに懸けるのだから。

基本的に授業や実験の報告書をまとめたりしているので、成績の全てがそれにかかっていると言うわけではないのだろうけれども、やはり戦々恐々とした気分は抜けない。

学園祭終了後、2週間で開始される初めての学園中間テストに、僕は恐れを抱いていた。

「ぎゃー、半年分の試験を一遍にやるなんてしにそー！」

だれかが叫ぶと、それに合わせるように室内はざわつき出した。いつものようにベットの壁に立てかけてスペースを確保した僕と黄の部屋に、チームは全員集まっていた。

無論全員と言っただけあつてイブとレンファも一緒。

既に男女混成のチームは、各々の中で自然に感じられるようになっていた。

ばったりとJJが身を投げ出すと、正面のリーガフがあくびをする。

めいめいに動き出す動作は集中力が切れたことを理解させられた。僕もゆっくりと伸びをすると、正面の二人の美少女は綻ぶように笑顔を見せた。

ここ数日、こんな風に集まって勉強会をしているの僕らだったが、いくら勉強をしてみても気の休まることは無かった。

膨大な出題予想範囲も不安にさせる要因だったが、なにより僕らを不安にさせているのは先輩達のたつた。

本来なら誰しもが復習をおこなったり勉強会をしているであろう時期に、だれも勉強をしている様子がないのである。

それどころか遊んでいる人間すら居る。

あからさまに怪しい。

勿論彼らにとってテストなど物の数にもならないことなのかもしれないが、それにしても万全を期すために復習ぐらいはするものじゃないだろうか？

そう思つて一度僕は風御門先輩に聞いたところ…。

「ルーキーにその事柄を伝えることは伝統的に禁止でね。」

と歯切れの悪い解答しか帰つてこなかった。

何とも不信な話である。

色々と探ってみても答は無く、学園内NETでも情報は皆無だった。

「まいったな、中間試験の出題範囲なんて、どんな検索しても引つかからないよ。」

息抜きで端末に向かっていた洋行さんは、ぐぐぐつとのびてそのまま倒れる。

誰も彼もが良き詰まりを感じているのをぬぐえない。

こんなことは学園受験以来だといっても良い。

「しかしさ、なんとなく普通じゃないよな、先輩達のあの態度。」

そう、予習も復習も無く、ただただ何時もと同じ態度の上級生達。自分達の知っている「試験前」の雰囲気とは全然違う様相を見せていた。

「・・・なにか、その態度に不審なものを感じるな。」

スティーブのその一言は、みんなの心の内を代弁していた。

第二章 1日目

「えー、ほんじつはじつにかいせいにめぐまれー・・・」的な挨拶を教務主任がのたまわっている。

なぜかチームや仲間別集まるように指示されたルーキーたちは、各々の部屋に集まってNETの配信情報に目を向けている。

昨日、全学生に発信されたメールによると、テスト当日は自分の部屋もしくはチームや友人の部屋に待機して配信映像を待つようにとの通達だった。

そんな訳で、僕らチームは僕と黄の部屋に集まった。

「と言うわけで、本日より開始される中間試験のルールを説明いた

します。」

『ルール？』

全員の声かはもるのをまっているかのように、教務主任は言葉をとどめていた。

自分の言葉が十分理解されたであろう時間を見計らって、再び教務主任は口を開く。

「配信先に居るルーキーの皆さんは、これから一週間の間学園内を持てる知力体力全てを使って先輩達から逃げおおせてください。逃げるのはチーム単位でも個人単位でも結構。見事逃げ切れれば試験成績を満点とし評価します。」

『・・・げえ。』

ここ数日の無理な復習の為に、僕らの体力は極限にまで削られている。

少なくともペーパーテストぐらいが受けられれば良いか程度の気力しかない。

「・・・少なくとも今日1日は逃げ切って頂かないと十分評価は得られませんのでそのつもりで。」

『・・・ぎゃあ。』

思わず僕らははもっていた。

「さあ、ルーキー諸君。君達の知力体力が試されるときだ。これより1時間後に追跡が開始されるのでそのつもりで。」

無常な言葉で締めくくられた配信は「NO DATA」という表示に切り替わってしまっている。

呆然と画面を見ていた僕らは、10分ほど浪費したところで我に帰った。

『どうするよ、おい!!』

息の合った、まるで内容の無い台詞が室内に響くのであった。

「とつたー!」

遠いところで絶叫が聞こえた。

多分ルーキ-の誰かが捕まったのだろう。

ルーキ-以外の生徒にとって初日に上げる戦果はたいした事はない。

成績には関係有るものの、彼等の満足を得られる標的ではないからだ。

彼らはいま、人と言う名の獲物をかるトロフィーハンターだ。

どのように嗜好を凝らして捕まえるか、どんな優秀なやつを捕まえたか、そんな考えが渦巻くいやな雰囲気肌を味わう。

僕は、いや僕らは聊か反則気味の手で自らの安全を図っていた。

- 学園内を知力と体力で-ということだったので、学園の一番端にまで来てみたのだ。

その方法は学園事務局に懸け込み外出申請を出した後、外出控え室で立てこもると言うものだった。

外出控え室のドアは二つ。

片方は学園で片方は静岡県側の事務局につながっている。

事実上静岡県側のドアを出なければ学園に外出したことはない。

更に言えば学園を一度も出ずに静岡県側の事務局に行くことは出来ない。

僕は学園側のドアを封鎖して、1日目の試験終了時間まで籠城すれば良いだけなのだ。

「みーーーーー」

間拔けた音でインターフォンが鳴る。

この部屋にしかけられたもので、事務室とここを繋ぐものだ。

「はい？」

思わず反射的に僕が出ると、不敵に笑う男の声がした。

「さすがだよ、リョウくん。そんなところに駆け込むとは思いませんでしたよ。」

その声の主を皆も知っている学園最強にして最凶の男、風御門先輩その人だ。

「いやはや、先輩にお褒め頂くとは恐縮です。」

「しかし惜しい。最終日までその場所を使わなければ、最後の最後で勝てただろうに。」

「思いついたら最初に使わなければ意味が無いんですよ。後に残しておけば使えなくなるような気がしますし。」

あとで知った事だが、外出申請は試験開始と共に停止されるそうだった。

試験開始前に申請できた僕達はこの部屋に留まることが出来たが、試験開始後に動き出した上級生達はこの部屋に入ることが出来ない。また、今日以降試験終了までこの部屋に入るとは2度と出来ない訳である。

つまりこの部屋は今日しか使えなかったと言っわけだ。

「うむ、卓越な見解だ。そのアイデアの出所は誰だね？」

「イブとレンファです。」

「なるほど、良く覚えておこう。」

逃げ切ったはずも僕達は、更に追いつめられている自分に気づくのだった。

なんとか1日目を終了して学園食堂になだれ込むと、いつもとは違った雰囲気漂っていた。

色分けすれば明確に三つに分かれているといえるだろう。

狩るものと狩られるものと、狩られてしまったもの。

何が何だか判らないうちに捕まってしまった者達にとって、狩るものと狩られるものの雰囲気はたまらない物があるらしく、食堂の隅のほうに行ってしまったている。

僕や黄がいつも座るあたりは逃げ切った人間が集まっているらしく、色々と情報交換をしていた。

「よ、リヨウ。おまえ達はそろって無事か？」

よく席が一緒になる日本人「前田・高輝」は、にやにや笑いでこちらに向かって手招きをしていた。

「ようタカ、こっちはばちばち。今日の所はもう使えないから、明日はまた潜伏場所の搜索さ。」

「何処に居たんだよ。」

「外出待合室。」

「げ、まじかよ、良くそんなところ入ってて見つからなかったなあ。」

「いきなり見つかったけれども、あそこって外出許可証がないとはいれないから。」

「・・・おお、・・・試験開始までのタイムラグで申請したのか！」

「そうそう。」

流石に国連学園に入学するだけの事はあつて、頭の巡りが早くて助かる。

「で、タカは何処に居たんだ？」

「・・・トイレで隠れてた。」

「ええ、よく見つからなかったなあ。」

「まあ、トイレって言っても、その天井裏だからなあ。」

「なんともまあ。」

「でもさ・・・。」

そういつて声を潜ませた高輝は、眉をひそめていった。

「実はいきなり見つかったんだけど、先輩に見逃してもらったんだ。」

「へえ・・・。」

「『明日はもつと精進しろよ。』だつてさ。」

軽く肩をすくめる仕草のなかに、ちょっと悔しさを感じないでもない僕だった。

「で、どうする？」

ま横の黄は、存外真剣みの無い表情で言葉を出す。

その瞬間、僕らはしんと静まり返ってしまった。
狩る側の喧騒とは大きく隔たりを感じる。

それは狩られるものの心理がそうさせるのか？
彼らからは「いつでも狩ってやる」という意気込みを感じざる得ない。

「ふむ。」

何事か呟く黄は、いつにもまして無表情だった。

昨夜から続く夜半までの会議で、半ば切れた黄は言った。

「相手の出方が判ったからには此方も手加減をする必要は無い。」

普段は物静かな皆のブレーキ役な黄も、ここ数日の試験勉強で気が立っているのだろう。

その意見に誰も異存は無く、僕達は活動を始めた。

1日目で既に籠城先や逃走経路の殆どを押さえられた、人間が捕まったという情報が入ってきている。

その情報を地図に照らし合わせてみて判るのは、学生寮を出たら最後、逃げ場ひとつすらないと言う事実だった。

僕らが籠城可能な場所は、彼らが攻め込める場所に相違無く、いかなる場所でも侵入妨げられる場所など、この学園に存在していない。

唯一あった外出待合室も、試験期間中の申請締め切りとなれば行きようが無い。

「がー、何処に逃げろっていうんだあ！」

」は頭をかきむしりながら叫ぶ。

無理難題といって良いだろう。

手っ取り早いのは自分の部屋にバリケードを張って立てこもると言うものなのだろうが、学園側もそんな消極的な技を許すわけもなく、ルール上禁止とはじめに言われている。

夕方の食堂からこつち、ずうつと押し黙っていた黄が、によきつと手を上げた。

「はい、黄君。」

眠い目をこすりながらのイブの言葉に黄は頷いた。

「・・・オレ達、この試験のルールって知ってるか？」

「ああ？ 学園内を知力体力で逃げ切る、自室に立てこもるのが禁止、だろ？」

めんどくさそうに答える」に、黄はいやいやと首を振る。

「・・・これだけ面倒の有る試験だよ、明文化されたルールがあるはずじゃないのか？」

その言葉に皆が驚きの顔をする。

そう、そうだ、そのはずだ！！

僕は自室備え付けPCの電源を入れると、ネット検索にかけた。検索項目は『中間試験ルール』。

あせる調子でタイプする僕が最後にエンターキーを押すと、直に結果が現れた。

「・・・ヒット・・・あった！！国連学園中間試験ルールブック
！！！」

『おおお!』

低いどよめきと共に開かれたテキストは、皆を困惑させるに十分なものだったが、数少ない人間はニンマリと笑った。

僕や洋行さん日本勢の皆さんである。

第三章 2日目

試験開始前、各々の部屋からルーキーの一団が現れて寮を出て行く姿が見えた。

それを見る他の生徒たちは色めき立っている。

出て行く生徒は初日で捕まってしまったルーキーたち。

俯く姿は後悔と恥辱に溢れている。

明日以降に捕まる人間があゝの列に加わる、明日は自分があゝの中に居るのかもしれないと言うのだから、気がめいることこの上ないだろう。

これから試験終了まで、原則的にこの光景は変わらない。

ルーキーたちは捕まって行き、包囲の網が狭まって行き、そして最後の一人までが狩られてしまう。

最終日まで生き残れるのだろうか、今まで感じたことの無い焦燥感を皆受けているだろう。

…原則的に。

僕は昨日の絶望的な気分から復帰していた。

この試験がルーキーばかりに分が悪いものに思っていたのは昨日までの話。

流石は国連学園といったところだろうか、学ぶ生徒を飽きさせない。

逃げの一手を推考していた中間試験会議は、打ち出したばかりのネット原稿を目の前にして紛糾していた。

後ろ向きな逃げの会議から、前向きな攻め込みのプラン推考に変わった途端皆の火がついたからだ。

だれもがこの試験を生き抜くことを決意した。皆を、僕ら皆を残らず生きぬかせることも。

鼻毛を抜きつつ彼は退屈していた。

試験監獄の監視人なんて役職を生徒運営代表から申し受けたものの、この一週間を毎日立ち番をしていなければならないからだ。

去年はオレもココに入れられたっけなー、そんな感慨が彼を襲っていた。

少なくとも、自分は同じルーキーの中でも最後のほうまで逃げ切ったほうだ。

最後の最後に組織的に展開した先輩達に、胸に光る校章を奪われてしまい、全員捕獲完了による試験終了を迎えることとなってしまった。

あの軍勢の何割かでも減っていてくれれば、自分は捕まることも無かったのに、とその当時は思っていたが、今思ってみれば未のほど知らずの思い上がりだたつとしれる。

なにせあの軍勢を率いていたのは生徒総代のMr・風御門だったのだ。

あの男に勝てる人間など居るのだろうか？

「やあ、門番ご苦労。」

狩猟班の人間が、三人の人間を連れてやってきた。

監視人役の男はその中の一人を良く知っていた。

「……リヨウイズミ！」

この男を知らない人間など学園に居るだろうか？

さらに彼に付き従うように両脇を固める少女達も知っている。

「イブⅡステラⅡモイシャン、レンファⅡリンー!!」

身の毛もよだつほどの美人だといえる彼女達は、学園ミスコン入賞者。

監視人の彼も会場に参加しており、投票にも参加していた。

その三人を直接連れてきた男も監視人は知っていた。

「・・・Mr・・・風御門!!」

どのような経緯かは知らないが、入学したてにMrがリヨウⅡイズミに手を出そうとしたらしいのだが、かれはその魔手から逃れたとの事だ。

彼の表情は暗いものだった。

「君には失望させられたよ、リヨウくん。」

にこやかに言う風御門にリヨウは微笑んで言った。

「流石に両手が塞がっていましたからねえ。」

「あら、その言いかたと私達をかばって捕まっただけかもしれない?」

「ひどいわぁ。チームの皆を逃がすために、くじ引きのおとりだったのに。」

「・・・そう言うわけなんですよ。」

苦笑のリヨウに風御門は顔をゆがめる。

「・・・ふむ、仲間の為に囷となる、か。試験終了までそれを繰り返す。」

返して、最後まで君達のチームの誰かが残れば君達的には勝ちだと言うことかな？」

瞬間、リョウイズミの毛が逆立ったように見えたが、彼は何事も無かったかのように微笑んだ。

「流石はMr。全てお見通しと言うわけですか。」

「なになに、昔私がルーキーだったときに使った手だよ」

和やかに微笑み合う二人であつたが、リョウイズミの両脇に控える美少女達の目は笑っていなかった。

「・・・では彼らの校章だ。」

そう言つて風御門は監視人役の男に、三つの校章を渡した。それを受け取った監視人役の男は入り口にあつた大きな金庫に納め閉めこんだ。

「では三人とも、彼の指示に従つてくれたまえ。」

軽やかにその場を去る風御門を見送った監視人役の男は、三人に声をかけた。

「じゃ、この講堂の中央で待機していること。試験終了までは長いけれども、これもルールだからな。」

素直に従う三人であつたが、不敵に笑っているように見える表情が気になつた監視人役の男だつた。

僕が講堂の中心に向かって歩いて行くと、周囲から低いため息が聞こえた。

何事かと見回してみると、既に捕まってしまうている人間はすべて失望感に覆われていた。

「おお、どうしたどうした？」

思わず身構えると、左右に引っ付いているイブとレンファはクスクスと笑った。

「みんなは、リヨウが捕まったことに失望しているのよ。」

「色々と応援のメールがきてたの知らなかった？」

全然知らなかったと首を横に振ると、再び彼女達は忍ぶように笑って見せるのであった。

「笑い事じゃないよ。」

そう言ってきたのは同じ地学教室の遠藤〓響であった。

「リヨウならあの包囲網をかいぐぐって、試験終了まで逃げ切ってくれると思っていたのに。」

その台詞を失笑で受けると、彼は言葉を重ねた。

「あのなあリヨウ。一度ならずともミスターに煮え湯を吞ませているおまえならって、始めに捕まった奴らは皆期待してたんだぜ。」

オーバーな身振りの響に、僕は肩をすくめて見せた。

「あーあ、やっぱり奴らには勝てないのかねえ。」

そんな事を言う響に僕は微笑んだ。

「まだ始まったばかりなんだぜ、気楽に行こうぜ。」

「何が気楽に、だよ。俺の知る限りで残っているルーキーじゃあ、あのミスターには対抗できないんだぜ。」

「失礼な、皆だつてがんばるし、僕たちだつてがんばればいいんだ。」

「あのなあ、俺達捕虜が何をがんばれって言うんだ？ 皆の応援をすれば良いのか？」

片方の眉毛を上げて睨むように覗きこむ響に、僕達にはやりと微笑んだ。

くいつと胸位置の襟を見せて。

「え！？」

目を点にした響を抱え込むと、僕は日本語で耳元でささやいた。

「ルールじゃあ『・・・校章を手に入れたとき、確認を行うこと。』

と書いてある。つまり本物を渡さないって選択肢もあるんだぜ。」

「な、・・・良いのか？ 本当にそんな事が許されるのか？」

「勿論。ちゃんとルール内で行動すればルール違反にならないんだぜ。」

ニヤニヤとした僕に響きは何かを見つけたと言う顔をしつつ言葉を継ぐ。

「ルール・・・」

「大概のルーキーはルールブックの存在を知らないけれども、俺達は見つけたんだ。といっても、堂々と学内NET掲示板にあったんだけれどもね。」

「ほ、本当か！」

大声で僕につかみかかった響を再び抱え込む。

「静かに。何の為に小声で、しかも日本語で話していると思うんだ。」

「す、すまん、興奮しちゃって。」

「んで、一応響にはコツチ側の取り纏めをして欲しいんだわ。」

日本語で喋ると、思わず地が出てしまう。

「な、なんだい？」

「簡単なことさ、些細なことだよ。だけど結果は大逆転、一方的な狩猟からドロドロの泥試合に連れ込ませることも出来るんだ。」

ひきつった笑顔の響きに僕は、この中間試験の本質を一言でまとめて言った。

それを聞いた響も、本当の笑顔で、それも輝かんばかりの笑顔で僕を見つめ返した。

「・・・そいつは・・・いい。」

試験時間終了と共に僕らは部屋に集まった。

僕と黄の部屋には、いつものメンバーが集まっていた。

「で、首尾は？」

黄の問いに僕は親指を立てて答える。

「ばつちり。連行先も、バツチのありかも押さえられたよ。」
そういつて部屋に備え付けの端末を立ち上げて学園の地図を呼び出す。

その地図には時間経過の表示とともに、三つの光の点が移動して行き、第三講堂の前で光が消えたところまで動きを止める映像だった。

「信号が受信できないって事は、鉛で加工してある可能性が高いな。」

「まあ良いじゃないの。どっちにしても一緒だし。」

にこやかに笑いあうチームは、何処から見ても身内を犠牲にして生き残りを図ったチームには見えなかった。

「それじゃあ、そろそろ作戦開始と行きますか。」
にやりと笑う僕に皆も答えて笑った。

第四章　　三日目

朝の囚人護送の時間、その列に僕とイブ・レンファは一緒に居た。その姿を見取った風御門先輩はつつつとよってくる。

「やあ、リョウくん、すがすがしい朝だねえ。」

「本当に良い朝ですよ、これが囚われのみでなければね。」

「なに、そんなかわいいお嬢サン方と1日中一緒なんだから、楽しくないわけ無い。」

「いやははははは」

「あはははははは」

乾いた笑いを中断して、風御門先輩は真顔で顔を寄せる。

「で、その背中に背負った大きな荷物はなんだね？」

彼の視線は、僕が背中に背負った大きなザックに注がれている。

「ああ、彼女達がお茶をいれてくれるって言うので、色々と準備したんですよ。」

「ほう、……なるほど……ね。」

ぺらりとその中身を見ようとする風御門を、誰かが呼びとめた。

「じゃ、しつれいします。」

軽薄な笑顔と共に僕らはその場を去ることが出来た。

少なくとも僕らが何かをたくらんでいることが理解できたはずだ。注目が此方に集まれば集まるほど事態は拘泥化して行く。

もし注目が此方に集まらなければ、無理やりにも集めてやれば良いだけのこと。

そのための道具なんだから。

最速、今日でおおよその決着がつくことを確信する僕だった。

講堂に昨日捕らえられた人間を含めた全員が集まったところで、昨日までならば即座試験開始の宣言が行われたところなのだろうけれども、本日は趣向が違っていた。

講堂に「撮影」の腕章をかけられた男女数人と、マイクを持ったMr風御門が入ってきたからだ。

彼の腕にも「撮影」の腕章が巻かれている。

「やあ、ルーキーの諸君、おはよう。我々在校代表からこのNext放送を見ている皆に士気高揚の放送をしようとおもう。」

カメラに向かって微笑む風御門先輩は不敵だった。

「先日私が直接捕獲した三人にカメラの前で皆にエールを送ってもらおうと思って、わざわざ今日の試験を棒に振ってやってきたと言っただ。」

ずっとカメラの前から彼が引くと合わせるように、監視人役の男が僕らをまえに行くように指示する。

それに従ってずっと一歩前に出ると、僕らを中心に照明が当てられ、その横に風御門先輩が早朝のアナウンサーのように微笑んだ。

「此方の三人が昨日の獲物だ。顔は皆も知っている『学園ミスコン』上位3三人だ。」

僕の横に立った監視人役の男に、風御門先輩のマイクが差し出される。

「では、監視人役の彼に、昨日の感想なんかを聞いてみよう。」

差し出されるままに何事か喋る彼だったが、大量の汗をかきながら倒れる寸前で喋り終えた。

「では、生徒総代のわたしから皆にプレゼントだ。今日以降試験終了まで、開始から30分我々は君達を追いかけないこととしよう。ぜひ君達の健闘を祈る。今日で全日程が終わらないことも祈ることとしよう。」

余裕だしまくりの態度に、僕はかなり鶏冠にきていた。

隣に居るレンファが手を握ってくれなければどうなっていたか判らない。

画面の向こうの反応を十分楽しんだかのようにニヤついた風御門は、くると僕達のほうを向いてマイクを差し出す。

「さぁリヨウくん、君に本日の試験開始の宣言を任せよう。みんなに開始の合図だ。」

先程までの怒りが何時の間にかおさまっていた。

それは正面に居るこの男の絶対勝利の気分を覆すことが出来ると理解するに至ったからだ。

「そのまえに、ちょっとチームに伝言していいですか？」

「・・・かまわんよ。」

更に余裕の表情の風御門先輩を無視してマイクとカメラに向かう。

「黄、どうやら向こうサンはずいぶん俺達を侮っているようだ。追いつめられた子猫のような僕達が、実は虎の子だったことを思い知らせてやる。バックアップ、よろしく！」

「な、なに？」

風御門先輩が怯んだ隙に、レンファとイブが監視人役にひつつく。顔を緩めた監視人役を見取った瞬間に、僕はマイクに叫んだ。

「本日の試験開始！！」

その掛け声と共にイブとレンファが監視人役に猿轡を噛ませ、縛り上げる。

僕は正面に居座る撮影隊を割って、備え付けられた金庫に飛びつく。

わっと僕の後に続いた響たちに囲まれて、撮影隊は一気に混乱の

渦の中に入ってしまった。

「どけ、どきたまえ諸君！ 捕虜である君達の作戦行動は禁じられている、監視人の指示に従って大人しく……」

そう言いかけた風御門は、イブとレンファに縛り上げられた監視人を見て一步前に出ようとしたところ、二人に止められた。

「撮影隊は、幾ばくかの単位と引き換えに試験参加を禁じられています！」

「我々はちゃんと参加する権利を持っていますのよ。」

ついつと見せられた胸元には、燦然と輝く校章が見えた。

「……な、君達の校章は、私自ら剥ぎ取って……。」

狼狽の風御門先輩にイブとレンファは勝利を確信した笑顔で微笑む。

「手にした校章が本物かどうかを確かめる行為事態ルールに存在しています。逆説的に考えれば偽物を渡してやり過ぎと言うのも戦略の一つですわ。」

「き……汚い！」

確かに汚いが、ちゃんとルールが存在しているのになるべく参加者の目に触れないようにしているミスターだって汚いといえば汚いのだ。

一度こちらに泥を向けた彼らに対して泥を向け返して何が悪い？

「ルール修正項目32項の2、一度保管された校章が何らかの理

由で所有者の手のもとに戻った場合、校章をてにした生徒の試験復帰を認めるものとする。またその時点で全ルーキーの完全開放があった場合、その時を試験終了とし、ルーキー全員の勝利とする。」

鍵もかけられていない金庫のドアを開けると、僕は中身を皆に見せる。

「・・・でしたよねえ、風御門先輩！」

きらきら光る校章を皆に明渡し僕は叫ぶ。

「バッジを回収した人間から、即座に講堂の閉鎖を手伝ってくれ！
1階入り口・通用口・非常口はもとより2階の窓・連絡通路も閉鎖、天井の天窓も防火シャッターで閉じてくれ！」

「リヨウ、黄班から。5分後に第一陣到着。」

「リヨウ、」班から。そっちが筒抜けなのでととと通信を切れ。

「

あ、いかんいかん、思わず頭に血が上って忘れていた。
僕はゆつくりと風御門先輩に近づき、にやりと笑った。

「さあ先輩方、試験期間は長いんです。ゆつくりと楽しみましょう、泥試合を。」

本来捕虜収容場所であった講堂にルーキー全員が籠城。
緊急学内通路からの侵入と手際の良い閉鎖と言う前代見物の暴挙のせいか、今日新規に捕らえられた者は皆無だった。

更に言えば、1度保管された校章の開放、新規捕縛者皆無と言う

状況で、既に勝負の行方は決まっていた。
ルーキーサイドの完全勝利であった。

突然のうちに中間試験は、一部の賞賛と一部の憤懣を呑みこみつ
つ終了した。

ルーキーの多くは、数年ぶりのルーキー勝利が自らの年に訪れた
ことを祝い、その成功の立役者を賞賛で迎えた。

大いに盛り上がる学生食道で僕達はヒーローとなっていた。なに
せ完全勝利などと言う事態はルール制定からこっち一度もなかった
のだから。

「・・・本当はもうちょつと続けるつもりだったんだ。」

「何を？」

「中間試験を。」

僕の発言に、ええ！！ とチームの仲間が驚きの声をあげる。

「なんで？ 人間が人間を追いつ立てるだなんて信じられないほど非
人道的じゃない。」

険しく眉を寄せたイブに、なんと説明したものかと考えていると、
響と高輝が現れる。

「どうしたんだい、皆いきり立って。」

そんな二人に事情をイブが話すと、二人は笑いながら同意した、
僕に。

「なんで！？」

そう言われた僕は、言葉こそ違えど同じ結論を出した。

「ケイドロだから。」「だってドロケイじゃん。」「ずっとドロが出来るドロケイだもん。」

「『ドロケイ』?」

「うちのほうじゃ『ケイドロ』だったなあ。」

と響。

「『ケイドロ』?」

「鬼ごっこの変形でね、警察と泥棒のチームに分かれて人数的に五分の鬼ごっこをするんだ。」

そう、色々なルールが有るけれども、このゲームを泥沼化させているのは「脱走ルール」だろう。

「警察に気付かれること無く捕まっている泥棒にタッチできたら逃げられると言うルールがあるから結構シビアだね。すばしっこい奴らが居ると始まってから暗くなるまでゲームが終わらないときもある。」

かいつまんに『ドロケイ』の話をする、みなはなんとなく頷くのだった。

「なるほど、つまりリョウ達の方がこのゲームに一日の長が有った訳か。」

こう言う遊びは、どれだけやりこんだかで勝負が決まるっていいだろう。

仲間内で当たり前の戦略も、よそのあまりやりこんでいないところに行けば「画期的」な新戦法となるわけだから。

「僕個人としては、あそこで攻守交代ルールを入れてほしいなあ。」

そんなことを呟く僕の肩がちよいと突つかれた。

何気なく振り向いた先にいたのはミスター風御門その人だった。思わず身構える僕に、ミスターは苦い笑いを浮かべていた。

「なるほど、君達の行動が迅速だったのはそう言うわけか・・・。」

納得いったと言う風の風御門先輩に僕は言葉を続けた。

「でもあそこで先輩が現れてくれなかったら、あんなに早くは片がつきませんでしたね。」

「ふむ、私はどうも自分の有利な状況に弱いらしい。」

「まあ、あそこで先輩が油断しなくても打つ手がありましたから、どちらにしても今日中に試験は終わら無いまでも期間一杯試験が続いたと思いますよ。」

「後学の為にその方法を聞く訳にはいかないのかな？」

「へへへへ、流石に秘密ですよ。今後どんな事態になるかなんてわかりませんから。」

「・・・ルールブックを端から端まで本当に読んでいるようだね。」

不敵な笑顔の風御門先輩に、僕は、僕らは笑顔で微笑み返す。

「負けませんよ。」

誰しもが心から思っていた。

中間試験は終わった、しかし戦いは終わっていないのである。

第五章 最終日

早朝、全生徒の端末に連絡が入った。

その内容は次のようなもの。

「中間試験の結果に異議を提出していたステファン」風御門氏の意見が理事会で受理された。が、現行ルール上単位の変更はありえない。勝敗の結果のみへの不服動議の結果、限定時間限定地域についての再戦の機会を与えるものとする。指定人員は風御門氏側よりの要請によって確定。指定人員は参加を義務とし、参加拒否の際は単位習得無効とするのでそのつもりで。学園長」

無茶苦茶である。

学生寮の各所からブーイングや怒声なんかも聞こえてくる。

しかし、これもまた中間試験のルールであり勝者の義務であるといえる。

本来は毎年行われるであろう再戦ルールも、ルーキーサイドからの要請が無かったために施行されなかったただけだ。

まあ、少なくとも全員で勝つと決めたその時から準備をしていたことなので、僕らとしては何の意外性も無かった。

「で、ミスターは誰を指定してきたんだ？」

端末をいじりながら、洋行さんはネット情報を集め出した。

画面に流れる新入生リストの中で、チラチラと赤いラインが表れ抜粋されて行く。

抜粋されたリストを見て、前もって予想していた内容は限りなく正しいものであることが知れた。

抜粋された人員は6人。全てうちのチームからだった。

「僕、黄、リーガフ、」、イブ、レンファ・・・かあ。」

頭をかく僕に、黄は笑いかけた。

「ま、いいじゃない？ 誰が出てもこっちがバックアップするつもりだったし。」

確かにその通りだった。

大人数でやっていた場合と違って小数対戦でやる再戦は、作戦的な自由度が無い。

本当に今日この事を知らされていたとしたら、皆でパニックになっていたに違いない。

しかし、僕達もこの日の為に試験休みを潰してからこっち準備していたのだ。

負けるわけには行かない。

開始から二時間、僕達は四方に散っていた。

少なくとも集団で動いているよりも敵の手を分散できるからだ。

試作品のアイマウントディスプレイに映し出される情報で、現在誰も捕まっていないことを示している。

あと六時間の間、無事逃げおおせるのは何人になるのかは解らないが、出来れば全員完走を目指したいものだ。

ぴぴぴ、という小さな警戒音がしたのにあわせて僕は物陰に隠れる。

アイマウントディスプレイに映される情報で、今僕のいる廊下に三人の熱源が現れたのを察知できた。

腰に下げたウェアブルPCは、消音設計のNonハードディスクなのでほぼ無音。CPUの消費電力も馬鹿みたいに少ないので、冷却ファンの存在すらない。

動作音で見つかったなんて言う馬鹿な状態にはなりたくないで、試作品に更なる改良を加えていた。

手にしたポインターをカチカチすると、それがチームでないことが知れた。

いや、事前の作戦で自らの行動範囲をほぼ限定して自分の敵をほぼ固定させるようにしているので、この建物の中に仲間が入ってくるはずが無かった。

- あと12秒で最接近・・・かな。 -
相手の近づく速度を見てそう試算していたが、五秒後には熱源が遠く離れて行った。

思わず無言のため息が出てしまう。

- これが夕方まで続くのかよ・・・。 -
がつくりと力が抜ける僕だった。

「チーチー」

小さな警戒音で目を覚ました僕は、アイマウントディスプレイで自分以外の人間が捕まったと言う表示を確認した。

時間にして今から2分前。一斉に行動した先輩達に翻弄され捕まったようだ。

仲間の行動軌跡を追って、そこから導き出される攻撃目標を見ると・・・

-・・・ばればれ・・・かな？

建物の中の防犯カメラで見る限りでは人影は無いが、ディスプレイにはちゃんと熱源が近づいていることを示す表示が出ている。

カチカチカチとポインタをじくりまわす。

次なる策は、と声にならない呟きが洩れる。

「どうだね、彼らの位置がつかめたかね？」

中庭で風御門は配下の男のノート型PCを覗きこんだ。

「いえ、さすがに何処からアクセスしているかは解りませんが、彼らが利用しているホストエリアは確定できました。」

「ん、すばらしい。」

開始から4時間。

彼らは、相手の余りある機動性に圧倒されていた。

彼らが後一步と言うところまで追い詰めるものの、忽然と消え去ってしまうのだ。

なにか裏が有るに違いないと思っていたところで、傘下の一人が彼らの装備に見覚えがあると言い出したのだ。

「あれはデニモ研の環境端末にそっくりです。」

環境端末とは、汎用性に優れたウェアブルPCのカスタムメイドで、単体で学園ネットへの接続を果たして、重い記憶層をNETに依存したNCだった。

ともなれば、彼らが移動に優れているのは当たり前前の事実と理解できる。

抜け道や隠れ場所をネットで検索し、情報交換しているに違いないのである。

そこで風御門は無闇に追跡するのではなく、情報管制を引いて燻り出そうと考えたのだった。

始めのプランとしては現在位置の割り出しであったが、さすがに強いスクランブルがかかっているためにつきとめることが出来なかった。

しかし、ホストとして割り当てられている記憶層を発見できた瞬間、彼らは勝利を疑わなかった。

「まずは、彼らに自分以外の人間が捕まったと言う偽装情報が流せるかね？」

「はい、表示フォーマットに投降という項目がありますので可能です。」

「では、やってくれたまえ。かれらを精神的に追い詰めるのだ。」

右手を顎に添えた風御門は、アクセス情報が書きかえられる様をうっとり眺めていた。

「ミスター、これで偽装完了です。」

「では次に、彼らがどのように周囲の状況を把握しているか・・・」

時間をかけるべきだろう、そう風御門は思っていた。

心理的圧迫が効果をあげる時間と、我々に一時の敗北を味合わせた代償として、と。

十数分の後に再びホストをハックすると、彼らの周囲に敵全員が自分の所にいると言う偽装情報を流すと、端末の先のリョウイズミたちは猛烈な勢いでアプリケーションを呼び出したり消したりを繰り返していた。

無目的に起動されているアプリケーションも有ることから、相当のパニックが予想される。

「さあ、彼らの逃げ道を提示してあげたまえ。」

情報の収集先をNETに集中させてしまったために、かれらは風御門の作った虚構の軍勢に追われる事となるだろう。

情報収集している内容をつかめば、最終的に何処に居るかがわかると言うもの。

そして一時間の後、風御門は各々のターゲットを袋小路に追い詰めることに成功した。

「さあ皆、彼らは仮想の軍勢を避けながら袋小路に追い詰められた。我々の最終的勝利を掴む為に、まずは彼らの首領を押さえに行こうじゃないか！」

彼らの首領、リョウウイズミが逃げ込んだ先は、第二教務塔のボイラー室。

入り口以外にドアは無いし、外からしか鍵がかからない。

ちよこつと開いていた鉄の扉を開くと、狭い室内が照明に照らされる。

四畳ほどの狭い部屋にリョウウイズミは腹ばいに伏せていた。

飛び掛ろうとする男を手で制し、風御門は入り口を閉めるように手で合図する。

ゆっくりと扉が閉められたのを見て、風御門は高らかに笑い腹ばいのリョウウイズミを掴みあげると、異常に抵抗無く持ちあがってしまった。

ぎょつとした風御門は手にした人間を注視すると、それがウエラブルPCを着けた救難訓練用のダミーだと知れた。

「ガッデム！」

力の限りダミーをたたきつけると、不意に照明が消え周囲は闇に包まれた。

「明かりを！」

風御門がそう叫ぶと、たたきつけたダミーから声が流れ出した。

『あ、どもども、リヨウ・イズミです。』

「リヨウ・イズミ！ 君達は何処まで汚いまねをすればすむんだ！」

『それはお互い様でしょう。 僕達の連絡用ホストにハックした上に模造データ-を流すなんて真似をされては、こちらもいろいろと手を出さざる得ませんからねえ。』

「うぬぬぬぬ！！」

『でもまあ、先輩が全員でその場に入ってくれて助かりました。』

怒りでも絶望でもない表情が、風御門の顔に浮かぶ。
それは焦り。

「し、しまった、すぐにドアを開けたまえ！」

ある種の予感を感じた風御門に言われた一人がドアに飛びつく。

「だ、だめです、開きません！」

『あ、大丈夫です。酸欠にならないようにそのダミーの中身は過酸素空気ですから。』

時計を見れば終了まであと2時間。

大きな倦怠感が風御門達を包んでいた。

試験終了の放送を僕らは例のボイラー室の前で聞いた。
集まった皆もすでにPCは外しており、お互いを褒め称えあっていた。

「んじゃ、開けるよあ。」

簡単な鍵を開け扉を開くと、幽鬼の如くの風御門先輩を先頭に全員が出てきた。

彼らの顔には怒りも悲しみもなく、どちらかといえば晴れやかさを感じないでもなかった。

すつと風御門先輩が右手を差し出したので、気持ち良く僕もそれに答えた。

夕焼けが差し込む建物で、何十年もまえの青春ドラマのようだけれども、これはこれで良いのではないかと思う。

「我々の情報偽装は完璧だつとおもつ。しかし君達は引つかからなかった。何故だ？」

「はじめっからあのPCは、開始から3時間以降はホストアクセスでのデータ閲覧は禁止していたんです。」

「な、なに？」

「それでも通信の必要はあったので、モールス信号を使いました。」

「馬鹿な、そんな信号など使っていなかったじゃない……」

風御門先輩はぐつと右手に力をこめる。

「……そうか、アプリケーションの呼び出しタイミングか！」

「流石はミスター、ご明察です。」

そう、相互通信の必要性に駆られた僕らは、色々と暗号データの通信を考えたのだけれども上手いかず、悩みに悩みぬいた結論がアプリケーション呼び出しのタイミングでモールス信号を送ると言うものだった。

状態はホストアクセスをしていれば判るし、データ数が少ないのも暗号というか合言葉だけで通信すればOKだ。

硬い握手の後で風御門先輩は晴れやかに言った。

「・・・これで次期生徒総代は決定した、がんばってくれたまえ。」
・・・一瞬の空白。

目が点になった僕を見て、風御門先輩も不審そうな顔になった。

「・・・じきせいとそうだい？」

「そうだ、この殆ど全校生徒を相手にしてのバトルロイヤルに勝ちぬいたんだ。十分資格があると思うが？」

胸元に隠しておいた中間試験のルールブックの印刷を片手にバンと叩いて見せる。

「ないないない、そんなルール何処にも無い！」

それに答えて風御門先輩は胸元から生徒手帳を出して見せる。
生徒運営委員会および生徒総代についての項目をゆびさして朗読。

「くなお、総代職は選挙もしくは中間試験の成績如何によって選ばれるものとする。選出方法は現役総代に一任される。」

・・・十秒ほどの沈黙。

「ぎゃーーーーーー!!」

思わず崩れ落ちる僕に、風御門先輩は勝ち誇った笑顔を浮かべるのであった。

「なるほど、日本の故事『試合で負けて勝負で勝つ』とはこの事か。」

目の前が真っ暗になった僕には何も聞こえていなかった。

第六話 中間試験（後書き）

なんだか地道にアクセス数があるのが嬉しい昨今。

ご意見ご感想お待ちしております。

第七話 冬休み逃避行

第一章

国連学園の冬は早い。

10月を越えるか越えないかと言うところで雪が降り始め、豪快なまでに雪が降り積もる。

学園が出来る以前までは、年間で殆ど雪など降ることではなかったと言う話であるが、実際に降っているのだから、そんな話など何の足しにもなりはしない。

本来ならば全校で冬休みが施行される。そして通年ではその冬休みをルーキーは味わう事は無い。なぜならば、この冬休みには中間試験における単位不足を補う為の特殊課題が行われるからだ。

課題などと言われると宿題のように思われがちだが、そんなものではない。

正直な話、勝ってよかったと実感する内容であった。

自由と博愛が謳い文句の国連学園は、その名に恥じぬ柔軟さで生徒の自由と趣味を乱すことなく数々のカリキュラムを用意している。

「んで、これがカリキュラムパンフレット？」

いつもの喫茶店で、16ページほどのパンフレットを捲って僕はため息をついた。

「そ、よくぞここまでつて内容だよ、ほんとに。冬休み中学園にいたら、間違い無く暗殺されるって内容。」

選択科目は多岐にわたっていた。

「なにになに？・・・修験道体験コース。雪の山野を駆け、氷漠となりつつある滝で滝行…。」

「八甲田山コース。かの日本陸軍遭難コースを体感勉強する。」

「おいおい、この24時間耐久小テストってのはなんだ？」

まったく小テストではない。さらに合格するまで毎日続けられるそう。

「なあ、リョウ。TVチャンピオン収録に紛れ込み優勝するってのはなんだ？」

ほかにも……

コンビニの全品を完全撃破するとか、某ギョルゲー数本を単独でクリアするとか（もちろん報告書提出）、某所で行われる冬のイベントを全日程参加遂行するとか……

一見冗談の样に見える事例全てに協賛の研究室が潜んでおり、独自の研究成果を人体実験できる好機として虎視眈々としていることが伺える。

「不気味なのはこれだな、世界一周旅行御招待。」

デニモ・アマ ندا・久長研究室が協賛している辺りで、どうも胡散臭さが拭えない。

一見何のかわかりも無いかのように見える三つの研究室が、何処までも白に見える灰色のカリキュラムを用意するなんておかしいのだ。

少なくとも世界一周を用意していて、なんの策略も無いのならば、真っ先にアマ ندا研究室の女性陣が乗っ取ってしまっているだろうから。

このところ縁深い彼女達が新しい水着や衣類を購入したという話

は聞かないので、どう考えても楽しい方向性のあるたびではないはずだ。

冷静に考えて、・・・黒だ。

「んで、どうしよう。」

冷や汗にまみれた僕らが、休みの間だけでも学園外へ逃亡すると決めたその判断は間違いの無いところなのだろうと思う。

例えそれが、世界を巻き込むような大騒動になっても、その時点ではその事を誰も予想し得なかったに違いない。

海外旅行の始めてが国連学園なのならば（国籍を停止されて国連人となったのを国外とするなら間違い無い事だと思う）、始めて飛行機に乗ったのはカナダ行きのジャンボだった。

んで、カナダは***空港は非常に広かった。

「なにボサツとしてるの。」

僕の後ろからカラカラとトランクを押してゲートを出てきた金髪の美少女イブが言う。

「・・・外国って、飛行機乗ってくる外国って初めて来るんだ。」

「だから物珍しいって？」

ある種の疑問を一瞬に氷解させるほどの美少女レンファが僕に並ぶ。

美人は飽きると言う話を聞くが、適度な美人は「慣れる」のであるというのが実感。

いつまでも顔を見るたびに言語障害を起こしてはその先への

進展が無いから。

「……いやさ、だって、……海外旅行なんて結婚して新婚旅行でもしないと行かないと思ってたから。」

ぼーっとなつてどうしようもないことを言ってしまったことに気付いた僕は、思わず顔を赤くする。

何故か最近彼女らの前での失言が多い気がする。

「まっ。」「あらっ。」

すっつと二人は僕に寄り添って、ぴたりと体を寄せる。

「それはどちらと、かしら？」

うわーん、かんべんしてくれー、と思わず嘆きを入れようとしているところで、正面から大量の光の束が現れる。

瞬間的な光は花火のようであり、それでいて太陽の光を感じさせた。

危険な物ではない。

ただの写真撮影用のフラッシュだ。

そう気付いたそのとき、フラッシュの手前に四人の人影が見えることに気付いた。

ゆっくりと近づいてくるその影は調整休暇中に見知った、今僕の双方に控える少女達の両親に違いない。

「やあ、よくきたね、リョウ・イズミ君。そして愛しの娘達よ。」

大柄なモイシャン氏は、まるで威嚇している熊の様に両手を広げて、そして僕を抱え込んだ。

ばんばんと背中を叩く彼が離れると同時に鈴氏が僕に握手を求める。

「やあ、サマーバカンスは待っていたのに、東京で一騒動起こして遊んでいたんだって？ 家族の団欒より家の娘達は君達と遊ぶほうが良いらしい。じつに我々の若い頃にそっくりだ。」

こんな報道陣のまえでそんな話をするのは・・・と思っていたが、なにやら向こうさんも悔しそうな顔をしているだけで此方には話しかけようともしていない。

ふと、学園情報機密法という強力な国際法が身のうちに登る。

国連学園に関する全ての情報は秘匿され、開発された全てのものは国連学園のものであると言っやつである。

つまり国連学園に所属する僕たちの会話自体が情報機密であり、僕ら自身が国連学園の秘匿すべき情報なのだ。

その禁を破ったものはお家断絶、というか日本の某有名新聞社が一日にして消えたのは有名だし、今をもってフランスの某TV局は活動すらさせてもらえないでいる。

そのため、誰が映っているか分からないような場合は良いが、確実に僕らの存在が明らかになるような写真は取れないし、聞いた話を記事にすることも伝え言うこすら出来ない。

つまりモイシヤン・鈴両氏の写真は撮りたいけれども、国連学生が一緒だと記事に出来ないのである。

ゆえに彼らは悔しい。

しかし、巨大コングロマリットの企業トップとはいえ、親が子供とその友達を迎えに来ると言う行動に何か問題があるのだろうか？ 黒山の、というか、色とりどりの人ばかりが出来るような事なのだろうか？

そう思って素直に聞くと、その場で四人の大人と二人の少女に爆笑されてしまった。

「本気かね?」「本気よ、彼、そう言うことにはとことんにぶいの。」
「それは面白い。」「こっちは面白いとか言ってられないわ。」
「まあまあ、そんなに笑っちゃかわいそうよ。」「でも。うふふふ、素敵ね、リヨウくん。」

まあなんというか、彼らがこれだけ笑うのだから、何かしら理由が有るのだらうと思って更に聞いてみると、笑顔な鈴氏が説明をしてくれた。

どんな企業でも、一企業である限り国連学園卒業生は欲しい、そうだ。

確かに、考えても見れば未知の非公開の知識を持って社会に下りてくるのだから、喉から手が出るほど欲しいだろう。

それなのに、モイシャン・鈴両氏の子女は二人そろって国連学園に入学を果たしている。

いずれ企業運営に関わるであろう実子が国連学園生なのだ、労することなく二人の卒業生を得ることを約束されていると言うのに、その上でボーイフレンドを連れてきたのだ。

これは彼らの企業が地盤を置く国にとって由々しき事態と言えるだろう、と。

「ぼ、ボーイフレンドオ?」

「ちがうのかね?」

「いや、その、あの、チームメイト、で、あります。」

「なるほど、ではチームと考えると更に事態は深いものとなる。」
「はあ?」

世間にも国連学園内では一人で活動するよりもチームで活動することが多いことが知られている。そのチームメイトは国家を超えたつながりであり、彼等のつながりによって紛争の多くがこの世から

消えたといっても良い。

そんな強固なチームと言う繋がりを中心に、この世界屈指のコングロマリットのトップに我が子の様に親しみを込めて対応されているのだから視線も集まると言うものだろう、と彼らは言う。

「は、中心？ 誰がですか？」

「君だよきみ。情報鉄壁カーテンの向こうに繰り広げられた中間試験の結果なぞ、我々にとっては労することなく手に入れられる情報なのだよ。」

げえ、と思わず顔をしかめる。

「いや、済まないと思ったがね。商人と言うものは意地の汚いもので、知れる情報は何でもあつめなければ済まないものなのだ。」

さつと差し出されたそのプリントアウトには、中間試験における詳細と結果などが記載されており、なんと「ドロケイ」などのルールや地方ルールまで書いてある。

読み進めてみれば、なんと入学当初の親睦会のことから載っているではないか。

流石に学園内でも完全情報規制が行われた「幽霊騒動」には一つの記載もないのが唯一の救いだ。

「これだけの騒動の中心人物でありながら、あの中間試験代表されるように将来を嘱望されている。そんな人物を中心人物といわずしてなんという？」

「さる情報筋から聞いた話しでは、次期生徒総……」そこまで喋りかけたモイシャン氏と鈴氏の口を、僕は無理やりふさぐ。

「ミスター、『絶対の秘密』と『公然の事実だけど秘密』ってのは違うと思いませんか？」

こんなに口の軽い二人がどうして企業トップになれたんだろうな
どと悩んでみたが、背後に控える両婦人の姿を見た瞬間なんとなく
納得する僕だった。

パーティー・パーティー・パーティー・またパーティー。

西洋系社会と言うのは何でも立食パーティーが好きなのだろ
うかと僕は首を傾げる。

にこやかな笑顔で対話するモイシヤン・鈴両氏を遠目に見つつ、
僕は目の前にあるテーブルのローストビーフをつついていた。

この短い期間の中で、対話というのは格闘だな、と僕は感じた。
パーティーの名目は一先ず置いておいて、さりげない会話の中で
自らの要求を相手に快諾させると言う状況を見てみると、嫌でも距
離を取りたくなると言うものだ。

最初は両氏とも僕を連れて歩きたがったが、頑なに遠慮をしたた
めに許してくれたようだ。

彼らに話しかける人間も、僕がそばにいないことを喜んでいるよ
うに見える。

まあ、彼らが行う戦略的会話を真っ向から崩してしまうような素
人が居るよりも、居ないほうが良いに決まっているから。

小腹が減っている僕は次なる獲物を探していると、テーブルに寄
りかかるように一人の初老の女性が背中向けで立っているのが見え
た。

側で会話している重役風の男と政治家風の男との会話を聞してい
る感じであったが、なんとなく苦しそうに見える。

気になって、つつつと寄ってみると、丁度手が届くぐらいになっ
て彼女の体がふらついた。

反射的に彼女を背後から支えるて、余計なことを言ってしまった。

「大丈夫ですか？ おねーさん（フロライン）」

背後がドイツ系の雰囲気だったので、思わずドイツ語な確認だったが、いくら何だっって言い過ぎだよと、自分でも反省。「フロライン」は無いだろう、「お嬢さん」は。

しかし受け止められた女性は、そのままの姿勢でげたげたと笑い出した。

「にーちゃん、いくらなんでもこの年でお嬢さんな訳ないだろう。」

ざつくばらんな口調に僕もつられて苦笑すると、彼女は少しこのままにしていってくれと言った。

軽く了解をすると彼女はすつと力を抜いた。

重役風と政治家風の男達は慌てて彼女に老女に近づこうとしたが、彼女は片手でピツと拒絶。それを受けて男達はうろたえた。

「若い子に抱きとめられるなんて、何年振りかねえ？」

嬉しそくに僕を見上げるように振り向くと、彼女は体を硬くして驚愕の表情を浮かべた。

硬い表情が徐々に和らぎ、そして喜びに溢れる。

もちろん、僕も驚きで一杯だった。

「リョウちゃん、ひさしぶりだねえー！！」

「グッツテンねーさん、ひさしぶりー！！」

共に日本語で叫んだ僕らは、大きく抱擁を交わした。

「なんだなんだい、何年ぶりだか。・・・五年、五年ぶりだよ。い

や、久しぶりだねえ。元気にしてたかい？」

砕けた口調のグッテンーさんは、バーちゃんの一番弟子を名乗るドイツ人で、さる昔に色々とヨーロッパでバーちゃんと一緒に暴れたそうだった。

僕が小さいころも、バーちゃんが行方をくらませてからも、何度も何度も訪ねてきてくれた優しい人だ。

「はい、みんなに迷惑かけながら元気にやってます。」

につこり微笑んだ僕を、グッテンーさんは怪訝そうに見た。

「・・・ところで、リヨウちゃん。なんでこんな泥臭いパーティーにいるんだい？」

どろくさい？ まあ、確かに泥臭い。

西洋的ロビー活動という戦場だもの。

「主賓に御呼ばれしたんです。」

「主賓・・・つていやあ、鈴とモイシャんとこのムスメッコ達かい。あのぼんくら親父どもに似ないで頭のいい子達だけど・・・」

何か考えたグッテンーさんは、ひひひっと、いつもの笑いをした。

「・・・なんでもさ、ふすめっこふたりで惚れた男のお披露目が今回の目的らしいつつのが笑えるさね。目の中に入れても小躍りしているような可愛がりかたしていたつつのに、どんな小僧が二股かけたんだか。それを馬鹿親父どもは気に入っているってっ

てんだから大爆笑さね。」

言っている内容は内容だが、彼女自身の言葉に悪意は感じない。十分面白がっていても、その実「ムスメッコ」の目が曇っていたら活を入れてやろうという思いが溢れている。

「グッテンねーさんは、イブとレンファを知っているんですか？」

「そりゃ知ってるさ、こーんな小さい頃から遊んでやってるからねえ。結婚もしてないあたしにとっちゃあ娘みたいな気がするね。」

「孫でしょ？ 孫。」

「やかましい。ちよつとぐらいサバ読ませろ。」

かっかつかと笑うグッテンねーサンは、不意に眉をひそめた。

「……りょうちゃん、その服つてもしかして、第三礼服かい？」

「……ええつと、実は、国連学園に入学しました。」

瞬時、彼女は大笑して僕の背中を叩く。

「ひゃっはっはっはっは！ じゃ、お譲ちゃんたちを垂らしこんだのは、りょうちゃんかい！？」

げたげたと笑う彼女であったが、不意に優しげな表情になった。

「……そうかい、そうかい。流石はあの人のお孫サンだねえ。」

嬉しそうな彼女に対し、なんとなく照れみtainものを感じる。肉親に誉められるとこんな感じなのかもしれないと。

「墨田のじじーも、ぶんぶくれだろうねえ。『アタシがボンを責

任持って成人させるんでヤス！』って息巻いていたくせに、りょちゃんに逃げられるたあ情けない。」

「じっちゃんから逃げたわけじゃないんですよ。どうしても学園に入学する必要があつたんです。」

僕の真剣な表情に、グッテンねーさんは苦笑した。

「わかってるよ、りょちゃん。おまえさん、墨田のじじーやアタシに気兼ねしているんだろ？」

まあ、そういう理由もある。

しかし、誰にも話していない本当の理由は別にある。
国連学園に入った本当の意味が。

漫才よろしくで日本語も巻くしあう僕とグッテンねーさんの周りに人巻きが出来始めた。

「おやおや、りょちゃん。いい男だからみんな気になるらしいいねえ。」

ちよいちよいとつつくねーさんに僕は顔をしかめる。

ざわざわと人が集まり出したところ、モイシャン・鈴の両ファミリーが登場した。

それに合わせて彼女に耳打ちをする。

「ねーさん、ちょっと話を合わせてもらえませんか？」

「なんだい？」

「じつは、りょーこさんの事を、モイシャン氏と鈴氏には『母』と紹介してしまして…。」

「・・・？ 行方不明じゃなかったのかい？」

「幾分込み入った事情が・・・」

「・・・いいねえ、悪巧みは大好きだよ、あたしゃ。」

そんなやり取りを不審にも感じなくてか、二人の主催者はグッテ
ンねーさんに笑顔を向けている。

「これはこれはグランマ、御元気そうで何より。」

「おや、リヨウくん。グランマと御知り合いかね？」

グランマと呼ばれてねーさんは鼻を鳴らす。

彼女は年寄り扱いされる事を非常に嫌う。

以前など、ばばー扱いした僕と口論の末、力技のグッテンねーさん
に負けた。神社の御神木へ逆さ貼り付けにされた事もあるし、両
足を縛られた状態で川に放り込まれたこともある。カテゴリー的に
幼児であつた僕に対して、幼児虐待とか言うレベルをはるかに超え
た攻撃をする恐ろしい人だ。

「たえお世辞でも『お嬢サン』とぐらい言つて見せるのが男の甲
斐性つてもんじゃないかい？」

「これはこれは手厳しい。」

「反射的に『フロライン』って呼べるような洒落つ気の無い男達と
付き合うのつてのは、そりゃー疲れるつてもんさねえ。」

きらりと光る彼女の視線に、モイシャン・鈴両氏が顔を蒼くする。
背後の婦人達の顔も引きつっているあたりで、なにやら良くない
状況なのがしれた。

緊迫の一瞬、ねーさんは声を立てて笑う。

「なにびびってるんだい、冗談だよ冗談。」

あからさまに安堵の表情を浮かべる二人の紳士に老女は言葉を重ねた。

「あんた達の無粋さは変らないがね。・・・その代わりといつちや何だけど、この子とお宅のむすめっこ二人を、あとでちょっと借りるよ。」

軽快な笑い声と共に、ねーさんはパーティー会場から姿を消すのだった。

暫く固まっていた二人の紳士は僕に飛び掛るように詰め寄る。

「りよ、りようくん。グランマとは何を話したのかな？」

「い、一体全体どうなっているんだね？」

ちよつと考えて口にする。

「・・・リヨウコさんと昔っからの知り合いで。僕も昔からお世話になってます。」

「なんと・・・」「ジーサス」

口々に天を仰ぐ二人の紳士を他所に、婦人達は面白そうだと目で語っていた。

「ひゃっひゃっひゃひゃ、そうかい、そうかい。そいつは面白いねえ。」

パーティー会場でグッテンねーさんにあてがわれた部屋に行つた僕は、五月調整休暇の時の大騒ぎの顛末（真実のほう）を彼女

に聞かせていた。

彼女の前でのイブ・レンファは、まるで借りてきた猫のような大人しさで僕の話しに追従するだけの存在であるかのようにだった。

良く言えばお行儀良い、本当のことを言えば気持ち悪い、そんな仕草。

「しっかし、そんなにそっくりなのかい？」

「皆はそう言っていますけどね。」

肩を竦める僕を彼女はまじまじと見つめていた。

「見てみたい…ねえ。」

ぱつと身構える。

それを見たねーさんは邪悪としか言いよつの無い笑顔を浮かべる。

「…イブ、レンファ。やっちまいな。」

蓮つ葉な物言いに反応した少女二人。

何時もの悪ふざけしたときの顔ではない、どうしようもない力にあがなえないと言う表情であった。

それでも手際が言いと思うのは気のせいであろうか？

くおよそ10分

仕上がった顔を見て、今までの借り物のような表情だった二人の少女は、瞳の潤んだ見慣れた雰囲気となった。

細かいところを自分でやるときに眼鏡を外したのが原因だと思う。

手鏡で小修正をしてねーさんに向き直った瞬間、彼女は感嘆の息を漏らした。

そつと伸ばす手は微妙に震えており、まるで腫れ物に触るような思いを感じさせる。

「…………リョウコサン、そつくりじゃないかりょーこさんに。」

大量の涙にあふれさせた彼女は、ゆっくりと僕の胸の中に倒れこんできた。

「…すまないね、りょうちゃん。暫くこのままにしてくれないかい？」

涙声の彼女に僕は無言で頷く。

その気配を感じた彼女は、静かに静かに泣くのであった。

「なあ、りょうちゃん。お前サンの目的はんだね？」

泣き止んで暫くのことだった。

赤い目を腫らしながら彼女は聞いた。

思わず僕が肩を竦めると、不敵な年齢相応の笑顔を浮かべ彼女もそうした。

「流石にそつくりだよ、そんなところもね。」

「そうですか？」

「ははは、そんな風にとぼけるのもあの人は得意だね。……まあいいさ、今は言えないんだね？」

「……ええ。」

「なら聞かない。でもね、あたしゃー昔からりょうちゃんがおきに

僕は翌日早々にカナダを立つ事にした。

それは件の「グランマ」と既知の仲である事を、周囲の人間に知られてしまったからだ。

ただの老婆ならば知り合いでも問題無いだろうけれども、あの人はそうではなかったのだ。あのパーティーに集まってきた人間の殆どがあのお女を目的にやってきていたのだという。

「あの方はね、世界中の銀行資金の半分を握っている方なの。」

ねーさんを送り出した後、再び別室で二人から聞いたことだった。

「少なくとも、北米・ヨーロッパであの人に逆らえる人間は居ないわ。」

「国のトップともなれば、全世界の80%はあの人の言いなりね。」

空恐ろしい人間も居たものだ。思わず化粧落としの手が止まってしまった。

「でももつと恐ろしいのは、あの人にもう旦那さんも子供も居ないって事なの。」

彼女は傑出した好人物で、そして限りなく一般人であった。

そのため我侭はほとんど無いし、政治干渉も殆ど無いので誰もが恐れながらも近年まで触らぬ神に祟り無しで通してきたといっても良い。

しかし最近になって、彼女の体調が思わしく無くなってきたのだ。それによって浮かび上がってきたのは「後継者問題」。

彼女の資産を後継した者こそ、真の意味で世界を握るものといっても良いだろう。

彼女の資産がすべて引き出されれば、实体经济自体が全て消えて

しまつのだから。

「その人が言ったのよ、全面的にバックアップするって。」

重い、重い沈黙が僕らの間に流れた。

「その上、全部をリヨウにまかせて隠居するとか言ってたものね。」

更に重い空気が室内を占める。

「僕にとっては、昔からの知り合いで、ばーちゃんの友達で……受け取る謂れも無いんだけど……。」

長い時間の沈黙の結果が早朝発の飛行機となった訳である。

世界転覆の鍵を握ってしまったと人に思われるであろう僕と、その事実を知ってしまったイブ・レンファ。

再び仲良く逃亡とあいなつた訳であった。

「でも何処に行くって言うの？」

第三礼服に大型トランク姿のレンファが首を傾げる。

帽子の羽がゆれ、優美な曲線を描きだした。

こう言う仕草が似合う人間が着ると、非常に優雅な礼服のはずの第三礼服は、なぜか僕が着ると仮装行列の真中の人ぐらいにレベルが落ちてしまう。

「少なくとも直行便で行けるとところに逃亡先は無いわよ。」

同じく非常に似合うイブ。

なんでここまで見た目が違ふのだろう？

普段は見た目なんかどうって事ないと言っているのだけでも、
こつも違つと凹むな。

まあ、こちらはこちらでがんばりましょう、そんな気持ちをこめ
た笑顔で、懷から三枚のチケットを取り出した。

「なに、グッテンねーさんの支配が資本主義社会圏に広がっている
のならば、出来たてはやはやな共産主義圏に逃げ込めばいいんだよ。

」

三枚のチケットの行き先は香港。

ルームメイト黄「天祥が里帰りしているのを良いことに、顔見せ
がてらお邪魔しようと言うのである。上手くすれば新年のイベント
や、お祭騒ぎに明け暮れている間に冬休みが終わってくれるかもしれ
ない。

思わずため息のレンファ。

「なに？」

「グランマを『グッテンねーさん』なんて呼び方出来る人間が、こ
の世界に何人いるのかしらって、思っただけ。」

軽く肩をすくめる僕。

「君たちが『グランマ』と呼ばせてもらえているほうが驚きさ。あ
のひとをババー呼ばわりして何度ひどい目にあつたか。」

その言葉に何を思ったか、二人の美少女は笑顔を引きつらせてい
た。

「で、いつのまに手配したの？」

「ああ、ちょこつと電話したら、黄の関係者の華僑さんから回して

貰えたんだ。」

実のところそんなに簡単なことではなかったのだけれども、まあ込み入った話をする必要も無いので説明を省くことにした。

赤塗りの中華航空機に搭乗した僕達三人は、一路香港へと向かって行った。

広いシートでぐっすりと寝ているところを、両脇に座っている少女達に起こされた。

黄家の関係者らしい、もったもな高級感溢れるシートのおかげか寝起きは割とよく、パチリと目を空けると、いやーな光景が目の前に展開されていた。

片手を挙げている男が握っているのは、パイナップルとの俗称の有る手榴弾。

その横では小銃を構えた男が油断なさに周囲に警戒している。

「…これ、何の余興？」

げんなりと小声で言うと、耳元でレンファが呟く。

「どうやったかは知らないけれども、機材更新の時に潜り込んだらしいわ。まだ要求は出ていないの。」

まあ何を言っても、最低三つの要求は変わらないだろう。

「・・・仲間の開放・金の確保・政治亡命ってのが不朽の黄金パターンだね。」

そう言う僕を、二人の少女は眉をひそめて見た。

危機感が足りないと言う風に見ているように思える。

なめている事は否めないが、仕方が無い事だろう。

なにせハイジャックというテロは、前時代的にして最も効率が悪い。

現場に自分がいなくちゃいけないし、その上、最も効力を発揮する時には自分も粉みじんになっているのだから。

もちろん、どこか有名な建築物に突っ込むというなら効果絶大だが、人質として乗客を残している時点で、旧来的なハイジャックなのだろう。

しかし、そんな古めかしいテロに出るという事は、彼らも十分追いつめられているという事だ。

そんな現場で余計な事を言うのは、些か配慮にかけた行為かも知れない。

ちよつと反省。

そんな風に言う僕に対し、自動小銃の男がジロリと睨んだ。

「おい、色男。見せしめって知ってるか？」

「中国語で一罰百戒ってのだろ？」

一人の人間を惨たらしく惨殺することによって、後の人間に警告を与えるって言う言葉。

まあ彼らがスケープゴートと言う単語を使っていたので、間違った解釈ではないと思う。

にやりと嫌な笑いを浮かべたその男は拳を振り上げた姿勢のままでぴたりと止まる。

「貴様ら・・・国連学生か？」

「それ以外でこんな恥ずかしい服、誰が着てるって言うんだよ。」

ぐっと言葉を詰まらせたその男は、暫く口を閉ざしていたが、急

に狂氣的な笑い声を上げ始めた。

「そ、そうか、そうだったのか。俺達にもつきが有るってもんだ！」

ひとしきり笑い終わった男は、ぞつとするような瞳の色で僕達を見つめる。

不意に機内インターフォンを手になると、朗々と声明を口に始めた。

「我々は国連学園廃止運動体『赤の星』である！」

ひやー、そんな思いが僕の背中を走る。

赤の星といえば、旧ソビエト官僚組織が中心になって発足させた、国連学生生成委員会の残党組織で、一般国立推進機関学校と同じレベルでしか入学数を伸ばせなかったために廃止させられたというのが、実際にはこの入学希望者で集まる生徒の底辺が低すぎたためとか、組織自体がリストラ候補者を集めて作られたものであるとか言われている。

事情に通じた人間ならば誰でも知っている話だ。

リストラ候補になった人間達は、政府を恨み、そして国連学園をうらんだ。

自ら鍛え上げた生徒達を入学させないくせに、他の機関からは大量に入学希望者達を受け入れていたから。国が自分達以外に国連学園関連組織を作り運営していたから。

ねじくれにねじくれた彼らは、解散命令と同時に自らが作り上げてきた天才達と地下にもぐり、赤い星の中核となったのだ。

実は近年行われた残党狩りによって、その多くの幹部達は現在の段階で既に監収されており、世の中で一番安全になった国連学園反対過激派であるというのが世間の見解だった。

が、目の前で彼らはテロに興じている。

世間の評判などあてに出来ないと言うものだ。

「我々の目的は四つ！ いち、収監されている仲間の開放。に、活動資金10億ドルの供給。さん、我々の罪を現時点で全て帳消しとする事！ その四、現在の国連学園をこの地上から無くす事！……以上の要求が満たされない場合、本機体の安全は保障しかねるものである。なお、本機体には国連学園学生が三名乗っていることを確認するものである。」

お約束の要求に、僕は小さくため息をついた。
なんでトラブルばかり舞い込んでくるんだろっ、と。

赤い星の声明は世界同時通訳され、各メディアを走り抜けていった。

そしてその情報の光が地球を200周したぐらいになって飛行無線に連絡が入った。

相手はまず国連学園学生が本当に乗っているかを確認させると言うので僕と二人の少女がコックピットにやって来た。

『…学籍番号と姓名を言いたまえ。』

浪々としたその口ぶりに聞き覚えの有った僕は、思わずその答ではない言葉をつむいでいた。

「あれ、ミスターじゃないですか。どもども、こんちわー」

『なっ、なんでそんなところに居るんだ、リョウくん。』

「イブもレンファも一緒ですよ。」

「ハイ、ミスター。ご機嫌はいかが？」

「ニイハオ、ミスター。朝早くから御免なさいね。」

『私のところに届いている資料だと、君達はカナダに滞在する予定になっているはずだが?』

「ああ、まあ、実は色々とありまして。」

『きみは、いつでも色々と有るな。どんな時でもトラブルの中心にいる。』

「それは卓越ですわ、ミスター。」

「一緒に居れば、人生をとて楽しめますわ。」

乾いた笑いの交換のあと、ミスターは硬い声で言った。

『…現段階で私達に出来る事は、君達の安全を無線越しに確認する事だけだ。』

つまり、要求など聞くつもりも無いし、手加減だつてしないと言う事。

「いやいや、じつは有る事をお願いしようと思っっているんですが。」

『犯人達の感情を逆なでしない内容で有る事を祈るが…、なんだね?』

「こんな事も有ろうかと遺言がデニモ教授の所の端末に入れて有るんですよ。E-3で開いてください。」

「おい! 貴様、この事態を予期していたと言うのか!」

柳眉を立てる犯人に皮肉っぱい笑顔を見せる。

「なにせ海外旅行つて初めてなもんで、遺言を何パターンか書いておいたんですよ。僕らつて意外に狙われてますからね。」

『判った、デニモ教授の所の端末に行けば判るんだな?』

「はい、E-3つて言えば判ると思います。」

『試験の時もそうだったが、君はあらゆる事に用意周到だな。』

苛立たしく、風御門先輩の指が机を叩く。

「試験の時もそうでしたけれども、大概は出たところ勝負なんですよ、僕って。」

呑気な会話に割り込むようにハイジャック犯は怒鳴り散らし、僕らをコックピットから追い出したのだった。

パイナップルの男は僕達の側に立ち、神経質そうにちらちらと此方を見ている。

イブやレンファに悪さをするつもりなのかと警戒していたが、どうもそう言う訳ではないと言ったことが直に知れた。

男は落ち着き無さげにうろろろしていたが、意を決したように僕の前に立って、蚊が囁くような小さな声で言った。
帽子をかぶらせてくれ、と。

「え？」

「……帽子を、被らせてくれ。頼む！」

切実な表情で言う彼は、始めの印象とは違い、なにか少年の雰囲気を感じさせた。

左右で寝たふりをしていたイブとレンファもびっくりして彼を見ていたが、真剣さは見取れたようだ。

いいよ、と気楽に僕が彼にかぶらせると、輝く笑顔でその姿を鏡に映していた。

「……にあうか？」

「僕より数倍にあうと思うよ。」

「そうか！」

単純に喜んだ彼は、自分の名前をミールと名乗った。

彼は創設時からのメンバーで、年齢が低かったために収監は免れたが、日夜活動には余念が無いと言う。

どんな活動をしているのかといえば結構素朴で、活動資金を稼ぐためにアルバイトをしたり、機関誌を発行したりと言うものだと言う。

彼が描く諷刺マンガは好評で、機関誌の枠を越えたニーズが有るとか無いとか言う話だ。

IRA等の血なまぐさいテロリストを予想していた僕は、拍子抜けしてしまったといっても過言でもない。

「おまえたちはいいやつらだな。」と苦い笑顔で言った彼だったが、それでも国連学園は許せない、と彼の目は言っていた。

何故なのだろう？ そう思って直接口にしてみると、何の逡巡も無く答えが返ってきた。

「真実に学習を求める貧困の家庭には門を開かないくせに、金持ちばかりに門を開く！ 英語圏以外には柔軟な入学システムを持っているといいながら、その実英語を喋れないと入学も出来ない！ お前たちだつて金持ちだろ？ 親が金を持っているからって楽に入学できたんだろ？」

大変心外な話だったので口を開こうとしたところ、僕の両脇から烈火のような言葉が走る。なんとロシア語だ。

「貴方、私やレンファをどう思おうとかまいませんが、彼を同じように評価することは許せませんわ！」「イブや私は確かに生まれに

恵まれましたけれども、彼は生まれた以降が困難の塊だったのよ！
」

彼女達は身振り手振りを交えて僕のことを言い始めた。やれものごとろつくまえに両親が飛行機事故で亡くなったとか、幼い頃から一緒にだった最後の肉親で有る祖母も行方不明だとか……。

「じゃあ、おまえ。どうやって受験したんだ？」

答をロシア語で考えていたためか、何の躊躇いもなく反射的に言ってしまった。

「人様には言えないようなアルバイトで稼いだ。」

その言葉にはイブやレンファも目を剥き、僕を覗きこむ。
この目は何か面白いものを見つけた時の猫と一緒に違いない。

「……そうか、苦労してるんだな。」

なんとなく気落ちした風の男は、僕に帽子を返してその場を去って行った。

「ところでリヨウ、人には言えないアルバイトって私達にも内緒なの？」

「人心と法律に抵触するようなことなので、ここは一つ勘弁してください。」

「……許すと思う？」

ハイジャック犯達の指ひとつで吹っ飛ぶであろう飛行機の中とは思えない呑気な会話が続くのであった。

軽い睡眠の後、機体が高度を下けているのがわかった。

耳が痛くなるような急激な気圧変化は、多分着陸体制に入ったからだろう。

同じように耳の違和感で起きたであろうレンファがこちらを覗きこんだ。

「何処かしら？」

「時間からすれば・・・環太平洋西側北半球って所かな？」

「それって判らないって事でしょ？」

「そうとも言っね。」

実りの無い会話を切り上げた僕達は、結構見慣れた風景が眼下に広がっているのを見た。

そこは特徴的な場所、極端に平地が少ない、長めの列島諸国。僕らのホームのあるあの国。

「日本だわ」

イブが何時の間にか起きて下を覗き込んでいる。

僕はその風景を苦笑いで見つめていた。

眼下に見える道路は、間違いなく東名高速道路。

見える風景を察するに、静岡国際空港に着陸するつもりなのだろう。

国連学園付属といっても良いその空港に降り立つ赤い星。

彼らなりに燃える展開なのだろうと察する事も出来るが、どちらかといえば日本行政の腰の弱さを狙った行動にも見える。

どちらにしても世論は紛糾している事だろう。

「皆さん、本機は現在高度を落とし、日本の静岡国際空港に着陸する予定となっています。多少のゆれが予想されますのでシートベルトをご着用下さい。また、着陸体制に入りましたら、席のリクライニング・テーブルを元の位置に御戻しいただくようお願いいたします。」

職業意識の御かげか、スチュアーデスの言葉に一点の曇りも無かつたのだが、背後から女性の声で「^{ガンバレ}加油」と聞こえた。

この状態が如何に危険かが知れる瞬間に思えた。

「リヨウ、何するの？」

イブのその問いは「どう」ではなく「何」という、正に僕が何かを企んでいるかのように思えるもので、反対に首を向けてみるとレンファも同じような顔をしていた。

「…まるで、僕が何かをたくらんでるみたいない方は、やめてほしいなあ。」

「あら？　だってデニモ教授の所の端末E-3っていえば、あれじゃない。」

「そうよ、少なくとも私達なら出来る事があるとと思うわよ、E-3ならね。」

どうやら僕がミスターに何を託したか彼女達は判っている様だった。

出来れば同じような聡明さで向こう側も理解して欲しいところだが、その辺は心配無いだろう。ミスターも即座に試験の話の事を持ち出していたし、今回の方針も断片的に伝えたのだから。さらに言

えは向こうには、世界最高学府に通う、綺羅星のような天才達が居るのだ。

静岡空港に無事ランディングし終えた赤い機体は、空港施設に近づくことなく滑走路に位置していた。

そこは見通しが良く、警官隊や自衛隊が円状に包囲している事が知れる。

「いやー、凄い事になってるねえ。」

ニヤニヤ笑いの僕は目的のものがあるか見回した。
するとあるわあるわ、テレビ局の中継アンテナに偽装した装置の数々。

自衛隊の装備とは一線斯くした洗練されたデザインの数々。
思わず嬉しくなってコツコツとリズム良く窓をノックする。
それと同時に機内放送が僕を呼び出した。

『リョウ・イズミという男。コックピットに来て欲しい。』

優しい頼みかたであったが、素直に従わないと、その言葉の外に「人質の命が惜しくば」という文学的な色合いの無い修飾語がつくことになる。

反吐が出るほど嫌な話だ。

二人の少女を残してコックピットに行くと、そこは先ほどとは違った緊張に包まれていた。

三人ほど居るハイジャック犯たちは皆汗を流しているし、機長と副機長も何か緊張気味だった。

「何の用でしょう？」

「貴様は、その、国連学園生徒だな？」

「ご覧のとおり。」

「そして日本からの入学だな？」

「はあ、英語に苦労しました。」

ぐつと言葉を呑み込んだ一人が、搾り出すように言葉をつむぐ。

「…ミス・キヨネの教え子だと言うのは…、本当か？」

「何処でそんな事を聞いたんですか？」「質問しているのは我々だ！」

絶叫にも近い彼らの問いに、僕が頷くと彼ら表情は信じられないほどに柔らかくなった。

「では君が、日本の公立中学校から試験を受けた合格者なのか？」
「…僕自身の情報を含め、国連学園機密維持法に抵触するので何も言えないことは理解して頂けますよね？」

この質問自体が答のようなものだ。

三人の男は喜色を浮かべた表情でインカムを僕に渡すのだった。

「要求はもう一つ増えた。ミス・キヨネをこの場に呼べ。」

「何で？」

「人質の命は惜しくないのか？」

「…日本人は過去、テロリスト達に屈しました。絶対にしては行けない事をしたんです。その過ちを僕に繰り返せと言うのですか？」

冷え冷えとした視線に何を思ったのか、彼らは差し出したインカムを引っ込めた。

「でもまあ、ギャレー要員の補充を条件にその役目を引き受けましょう。」

彼らからインカムを奪り取るようにして僕は通信機の火を入れた。

「……というわけで、年の押し迫った時期に申し訳無いですけれども、ミスターその辺何とかしてもらえないでしょうか？」

神経質にコツコツとインカムを指でつつきながら、僕は通話していた。

「判った、何とか連絡をつけて2時間以内にそちらに向かわせよう。」

「すみませんです。こっちもなんでそんな要求されるのかわからないもので。」

「……まあいい、こちらからも連絡だ。収監されている幹部の開放については現在閣議中だと言う情報が入っている、が、例によって難しいだろう。遺言の件は了解した。これでやっと試験で負けた理由が判ったよ、安心して冥土に旅立ってくれたまえ。」

ミスターもマイクの向こうでコツコツと神経質そうに机を叩いている。

温もりの無い会話が終わると、コックピットの三人は沸いた。

早口で何かを言い合っていたが、こちらを向いて日本語で「アリガトウ」を連発している。

何の騒ぎかわからなかったので、さっさとその場を去って席に戻りその事を二人に告げると心底馬鹿にされてしまった。

「何考えてるのよ、リヨウ！ ミス・キヨネは今じゃ世界的VIPよ！！」

何ででしょう？ そんな風に聞くとレンファが凄い顔で睨む。

「あのねえ、国のバックアップ無しに一介の教師が、単なるワンツーマン体制だけで僅か七ヶ月で、生まれてから十数年間一般学習をしていた人間を国連学園に送り込んだのよ！

全く無名のマラソン趣味の男の子を、一年も満たない期間でオリンピック選手にして金メダルとらせてしまったようなものよ！

世界各国でニュースになったのよ？ 今だ国立施設からの勧誘が山ほど有る上に、国連学園情報部・日本国家公安委員会・CIA・SASS・MI6・SAMODもろもろの監視体制に24時間置かれてるのよ！」

「え？」

「それも全てはリヨウが『国連学園にいきたい』と言ったから。それを実現させたからなのよ？」

なにか目に見えない重いものが背中の上にのっかてきたようなきがしてきた。

「そんな人間を赤い星が手に入れたら、間違い無くこの空港は戦場になるわ。」

うわー、と思わず背中に汗が大量に流れ落ちる。

しかし既に矢は放たれたのだ、後戻りは出来ない。

そんなこんなしているうちに2時間は過ぎ去り、約束の時間となっていた。

機内がざわざわとしはじめると同時に、機体の背後から聴きなれた音楽が流れてくる。

聞いた人間によっては思わず座って右手をひねりたくなるような音楽。

「なんで、軍艦マーチが…。」

ぐぐぐつと首をひねって音のほうを見てみると、緑色のバンの上に御立ち台と巨大なスピーカーをつけた広報カーがものすごい勢いで走ってくるのが見える。

さらにその御立ち台の上にスタンドマイクを手にした女性が立っているではないか。

その人が何者が認識できた瞬間、僕は眩暈を起こした。

「なんで右翼の広報カーなんかに乗って来るかな、あのセンセは。」

「え？ 格好いいじゃない。」「そうね、なんか痺れるほどのエナジーを感じるわ。」

イブとレンファの評価は機内の誰にも通じるらしく、機体右側に止まった広報カーを一目見んと窓に人間が鈴なりになった。

暫く車を運転している人間と言葉を交わしていた清音センセは、手にしたスタンドマイクを握り声をあげた。

『あー、あー、マイクのテスト中！』

広報カーに積まれたスピーカーから、機内でもわかるほどの大音量でセンセの声が聞こえる。

『赤い星、聞こえたら機内照明を点滅なさい。』

すると機内照明が点滅する。

宜しいとばかりに頷いたセンセは、再び声をあげる。

『貴方達の要求通りに私は来ました。…しかし現在、空港施設の各所から貴方達を狙撃せんと待ち構えている団体が多数あります。ゆえに、私はこの場で、滑走路で貴方達の話聞くことを決意しました。この方法の利点は三つ。一つ、オープンな音声なので貴方達は卑怯な事が出来ないし、世界的に私達もだまし討ちが出来ない。二つ、日韓米の合同軍の射線上にこの車があるので、一切の射撃を阻止できる。三つ、情報回線を通していないのでハッキングがされない。以上！』

センセは自分の言葉が理解されるまで十数秒同じ姿勢でいた。

『……我々、赤い星機動班は、ミス清音の申し入れを受諾する。』

機内放送に雑音の混じった声が響いた。

多分、多チャンネル放送で声を発信しているのだろう。

『受諾を感謝する。』

センセは、聞いたことも無いような硬い声でその無線に答えた。

『我々赤い星は、ミス・キヨネを同士となることを要求する。』

感情の一切を無視した冷たい声は、その実胸の奥に渦巻くような熱い感情を意識させた。

『答えは「否」。脅迫されて付いて来るような奴なんか、あなたた

ちだって用は無いはずよ。』

『国連学園に携わったのなら知っているはずだ、あの強大な権力、あの無慈悲な権力を！』

血を吐いているかのような言葉であつた。

確かに恐ろしいまでの権力が有るといえるだろう。

国連学生が四人ほど集まれば地域の国連軍を動かす事が出来る元帥府が開設できるし、あらゆる警察権力や政治権力・軍事関連施設等に干渉する事が出来る。

無論その背景には絶対の理由が必要だが、権利として有している事は間違い無い。

『あらゆる正論はテロ行為によつて嘘という泥に塗れた子供の綺麗事と変わるわ。己の主張を通したくば、通せる立場になりなさい！』

どんなに正しい主張があろうとも、国法を犯して主張すればすでに受け入れられるものではない。スーパーでお菓子をねだる子供の我侭と違いは無いのだ。

『我々には選択肢が無い、選択肢が無いのだ！』

その一言にセンスは薄笑いを浮かべる。

『外から変えられないのなら、内側から変えるべきね。少なくとも私はそう言う教育方針よ。』

ずざざざつと機内の視線が僕に集まる。

思わず照れ笑い共にコツコツと窓を叩く。

すると何処からとも無く照らされた窓の端っこが赤く点滅した。

コツコツ・チカチカを繰り返していたところ、膠着状態の対話が

再開された。

『機体の保守とアテンダントメンバーの交代を航空会社から申し入れがありました。受諾してもらえますか？』

『食料の補充も要求する。』

『アテンダントメンバーに持たせるとの報告です。』

『了解、受諾する。』

その交信が終わったところで一息した僕は、どっかりと自分の席に戻って座り一伸びをする。

ずっと寄ってきた二人の少女は、僕の肩に手を置いて顔を覗きこむ。

僕も彼女達の手の上に自分の手を置いた。

苛立ちげに僕の肩を指でたく彼女達に僕も指で答える。

そんな事を数分しているところで、急に彼女達の顔が緩み吹き出した。

ケタケタと笑う彼女達を軽く睨んで黙らせたところで、例の帽子男が現れた。

「何が可笑しい？」

不機嫌とは行かないまでも、あまり良い機嫌ではない風に見えた。

「いやね、あの人は全く変わらないなって話していたんだ。」

「そうね、前にお会いした時と全く御変わりなくて安心したわ。」

「…ミス清音のことか？」

「ええ、リヨウの恩師なの。」

愕然とした表情で彼は僕を見つめた。

「…では、お前が一般公立中学から受験して唯一入学を果たしたと言っ…」

「その辺の情報は国連学園法が有るんで喋れないけれども、あの人の生徒で僕が国連学生だと言っのは事実。」

殆ど喋っていると言っ話も有るが、まあ問題あるまい。

ゆらゆらしながら寄ってきた男は、パイナップルを持ったまま俺の手を取った。

「…俺は嘘だと思っていた。パブリックスクールから入学なんて、どうやっても出来ないと思っていた。あのミス清音も、今日話すまで宣伝用の虚像だと思っていた。しかし違った。彼女は我々が予想した以上の快人物で、そしてお前も存在していた。」

ぐつと光を込めた瞳が僕を見つめる。

「俺はまだ受験資格を持っている。…内側から変えられると思うか？」

彼は答えを自分で持っている。しかしそれでも人からの答えを求めた。

そんな時に僕は人の背中を押ししたりはしない。その時に背中を押しした人間に責任を求めてしまうのが人に答えを求める人間の共通の傾向だから。センセの受け売りだけれども。

「困難に際し、人に頼るのはよせよ。『俺にはこれが出来る！』って信念が無ければ何をやってもいっしょだよ。でも『出来る』と思う信念こそが全ての成功の源だ。」

答えになっているだろうかといぶかしむ思いで彼を見ると、彼の

瞳には何かが燃えていた。

僕はその瞳を黙って見つめていた。

着陸した国が日本で本当に良かったと思う僕。

荷物の受け渡しなどと言う絶好の機会があれば、アメリカなどはカウンターテロ組織が一気にカタを付ける事になるだろうから。

少なくともテロは皆殺し、乗客も負傷と言うのが一般的な展開だ。しかし、その中には、荒事を目の前にした子供達の心の障害と言う被害は入っていないし、そのケアをするのも戦闘を行った人間ではないと来ている。

非常に納得がいけないことだと思う。

ゆえに、馬鹿正直に食料とフライトアテンダントの交代だけの人員しか用意しなかった日本政府には感謝しても感謝しきれない思いだった。

少なくともミスターの根回しが効いたに違い無い。

新たに派遣されたフライトアテンダントたちは、自ら武器携帯をしていないと表明するためが体にフィットしたチャイナドレスに身を固めており、場違いな色気を醸し出している。

ギャレーで暫く準備をしていた彼女達は、機内インターフォンで放送をした。

「皆様、御疲れのところ大変ご迷惑をおかけしております。わが社の機密体制が不十分であったためにおかけしたご苦勞の数々はお詫びし様がございませんが、せめて本機ご利用の間を快適に過ごして頂けますように御食事、飲み物、雑誌などをご用意させていただきました。ご入用の際には一声おかけ下さいますよう、お願いいたします。」

なんというか、行き届いたと言うか予想していたんかい、という

風情の放送であつたが、それを聞いた人々は安堵の息を漏らしたようだった。

生きるの死ぬのというのがハイジャックの常識的な状況だが、なんとなく和やかな雰囲気を感じないでもない。

生気をあふれさせつつある機内に、チャイナドレスの女性達がキヤスターを押して散り始めた。

スープやコーヒーを乗客に与えつつ近づいてきたアテンダントに僕は声をかける。

「僕はコーヒー」「私も」「私も」

そう続ける少女達にアテンダントは苦笑いで答えた。

「このコーヒーは泥水以下だぞ。」

聞きなれ無い女性の声と、僕のルームメイトの口調で。

「黄、いつから女になったの?」

レンファの問いに黄は小声でボディースーツだと答えた。

なんとかミスターは、長久研がやっているスキンボディースーツの試作品を仕入れてくれたらしい。

耐熱耐圧対衝撃という無茶苦茶な要求を、ウェットスーツのような薄地に放り込んだと言う狂気の研究成果で、現時点の世界で最高の防弾スーツだといつてもいい。

が、このスーツには信じられないような欠点が存在していた。なんと女性の体型にしか生成できないというのだ。

研究中は女子生徒を実験台にしていたので問題無かったのだが、いざ対外実験用に試験製作して見ると、女性体型以外での耐性は皆無。まだ紙の方が強いと言う状態になってしまった。なぜなのかは

今だ研究の域を出ないが、どうしようもない事なのかもしれないと言うのが最近の噂だ。

女性体型しか形成できないといって需要が無い訳ではないし、詰め物をすれば男性でも着れるのだから性能的に問題あるまいと言うのが長久研の見解だったが、評判は極めて悪い。なにせ作れる体型と言うのが、誰もが振り向くような極上体型の女性体型だけだったからだ。

そのボディースーツを着た黄は、男性から見た目で言えば、非常に凶悪な体型をした女性にしか見えない。

細部にわたるパーツが浮き出ている事から、チャイナドレスの下に何も来ていないのである事は明白だ。

が、ボディースーツの表面に女性特有のパーツを細工すると言う神経を疑いたくなった。

胡散臭げな視線を受けた黄は、嫌そうな顔で僕の視線にこたえた。

「最後まで飲み干せよ。」

格好に似合わない言葉でその場をアテンダントが、女の格好をした黄がその場を去った。

僕らは仲良くのみ干すと、底に何かが書いて有るのがわかった。

瞬間に読み取った三人は、きゅっとコップを握りつぶしてデイスポーターに放り込む。

「んで、何だった？」

「はずれ。」「はずれ。」

二人の少女はにやりと微笑んでいた。

「リヨウは？」

「あたり。」

「ご愁傷さまあ。」

まあ、僕達にカップを渡したのが黄なのだから仕方ないのかもしれない。

ため息一つで立ちあがると、彼女たちから小さなポーチが渡される事となった。

「何これ？」

「小道具」

どうせ碌な物じゃ有るまいと思って黄が消えたギャレーに入って中身を見ると呆れた。

「リヨウ、本格的だな。」

今だ何時もの声ではない黄は、小さなポーチを覗き込んで言った。
一つ一つ取り出して僕に見せる。

「パンツ、ブラジャー、生理用品・・・流石、女装の年季が違うな。」

「やかましい、さっさと交代だ！」

黄の細い首筋に指を入れ、チャイナドレスをスーツごと引つpegすと、そこには真っ白なインナースーツ姿の本当の体が現れた。

「乱暴な男は嫌われるぞ。」

「とつとと声帯をはかんか。」

どかりと黄の背中を叩くと、んぺとばかりにミスコン時に御世話になった人工声帯が現れる。

それをよく拭いた僕は、大きく口をあけて丸のみにした。

「あー、あー、ん。」

何時もとは違う、甘ったるい少女の声が僕の口から漏れる。

黄と僕は服を交換し、黄は第三礼服に僕はスキンボディースーツに着替えが完了した。

ポーチの中にあつた化粧道具で軽く化粧をすると完成、鏡に映るその姿は僕の原型を無くした、妙な女性だった。

「さつてと、んで、私のサーベルはこれで良いとして、黄のは？」

すでに違う自分気分な僕は、思わず『私』などという一人称を使つてしまっている。

「あるある、キャスターの中。」

ちよろりと覗きこむと、確かにそれらしいものが見える。

「んじゃ、給仕にいつてくるわねん。」

見た目に合わせた言葉使いのつもりだったが、黄は今にも吹き出しそうな顔をしていた。

「吹いたら殺すよ。」

そんな捨て台詞で僕はキャスターの中のサーベルと僕のサーベルを交換して黄に渡す。

ガラガラと音を立ててキャスターが向かった先はコックピット。配置や何かは全て先ほど記憶済みである。

軽いノックで開かれたコックピットには三人のハイジャック犯と二人の乗務員が居た。

じろじろとこちらを見る五人の男にっこり微笑んで飲み物のサーバービスをはじめた。

「おい、女。お前度胸が有るな。」

そう言ったのは先ほど僕にインカムを渡した男だった。

今度は僕の、いやボディースーツの胸にサブマシンガンを押し付けると言う行為で威嚇している。

9ミリパラベラム弾や45口径如きでは、例えゼロ距離であつてもこのスーツに傷一つ負わせる事は不可能だ。

そんな余裕から思わず皮肉めいた台詞を一つ二つ。

「鉄砲を持っただけのお子様を恐れるようには教育を受けていませんから。」

卑下たる笑みを浮かべた男達への一言で、氣勢が一気に上がる。

「おい、今俺達がその気になれば、おまえなぞ蜂の巣だと言うことがわかつているのか？」

「崇高な目的を掲げているように見せて、その実、女と見ればケツを求める犬つころ以下のテロリストの言い分など世界が聞くのかしら？」

視線が音を立てて火花を散らせる。

しかし、男達の氣勢は上がるのと同じ速度で平時に戻った。

「たしかに、な。済まなかったお嬢サン。あんたが信じられないほど魅力的だったので、こつちも正気を失っていたよ。済まない、心

から謝罪する。」

真剣な申し入れに僕はにこやかな笑みで答え、その場を後にしようとする。

「…待つてくれ！」

一人の男が僕を呼びとめる。
何事かと見ていると、何処から取り出したのか赤いバラを一輪差し出して言った。

「結婚してくれ。」

「テロリストの亭主を持つつもりはないわ。」

「…テロリストを辞めたら、考えてくれるか？」

「女一人の為に生き方を変えるような情弱者に興味は無い！」

おぞましい汚らしい。いくら女の体型をしているからって、男が化粧をした顔だぞ。

顔なんて剃ってる余裕ないから産毛で一杯なんだぞ。

そんな顔に求婚するなんて・・・全く信じられない。

ぶつぶつと文句を言いながらギャレーに戻ると三人の国連学園生徒が待っていた。

「ひゃー、凄いかっこうね。」「むちゃくちゃエッチくさい格好だね。」

そんな事を言いつつ、二人の少女はボディースーツの胸に顔をうずめる。

「どうだった？」

そんな意味を込めて黄は僕の手には指を走らせる。

僕もその指に答えてリズムよく叩く。

背中に回された二人の少女の指がゆっくりとリズムを刻み、僕もそれに答えるように指で叩く。

全ては「トン」と「ツー」で構成されたデジタル暗号文章、モールス信号だった。

中間試験で各自がファイルの開け閉めを監視してモールスとするために、チーム全員でモールス信号の勉強をしたのだった。

ミスターと直接通信した時は、マイクやテーブルを叩き合う事によつて通信できたし、その後も窓ガラスを叩く動作を遠方から学園の機材でピックアップする事によつて送信され、赤方レーザーによつて飛行機の窓ガラスの一部を光らせる事によつて受信が行われていたから結構ばれていないと思う。

そして今も、指を叩き合う事によつて密談を済ませていた全ての情報交換を済ませると、三人の学生は思わず吹き出した。

「なに？ プロポーズされたの？」「やだー、流石はイズミィアヤさんね。」「男殺しの異名は伊達じゃないわね。」「

むつとふくれる僕を見た二人の少女は再び「かわいいー」を嬌声を上げて飛びついてきたのだった。

むつとする僕の口に、黄の手から飴が一つ放り込まれる。

ギャレイからぞろぞろと出てきた僕達を、六人のハイジャック犯たちが囲んだ。

手にてに拳銃やサブマシンガンを持った男達は、かなり凶悪な顔をしている。

後部に居たであろう客達は前方に移動させられており、これから

起こることを予想させる。

中の一人が悲しそうな顔で僕を見ていた。

「あんたが工作員だったなんて、悲しいよ。」

本当に泣き出しそうな顔で言った。

話がどう言う風になっているかわからないが、本筋として間違っていないはずだ。

「いつばれたのかしら？」

「コックピットにあんたが入ってきたときから判っていたよ。あんたみたいな良い女がいつまでも結婚しない訳無いじゃないか。だから調べた。そうしたら航空会社の名簿にはあんたの顔が無かったんだ。」

一筋ふた筋と涙がこぼれているのがわかる。

「・・・顔は綺麗なままで死にたいの。ここにお願いね。」

そういつて僕は自分の胸の真中を指差す。

「・・・あんたにわかるか？ 俺の気持ちだ。一目見たときからあんたに恋してるんだ。その俺があんたを撃たなくちゃいけないんだ！」

「ぐだぐだ言う男に興味は無いね。あたしに惚れて欲しければ、すばつと一発ハートを射止めるんだね。」

にやりと笑って見せた瞬間、胸骨に熱い感触が閃いた。

気付いてれば、自分の胸から信じられないほどの赤い液体が噴出す。

口のなかでかみ締めた飴が割れ、赤い液体が口の中に広がり、我慢できずに噴出した。

痛さの為に半ば意識が遠のいたが、僕を六本の手が支えてくれた。赤い液体で染まった僕に駆け寄ろうとした男を、三人は抜き払ったサーベルで牽制する。

「なあ、後生だから、その女にキスをさせてくれ。たのむ・・・」

そう言う男の前で三本のサーベルが重ねられた。

サーベルを重ねると言う行為は、学園において大きな意味を持つ。意思を重ねる事、意味を重ねる事、そして運命をも重ねる事。

それは決意であり決心であり、最高の敬意でも有る。それを見て男も怯んだが、三本のサーベルならば恐れるまでも無い。

このサーベルが四本重ねられたその時に真の恐怖すべき権力が発令される。

避けえぬ困難に際し、四人の国連学生の一一致したその時、国連軍を代表する国連の力全てが発揮されるのだ。

過去、中東の某国でそれは発せられ、地球半分が国連軍集中配備地域として指定され、相手ので形一つでユーラシア大陸南部が焦土と化するほどの戦力が注ぎこまれた。

もしこの場で発せられれば、USA環太平洋第7艦隊すら召集を受け、世界中に散らばる戦略核の照準がここに向く事だろう。

気を取りなおして再び近づこうとする男の目の前にサーベルはまだ掲げられていた。

決意を込めた四本のサーベルが。

「・・・四本だと!!」

よく見れば、支えられたチャイナドレスの女性も一本掲げている。

そして耳を済ませばあの声が聞こえてくるではないか。

「我らに危害を加えしものは、我が家に危害をくわえしものか？」

『「Yes!」』

女の声に呼応する三人の国連学生。

「我らの家に危害をくわえしものは何者か？」

『「目の前の愚かなる者たち」』

「我、我らの力を持って、目の前の愚かなる者に戦線を布告する。友よ同意せしか？」

『「Yes・Yes・Yes!」』

静かなる宣言と共に僕は顔を上げる。

思いのほか衝撃は強く、多分肋骨にひびが入っているだろう。しかし顔は笑顔を無理やり浮かべる。

「我、この戦いの最初の戦傷者としてここに宣戦に布告を宣言するものなり！」

「その名は何ぞ？」

支えられていた体を奮い立たせ、三人を庇うように立つ。

これでとつさの狙撃にも対応できるはずだ。

「我が名はリヨウ。リヨウ・イズミなり！」

「ばかな！」

合わせられたサーベルが一瞬光を発するつとみに、彼らはトリガーに指をかけたが、誰も動く事は無かった。

その場で昏倒した六人のハイジャック犯を目の前にした僕達は安

堵の息を漏らすのだった。

アドレナリンの増加によって反応する睡眠薬は、精神疾患や凶暴性に強い人間の更正を目的に開発されたものだった。

無味無臭の気体で、持ちこんだキャリア全てに積まれていたために、アテンダントの巡回のつど濃度を高められて行った。

一定濃度まで行ったと言う事で、さてさてどうやって相手を興奮させようかと思っていたところで勝手に犯人達は興奮してくれた。

駄目押しをするために宣誓をして見せたところ、尋常ではない興奮に身を任せた六人に睡眠薬が発動してその場に倒れこんでしまった。

フィールドワークとその有用性を証明できた睡眠薬のボスコック研とボディースーツを提供した長久研は大いに鼻を膨らませている事だろう。

赤い液体、スキンボディースーツの衝撃吸収流動体まみれになった僕がタラップを降りて行くと、広報車に今だ乗っているセンセが出迎えてくれた。

『無事でなにより。』

今だマイクを片手のセンセは、人目でチャイナドレスの僕がわかつたらしい。

「全然無事じゃないですよ。」

今だかわいい声の僕は、思わず眉をしかめる。

口の中は血糊でぐちゃぐちゃだし、胸骨も多分ひびが入っているだろう。

円陣を組んでいた地元警察が駆け寄ろうとするのを、僕達は制止

する。

「本件について、我々国連学生四人によって元帥府が開かれました。よって本件の解決は国連に帰属しております。」

浪々と流れるように語る僕に警官達が駆け寄った。

「何を言っているんですかお嬢サン、こんな大怪我で!」「おい救急車の用意を!！」

無理やり担架に載せようとする男たちの手を振り切って、僕らは身の証を立てた。

胸の前にサーベルを掲げ、そして名乗る。

「国連学生、黄〓天祥」「国連学生、イブ〓ステラ〓モイシャン」
「国連学生、鈴〓連花」

三人がサーベルを掲げる姿は様になっていた。

本当は僕はこの場を逃げ出したかったのだが、元帥府設立には四人の国連学生の同意が必要なのだ。三人しか身の証を立てていないこの場から逃げる訳には行かない。

肩甲骨あたりにあるスーツの継ぎ目に指をかけて、一気に引き下ろしつつ僕も名乗りをあげた。

「国連学生、元帥敷設申告者、イズミ〓リョウ」

引き下ろされたスーツ下から本当の僕の胸が現れ、丁度中心あたりが赤くなっていた。

何故か真っ赤な顔の警察官の後ろから、見知った顔の国連学生達とUNとマークされた軍人達が駆け寄ってくる。

思わずスーツを胸元まで上げ、引きつった顔で笑顔を振りまく僕だった。

第八話 年度末

第一章

「あら、リヨウ。もう終わりなの？」

いつもの学園外周に有る喫茶店に向かう道すがら、イブと会った。日常的にレンファとセットで見られる彼女だが、時として別行動となる場合がある。

こんな時を狙って彼女達にアタックする輩がいると言いが、本当なのだろうか？

「うん、デニモ教授のところの音声解析実習しか残ってなかったから、今日で期末試験はおしまい。」

ヒラヒラと手を振って見せると、花がほころぶが如くにイブが微笑む。

「あたしもさっきの試験でおしまい。」

軽く舞うように僕の横についた彼女。

「やつぱり、準優勝特典？」

「うん、苦手教科だけ試験を受けたの。」

始め僕は得意教科のみを試験でクリアーして、苦手教科は特典利用しようとしたのだが、周囲の人間から奇異の目で見られてしまった。

曰く、

「苦手な教科は、実際に試験を受けて、どこまで理解しているか確認する必要が有るんじゃないのか？」

・・・もつとも。

なんと言つか、みんな優等生だよなア。

そう言う訳で、優勝・準優勝・優勝チーム特典に加え中間試験での全面勝利が味方して、僕らチームは、かなりの試験を免除と言う事になっていた。

しかし、免除と言うだけで、好きに試験を受ける権利も存在する訳で…。

「レンファも物好きだよなあ。全試験受けるんだって？」

「うん、あのこ、実は勉強虫だから。」

驚く事に、我がチームの誇る実質的なミス学園の一人鈴Ⅱ連花は、これまで得た特典成績を全て棚上げにして全ての試験を受ける事を宣言した。

総科目数は三桁を超えるものが有ると言うのに、何とも無謀な話で有る。

喫茶店ではいつもの場所にいつものメンバーが既におり、ひらひらと手を振っている。

参考書や教科書を広げて入るものの、どちらかと言えば息抜きに居るように見える。

それもそのはず、勉強するなら自分御部屋に行った方が良くし、同じ選択をしている仲間と頭を付き合わせたほうが遥かにいい。

「あ、リヨウ。今日はおしまいかな？」

「ああ、今日はおしまい。んで、今日でおしまい」

にこやかな僕の台詞に彼らはうらやましそうに声を上げる。

「あのねえ、替るつか？」

そう言った所で全員が首を横に振る。

今、僕が陥っている状況に比べれば、レンファの全教科試験のほうが楽かもしれないと彼らは感じているからだ。

「なあ、遠慮するなつてば、な？」

肩を抱きこみぐいぐいとベルナルドをゆすつて見たが、彼は苦笑するばかりだった。

「リヨウ、リヨウ。『責任』なんだから。」

苦笑のイブを恨めしそうに僕は見つめたが、その背後の存在を見てがっくり肩を落とした。

「元帥、お探ししました。」

たんまりのファイルを抱えた国連軍女性士官が店の入り口に現れる。

「クラウドディアさん、元帥はやめましょうよ。」

「はい、元帥。いいえ、それは出来ません。私はイズミ元帥府に派遣された連絡士官ですから。」

身長180センチをゆうに超える彼女は、硬い表情で僕に手持ちの書類を渡した。

「現在受信中の書類に付きましては夕食前にお持ちいたします。そ

れまでにこちらの決済をお願いいたします。」

「あのですねえ、クラウディアさん。確かに僕はイズミ元帥府を開設しましたが、いつまでも元帥だつて言うのは問題が有るんじゃないでしょうか？」

何度も繰り返してきた質問。

確かに事件解決のために元帥府を開設はした、したけれども、その事件自体はほぼ解決しているから、僕は元帥やめても良いよね？と聞いているわけだ。

「元帥、何度も御説明いたしておりますが、通常の開設であれば問題が無かったのです。しかし今回の開設理由が国連学園反対派によるテロリズムであった事は明白。このような場合は再発防止をかねて長期体制で全軍協力状態を維持すると言うのが通例です。それを開設者が知つていようといなかつた、です。」

「でもですね、例えばこの書類とか、この確認書とか・・・全然わかりませんよ。」

「御理解頂けない場合は私が補佐することになっております。」

「それだつたら全部クラウディアさんが決済しても一緒じゃないか。」

「勿論そのように思われる場合もございます。しかし、現在三軍体制での活動を可能とした元帥府はイズミ元帥府しか開かれておりません。なにとぞ御協力を」

そういつて書類を僕に預けて去る彼女に見守つた僕は重いため息をはいた。

「『責任』・・・かあ。」

そう、元帥府開設は権利で、その維持は責任なのだ。

実際国連学生は多くの危険にさらされているものの、自衛の手段は殆ど無い。事件に巻き込まれた時に四人以上の国連学生がいれば問題はないが、大概の場合はそんな大人数では移動しない。

そのために事件に際しては非常に自衛に対して困難を極める。

世間で言われているほどには権力が有る訳ではないのだ。

しかし事件・事故が起きたその時に、国連学生による元帥府が開かれていた場合は事情が異なる。必ずしも四人以上の国連学生による同意は必要無いし、必要とあらば一人の要請によって国連全軍が動く事もありうる。

それは元帥資格保持者という一人の国連学生の責任下で行われる世界大戦の可能性も秘めていた。

つまるところ、僕みたいなどうでも良い一人の学生の手に世界の命運の一端が握られているとも見られるわけである。

「まあ、あきらめたまえ。最終手段に元帥府設立を選んだ時点で君の運命は決まっていたんだ。」

にこやかな笑顔で現れた銀髪の男を僕は睨む。

この人ときたら何かと面白がつて。

「素敵な女性士官が秘書についているのに、何が不満なんだね？」

僕が入学当初は「最強のゲイ」として知られていたエメット風御門先輩であつたが、色々な事があつて現在ノーマルを僭称している。

以前はあつた男性ばかりのハーレムは解散し、現在平均的な男女比率での交際を続けているそうだが、実際どうなのかは誰も知らない。平均的な男女比率と言うのも眉唾な話ではないだろうか？
だって、その比率で「交際」していると言うのだから。

「・・・僕、あの人苦手なんですよ。」

きりつとして融通が利かなくて、非常に実直で誠意ある真面目で優秀な女性。

美人ではある、しかしそれを忘れるほどに頑ななイメージがあった。

一言で言えば、とっつきにくい。

「でも彼女はリヨウのこと好きみたいよ？」

「ええっ！」

横にいたイブを見るものの、彼女はニコニコとしているだけだったので真意は知れない。

しかし、クラウドディアさんの行動と言動から、どうやってそんな感情を読み取れるのやら。

「どうして？ どうやって？」どうして好きになるの？ どうやってわかるの意味。

「解かるのよ、女の勘ってやつね。」

少なくとも「女の」と言われてしまうと二の句がつけない。

「私にもわかるよ、君を見る彼女の目は恋する少女のものだ。」

リバティニア＝クラウドディア国連空軍中尉28歳、恋する乙女と言っ年齢なのだろうか？

「だめよ、リヨウ。いつになっても恋する心は乙女なんだから。」

わからん、わからん、と苦笑をした僕は、手元の書類を片付ける

事にした。

第二章

ナルニアAセットをつつきながら、最後の資料に目を通していた。それは国連空軍所属大型空中要塞『Coercion』に関するもので、運行航路及び機材の更新に関する書類だった。

いつもは僕の両脇にイブやレンファが居るのだけれども、扱っている書類が書類なので周囲は空席ばかりとなっている。

唯一いるのはクラウディア中尉のみ。

「クラウディアさん、これなんですが・・・。」

「はい。」

赤ペンで二・三しるしを付けた機材を見せると眉をひそめた。

「これが何ですか？」

「これ、僕の裁量で違うものに切り替えて良いですかねえ？」

「・・・権限はございますが、皆が納得するものでしょうか？」

「少なくとも性能面・価格面では100%の満足が得られます。」

「では、そのようになされば良いと思います。」

「・・・見た目がねえ・・・。」

「？」

「まあいいか。久長教授もフィールドテストがしたいって言ってたし。」

そんな会話がここ最近の夕食の風景だった。

「んじゃ、今日の分はこれでおしまい。夜の分は有りますか？」
「あ、はい。後ほど御部屋までお届けします。」

全く隙の無い敬礼をした彼女がそこを去ると、津波の様に人が押し寄せる。

いつものチームではなく、なんと各研究室の教授たちであった。

「リョウくん、いやーありがとう。伸縮性が高いβタイプの型抜きが順調だよ・・・」と久長教授。

「で、どうだね、うちの新素材は割り込む隙はあるかね？」とミルアー教授。

「な、なな、強度試験の結果は来てるのだろう？ 報告書を早く回してもらえんかねえ。」

こんな調子でもみくちやにされる日々が最近続いていた。

「皆さんへの回答は書面でお伝えすると何度も・・・」

「何を事務局のような事を言っておるのだ。教授と生徒の仲ではないか。」

まったくなにがなんだかと言う調子で。

実際、こういう要求に対応しては時間も有ったものではないのだけれども、教授権限評価を最低にしてやるとか、来年のミスコンに匿名で推薦してやるとか脅されては、一介の生徒の身分では逆らえず、細々と報告書類なんかを渡してしまうのがいけないのかもしれない。

なんやかんやとやり取りしているうちに、手元のナルニアセットはすでに冷めていた。

ストレスでメタメタになった僕は、そのまま部屋に帰らずにレク

室に転がり込む。

すると、そこではチームの皆が卓球などを勤しんでいた。
なにやらうちのチーム、こよなく卓球を好む。

「よー、リヨウ。大変だなア」

アメリカンスマイルの「」に、僕は軽くジャブをする。

「やっぱり最後に宣誓をしたのが失敗だったのかなあ。」

ジャブを受け止めた「」は、苦笑いであった。

「あの状況では最善の選択だったんじゃないのかな？ 俺でもあ
するよ。」

力強いスマッシュをしつつゲオルグは言う。

「そーだねー、でも僕だったら宣誓出来なかっただろうなア。」と
洋行さん。

「なんで？」

「いや、だって、ちょっと責任が重過ぎるもの」

「はあー。そうだよなあ」

「どうしたんだ、リヨウ。愚痴なんてらしくないぞ。」

マクドナルドはキラキラ光る笑顔で言う。こいつのこう言う所は
変わらないなあ。

「・・・なんかさあ、肩書きとか見ためで最近人が集まってい
る気がしてさア、何の肩書きも無いリヨウイズミなんて、何の魅
力も無いんだろ？ なアとか考えちゃってね。」

何の前触れも無く僕の口が両方に引き伸ばされる。
可憐なその手は間違い無い。

「ひふ、ふえんふあ」

イブとレンファ。

「また馬鹿なことを言ってるわね、リヨウ」「本当に自分を知らないって言うのは恐ろしいわ。」

二人の少女は、いつものように僕の両脇に立ち、そしてぎゅーつと僕を抱きしめた。

「あ、あのさあ・・・」

「だまってじっとしてなさい。あの軍人さんに一人占めされてた分を取り戻してるんだから。」「イブなんて良いじゃない、私は最終日まで試験なんだから。」「あら、それってわたしのせいかしら？」「もう、いじわるう。」

こんな風にベタベタされると身の置き場に困ってしまう。彼女達の態度だって何の魅力の無い「本当の僕」という存在に向けられたものではない事を知っているから。

チームの皆は苦笑をしているけれども、内心は穏やかではないだろうと思う。

なにせ学園一位二位を争う美少女を結果的に一人占めにしているのだから。

最近は無いが、入学当初などは怨嗟の視線だけで穴だらけになっているような毎日が続いていたものだった。

それを考えれば、チームの誰かが彼女達を心底好きであってもし

ようが無いと思う。

「あ、また何かくだらない事を考えてるわね？」

ぴろーんと僕のほつぺたを引っ張るレンファ。

「私達のことについても、チームにとってもあなたはあなたなのよ、リヨウ。」

素直にその言葉を聞ける気分ではない僕だった。

僕の心は彼女達の温かい言葉さえ素直に受け取れないほどにネジくれているようだ。

黄と共に部屋に戻ると、少数の書類を抱えているクラウディアさんが部屋の前で待っていた。

「あ、元帥。お休み前のお時間に申し訳ありません。」

かっちり敬礼の彼女を見て僕も黄も苦笑だった。

綺麗な動作で書類を僕に渡すと、彼女はそのまま立ち去ろうとしていた。

「まって、クラウディアさん。お茶でも飲んでいきませんか？」

ぴたりと止まった彼女だったが、振り向いたその顔は何故か赤いものだった。

「・・・それは上官命令でしょうか？」

なぜ命令と言つ受け止め方になるのだろうか？　そう思った僕だったが、更に苦笑を深くして言う。

「上官命令と受取りたかつたら、何も言わずにこの場を何も言わずに立ち去ってください。そんな理不尽な命令を聞く必要はありませんし、抗命罪で訴える事ありません。そうでないのなら部屋にどうぞ。・・・僕と黄のへやですが。」

黄に何の打ち合わせも無く彼女を誘つたが、文句が有るはずも無い。黄はこの年の上上の女性が好みだから。
言わずもがな黄もおいでおいでをしている。

本当に、ほんとうに紅茶へちよつと多めのブランデーを入れただけだった。

しかし、一杯の紅茶を飲みきる前に彼女はいい調子になっていた。

「げーんーすーいー、きいてますかぁー？」

「あー、はいはい、きいてます。」

「『はい』は一度だけです。」

「・・・はい。」

「よろしい。」

ペタペタと僕の頭をはたくクラウドディア中尉。

目は半眼となっており、空いた手で黄に紅茶の御替りを要求していた。

「あー、クラウドディアさん。飲みすぎなんじゃないですか？」

「何をおっしゃるんですか、元帥！　紅茶にのみすぎなものもないじゃないですかぁ！」

ケタケタと笑う彼女を見て、何か重大な間違いをしてしまった事を痛切に感じていた。

「あたしわですねえ、げんすい。配属前には凄くおこっていたんですよ。」

ぶはーとはく彼女の息は、紅茶以外のにおいしかない気がするが、少なくともボトルに半分はいつていたブランドイーはもう無い。

「いくら元帥府をひらいたからってえ、特殊軍法によるげんすいだっていったってえ、学生じゃないですか、それも高校一年生なんですよお、ええ、私なんて28になっても中尉、ちゅういなんですからねえ！！」

まあ彼女の言い分はわかる。解かりすぎるほどに解かると言うものだ。

「・・・でも、『でも』でもなんですよお。」

今まで怒りに震えていた彼女の顔が、にへらーと緩む。

「げんすいってば、さすが国連学生っていうかあ、溢れる知性がほとばしるっていうかあ・・・。げんすいってすごいんですねえ」

「な、なにが？」

「だってすごいじゃないですかあ、入学と共に伝説の元帥生徒総代を手玉に取るわ、中間試験では現状を逆手にとってルーキーを全面勝利に導くわ、先のハイジャック犯を手玉に取るで、もう今年の全学園MVPに決まりだって言うのが噂でえ・・・。」

伝説の元帥生徒総代とは風御門先輩の事。彼も一度テロに遭い、元帥府を設立した。

その際の三軍体制は一年の永きにわたり、主要施設の変革は今も記憶に新しいと言う。

MVPとは学園有志によって投票されるランキングのトップに来る生徒の事。

学力・判断力・そして仲間恵まれていると言うのが条件なんだそう。

僕は部屋備え付けのハリセンをもってクラウドディアさんをはたく。何故そんなものがあるのかについては秘密だ。

「いったーい」

「何の確証も無い事を流布しないで下さい。」

「でも、みんな言ってますよ。・・・ねえ。」

そう言っただけ彼女は黄に言うと、黄は曖昧に頷いて見せた。つまりそこら情報の出所の一つではないという事だろう。

僕がギリギリと睨むと、黄はへらへらと笑い出した。

ああ、なんだかなあ・・・。

「噂は噂です。確証の無い噂で動く軍はないでしょ？」

苦々しい言葉を吐いたにも関わらず、クラウドディアさんは聞いていなかった様だ。

「げーんーすーいいいいいい、のんできますかああああ」

べったりへばりついてくるクラウドディアさんを引っぱがしながら思わず呟く。

「たすけてくれえ、だれかあ。」

言ったか言わないかというタイミングで、急に扉が開き現れた。そこには見なれた一団が、大小の瓶や皿を構えていた。

「騎兵隊登場。」

先頭の二人の少女、イブとレンファの目は尋常ではなかった。

「・・・たすけてくれえ」

再び騎兵隊が訪れる事は無かった。

第三章

死屍累々となった我が部屋で身を起こすと、クラウディアさん一人が起きあがっていた。

最初に酔っ払ったはずの彼女は、息を殺して僕の端末に向かっていた。

真剣と言うよりも殺気を孕んだその視線は、画面の向こうの親の敵を見るかのように見えない事も無い。

どうしたものかと思っただけでじつくり見ていると、どうやら作業が終わったらしく、ドライブから記憶媒体を抜き取って振りかえる。

すると覗き込んでいた僕と真正面から視線が合ってしまった。

声にならない息が彼女から洩れ、椅子に座っていたはずの彼女はそのまま崩れ落ちる様に床に倒れこむ。

嫌な崩れ方だと思った僕は助け起こすものの、腕の中の彼女は官能的な妙な声を出して震えだしたのだった。

「あ、あなたは・・・だれ、なの？」

震える唇で言う彼女。

何を言っているのだろうと言う思いが、僕の口から漏れた。

「クラウドディアさん。リヨウですよ、イズミ＝リヨウです。」

瞬間、彼女の体は強張り、がたがたと痙攣をしたかと思うと、ぐつたりと動かなくなってしまった。

「クラウドディアさん、クラウドディアさん？」

ぺちぺちと頬を軽く叩く僕の手に、微妙な反応を見せながらも彼女の意識は戻る気配が無かった。

どうしたものかと思っている僕の背後に、何かの気配が感じられたと思った瞬間、顔にいつもおなじみの感覚が戻る。

そう、今の今まで僕は眼鏡をかけていなかったのだ。

「いやあ、いつもながら凄い威力だなあ。」

声を殺して現れたのは黄。

「正直言ってちょっとジェラシー感じるう。」

「流石にあれを受ける気はないけれどもね。」

僕の両脇を支える様に二人の少女が、イブとレンファが現れる。混乱のきわみにあった僕は、思わず彼女達を見るものの、何が起きたのか全く解からなかった。

「・・・クラウドディアさん、どうしちゃったんだろう？」

すると三人は同時に肩を竦めるのであった。

目覚めたクラウドディアさんは、今だ夢うつつの中に居る様だった。頭はゆれ、視線も定まっていないうようなものの、僕を見た瞬間に顔を真っ赤にして正気に戻ったようだった。

「大丈夫ですか？」

そんな問いかけにもビクリと体をさせただけで、何の反応も無かった。

参ったものだと言っている僕だったが、実際はそんな事を言っているような状況ではなかった。

彼女が僕の端末から抜き出した情報を先ほど検索して見た所、殆どが各研究室の最重要機密マーク付きのファイルばかり。

国連学園における最重要機密という指定のデータのみ入っていたのだ。

国連学園には情報機密に対する厳しい規制が存在している。

その規制に触れたものは理由の如何を問わず厳しい罰則が存在している。

法人であつても国家であつても個人であつても、いかなる人物であつてもその存在を許されることは無い。

・・・一定条件を除いて、一切だ。

そのことを骨身にしみているのであるう、クラウドディアさんは、先ほどから震えていた。

正直な話、この場で射殺されても文句が言えない立場だから。

無論、この部屋に集まった人間で事を荒立て様とする人間など居ない。逆にこの状況は美味しい等と思っている人間は居るかもしれないけれども。

彼女が目覚めるまでの間で、仲間には今の状態を手短に黄が説明した。

僕も初めて聞くような内容であった。

「・・・国連空軍中尉 リバティニア「クラウドさん。貴方が何をしたかは、ここに居る全員が理解しています。」

彼女は体を硬くした。

クラウドディアさんは間違いなく、この三軍体制に乗じて国連学園内部の情報を掴もうとした一軍人の指示でスパイしていたのだと黄は言う。

が、それは間違いなく命令であり、そして指示した人間は更迭されない。

そう言う仕掛けになっていると黄は話すのだった。

実際、そう言う人間は大嫌いだと言う人間がそろっているチームの方針は決まっていた。

ゆえに、この後に出てくる台詞は彼女の予想を越えているだろう。

「そして・・・、だれもこの情報が流出したことを確認した人間はいません。」

「はあ？」

思わずクラウドディアさんは気の抜けた顔になった。

「この記憶ディスクに入っている情報は、すべて「リョウウィズミ」が閲覧した事になっているので、学園法上問題ありません。」

歌い上げるようなリーガフの台詞を、マイクが次いだ。

「更に言えば、この記憶ディスクに収まっている機密情報も全て・

」

そう言いながら展開し始めた情報の全ては、各研究室の最高機密・門外不出の機密情報のマーキングがされているだけの情報。

名前と数字の羅列の情報を見たクラウディアさんは、思わずめまいを覚えたらしくふらふらし始めた。

「エヂーマークス―35ポイントプラス20、スコットランドメイ
ン―66ポイントマイナス20・・・」

小声で読み上げる」。

それは、各研究室で管理している、受講生徒の成績データだった。

「持つていく所に持つていけば、凄い価値で引き取ってもらえるでしょうけれども、このデータを持ち出して喜ぶのは、国連学生ぐらいのものですな。」

「・・・何故ですか？」

彼女の問いは、多分、自分をなぜかばうのかというものだろう。

その辺は大した意味は無い。

本来彼女は、軍転用可能なデータを持ち出すはずだったが、成績表を引き出したと言う時点で僕らは彼女を無害な存在だと認識した。それゆえに、多少の縁が出来た彼女が銃殺される所を見たくないと思っただけというのが正直な所だ。

実際にデータが抜き出されたとしても、教授会のサーバーになんか入っている情報など、教科書程度の内容であって、決して最新技術ではないのだから、それについても問題ないだろう。

何の問題にもならない行為かと思いきや、それが成績公示期間となると話は別だ。

自らの成績を真っ先に知りたいし、できれば良い物にしたい。

それゆえに、サーバー進入を志すものも入るのだが、それについてはひとつの校則がある。そこに居る全員が生徒手帳を出して一項目を指差す。

『国連学園内情報網に置ける特別措置A2334-21：あらゆるクラック行為を禁じたネットで有るが、国連学生に限り例外を1項追加する。1・各研究室の成績データは各生徒各々で死力を尽くして奪取すべし。全てのセキュリティを越えて奪取せし場合、十分な褒賞を与えるものとする。』

「・・・何なんですかぁ！」

もはや混乱のきわみに有る彼女に、僕は囁く様に言った。

「つまり貴方が抜き出した情報全て、『りょういずみ』が引き出したと言う事実しか残っていない今、誰も罪にとわれることは無いんですよ。」

ぐるんぐるんにめが回っているクラウドディアさんは目が泳いでいた。

「あなたの直属の上司は多分、ジュリアー空軍総司令だと思いますが、彼が失脚すると僕達も困るんですよ。」

ぼりぼりと頭をかく僕にクラウドディアは何事が言おうとしたが、初めて気づいたかのように「」を見て驚いた。

「ま、まさか・・・。」

「そう、そのまさか。」

「」こと、ジョージ・ジュリアーは国連空軍総司令の息子なのだ。

妙な色気を出した空軍総司令にお灸を据えてやるのは簡単であるが、さすがに「」の家庭が崩壊するのを見たくは無いので、見て見ぬふりをするにしていた僕らだった。

いまだ混乱の極みにあるクラウディアさんを肴に、僕らは再び祝杯をあげることとなった。

「……んで、何の御祝い？」

「そりゃもちろん、教授会の難解なプロテクトを超えた若き英雄「リヨウイズミ」誕生祝に決まってるだろう？」

思わず口に含まんだ御茶を吹く。

「……きたないなあ、何するんだよ。」

「だ……だって、データをえたのはクラウディアさんで……。」

「『国連学生に限り』だぜえ。」

「IDはリヨウのものだよねえ。」

「クラウディアさんが死刑になってもいいのかなあー。」

ずずずいつと迫り来る友人達を退け、僕が咳払いを一つ。

「リヨウイズミのIDで、皆がハッキングした、だよね？」

隣にいた「」の背中を叩く。

「まあ、それで納得するか。」

あわや妙な勲章が増えるのを阻止したことに満足した僕だったが、実際は何も阻止されていなかった事に気付くまで、大して時間は要らなかった。

第四章

学園ネットに告知が出されていた。

教授会のサーバーに侵入した上にデータを奪取した人物のIDが公表されたのだ。

『ryou01001』というIDは、一期生の1クラス所属で有る事が示されている。

つまり、今年一番大暴れしていると噂のルーキー『リョウイズミ』その人である。

アクセス開始からデータ奪取までが僅か3分と短く、いかなる手段を用いたのか教授会でも解析中だと言う書きこみになっていた。

また、同じサーバーに生徒側からの告知が追加されていた。

それは今回のハックがグループで行われたと言う犯行声明であり、それゆえに今回の功績はグループ全体の勝利で有ると言う風に書かれていた。

グループ全員の署名が追加されているそのファイルは、密かにアイカイクの状態でコピーが続出しているらしい。

「なんで？」

僕のその問いに、洋行サンは苦笑で答えた。

「国連学園史上に残る情報ですよ、誰もが現実には有った事として記念にダウンロードしたいんじゃないですか？」

しかし国連学園史上に残ると言っても、奪取成功したのは僕らで実に十三人目だったりする。

「・・・あのねえ、夜に忍び込んでコミックヒーローみたいな活躍で盗んでいた時代とは違うんだよ？　世界有数のセキユリティー、イロジカルとラップの数々、ツイスター式シャッフルによるパルスジャグラー。おおよそハッキングなんか出来る環境じゃないのにやり遂げたって言うんだから・・・。」

「・・・この端末から教授会のサーバーに入るなんて簡単なんだよ？」

[illegible]

「なんでえ!!!」

「あああああ！」

「ああ、無茶苦茶なセキュリティーホールじゃないかあ！」

きない。

では、両方の資格を持つ国連学生元帥は？

もちろん教授会のサーバーに進入してクラックすることが目的なのではない。

いち早く報告書や連絡を行いために、致し方なくアクセスしているだけなのだが、一般生徒には未知の領域だったということを今更ながらに思い知る。

とはいえ僕自身は一般生徒なのにと不満げな顔をしているリヨウだった。

かくして、元帥の称号を持つ国連学生は、これ以降重要機密ダッシュには関わってはいけないと言う国連学園法を作る原因になった男として、僕は名を残す事になってしまったらしい。

不本意な事だ。

第九話 新学期その1

サイド A：在校生

国連学園第一礼服は、なんとなく燕尾服に似ている。

とはいえ第三礼服に比べれば各段に地味なので我慢もできようと言っもの。

が、今回に限り、僕だけが第一礼服の着用を差し止められた。

「・・・国連学園入学式典で、現存唯一の『元帥』として発言していただく訳ですから。」と言っのが僕付きの事務武官リバティー「クラウディア国連空軍大尉（先日昇進したのだが、昇進理由は不明瞭。口止め人事と思われる。）の意見だった。」

なぜ？ という僕の視線に大尉はにこやかな笑顔でこたえる。

「元来、国連学園学生の皆さんは、暫定的に元帥なのです。その方々が施設外で身につける礼服なんですから、当然元帥礼服を着ていただく事になる訳です。」

現在、学生側のトップである生徒総代の風御門先輩すら第一礼服だと言っのに、僕だけ第三礼服なのは納得がいかないとこねた所、クラウディアさんは笑顔で付け加える。

「では、第三礼服とは一線画くした所を追加いたしましょう。」

滑るように控え室から去ったクラウディアさん。

といったも、モノは追加。これ以上どうなると言っのだろうと思

っているところで、彼女が再登場。

で、彼女が持ってきたのはジャラジャラとした光物の数々。

「連合徽章にアドミラルライセンス、勲一等国連徽章に……」

「ね、ねえ。これって……なに？」

「もちろん、元帥がお持ちの勲章の数々ですが。」

頑なに辞退したおかげか、数々の勲章は地味な略式記章へと変更されたのだが、いまいち地味になった気がしない。

それはまるで出来の悪いパッチワークのようであり、子供の作ったレゴの壁のようでもあった。

恥ずかしげにしている僕の胸を見て、クラウドさんは何となく蕩けた目をしている。

「クラウドディアさん、どうしましたか？」

「……はっ、いや、その、素敵です、元帥」

真っ赤になったクラウドディアさんを見つつ、控え室で重いため息が僕から漏れた。

首を斜め姿勢からゆっくりを起こす。

照明のせいで暗くなっているが、正面に座る新入生達は一様に注目をしていた。

まあ判らなくも無い。

国連三軍元帥として国連軍旗三種類全てをバックにし、目の前にはテロ鎮圧装備をフル装備にした兵士が一個中隊整列しているのだから。

元帥なんぞがいなくても三軍は十二分に機能するくせに、なぜか

最近ガードが厳しい。

今まで簡易外出許可証（静岡市街や周辺の町への買出しのときに取得する許可証）ではついて来なかった国連情報局員や、国連軍内情報局員が最近になって付かず離れずで尾行してくるのだった。

先日もチームで買い物に行ったとき尾行に気づいたので、ぱつと一気に散ってみたが、僕にだけ尾行がついてきた。

なんの逡巡も無しに。

思わずその場で振り返り、現在以降の尾行の中止を言い渡すと、泣きながら『任務を遂行させてください』というもので仕方なく同行してもらった。

「・・・われわれは尾行をしているわけでして・・・」

「あのね、素人でもわかる尾行がついている客って、お店にとって嫌な客だと思わない？」

集まってきたチーム全員で、尾行していた国連情報局員に対して説教をはじめたりなんかをくれました。

その効果があつてか、今度は尾行などという消極策ではなく、ガードという積極性を見せ始める。（僕がそのように指示したからという理由が更に腹立たしい。）

学園内外を問わず、アタックチームが交代で僕をの前後についているのだ。

当初は小柄な学生と見まごう人間ばかりついていたのだけれども、最近はバリエーションが増えてきて、長身の女性や初老の男性などもアタックチームに入ってきたようだった。

「危険が無いとは言いませんが、大げさすぎやしませんか？」

という僕に、ガードチームを張り付かせているクラウドディアさんはきっぱりと言い放った。「少ないぐらいです」と。

これ以上無いといったレベルでの確信に、僕は引き下がるしかなかった。

思わず最近を思い出していた僕は、耳が痛くなるほどの静寂の中で我に帰った。

今はこのステージで新入生達に挨拶しなければならない。

ゆっくりと、何の不自然さも無いようにクラウドディアさんが用意した原稿を覗き込んでみて、思わずギョツとする。

まるで軍事訓練のときの訓示のような内容を理解した僕は、音も無くため息をついて再び新入生を見つめた。

「イズミ元帥府のイズミリョウ元帥です。みなさん、ご入学おめでとございます。」

自分の声がアンプによって増幅され、講堂内に響き渡るのを感じ、それが消えるまで待った。

「皆さんに一言だけ。」

すっと顔を寄せた僕は口を開いた。

「学園と在校生はあなた達を飽きさせることは無いでしょう。」

波のようにざわつく新入生をにこやかに見つめ、そして再び口を開く。

「……果敢に挑んでください。」

第三礼服の背中に追加されたマントをたなびかせて僕はステージ

を去った。

静寂の客席に、皆茫然としているかと思いきや、なぜか全員で敬礼。

むー、なんか変な感じだ。

僕は舞台袖で不服の表情をしているクラウドディア空軍中尉を見ながら、目で謝った。

サイド B：新人生

絶望的な容貌をしていた。

この世の美を自称するナルキソスが見たならば、即座に自殺することだろう。

黒く輝き流れる髪の毛、顔の半分もありそうな眼鏡の向こうで知性輝く瞳、そして涼やかな口元。

造形美に対する類稀なる感動が、眼前の演台に現れたのだ。

その容姿に加えて、真っ白な海軍制服地に数々の勲章とつば広の帽子、肩口の金刺繍など嫌味なぐらいに高圧的な衣服が重なり、それは重厚な気配を背負う肩書きとなった。

国連三軍元帥。

彼が元帥として任命されてから、数ヶ月と経っていないはずなのに、すでに私の目から見てもなんら位負けする者ではなくなっていた。彼のバックには国連三軍の軍旗が並び、そして演台のすぐしたには黒ずくめの兵士達が突撃銃を抱えて直立している。

背筋が寒くなるほどの緊張の中、舞台裾から現れた彼は一言も発することなく天を振り仰いだ。

降り注ぐライトを浴び、何かを確かめるかのようなしぐさに、周囲からため息が漏れる。

無限とも思える時間が過ぎたあと、彼はおもむろに視線を私達に向けていう。

「イズミ元帥府のイズミ＝リヨウ元帥です。みなさん、ご入学おめでとございます。」

ささやきかけられたかのように誰もが頬を赤くした。

ちよつと視線だけで周囲を見ると、ルーキーみんなが、男女を問わずに同じリアクションをしている。

何が起こっているのか理解できず、混乱に思考が白濁する。

「皆さんに一言だけ。」

すつと顔を寄せた彼は口を開いた。

「学園と在校生はあなた達を飽きさせることは無いでしょう。」

波のようにざわつく私たちをにこやかに見つめ、そして再び口を開く。

「・・・果敢に挑んでください。」

真つ白になった頭で言葉を反芻する。

灼熱の思考が反射的に敬礼をさせていた。

新人生はみんな思い思いの敬礼をしていたのだった。

後に続いた祝辞を夢うつつで聞いていると、いつのまにか会場が移されて歓迎会の会場に移っていた。

横断幕に「ようこそ、国連学園へ」と書いてあるのを見て、心底

入学できたのだと感慨が深くなる。

わたし、ドロレスⅡファイランドⅡアースは、あの過酷な入学試験を乗り越えて、はれて国連学園生徒となれたのだ。

両親からはもちろん、学校や地区の威信をかけて望んだ試験に打ち勝ったのだ。

ライバルがいた、応援してくれる友人がいた、数々の試験をくぐりぬけた。

心から晴れがましい思いを深呼吸していると、女子寮同室の日本出身者チヅルⅡスミダがにこやかな微笑で私を覗き込んでいた。

「ね、ロリータ。うれしそうね。」

そういう彼女も心から喜びを表した笑顔だった。

「あなたこそ、入学成績トップクラスじゃない。国でご家族が喜びよ」

苦笑のチヅル。

彼女の言葉には裏がないが、私の言葉は賞賛と言うよりも皮肉の部類に違いない。

実際、学力テストは過酷だったけれども、予備試験に比べれば大したことなく、誰もが満点近い成績だっただろうが、その中でチヅルは自己採点でも60%ほどしか出来なかったそうだ。

すでにその時点で入学資格があるのかすら疑問であったが、さすがは国連学園、その先に大きな罫が待っていた。

国連学園が建つ土地に存在する、山あり谷ありのクロスカントリースランニングコースを走らされたり、湖をシーカヤックで全速力を出したり、そのまま素潜り潜水をさせられたり、命綱無しで岩山を上らされたり、その岩山からバンジージャンプをさせられたり。

最後の最後に山奥で一晩明かすと言う試験など参加者の半分が棄

権したぐらいだった。

しかし、すべての試験に参加したばかりか、トップの成績を収めたチヅルは体力部門のトップ、満点の成績を上げた。

それは学園入学試験史上五人目の快挙だとか。

さらに彼女を引き立たせたのが、学園入学試験における成績配分だった。

学力など、やる気があれば必ず追いつくものだという風に思っている学園教授陣は、学業成績など50%以上なら何でもよかったのだ。

が、過酷な学園生活の中で最も重視されるのは「気力」「体力」「精神力」「行動力」等で、その体力を基礎に学園生活を乗り越えざる得ない、体力や気力の無いものは去るしかないと言うのが学園の見解なのだ。

ゆえに、学力と体力の成績配分はなんと学力：体力比で2：8。たとえ自己採点が60%だとしても、学力など合格成績の二割に過ぎないのだ。

満点と半分との違いはわずか10%。

そのため、彼女と同じように体力試験を全部受けた人間が、今回トップ入学となっているが、体力成績上で見ると彼女がトップとって過言ではない。

筆記試験が満点だからと体力試験を受けなかった人間は多くいるが、合格した人間は皆無だった。

よくも受験のオリンピックといったものだとおもつ。

「まあ、試験を受けるだけ受けてみるって身内に言われなかったら、絶対入学できるだなんて思わなかったかもねー」

ぱりぱりと頬を搔く彼女は、あの麗しの元帥と同じ黒髪で、瞳も黒いと言う純系の日本人だった。ただ、多少彫りが深く身長が高いことで、背負う何かを感じさせる。

聞く話によると、彼女自身、国内のハイスクールから陸上選手として引つ張りダコだったそうだ。

国体選手でもある彼女は、この入学を機に選手生命を終えたことになる。

国連学園の生徒は、入学とともに出身国の戸籍が停止され、新たに国連所属の市民としての籍を得るのだ。

「ね、未練は無かったの？」

少なくとも、あの体力試験の結果を見れば、オリンピック選手への道だつてあるはずなのに、未練はないのか？ そう、私は聞いた。

「もつと気になることがあつたから、全部放り投げてこの学園にきたのよ」

気持ち良いほどの笑顔にはかげりは無く、後悔など微塵にも感じるものではなかった。

彼女を何がそこまで思わせたのか？

談笑する私達の正面に、私達と同じ新入生の人垣が近づいてきていた。

何かを探るような人垣は、どうもその中心に居る人物の取り巻きであることが知れた。

（いやだなー、ああいう人たちも居るのかなあ）

母国で成績を争った仲間の中に、自らの出自を鼻にかけて取り巻きを作り、周囲に嫌がらせをしていた貴族連中が居たことを思い出した。

学園にもそんな馬鹿が居るのだろうかと思っていたが、どうも様子が違っていた。

人垣は中心人物に視線や好意を寄せていたが、話し掛けるタイミングを逸しているようだったのだ。

ちらりと人垣の隙間から見えた人を見て言葉を失った。

それは美しい二人の女性。

一人は艶やかな黒髪の東洋女性で、すらりとしたその体は今すぐにもモデルとして高収入を得られるだろうと言う核心が詰まっており、さらにその表情は人々の心をつかんで離さないものがあつた。もう一人は女性はきらびやかな金髪で、涼やかな笑顔は西洋系の美女特有の愛らしさと色気が混在している。小柄な体にもかかわらず、張りのあるスタイルはどのムービースターにも劣らないものだろう。

くらくらする視界の中、二人がなぜかこちらを見ていることに気づいた。

じつとこちらを見ているので、何か自分がしたんだろうかと思っていたが、じつのところ視線が微妙にずれている事がわかった。

誰を見ているのだろうと周囲を見てみると、なんと我がルームメイトのチヅルを見ているではないか。

絡み合う視線に何がこめられているのか、私はじつと事の成り行きを見ているつもりだったが、運命と言うものはそんな樂觀を許さないらしい。

しばらく静止していたチヅルだったが、急に私を小脇に抱えて人垣を割った。

ずるずると引きづられるように言った先は、先ほどの凄い美人のところ。

な、なにをするんだ、と思っているかいなかというところで、彼女は凄い美人に私ごと抱きついた。

「やーっと追いついたよ、おねーちゃん！」

「ち、ちーちゃん!」「ど、どうしてここに!」

美人が驚きに顔をくずすというのは見ものだ。
一生に何回も見れるものではないだろう。

「へっへっへっ、じつは先生に勉強を見てもらったのでーす」

得意そうに言うチヅルをみて、二人の美女達はため息をついた。

「はー、あの人は・・・まったく。」

「またやったのねえ、あのひと・・・。」

疲労の濃い顔の二人の前に、私は引つ張り出された。

「そして、彼女は私のルームメイト、ドロレス」ファイランド「ア
ーすでーす。」

引きつった顔の私を見て、二人の美女の笑顔が戻った。

「・・・そう、チヅルちゃんのルームメイトなの。私はリン」レン
ファ、あなたのルームメイトの・・・そうねえ、義理のお姉さんつ
てところなの。よろしくね。」

知ってる、しっている、思い出した。北米社交界でその名を知ら
れた綺麗どころのトップクラス。

その笑顔のために、世の男達が奔走する魔性の笑顔。

彼女の一声で、かの界隈の男女が一齐に動くという話は有名な話
だ。

「私は、イブ」ステラ」モイシャン。チヅルのおにーさまの深いお
友達、よ。ちづるちゃんのおねーさまもやってるわ。」

さらに知ってる、わからないはずが無い。

自分の兄が勤める会社の親会社の社長、彼こそが彼女の父親なのだから。

レンファと共々北米社交界で勇名をはせている、トップビューティーだ。

少なくとも、彼女達二人がくれば、パーティーは成功間違い無しと言われている。

そんな二人の見つめるなか、私は重い口を開いた。

「あ、あの、わたし、ドロレス」ファイランド「アースと申します。」

ぺこりと頭を下げると、ふわりといい匂いが全身を包んだ。

はっと気付くと、二人の美女が私を抱え込むように抱きしめていた。

あの北米社交界の花たちが！

「んー、かわいいかわいい！　ちーちゃんをよろしくね。」「私たちの妹の友達って事は、私たちの妹と同じって事。困ったことはいないさね」

くらくらするような至福瞬間、背中に濃密な嫉妬が渦巻いて居ることに気付いて冷や汗の私だった。

サイド　A：在校生

一分に満たないスピーチが先頭に行われた為か、今年のスピーチは非常に短時間で終わり、新入生および在校生にはおおむね評判は

良好だった。

大いにしゃべりたかった人もいたようだったが、次々に行われるスピーチの数々が「インパクト」狙いの短いものだったので、急遽受けのいい内容に変更したようだった。

そのせいか、毎年時間不足で押せ押せになる生徒総代主催の新生歓迎パーティーは大いに時間の取れるものとなった。

学園サイドの有識者とミスコン上位入賞者は、強制的にホスト・ホステス役をおおせつかり、学園内を案内することになっている。イブもレンファも鈴なりの女生徒を従えて講堂中央に消えていったが、僕自身どうしたものかと思っていた。

なにせ、僕は僕の格好をしていなかったからだ。

出る所は出て、引つ込む所は引つ込むという、凶悪なプロポーションに国連学園女生徒制服の僕は、あの時のウィグを付けていた。そう、あの学園祭のときの。

「ではみなさん、これから学園生活に必要な施設の一部をご紹介したいと思います。」

ところどころが平仮名になってしまいうようなこの声も、あのサイバネ研の人口声帯。

体の方も久永研のスーツだった。

実際、さっきまで着ていた元帥の格好で案内をしようと思ったのだが、クラウディアさんたちに大きく反対されてしまった。

それでも学園での義務だというと、強制的にガードをつけると言い出した。

ガード付のホスト役ってどうよ？

そんな想像をして、さすがに学園生活に支障が出てくると思った。そこで、何らかの代替案を模索している所、黄からぬるりと何かを取り出して僕に見せる。そう、見慣れた、あれだ。

「これならば、防弾性に優れ、どんな刃も通しませんし、さらに身体機能強化もしますから一万フィート上空の飛行機とともに落ちたとしても死にません。」

「す、すばらしいですわ！ この装甲服を使用しましょう！」

まあ、言葉と性能だけを聞けば装甲服に聞こえるかもしれませんがけれどもねえ。

肩をすくめる僕は、その久永研のスーツの欠点を話すと、さらに目を輝かせるクラウディアさんだった。

身を守る上に十分な変装で一目にもつかない、最高です！ だそうだ。

普段からこの格好をしていただいて、執務のときだけ元に戻っていただけのが最高なんですが・・・などと本気で考え出している彼女へ、一言。

「女装のまま授業を受けるなんて考えたくありません。」

が、今回は彼女の強い要望を受け入れることとして、致し方なく女装することになった。

で、イブやレンファたちと共に歓迎パーティーに出席した所、爆発的な人間の束がやってきた。

暑っ苦しい男達がまた手の甲などにキスをするのかと思いきや、集まってきたのは女生徒がほとんど。

男子生徒などそれをうらやましげに遠巻きにしていた。

このままではかなり動きにくいということで、僕はイブ・レンファと別れ、うろつろと講堂の真ん中に移動すると、今の僕の体型に負けていない若手の教授が横に立つ。

「一人では大変であろう、手伝ってもよいぞ。」

くそ寒い静岡の山奥で、ボディースーツとも思えるボディコンを通してきている教授、アマンダ教授だった。

彼女自身もミスコン出場者であるために、今回の案内役をさせられていた。

「して、その凶悪な肉体は？」

耳元で囁く教授に、囁き返す。

「久永スーツ、です。」

形の良い眉毛を寄せた彼女。

「今度、久永教授と視覚上の誘導共同実験をせねばなるまい。」

「・・・見た目だけですけど、何かあるんですか？」

「そこいらへんの基礎から叩き込まぬといかんか・・・。」

「いやいや、叩き込まれても困りますって。わたし、教授の授業受けてませんし。」

「ふむ、遠慮はイランのだがなあ。」

ふん、と鼻を鳴らす彼女であつたが、機嫌が悪いわけではないようだった。

「あ・・・あのお。」

そう声をかけてきた少女に、二人して微笑み返した。

『入学おめでとう、お嬢さん。』

これが在校者の新入生への挨拶だった。

サイド B：新入生

なんでも、このパーティーで新入生の校内案内役をしている在校生は、昨年度行われた学園祭の出し物に参加したメンバーだそうだし、その出し物と言うものが俗悪で、その名も「トップビューティーコンテスト」だとか。

それを聞いた取り巻き達は「女性人権の無視」だとか「女性の品評会」だとか叫んでいたが、彼女たちはクスクスと笑いながら聞いていた。

確かに、美しさで順位をつけると言うのは女性として面白くないけれど、これだけ全世界から集まった女性が居るのだから、一番を決めたいと言う気持ちもわからないでもない。

そんなことを考えているものだから、思わず聞いてしまった。

「どっちが優勝したんですか？」と。

瞬間的な怒声でも聞こえるかと思っていたけれど、実はみんなその話題には興味があつたらしく、年相応の少女の瞳で彼女達を見つめた。

お互いを見詰め合った二人の美女は、同時にブツと噴出した。しばらく笑いつづけた二人だったが、どうにか笑いを納めて私たちを見回す。

「あのね、実は私たち、二人とも準優勝なのよ」

戦慄が走る。

いや、衝撃といっても良いだろう。

この学園の生徒たちは何処を見ているのか？

そんな思いが視線になったのか、彼女たちは苦笑をせざる得なかった。

「あなた達も会えばわかるけど、上には上が居るものよ。」

そういつて何故かチヅルに向かって微笑んだ。

何を微笑まれたかわからなかったらしいチヅルだったが、急に瞳を細めていく先を見た。

合わせて同じ方向を見つめると、そこには多くの女生徒を引き連れた二人の女性が見とれた。

栗色の髪の毛を長く伸ばした髪型もさることながら、大きなめがねの向こうの笑顔は心をとろけさせた。

背後にいる女性ホルモン全開のボディコン女性も目を引くが、やはり栗毛色の彼女が心を鷲掴みにした。

その視線に気付いてか、二人の美女はにこやかに彼女達を呼ぶ。

「教授、アヤ！」

その言葉に気付いた二人の女性は、ゆっくりとこちらを向く。

長身のボディコン女性はにこやかに手を振っていたが、栗毛色の女性のほうは引きつった笑みを浮かべている。

つかつかと近づいたレンファ・イブは、栗毛色の女性とボディコンの女性を紹介する。

「こちらは、国連学園最年少の天才教授、アマ ندا教授です。」

にこやかな微笑みにつられ、周囲から拍手が沸いた。

「んで、こちらの美少女こそ、昨年のビューティーコンテストの覇者『イズミ・アヤ』ちゃんです！」

おお！と低いどよめきが周囲を響かせる。

肩を組むイブ・レンファ・アヤは、まるで一枚絵のように光っていた。

「私たち三人とも、教授のところでお世話になってるのよ。」

ちらりとアマンダ教授をイブが見ると、教授はゆっくりと頷いた。

「ああ、こやつらは実に優秀だな。存分に目をかけている。」

自身満々のその台詞に、栗毛の少女アヤがちよつと異を唱えた。

「教授、あからさまに贋するだなんて、発言はよろしくないんじゃないんですか？ 仮にも教育者であらせられるわけですから。」

その台詞を不敵な微笑で答える教授は、すつとアヤに近づいてヘッドロックを決める。

「ばか者、学園教授とはいえ、私もまた研究者なのだ。己の研究に役立つ人材は贋するに決まっておろつ。・・・おぬし達も、己の成績がよければ良いだけの話なのだから、問題なかるう？」

そう私たちに話し掛けるアマンダ教授に、私たちは快く答える。

「Yes！」

極めて国連学園的な答えだと、教授は喜んでいた。

そんななか、複雑な表情のアヤを見つめるチヅルの顔は険しかった。

校内案内が終わり、女子寮前で解散になろうかと言うところで、例の二人の美女、イブとレンファに呼び止められた。

「これからあなた達の歓迎会をしようと思うの、時間いただけるかしら？」

にっこりと微笑むチヅルの横で私は石になった。

はつきり言おう、私は綺麗なおねー様方に弱い。

もちろんゲイではないが、雑っぽいオトコよりも麗しい女性とお話しているほうが心踊る。そんな私がお誘いを断れるはずもなく、ふらふらとついてゆくと、先ほどの女子寮とは趣の違う、なんとなく暗い感じの建物が現れる。

「あー、このたてものは・・・」

私の問いに、イブは答えた。

「男子寮よ。」

は？ という疑問と、一気に駆け上がる怖気を覚えた。

も、もしかすると、ついてきたのは失敗だったのでは？

もつれ合う男女の肢体のイメージが、頭の中で乱舞しているなか、二人の美女は苦笑した。

「ロリータ、学園は男女関係に限って言うなら健全なところよ。学園法規を思い出さない。」

レンファに言われてはつとする。

そして自分の考えを見透かされて、思わず真っ赤になった。なんというか、自分の浅ましさを呪いたくなつたが、両方から私を抱きすくめる美女の感触がその思考を駆逐した。

「かわいいったらありゃしない。」「本当にかわいいこねえ。」

くらくらする頭を支えながら、男子寮を歩くと、部屋から顔を出す男性たちは声援を送ってきた。

「よ、おめでとう、ルーキーのお嬢さんがた」

「歓迎するよ、かわいい女の子達」

「よ、今度、おねーちゃんたちがいないといにおいで。かわいがつてあげるよー！」

にこやかな言葉の雨の中、一つの部屋の前で婦たちは立ち止まった。

すつと取り出したキーで部屋をあけると、そこには十数名の男性が車座になっていた。

「やつほー、今日の主役を連れてきたわよー」（注釈：ここで本来つれられて来るのは、イズミ・アヤの予定であつたが、二人の少女のいたずらで変更になった）

おおお、と声を上げる人たちを見て、私は息を飲んだ。

誰もが美しく、そして男性的な美を持っていたから。

東洋系のしなやかな美、西洋系の一筋はいつた美。

男性モデルクラブか何かに紛れ込んだ気分だった。

「あ、おひさしぶりでーす！」

そうチヅルが言うと、周囲に割れんばかりに驚きが響く。

「え、えええ！」「な、なんで！」「う、うつそだろ！」

どうやらチヅルは彼らとも面識があるようだった。

「・・・チヅル、君を去年見たときは、受験準備をしているように見えなかったが？」

涼やかな顔つきの男性が険しそうな顔でいうと、チヅルはぺろりと舌を出す。

「へへへ、先生にお願いしちゃった」

全員が、男性全員ががつくりと肩を落とす。

「な・・・なんていう人だ。」「信じられない・・・恐ろしい人だ」

そんなことを呟く男性を尻目に、わたしはチヅルに聞いてみた。

「ね、ねえ？　なんでみんな脱力してるの？」

「それは多分、私が国連学園入学をこの前の夏休みに決めたからだと思うわ。」

えええええええ！　私の中で叫びもれる。

本来国連学園入学準備などと言うものは、生れ落ちてからすぐにはじめるものだし、遅くとも八歳の春からカリキュラムが組まれな
いと事実上入学できないことになっていた。

なっていたと言うのは、彼女以外にも恐ろしい記録を樹立した人

間がいて、なんと入学六ヶ月前から準備して合格してしまった人間が居るのだ。

入学者自身は国連学園情報機密法に保護されているので、誰かはわからなかったが、入学者を送り込んだ教師は、彼女は凄い勢いで報道された。

何人もの人間が彼女の取材に赴き、何人もの人間が自らの組織への加入を求めた。

が、彼女は頑として受け入れなかった。

自らは、一介の公立教師であることに誇りを持っているから、と。そう、愕くべきは入学者も公立中学校からの入学で、教師たる彼女も公立中学の一教師なのだ。

そんな、国連学園専門授業も行えなかったはずのコンビで、わずか六ヶ月の短期間で準備し、そして合格させたと言う。

最初はデマカセだと思っていたし、そういう怪奇現象は噂話で十分だと思った。

が、それが真実だと知れたのは去年の年末、静岡新国際空港でのハイジャック事件だった。

ハイジャック犯が乗った航空機には国連学生が三人も乗っており、その中の一人が彼女の元生徒だったのだ。

国連学生の要請を聞き入れた彼女は単身空港に乗り込み、犯人の安否をも図りながら交渉し、そしてその結果全員無傷と言う快挙で事件が終えられた。

実績、そしてその知恵と勇気が再び彼女の名前を世界に知らしめた。

キヨネ・アマノガワ。

この日本には、そんな彼女に匹敵する教師がほかにも居るのか！
ぐらぐらと揺れる思いの私に、チヅルは話し掛ける。

「でもね、私の場合は先生も二度目だから楽だっていったのよ。」

にこやかな笑みのチヅルに、私は詰め寄る。

「二、二度目って、二度も国連学生を短期間に入学させてるのってまさか！！！」

ぴったり額がくっついた状態になったことに気付いた私は、ぐつと自分を抑えて深呼吸。

しばらくしてからチヅルに再び聞く。

「あ、あなたの先生の名前を覚えてもらえるかしら？」

反射的に答えられたその名を聞いて、私は意識を失った。

「あまのがわ」きよね

サイド A：在校生

生徒総代からあてがわれた控え室で、思わずため息が出る。アマンド教授の機転で途中から抜けられたから良いものの、あの場で記念にと部屋番号交換が行われたときには驚いた。

確かに自分が新入生で、校内案内されたときに新入生同士で行ってはいたが、まさかホスト役にまで交換をという話にはならなかった。

窮地をアマンド教授に救われた僕は、早々に控え室に飛び込んでさっさと着替えをしようとしたものの、控え室には自分用の着替えが何一つ置いていないことをロッカーを開けて発見した。

そこにあつたものは一枚の紙。

『着替えは我が部屋にあり。取りにくるがよい。 黄』

ぶチンという音が聞こえた気がした。
全力で繰り出す拳は、ロッカーの背面を簡単に突き抜けていた。
確かに身体強化機能がある。

サイド B：新入生

気を失っていたのは大した時間だったわけではなかったが、心配
そうに覗き込むチヅルには申し訳ないことをしたと思った。

極めて深く謝ると、彼女は微笑んで私を抱きしめる。

「ごめんね、変なこと言っただけは無かったんだけど……。」
「あ、あの、ぜんぜん、その、私こそごめんなさい。勝手に興奮し
て気を失って……。」

しかし、興奮の末の失神に値するであろう話だと思う。

なにせ、あのキヨネ「アマノガワの教え子とルームメイトになれ
たのだから！

くらくらする頭の中で、その興奮をかみ締めようとしていると、
急に引っかかることを思いついた。

そう、彼女はチヅルは「二度目」なのだ。

つまり、チヅル自身が「一度目」を知っている可能性が高い！

キヨネ「アマノガワの教え子達と会話できるだなんて……」

夢見ごっこになる自分を正気づかせて、どうにかチヅルを見た。

「あ、あの、チヅル。もしかして、あなた、去年の入学者と面識
あるかしら？」

怪訝そうな顔のチヅルは、急に顔を崩して苦笑する。

「あ、ああ、言ってなかったっけ？ 去年入学した『その』幼馴染を追っかけて、私入学したの。」

あうあうと、思わずうわごとのように何かを言おうとして、それを飲み込んだ。

ぐっと言葉を煮詰めて、喉から発しようとした瞬間、背後のドアが勢いよく開かれる。

「てめー、黄！ 何てことしやる！」

栗色の髪の毛をなびかせて、凄惨な怒りの表情の彼女、イズミ「アヤがそこにいた。」

呆然とする私とチヅルに気付いた彼女は、思わず呟いた。

「な、なんでちーちゃんがいるの・・・？」

さっきの怒りは何処へやら、毒気の抜かれた表情の彼女に、チヅルは抱きついた。

「やっぱり、おにーちゃんだー!!」

むぎゅっと抱きしめるチヅルを見て、アヤは思いつきため息をついた。

「やっぱり、ちーちゃんは騙しきれないかあ。」

ちよっと上向きに喉を鳴らすと、ぺっと口から何かを吐き出した。半透明のリングで、中央で割れた膜が張られている。

「で、何でちーちゃんがここにいるの？」

その声を聞いた瞬間、私は激しいデジャヴーに襲われた。
つい最近この声を聞いたことがある！と。

あまりの衝撃に、それがいつだったか、誰だったかを思い出せずにいた。

「へっへっへっ、先生にお願いしたの。」

「またあの人も無茶するなー」

「でも先生は、国連学園の試験形態は見切ったから、何人だって入
れて見せるって息巻いてたよ。」

「げー、二度の試験合格者の傾向で、見切れるものなのか？ふっ
う。」

「先生、普通じゃないから・・・。」

がつくりと肩を落とした男声のアヤは、自らの頭に手をした。
ぴちぴち音を立てた頭は、ずりとその栗色の髪の毛を下ろす。
それは至極精巧に出来たカツラだったのだ。

「ああ、もお、なんだかなあー。」

そういった彼女は、すでに彼女の顔ではなかった。

男声で男顔になった彼女は、先ほど入学式典で現れた男性の一人
だった。

「みつともないところを見せてごめんね。僕は、リヨウイズミ。
ちーちゃんとは幼馴染なんだ。よろしくね。」

真っ白な思考が、私の意識を吹っ飛ばした。

イズミ元帥の女装は、実のところこれが初めてではないらしいが、趣味であると言っわけでもないらしい。

なんでも、去年のビューティーコンテストで特典のほかに「イズミリョウチームの人事権」という副賞が勝手に付けられた事に端を発するそうだ。

仲間内で最高の綺麗どころのイブ・レンファがいた彼らは、かなり状況を楽観していたそうだが、並み居る参加者の中に数々の参加者が現れ、さらには先ほどのアマンダ教授までが参加を表明したそうだ。

事に危険性を感じた元帥たちは、イブ・レンファに隠れてもう一人の候補者を立てたという。

それが「イズミ・アヤ」。

元帥たちは男性の立場から考えられる、最も受けの良いメイクと女装をして戦いに臨み、見事勝利したそうだ。

たしかにその勝利、実感することが出来る。

先ほどのイズミ・アヤの格好は、女性の自分から見てもクラクラくるものがあつたから。

「で、そのコンテスト参加者は必ずホスト役をしないとイケなかったんで、教授と組んで学校内を回っていたわけなんだ。」

苦笑の元帥を見ていて、思わずときめいてしまった。

あの日に会ったあの人に似ていたから。

国連学園生徒でありながら、母校の関係者として自らの後輩を守ろうとしたあの人と。

思い切り聞いてみる、彼女は彼らと何らかの関係があるはずだから。

「あ、あの、イズミ元帥。お聞きしたいことがあります!」

ぴよこりと片方の眉毛を上げた元帥は、小首をかしげる。

「なんだい？ 入学祝いとして、大概のことは教えてあげるよ。」

「は、はい、あの、チヅルの出身校の演劇部はご存知ですか？」

「あ、ああ。知ってるよ。」

知らないわけがない。彼女の恩師たるミス清音が顧問だったのだから。

「その出し物の、『メヌエット』というものはご存知でしょうか？」

瞬時、元帥の顔色が変わった。

「・・・ああ、あれはコンクールでもいい所にいったからね。・・・しってるよ。」

なんとも歯切れの悪い口調だったが、質問は続けられそうだった

「・・・その、あの、去年の夏に再演されたときに、たまたま私、見に行っていたんです。それでそれで、あの、ご存知だったら、ごぞんじだったら！ フレイバー少佐をご紹介いただけないでしょうか！！！」

それを聞いた元帥は、ばったり背後に倒れた。

なぜかそれを見ていた全員が、痙攣するほど笑っていた。

真実は三回の失神と引き換えに理解できた。

まさか、あの麗しの少佐がOGではなくOBだったとは・・・。

このイズミ元帥こそが、アマノガワ「キヨネ教諭と共に一年に満たない期間で国連学園入学を果たしたつわもので、あのフレイバー少佐なのだ！

さらに驚きなのは、あの舞台自体に女性は上がっておらず、町娘や少佐の婚約者やなどすべてが男性だったというのだ。

私は絶対に、男子部員のいない演劇部で、男性役もすべて女性がやっているのが面白い舞台だとばかり思っていたのだ。

じつは、「女子部員がいない演劇部で、女装は恥ずかしいから、女子が男装をしているように見えるよう演技することにより、全員が女子であるかのように見せた演技」だったのだ。

なんとも恐ろしい。恐ろしくも回りくどい。

もっと驚きだったのは、あの劇のあとで少佐がどこかの中年を張り飛ばしたシーン。

あそこで少佐の背後にいた軍人すべてが国連学生で、あの宣誓も終わっていれば真実に元帥府が敷設されていたというのだ！！

あの、一地方の公立学校の講堂で。

さらに、その軍人たちは、今日の前で車座に座るリョウイズミチームの面々であるという。

一番の驚きは、あの少佐が、イズミ元帥だったということ。もう、失神し通した。

「そうかー、あの舞台を見にきてたんだ。」

恥ずかしげに微笑む元帥。

なんだかほんわかしてしまった

「あの舞台はさ、廃止寸前だった演劇部に自分の息のかかった生徒を送り込んで、好き勝手遊ぶために清音センセが作った舞台なんだ。」

息のかかったとか、好き勝手とか、どうもミスキヨネのイメージに程遠い単語が聞こえてくる。

「あの、ミスキヨネは、廃止するに忍びない演劇部を立て直そうと、才能のある生徒を集めて、一番映える演劇を仕立てたという見解は、」

できないでしょうか？　　といおうとしたところで、全員が手を横に振る。

「ないないないない。」

いわく、彼女は面白そうなことならば全力投球だそうで、演劇部にしても面白そうだったから今一番面白い手法をとったに過ぎないと元帥は言う。

先日の高ジャック事件のときも、面白くて便利だという理由だけで、近所の右翼団体から広報車を借り出して、空港入り口から車の天井で腕を組みつつ立ち、コンバットマーチを流しながら現場まで入ってきたというのだから破壊的だ。

しかし、それでも、ミスキヨネは偉大だと思う。

その演劇を見た多くの生徒予備軍が、翌年の入学とともに演劇部に入部したというのだから。

はふうーとため息をつくとき、千鶴が私を覗き込む。

「イメージ、壊れたったかな？」

「ううん、イメージははじけたけど、『とっても』面白くなってきたわ」

なし崩しの歓迎会に、リョウ・イズミチームで無い人たちも沢山

やってきてくれた。

すし詰め状態の部屋から出た皆さんは、そろそろ手馴れた感じでおつまみや飲み物を持って一階に移動。

そこではもつと多くの男性が歓声とともに迎えてくれた。

「さあ、おとこども。ここにいるルーキーは、うちの身内だから、自由恋愛以下、セクハラ以上で手を出したらただじゃおかないぞー」

そう叫ぶイブさんに、重低音の歓声が答える。

「じゃ、君達挨拶して。」

いつのまにか着替えた元帥が、私たちの背を押す。

「あ、あの・・・。」

私が戸惑うのを見た元帥は、ちよつとチズルに合図を送る。
とたんに彼女は大きく息を吸い、そして声を出した。

「はい、私は、『チズル』スミダ』です。 右も左もわからないルーキーなので優しく教えてね。」

ぱちつとウインク一つで周囲が燃え上がる。

私も、負けられない。

そんな思いがあるから学園には入れたのだから。

「・・・始めまして皆様、私『ドロレス』ファイランド『アース』と申します。若輩ものですが、皆様と共に楽しい学園生活を遅れればと思っております。よろしく願います。」

礼儀にかなった挨拶をすると、チヅルを超える歓声が周囲に響いた。

勝った、そう思ったのはつかの間。

周囲から集まる男性に、すごい量の紙切れを渡されて愕いてしまった。

「あらら、人気者ね。ロリータ」

そぞき込む私の手の中には、無数のメールアドレスが入っている。それぞれ得意技なんかも書いてあるのをみて、私は首を傾げてしまった。

「ほー、これは力強いコネだね。」

一枚一枚を見ながら、元帥は微笑んだ。

「この一枚一枚は、学園生徒の一部の人の得意技が書いてある。でも、この人たちとの交流が深まれば、君自身の得意技にもなるんだよ?」

まったく意味がわからなかった。

でも、なんとなくわかったことは、このメールアドレス全員に返事を書くということだけだった。

カーボンコピーの同報郵便なんかじゃなく、定格文章なんかではなく、一通一通心をこめて書くものだと感じていた。

一晩かけて終わらせたメール書きは、何年にも続く大量文通の始まりだったことに私は気付いていなかった。

サイド A：在校生

「リヨウさま、だって。」

不機嫌そうなイブ。

「ありがとう、お嬢さん、だって。」

あからさまに膨れているレンファ。

月明かりの中庭で僕は途方にくれていた。

ここで気の聞いた台詞の一つでも吐ければ良いのだけでも、何一つ湧き上がったはこなかった。

「あ、あのさ、一応、ちーちゃんのルームメイトだし、そっけないのも失礼だし……。」

そっけないどころか盛り上がっていた。

あの舞台の最後で出てきた騎士風の役どころが、実は今、全員そろっているという話を聞いて再び少女は失神していた。

あーでもない、こーでもないと話しているうちに、1年程度しか経っていない出来事が懐かしい思い出のように語れた。

こういうのもいいなとは思っていたが、その話の深部を聞きたびに失神するのは勘弁して欲しかった。

「結構可愛かったわね。」

レンファはそっぱを向いたまま、そうつぶやく。
ぼりぼりと頭を掻いた僕は、苦し紛れに口を開いた。

「・・・いやーでも、ちーちゃんが学園に入ってくるとは驚きだったよ。勉強は嫌いだったし、スポーツ特待生だって事でいろんな学校から誘いがあったのに。」

そう、ちーちゃんはボールを使わない競技に関して無敵を誇っている。

陸上も水泳もウィンタースポーツもスノウスポーツも何でもこなす万能選手だったりする。

そのため、早いうちから高校からのスカウトが足げに隅田組に通っていたりした。

本人もその気だと思っていたのに。

そうつぶやいたとたん、二人の少女の表情は変わった。

今までのような余裕のある顔ではなく、何となくそわそわとしている表情。

今にも口笛でも吹きながらその場を去ろうとしている表情に見えた。

ずっと両手で彼女達の肩を掴む。

「何か知ってるんだね？」

あきれた事に、ちーちゃんはレンファやイブの入れ知恵で清音先生の個人教授を受けていたそうだ。

かなり軽いつもりで「もしかしておんなじ学校で遊べるわ」とかいったそうだ。

それを思いつきり本気にしたちーちゃんは、力いっぱい清音先生と大暴れということらしい。

「・・・二人とも、センスが今どういう状態なのか分かってるんだ

よね？」

不機嫌そうな僕に二人は平謝り。

「だって、本気にするとは思わなかったのよぉ」

「ミス清音もその話を聞いて笑ってたしい。」

あの人っては何を考えているんだろう、と僕はため息を付いた。
なにせ清音センセという人は、今世界的に注目をされている人物
なのだ。

僕を在野中学から国連学園から入学させたという実績はもとより、
先日のハイジャック騒ぎでの対応も人権擁護団体や政治団体からも
拍手喝采で迎えられ、ぜひとも講演をと破格の待遇で迎えたいと
か、もう、熱病にも似た人気はうなぎのぼりだった。

国賓待遇の来日者すら面会を求める中、清音センセは誰一人とも
会わなかった。

その理由が又ふるっていて、人気に拍車をかけた。

「たとえそれが国会議員でも総理大臣でも天皇でも、私をいぬつこ
ろのように呼び出すような行為は認めません。私は自由の国の国民
であると信じます。私も、私にでも、たとえ公僕であったとして
も、会食の相手を選ぶ自由がこの国に存在しているものと信じま
す。」

この台詞を書いた書状を受けた某国大統領は、生涯の宝にすると
公言し、完全密封処理と完全封印をして家宝とするそうだ。

現在、執務室に飾ってあるそれは、和紙で書かれたその書状の写
しだという事。

「・・・この上、僕らの事でセンセに迷惑かけるなんて・・・、

なに考えてるの。」

ちろりと冷たい視線を向けたつもりだった僕だったが、二人とも思いのほか堪えている様子は無かった。それどころか、何となく目をウルウルさせていない事も無い。

「・・・どうしたの？」

「だって、僕達の事って・・・。」

「それって、私たちのことって、プライベートって事だよね？」

あうつち、完璧な台詞ミス。

どんな言い回しが正しかったかは解らないけれども、これは完全にミスだと僕は感じた。

多分、いや絶対の予感としてこの後の展開が読めた。

『で、どっちの問題かしら？』とか言いながら、しなを作ってくるに違いない！

さつと身構えた僕を背後から抱え込む人。

「それは、りょーにーちゃんとチズルの問題だから『僕ら』なんでーす！」

「ちーちゃん、抜け駆けは駄目ー！」「もう、油断もすきもない！」
「でもでも、抜け駆けはおねーちゃんたちのほうだよお」

もしかして、こんな生活が続くのだろうか、そんな疑問が僕の頭の中で渦巻いていた。

続いた、いや、混乱は増した。

真面目にどうにかしないといけないと、本気で思う僕だった。

第十話 新学期その2

男として、およそ考えられるレベルでの贅沢を現実のものにしているとか力に言われた。

気の置ける仲間達と、影からそつと支えるガールフレンド、そして全世界単位でのバックアップを持っていれば、何も怖いものは無いだろう、と。

一年卒業を決めたタカは、このまま就職するそうだ。

国内有数の家電メーカー研究室に入ることとなったタカは、非常に高いレベルの給与を与えられる代わりに高度な能力を求められるだろう。

摩擦社会とも言える日本国内で就職するのはどんなものかと思っていたが、どうも実家の経済状態が思わしくなく、それを支えるために卒業するらしい。

個人的には何とかしたいと思うことだったが、彼のプライドと僕の元帥という地位が邪魔させていた。

「でもまあ、おれもリヨウの友達ってだけで、結構いろんなところからオファーがあっただんだぜ。」

にやりと笑うタカ。

この一年で起きたことを思い返しているのか、これからの一年を思っているのか、それは誰にもわからなかった。

国連学園には退学は無い。

どんなに素行不良でも、どんなに成績不振でも、あらゆる手段が講じられて解決される。

精神面での不安は格好の研究材料だし、成績不振という状態すら改善への道が研究になるからだ。

ゆえに、入学したてだろうと一年目だろうと、学園を去るものは一定の成果を見せた卒業生であるというのが学園側の弁である。

無論学業成績や個人の素行以外の問題も多い。

祖国が国連を脱退するとか、戦争状態になつてしまつとか、実家に緊急事態が発生するとか。

少なくとも、入学試験の最中、黄と僕と共に行動していた初めてのチーム感覚を感じさせてくれたロシア系女性には、母国が連邦から分離独立運動に成功してしまったために、一次入学停止状態で一年以上を過ごしている。

当時の学園の対応如何では、僕も入学を取りやめるつもりであったが、彼女は必ず国をまとめてから学園に来ると約束してくれたので、僕も入学することにしたのだ。

入学を無事に果たした中でも実家の問題は結構身近な話で、タ力のほかにも数人友人が家庭事情で卒業していった。

ここ数年続く日本国外国内不況の影響は、在学中の彼らに影響ないものでも、それを支えた家族には痛手であり、経営会社の倒産や整理解散なども少なくない。

借金もあり、生活苦もある家族を捨てておけず、彼らはわが身を克てとする為に学園を去るのだ。

一見の勝者も、いささか状況が重なると厳しい現実となるわけだ。我がチーム内にはそのような悲しい別れは無いものの、結構実家は苦しいらしいという話をよく聞く。

僕などは実家がほぼ無人で、貯蓄がそのまま家などの固定資産税に持っていかれるシステムになっていたのだが、現在国籍停止中の僕から税金は発生しないし、管理して言うのが国連（色々と問題が発生したらしいが）だから、納税義務すらない。

生活費は国連持ち。

何だか気楽な生活をしているなあと感心してしまった。

「ほんと、実はリヨウって根無し草だったのね」

タカの旅立ちに立ち寄った後、何時もの喫茶店でガム抜きのアイスコーヒーをすするレンファは言う。

このコーヒーは水出しなので、結構希少。

以前はあまっていたらしいが、僕らチームが出入りするようになってからは、限定数とか言い始めている。

それはさておき、まあ、彼女の言うとおりの生活な気もする。

自宅はあっても、管理しているのは僕ではないし、待っている家族がいるわけでもない。

事実、国連学園入学以降は日本国籍もないし、個室といえば寮のベットぐらいなもの。

心底の意味で国連国籍こそが僕のよりどころといえる。

まじまじと僕を見つめるレンファは、ちょっとだけ俯いて小声で言った。

「・・・ごめんなさい、言いすぎだったわ」

「・・・?」

笑顔の僕を見たレンファは苦笑いだった。

抜け駆けなしの協定を結んでいるというイブとレンファ。

それでも毎日三人いっしょと言う訳ではない。

こんな風にレンファと二人でいることもあるし、イブと二人でいるときもある。

「おまたせー」

そういつて現れたのは、三人の美少女と一人の少年。

イブ・千鶴・ロリータ・黄である。

ちょうどお昼の時間に集まれると言うことで、いつもの喫茶店に集合と相成った。

四人が入ってきて閉まるかと思った扉は、その後十数人の女生徒を出現させて閉じる。

「・・・あ？」

思わず啞然とする僕だったが、それを見て女生徒、今年度入学のルーキーたちが歓声を上げた。

「きゃーーーーー」

呆然と身内を見ると、みんな苦笑している。

「・・・どうなっているんでしょうか？」

「ごめんねー、りょーにーちゃん。」

そう言ったちーちゃんは、チヨコつと肩をすくめる。

「私がりょーにーちゃんの幼馴染だって知れ渡っちゃってから、おにーちゃんねらいのグルーピーが私の動向を探っていたみたいなの。」

動向を探っていた？

それよりグルーピーって何？

あうあうと見慣れたチームの二人の少女を見ると、能面のような笑顔でルーキーたちを威圧している。

夜間の刑務所のサーチライトかのような視線には合いそうもない。視線のレーザーが周囲を制圧し、一時的な静寂が支配する。

ロリータはロリータで、カチカチに緊張して、指一本動かせる様

子もない。

どうしたもんかね？

そんな視線で黄をみると、かれはにこやかに目で答える。

知ったことか。

本気で面白がっているぞ、こいつ。

心底まいったと思ったのだが、参ったはそのときばかりではなかった。

木曜、いつもの航空物理の教室で、僕は突っ伏していた。

授業は聞いていたし、ノートも取っていたが、日増しに高まる疲労感からは逃れられなかった。

「リヨウ、そろそろ移動しよう。」

黄に声をかけられて、のろのろと動き出す僕を見て、教室の外から黄色い歓声が響いた。

「Ryohh~！」

お義理で手をあげながらそれに応えると、きゃーと歓声が再びあがった。

教授達にも「実際どうにかならんか？」と言われているが、どうにもならない。

色々「騒ぎを大きくしないようにしてくれ」と婉曲に言っているが、「日本人の男の子はシャイで可愛い」とか「あなたの良さがわからないなんて、国連学生でも今までの娘は駄目ね」とか言って相手にしてくれない。

直接「周りは十分迷惑しているし、僕も迷惑している」とか「学園内での人権の侵害に当たる」といった事もあるが、向こうの方が

上手であつた。

「学園長に『私設ファンクラブ』設立および活動の許可を受けています。」とか言ってきた。

事の真相を学園長に聞いただと、「既に三軍の長たる元帥としての活動をしている以上、公的民事サービスに関わるように」とのお達しが出てしまった。

彼女たちの活動予定所がすでに提出済みだとか、活動総括が提出されるとか……。

つまり、色々と評判が下がるであろう国連三軍のマスコットとして、身を粉にして働き給えというわけだ。

「僕はさつさと元帥なんて辞めたいんです!!」

「ではそのよう書類作成し、三軍人事部に提出し可決させたまえ。」

「……ぐうつ」

そう、その人事部会というやつが厄介なのだ。

国連三軍の人事に関わるすべてを取り決める人事部会が、今まで書き提出した221枚の辞表を握りつぶしているのだ。

理由はさまざま。

やれ、三軍集結体制維持のためには元帥の存在が必要不可欠とか、国家内紛争やテロリズムに早急に対抗する為の必要処置とか、絶対に不穏な時代である今に必要な処置だとか言っている。

斜に構えてみれば、僕から提供される国連学園の最新技術を企業的な利益抜きで得られるというメリットが大きいのではないかと思っている。

が、クラウディアさん曰く。

「元帥あつての三軍協力体制です。各々の將軍達も実の所現状を非常に満足に受け入れられているんですよ。」

何の事やら。

元帥である副産物は、受けいれざる得ない部分であらう。なにせ国連三軍の力を大いに使わざる得ない状況がここ最近多いから。

静岡市内の買出しに出ている学園生徒や教授陣が多くトラブルに巻き込まれているし、その対応に日本警察は頼れない。

即座に三軍を動かせる今の体制は得がたいものだろう。

しかし、三軍のマスコットとして扱われるなんて言うのは真つ平であつた。

授業体制での問題もさることながら、さし当たつて個人的問題のほうが大き。

何が問題かといえば、彼女らのいうところの「今までの」国連学生の方々だつた。

現生徒総代の風御門氏は「国連学生として秩序ある行動を。」といつているが、過去の悪行を考えると全く説得力に欠ける。

教授会の教授たちの影響力も、入学したてのル・キーたちにはどこ吹く風といった所。

で、僕本人の弁も聞く耳をもたないといった所。

打つ手が無い状態で、群がる少女達の網の目をかいくぐるようにいつもの喫茶店に來ると、いつもの席以外は超満席であつた。

肩身の狭そうな我らがチーム。

その他の席を埋める新入生の女生徒たち。

強力なレーザー光線のような視線を避けるように席につくと、僕はチームの皆に弱々しく微笑んでみた。

とうとう数少ない憩いの場を荒らされてしまった。

「……まいった……。」

ぱったりとテーブルに伏せる僕に、チームから失笑が沸いた。

「ねえ、なんか打つ手無いのか？」

黄の一言に全員が両手を挙げる。

意見があるわけではない。お手上げなのだ。

なにせ学園の最高責任者が「Ok」を出したのだ、いかに嫌でも学園内に居る限り避ける手段は無い。

「まあ、相手が飽きるまで待つか、あきらめるしかないかねえ。」

「」の言葉に僕は危険な視線を向けた。

「……」、「」、新生の間にも妙な写真が出回っているという噂があるんだけど……。」

「……。」

「なんでも、僕が半裸の状態で酒盛りしている所の激写した写真で、馬鹿みたいなバーターで取引されているんだって？」

「……そう、なのか？」

がばつと起き上がった僕は、身長に余る「」を思いっきり引き寄せる。

目の前に寄せた「」へ壮絶な笑みを浮かべた。

「しらばつくれるのは止そうよ、」。「」。誰のカメラで取られて、誰が現像したか知っているんだから。」

そっついながら空いてるもう一つの手でマックを引き寄せた。

「そう、誰が現像したかもね。」

大量の脂汗を流す二人を離して座ると、真つくらな顔で二人はごめんと謝った。

「俺も、あんなに加速度的に広がるとは思わなかったんだ。」

僕もクラウドディアさんから聞くまで知らなかったのだが、コピー・孫コピーと何度もコピーされた影像までも広がっているらしい。

情報規制ファイアーウォールに多数引つかかる情報から、それが出てきたそうだ。

国連学園関連の情報の多くは「国連学園法」に関わるものなので、一切合財検閲される。

そのため検閲で浮き上がった情報を集計してみた所、そんな写真が大量に出てきたそうなの。

「まあ、ちょっと行き過ぎかもしれないわね。」

棒付き飴を頬張りながら、レンファはチロリと背後を見ると、一部からきやーとか女の子の声がした。

どうやらレンファのファンもいるらしい。

「でもなあ、学園長お墨付きじゃあ、手段ないし。」

頭を抱える洋行さんであったが、その横でリーガフが指を鳴らした。

その表情に僕らは光明を見たのだった。

リーガフの提案は十分なものだと感じる。

そう、何も防戦する事は無いのだ、歩調を合わせてしまえば良いだけの事なのだ。

規制されるからこそ情報の価値が鰻登りになるのだから、その情報自体を制御してしまえばいいのだ。

「公認ファンクラブの承認、降りたよお。」

正式名称は『アマンド映像情報研究室付人類情報伝達研究分室』
といって、歴然とした正式研究室である。

その名のとおり映像研のアマンド教授が監督する映像情報の伝達を研究する部署という事になっているが、その研究対象が学園内の有名人に限っている事が特異な点だ。

研究対象は「イブ」「レンファ」「リョウ」等などのリョウチームと言われている人物や関係者である。

研究対象者の情報や噂の伝達を、正式にレポートとして提出してきた場合、成績への加算とされるしバーターも発生するという間違いなく本当の研究室なのだ。

が、そのバーターもポイント制で、貯めたポイントによって研究対象の生写真やポスターなどが入手できるという制度をとっていた。興味の無い人間には意味が無いが、研究対象者との対話ということで実験レポートに対する感想などもまとめて協力者に提供される。まあ、はがきを出して、ポイント貯めて、懸賞貰って、会誌を読んど、いわばファンクラブの活動を研究形式にしたのだ。

こんな事が出来るのは「J」やステイプが準講師の資格を取得してくれたからだろう。

アマンド教授には大きな借りを作ってしまったわけであるが、彼女自身大いに乗る気なので気にしない事にした。

「で、会員番号の一番はもらえるのだろうなあ？」

何か勘違いしている教授であつたが、協力者ポイントIDカードに番号を振る関係から一番を渡す事になった。

至極ご満悦の表情の教授。

が、事態は急に加速する事になった。

レンファ・イブの非公式ファンクラブからの要請で、事務作業を合同にしたいといつてきたのだ。つまるところ、正式な公認ファンクラブにしたいという事だ。

その数、会員数にして215人と322人。事務要員は各々15人ずつであつた。

が、さすがに研究室分室の責任者となっているJJとステイブの資格ではそれだけの人間を扱う事が出来ない。

どうしたものかと思つているところでアマンダ教授からの申し入れがあつた。

「なに、一つにするから問題が出るのだ。サンプルケースを集計する規模によつて分室を増やせばいいのだ。」

「教授、さすがにそんな許可は下りないんじゃないですか？」

「新分野の分室の設立自体は学園長の許可が必要だが、既存分野の分室増設は監督教授の判断だ。うちのムスメッコの誰かに名前を貸させてやろう。」

「せんせ、さすがにそこまで借りを作ると、僕達も気が引けるんですが。」

「・・・まあ、無茶は言わん。ちょっとしたバーターを受け入れてもらえればいいだけだ。」

「・・・なんです？」

「今度の調整休暇の全日程、君達チーム全員の身柄を我々にすべて押さえさせてもらう。なに、人体実験をするわけでも新薬実験をするわけでもない、ちょっと付き合ってもらつただけだ。」

にやりと笑う教授。

僕達は受け入れるしかなかった。

俗称「公認ファンクラブ連合」は破竹の勢いでその勢力を伸ばしていった。

イブ・レンファ両名の非公認ファンクラブ加盟者に加え、ルーキーなどは何の疑問も無く「素敵なおねーさまファンクラブ」として登録していった。

また、協力者から要望があつた場合、本人の許可を取って研究対象者になつてもらうという活動もしているので、ファンクラブ連合というよりも、ファンクラブを管理している芸能プロダクションの色合いが強くなっている。

「最近、歌でも歌わされるんじゃないかって不安に思っわ。」というのはレンファ。

研究室発足から二週間で、この喫茶店のグループピー利用者の熱狂は減った。

研究室へ寄稿される情報の条件の中に、被研究者に大きなストレスを与えないようにするという条件が盛り込まれているからだ。

なんというか、まるで野生動物保護を訴えるかのような話。

他にも色々とあるが、その条件を協力者達は会則として読んでいる。

正しいか正しくないかは別にして、異常加熱していたファン騒動は、一応沈静化していった。

と思っっている。

「リョウ、この二週間、お前が何処で何をしているか、アマンダ教授の所に全データが行っているって事に気付いているか？」

考えないようにしようよ、黄。

実害が無ければいいんだ、実害が。

第十一話 調整休暇

「もう、センスもじーちゃんも寂しがってるのに。」

不満いっぱいのちーちゃんであったが、先のファン騒動ではちーちゃん自身もずいぶん迷惑を受けていたので、アマンダ教授のバーターも致し方なしと想っているようだった。

「・・・イズミ元帥、大変ですね。」

ドロレス「ファイランド」アースは僕の事を元帥と呼ぶ。

ちよつと前に少佐と呼んでクラウディアさんに怒られたからだ。

その時に僕は名前で呼んでいいんだと言っただけれども、なぜか元帥とよびたがる。

・・・いいんだけども。

「ロリータは、ちーちゃんと帰ってくれるんだって？ ルームメイと帰郷できる幸せをちーちゃんに味あわせてくれて、本当にありがとね。」

ロリータとはドロレスの愛称。そう呼んで欲しいといったのは彼女だったので、そう呼ぶことにした。

しかし、その名で呼ぶたびに彼女はかちんかちんに身を固くしている。

「い、いえ！ とても、すごく、ちゃんと、当たり前、事ですし、あの演劇部の方達にも会いたいですし！！」

カチカチになったロリータを抱きしめてちーちゃんは微笑んだ。

「へへへ、なんかね、去年のお兄ちゃんの事思い出すよ。」

「・・・？」

「なんていうか、とっても普段道理だったのに、ちよつと嬉しそうで、それでもちよつと勇ましくて。何でそんな風に見えるようになったか、私わかったんだ。」

そういつてローパンの少女を抱きしめる腕に力を入れた。

「お友達って、すんごくいい。学園で始めて出来たお友達、皆に自

慢するの！」

「・・・チツル。」

きゅっとお互いを抱きしめあう二人。
なにか涙を誘う光景に思える。

「うんうん、私たちも淒くわかるわぁ。」

「女同士の友情って最高ね。」

その友情の延長線上でミスコンでは火花を散らしたっていうこと
ですか？

「ま、センセやじっちゃんには信じられない迷惑をかけてるけど、
よろしく言っておいてね。」

「うん。」

にこやかな二人の少女を見送って、僕らはちよつと肩を落とす。
「去年さ、例の件のバーターでプールサイドギャルソンやったって
？」

「うん、熱射病にかかるかと思った。」

「今度は何なんだろう。」

「・・・チーム全員だからなぁ。」

ふうと深いため息が全員から漏れるのであった。

山間の日差しは速攻で隠れてしまう。

「J」と僕は作業を急いだ。

山ほどある間伐材が乾燥させられている小屋から、朝から数えて
十二本目の材木を担ぎ出す。

担いで行った先では洋行さんたちがチェーンソーで丁度良い大き
さにして積み上げている。

マイクとゲオルグとステイブは釣りをしたり、山間で草花を採
取したり、調理をしたりと汗を流している。

男連中だけで力仕事をしているのだが、女性陣はさらに過酷だ。
わざわざ山奥にあるバンガローまで着て、今期に使われるテキス

トやプランニングを組み立てたり検討したりと大忙しであったから。イブとレンファは去年一年間受講しているので、その際の疑問や理解でき難い所などを指摘するよう協力を求められている。

彼女達自身は優秀であるので、極めて役に立ちにくいのではないだろうかと思っていたが、同じく受講していた友人達から質問のあったことなどを取りまとめていたので、そのへんを基準にディスカッションしているらしい。

これが本当の調整休暇の世界なのだとやっとわかった。

新人生の多くはこの休みの時期に入学凱旋を果たすわけであるが、在校生の多くは学園内に残っている。

その理由について多くは考えなかった（第三礼服が嫌に違いないとは思っていたが）が、つまるところこういう事なのだ。

新人生に合わせてテキストを作ったり調整したり、実験予定を変更して研修を入れたりとおおわらわ。

僕達男衆は、そんな彼女達を慰労するのが今回の役目だ。

さて、何をやるうかといった所で、丁度バンガローの外にはいい感じの河原があったので、切り出し材木や機材でキャンプファイヤーをしようと言う事になった。

キャンプファイヤーと聞いて、山岳踏破試験を思い出したのか、みんな目をきらきらさせていた。（うちのチームは全員山岳踏破試験を好成績で通過しているので、キャンプファイヤーには早いうちから参加していたのだ。）

食事やつまみは大量に仕入れてきたし、中華は黄の手によって色々細工され始めている。

残った僕らはキャンプファイヤーやテーブル・椅子の準備などをしていた。

リーガフ達が器用にも椅子まで作り上げた所で夕闇が迫ってきていた。

「釜に火を入れてくれえ」

黄の言葉と共に、圧縮木材で高出力化された竈に火がとる。

積み上げられた石が赤くなり、今にも溶け出すのではないかと思えるような思いにとらわれる。

「っじゃ、始めようか。」

「Ｊ」が取り出したアコースティックギター、次々に取り出される楽器の数々。

ハーモニカ、タンバリン、カスタネット。まるで小学生の演奏会のような取り合わせであったが、熱をこめて演奏するとそれはイタリアンな香りをかもし出す。

「Ah――――」

何のあわせも無くみんなの声が一つに合わさる。

「ああ、おじょうさん、お嬢様方、どうか、どうかきいてください
」

良く通る声が周囲に響く。

リーガフの声はまるで有名歌手のように響き渡った。

「夕餉の支度が出来ました、どうぞおかおをみせてください」
弦をかき鳴らす「Ｊ」、それにあわせてタンバリンを片手に踊りだす僕と洋行さん。

黒のスーツの上下は、泣けてくるほど水商売の雰囲気とする。
タキシード姿のマックとステインがカスタネットで心地よいリズムを刻む。

しゃしゃしゃしゃしゃしゃん、かっかかかかかかか！

声を合わせリズムを刻む。

声を合わせてメロディーを奏でる。

夕闇に沈む山間の河原に、火が大きくともされた。

僕らはそれを背に一点を見つめる。

視線はバンガロー。

そこでは女性達が鈴なりになっていた。

「ちと早いが、食事にするか。」

苦笑のアマ ندا教授であった。

走り回る給仕役のステイプに僕は耳打ち。

「・・・優雅に走るように。」

「どうやるってんだよ!」

「こっちゃんの。」

僕は、ラフなジャケット姿で滑らかに足を進めて、欠食状態の女性陣のいるテーブルで止まった。

一呼吸静止した後に、つと流れるような動作で手持ちの食器を配置して、背後から手渡される水差しでコップに水を満たす。

終わった所々にこやかに一礼し、そのまま次のものを持ちに走る。即席厨房に戻った僕は微笑んだ。

「こっやるんだよ。」

「・・・・・・・・・・。」

まあ、僕だつてこんな事になれるのに時間がかかった。

人様にいえないアルバイトの真価が出ているという事なのである。見よう見まねで皆が給仕し終わる頃、上座のアマンド教授がおもむろに立ち上がった。

「あー、少女達、ご苦労。 君達のお陰で、今年度のテキスト及び研究要領書がまとまった。 実に要点を掴んだ資料である事は明白、この成果を皆も喜んで欲しい。」

周囲から大きな拍手が波打つ。

「・・・良くがんばってくれた皆のために、この慰労会を開いているわけであるが、今年是一般生徒に我俣を聞いてもらった。今まで給仕をしてくれていたのは、皆も良く知っているチームだ。彼らに感謝をこめて拍手を。」

再び拍手が波打つ。

「では、今日の喜びと未来を祝って・・・かんぱい!」

乾杯が唱和される。

轟々と炎をあげるキャンプファイヤーをのぞみ、大いに盛り上がった。

最初はソフトドリンクであった飲み物は、いつのまにかカクテル等のアルコール飲料に変わっていった。

酒に弱い人からバンガローに運ばれてゆき、各々の部屋に連れて行かれていつている。

炎を囲む人数が半分ぐらいになったところで事件がおきた。

服を半分以上ちぎり取られたＪが走って逃げてきたのだ。

素肌には各所にキスマークが点在しているのを見て、思わずにやついてしまった。

「なんだ、お安くないな、おねーさまがたのお手つきか？」

「ば、ばかいうな！　ありゃあ強姦と表現していい！！」

たらりと冷や汗を流す僕らは、振り返ってみて恐ろしいものを見た。

闇夜で明かりに照らされたアマンド教授の顔が、にやりと暗く微笑んでいるのだ。

「ちょ……ちょっといいですか？　アマンド教授」

僕の声聞いた教授は、その暗い笑顔のままこちらを向いた。

「……どうした、少年達。酔いつぶれた少女達が続出しておるぞ。優しく部屋まで連れて行つてはくれんか……ねえ？」

短くてタイトなスカートで包まれた足が組替えられる。

瞬時に出来た空間に黄を始め、多くの人間が吸い込まれそうになった。

が、踏みとどまる。

というか、踏みとどまれた。

なぜならば、アマンド教授の影像処理について多く知識を仕入れていたからだ。

付け焼刃ながら、その知識が最大限の警告を発する。

『これは罠だ！』と。

その様子に気付いた教授は、苦笑と共に深々とため息をついた。

「この様子では、ウチのムスメッコたちの特別単位は今回無しだな。」

ぼりぼりと頭を掻く姿には、既に何の引き込まれるような動作は無い。

凶悪なセックスアピールは染み出しているが、通常の雰囲気だ。

「ど、どういことですか？」

どもりながらの黄に、アマンダ教授はさもかったるそうに言った。
「今回の休暇で、リヨウ・イズミの一派の一人でも色香で籠絡できたら合格。おぬし達とのパイプは太くなるし、優秀な研究員が入ってくるともなれば私も有益だからな。」

な、なんという破廉恥な・・・。

「少年達、うちのムスメッコに何の不満がある？ 色香も催眠誘導も完璧な、いい女ぞろいだぞ。」

「酔っ払った女の子に付込んで『くっちゃう』なんて男の恥だ！」

「JJの一言が周囲のチームにも共感できる台詞であった。」

が、周囲からは失笑が漏れる。

なにせ喰われかけたのはJJのほうだから。

「ま、企みがばれた以上、私の方もこれ以上挑発はせんよ・・・
ただ、その気になっているウチのムスメッコ達はとまらんだろうがなあ。」

真っ青になった僕たちは、互いを視線で確認しあった。

「教授、では今回のバーターはこの片付けを持って終わりとさせていただきますね？」

「かまわんよ、ウチのムスメッコたちの完全敗北だからな。」

僕らはよつぴきで道具を片付けて、とつと朝方には逃げ出したのであった。

健全な少年としての欲望はあるけれども、それを試験対象にされるには堪らない。

僕らの胸には、人生経験不足という文字が刻まれたのであった。

調整休暇半ばにして多分に心の傷を負った僕たちは、女の子っ気

無しで出かけようと言う話で盛り上がった。

いまだイブとレンファはアマンダ教授のもとで骨子の仕上がったテキストの製作をしているので、このプランから外されても文句は無かるうと言うのが表向きの目算だ。

さすがに海外の誰かのうちにこれから行くとなると問題が多いので、身分を偽り、出来るだけ極秘で行動しようと言う事になった。

で、一番に話を通さなければならぬのは『学園長』。

こちらのほうは面白そうだと言う事で、速攻でOKをくれたが、二つだけ条件とつけさせられた。

一つは、リバティー・クラウディア女史を同行すること。

僕が国連三軍元帥である立場は、どんなに極秘にしようと変わらないし、この時期にテロ行為は十分考えられるので、即時対応が必要になるからというものだった。

もう一つは日本国内に滞在している事。

あらゆる有事の際、日本国内にいれば大概の対応が出来るからと言うものであった。

その二つを呑んだ後、さらにもう一人話を通さねばならない人がいる。

留守番役として校内に残っている生徒総代、エメット・風御門その人だ。

直接生徒総代執務室に乗り込むと、生徒総代はなにやら書類を整理中だった。

「やあ、みんな。何か私に用かね？」

にこやかに微笑む顔は、僕達の相談を聞いて急に歪んだ。

呆れたと言う表情で肩をすくめ、そしてため息をついた。

「リョウ君、君は冬のカナダ旅行で何も学ばなかったらしいねえ。」

「その点では学園長にも釘を刺されました。」

国内に限る旅行である事や、国連武官を同行させることなどを呑む事となったのを正直に言うと、ミスターも苦笑していた。

「なんで、そんなにどこかに行きたいんだね？」

いまだどこに行くとかえ決めていない僕達に、ミスターは苦笑していた。

が、僕達は全員で、疲れた表情をして遠くを見ていた。

結局、ミスターの協力も得られた僕達は、この調整休暇も休みなく働いているクラウドディアさんを連れ、慰労と心の休息に出かける事にした。

さてどこに行くかと言う時点になって、洋行さんが手を上げる。

「うちの実家がさ、温泉宿なんだよ。二泊ぐらいなら丁度良いんじゃない？」

しかし、今、日本の世間はゴールデンウィークの真っ只中。

温泉宿なんて満員なのでは？ と聞いてみると、冬のスキー以外になんの娯楽も無い所だから、この季節は閑古鳥が鳴いているそうなの。

ネットで調べてみると、温泉湯治が中心であった宿らしく、鄙びた日本らしさを満喫できそうだと言う話になった。

「元帥、私はお留守番しましょうか？」

「駄目駄目、クラウドディアさん。僕達が外に行く為には、クラウドディアさんの協力がいるんですから。お願いしますよ。」

「はあ。」

押し切られる形の彼女は、何処と無く納得しているふうは無かった。

もちろん、心底嫌と言う訳でもないだろう。

「じゃ、一番怪しまれない立場ってなんだろう？」

何に変装するかって辺りが、一番盛り上がったに違いない。

色々なプランがあげられる中、マイケルの意見でいきなり決まってしまった。

「俺達生徒、クラウドディアさんは部活の顧問の先生。」

おお、とみんなは感心する。

「やっぱ剣道部？」

「ま、スオード部つてので良いんじゃない？ アメリカンスクールの在校生つてことで。」

みんなは腰に帯びた剣を叩く。

その瞬間からお出かけが始まった。

夜遅く、というか、朝早くにリニアトレインの駅に集まった僕達は、人目をしので列車に乗った。

完全自動運行のそれは、僕達の市内への足であり、資材搬入の要である。

ゆえに、天候に左右されないよう地下に建設されている。

窓の風景は一切無い代わりに、快適な旅行が約束されていた。

わいわいと談笑している僕達を横目に、クラウドディアさんはため息一つ。

「もう、諦めてくださいよ。『先生』」

後でわかったことだが、クラウドディアさん自身、教員免許を持っているそうで、実際に先生でもおかしくないのだそうだ。

「やめてください、元帥。・・・もう、諦めてはいるんです。」

はあ、とため息をつく彼女の横に座ると、ちよこつと覗き込んだ。
「あきらめてる、ですか。」

「ええ、諦めてる、です。私は、軍人です。上官の命令には絶対です。どんな意図が上司にあるうと従うのが軍人です。・・・上司が諦めると言えば、諦めるのがスジなんです。」

それでも重苦しいため息の彼女を見て、どうも罪悪感が胸を突いていた。

「もしかして、何かご予定があつたんですか？」
すると、悲しそうに首を振る彼女。

「元帥にお誘いいただいて、とても嬉しくはあるんですが・・・。」
真っ暗なトンネルに向けて視線を泳がせる彼女。

「・・・置いてきた方々を思いますと、心が痛みます。」

ヒキツと表情が凍る僕。

いや、その一言が届く範囲の人間は、間違いなく固まっていた。

「だ、大丈夫だと思うよ、うん。彼女達はこの調整休暇中、ずうつと山奥でカリキュラム作りだし。」

「そうそう、大丈夫だよ。うん。」

口々に言う僕らの台詞は、一切の説得力をもっていなかった。

なぜならば、彼女達ですら今一番逃げたい相手の対象なのだから。

朝一番のこだまに乗り込んだ僕達は、何となく視線に付きまとわれていた。

致し方ないだろう、JJやステイプはアメリカンな色男だし、ゲオルグやマツク等はたおやかな美形だし。そんな男達がワイワイとしているのだから目立たない訳が無い。

「みんな、朝早いんだから静かにしましょうね。」

きわめて先生らしい意見を聞いて、僕達はにこやかに「Yes」と返事した

どうやらクラウディアさんも開き直ったらしい。

完全な私服で出歩くのも久しいなと思いつながら、隣の黄を見る。

黄も嬉しそうなニコニコ顔だが、その理由は明らかに隣に座るクラウディアさんであろう。黄は年上好みなのだ。

カートで車内販売に来た女性に、僕は色々と注文するが、困惑の表情をされてしまった。

「コークとサンドイッチと・・・。」

何度か繰り返した所で、背後のJJが流暢な日本語で言いなおした。

「コーラとサンドイッチと新聞をください。」

そう言われて初めて自分が英語で話している事に気付いて顔を赤くした。

「やだあ、日本語お上手なんですね。」

「ええ、彼は日系なんですけど、日本語は全く喋れないんです。」
僕の頭をぐりぐりしながら「」は微笑んだ。
なんというか、恥ずかしい。

昔の番組かなんかで、長期に出張で海外に言っていた日本人が、
帰ってきてても日本語に切り替わらなかったという内容をやっていた
のを思い出し、そのときに「氣どっているだけ」だと断言した自分
を更に思い出した。

その時ちーちゃんはそれを聞いていたが、今の僕を見てどう思う
だろう？

そんな疑問の僕だったが、実は実家でちーちゃんが「それ」をや
っているとは夢にも思わなかった。

東京駅で山手線に乗り換え、秋葉原で再び乗り換えようとしたと
きに、洋行さんが携帯片手に驚いていた。

「ええ！　だめって・・・どういうこと？」

ぼそぼそと電話相手に話していた

喧喧囂囂とやっているうちに、絶望的な表情で洋行さんは電話を
切った。

「どうしたの？」

「突然、最前スジからの予約で一杯になっちゃったんだって・・・
宿。」

なにい！　と柳眉を立てて、洋行さんに詰め寄る仲間達。

洋行さんはただただ困っているようだった。

「どうするよ、このまま学園に帰るのか？」

意気消沈した様子のステープに僕は笑いかけた。

「なに、洋行さん以外行き先を知らなかったのが、皆判らなくなっ
ただけだろ？」

「ああ？」

「行き先なんか、これから調べりゃ良いさ。旅行雑誌かなんかを調
べて、直接交渉しちまえばいいんだよ。」

急に、周囲の意気が上がる。

取り出したモバイルコンピュータで地図や温泉などを調べだし、何処に行こうか等と相談を始めるのであった。

「リヨウ、助かったよ。」

「なになに、旅行が面白くなっただんだから良いでしょ？」

実はこういう旅を試してみたかったのだ。

友達の叔父に変わり者がいて、連休があると急に温泉に行ったり近所の銭湯に通ったりで家を空ける人なのだが、その人曰く、「良いぞ、目的を探しながらする旅ってのは」と言う。

それを聞いて以来、一度いきたいって一度やってみたいと思っていたのだ。

「名前が面白いのと、場所がいいのと、わけわからないの、どれにする？」

何処から買ってきたのか、旅行雑誌を差し出す」。

多数決が取られる事になった。

「nekonakionn sen?」

「そうそう、猫啼温泉ねこなきって言うてね、まさに猫が鳴くって意味があるんだ。」

「にゃー？」

「ニャー。」

ケタケタと笑う皆は、東北新幹線に乗っていた。

一度東京駅まで戻ろうかと思っただけでも、目的地まで一直線いつきまっただのやうという方針のために上野駅で新幹線に乗ったのだが、一般ホームと新幹線ホームの遠い事と遠い事。

感覚的に地下五階と言ってもおかしくないほどの地下にホームコンコースがある。

学園のリニアトレインもずいぶん地下にあるが、それにも勝てるかもしれない。

まあ、学園は直通エレベーターで行けるので、こんなにも下に

降りたという気がしないから、負けていると言う感じもある。

しかしながら、誰も行った事が無い場所に行くと言うのは、結構、いや、かなり面白いものだった。

どの駅で降りるとか何線に行くとか不安と期待とが一杯になり、もう本当に遠足気分で、引率約のクラウディアさんも喜んでいるようだった。

涼やかな笑顔を見て今回の目的の一つは達成した気分になった。椅子をボックスにしてカードゲームに興じる姿からは軍人の香りなどは感じなかった。

旅行雑誌には「鄙びた湯治温泉場」とかいてあった。

辺鄙な場所で、温泉以外の観光はななくとかかいてあった。

そんな訳で、僕は勝手に民宿のような場所で、木製温泉だとばかり思っていたが、ぜんぜん違っていた。

どちらかと言うと、大きな温泉の観光ホテルと言う風情であった。ジーパンやタンガリーシャツなどで身を固めた姿ではいるのが、ちよつと気後れした。

「あのお、突然ご予約させていただいた、イズミと申しますがあ。」フロントに顔を出すと、四十がらみの女性が和服で微笑んでいた。「はあい、おまちしておりましたあ。」

宿帳に記帳して通された先は、六畳あまりの部屋三つであった。

「男さんは二部屋に別れていただいて、女子さんは一部屋お使いください。」

と言う事で部屋に分かれたが、押し殺すような悲鳴が隣から聞こえた。

クラウディアさんの部屋だ。

思わず駆け込もうとする前に、声をかける。

「クラウディアさん、どうかしましたか！」

一拍おいて彼女は無事の声を聞かせた。

「と、突然、鏡を見て、びっくりしただけです。・・・ご心配おか

けしました。」

見慣れぬ部屋で戸惑ったのだろぅと思って、僕達は風呂に行く事にした。

ここで気にしていれば、早速に宿を変えたであろぅに。悔やまれる。

風呂から帰ってきててもクラウドさんは姿を見せなかった。

「クラウドディアさん、お加減が悪いのですか？」

「すみません、ちょっと今日は疲れたようなので、お休みさせていただきます。」

済まなそうな彼女の声に、僕らは心配になったが、男のみではどうする事も出来ない事もあるので、彼女の部屋と一間空けた部屋で食事にする事にした。

些か盛り上がり欠けたが、開放感は嘘ではなかった。

風呂は24時間だと聞いていたので、僕はそろそろと部屋を抜け出して風呂に行った。

露天混浴などと言う事は無いので、安心半分寂しさ半分と言った所。

脱衣所をみて誰もいない事を確認して、やっと一息ついた気分であつた。

皆で風呂に入るときは、どうしても眼鏡を外せないで頭などが洗えない。

しかし、こうして誰もいない事がわかっていれば、安心して眼鏡も外せる。

据え付けのシャンプーで泡だらけ、据え付けのボディーソープで更に泡だらけになった僕は、一気にシャワーを浴びた。

痛いぐらいの水圧をあびると、眠気も何も吹っ飛ぶ。

夜闇が見たいなと思って、僕は露天風呂に身を沈めつつ空を仰ぐ。

遠くに無粋なジェットヘリの機体音が聞こえたが、強制的に無視する事にした。

眼鏡の無い視界で見る空は、満点一步手前の星空で、煌々と月が明かりをともしている。　　こういう空を、ずっと見つけていたっけなあ。

と感慨深げに思っていると、なにやら脱衣所に人の気配を感じた。空いてる風呂で一息しようという風にたくらんだ人間は、自分だけではないんだなあ等と思った。

じろじろと見ているのも良くないと感じた僕は、脱衣所に背を向けるように座りなおし、再び空を見上げる。

眼鏡が曇ってしまつので、一度湯船に浸してからかけなおすと、背後で息を呑む気配があつた。

なんだろうと思つて振り向くと、両手を口に当てたクラウドディアさんが、今湯船に入ろうと言う姿勢で固まっていた。

「え・・・と、なんで男湯にクラウドディアさんが？」

「なんで、元帥が女湯に・・・！」

同時に交わされた言葉で、彼女は幾分平静を取り戻したようだった。

「げ、元帥。　先ほどの仲居さんの説明では、右が男湯左が女湯と仰つて・・・。」

真つ赤な顔でこちらを見ているクラウドディアさん。

参つたなあと思つて、僕は視線をそっぽに向けていた。

「それは、１２時までの話。夜中の１２時を過ぎたら入れ替わるつて説明あつたでしょ？」

「・・・聞いておりませんでした。」

消え入りそうな声が聞こえた。

僕は手元のタオルをぎゅっと絞つて、眼鏡の上から目隠しをした。
「そんなままじゃ風邪引いちゃうよ。目隠ししたから一緒にはいる。」

「え、でも・・・。」

「ね？」

ゆつくりと、湯船に人が入ってくる気配がした。

もう、目隠しをとっていいといわれるが、僕は礼儀ですよといつて付けたままでいた。

嘆息の後、クラウドディアさんは勢いを付けるように僕に聞いた。

「邪魔じゃなかったのですか？」

チームだけの旅行に、自分がついてきて邪魔じゃなかったのかと「何でそう思ったんです？」

「・・・私は、軍務で元帥に付き従う立場です。ですが、現在元帥はバカンスにいらしていると理解しています。そんな時間に私が割り込んで良いものかと、そう考えています。」

なんと真面目の女性だろうと思うのと同時に、結構胸が熱くなってきたしまった。

なにせ、先日、バンガローであつた事が思い出されたからだ。

虎視眈々と男を食い物にしてやろうと思っている女性もいれば、ひそやかに思いを咲かせる女性もいる。やっぱり同行してもらつてよかったと心から思った僕だった。

「あのですね、クラウドディアさん。今回同行してもらつたのは、なにも学園からの指示ばかりじゃないんですよ。」

「え？」

「配属されてからこつち、クラウドディアさんってば、休みを一日も取つてないでしょ？」

「え、はい。ですが、毎日職務を果たしていらつしやる元帥の武官が、有給消化のために休みを取るなどと、どの口でいえますか？」

「その件で、僕は」J将軍から怒られてるんですよ。『私の部下を使い潰す気か』ってね。」

「・・・すみません。」

「いや、怒ってる訳じゃないし、文句をいつているわけでもないんだ。ただ、皆クラウドディアさんが心配だったんだよ。」

「はあ。」

「出来れば一度、クラウドディアさんの慰労をかねてどこかに行こうって言つてた所でこの話になってね。渡りに船って事で、同行してもらつたんだ。」

急に相手が静かになった。

なんか嚙り上げる様な音がしている。

タオルをずらすようにそちらを見てみると、ぐしゅぐしゅに涙を流す彼女がいた。

「あ、あの、クラウドディアさん？」

ウルウルの目でこちらを見たかと思うと、一気に彼女は距離を詰めた。

広げた両手で僕を抱きしめ肩を震わせている。

僕は、彼女を抱きしめる訳には行かず、ただただ彼女の胸の谷間で窒息しないようにもがくだけだった。

朝食、食堂に集まつた僕らが見たのは、つやつやの笑顔のクラウドディアさんだった。

「みなさん、ご心配おかけしました。」

きらびやかな笑顔の彼女は、みんなにご飯と味噌汁をよそおうとしている。

「あ、ほら、こういうのは僕達でやるものですよ。」

「でも、昨日は皆さんにご迷惑をおかけしましたし。」

そう言いながら、彼女は僕のほうを見て顔を赤らめた。

「なあ、リヨウ。貴様昨日の夜は何をしていた？」

真横の黄が冷やかな目をしている。

「・・・風呂に入ってた。」

「くらうであさんとはなにもなかったんだおるなあ？」

「な、何をいつておる・・・。ここの風呂は混浴ではないぞ。」

動揺のあまりアマンダ教授のようなしゃべり方で答える僕

「リヨウ、貴様は彼女の上司だからな。それを理由に、不埒なまね

をしていないとは限らん。」

殆ど物質化した冷たい視線をやめさせたのはクラウディアさんであつた。

「誤解をなさらないください。黄さんもよくご存知の通り、元帥はそのような命令をなさいません。」

きつぱりと言い切つた彼女に笑顔を向けながら、黄の手は僕を掴んで離さなかつた。

きつちり釈明せよと言う意思のこもつた手であつた。

僕は半ば睡眠不足の頭を振って、朝食にありついていていた。

卵をかき混ぜつつ、しょうゆを加える。

そんな動作の中で昨日のことを反芻していた。

黄に言われるまでも無く、確かに昨日はやばかつた。

前のはだけた妙齡の女性に、全力で抱きつかれていたのだから。

体中が「よし、いけ！」という信号を出していて、そのうえで、

彼女の肌もほんのりと赤かつた。

まともに無い性知識を総動員して考えてみても、ここは男になる場面だろうとも思つた。

が、意識は急に空に戻つた。そして先ほど聞いたヘリコプターの音が、再び近づいてきた為、急に音が気になつた。

灼熱の思考になつていた僕の頭は、なぜか瞬間的に正氣に戻つていた。

状況としてこのまま流されても良かったのだけれども、僕自身がその先の責任が持てない事を十分わかつていたから。

だからこのまま自分から抱きしめる事は出来なかつた。

ゆっくりと彼女の頭に手を置いて優しくなでていると、どうにかこうにか彼女も正氣に戻つたらしく、抱きしめていた両手の力が抜けてきていた。

あのままだつたら間違いなく「間違い」を起こしていただろうと

思う。

今はあんなににもにこやかな彼女の表情があるのだから、あの時、少々不満げな彼女の表情を思い出しても、その間違いは起こさなくて良かったと思う。

「元帥、おかわりはいかがですか？」

浴衣の向こうで不自然にまでゆれる彼女の胸を見て、思わず赤くなつた。

（ブラしてねーじゃん！）

思わず固まつた僕の耳に彼女は囁いた。

「セクハラですよ、元帥。」

声の調子は怒っているようであつたが、顔は微笑んでいた。

「んじゃ、セクハラついでに日本人として忠告。浴衣は着物じゃないから下着を着たほうが良いよ。」

真つ赤になつた彼女は、飛び去るようにその場を後にした。

さて、散歩にでも出ようと言う話になつたとき、仲居さんが現れて妙な事を口走る。

「客様、お連れ様にご到着です。」

くすくすと笑いながら消える仲居さんを見ながら、何の事だろうと思つていた僕達の表情は、次の瞬間に凍りついた。

そこには、第三礼服を綺麗に着こなした麗しき美少女二人が立っていたからだ。

仮面のようににこやかに固まつた表情で、僕をつるし上げる。

「さて、言い訳を聞かせてもらえるかしら？ リヨウ。」

「何をするのもチームで一緒、二度と私達を外さないって言つたわよね？」

そんな事は一度も言つた覚えは無いが（いや、去年言つたかもしれない）、ここは一先ずやる事があつたので実行した。

「やあ、おはよう。今日もきれいだねえ」

容赦の無いビンタが、二人の手から放たれる。

僕の両頬は、真っ赤に燃え上がっていた。

「みなさん、ちょっと個人的なお話が彼とありますの。席をはずして頂いてけっこうかしら？」

全く凄みも入っていない口調であったが、誰もが首が外れるほどに頷いていた。

脱兎のごとくにチームがいなくなった部屋の中で、じんわりと殺気を放つ二人の少女と僕が取り残されたのだった。

明るい和室のはずであったが、何となく暗くなっている気がする。それは多分、僕の正面にいる二人の少女に威圧感を感じている為だろう。

「で、どういうことなのかしら？」

大して大きい声ではないのに、冷え冷えとした声が、部屋中に響く。

正座をして僕は、ビクリと姿勢を正した。

「・・・私達は、チームじゃなかったのかしら？」

さらに僕はビクリと体をふるわせる。

すくりと立ち上がった二人は、音もなく僕の両脇に座った。

「もう演技は止めて。あなたは全く怯えている訳じゃないし、私たちが怖がっている訳でもないのはわかってるんだから。」

冷静な視線のイブを見て、全て見透かされているのを感じた。だがしかし、彼女たちも見落としがあることを僕は理解した。

そこを突かれないうちに僕は思考をフル回転にした。

「でも、判らないの。あなた達が私達を置いて出かけた事が。」

深くため息をついて、僕は二人の肩に手をまわした。

「・・・出かけた理由は判っているんだね？」

こくりと頷く姿は、年相応かそれ以下に見える。

「ミス・クラウディアの休暇でしょ？」

「それは私達もいる席で話していたんだから、そのぐらいは解って

るわ。」

些か気分を害したふうの声で言う二人の少女が、二人の少女は、いまだ全ての理由に思い至っていない。

言うべきか、言わないべきか。

「置いていった事に理由があるのね？」

さすがに聡明な少女達だ、自分達が置いてゆかれたこと自体に何らかの理由があることをかぎ付けた。

が、理由は判るだろうか？

本当の理由について。

「・・・私達、何か嫌われるような事、した？」

バンガローの一件を引っ張り出そうかと思っただが、それは賢明ではない。

その辺は皆で話してあるから。

それが故に置いていったのだが。

「嫌ってはいないし、嫌われるような事もしていない。」

「じゃ、なんで？」

小さくため息をついて、一つの理由を口にした。

「君達は、クラウドディアさんにストレスを与えるんだ。」

「え？」「私達は別に・・・。」

「君たちがどう思っているように問題ではないんだ。けれども、彼女は君達と一緒にリラックスできない、これは間違いの無い事実だから、君達を今回の旅行から除外した。」

真っ白な顔色で僕を彼女達は見つめる。

「・・・君達は悪くない。でも、彼女も悪くないんだ。君達は普通の女性から見て眩しすぎるし、ひどくコンプレックスを刺激する存在なんだ。わかってるだろ？自分達でも。」

ぎこちなく、二人は頷いた。

この辺の話で納得してくれるんなら問題は無い。

「そんな彼女のストレスを解消してあげたい、休ませてあげたいって思っただけで、チーム方針は決まってくると思うんだ。知らせ

る事無く出た事は悪いと思ってる。でも、選択肢は殆ど無かったんだ。」

一度二人から離れて、そして深々と頭を下げた。

「ごめん」

その一言で済めばよかったのだが、二人の少女は僕の思惑を超えて優秀だった。

「ね、なんで私達の目を見てくれないの？」

どきつ、と今までの平静が吹っ飛んだ。

何の演技もなく、心臓は爆発するほど高まっていた。

（まずい）と思った顔が、そのまま出てしまい、更にあせった。

無理して顔を上げた先の少女達は、今にも泣き出しそうな顔をしていたから。

もう、ごまかしは効かない。

真実のみが最後の言葉だろう。

諦めた全身を覆い、真実への言葉を吐き出さざる得なかった。

「・・・ごめん、ほんとの事を言うよ。」

ずっと正面から彼女達を見つめ、そして腹に力を入れて言葉を紡ぐ。

「怖かったんだ、君達が。」

「え？」

「正確に言えば、あのバンガローの一件で、僕達は君達を含めた「女の子」という存在全てに恐怖を感じてしまったんだ。」

二人の少女真つ青な顔をしている。

「君達は多分、悪戯半分で、レクリエーション気分でした事なのだと思うし、多分僕達もそう受け流すべきなんだろうと思う。でも、僕達は感じてしまったんだ、君達から恐怖ってやつを。」

2人の少女は自らの身を抱きしめるように震えている。しかし、言葉は区切れない。今ここで区切ってしまうてはいけない。

「凄くショックだったよ、自分達が如何に軟弱だったかを知って。」
「いやいやを繰り返すように2人は首を振る。泣き出しそうなその

顔から悲鳴が聞こえそうだった。

「・・・だから、君達がアマンダ教授のところで調整をしている間だけでも距離をとって、それで、君達と向き合いたって思ったんだ。」

ボロボロと涙を流す2人を、僕はぎゅっと両手で抱きしめた。

言葉にならない唸りを上げながら、二人の少女は滂沱の涙を流している。

「ご、ごめん、なさい。・・・あなたがそんなに傷ついているだなんて、ぜんぜん気付かないなんて・・・ごめんなさい・・・。」

「・・・最低ね、私達。・・・初めにあなたが私達を裏切ったのは、あなた達を陥れたのは私達だったのに。」

ぎゅっと更に力を入れる僕。

彼女達はぐっ、と声を出してしまふ。

「駄目だ、君達は裏切っていないし、陥れてもいない。駄目だよ絶対にそんな風に謝っちゃ駄目だ。僕達は確かに『怖い』と思ったけれども、それは傷ついている訳じゃない。」

抱きしめた2人の少女の頭を寄せて言う。

「君達と僕らは、いや僕は正面から向き合いたいんだ。だから、ちよつとだけ時間をもらえないかな？」

ゆっくりと離れてみる少女達は、真っ赤な顔で頷いて見せるのだった。

赤い顔の少女達が、乱れた制服を調えているところで座敷の戸が軽く叩かれる。

「元帥、お話中申し訳ありませんが、緊急信号を受信しました。」
「入ってください。」

その一言と共に、真っ赤な携帯電話を持ったクラウディアさんが、国連空軍の士官服で現れた。彼女の居住まいを見れば全てが知れる。僕とクラウディアさんの休日が終わったのだ。

無言で彼女が渡す電話を僕は受け取った。

「おはようございます、イズミです。」

『おはよう、リョウくん』

電話の先は学園で留守番をしている風御門先輩であった。

「ミスター、現状は？」

『我々も詳しい状況はまだ掴んでいないが、国連学生の自宅に押し入れられ籠城された。』

「地元警察の範囲ですね。」

『たしかにそうとも言えるが、籠城している場所と人質が問題だ。手元にクラウドディアさんがメモとペンを渡してくれる。』

「何処です？」

『場所は日本、東京都板橋区だ。』

ぱたりとペンが落ちる。

不意に背筋が寒くなった。

東京都板橋区出身の国連学生は、現在2人いる、というか2人しかいない。

それもよく知っている人物だ。

「そのお、もしかすると、無人の僕の家で籠城してるんでしょうか？」

なかば期待を込めたその言葉を、ミスターは否定した。

『残念ながらそうではない。もしそうならば、君の許可を得て、家ごと殲滅戦を仕掛けている。』

だらうなあ、と思いつつ、言葉は繋がる。

「では、やはり・・・。」

『そうだ、籠城先は株式会社隅田組、人質になっているのは社長及び専務、そして血族である墨田千鶴、その友人ドロレス・ファイランド・アース、そして最も厄介なのは最後の一人だと言っている。』

イヤな予感が背筋を這う。

「あのおー、もしかして厄介なヒトというのは・・・。」

『御察しの通り、君の恩師「天野川 清音」その人だよ。』

だあー、と思わず突っ伏した。

色々といいたところもあるが、一応一般見解というものを話してみる。

「何のかんのといっても、あの人は一般人ですよ？」

そう、一般人だ。

車の趣味が悪くて、いつも金欠病で、生徒の人気抜群だと言っても、ただの公立学校の教師なのだ。

『リョウウィズミ。いつも言っているが、自分と自分の身内を不当に低く評価するのは君の悪い癖だ。言っておくが、彼女は国連学園でも教師勧誘している人材だぞ？ 独自努力で2人も、それも僅か2年の間に連続で2人もの生徒を国連学園に送り込んだ才媛だぞ？ それでも無価値と言うのか？』

「無価値とは言っていない。ただ、彼女は人様が大騒ぎするような大物政治家とかじゃないんだって言っているだけです。」

『政治家なぞ、誰でもなれるものだ。代わりなど世間にはいて捨てるほどいる。しかし、国連学園に独力で二年連続人材を送り出すなど普通では出来ん。それだけでも各国、それどころか国連学園が欲しがる価値がある。』

深いため息が漏れた。

一人は確かに評価どうりなのだけれども、もう一人は、どうもイカサマっぽいなあ。

ぼりぼりと頭を掻いているところで、ミスターサイドに新たな情報が入ったらしい。

『・・・最新情報だ。犯人の名は滝本 啓二。去年度の国連学園受験者で、学業成績がトップだった事が判明した。要求は、去年度行われた国連学園入学試験結果を正常なものにするように、だそうだ。』

「正常に、ですか。」

『正常に、だそうだ。』

がつくりと肩を落とし、再びため息をつく。

まいったなあ、と言う感じた。

国連学園の入学試験は、8次に渡る予備試験と二次の本試験が存在する。

予備試験はどちらかというと成績判断材料と言うよりも模擬試験的な要素が高く、入学試験に大きく関係はしない。

が、その予備試験の結果で、だれしも入学確実だとか一般学校に受けなおすだとかを判断する訳であるが、本試験は違う。

一次の学業試験に加えて、二次の運動試験が大きく影響する。

国連学園に受験し、一次試験を通れる人間の学業資質はほぼ一律だ。

授業についてゆけるだろうし、研究も十分出来るだろう。

しかし、波乱にとんだ学園生活には、勉強しか出来ないモヤシッ子では堪えられない。

野を駆け、湖面のドラム缶橋を走り渡り、手漕ぎボートで川を遡り、そして地に伏せ息を潜めて夜を明かすようなタフさが必要なのだ。

ちなみにこのタフさを計る試験は、千鶴が入学したときのもので毎年その内容が微妙に変わっている。

僕ときは山ひとつを踏破するというものがあり、かなりきつかった。

で、その総合成績で入学順位が決まるのだが、総合し方が問題だ。学業2で体力8という比率で加味されるものだから、いかに学業がトップでも入学が果たせない人間が多数存在する訳だ。

無論、一次試験でアシきりされる訳だから、一定学力以下の体力馬鹿も入学できない。

受験のオリンピックとはよく言ったものだと思う。

「ま、無理ですね。学業トップで入学できなかったとしたら、間違いないく体力テストをやっていますよ。途中で倒れたならまだしも、手を抜いたか途中で棄権したかどちらかですね。」

『資料では、体力テストを野蛮な行為として棄権したそうだ。』
その時点で入学の資格は無い。

国連学園で生活する為に必要なのは、たゆまぬ努力と抜け目の無い目と、ルールに従う従順さとルール網目に指をかけてひっくり返す知能と技巧なのだから。

『まあ、対応は決まっているが交渉は必要だろう。・・・そこでだ、君に現場へ飛んでもらいたい。』

「・・・僕、これでも元帥なんですが。」

『その権力を使ってもいいが、恩師が救出されているときに温泉で部下と遊んでいましたと言うのは格好がつかないだろう?』

あらためてため息を出した僕は、すつくりとたちあがる。

「・・・現時刻をもって、板橋区竈城事件を『イズミ元帥府』の管理下におきます。UN関係部署および国家所轄に早急な連絡を。」

『了解、イズミ元帥殿』

切られた電話をクラウドさんに渡し、僕は苦笑した。

「さすがにこの格好では行けませんねえ。」

「はい。元帥閣下の制服は私が持っていました。」

さすがは敏腕武官。

振り返った僕は、2人の少女に微笑んだ。

「ちよつと早いけど、僕のバカンスは終了しちゃったんだ。・・・学園でまってるね。」

真つ赤な目をした彼女達は、小さく頷いた。

UNのマークの入った垂直離発着機がヘリポートに降り立った。小型だが十分なジェットエンジンを積んでおり、音速に届く稼動が可能な機体だ。

乗員はパイロット・サブパイロットに加えて三人までだ。

僕とクラウドさんが乗り込んだ後、押し込むように一人乗ってくる。

よく見れば第三礼服のイブ。

「・・・学園でまってるんじゃないの?」

先ほどの表情など何処へやら、引き攣った笑顔。

「・・・黄から聞いたわよ。昨日の夜、何処に行ってたのかしら？」
たらりと汗が流れると同時に、更に加圧された。

「マッハで飛んでも道中長い事よ、ゆっくり聞かせてもらえるかしら？」

レンファもなかなか負けていない笑顔だ。

「げ、元帥！ 定員オーバーです！！」

すくりと立ち上がった二人の少女は、ナビシートのパイロットを放り出す。

「クラウドディアさん、あなた空軍士官ならナビぐらい出来ますわよね？」

「は、はい！」

はじかれたようにナビシートに飛び込んだクラウドディアさんは、手際よくチェックリストを埋めてゆく。

思わず僕らはその姿に見ほれていたが、彼女が口を開くと同時に我に帰った。

邪悪な笑みを浮かべてパイロットにこう宣言したのだ。

「今より、パイロットシートの優先権を宣言します。宜しくて？
軍曹。」

「は、はい・・・。」

一気に出力が高まったジェットタービンは、機体を瞬間的に空に放った。

「ひゃーーーーーはっはっはっはっは！！」

以前、UN空軍で『クレイジークラウドディア』と呼ばれていたパイロットがいた事を僕達が知ったのは、現地についた後であった

某マンションのヘリポート施設に無理矢理着陸した機体から、どうにかこうにか這い出してきた僕達は、お互いの無事を心より祝った。

「あの、元帥。乗り物にお弱いのですか？」

さらっとした顔でそんな事を聞くものだから、思わず僕は突っ

込んだ。

「誰だって驚くわ!」

「はあ、なぜでしょう? パイロットの頃から皆さんにそういわれます。」

まあいい、その辺を細かく突っ込むと怖い事になりそうだったので、僕は詮索を後にした。

クラウドさんが差し出す赤い電話を受け取って、僕は対応した。

「あー、ども。こちら元帥府です」

「やあ、どうやら予定より早く着いたみたいだねえ。」

「まあ、パイロットがある意味優秀でしたので。」

多くの返事はなく、ただ「なるほど」と返した後、ミスターはやトーンを落とした声で話した。

「時間推移が少ない分、現場の流れも無い、いわばこう着状態だったのだが、先ほど住宅街の上で亜音速を出す馬鹿やろうがいたもので、現場は蜂の巣をつついたような騒ぎになっている。」

つーとクラウドさんを見たが、彼女はにこやかに微笑んでいるだけであつた。

・・・まあいい。

「で、変化は?」

「「馬鹿やろう」の機体を狙って乱射したお陰で、犯人が持つライフルの弾薬が減少した。」

「つまり、誰かが殺されれば、その瞬間に人質ごしに射殺決定ですか。」

「地元警察はその気満々だな。」

「相手は未成年ですよ?」

「国連学園を相手にした時点で、その辺の法律はあいまいになっているな。」

ぼりぼりと頭を掻いて、クラウドさんの差し出した双眼鏡をのぞく。

トチ狂った子供でも見れるのかと思いきや、縁側でスイカを食べる三人の女性が見えるだけであった。

一人はどうしようもないぐらいに怯えている、ローパンドリルヘアの少女。

もう一人は、妙に楽しそうにスイカにかぶりついている、黒髪つややかな少女。

最後の一人は、真つ青な顔で今にも倒れそうな顔をしているが、じつは二日酔いのせいだとあからさまに解る成人女性。

「あのー、いま、ぼくのいる位置から、知ってる顔の女性が仲良く並んで縁側でスイカ食べてるんですが。」

『ああ、一応人質の安全を確認したいと言ったら、そんな感じになったそうだ。ちなみに屋内の最深部からライフルは構えられている。』

「ミスター、籠城しているのって一人じゃありませんね？」

『ん？ ああ、よく判ったものだね。犯人は一応三人と言う事になっている。』

まず、国連学園を受験した本人、あとはその両親だそうだ。

「世も末だ」

思わずため息をついたが、再び覗き込んだ双眼鏡の中で不意に気付いた事があった。

2人とも第三礼服を着ていないのはいいとして、帯剣をしていない。

武器として取り上げられたか？

「ね、リヨウ。射殺しちゃうの？」

イブの問いは、一番安易で救いようの無い方法への逃げ道を封じるものだった。

「大丈夫よ、イブ。彼は誰も殺さないわ、殺させるものですか！」

レンファのこの励ましは、僕への完全なストッパーになった。

正直な話、自分が現場に居るのならば、色々と手を尽くせるのだろっけれども、さすがにこんな風に外から見えている状態では、地元

警察と同じ立場といってもいい。

きらきら光る瞳で見つめる2人の少女を見て、力なく僕は呟いた。
「何とかしましょう」

くすくすと笑ったミスターは、妙な事を言い出した。

『まあ、暴食の人質にを殺さぬよう、頑張ってくれたまえ。』
「へ？」

下水道の本管は、ひどく広いトンネルのようであった。

カメラ映像から覗く世界からは何の臭気も感じないが、ひどい匂いなのだろうことは疑うべくも無い。

しかし、UN特殊部隊の面々は黙々と指示場所まで進んでいった。
「元帥、そろそろ到着します。」

クラウディアさんの言葉と共に、映像の移動も止まった。

『こちら出前一号、指定位置まで到着しました。』

しゅこーしゅこーというバルブ音は、彼らが使っているレギュレーター
の音。

さすがに現地での酸素は期待できない。

「えつとですね、進行方向右側の壁、天井から二十センチの所を破壊してください。」

『了解』

短時間で壁に穴が空けられ、そしてボルトのようなものが差し込まれる。

ハンマーで二回ほど叩いた所で、下水の壁は音もなく一気に崩れた。

そこは階段になっており、真っ暗な光も無い空間に繋がっている。

『発見しました、元帥。』

「あ、こっちからも見えます。エコーで照らしてみてください。」
『了解』

光学映像であつた画面は、一昔前のCGみたいなワイヤーフレーム映像に切り替わる。

二秒に一回切り替わるその絵は、細部にわたる形状で、その階段を表していた。

崩れた壁からはいつて階段三段上の所に、描ききれない何かが存在している。

『元帥、罨を発見しました。これより処理に入ります。』

「いや、それはいいよ。罨じゃなくて鍵だから、先頭に行く人が持つていつてね。」

『・・・了解』

いささか納得していない様子であつたけれど、それとは別に「鍵」と隊員は手にした。

手のひらサイズのティディーベアという名の鍵を。

「しかし、よくそこに抜け穴があると判りましたね。」

「感心するほどの事じゃないですよ、クラウディアさん。僕も最初はわからなかつたんですから。」

ミスターから暴食と言われ、一寸おかしいと思った。

センセは二日酔いで真つ青だし、ロリータは緊張で真つ青だっただけに食欲は無からう。

じつちゃんと若い衆は多分地下に軟禁されているだろうから、暴食と呼べるほど食べる人間はいないはずなのだ。

しかし、一時間と空けずに頼まれる食事は井モノばかりで、一気に四つ、多くは八つは頼むと言う。

頼む店も指定しており、犯人達が頼むものとは一風変わっているものばかりだったと言う。

なぜだ、そう考えているうちに、毎回、時間をおかずに何品も頼んでいる事、全て井だと言う事で急にひらめいた。

最大八品は、最大8ビット。井ばかりなのは共通する何かを伝えたがっているのだ。

どんぶり、井桁の中の点・・・。

ハビットだと思ってそれを解読した瞬間、誰が何を伝えたがっているか、すぐにわかった。

暗号は「てで」と繰り返しているだけだったから。

その昔、墨田組が悪者だったとき、警察の手入れから逃げる用の道があった。

そこは代々の組長しか知らない場所にあるのだが、幼い頃にちーちゃんはそれを発見したのだ。

発見した証拠に、幼いちーちゃんが大事にしていた熊のぬいぐるみをその場所に置いたという。

それを聞いた僕も組の中をくまなく探したが見つからなかった。最後にちーちゃんから聞いたヒントは、今になれば判るもの。

「かえるの代わりに熊をおいてきたの。」

井の中の蛙、のことを言ったのだろう。

今は無いその井戸は、屋敷の中に繋がっている事などそのときの僕にはわからなかったのだから。

『元帥、ただ今通路の上側終端部に到着しました。屋敷間取りから推測いたしますと、既に地上についているはずなのですが、いまだ階段が存在しています。』

「ああ、大丈夫。その階段の最後まで行けば、二階の天井部屋にいけるから。」

昔ちーちゃんは家の中でかくれんぼをすると、よく押入れから現れた。

小さいから見つかりにくい所を選んでいるのだと思っていたけれども、実は天井まで行き、各部屋に行き来していたと思われる。

そう考えれば腑に落ちる事が多すぎるのだ。

勢いよくスイカの種を噴出す途中で、千鶴は壁に飾られている絵が傾くを見た。

まっすぐであった絵が傾いた。

周囲に風はなく、地震があつたわけでもない。

二階には誰も居ないし、一階で誰かが暴れている訳でもない。それを見て彼女はにっこりと微笑んだ。

「センセ、そろそろ店屋物を取らなくて良いみたいですよ。」
その言葉を聞いた清音教諭は、がっくりとうなだれてため息をつく。

「そう、よかつたわあー。昨日は張り切って呑みすぎたから、ちょっと井ものつてきつかったのよねー。」

殆ど食べていないスイカを横において、彼女は横になったが、背後から叱責が飛ぶ。

「おい、勝手に寝転がるな！ お前達は俺の盾なんだからな！！
国連学生の榮譽に浴する俺の盾になれるんだ、榮譽に思え！！」
汚い英語で叫ぶ男に、ロリータは軽蔑の視線を送ったが、男は理解できていないようだった。

「滝本啓二の名前を覚えておけ、国連学園を掴む男の名前を！！」
何度も繰り返されたそんな台詞に、げんなりとした視線で男を見た千鶴は、それでもスイカを食べ切った。

「ごめんねロリータ。あたしがうちに招待したばかりに、とんでもない事になっちゃって。」

「いいのよチヅル。こういうのって国連学生の宿命みたいなものですから。」

青い顔のまま肩をすくめる少女のをチヅルは優しく握った。

「大丈夫、絶対お兄ちゃんが何とかしてくれるから。」

ほのかにロリータの頬が朱に染まる。

「ふーん、お兄ちゃんってロリータの増血剤代わりみたいね。」

「もう、・・・ばか。」

子猫のじゃれあい、それを清音教諭は面白そうに見つめていたのだった。

「でも、チズル。ホントに店屋物、食べなくていいの？」

「うん、そろそろ違うものが食べたくなってきてない？」

暫くうつむいたロリータであったが、小さく呟きをもらす。

「・・・やっと、天井のおいしさがわかってきた所なのに。」

爆笑の千鶴と清音教諭。

真つ赤なロリータを着に大いに盛り上がっている2人は、今、ライフルを向けられている人質のはずであった。

もちろん、勘違いでなければ。

天井裏の部屋は、飛んたりはねたりしても軋まない、本当の意味での部屋であった。

更にあがってきたものとは別の階段が存在しており、間取りが正しければ、そのまま地下室に下がる階段であると思われた。

縦横無尽に走っている通路を補強したのはいいちゃんだろう。

あの人はその辺の遊び心はわかっているから。

『元帥、地下施設内で軟禁されていた人質を発見しました。裂傷と打撲で衰弱している模様です。』

「では、地下進入路から搬出してください。」

『りょうか・・・ぼん!』

復唱の横から聞きなれた声が響く。

「じつちゃん、いま隠密行動中だから、黙って従ってね。」

『ボン、お客人を、お客人を・・・千鶴をおねげーしやす。』

「任せてよ。だからじつちゃんは早くそこから脱出してね。」

『せめて一太刀あびせてーんでやんすが・・・。』

「・・・じつちゃん、相手は馬鹿でもキチガイでも一般人だよ。」

渡世に敵しい現代の任侠、隅田組の男達は、身内を人質に取られただけではやられたりしない。相手がキチガイの様であっても一般人であったから手出しが出来なかったのだ。

『・・・わかりやした。』

音だけでも肩を落としているのがわかるが、さすがに怪我をしている状態で妙な事をさせられない。

『リヨウサン、お客人とチズルさんをよろしくお願いいたします。』

秋野さんの声はくぐもっていた。

多分殴られて顔がはれているのだろう。

「さつてと、いっちょ行きますか。」

背伸びをした僕は、マイクの前から離れた。

「げ、元帥。・・・何処にいらっしゃるのですか？」

「もちろん、危険極まりない現場だよ。」

「げ、元帥！！」

反射的に動こうとしたクラウディアさんを制止する。

「リバティークラウディア大尉、いまより前線連絡官を命じる。この場で待機し、連絡を待て。」

その場を去ろうとした僕を、彼女は抱きしめて止めた。

「いやです、駄目です！　元帥ばかりは死なせません、元帥を死なせません！！」

「あのね、僕は死に行く訳じゃないんだよ、囷になりに行くだけだつてば。」

「判ってます、その身を犯人にさらして、残りのライフル弾を受けようとしている事ぐらい判っています！！」

「だったら判るでしょ？　この元帥服は防弾仕様で・・・。」

「ライフル銃は防げません！　頭部を狙われれば一撃です！！」くるりと振り返る僕。

そのまま彼女に唇を奪う。

呆然とした彼女を突き放すと、そこでは不満一杯の少女が2人、大尉を受け止めた。

「じゃ、大尉を頼んだよ。」

無茶苦茶にもがくクラウディアさんを頼んで、僕は隅田組に走った。

「あ、あなた達は、元帥が心配じゃないんですか！！」

2人の少女にそう叫ぶ大尉の頬をレンファは叩いた。

「心配しない訳無いでしょ！　でも、あの人を信頼できるのは私達

だけ、私達だけなのよ！」血を吐くような叫びに大尉は体を固くする。

「私達は、あの人を信じてる。へらへらと気軽に簡単に物事を進めているようで、誰も信じられないぐらい頭を使っているあの人を信じてる……。」

ぐつと2人の少女はクライディア大尉を引き寄せた。

「だから貴方も信じて。私達と同じく、あの人のおそばに居るのなら、信じて。」

それは盲目的な信仰なのかも知れない。

全く論理的ではない発想なのかもしれない。

しかし彼女には理解できた。

リバティーククラウドディア大尉には、その瞬間に理解できた。

そしてその瞬間こそ、大尉が真にチームの仲間と認められたときであつた。

ひとしきりふざけ合つたチズルとロリータは、周囲に視線を走らせた。

鈴なりであつた取材陣は音もなく姿を消しており、空を覆つていたヘリコプターは姿を消した。

実際取材陣もカメラを回せたわけではない。

事、国連学園に関わる事件であり、元帥府が直接統括を発動した事例だけに、カメラどころかレコーダーだって回せない。

それゆえに、取材陣は己自身をセンサーにして、事件への立会いをもって取材としていたのだ。

が、そのセンサーたちが姿を消した。

うるさかつたヘリコプターも消えた。

先ほどまで奇声情報でうるさかつたテレビもラジオも通常の放送に戻った。

あたかもこんな事件なんか起きていないかのような静寂になった。千鶴はそれを見て『なにか始まるわ』とロリータの耳元で囁く。

彼女も小さく頷いた。

「おい、チャンネルを変えろ！！」

言われるままに千鶴はチャンネルを変える。

一つのチャンネルにとどまらずに、ガチャガチャと番組を変えてみても、もう今の状況を伝える二ニュースやテロップは流れていなかった。

「ちくしょう！　どうなってるんだあ！」

だんだん！と、男は手元のライフルを天井に向けて撃つ。

しかし、先ほどまで銃撃のたびに奇声や悲鳴が聞こえていた外は、今は静かになっていた。男は、顔を真っ赤にした。

「くそっ、ためーらは見捨てられたぞ！！」

男は縁側で座る三人に照準を合わせた。

ゆっくりと引き金を引き絞り、撃鉄があがる。

「死ねよ！」

全力の引き金が引かれた。

爆音と共に走る銃弾は、一人の少女に吸い込まれるかと思いきや、突然現れた人影がそれを遮る。

「・・・ぐう。」

低い唸りを上げた人影は、間違いなく国連学園第三礼服を着用していた。

深く被っていた帽子がゆっくりと落ちると、流れるような黒髪が地に付き、音を立てずに眼鏡が落ちる。

苦悶の唸りと共に身を起こしたその人物を見て、男は嘲笑を浮かべた。

「馬鹿が！　たかが女の分際で、この俺のする事に逆らうとは！！
女は黙って俺に股を広げて・・・」

そこまで言った男は、まるで何かに気をとられた様な表情で固まった。

あうあうと何かを喋ったようだったが、自分が持っているライフルを見て、急に驚いた表情になる。

ライフルを握って離さない手を、ちぎるように離し、そして慈悲を請うような表情でにじり寄ってくる。

第三礼服の主は、静かに近づいてゆき、そして全力で男の顔にけりを入れた。

鼻血と前歯を撒き散らしながら、男は幸せそうに床に伏した。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

大丈夫な訳は無いと、ロリータは錯乱していた。自分を庇ってライフル弾をその身に受けたのだから、無事なはずはないと。

背を向けたまま肩をすくめたその人物は、先ほど落ちた眼鏡を拾って、豊満な胸を揺らしつつ、振り返り、そして微笑んだ。

「なに、ぜんぜん大丈夫だよ、ロリータ。」

その笑顔、身体的特徴を超えた所で彼女達には認識できた。

「おにーちゃん！」

「元帥！！」

飛ぶように抱きつく二人の少女を抱きとめつつ、いまだ縁側でだらけているセンスに手を振った。

「なーにも、自分で出てこなくても、部下がやってくれるんじゃないのぉ？」

「センス、ここ一番で前に出てこなかったら、それこそ怒ってるくせに。」

するとセンスは肩をすくめて言う。

「ま、階級が偉くなったからって、中身がそう簡単に変わってたまるものですか。」

そう、彼女自身もここ二年で急激にその立場を変えているものの、変わらぬ人望と評価が続けている。

伝え聞いた話では、地獄極楽固めは健在だとか。

『元帥、ほか二名の確保を終了いたしました。』

イヤホンから流れてくるクラウディアさんの声に手を振って答える。

彼女は多分、僕が見える位置に移動しているだろうと思ったから。

『了解。では、首謀者の確保に人員を向かわせます。』

再び手を振ると、腕の中の2人の少女は怪訝そうな顔をしている。知らん顔で指を鳴らすと、それにあわせて十数名の黒ずくめの兵士達が殺到、一瞬にして犯人の男を連れ去った。

一人残っていた兵が敬礼をしたので、それに合わせて敬礼すると、何処に隠れていたのか再び十数名の兵が現れ、何かを期待したような目でこちらを見ている。

一寸考えた僕。

「諸君、ご苦労。」

ぴちつと敬礼すると、満面の笑みで総員が敬礼し、足取りも軽く縦列で去っていった。

「大人気ね、おにいちゃん。」

「なんか変な誤解されてる気がするなあ。」

大きなサイレンと共に、UN緊急車両が狭い路地に殺到してきている。この場にいても邪魔になるだけだろうと判断した僕は、飛び出す兵達に軽く手を振りながら、その場を後にする事にした。

「では、皆さん。あとをよろしくお願いいたします。」

「元帥、後はお任せください。」

ぴちつと敬礼する隊員達の列は、そのまま徒歩で僕の自宅に到着するまで続いていたもので、こっちは隅田組からずうっと敬礼の姿勢のままで、練り歩く羽目となってしまうた。

近所のヘリポートまでも同じく隊員の列が続いていた為に、垂直離着陸機に搭乗するまで敬礼をしていた僕を、同乗者の少女達は失笑していた。

「あ、そうだ、クラウドディアさん。」

「はい、なんでしょう？ 元帥。」

ずっと耳元をお願いをする。

「・・・清音センセの身辺の警護へ人員をお願いします・・・、公私混同で申し訳ないんですが。」

にっこり微笑んだ彼女は、何処から取り出したのか手元の端末に
入力を始めるのであった。

後日、UNコマンド部隊より無茶苦茶な報告が入る。

曰く、「当方、清音教諭に警護に必要なしと判断す。 当方損害

多数につき、中止もしくは配置変更を進言する」

地獄極楽博愛固めは、真実に健在のようだった。

第十二話 幻美人

凱旋休暇が終わって暫くして、僕は三軍合同査問会に呼ばれた。神風元帥とか特攻元帥だとか何とか陰口を言われている事は知っていたが、今回の特攻はずいぶんと批判を浴びる事となったのだらう。

何せ、何の通達も無く事件を元帥府直轄にして、彼らの部下を無断で動かしたのだから。

そんな頭越しの独断が、小僧によって行われたのだから、三軍の各々の長たる將軍達としては面白いはずもない。

首をすくめてその場に現れると、三面ホログラフィーの向こうで、將軍達がつばを飛ばして激論を交わしていた。

僕が入室した事に気付いた三人は、居住いを正して口調を和らげて話を始めた。

内容は、ずいぶんとやんわりとした吊るし上げであつた、・・・と思う。

やれ考えが足りないとか、もっと自分の部下達を信用して欲しいとか・・・。

細々とした文句は、脳みそを日本語モードに切り替えれば聞き流せるが、語りかけるように話される英語は、どうも無視しにくい。

おもわず、アートかうーとか言いながら全部聞いてしまった。

彼らの言い分はわかる。

三軍全ての長たる元帥が、現場で直接指揮をとるだけでも異例なのに、その事件現場に自ら乗り込むなどと言う行為は言語道断、彼らの思考の範囲外の行動であらう。

それをやっちゃうんだから、將軍職としても立場が無いし、僕自身も問題行為と言えるだらう。

公平を求められる公職の元帥が、国連学生の事件に直接関与した

という前例が出来れば、他の人間の事件にも直接関与が求められるのだから。

そんなは何回も起きる事件ではないが、全てに僕が関わるなどと言うのは無茶と言える。

「それでも、元帥は現場に出てしまわれるんでしょなあ。」

既に諦めたと言っふうちに、空軍将軍がため息をつく。

（なになに、おこられるんじゃないの？）

僕がすくめていた首を伸ばすと、彼らはつかれたような笑みを浮かべていた。

「ご存知ですか、元帥。貴方は今、三軍で一番上司にしたいナンバーワンだそうですよ。」

「はっはっは、では、我々は最も望まれる部署に在ると言う事ですか。」

「うちの秘書達にも言われていますよ、クラウディア大尉の任期切れはいつかってね。」

和やかに話し合う將軍達を見ると、先ほどつばを飛ばして激論をしていた姿が嘘のようであった。

「あのお、僕は『査問会』に呼ばれたと思うんですが・・・。」

そう僕がいうと、彼らは苦笑を浮かべる。

「いま、貴方と罷免できる人間はいませんし、神風でも特攻でもこれほど評判のよいトップはおりません。その貴方に対して誰が査問できるというのです。」

それはそれで恐ろしい事だと思う。

問題を指摘すべき諮問組織が存在しないと言う事なのだから。

「しかしながら、軍全体を考えない行動は些かこちらとしても困ります。そこで、形ばかりの査問会を開かせていただいたのです。」

「じゃあ、最初のお小言でお終いですか？」

「まあ、そう言うことですな。」

彼らの一言で、僕は気が抜けるのと共に当てが外れた。

少なくともこの一件で罷免までは行かないまでも、役職停止ぐら

いまで行くと思っていたからだ。

クラウディアさんには悪いけれど、元帥の仕事って無茶苦茶忙しいので、できれば御免蒙りたいのだ。

そんな僕が「罷免されたいなあー」と呟いた所、三人の將軍達は目を見開いた。

「馬鹿な事を言わないでください、元帥。今貴方を罷免すれば、世界が転覆しますよ!」

思わず僕の顔が歪む。

「て、てんぷくですかあ?」

大げさなと呟きつつ、猜疑心溢れる思いで三人を見ると、三人共に大きく頷いていた。

いたって真面目な表情である。

「今まで、国連軍は悪鬼の如くに言われておりました。地元警察機構・地元軍事機構・各国政治団体などから槍玉に挙げられており、いつ紛争がおきてもおかしくない状態でもありました。」

思わず目をむいたのは、陸軍將軍と同時に表示された透過原稿を読んだからだ。

中東やアフリカ・南米は火種として十分であつたが、表示される世界地図の大部分で紛争寸前であると言う報告書で埋まっていたのだ。

その時期は今年の初め頃。

年度末に進むに従い、急激な速度で半ヨーロッパ圏から南アフリカにかけて戦火が下火になってゆき、一気に戦場自体が消え去っていった。

現在の時点で紛争寸前と言われる部分は南米とフィリピンのみで、それも国連軍がらみではないものばかりであつた。

「元帥が就任なさってからの数ヶ月で、三軍軍内平均損害率は12・25%から0・05%に下落、士気は数字に出来ぬほど上がっています。あえて数字にするならば、12・22%から160%への推移です。これは間違いなく元帥の効果であり、この程の戦火消滅に

は元帥のお力が作用している事は間違いありません。」

「僕は何もしていませんって。」

反射的に僕が答えると、三人の表情は暗く落ち着いた。

「・・・我々の調査によりますと、ヨーロッパから南アフリカにかけての戦火が収まったのは三つの資金ルートが閉ざされた為に、戦闘が不能になったとされています。ひとつはカナダルート、一つはアメリカルート、一つは・・・ドイツルートとなっています。」

アメリカ・カナダルートは鈴氏とモイシャン氏、これはわかる。

彼らは何らかの形で協力しようと言ってくれていたし、僕が元帥になった事も知っているだろうから。

が、ドイツルートって・・・誰だ？

「さらに、中東アジア方面での戦闘行為の減少も資金不足が主であり、同じく資金の流れの停滞は二つ。一つは華僑、一つはドイツ。」

この華僑って言うのは黄の関係だろうと推察、間違っていないだろう。

さてさて又ドイツだ。

「全ては元帥の関係者であると、調査部からの報告です。」

関係者だと言う事は、僕が直接知っている人間の事だろう。

婉曲な質問を思い浮かべながらも、直球で聞いてみることにした。

「・・・ドイツって誰ですか？」

ぐつと押し黙る陸軍将軍であったが、苦しそうに海軍将軍が言葉を繋ぐ。

「・・・『グランマ』と呼ばれる、西側経済界の巨人です。真の姿は誰も知らないと言われていますが、彼女が資金を引き上げると言えば、どの国も戦争などをしている場合ではない事に気付かされるでしょう。」

さーっと、血の気が引いた。

（ぐ、グッテンねーさんですか！）

確かに以前、グッテンねーさんが大金持ちだって話は聞いたことがある。

聞いたことがあるけどね！

「これほどの人脈と人望をお持ちの方を、我々国連三軍が手放すとお思いですか？」

ぞつとするほど冷たい視線で海軍将軍は言ったが、他の2人はほぼ懇願の表情であつた。

「あと、三年・・・いえ二年で現在の世論と戦況を我々のものにして見せます！ ですからなにとぞご協力ください、お願いいたします！！」

「なるべく短期間のうちに協力体制を元帥抜きでも実現できる環境を整えます。・・・そう、二年ほどで実現しますので・・・！！」

初めは嫌味と吊るし上げかと思いきや、泣きが入った留意要請に僕は大きいため息をついた。

「・・・十分、考えさせてください。」

査問会ではなく懇談会であつた会場を、僕はふらふらと後にした。

(二年・・・か)

デッキチェアで寝転ぶ僕は、夜の男子寮屋上に居た。

二年も待てるのだろうか、独白してみるが、夜の闇が全てをかき消す。

夕闇どころではない夜の闇に身を沈めっていると、何となく心が落ち着いた。

見上げる空は真つ黒な雲に覆われているが、その向こうの名月を薄ぼんやりと浮かばせている。

ぐつと手を伸ばせば届きそうに思えたので、僕は寝そべりながら手を伸ばした。

するとみるみる雲が晴れてゆき、この時期の名物的な名月の姿を浮かび上がらせた。

既に名月の夜を、皆で騒ごうと言う企画が立ち上がっており、男子寮ばかりか女子寮の有志まで集まって大騒ぎとなっている。

雲から顔を出した月に照らされた中庭で、楽器を持ち出した連中が大騒ぎをしているのが聞こえた。

チームでも月見をしようといっていたが、さすがにこの場に居てもらうと不味いので、遠慮してもらった。

さらに、どんなときでも傍らにいるクラウドディアさんにも遠慮してもらい、僕はゆっくりとデッキチェアに寝そべって月光浴をしていた。

何故不味いかというと、今の僕は学園内隠れ課題の施行中だったからだ。

学園内には定期的な講義と年二回の試験のほかに、公にされていない課題が存在する。

日常生活の隙間に存在する学園の謎、視界の中に捉えられた違和感を追ってゆく中、いかにそれを解決するかという行為自体が審査の対象だ。

僕たちチームも実は、非公式非公認課題を去年何個か扱っており、その評価の高さが教授会への覚えの良さとなっている。

が、その覚えのよさが今回はあだとなった。

事の発端は『アマンダ映像情報研究室付人類情報伝達研究分室』へ集まりだした情報だった。

「面白い話がある」

とアマンダ教授に呼び出された僕たちチームが見たものは、大量のプリントアウトだった。

ざっと目を通して気になったのは、全部の打ち出しに「アヤッイズミ」なる人物の名前があったことであった。

「なんですか、これ？」

棒読みの台詞で聞く僕に、アマンダ教授はニヤニヤとした顔で近づいてくる。

「謎の美女、幻美女に関する情報だ。学籍簿や授業情報も載ってい

るにもかかわらず、一切確認できない謎の人物に関するレポートが山のように集まってきた。学園側でも対応に苦慮しておる。」

真っ白になった僕だったが、聞き捨てならない台詞が入っていたので思わず反応する。

「ちよっちよっちよ、一寸待ってください！　なんでイズミ「アヤの学籍と授業記録があるんですか！」

「ん？　ああ、入学式展の後な、教授会と学園長が面白いつて事で、偽造した。」

「ぎ、偽造ですか？」

「ああ、ついでに隠れキャラとして学園内に潜ませ、その事に気付いた人間が現れた時点で課題にする事に決まっている。」

無言の僕。

チームは全員でくすくすと笑っている。

「もちろん、協力してもらっぞ、リヨウ「イズミ。」

「きよ、きよ、拒否権は無いんですか？」

上目使いの僕に、アマンダ教授はにこやかに答えた。

「ある訳が無からう。たしかに人事権は我々には無いが、『学園と在校生はあなた達を飽きさせることは無いでしょう。果敢に挑んできてください。』と言い切ったその口から出てくる言葉とは思えん。」

「しかし、この課題には、在校生の最大限の協力が必要で……。」

そう、アヤ「イズミの正体は学園内の誰もが（ルーキー以外の）知っている事柄で、どんなに秘密にしても洩れそうなネタだろう。」

「リヨウ「イズミ。君は学園生徒を不当に過小評価しておるな？」

ウチの生徒は自分の快楽のために美味しい秘密を触れ回るようなばかりはおらんぞ。　中間試験の内容が君達に全く洩れなかったのを考えれば、わかるであろう。」

そう言ったアマンダ教授を援護するような意見が続出する。

「そうそう、ルーキーによく聞かれるけど、皆忍び笑いで答えていないわ。」

「メールとかでも正体について聞かれるし、幻美人探索メーリングリストとかもあるらしいわ。」

「一応、在校生サイドではデフォルトで秘密って事になってるなあ。」

「ああ、あれって喋っちゃいけないんだろ？」

「もちろん、喋らない方が面白いよな。」

好き勝手な事をいつている。

「なんで喋らないのさ。」

僕のその台詞に、誰もがにこやかに答えた。

「だって、ミスコン二連覇の為にはそっちの方が面白いじゃない。」

「二度と出るかあ！」

荒れた『アマンダ映像情報研究室付人類情報伝達研究分室』であったが、後日に正式な召集がチーム全体に学園長からかった。

曰く、学園内の非公式課題運営に協力せよというものだった。

これは依頼ではなく正式な決定であるという話しつき。

沈む僕達であったが、話を聞いたクラウドディアさん一人喜んでいた。

彼女としては、あのボディースーツを着て生活し、執務のときに普通の格好に戻ってもらうのが一番であるという。

「あのですね、ずっとあの格好をする訳じゃなくて、たまにピンポイントである格好をするだけなんですよ」と聞かせると、あからさまに彼女は落胆した。

あの格好を普段からしてくれれば、移動のときに必ずついてくるガード役を減らせるのに・・・と彼女の呟きを聞いたときには、真面目に心がぐらついた。

が、四六時中女装をしている訳にも行かないので、僕はぐっと心を引き締める。

そんな僕を見ていたクラウドディアさん。

「元帥、ちょっと心が動きませんでしたか？」

「そんな事はありません。」

最近ちよつとイイ性格になってきたクラウディアさんであった。

そんなこんなで、たまに『イズミ・アヤ』の格好でうるついでいる訳だ。

が、結構人目につかないように行動している割に『アマンド映像情報研究室付人類情報伝達研究分室』へ情報が集まってくる。

たとえば、女子寮前の自動販売機でオレンジジュースを飲んでいるところを見たとか、室内競技場のバスケットコートで三ポイントを一人で決めている所を見たとか、男子寮の階段を上っている所を見かけたとか。

「ずいぶん発見されてるな。希少動物としての自覚はあるのか？」
嫌な事をアマンド教授が言い出すぐらいに集まる情報であったが、いつのまにか希少動物から怪奇現象への変化が始まっていた。

友達と撮ったスナップに彼女の霊が映っているとか、ガラスに映りこむように彼女の影が映っているとか、突如池の中から現れたのを見たとか。

「あ、この池の中から現れたのは本当です。」

僕がめくるページを覗き込んでアマンド教授は顔をしかめた。

「何をしていたんだ。」

「ルーキーの女の子に追い回されていたんですけど、逃げ道がなくなつたんで中央池に飛び込んでバタフライで対岸まで逃げました。」

「・・・無茶をする。」

そう言つて、アマンド教授は一枚の書類を出した。

「この、中央池でUMA発見というのは、時刻的にも時期的にもそのときの話しか？」

僕が確認して頷くと、アマンド教授は大きなため息で椅子にもたれかかった。

「・・・リヨウ・イズミ。貴様が大雑把な行動するたびに、こちらが意図していない隠れ課題が山のように出来てきておるぞ。」

ざっぱに積み上げられたファイルを指差して、顔をしかめるアマ
ンダ教授。

「でも、全部一つの事に集約される訳ですから、そのうち一気に無
くなるでしょ？」

「・・・そうでもないのだ。」

そう呟いた彼女は、ホワイトボードを引き寄せてなにやら書き出
した。

「今まで集まってきた情報を整理できる立場に居られれば、多分見
る事が出来るだろう。」

そう言っただけは、数々の隠れ課題に関連しているチームを列挙
し始めた。

その中で有機的に情報が運用されれば、嫌でも真相が見えてくる
はずだが、チャートにしてみるとその問題点が明らかになった。

どのチームも他のチームと連携しておらず、非常に強い反発力を
持つて競争しているのだ。

「唯一、どのチームとも反発していない人間はいるが・・・。」

そう言っただけで書き出された名前を見て、僕は頭を掻いてしまった。

「ちーちゃんとロリータ、ですか。」

「そうだ。早い時期から彼女達は在校生に知人が居るという事で
イニシアチブを握っており、さらにイブとレンファという後ろ盾を
持っているためにルーキーの中では一番の位置にいる。無論、リヨ
ウ・イズミとの面識もある点は彼女達に有利にも不利にも働いてい
る。」

そう言っただけで、色々ホワイトボードに書き足しが加わった。

「まず、数段の優位点が各チームとの連携を強固にし、彼女達自身
がルーキーの中心になりつつあるという点。その反面、不利な点と
して、彼女達が入学当初から君たちと大きく関わっている為に、隠
し課題に加わる事が出来ないという点だ。」

確かに、チャートに有るような関わりをルーキー内で持っている
のなら、彼女達に集まる情報で全てが見えてくるだろう。

が、実際は彼女達自身の目で全てを知っている訳だからどんなものか。

「既にその2人には情報規制がひかれており、立場的には在校生と全く変わらんものとなっている。」

つまり、ルーキー内で起きている反発が情報の有機性を失わせており、その結果として簡単な本質を見失わせているのだという事だ。「最も反発しているのは、男子『ハンスⅡレット』のチームと、女子『テルマⅡフレイツシュ』のチームで、対立構造の助長をしている。」

「はあ、なんか今年は大変ですねえ。」

去年は色々と仲の良いやつらでチーム以外ともつるんでいたのに、事の運びが速かった。

それに比べて今年のルーキーは、どうもアクの強いやつらが多いらしい。

「どうも誤解があるようだが、これは毎年の事で、隠し課題のクリアーによって各代の代表チームが決まるのだよ。学期の初めからぶちかまし、一気にトップに立つチームなど本来存在せんのだ。」

「・・・？」

「リョウⅡイズミ、お前のチームの事だ。あの風御門を撃退したという時点で、既にルーキーの代表チームだったといっている。」

「は？」

啞然とした僕であったが、アマンダ教授は資料をまとめながら呟いていた。

「・・・相変わらず自己認識が弱い男だ。」

元帥業務の傍ら、学園から提供された某所の部屋で僕たちチームは会議をしていた。

見つからないよう現れて、ちょっと目撃されたあとに消えるというのが今までの行動であったのだが、いまいち効果をあげている気

がない。

それどころか、アマンド教授から提供された情報を整理すると、どうも噂や学園怪談の様な状況になりつつあるのが見て取れるのであった。

「どうするよ。」

「どうするもこうするもなあ……。」

最近は慣れてきた承認書類を弄りながら、僕はペンの腹をなでた。「やっぱり、噂の助長かなあ。」といった僕に、皆は嫌な顔をした。

「あのなら、実際に目撃されたときに、UMA扱いされるぞ。」
「間違いなく狩られるわね。」

そんなものかと思っているところで、チームの知恵袋のリーガフが口を開いた。

「一応、プランは三つあるけれども、聞いてみる？」

そう言ったリーガフのプランは次のようなものだった。

1 . 完全に姿をくらませて、都市伝説化する。

2 . 散発的に現れる現状を続けて、噂の方を操作

する。

3 . 千鶴・ロリータ両名を遠隔操作して、操作の

方向性を一本化する。

現実的なのは「3」なのだけでも、さすがに隠れ課題の意味が無くなってしまう。

「1・2」は論外といった所だろう。

「でも、彼女達を操作するのも、論外よ。」

眉をひそめたレンファの意見に誰もが同調した。

「んじゃ、どうするのさ。」

苦笑のリーガフに、黄が答える。

「ま、隠さない方向しかないかな？」

ああ？ と声をあげて疑問を呈する僕に、黄はにやりと微笑む。

「目撃例が少ないから、妙な事になるんだよ。始めからよく見る人にしちやえば良いんだ。」

リヨウ「イズミは三軍職務に追われていることにして、実際僕は『イズミ』アヤ』として活動すればいいというもの。」

「たしかに、現実的なプランね。」

そう言ったイブであったが、口はへ字になっている。

「何か問題でも？」

「だって、元帥職は変装したあとでもついて回るでしょ？ クラウディアさんを見れば一発じゃない。」

なるほどと頷く僕は、脇に控える国連軍人を見上げる。

「ねえ、クラウディアさん。ちょっと協力してもらえますかねえ？」
ぎこちない笑みで彼女は軽く頷いて見せてくれた。

そんなこんなで、おおぴらに活動し始めた訳であるが、事の始めは人のいないところと場所を選んでいても、いつのまにか人がよってきたりするのが面白い。

今も、月光浴をする前など、学生寮屋上近くに人影ひとつあったわけではない。

が、既に何者かが嗅ぎ付けたらしく、屋上の入口で誰かがうろろしている気配が感じられる。

「・・・どうぞお。」

いつもとは違う『イズミ』アヤ』の声でそう言つと、ごそごそと数人の男子生徒がこちらにやってきた。

見た目で一期生のルーキーと知れる初々しさが滲み出ている。

いずれ劣らぬ美少年であったが、今年はミスターの魔手は無い。実に幸せな事だ。

どちらかと言えば感謝して欲しいぐらいだが、その辺を触れ回るとやぶへびなので黙っていた方がいい。

ぐるりと僕を取り巻いた少年達はこちらを覗き込んでいる。

「なに、月光浴じゃないの？」

僕がそう言っていると、彼らは何となくお互いを見た後、何かを言いたそうだった。

もじもじとしている姿は、何となく子供に思えるものだった。学年のして一年しか変わらないはずの少年達だけれども、ずいぶんと幼く見えるものだ。

そんな少年達の一人が、勇気を持って口を開いた。

「あ、あの、アヤヰイズミさんでしょうか！」

辺りに響くような声に僕は眉毛を潜めた。

「・・・あ、あの・・・。」

心細げに声を出す少年達に、にっかりと微笑んで僕も答える事にした。

「そ、私はアヤヰイズミだけれども、何か？」

瞬間、少年達はすると彼らは夜目でもわかるほどに真っ赤になって、凄い勢いで後ろに引いた。

懐から出したハンカチで顔中を拭いていた彼らであつたが、意を決して一人が口を開いてみせた。

「あ、あの、アヤヰイズミさんに質問があつてきました！」

「うん。」

反射的に僕が答えると、いきなり彼らは言葉に詰まってしまつていた。

じつと僕が見つめていると、一人がかくりとその場で倒れてしまふ。

更にじつと見つめていると、全員がうめき声と共に倒れてしまつた。

「・・・そのまま寝てると風邪引くよ。」

今だ肌寒い夜であつたが、死にはすまいと思い僕はその場を離れた。

屋上の出口で振り返ると、少年達は身を起こしていたので安心して降りようとしたところ、少年達は追いつがるように近づいてきた。

「あ、あの、アヤミイズミ先輩、おくつろぎの所、すみませんでしたあ！」

にこやかに手を振って、僕は降りようとしたが、一寸思いなおして一言残した。

「月の綺麗な夜は気をつけなさい。心踊るような事があっても、それは月の所為なのだから。」

彼らが何を思ったかは知らない。

しかし、彼らの瞳は月を写し取ったかのようにまん丸になっていた。

ふらふらと月見の喧騒を離れるように中央池のほとりに出てみると、周囲を囲まれている事に気付いた。

婉曲な、殺気に近い思いを放つ集団は、じりじりと距離を詰めてきている。

多分この前と同じ少女達だろう。

また中央池を泳がないといけないのかと思っているところで、背後から声をかけられた。

「・・・夜の水泳は危険だぞ。」

ぞんざいな言い口は、間違いなくアマンド教授。

「あ、教授。」

「目の色を変えた少女達が、この辺を包囲しておったが、お前を捕まえる為だったのか？」

「さあ、どうでしょう？　じりじり追ってくるだけですから解りません。」

僕が肩をすくめた所で包囲は一気に縮まって、まるでカゴメカゴメをするような距離で少女達の輪が出来上がった。

この状態からはもう逃げられないだろう。

ボディースーツの機能を最大限に使えば囲いの抜けることも出来るが、それなりに後が辛くなるので考えない事にしよう。

ギリギリと光をたたえる少女達の瞳を覗き込み、僕はにこやかに微笑んだ。

「お嬢さん方、教授に用だったら明日にした方が良いでしょう。」

うんうんと頷くアマンド教授を他所に、少女達は大げさなまでに首を横に振った。

「じゃ、どうしたの？」

そう聞いた僕の耳に、アマンド教授が耳打ちをした。

（いま話し掛けている少女が、テルマ・フレイッシュだ。）

覗き込むように彼女を見つめて思わず思い至る。

こういうタイプは、間違いなく『男なんかには負けない』とか言っているタイプだな。

暫くその姿勢のままで居たら、彼女は真っ赤になってへたり込んでしまった。

「貧血？ 女の子なんだから、鉄分はちゃんと採らないとね。」

そう言いながらそのまま歩み去ろうとする僕を、テルマは抱きつくように止める。

「なにになに？ 何か用だったの？」

そう言う僕に向かい、彼女は声を張り上げた。

「わ、わたしたちの、おねーさまになってくださいー！」

ずざつと、僕とアマンド教授は飛び退った。

「あ、あの、へんないみじゃなくて！ お話ししたり、お食事したりー！」

そう言っている彼女達の目は異常に潤んでいる。

この表情とこの言葉、正直に信じる気はしない。

「・・・悪いけど、私、一匹狼が趣味なの。」

「じゃ、じゃあ、せめてお部屋を教えてくださいー！」

ぼりぼりと頭を掻いた僕は、予てから打ち合わせどおりの受け答えをする事にした。

「あたし、女子寮に部屋無いから。」

「えええ！」

実際、男子寮にも女子寮にも住んでいない人間が結構居る。

たとえば研究室に寝起きしているとか、講義準備室にいつ居ているとか、実際学園内の何処で寝起きしているかもわからないが、ちゃんと学籍に乗っている人間とか。

アヤ・イズミもその一人で、一応、学園地下施設の一部を改装して住んでいる事になっていて、学園長の許可もとっているはなしになっている。

先日からアマンダ教授やチームとの会合はそこで行っており、元帥職務にも向いているという事でクラウディアさんにも好評の場所だ。

今のところアヤの部屋だが、公称は元帥執務室。

「で、では、何処に……。」

にっこり微笑んで僕は言う。

「ひ・み・つ、よ。」

あつけにとられた少女達を背に、僕と教授はその場を後にした。

「そろそろ本気で動き出そうと思います。」

「そうか。」

「そんなわけで、教授会の取りまとめの方をお願いします。」

アマンダ教授はにこやかに微笑んだ。

わざわざ空輸で取り寄せたウイグを被ると、僕はやけくそでメイクを始めた。

気が乗らないと言うか、無茶苦茶気分が悪いと言うか。

もちろん、僕が初めに撒いた種だと言う話もある。

しかし、しかしだ。

「アヤ、早くしないと、アマンダ教授の授業が始まっちゃうー!」
座りなれない小さな椅子と三面鏡から立った僕は、平均的学園内

制服を身につけた女性の格好をしていた。

せかすようにイブは僕の手を取る。

「はい、ちゃんとこれを飲みましょね。」

人工声帯を飲み込んだ僕は、お義理に微笑んだ。

「・・・じゃ、そろそろいきましようか。」

イブと背後のレンファとイブと共に僕は、夜のうちに忍び込んだ女子寮を後にした。

僕以外には好評となった「アヤの日」は、非常に悪辣なジョーク
とは思えなかった。

広大な敷地の学園に、ランダムな日数で変装した僕を配置する事
で、あたかもアヤ＝イズミが存在するかのようにして遊ぼう・・・
いや、ルーキー相手の隠れた課題にしようという話しは、すでにル
ーキー以外の全員が知ることになっていた。

正式に学園長からの go があつた今日から、致し方なく『アヤ＝
イズミ』に変装して、授業を受けなくてはならなくなってしまつて
いる。

本日の教務は「アマンダ」研。

学内案内のときに唯一受講している事が判明している授業だから、
だ。

授業開始直前だと言うのに、教室の真正面のテーブルが空いてい
た。

そこへイブ・レンファ。アヤの順で三人並ぶように滑り込むと、
背後から押しつぶすような嬌声があがってきた

なんだろうと思って振り向くと、ルーキーの女子が千切れんばか
りに手を振っている。

点々と真実を知る在校生が、苦笑でこっちを見ていた。

「ん、みな衆、おはよう。」

裸体を薄皮一枚で包み込んだ、凶悪なボディコンで現れた若年教

授アマンド教授は、教壇に立った途端に、まっすぐこちらの僕をのぞき込む。

「おお、アヤ。研究室は暇だったのか？」

一応、アヤ・イズミはアマンド教授のお気に入りとして、早いうちから研究室入りしていると言っ設定になっている。

生活の大半も研究室なので、普段は周囲の目にとまらないという設定だ。

「はい、ひさしぶりに教授の授業を、はいけんさせていたどうかとおもいましてえ。」

ぐつと身を乗り出した教授は、大根でも引っこ抜くように僕を引っ張り出して、教壇に脇まで連れてきた。

「助教授格の人間が、生徒席に座るもんじゃない。わたしの後ろで教授の視点を覚えるのだ。」

思わず僕が半歩引くと、教授は悪戯小僧のような目で微笑む。

「研究ばかりではなく、授業も手伝ってくれるよなあ、助手君？」
へらへらと微笑むしかない僕だった。

正直な話、授業の内容はちんぷんかんぷんであった僕であつたが、教授が欲しがっている資料は予習のお陰でわかった。

というわけで、はいはいと用意。

「・・・というわけで、続きは次週だ。今日のイメージを忘れるでないぞ。」

そんな捨て台詞と共に授業が終わった途端、アマンド教授にメイクアウトされてしまった僕は、そのまま研究室に連れて行かれてしまった。

甘い香りの女の園であるアマンド研究室は、昼食の時間を迎えて大いに盛り上がっていた。

何でも、アマンド研究室では通常予算軽減のために昼食は研究室の台所で皆の分を当番制で作っているとか。

僕もそれのご相伴に預かれることとなった。

「どうだ、その気ならば、毎日こんな食事が可能だぞ?」

僕の横に座った教授はそんな事を言う。

「毎日出勤がかかったら、本当の僕の課題が遅れます。」

むすつと答える僕に皆の笑いが集まるのであった。

「でも、えつと・・・アヤ。貴方もごくろうねえ。」

研究員の女性はおかわりをよそつてくれた。

「ありがとうございます。・・・学園サイドの義務じゃないですか? そういうのって。」

あちち、とスープをすすりながら、去年の事を思い出す。

去年の幽霊騒動のときは確かに大騒ぎになったけれど、各研究室の協力も馬鹿に出来ないほどに大きいものであった。

それはチームの交渉力もあつただろうけれども、学園に挑む姿勢がチームとして学園に認められた結果だと言つていいだろう。

それゆえに、ルーキーでありながら、早々のうちにバーターと言う形で研究室への出入りが許されたのだ。

意欲とか熱意とか言うものではなく、全ては挑む心が支えた活動であつた。

そんな思いが顔に出ているのか、周りは苦笑を浮かべていた。

「あ、へんなかおしてますか?」

「・・・いや、凛々しい顔をしていると、うちのムスメッコ達を感じておるのだよ。」

唸りを上げて教授の腕が僕に絡みついた。

「きよ、教授・・・。刺激が強すぎるくらいがありますが・・・。」

「なに、おんなのこどうしの可愛いジャレあいと思え。」

とても情けない顔をしているのだろう、研究室の人たちに失笑を買う事となつてしまった。

日も暮れる頃、僕はアマンダ研の電気スクーターで教務塔に急いでいた。

本日受けるはずだった授業の内容を受け取るのと、教務塔内のシ

ユーターで学園地下施設に行く為だ。

基本的には、生徒は教務塔内に無断で進入する事は許されていない。

が、簡単な条件さえクリアされれば入塔パスは手に入るのだ。去年の間に数人のルーキーが得ていた出入り許可パスも今年は一枚も発行されていないという。

（団結力が足りないのだな）というのが僕の感想だった。

つまらない疑問やどうでもいい質問でも、教授にぶつけているうちに仲間が出来、同じクラスで協力していればパスはすぐに発給されるものだと思っていたから。

航空物理の共用パスで教務塔に入ろうかと思っているところで、入口にルーキーがもめているのを見とれた。

誰ともめているのかと覗いてみると、見知った顔であったので声をかけた。

「あ、エメット教授。どうしました？」

ぼてててつと音を立てて教務塔の前に止まると、彼はにこやかな表情で駆け寄ってきた。

「やあやあ、・・・アヤ君。イヤー助かったよお。」

パンパンと肩を叩く教授の言い分を聞くと、どうもセクハラ行為で責め立てられていたらしい。

このエメット教授、懲りないというかチャレンジャーだというか、全くやめる気配も無く、毎年セクハラ騒ぎを行っていた。

イブとレンファもやられたが、この時はチームでささやかな報復をしたので、そのときは収まったが、彼女達の怒りは未だ続いている。

「ちょっと、ほんのちょっとお尻を触っただけなのに、もう性犯罪者のように責め立てられちゃって・・・。」

「教授、また『ピンク・ヒップ』教授と呼ばれたいんですか？」

そう、チームのささやかな報復というのは、ルーキー全員でエメット教授のことを『ピンク・ヒップ』教授と呼び続けるというもの。

教授会でのネームプレートまでその名前になったところでさすがに詫びを入れてきた。

全学園ネットでの謝罪をうけての手打ちになった訳だけれども、未だ報告書やレポートに「P/H」の書名があるとか無いとか。

それを思い出してか、ぶるぶると首を振った教授は逃げるように身を引いたが、僕はぐつと右手で彼の右手を掴んだ。

「じゃ、手打ちという事で良いですね？」

「あ、ああ。」

力無く頷いた教授を抱き込むようにして肩を組み、ルーキー達に声をかけた。

「そんな訳で、エメット教授はもう生きがいであるセクハラをしないと誓ってくれましたので、安心なさい。」

ぱあっと明るい顔になるルーキーだったが、エメット教授の顔は限りなく暗いものだった。

「なでられちゃった娘には悪いけど、これから美味しいお尻を見てもなでられないジレンマを考えれば、十分復讐できるから我慢してね。」

はいいと綺麗に返事するルーキー達だったが、その中で2人のルーキー達の目は微笑んでいなかった。

シューター周辺に人が多いために、ココから地下へ移動するのは挫折した。

思わずため息で教務塔から出てくると、二人のルーキーが待っていた。

先ほど怖い目でこちらを見ていた男女である。

「あの、アヤ先輩にお話があつて待つておりました。」

居住いを正した少年は、先日満月の夜に屋上にやって来た少年達の一人だった。

「出来ましたらお時間をいただけないでしょうか？」

その少女は、先日中央池で『おねーさま』発言をしたときの少女。

共に恐ろしいまでの視線で僕を睨んでいる。

が、何となく予感がしたもので、ちよいつと声をかけてみる事にした。

「何か用かしら？『ハンス・レット』君と『テルマ・フレイッシュ』さん。」

少女の方はアマンド教授から聞いていたが、少年の方は勘だが、瞬間的に二人の顔色が変わり、驚嘆の表情になる。

「な、なぜ？」

ハモる二人の言葉を聞いて、思わず僕は微笑んでしまった。

「聞いた話ほど仲が悪い訳じゃないのね。」

「だ、だが、こんなのと！」「だ、だが、こんなサルと！」

反射的に答えあつた2人は、お互いの言葉を聞いて再び剣のある表情となり、にらみ合い始めた。

「はいはい、喧嘩ならほかでやってね。」

そう言いながら止めておいた電気スクーターにまたがると、少女が左右から止めに入った。

「お願いです、お話しを聞いてください！」「お願いします、お時間をください！！」

食いつかんばかりに引つ付いてくる二人の根性に負けた僕は、致し方なくいつもの喫茶店に入る事にした。

けらんからんと音を立ててドアをくぐると、いつもの席にいつものメンバーが居た。

軽く手を振ってカウンターに座り、自分の左右に少年少女を座らせる。

「奥さん、サンドイッチとコーヒーを三つ。」

僕のオーダーを聞いた途端、2人とも自分の懐をこそそ始めた。僕はその手をぴしゃつとはたいて、にこやかに言う。

「こついう時は、先輩にたかるものよ。」

「で、でも……。」

そういいかけたテルマに向かつて、ピツと人差し指を立てた。

「あのね、今の勘定は、あっちにいるお兄さん達が可愛い私達の拝観料にと奢ってくれるものなのよ。」

と言いながら、僕はチームに微笑むと、皆なぜか頬を赤らめて頷いて見せた。

「ええ、じゃ、先輩はリヨウチームと交流が有るんですか？」

少年の台詞を聞いて、思わず吹き出してしまった。

「交流って、皆同級生でしょ？ 仲は良いわよ。」

その台詞を聞いて、二人とも押し黙ってしまった。

そして苦しそうに言葉を少女が紡ぐ。

「その、・・・リヨウイズミさんともですか？」

不意に考えてみる。

僕は一番嫌いなところを自分に見つけている。

アヤリイズミはそんな僕を好きか嫌いか？

「・・・本人との面識は無いわね。でも、イブやレンファと付き合っていれば、大体の人柄が知れるわよ。」

その一言で、2人は思いつきり安堵の息を吐いた。

「どうしたの？」

そう聞く僕に、2人は何でもないと首を振る。

「じゃ、本題。私に話して何？」

その一言で2人の表情はきりりとなった。

「折り入ってお話というのは、先ほどのエメット教授の件です。」

「エメット教授のセクハラ被害は全校規模で行われているはずなのに、なぜあの程度の追求でやめてしまうんですか？」

「あのような品性に欠ける人間は、学園にふさわしくないとおもっていますか！」

それを聞いた瞬間、思わず僕は天を振り仰いだ。

なんだが性質の悪い意見を聞いている気がする。

「少なくとも、セクシャルハラスメントに興じる事を罪とも思わない人物などに、我々の授業を受け持つて欲しくありません！！」

「研究室でも女性研究員が迷惑しているという話しも聞き及んでいきます！」

激しく自分の激情に煽られている2人を、僕は肩を引き寄せるようにぐっと抱きしめた。

丁度、胸のあたりに頬をうずめる事となった2人は、わやわやと暴れ出す。

暫くそのまましているとふたりしてぐったりとし始めて、そのまま抱きついてきた。

さてそろそろかな？　と思ったところで両手を外すと、二人は両脇からしなだれかかったままだった。

「さてさて、これはセクハラかしら？」

そう聞いた所で、二人は我に帰って首を横に振る。

「でも、これって、自分の性別によって人に嫌がらせをしている事にならないかな？」

それでも首を振る。

「確かに私のこれはスキンシップだけど、エメット教授のはセクハラだっていうのは、あからさまに差別だと思わない？」

「いいえ、私のとつてのアヤ先輩は憧れの人ですので、素直に受け入れられますが、エメット教授は単なるおっさんなので・・・。」

そこまで言った少女の目の前に、一つの論文を見せた。

それはエメット教授が学生に頃に書いた論文で、今でもその難解な内容を理解しているものは少数だ。そして、その難解な理論なくして現在の学園科学基盤はないといえる内容なのだ。

元帥職務での資料用にと教務塔で手に入れてきたもの。

それを彼女達は食い入るように見る。

少年も背後からそれを見つめ、そして驚愕の表情をしている。

「天才って言うのはね、どこか外れているものなの。エメット教授もセクハラ以外は、人並みはずれた能力者でね、学園法規を遵守しているうちはお咎め無しって事になっているの。だから、苦情を言っても訴える人はいないでしょ？」

がくがくと首を縦に振る。

「でもね、絶対に譲れない一線というのもあるわ。去年、エメット教授がある女性とのケツをなでたために、彼は口ではいえないような報復を受けて、学園内の全校ネットで謝罪しなくちゃいけないやつだったの。」

「ごくりとつばを飲み込む二人に、僕はにっこり微笑んで指を立てた。

「もちろん内容は秘密。」

手元のサンドイッチをコーヒーを口に放り込んで、僕は二人の少女に手を振りながらその場を去った。

なにか呼び止めようとする少女少女から逃げ出すように僕は走った。

「うー、早く着替えたーい。」

幻美人プロジェクトのために開放されたはずのその部屋は、最近、教授会の吹き溜まりになりつつある。

僕が元帥職務をこの部屋でやっている関係上、教授会への提出物も提供データもいち早くこの部屋にやってくるものだから、なにかと教授たちが屯する様になっている。

僕がその部屋のドアをくぐると、むっとするほどの熱気がその部屋を占めており、そこいらから持ち込んだ机を囲んでの会議をしていた。

「あー、今、教授会の会議中だから・・・」

「そう言いながら僕を押し出そうとするボスコック教授を一睨み。」「・・・あつ、み、イズミ君か・・・。」

「ばつの悪そうに頬を掻く教授を押しやって中に入ると、大半の教授が腕組みしつとも議論を交わしているのであった。

「いつもどおり、ネットでやれば良いでしょう。」

「すり抜けるように室内に入りながらそう言う僕に、ボスコック教

授は苦笑い。

「いや、ネットよりも、リアルで会議する方が効率的なこともあってね。」

確かに、ネットとは違って口喧嘩や罵りあいにてを奪われる心配は無い。

誰もが同一の発言能力と映像占有率を誇るネット会議では、野次すら無視の出来る内容にならない。しかしリアルならば、ある程度無視できるというわけだろう。

まるで議長席のように上座にある自分のデスクに座った僕を、皆が済まなそうに見ている。

「あのー、僕が聞いて問題ない話でしたら、そのままどうぞ。」

聞いて不味い話だったら、着替えてそのままシューターで寮に戻りますが……。」

「どちらかと言うと、聞いてもらった方が良かな。いや、是非とも聞いて欲しい。」

そう言い出したのはデニモ教授。

「実は今、各々のルーキーの授業に関する問題点が一致しているという話を話していてね。どうも悪い影響が出そうなのだよ。」

ぽりぽりとあごを掻くデニモ教授。

「あのお、それと僕が何の関係が？」

「君の関わっている『隠れ課題』時間のせいで、多くの生徒が基準学習達成時間に達していないのだよ。」

「は？」

「つまり、君のばら撒いた『隠れ課題』が難解すぎて、皆そっちに夢中なんだ。」

そうなんですか？ と周囲を見回すと、全員が思いつきり頷いた。「だって、久永教授ってば、ヒサナガスーツの仕様、ネット上で公開しましたよね？」

教授は頷く。

「アンドロイドと新素材関連の情報も、ちゃんと公開してますよね

？」

全員が頷く。

「・・・なんで見破れないんです？」

全員が首をかしげた。

が、その彼らの出した結論は、僕達が関わる隠れ課題に関わるせいで、前年比の60%ほどしか授業が進んでいないという。

60%。半分ちよつとという事だ。

正直な話、国連学園始まって以来の珍事だという。

僕は軽く頬をかきながら聞いてみた。

「で、去年のルーキーは、僕達は、前年比で何パーセント前後していたんですか？」

僕達も十分無駄な事やっていたので、かなりのものかと思っていたが答えは意外なものだった。

「33%ほど前年比でプラスだったよ。」

「へ？」

「各教科の平均で33%、最高で56%、最低でも10%のプラスだ。」

ざつとデータを並べるファン教授。

「実際、君達のルーキー時代を基準に考えなければ、今年の遅れは平年の20%ほどの遅れ程度だが、それでも20%遅れるというのは大問題なのだよ。」

ざざつと広げられた資料を誰も覗き込まない所を見ると、教授会では常識なのかもしれない。

「で、どうするんです？」

僕の問いに、誰もが押し黙った。

「・・・何の対策もない、と？」

深いため息が周囲から洩れる。

「仕方あるまい、隠し課題のクリアーが最も効果的に効率アップが出来る。逆にいえば、とつと隠し課題など無くしてしまえば早いのだがな。」

アマンダ教授の台詞は、多くの教授の思いと同じだろう。しかし、面白がって学籍なんかを作ったのも教授会なのだ。その辺は苦労してもらうのが一番だろう。

「イズミ君、君のほうでは何かプランがないかね？」
あるもんか、と肩をすくめる僕だった。

はぐはぐとトーストを頬張る。

周囲にはルーキーの男女が集まっていた。

昨夜のチーム内作戦会議どおりに、今日から食堂で無防備に食事を始めた。

いつも座っている席とは違う、奥まった席に座ると、そろそろとルーキー達が集まり、何か言いたそうにうろろし始める。

暫くコーヒーなんかを啜っていたのだけれども、思いつきの良いやつらが近づいてきた。

「先日はありがとうございました。」「昨日は申し訳ありませんでした。」

見れば、昨日の少年少女とそのチームと思しき集団。

「ん。」

トーストをくわえたままで片手を挙げる。

一般人として行儀の悪い所や、イメージの悪い所をわざわざ見せて幻滅させるというのが今回の作戦要項だ。

そこで、色々と格好の悪い所を演じる予定で居る。

まず最初が何かをくわえたままでの挨拶。

が、彼らはそれに怯んだ様子はなかった。

にこやかな笑みで僕を囲み、口々にご一緒させてくださいとか何とか言い出している。

「昨日のお話し、納得は行きませんが理解できました。」

俯き加減で言う少女テルマ。

「チーム内で、チーム同士で話しました。それでも納得できません

でした。」

少年ハンスは笑顔であった。

「じゃ、どうするの？ ハンス。」

名前で呼ばれたことに驚いた少年であったが、それでも言葉は出るようだった。

「納得できなくても、心から反発していない限り・・・容認する事は出来ます。それが国連学園なのだと理解する事ができます。」

周囲を見回せば、十分に納得のいく表情をしている。

「皆も同じ意見？」

その言葉に、少年達も少女達も同様に頷いていた。

僕は非常に嬉しくなった。

何も周りでごちゃごちゃしなくても、彼らは彼らで進歩しているのだ。

いとおしい後輩達を僕はにこやかな笑みで見つめていた。

作戦されていた予定を変更した僕は、トーストを平らげても席を立たなかった。

少年少女と語らう時間を作る事にしたのだ。

「じゃあ、イズミさんが女子寮に居ないって本当なんですか？」

こつくりと僕が頷くと、テルマが自慢げに周囲に視線を走らせている。

「でも、鈴・モイシヤン両先輩のお部屋に出入りしているという噂が・・・。」

「噂は噂よ。事実お友達なんだから部屋ぐらい遊びに行くわ。」

肩をすくめる僕に、少年達はちよつと興奮していった。

「じゃ、じゃあ男子寮に住んでいるという噂は・・・。」

「君たち、さすがに飢えた狼の巣に部屋をもっちゃ居ないわよ。屋上とかはちよくちよく借りるけどね。」

女子寮には屋上がない。防犯上の理由だそうだ。

「でも、デツキチエアの月光浴を邪魔する子犬ちゃんたちも居るから、ちよつと最近は行つてないかしら？」

そういつて少年達を覗き込むと、彼らは顔を真つ赤にしていた。

「私はね、普段はアマンダ研の研究室か、映像解析室のサーバールームに寝泊りしてるの。だから君達に会わないのは当たり前かもね。」

誰かがメモを始めた。

レコーダーを回している人間も居る。

さすがにカメラを構える人間は居ないけれども、なんだか芸能人のような気がしてきた。

「あ、あの、イズミさん。お願いがあるんですが……。」

テルマの横に居る少女が目を潤ませながら近づいてきた。

「『お姉さま』は無しょ？」

ぼつと顔を赤くするテルマ。

「……いえ、あの、私達は入学してから右も左もわからない生活をしています。そんな私達を助けていただけないでしょうか？」

うるうるとする瞳を見ると、何となく頷いてしまいそうになるが、こればかりは頷けない。意地悪でも何でもなく、学園の先輩として「本来なら、あなた達のような可愛い後輩に頼られて嬉しく思うのでもね、この学園の不文律というものがあってね、これだけは絶対に破つてはいけない事、そしてどんなに酷い先輩でも守っている事があるわ。」

ごくりと周囲のルーキー達がつばを飲み込んだ。

「戦うルーキーは助ける、逃げ出すルーキーには手を出さない。」

ごく真面目にいった僕の台詞を、彼らはなんと取っただろうか？

じんわりと進む時間のなかで、瞳をうるませていた少女の横でテルマは頷いた。

「解ります。……私達は、まだ何者とも戦っていないのですね？」

「そうね、戦いという表現よりも何にも挑んでいないといった方が正確かしら？」

黙りこくる少年少女。

しかし、実の所、最も僕らが、教授会が苦慮していた問題は解決しているように思える。

「でも、あなた達は、自分達ではわかっていなかった視点とわかっていなかった関係に気付いたみたいだから、何にも挑んでいないって言うのは言い過ぎかも知れないかもしれないわね。」

僕のその一言で、少年達が少女達が一斉に顔を赤くした。

何があったかなんて野暮な事は聞かない。

でも、今までなんか比較にならない関係で、隠し課題がクリアーされていく事は間違いないだろう。

それから暫く、イズミ「アヤは休業する。

如何せん、自分の課題がたまりすぎたから。

そして次期を同じくしてルーキーたちはアマンダ研究室の周りをうるちよろし始めたそうだ。

第十三話 梅雨の終わりに・・・

長々と続いた雨がやっと上がった。

天気図を見れば解るとおりに、本格的に梅雨が明けたのだ。

僕の課題が終了した頃、教授会からの申し渡しがきていた。

暫く休んでいた『幻美人プロジェクト』の再開についてだった。

暫く学園を離れるという言葉と共に「イズミ」アヤ」は姿を消したのだが、それもこれも全て僕の成績が低下していた為だ。

多くの時間を隠し課題に吸われていたために、課題を終えることが出来無くなっていたのだ。

致し方なく教授会も一次的な隠し課題の停止をを容認したのだが、十二分に成績が戻ってきた所で再開を申し入れてきたのだ。

もちろん、拒否権は無い。

目の前で行われた会議で、全員一致の決議はあまりにも恐ろしく見えた僕だったが、教授会の満場一致での決定は学園長の決定と同等であるために、逆らう術もなく再開せざるえなかった。

では、活動開始は何処からにしようか？ というプラン検討が、教授会に続いてチームによって同じ場所で行われる。

そんな会議場所は、総勢、三桁を超える人数を内包してもまだ空間的に余りある場所に、この程引越しをする事になった。

学園各地にあるシューターに近く、そして神出鬼没に現れる事が出来る場所。

学園地下施設の中央に存在する核シエルターに、『幻美人プロジェクト』が移ってきたのであった。

「やっぱり、何気ない場所で活動を始めるべきだね」

と、ゲオルグであったが「」としては、人目を引いておいた方がいいという。

「なぜ？」

「だって、アレだけ目立つ人間がここ最近姿をくらませていたんだ。今までとは逆に燦然と現れて周囲の違和感を増長させ、後輩達にヒントを与えた方がいい。」

「いや、無理にヒントを与えなくても彼らには理解できる頭がある。日常の中にある題材を隠れ課題としているんだから、日常にうずもれさせるべきだ。」

ゲオルグとJJ、共に譲らないが共に正しい事をいつている。

ともなれば、あとは好みの問題だと思った僕は、申し訳ないがゲオルグプランを基本選択とする事にした。

そこでJJ。

「いいのか？ このままルーキーに正体を悟られないままだと、ミスコンに推薦されるぞ。」

どきりと心臓が跳ね上がる。

嫌そうな視線でJJを見ると、彼はニヤニヤと微笑んでいる。

しかし、あとの事はあと、明日の事は明日考えるという今の精神状態の僕に何を言っても無駄だった。

ココ最近寝不足である為か、アヤの格好となってもあくびが絶えない。

何時もの食堂の席に座っていると、何処とも成しにルーキー達が集まりだした。

この格好のときにしか飲まない濃いコーヒーを啜っているうちに、出口が無いほどの人が集まりきったようだ。

「あ、あの、席を一緒にさせて頂いても宜しいでしょうか？」

軽く頷く僕だったが、テルマ少女とその集団であったに、何時もとは違うメンバーが混じっていた。その2人とは面識深い関係だったりする。

「ご紹介させてください、こちらの2人は・・・。」

「千鶴」墨田さんとドロレス「ファイランド」アースさんね。」

人工声帯から出た声を聞いた途端、2人の少女はぴょこんと頭を下げた。

「式典ではお世話になりました、またお会いできて幸せです。」と
ちーちゃん。

「・・・よろしく願います。」と、ロリータ。

テルマは何となく置いて行かれた感じになっていた。

「で、少女達。そろそろ食べはじめないと、時間が足りなくなるわよ?」

その一言に、少女たちはそろって席につき始めた。

食事の最中、テルマや彼女のチーム達から色々とちーちゃんたちについて聞かされた。

やれ、学業に熱心だとか、それで居て周囲に十分気を使っているとか、明るい態度と細やかな配慮が良いとか何とか。

半ば無表情に食事を続けているちーちゃんであったが、首のあたりは赤いのを見ると十分に照れているに違いない。

ロリータなど半分硬直している。

僕自身も何だかくすぐったいような気がしてならない。

僕自慢の妹分、そんな心のうちを誰かに話したくでしょうが無い気分だった。

「・・・それですね、アヤさん。」

もじもじとする彼女達。

一様に下なんかを見たりなんかしている。

「お願いがあるんです、・・・いわば挑戦です。」

爆発的に嫌な予感が背後に走る。

テーブルの挟んでちーちゃんやロリータが苦笑していたりする。何かが行われようとしているのだろう。

「それ、私、聞かないといけないかしら?」

「はい、けっして学園と在校生は私達を飽きさせないと、果敢に挑戦せよと言ってくださった方がいらっしやいましたから!」

きらめき瞳に照らされて、僕は思わず見知った2人を見たが、二人は肩をすくめるばかりだった。

嫌なところばかり学園に馴染むものだ。

がつくりと頂垂れて、一応聞く事にした。

「で、その挑戦って何かしら？」

グツと力をこめた彼女は、絞り出すように声を放つ。

「わっ、私達と、競っていただきたいんです！」

嫌な予感で押しつぶされそうになりながら、僕は聞いてみた。

「な、なにで競うの？」

にんまりと微笑むテルマ。

「もちろん、学園祭のミスコンです！！」

僕はその場であつくりと力尽きた。

チームの皆は口を揃えて「出るしかあるまい」という。

彼女たちはルーキーで、それに挑まれた僕は先輩なのだから、と。

「僕、だけか？」

そう言う僕に、皆は言う。

「今は、私、だろ？」

いまだアヤ姿の僕。

本日は既に実習済みの内容なのでパスしたのだが、何処からかアヤの姿を見つけたルーキー達に付きまとわれて、昼食時間の今まで、着替えるタイミングを失っていた。

地上で食事をしていると何かと見つかってしまうので、関係者以外立ち入り禁止のプロジェクト部屋での食事となっていた。

いつもの喫茶店からのテイクアウトを頼張りながら、元帥職務も遂行する。

なにやら本気で自分が何者なのかを疑いたくなってきた。

「しっかしねえ、僕は前回でお役御免になってるはずだろ？ 今年
は審査員になりたかったのにい。」

「それは難しいね。 今年はディフェンディングチャンピオン再出場制度が適用されたから。」

「な、なんだと、そんなルール聞いたこと無いぞ!」

「ある女性生徒総代の時代に、女性蔑視だということで女性への適用を禁止されたんだ。」

「女性?」

「ああ、女性『のみ』」

「性別差別だ、人権蹂躪だあー!」

つまり男の僕には適用すると言い出したわけだ。
腐れ生徒総代め。

「出なきゃ良いのさ、棄権するよ。」

「・・・アヤはルーキーに挑まれている、ディフェンディングチャンピオンはイズミ」アヤ。誰が出場するのかなー?」

むっとした僕は二人の少女を睨むが、全く感じるものがないらしく、ニコニコしている。

泣いてもだめ、怒ってもだめ、すねてもだめ。

万策尽きた僕は、本気でがつくりとってしまった。

お昼からはじめた書類の切りが悪いために、プロジェクト部屋で書類整理を続けていた。

着替えるタイミングを逸していたままであったので、いまだアヤのまま。

「元帥、お似合いですね。」

立場上、間近でアヤの格好を見ることが少ないクラウドアさんは、頬を赤らめて言った。

「あのですねえ、僕は好きでこの格好をしているわけじゃないんですよ。」

「でもお似合いなことには変わりません」
「いやに強硬に言う。」

「・・・僕は、この格好は嫌いなんです。」

「・・・すみません。」

しゅんとしよげ返る彼女。

これでも十二分に成人女性のはずんだけどなあ。

際限なく落ち込まれると、それなりに困るので苦笑を浮かべてフ
ォローする。

「まあ、気にしないことにしますよ。クラウドИАさんに誉められ
るのはうれしいですから。」

その一言で笑顔を取り戻してくれるのだから、こちらとしてもあ
り難い。

「元帥、あと、この書類だけで本日分終了です。」

「本日分？　じゃ、夜の部はなし？」

「はい、緊急書類以外は一切なしです。」

緊急書類は仕方ないだろう。まさに緊急、一分一秒を争う書類な
のだから。

「じゃ、これから着替えて散歩に行くねえ」

とウーキンググローに飛び込むと、彼女はこほんとせきばらい。

「・・・できれば、この後の時間をお貸しいただきたいのですが・
・。」

消え入るような声を聞いた僕は、メイクを半分落とした顔で彼女
を除き見る。

「メイクを落とした後でいい？」

「結構です。」

「もしかして、デートのお誘い？」

「おしいです。」

・・・何なんでしょう。

メイクを落とし、標準制服に着替えた僕は、クラウドИАさんの
付き合いでいつもの喫茶店に行った。

いつもの席に座ると、その横にクラウドИАさんが立つ。

「あれ？　座らないんですか？」

にこやかな笑みを浮かべた彼女が、喫茶店の入り口を見たとき、数人の少年少女が現れる。

見慣れた少年少女はルーキー達であった。

「実は、彼らから元帥のお時間があるときに会見を申し込まれておりまして・・・。」

「つーと冷や汗一筋。」

「は、はじめまして、イズミ元帥！」

走りよる少年少女たちの迫力に僕は押されていた。

「あの、お忙しい中、申し訳ありませんでした！」

元氣一杯の声だと、思わず苦笑い。

「で、何か用かな？」

僕が小首を傾げると、はいはいはい！と皆が手を上げる。

「く、くらうでいあさん、前もって質問内容のチェックはしているんですか？」

「勿論していません。そちらのほうが面白いでしょう？」

真っ黒けに学園に染まっている・・・、彼女を僕はそう感じた。

此一時間の会見を終えた僕は、いつの間にか公私にわたり立場が変わってしまったと思った。

あたかも学園代表のように振舞わざる得なくなっていたり、ルーキー達の矢面に立たされざる得なくなっていたり。

基本的に、僕の立場は一般学生で、二回生で、友達と馬鹿をやっている時間が一番好きな学生というものはずであった。

が、いつの間にか権力構造のトップに引き上げられ、祭り上げられ、あれよあれよという間に、馬鹿のしにくい立場になってしまった。

「元帥、ご相談もなく、申し訳ありませんでした。」

「いやいや、いい気分転換だったよ。ありがとう。」

こうやって連絡武官として派遣された彼女にも気を使う毎日だ。学業と元帥職務だけで一杯一杯の毎日に何の意味があるのか？

徐々に僕の中でその思いが大きくなってきていた。だから、僕は一大決意をしたのだった。心の底から楽しいと思える学生生活のために！

三軍将軍が召集した会議は紛糾していた。

明らかに無茶苦茶とも思える人事指令が元帥府から発せられたからだ。

その人事は佐官から一兵卒にいたるまで発令され、国連三軍が混乱の極みにあった。

なぜそのような人事権の暴力ともいえる指令が発令されたかがわからない。

少なくとも、先日の査問会ではそんな素振りは見られなかったからだ。

「・・・もしかすると。」

国連海軍「J」将軍はモニターの中で顔をしかめる。

「J、何か思い当たる節があるのか？」

「・・・夏期休暇を前にして、空軍からいつも以上の元帥決済書類が送られている。そのことでご立腹なのかもしれん。」

「うちも、増えてるぞ。」「うちもだ・・・。」

試算したところ、通常流通量の五倍。

チャン将軍、シン将軍、「J」将軍。

誰もが思った、こりや怒るよ、と。

分析官の報告では、まったく人柄も適正も評価表も考慮しないでランダム（軍用乱数表に合致した）配置された人員は恐ろしいもので、定数ばかりはそろっていても元事務員ばかりの歩兵隊や、後方支援要員ばかりを各方面から集めた（お茶くみすら失敗するような女性事務員も組み入れられた！）調査部隊など問題点は多岐にわたっていた。

「自らの無能をアピールしての罷免を狙ってます。」

彼の一言があれば、世界戦争すら起こせると言っただから、この程度の小さな齟齬ぐらいいは目を瞑りたい。しかし、国連三軍機能自体の崩壊を自らの罷免材料としてしている狂った行為は看過出来るものではなかった。

三人の将軍は静かに見詰め合った。

彼の望むことを、三軍に最も望まれたトップの望みを言葉にしてよいものかどうか。

僕は上機嫌だった。

元帥罷免の日がもうすぐにやってきているからだ。

国連三軍数千万人に及ぶ人事を一気に一晩で入れ替えると言う指令を発令したばかりで、その指令を見た将軍たちは間違いなく僕の気が触れたと言うことで罷免するだろう。

普段人事面での移動の際に排除される軍システム部分にも手を入れたのだ、暴挙といってもいいだろう。

書類の作り方や慣例を知っている人間をシステム根幹から駆逐し、伝統や儀礼に詳しい人間を現場から一掃したのだ、仕事になるまい。

発令施工前に罷免、そして人事刷新中止となつのが僕の目算だった。

事務方の人員を空母に寄せたり艦長にしたり、マッチョな歩兵を広報のデスクにつかせたり、前衛バリバリの人間を後方へ送つたりともう、絶対に不満一杯だ。簡単なスクリプトなんか組まず、ミスマッチのみを念頭に自分の手でいじった人事は、自分が見ても無茶苦茶だった。

これを見て平然としているクラウディアさんって、もしかすると大物なのだろうか？

まあ、今回の人事異動ではクラウディアさんの職務遂行上の弊害も発生しているので、彼女の怒りもひとしお、綺麗にバイバイ出来

るだろう。

そんなことを考えながら、いつもの喫茶店でキシシと笑う僕の上に、二人の美少女が現れた。

「あら？今日はご機嫌ね」とイブ。

「・・・クラウドさんは一緒じゃないのね。」とレンファ。

するりと僕の両脇に座った彼女たちは、いつものように紅茶を頼む。

「ま、ね。彼女はそう、高密圧縮容量120GBにも及ぶ人事書類を暗号化しながら転送中だからね、ちよつと時間がかかるかな」

「ま、悪巧みで彼女をいじめてるの？」

「ちがうちがう、・・・いや、彼女は望んでいないかもね。」

そついいながらため息をつく。

彼女自身僕の連絡仕官でいたいといっしてくれている。それを鵜呑みすれば、僕の罷免はうれしくないだろう。しかし、あれだけの美人で有能な人が小僧のお守りなんて仕事をずうつとしていたいわけがないわけ。

上官への気遣いと言つのはとても痛いと思う。

出来れば彼女をすぐにでも解放してあげたいけど、それもこれも罷免あつてのこと。

まあ、罷免寸前には彼女自身の進退を良くしてあげたいと思うけど、それもこれもあの人事書類の反応次第。

即効か遅効かはすべてが終わってからとなる。

元帥を罷免になるような男などと言うことで、もすかすると学園の生徒総代なんて話も立ち消えるかもしれないし。

うん、これはいいね

にこやかな笑顔の僕を、不気味そうに二人とも見ていた。

「リヨウがこんなにはしゃいでいるの、はじめてみたわ」

「なんだか、子供みたいで不気味ね」

「僕は十分に子供だと思うけど？」

何気ない一言。

この一言が現実的な一言だとは誰も思っていなかった。

「おはようございます、元帥」

いつもの朝、いつもの喫茶店にいた僕の元へ、大量の書類を抱えたクラウドディアさん。

なぜかその後ろに年配の老婆と老人がいた。

「おはよう、クラウドディアさん。」

ざざっと、テーブルを埋め尽くす書類。

二人の老人は手際よく整理し、項目別に配列。

いつもならばうんざりするはずの書類は、一気に整理完了し、後は僕がサインするだけになった。

この手際、この速さ、何と言うか・・・プロだ。

思わず感心してクラウドディアさんを見ると、彼女はもつと喜びを眼に浮かべていた。

「感謝です、感激です、感動です。私の元に二人のアシストが配属されると聞いて事前に調べてみれば、失礼ながら退役延長なされたお二人で、しかも戦史編纂課最後の二人だと言うではないですか。少なからず元帥のお心を疑っていました・・・。」

そう、寝ることとサボることしかない老人二人を彼女の配下に入れようと画策していたのだから、疑って当然。

思わず眉を寄せていると、クラウドディアさんが、かっ拳を握るが、しかし、その最後の二人は事務処理のエキスパートなんですね！、と。

最後の二人と聞くと規模縮小の中で残された閑職のように思われるが、実際はそうではなかったのだ。かの老人たちは、集まってくる情報からデータベース制作・検索ソフトの改良・書物管理などを人30倍行える事務プロだったのだ。

僕も知らなかったけど。

「イズミ元帥、退役延長どころか元帥府への直接の招聘を感謝して

おります。」「確かこの老人は王」重言。資料では、仕事場で囲碁や新聞ばかりを読んでいるとかいてあったので、囲碁の手ほどきを受けて、黄への連敗記録を塗り替えるためだけに呼んだのに。

「イズミ元帥、遣り甲斐のあるお仕事をいただいて、とても感謝してますわあ」「こちらはルカカ」カワワ」テルクツテ。事務机の上に無数の編物が埋まっていたとか。

正直な話、評価報告を鵜呑みにして編成したんだけどなあー。

心苦しいけど、クラウディアさんにも見限ってもらうつもりだったのに。

「元帥、なにか？」

クラウディアさんの心配顔に苦笑で答える僕だったが、苦笑はそれに収まらなかった。

その日、元帥当てのメールボックスは将官・仕官・兵士からの直接メールで溢れた。

さぞ苦情ばかりだろうとほくそえんで見てみると、思わず眉をかめる。

僕の英語解析能力が誤っていないければ、多分、お礼、だよな！。

もしくは感謝。

たとえば一例を紐解いてみると、

『この度、国連空軍空母「父とこの大地」海兵部隊より広報か窓口
に編入された、クロイツ軍曹です。私のごとき一兵卒の家庭事情に
配慮していただいた人事に、心から感謝の念が絶えません。一年
のうちに数日しか家に帰れないという夫婦生活のなかで、やっと出
来たわが息子の出産に間に合うように配慮された地上事務所への勤
務のこと。そして見た目とは違い、腕力を振るうことを嫌悪してい
た私の精神鑑定書を十二分に考慮いただいたこと。わずかばかり
の間に全軍掌握なされた実力を垣間見た気持ちであります……。』

おかしい、勤務評定ではこんなことは書いていなかった。

『作戦参謀室勤務がとかれ、戦史編纂課に配属されたとき、すべての出世の道がなくなっただけに見えましたが、出世のためのすべてが

ここにあることに気づかされました。システム課から配属されたものの、庶務のエキスパート、歴戦のファイターパイロット、曲者の全員が合致したときすべてがわかりました。この歴史編纂課こそ真の参謀本部であると・・・」

性格的に最悪の相性の人間をひとつ狭い部屋に押し込めたただけなのに・・・。

しかし、真の参謀本部って・・・。

『庶務課より調査部へ転属せしミスズ曹長であります。当方の偽装行動を見抜いた慧眼恐れるに足る主とみるものなり。終生お仕えいたしたく・・・』

だれだだれだ、近年まれに見るメガネどじつこだと評価したやつは!!! 調査部をがたがたにしようと思ったのに~~~~~!

『ゲイの巣窟から救い出していただき、ありがとうございます。あと一日遅かったら僕は両親に顔向けできなくなるところでした。配属先の従軍教会は、皆さんいい方ばかりで・・・』

確か彼は、軍広報部の人事課だったはずだ。まったくものにならないと言う報告が入っているの、そんなに素行が悪いなら、教会に派遣してしまえと・・・。

「・・・なぜなのかな?」

ばったり机に倒れこむ僕。

一晩中まんじりとしながらメールをチェックした結果は、空恐ろしいものだった。

総数八十二万三千二十五通。

そのすべてが感謝の手紙であった。

これだけ感謝している人間がいれば、その逆に不満を持っている人間がいるであろうと思っただけだったが、ひとつも見つけられなかった。

どうということなのか?

手元に残っている資料をいくら調べても、感謝の言葉なんて出て

くるはずがないのに。

やはり机上の空論、というやつなんだろうか？

そんなことを思いながら、ずるずると着替えをはじめた。

致し方ない、ヒサナガスーツ。

飲みなれた人口声帯。

今日はアヤの日であつた。

ふと気づけば、学園内にUNの徽章を漬けた若者が多く存在していた。

研究塔を歩きながら、なんだろう？ そう思っているところ、ふいに右から引つ張られた。

見てみればそこはアマンド研究室事務所。

引つ張りこんだのは研究室長たるアマンド教授。

その顔は満面の笑みを浮かべている。

「やるではないか！この〜！！」

ヘッドロックの上にぐりぐりと僕をこぶしで責める。

「あうあうあう、なんですかあ〜もう！」

そのまま教授の個室に連れ込まれた僕は、ばんばんと肩を盛大にたたかれる。

「貴様は思い切ったやつだと思っておったが、ここまで徹底しているとは思わなかったぞ」

にこやかな笑みは、怒っているわけではないのだろうけど、意味がわからなかった僕は当惑気味であつた。

「え〜っとなんでしょう？」

「この期に及んでお惚けか？ まあいい！ クレアもリアも貴様のおかげで戻ってこれたのだ、私もむすめっこ達も大助かりだ！」

えっと、どういうことかな〜、と言う視線で僕が答えると、彼女は合点が行ったと言う顔をしたあとで、思わず顔を赤らめた。

「す、すまん、アヤ・・・どうも、慣れんな。」

咳払いひとつをした教授は、わざとらしく噂話をはじめた。

堂に流れ着いた。

アヤの格好のままでいつもの喫茶店にいつては、なにかとけないことになっているので、昼食などは食堂で取っている。

リヨウ・イズミと食事自体の同一性をなくすために、ここでの食事は必ずトーストとコーヒーと決めていたが、今日はカロリーが極端に足りない気分であつたのでコーヒーに砂糖をがんがん入れる。それを見た少女が心配そうに寄ってきた。

「大丈夫ですか？ アヤさん」

いまやルーキーの中心格にいるテルマであつた。

彼女の後ろからは、彼女のチームも心配そうに覗き込んでいる。

「あー、いろいろあつて、ちよつと疲れているだけよ。」

そついつた僕に彼女も疲れた顔をする。

「あら、あなたもお疲れ？」

その一言に苦笑を浮かべる。

「あ、その、ちよつとだけ、悩んでいるんです」

「？」

彼女の悩み、それはUN徽章をつけた軍関係者の増加であつた。

「あの受験をぐりぬけた人しか学園に入れないと思つていたので、ちよつとイズミ元帥はずるいなーつて。」

背後の少女たちも同じような顔つきであつた。

なるほど、彼女たちもあの受験を潜り抜けてきたと言つ自負があるのだ。

「でも、さつきアマンダ教授から聞いたけれど、ほとんどみんな元国連学生らしいわよ。」

「え？ そうなんですか？」

「そう。国元の事情や家族に事情のためにやむなく卒業したあと国連軍に入つて研究を続けていた人たちで、経費削減と効率化のためにむりやり軍務についたままに呼び戻されたんですつて。」

「じゃあ、研究室は大助かりなんですか？」

「あなたたちも経験豊富な先輩が増えたつてところね。」

「そ、そうだったんですかあ。」

ほうつと息を吐くテルマ。

「一年先に入学しただけかと思っていましたけど、こうやって実力を見ると本当に凄い人なんですねイズミ元帥って。」

答えに窮する僕。

「天才って、本当の天才っているんですね。」

「このまえ教務塔でお見かけしましたわ。」

「あ、あの喫茶店って入店資格審査があるって本当ですかしら？」

「元帥って次期生徒総代なんですって！！」

「きゃ〜〜〜」

さて、彼女達は、本人を目の前にしていることに気づいたらどう思うだろうか？

げんなりとした僕の口には、コーヒー色の液体の味はしなかった。

もうだめだ、ちくしょう！　そうおもった僕は、元帥職務用と成った部屋で着替えて三軍將軍を呼び出した。

おかしい、絶対におかしいのだ。

自分でも信じられないぐらい無茶苦茶をやったのに、何で誉められるの？　なんで感謝されるの？

「があーーーーーー！」

思わず叫びをあげた瞬間、回線がつながる。

きわめて錯乱した姿を見た割には、三人とも冷静だった。

「このたびの人事、感服いたしました」

何事もなかったように切り出す陸軍チャン將軍。

「見事も何も、あてずっぱうです」

「ほほう、それは異なことをおっしゃいますな。わざわざ人事ファイル全てを接收し、毎晩毎晩書類と格闘し、そして見事の一語に尽きるタイミングでの強制発令。そしてわれわれには一切上がってこない苦情、外部からも問い合わせがあるほどの完全な迷彩人事でありながら適材適所、これ以上の采配はないでしょう。」

クラウドディアさんの報告がすでに彼らに届いている査証だろう。僕のところに来る軍内メールは必ずクラウドディアさんを一度通るから。

放置していたのは不味かったかも知れない。

「すべて、休み前に片付けたかっただけです」

ふうとため息を漏らす空軍J将軍。

「仮に、もし仮にすべてがばらばらのいい加減で決められた人事だったとしましょう。われわれは信じませんが、そういう分析をする分析官もいましたから、そういう仮定も可能でしょう。が、もしそうであったと言うのなら、本来なら罷免を受けてしかるべき罪と言えます。」

瞬間、僕の心は沸き立ったが、チロリと向けられた視線でいやな予感が膨らむ。

「が、それはすべて、結果がネガティブであった場合のみです。」

「そう、今回の人事異動で国連軍内に大きな問題があったことがわかりましたが、その問題すべてが解消したのです」

「すべて？」

「はい。」

沈痛な面持ちの海軍シン將軍は、資料を画面上に表示した。

それは何人も的人事ファイル。

が、その中で目を引くものがあつた。

たとえば、ミスズ軍曹。移動によって曹長。

「やはりご存知でしたか、ミスズ軍曹を。」

「ご存知もくそも直接妙なメールをもらったと言つと、全員が目を丸くした。」

「あの、インビジブル・エッジに!!」

話によると彼女は自称殺し屋という、有名なテロリストだそう。誰の依頼かは調べられなかったらしいが、僕の暗殺を試みるために国連軍にもぐりこんだという。そこで情報収集と足場固めをはじめ、さあこれからというところで人事異動。それも天敵とも言える

情報部に元帥自らの署名で異動になったのだ。

瞬時に彼女は自らの器を知り、依頼を断念したと言う。

彼女の戦歴は十数年前から続くものだそうで、誰にも気づかれずに誰にも判らないように暗殺を成功させることから、インビジブル・エッジと呼ばれるようになったという。

が、素顔不明・年齢も不明と言う体たらくで、さらに気づかれる事もなしに国連軍に潜り込んでいたと言うのだから恐ろしい。

さらに出てくる問題は、軍内監視機構自体の麻痺とも取れるもので、なんとも頭の痛いところだった。

「すべて、すべて偶然です!!」

「偶然ならなおのこと、ですな。」

そう言ったのはチャン將軍。

「わら我は勝利のために、作戦成功のためにすべてを注ぎます。それがたとえオカルトロジに傾倒したものであるうとも、根も葉もない噂であつたとしても、プラスの材料ならば必ず取り入れます。」
ばつさりと断言するチャン將軍を見て、僕はめまいに似たふらつきを感じた。

「われわれが行うべき改革の多くをこなしていただいたことを感謝します。」

「この断行人事は未永く語り継がれますでしょうなあ。」

齒が浮き上がるようなお世辞が並べ立てられた通信回線上の会議を、僕は無言で切った。

何もかもが上手くいかない。

どうしてこつも裏目裏目に出るんだらう?

ぎしつとせもたれに倒れこんで、僕は頭を抱えていた。

国連軍の解体すら覚悟しての無茶苦茶な命令は、無茶苦茶な理由により肯定され、無茶苦茶な理由で歓迎された。

無能のそりを受けたいのならば、公金横領やセクハラに従事すれ

ばいいという話もあるが、その手のことに対するパッションが足りないせいか、全く触手が動かない。

調整休暇以来、その手のことに臆病になっているという向きもあるが、実際、女性一人に対して責任の取れないようなことはしたくない。

思わずため息で書類をのぞく。

有能な老人達とクラウディアさんの手によって整理された書類は、流入量に比べてはるかに楽になっている。

僕以前の段階で決済が済まされて良いものが全くなっているといっている。

そういう点では、僕が行った人事異動の恩恵を僕自身が受けているといってもいいだろう。

きわめて複雑な思いのする休み前であった。

第十四話 夏休み・・・前（前書き）

感想でほめられて、いい気になって発掘してしまいました（^^；

言詞力、偉大なりw

第十四話 夏休み・・・前

さまざまな事件が起きる学園において騒動は日常だが、日常全てが騒動であるわけではない。

騒動以外の日常が存在し、その多くの時間が騒動以外に使われている。

無論、その合間に起きる騒動の回収やフォローのために、普段の時間が使われているともいえるかもしれない。

そして今も、その騒動の後始末というか、騒動の続きというか。それが明らかに僕の日常を侵食していた。

日常こそが騒動だといえてしまう日常にも思える。

じゅるるとすすっているのは、三日ぶりの栄養補給であった。

ビタミンとカロリーの複合栄養剤飲料で、500CCの飲料ボトルの中身で丸一日分のエネルギーがある

そんなふうクラウドディアさんが何か言っていた気がする。

でも、その段階で二日分ほどカロリーが足りない計算だ。

ゆるくなったズボンを見てため息ひとつ。

こんなものを飲むよりも、早々に部屋に帰って睡眠をとるほうがいいのだ。

いやいや、浴びるほどのんだり食べたりしたい、したいのだあ！
が、馬鹿みたいな会議にいくつも参加しているうちに、部屋に帰る時間がなくなってしまい、丸三日ほど会議室に缶詰状態になっている。

シャワーぐらいは浴びているのだが、ベットで横になる時間が取れない。

湯船に入る時間が無い、食事をとる時間も無い、ああ、何でこん

なにも時間が無いんだ？

背後に控えるクラウディアさんも大して僕と状況が変わらないはずなのに、ぴりつとぱりつとしていたりする。

どこで身支度を整えているのやら。

やはり一流の士官という者は、そのもがちゃんとしてすることに意味があるのかもしれない。

軽くひげをそって、顔を洗って歯を磨いて、髪の毛を整えて臨んだ会議の内容は、きわめて頭痛のするものであった。

元帥府における随員、そう、国連軍から引つ張ってきた研究員達の取り合いというか陣取り合戦というか、もう泥沼のような会議であった。

学園を出た彼らは、濃密な交流のはてに極めて有用性が高い研究を独自に行っているのだが、その応用性が高すぎるために人員の取り合いが起きているのだ。

全ては僕の人事改革に端を発するものなので、取り合いのたんに議長を勤めさせられてしまう。

午前午後深夜早朝と続く会議なんてNetでやってくれれば楽なのに、何を思っただ元帥職務室に集まっただひと悶着を起こす。

陳情からはじめて要領書の提出中に他の教授が乱入、リアルな空間でぎゃーぎゃーと騒ぎ立てる教授達に、僕は切れてしまった。

「だあー！　ちょっとは落ち着いてください！！　そんなに論点が合わないなら、阿弥陀くじにデモしますか？！」

思いつきでその場を収集しているのがありありとわかる態度に、クラウディアさんが休憩を入れてくれたのだが、それでもいいアイデアは浮かんでくるものではなかった。

以前ならばネットでの会議が主流で、皆自分のテリトリーで鷹揚に会議をしていたものだが、最近は直接対決が主流らしい。

喧喧囂囂毎日会議しているのだから頭の痛いことだ。

僕の自制心とか敬意とか言う単語が擦り切れ始めたころ、プチりと切れる。

「やかましい！！！！なぜ独占をしたい！？　みんなで仲良く研究なさい！！　僕は三日も寝てないんだあああ！！！！」

最後の叫びはどうでも良いとして、その一言が教授会を動かすことになった。

それが元帥府所属にとどまらず、研究員全体のレンタル制度の開始であった。

各研究室の研究員、所属学生、研究データを一定バーターで交換しよう出来るようにしたもので、これにより研究所間の垣根が低くなるものと思われた。

・・・思ったのだが、やはり一次利用権利を欲する研究室が多く、新規人員を押さえたがった。

やれ、在籍中の出席率はどうだったただの、研究論文提出率がどうだったただの。

最初は二・三人の教授で話していたはずなのに、いつの間にか何人も何人も教授たちが現れる。

「我が研究室での彼の実績は・・・」　「いや、いやいやいや！　彼が継続研究していた内容は・・・」　「やめろお！！　そうじゃないのだ！」

次々にシューターから現れる教授たちは、口々に泡を吹きながら取っ組み合った。

もう、団子状態で取っ組み合っている親父どもに向かって、僕ががつくりと突っ伏した。

人数割りや研究員の割り振りについて下会議をしていた秘密会場のはずなのに、なぜかぎつてきたのやら。

このまま突っ伏したままで倒れたまま寝ちゃおうかなあ。

机は冷たくて気持ちよさそうだし、横になった瞬間、全部夢のなかだよなあ。

とかなんと思ったが、肩口から重いものが首筋に差し込まれて

気付く。

起き上がってそれを見ると、クラウディアさんが差し出す凶悪な鉄塊であつた。

うつろな瞳でそれと共にクラウディアさんを見る。

彼女はにこやかに微笑んで頷いた。

僕は反射的にそれを入れて放った。

[illegible]

乾いた銃声が会場に響き渡る。

それを聞いた誰しもが床に伏せた。

銃社会に生きる人々の当然御反応である。

反射的に伏せた全員が、ゆっくりと立ち上がり僕に向かって引きつった笑みを浮かべる。

「……これは、空砲で威嚇とは穏やかでは……」

ボスコック教授は、自分の視線の先の銃口が空けた天井の穴を見て絶句する。

実砲であることを知ったからだ。

「ばばばばば、ばかな、学園内での武装行為は……」

「現施設は、国連学園に有つて国連学園に有りません。国連三軍支配下の軍施設に相当し、学園法に縛られない空間に相違ありません。ここでの指揮権、支配権は国連学園に無く国連三軍指揮下にあります。」

片手でマガジンを開放、後ろ手で受け取った新たなマガジンを装填する。

チャンパーへ一発目の弾丸を送り込む。

「静寂による協力が得られない場合、いささか血なまぐさい展開になるかも知れませんね。」

「……れ、れいせいにくう、リョウ＝イズミ元帥……。」

「冷静に、ですってえ？」

手にした拳銃を机に叩きつけた僕は、腹の底から声を上げる。

短時間ながら訓練で身について、安全装置にはちゃんと指が

はいった。

訓練つて大切。

「屑みたいな会議に、何日も何日もつき合わせた拳句、大の大人が掴み合いの大喧嘩だとお？ 入れ替わり立ち代り、自分の用件以上の重要事項はないとばかりの夜討ち朝駆けの阿呆な申し入れに協議立会い、僕は泣けてきましたよ！！！」

「あ、あのお、元帥閣下？」

「僕は何日部屋に帰っていないと思います？ 四日、四日ですよ、

・もう時計の針が回ったから五日目だ、授業にも出れずに雪隠詰で、あなた方が導くべき生徒を軟禁状態でつき合わせた上に殴り合いたあ、あんた等恥じを知れ！！！」

ぜいぜいと荒い息をしていた僕の体は、ゆっくりと、本当にゆっくちと傾き、そして視界が真っ暗になった。

イズミ元帥府にてイズミ元帥倒れるの報は学園中に轟いた。

元帥府内に設置されている医療セクションがにわかに活気付いたが、即時に解散が責任者キム女史によって宣言される。

「寝不足のがきんちよには、点滴うつて寝かせとけばいいってただ。」

喫煙所でタバコを吸う女史は、ぶつくさと文句を言いまくりであった。

「健康が服着て歩いてるような若造に、従軍医療スタッフなんていらんのだよ。」

まあ、そんな彼女達の不満を解消するために、国連学園における元帥府スタッフの聴講制度を作ったのだが、いまや阿呆みたいな評判ばかりが先行している。

やれ、人事改革の前準備であつたとか、すでに国連三軍の変革の野心を持って元帥府を開いたとかなんだとか。

「ま、あんまりにも動きが大きすぎて、真実を見誤っているだけだな。」と、これもキム女史。

「このがきんちょは、そんなに中距離を見ながら生活をしているわけじゃないのさ。付き合ってみれば解るよ、もつと遠くの、三年も四年も先の事を望遠鏡で見ながら生活しているんだ。だから今が疎かになっちまうのさ。」

そう元帥府で、元帥不在の会議で彼女はのたまわったという。

そしてにやりと微笑んでいった。

「あたしらは、あのがきんちょの足元を綺麗にしてやるのが仕事さ。わかるだろ？」

元帥府において、リョウイズミを唯一『がきんちょ』と呼ぶキム女史こそが、最も心酔しているのかもしれないとクラウドディアさんは思ったという。

目覚めてみれば、タバコの香りが仄かに香る人影一人。

「お、起きたな、がきんちょ」

多少眩暈のする視界に耐えながら身を起こすと、そこは自室ではなく元帥事務をしていた部屋の仮設ベットでもなかった。

「おまえさんは、自分のことを無敵超人か何かだと過信していないか？」

思わず肩をすくめる僕。

「いかに有能なおまえさんでも、ここ最近の仕事の量は尋常じゃない。やりすぎだ。」

「聊か卑猥な言い回しですね。」

ぼつと顔を赤くした女史は、ぼつと何かを振り払う。

「ば、ば、ばかもの！自分の体なのになぜ自愛できん！」

言われてみれば、何でこんなにも一生懸命なんだろうと、自ら首をひねりたくなってしまふ。

初めは事態收拾だけのために始めた元帥職務なのに、いつの間にか生活の一部になっていて、当たり前のような生活になってしまった。

素人の分際で組織を弄繰り回したり、人の迷惑を顧みずに人事を

ばらばらにしたり。

「・・・辞任、出来ませんか？」

すうつと息を吸ったキム女史は、数秒そのまま息を止め、ゆつくりと吐いた。

聊か解りにくかったが、ため息なのかもしれない。

「やめたいか？」

思わず力なく微笑んでしまった。

「確かに、成人もしていない『がきんちょ』が背負うには重すぎる肩書きだ。　だが、おまえさんという看板だからこそ実現していることも多い。　解ってるよな？」

「・・・」

「しかし、ここ最近の仕事の量は尋常ではない。こちらのほうから抗議をしとくよ。」

「・・・はあ、やめたいなあ。」

「今やめるということは、仕事ができなくて逃げ出すというほか無いぞ？　格好のいい理由ではないな。」

「やっぱり皆そう思いますよね・・・。　そういわれると、逃げ出しにくいんですよ？　男の子って。」

「わかっておるよ、だからそういうんだ。」

本当のため息を漏らし、僕はがっくりとうな垂れた。

「・・・UN所属研究員の所属は『UN』です。元帥府を窓口とし、全ての人事確定を反故とします。」

病室からの発表は、思いのほか静かに受け入れられた。

意気消沈とした承諾と、羨みがちの発言の裏には何かあったのかもしれない。

そう思っちょこつと探りを入れてみると、僕が倒れた後でクラウディアさんが半狂乱となり、手がつけられない状態だったとか。

目を三角にして、視線だけで人が殺せるぞという風に教授陣を睨んだ後、こう宣言したそう。

「いま、元帥が居なくなったら、次席指揮権者が黙っておりませんかね！」

さて、組織上の次席指揮権者は、三軍各々の將軍となるわけだが、実際は一つ空白がある。僕の仕事を補佐するクラウディア空軍大尉どのが、口頭命令を一定期間代理作成し発令することが可能なのだ。

むろん、ばれればただではすまない。

しかし、そんなリスクをリスクと考えるような雰囲気ではなかったというのが、教授たち全員の一致した見解だ。

「君自身も怖かったよ、本当の軍最高権利者であることを思い知らされた。」

と、デニモ教授の意見であつたが、僕自身といえば寝不足と各種覚醒錠剤の副作用で、なかばジャンキー状態だっただけの話だ。

冷静に考えれば、全部に参加せずに、はじめっから教授会で殴り合わせればよかっただけの話だし。

遺恨を残さないように、生徒達で試験出題をし、その成績順に権利譲渡をするというのも面白かっただろうか？

「ふむ、やっぱり睡眠は大切だなあ。」

ぼそりと独り言を言ったと共に、病室のドアが開いた。

「あ、おきたなあ？」

くのいちポニーテールの少女は、小脇にルームメイトを携えて現れた。

「なんだ、手みあげなしかい？　ちーちゃん。」

「へっへっへ、ちゃんと小脇に抱えてるじゃない。」

そういつてロリータを僕のベットのの上に乗せる。

彼女の胸にはリボンが巻かれており、のしまでつけられていた。

『お見舞い』

そんな風にかかれているのを見て、思わず僕はにやついてしまった。

「あ、あの、元帥、この上には何がかかれていますか？」

「ああ、これ？」

僕が指差すと、よこでちーちゃんが人の悪そうな顔で微笑む。
なにかネタを張れってか。

「これにはね、『私を食べて』ってかいてあるんだよ」

瞬間真っ赤になったロリータは、そのまま背後に倒れてしまった。

「・・・本当に食べちゃってもいいのかな？」

「ばか。」

真っ赤になったちーちゃんが、僕を張り倒すのであった。

全てのUN研究員は元帥府預かりとすると言う決定は、怒声や罵声が渦巻いたものであったが、時間経過と共に沈静化に向かい事となった。

なにせ、研究員達が自らの一時権利をどこに預けるかを選択できるようにしたし、新たに研究したいところに対しても元帥府経由でアクセスできるようにしたのだから。

古巣に戻りたい人間は古巣に素直に戻れるし、他の研究室と協力体制に入りたければ簡単には入れるというわけだ。

この有用性は浸透し、不満を訴える声を飲み込んでいった。

まあ、不満が聞こえなかったわけではないが、その不満が高まれば、僕の罷免も近くなるわけで。

嬉しさ2倍かな？などと不謹慎なことを考えたりするのも、睡眠不足が原因だろう。

不満といえば、イズミリアはこの研究室に寝泊りしている事になっている割には、ここにきて押さえられないという不満が多いそうだ。

そこで出鱈目な言い訳をアマンダ教授が思いつく。

「やつは、カメラ片手に学園中の映像素材を集めることに従事しておってな。やつの隠れる能力は忍者マスタークラスじゃないか？」

そういえば、と噂が立つ。

女子寮の吹き抜けをひとツ飛びで四階フロア・まで飛び上がったとか（ヒサナガタイプ7の着用実験中の話だ）、直線状どうやってもいけない所へまるでレポートするかのように現れるとか（シューターをルーキー達が知らないと言っことに起因する噂だ）、魚以上の速さで中央池を泳ぎきったとか。

そんな噂を一つにまとめたアマンダ教授。

さすがに忍者はなかうと思ったが、どうやら皆信じ始めている感があった。

それもまた面白い。

ここ数日イズミィアヤが現れなかったのは教授会に埒監禁されていただけのけれども、今後の言い訳にも使えるだろうというところで、そのままにした。

ということで、久しぶりのイズミィアヤの日にアマンダ研究室のロッカーから無防備に学食へと向かった。

本当はアマンダ研の電気バイクを使おうと思ったのだけれども、全部で払っていたので仕方ない。

十数メートルも歩かないうちに、たーと走って寄ってくる女子ルーキーが現れる。

暫く無視して歩いていると、背後に妙な気配を感じた。

ざわつくような波打つような気配をいぶかしんで振り返ると、そこに居たのは大量の人間であった。

ニヤニヤと微笑んでいる在校生。

僕の視線で真っ赤になったルーキーの男子。

そして黄色い叫び尾上げて失神までするルーキーの女子。

「あのー、何の集まり？」

僕のその問いに誰も答えなかった。

帰ってきたのは歓声ばかりだったから。

なんでこんなに人が集まるのか側から僕だった。

解らないことは解らないことと思いつき無視する事にした僕は、学食で端っこの方に座る。

トーストとコーヒーというのが公式のイズミ「アヤのライフスタイル」となっているの、無糖ブラック三倍濃縮エスプレッソを啜る。爆発的に苦いものだけど、慣れれば結構面白い味をしている事に気付いている。

『リヨウ「イズミ」に戻っても、試してみようと思った。

「あ、あの！」

周囲を遮断するような雰囲気を作っていたつもりであったが、彼女には、テルマにはわからなかったらしい。

もしくは、先ほどコーヒーに全神経を集中していたときに雰囲気が出切れたか？

かけられた声を見無視するほどささくれた性格ではないので、にこやかに微笑んで対応する。

「おはよう、テルマ。・・・久しぶりね。」

顔を真っ赤にしたテルマが、僕の横の席についた。それとあわせて正面に男子が座る。

見ずとも解る、少年だろう。

「で、何か用？」

「は、はい！ あの、凄くお聞きしたい事があるんです！！」

朝っぱらから元気が張り裂けている少女は、僕の言葉を待たずに叫びを上げた。

「・・・リヨウ「イズミ」さんとお付き合いしているって本当ですか？」

すうっと僕の意識が白くなる。

周囲で遠巻きにしていた在校生たちも真っ白になっている。

「その、嘘や冗談ではなくて、本当の本当をお聞きしたいんですう！」

）

うみはいいよなー、よせてはかえすよせてはかえす。

時々おおきなみなんかきちゃってさあ、ざぶーんて、ざぶーんだよ。

なんかさーまいなすいおんでいいよねー

）

やや意識がどこかにいつている所で、覚えの強い香りが鼻をくすぐる。

甘い、淡いこの香りは、2人の少女を思い出す。

不意にその形が頭の中にまとまったその時、僕は正気に戻った。

そしていつのまにか立ち上がったいた僕の両脇にはイブとレンファが居た。

「きいたわよお、アヤア」。リヨウと付き合っているらしいってえ。

┌

「夜の密会を繰り返しているんですってえ？ 私達に隠れてえ？」
ぎゅうぎゅう体を押し付けてくる二人の瞳は、どう見ても面白がっていると思えない。

「あのねえ、あなたたちも知つての通り、イズミ元帥とは一面識もないのよ、私。」

ええ！ と驚きがルーキーの少年少女達から上げられる。

「入学からこっち、彼とは一つも授業は重なってないし、重装備で撮影活動しているときはこっちが身を隠してるし、彼の周りって最近ガードが多くて『本当のGF』達だつて近づきにくいのよ？」

そう僕がいうと、イブとレンファは目を潤ませて僕に抱きついてきた。

それを見ていた在校生達は、口笛を吹いたり何したり。

「じゃ、じゃあ、アヤ先輩は、今、フリーなんですか？」

少年の一人が、今にも倒れそうな勢いで聞いてくる。

僕は、あらかじめ仕込んでおいたカメラを胸の谷間から抜き出す。

「今は、これに夢中なの。この子が私の相棒。」

スリムなデジカメであつたが、スチールに負けていない性能を秘めた学園製だ。

「か、カメラになりたい。」

そう呟く少年達にウィンクして、僕は学食を去った。

あとからトコトコと数人付いてくるが気にしないことにする。

アヤになったり、リヨウになったりと忙しい日々の中、学園は一年で最も長い休みに入ろうとしていた。

その名も夏期休暇。

研究室にはあまり関係ない話であるものの、ルーキー達には再び訪れた凱旋の機会だ。

ルームメイトやチームを従えて、華々しい休みを送るだろう。

で、その時期が近づくに従い問題が、瞬間的に、爆発的な量で発生した。

夏休み前だということで大量に流れる元帥職務書類。

日々消化するだけでも正気を疑う量があるのに、通常の三倍を超える量が日々電送されてきている。

まあこれについては、例の老人二人がいるので聊かの軽減はあるのだが。

次に、各研究室からの国連軍への協力依頼処理。

夏休み前にして必要データを集めてしまおうという魂胆の書類は狂気なレベルに達していた。

僕は山積みの書類を見上げて呟く。

夏休みは遠い・・・と。

一晩二晩かけて処理した感想は、もう一語に尽きる。

「終わらんねえ、これは」

サインしてもサインしても終わらない書類の山は、いまだ増える様相があるようだ。

休み前に急いで出された書類は、いまだ管理部門でスタックされているものがあるらしく、それもここ一週間以内に処理しないといけないものらしい。

なんでもっと早くできなかったのかなあ、と呟いたところ、その原因の一端に僕もいるそうだ。

本来、というか今まで頑迷な書類処理形態があつた為に、元帥府まで上がってくる書類はある程度セーブされていたという。

しかし、この程の人事異動により、書類発生時点で厳選されたため、発生した書類の殆どが事前処理段階で止まる事無く元帥府まで上がってきているという。

さらに、人員移動によって浮き上がった以前からの問題の改善案や改善報告が爆発的に発生し、今の書類の山になっているという。研究員問題も書類増加に拍車をかけているそうで、その増加量は予想もつかないそうだ。

全ては自分のまいた種なのだろうか？
考えたくないなあ。

「・・・とはいえ、書類は処理しないと終わりませんよお、と。」
ということで、僕は地道にサインを始めた。

授業以外の時間の全て（睡眠も仮眠だけで）、三日ほど職務室で缶詰になっていたところで、学園長からの召喚があつた。

なんだろうか、と思つて行くと、学園長は極めて味わい深い表情をなさっている。

何と言つ表情だろうか？ そう思つて眉をひそめると、学園長は重々しく口を開く。

「最近、元帥業務にかかりつきりだそうだな？」

「はい、全く終わる様相の無い山積みの書類に気が狂わんばかりです。」

何を思つたか、学園長は懷から鏡を取り出して僕に差し向けた。
「ひどい顔をしておる。そのままでは書類に埋もれて死ぬぞ。」

全くひどい顔をしていた。

真っ青な顔色、真っ黒な目のした、がさがさな唇、生気の無い瞳。ですが、どれもこれも自業自得ということだ。」

「君が休まんと、君の部下も休めんぞ。」

ぐ、つと痛いところをつかれた。

確かに自分の顔も酷いが、クラウディアさんたちの顔も凄い状態であつた。

ワンさんやルカカさんなど死相すら見える気もする。

・・・いかな、やっぱり休みを取らないと。

「・・・つまり、夏期休暇を取りなさい、と？」

重々しく頷く学園長。

どうしろというんだろ、僕はため息一つついた。

元帥府として使っている事務スペースには、信じられない人員が集まっていた。

全員にUN所属研究員のワッペンがついていることから、間違いなく元帥府所属の研究員であることが知れる。

みんな手に書類を持ち、どこからかひっぱてきた電話でどこかと連絡を取っていた。

「え・・・つと、これはどういうこと？」

クラウディアさんに聞くと、彼女も肩をすくめて見せた。

そんな様子を見ていた一人の研究員がにっこりと微笑む。

「あのなあ、イズミ元帥。あんたは俺達の上司で、俺達は部下だろ？ 瑣末な書類一つに至るまで抱え込まないで、こっちに回せよ。」

「え、でも、皆さんは研究目的がありますし・・・」

「それでも、私たちは事務のプロでもあるのよ。少しは頼りなさいつて。」

女性研究員が微笑んだ。

「俺達、おまえさんに無茶苦茶な借りがあるんだ。ちょっとぐらいバーター解消させろよ。」

無言の僕の横で、笑い声がする。

不意の声に驚いてみると、そこには銀髪的美じょうぶが立っていた。

「・・・先輩方、かれは間違いなく貸しを作っているだなんて意識していませんよ。」

生徒総代の言葉に、研究員達は眉をひそめた。

「彼は、あなた方が如何に感謝しているかも知れないし、どうやって借りを返せるかを待っていたなんて知らないんです。」

極めて強い疑問の色を浮かべた視線が僕に集中した。

電話中の人も、書類をチェックしていた人も全員がこっちを向く。

「えっと、皆さん、わたしなにかしましたっけ？」

ざわつく周囲の声を聞いてみると、『本気か？』『何を言っているんだ？』等という言葉が聞こえる。

「どういうことです？」と風御門先輩を見ると、彼は爆笑のあまりに呼吸困難に陥っていた。

半ばむっとして、眉をひそめると、一人の研究員が明らかな呆れ顔で僕に声をかける。

「きみ、イズミ元帥閣下よね？」

「不本意ながら、三十三通目の辞任の人事書類が認可されるまでです。」

「先月、信じられないような人事異動を断行した、イズミ元帥よね？」

「無茶苦茶な人事異動をして解任を狙ったものの、人事のスリム化が出来てしまい書類が爆発的に増えて自爆した馬鹿元帥です。」

「ちょこつとだけ眉をひそめて彼女はさらに言葉を続ける。」

「・・・人事異動の際に、君のところにサーバー限界まで感謝メールが来てたのは見たわよね？」

「ええ、いまだに信じられませんが、好評のようです。」

ふう、と彼女はため息をついた。

「少なくとも、元帥府お抱えになった研究員全員感謝メール出して

るわ。」

へ？ と僕が周囲を見回すと、全員がにこやかに微笑んでいる。
「でね、ちゃんとメールに書いてあるはずよ。『及ばずながら、研究員としてUN軍人として、元帥府での業務につかせていただきます』って。」

あー、たしかにあったかもしれない、と思い至るものの、実際は社交辞令だろうと僕は思っていた。

だって、学園に入ったばかりのペーパーに、学園の大先輩方が頭を下げるだなんて、ねえ？

そんなことを言つと、皆に怒られた。

『なめるな！』と。

我々は自分の能力を十分知っているし、相手の能力を多く見誤ることはあっても少なく見積もることは無い。前例の無い人事政策や研究開放、学園技術の統合放出などを見れば、如何に全体をつかみ、そして流れをよくしているかがわかるのだ、という話だ。

そこそこ適当にやっているだけなのに、無茶苦茶な評価だ。

まいったものだと思っていると、ぼんと僕の頭に手を乗せる人物が現れる。

今度は誰かと思ったら、学園の黒幕、学園長であった。

「少しは自分の配下の人間を信じなさい。」

配下、という表現には聊か引つかかるものがあつたが、僕は頷くしかなかった。

「えーつとでは、一部の事務処理をお願いして良いでしょうか？」

「命令しろよ。」

「・・・では、近日中に提出を必要とする研究書類のまとめと各研究室への送付、及び研究室からの試験依頼要項原案とそのまとめを書式化していただくことと・・・」

周囲は目をむく。

「ば、ばかな、そんな事までやっているのか？」

「え、ええ、まあ、ここが学園から出る最後のチェック所ですから、

抜けてるところは満遍なく・・・。」

眉毛を三角に立てた研究員達は、各々の関係ある研究室にバリバリと電話を始めた。

「あんたところは元帥府を何だと思ってるんだ!」「オメーらの手抜きでこつちにどれだけの仕事があると思ってる!!」「修正点と提出書式は全部送り返すから、一時間以内に戻せ!!」

いやはや、信じられない勢いで目の前の書類が消えてゆく。

いや、勿論、消えた書類はさし返したただけなのでなくなったわけではないが、見えないだけで気分が違うというものだ。

「すごいですねえ。」

「凄いいはおまえだ、リヨウイズミ」

モヒカン刈りの研究員が僕の肩を叩く。

「こんな馬鹿みたいな書類と戦いながら、いままで補習研究題材化なしだった? 化け物か、おまえは。」

「こつこつやれば終わりますよ、大概。」

「しんじられん。」

真っ赤な髪の毛を編み上げた女性がしなだれかかってきた。

「こんな馬鹿みたいに忙しいと、彼女も出来ないでしょ? よかつたら付き合っわよ?」

甘い香水の匂いに、思わず眩暈を感じたが、ぱつと彼女と距離を開けた。

「あー、一応間に合ってます」

引きつってしまった笑顔でそういうと、前期まで学園にいたであろう人たちがぐくぐくと笑っている。

「そうですね、あねさん。彼の人事権と交際権は彼以外の誰にも与えられないことが学園長の名前で宣誓されているんですから。」

「そうですね? 学園長。」

「そうだな、彼が勝ち得た最も重要な権利だな。」

苦笑いの学園長、引きつった笑みの風御門先輩。

赤毛の女性是不満げに口を尖らせていた。

「ちえー、将来有望な若いツバメが飼えると思ったのに・・・。」

「あねさん、私などどうですか？」

すつと音も無く近づく風御門先輩を、ぴちりとデコピン。

「ばか者、ゲイと付き合う女がいるものか。」

爆笑の周囲を見回して、僕は何だかぬるま湯に浸かっているような気持ちのまま、ふんわりと気を失ってしまった。

今月に入って二度目の入院に、キム女子は目を三角にしていた。

「おまえさんは、自分のことを無敵超人か何かだと過信していないか？」

前と全く同じ台詞に、思わず笑ってしまう。

前回は教授会に付き合つてのことであつたが、今回は自業自得。何とも情けないことだった。

『囚人だつて国家元首だつて休みがあるのに、国連三軍元帥には休みを取らせないつもりか!!』

元帥府常駐医療部からの報告は、そんな一言から始まっていた。

ほぼ、何の抵抗も無く押し寄せた書類の分量内容を列記した目録を各部署に送り、一人で処理できるものならやってみると併記した後、慢性疲労のために元帥の体調は極めて悪化しており、医師として一ヶ月の休養の実行を宣言した。

無茶苦茶であるが、主治医たるキム女史は一線たりとも引く姿勢は見せなかった。

そんな報告に添えられていた書類には元帥府所属研究員からのものもあり、現状に大きく問題が存在していることを訴えていた。

この程行われた人事異動の要は「情報の通気性のよさ」であるにもかかわらず、元帥府に全ての情報を集約せんとするために、トラフィックオーバーを起こすという問題があるというものだった。

現在元帥府に常駐している研究員と同規模の事務所の開設が急務であり、その体制への移行のためには運用実験も含めて一ヶ月が必

要だというものであった。

「急務なんですか？」

僕の問いに、赤毛の姉さんヴォード女史は微笑んだ。

「急務だよ、急務。今は夏期休暇中だから良いけど、休暇が明けたらあんた寝る時間も無いよ。」

つらつらーと彼女の並べる書類を見て目をむいた。

今までの書類数と、これから予想される流通量、僕が単位時間あたり処理できる書類の数、そして一日の処理できるであろう書類の数。

ぐるぐるぐるぐる、思わず目が回る。

「ちよつと色はつけたけど、殆どこの書類道理になるね。」

「あねさん、こんな書類いつの間に作ったんですか？」

「へっ、こんな書類なんざ一時間もあればすぐできるって。」

つまり、こんな書類をさくさく作っちゃうやつらが、いま国連三軍でごろごろしているわけで。

そりゃ仕事も増えますよ。

「ま、この夏期休暇は、元帥殿も休めるだろうさー！」

制服の腕をメッシュに改造したモヒカン男、クラウンズが吼えるように言う。

こういう言い方がスタイルなのだそうだ。

「申し訳ありません、先輩方。本来の皆さんのお仕事とはかけ離れたことばかりお願いしてしまつて。」

「あー、まてまてまて！ それ以上言うな！！ いいか解ってるな、俺達は部下、部下だからな！！」

モヒカンの彼は、顔を真っ赤にして両手を振る。

見た目とは違い、極めて恥ずかしがりやなのだという。

集まってくれたかつての国連学園生徒達のおかげで、僕ははれて夏休みを取ることが出来ることとなった。

休み明けが思いやられるけど。

第十四話 夏休み・・・前（後書き）

前書きでも書きましたが、ほめられると嬉しいものです。
叩かれると凹みますがw

もったもな内容というのは頷けますが、「正論を言っている自分は正しくて偉い」という理論展開をしている人を見ると、言われている作者さんがかわいそうになります。

その辺は手加減すべきなんだろうなあ、と期待を込めてあとがきでしたw

第十五話 夏休み・・・なのですよ（前書き）

本当にちょうしづけてますね、私。

俺様超人型主人公も、度を越せばアリかとw

第十五話 夏休み・・・なのですよ

この夏は記録的な外出となった。

それもこれも国連軍が全面バックアップする事による全世界的安全宣言が発令されたことが原因といえる。

というか、地位と権限を傘にして押し通した。

人事が刷新された自称国連三軍統合参謀部（戦史研究部屋）は、今年の夏期休暇において、極めて魔術的なプランと作戦を持ち込んだ。

それは国連学生全てが帰郷したとしても、極めて高い安全衛で保護できるというものであった。

その高い確率というのは、前年比で23倍とのこと。

時節的に考えて、昨年の冬に起きたハイジャック事件や昨日起こった籠城事件によって情報部の地位ががた落ちになっており、そこに付け入る形で勢力拡大をしているかにも思えるので慎重に書類を見ると、なんと計画段階で情報部と有機的な連携が詠われており、統合化すら視野に入れていることが見受けられた。

乗っ取りやM&Aではなく、連携。

柵や旧悪的な風習を取っ払うと、これほどまでに風通しが良くなるものかと感心してしまう。

いやはや、どんな連中が自称統合参謀本部にいるのやらと、思わず冷や汗をかいた。

まあ、自分で人事異動した連中なんだけどね。

しかし、この計画案の一番の肝は、なんといっても僕の居場所であつた。

少なくとも、この計画どおりなら仲間も友人も守れるに違いない。一気に読みきって、思わず万歳三唱。

そのあと何にもまして最重要最速処理議案として判子を押してサインした。

とつと正式書面化して、写しを作って、保管用に封蝋までしてしまった。

もう、これ以上の処理は必要ないというところまで処理して、満面の笑顔と共にクラウディアさんの手に渡す。

「いかがでしょうか、元帥」

「さいこー、ほんとにサイコー！」

思わずクラウディアさんとダンスなんか踊ってしまったりした。

その上で、学園ネットに国連軍からのお知らせとか言って、ばんばん宣伝を始めたり。

よっしゃーとばかりに国連学生ばかりではなく、教授陣も帰郷させちゃうぞとか、生徒総代だって帰らせちゃうぞとか、一気に事務量で全てを押し流してしまった。

その姿を指して元帥閣下のご乱心とか事務所ではいつていたが知った事ではない。

「しかし、私は、生徒総代として、学生の一般報告を受ける義務が・・・」

どもつていた生徒総代殿をばんばん後押し。

「いえいえいえいえいえいえ、先輩のご家族にも連絡したところ、父上様も妹君もぜひぜひ帰郷して欲しいと涙ながらに・・・」

「・・・な、な、なに？ 実家に連絡したのかね？」

「ええ、勿論。」

深いため息と頭痛に耐えるようなしぐさで数秒止まっていたかのようなミスターであったが、諦めたように帰郷していった。

計画では、いの一番にUN専用機で北極海を渡る予定であった。

一気にロシア経由でヨーロッパに侵攻し、南下しつつアフリカ大陸へ進撃。

南極方面を経由しつつ南米から北米へ進撃するという縦一周コース。

明らかに横一周を意識している各国や各組織の意表をついていること請け合いだ。

こうなると航路上の定点で迎撃するほかに、極めて解りやすい襲撃帯が出来上がる。

地上攻撃でも空中攻撃でも不自由するところばかり飛んでいるものだから、元帥閣下の嫌がらせ旅行とかいう副題すら付いている。

が、なぜか今、僕は目覚めると東に移動していた。

機内時計を見て、意識を失ってから約三時間。

太陽が見える方向や下に何も見えない情景から太平洋を渡っている事は疑いない。

さらにいえば、だだっぴろいスーパージャンボに乗っている元帥府の主要メンバーや僕の両脇に座る美少女二人、色々と散らばるチームメンバーを見れば誰の発案かも知れる。

そして形の上での上司である僕をはめた人物にも心当たりが・・・

「・・・ある」

じろつと背後を見ると、クラウドディアさんがにこやかな笑みで微笑んでいた。

以前など僕が不機嫌な顔をしているだけで泣きそうになっていたくせに、最近は全くひるむ事がない。

これを強くなったと呼称して良いものかどうか不明だ。

左右の少女たちもご機嫌で、にっこにこである。

僕としては暫く不機嫌でいようと思ったのだけれども、これだけ楽しそうにされてしまうと暗い感情も続くはずもなく、思わずため息と共に二人を見た。

それにあわせるように、左右から僕に体を押し付けてきた。

「・・・あのですね、極めて如何ながら・・・こういうことされるのが嬉しいんですけど、やめませんか？」

「嬉しいんでしょ？　ならいいじゃない。」

「・・・極めて重要な問題を先送りにしたままにしたくないんです。」

「青い空の下を大型航空機で遊覧。左右に絶世の美女。愉快的仲間達とも一緒。これ以上何を望むの？」

愉快的仲間たちというのは絶妙な表現だが、僕は手綱を緩めない。「なぜ国連学園にいるはずの僕が飛行機に乗っていて、いま、僕が何処に向かっている、君たちがどうして聞き分けてくれなかったか全てを聞かせて。」

なるべく感情を絡めないように言っただけだが、どうも不機嫌さが声に出てしまった。

それを咎めるように睨むチーム連中。

イブもレンファもちよつと泣きそうな顔。

・・・悪いのは私ですか？

「リョウ・・・知ってるんだから、あなたがこの休みに何をするかって事を・・・。」

「・・・いやよ、絶対にいやよ！　あなただけ、あなただけが危険な目にあうだなんて！」

ボロボロと涙を流しながら彼女たちは僕にしがみついた。

「いや、ほら、ね、ぜんぜん何のことだか。今年の夏休みは僕、学園で・・・。」

涙でぐちゃぐちゃになった顔で、二人の美少女が怒りに朱がさす。

「うそっ！　あなたは、学園中の人間を外に出す代わりに、あなたがおおぴらに外遊することによってテロの標的を自分にするつもり！」

「全部わかってるの、わかってるのよ！」

平目で周囲を見回すと、誰もが僕を睨んでいた。

計画を全てわかっているはずのクラウドさんや元帥府の連中

まで僕を睨んでいる。

いや、元帥府の連中以下学園組は皆、この計画に反対だったってことかな？

「・・・リヨウ、何度も倒れて。忙しくて忙しくて会えなく・・・」

「・・・いつも一緒にいるつもりだったのに、凄く遠くにいる・・・」

あ、なんかいやな予感がしますよ、ええ、とてもいやな予感です。僕が何か言おうとしたところ、二人の少女の瞳で一気にはじける涙の波。

あ、あ、あ、あ、あ、何で泣くのかなあ！

まるで幼子のように「びー」と泣く二人の少女の真中で、僕は思わず頭を抱えた。

何がどうなって、どう悪いんだ、僕は。

確かに彼女達の誘いもチームの誘いも断りました。

それは、僕自身が一介の国連学生だったのなら問題ないことだけど、僕が休みに動くとなれば多くの人に迷惑をかけ、そして多くの人を危険にあわせるのだ。

家族や恋人がいる人たちを、自分のバカンスのために迷惑かけたくない。

しかし、それ以上に家族以上の仲間の身の安全が自分一人で購えるのだ。

「・・・それは判ってくれてただら？」

僕がそう言うと、声もなく二人は涙を流しつづけてる。

あー、なんか違うぞ、君たち。

僕の知っているレンファはもっと泰然としていて、僕の知っているイブはもっと子悪魔的で。

僕なんかより一枚も二枚もう上手の大人だったはずなのに。

僕がそれを言おうとしたところで、はたと言葉を止めた。

これが地なのか？ そう思ったからだ。

ああ、どうしたらいいんだろうか。

思わず困惑義気に彼女達の頭を抱き寄せ、ちいさくごめんと言った。

そう、確かにチームをないがしろにしていた。していました。

始末しなければならぬ事が山積だったために、それに全ての時間が吸われていた。

食事も休憩も無しだったので、何日彼女達と顔をあわせていなかったのかわからない気もする。

彼女達への負い目を感じているってことは、これって恋人扱いをしているのかなあ？

僕は、僕の目的のために誰にも所有されず、誰も所有しない生き方をしようと思っていたのに。

まるでくもの糸にからめとられた羽虫のような気持ちも感じたが、どちらかといえば所有される喜びのようなものも感じている。

やっぱり一人では生きられない性格なんだと悲しさ一つ。

諦めた僕は、ゆっくりと二人の少女を両腕で抱き寄せて呟く。

「・・・で、僕たちは何処に向かっているの？」

彼女たちがこれですぐに答えるなら、極めて巧妙な嘘泣きといったところなのだけでも、彼女達はぐすぐすと涙を引きずっていた。

困りがおで背後に視線を向けると、クラウドディアさんが一枚の用紙を僕に向けていた。

タイムスケジュール

一番上に行程表とかかれた用紙には、みっちりと今後の移動予定がかかれていた。

最初にアメリカに渡りアメリカ出身者のチームメンバー家族を招いたパーティーがＪＪ宅にて行われ、その後ニューヨークにて北アメリカ・日本のメンバー家族主催によるパーティー。

その後、同様のパーティーがドイツ、香港にて行われて日本に帰るという世界一周旅行。

その間ＵＮ軍士官学校に出席したり、ＵＮ軍基地によって公聴会に出席したりといやな色いあのある行程だ。

「・・・これって、何処が休みなんですか？」

思わずそう言つと、クラウディアさんは苦笑いだつた。

まあ、UN三軍と僕らのチームの思惑がこの拉致になったのだからうけど、どれだけの人員が動いているのかわからなかった。

「・・・もう、日付変更線を越えてるんでしょ？ 諦めたから、ちゃんと説明して。」

きゅつと両方の肩に乗っかる頭を抱きしめる。

ロサンジェルズに降り立った僕たちで、二人の少女がサングラスをしていた。

本気で泣いたための目が腫れてしまったのだ。

本当に申し訳ないと思う。

今回の拉致は、三軍將軍で立案され、元帥府でプランニングされ、民間某所から支援されたものだつた。

チームはその馬尻に乗っただけで、イブとレンファは最後まで反対していたのだという。

それを知った僕は、心から謝罪をしようと思ったが、彼女達はそれをさせなかった。

それで又口論となり泣かせてしまうという繰り返しになったところで、僕は沈黙の反省を行う事にした。

何を言つても彼女たちを泣かすことしか出来ないなんて、何とも情けない。

謝罪とお詫び、全てを彼女達に向ける笑顔にしよう、僕はそうと心から思った。

とはいえ、立案者には痛い視線を向ける。

両手を広げて息子を抱きしめた「J」將軍へ、殺意すれすれの視線を送ると、彼はびくりと背を縮めた。

ゆっくりと視線を僕に合わせると、貼り付けたような笑顔でやつてくる。

「これはこれは元帥閣下、長旅ご苦労様です。」

差し出された右手を無視して僕は「」將軍を睨みつける。

「……」

だらだらと汗を流す將軍の右手をゆっくり握って、小さな声で言った。

「……おいたが過ぎるものではありませんか？ この休暇中、学園のだれも同行しない事を表明したはずですが？」

「心から申し訳なく思いますが、またとないこのチャンスの中で啓蒙活動をして頂かない事には三軍共に動きません。」

「僕自身の休暇がなくなるなんてことはどうでもいいのです。僕と同行することによって即死の危機すらある仲間のことを言っているのです。」

「……彼らは心から任務への献身を願っております。この休暇時期の活動自体、彼らの進言から発案されたものなのです。」

がつくりと肩を落とした僕。

なんで貴重な夏期休暇を危険な旅行でつぶそうとするかなあ。

ずっと身を起こした「」將軍は、背後より美しい女性を招いた。

「紹介させてください、元帥。これは、我が最愛の妻です。」

にこやかな笑顔の女性が一步前に出て、ちよこつと会釈をした。

その身のこなしは全く違和感の無い日本式の挨拶。

「始めまして、イズミ元帥閣下。夫と息子ともどもお世話になっておりますわ。」

そう言った彼女の言葉は、完全な日本語であった。

驚いて目をしばたかせる僕の右手を、彼女は夫から奪うように握手した。

「パトリシアと申します。よろしく願いますわ。」

へ？ パトリシア？

僕の頭の奥のほうで記憶がスパークした。

握った手の感触が何かを思い出させる。

広い空、流れるような金の髪の毛、両手を開いて僕を抱きしめた

女性。

ああ、彼女の名前は・・・、僕は彼女をこう呼んでいた・・・。

「・・・パット先生？」

瞬間、はっと息を吸う気配と共に、女性は見る見る瞳に涙を溢れさせた。

「ぼっちゃま？」

「先生、その呼び方は嫌いだっていつてるじゃないですか。」

はあ、と息を吸いきった彼女は大声で泣きながら僕を抱きしめた。
「ぼっちゃま、ぼっちゃまだわ！ ああ何てことでしょう、元帥閣下がぼっちゃまだっただなんて！！」

英語と日本語がごちゃごちゃになった言葉を叫びながら、僕も懐かしさに胸が一杯になっていた。

当時パット先生は、ＪＪが手のかからない年になるまでの数年で、夫にさんざん浮気をされるといふ憂き目に遭っていた。

そして浮気の数が三桁を超えた夫を見切りをつけて、全てを放り投げて逃避行に出た。

行き先は特に決めていなかったそうだが、色々放浪の末に東京は板橋区に流れ着いた。

当時の東京は、どちらかというと英語に対する敷居が高く、道案内をしてもらおうと商店街を放浪していたパット先生を殆どの人が無視していた。

そんななか、途方にくれていたパット先生をリョウコさんがナンパして、家までつれてきた。

食事の後、しきりにお礼を言うパット先生をさしてこういった。
「覚えるなら、こういう綺麗な英語を覚えなきゃあねえ。」

あれよあれよという間に段取りを済ませ、僕の英語指導と家事を任せる替わりに大学の学習費用を全て負担するという約束で彼女を保護した。

就労ビザも無い彼女が得られる現金収入は少ないが、我が家に間

借りして家族として暮らす事とするとかなりの現金を必要としなくなる。

アルバイトを何個かすれば、家を自分で借りる事もできる程度だが、彼女は我が家に住み込んで色々と僕やリヨウさんの世話を焼いてくれたのだった

おかげで僕は日常会話における英語を難無くこなせるようになったし、英語圏での常識を身につけることも出来た。

我が家としては言う事の無い先生だったのだが、そんな彼女も一年半ほど日本に滞在したあと本国に帰っていった。

骨身まで冷え切ったような雨の中、傘も差さずに迎えに来た旦那さんに連れられて。

だんなは一晩ほどリヨウコさんにお説教をくらっていたのが記憶に深い。

サロンバスに移動した僕たちだったが、僕はJJ一家に僕は取り囲まれてしまった。

「今でも忘れませんわ、大奥様とぼっちゃまとくらしした日々を。」
ハンカチで涙を拭いながらパットさんは笑顔で話していた。

「へえ、ママが家出していた先ってリヨウのうちだったんだあ。」
「そうよあ、とおってもお世話になったんだから。」

JJ親子に挟まれた僕は、息子と奥さんに引つ張られていた。
「そうかあ、始めてあったときに、なんだかひたしみやすい奴だと思ってたけど、ママが英語を教えていたんだあ。」

覗き込むJJに、僕は苦笑い。

僕だつて驚きだ、パット先生の息子がJJだったなんて。

さらに言えば、りようこさんに一晩中お説教を食らった軍人さんがJJ將軍だったなんて知らなかった。

その事実に向き合ったJJ將軍は、ばつが悪そうにしている。

「そうだったんですねえ、リヨウの英語って、綺麗で丁寧で教授陣

からも評判がいいんですよ。」「そうそう、パトリシアさんが教えてくださった英語のおかげで、リヨウの人生は素晴らしいものになっているのでしょねえ。」

向き合った席から、サングラスを外してイブとレンファが笑顔をむける。

どうやら炎症止薬が利いたらしく、いつもの美しい顔となっている。

「いいええ、うちの子と違ってぼっちゃんは全く手がかからなくてこちらが拍子抜けするぐらいだったんですのよ。」

笑顔のパット先生をみて、「」は聊か表情を曇らせる。

まあ、やきもちなんだろうなあと思うが、僕としてもやきもちを焼きたい。

なにせこんな素敵な母親がいるのだから。

僕にとってもパットさんがいた一年ちよつとは素晴らしい日々だったのだ。

だから僕は、彼女が実家に帰るとき泣いてしまったのだ。

りようこさんにもお手伝いさんの皇さんにもみられないところでワンワン泣いたのだから。

そんな思いが心にわだかまっていた所為だろうか、あとで赤面の至りとなってしまうとは思ってもよらなかった。

着替えた僕たちは、「」將軍宅にて、「自称」ホームパーティーに出席していた。

かつて在米経験の長かった友人の話では、ホームパーティーというのはちよこつとしたお菓子や料理をつまみに、話題や会話を楽しむ集まりのほずであった。

友人の母はその状況に満足せず、チラシ寿司や手巻き寿司や杵と臼等で本格的な餅つきを実施し、近所に名をはせたという。

暫くするうちに地元の有名な家となって、日本食に関するスクー

ルを開き、一財産を築いたというが、その辺は蛇足。

ともあれ、僕の考えるホームパーティーって、家族とか友達が集まってわいわいするだけのものだと思っていたのだけれども、どうもその規模が違っていた。

野球場のような庭に数百者著名人が集まって、立食パーティーで喧喧囂囂と言う風景が目の前に広がっている。

僕の横に立ったJJに僕は囁く。

「アメリカのささやかなホームパーティーって、恐ろしい規模だな」
存外、JJ一家の規格外規模を揶揄した形だが、JJは顔をしかめて言い返す。

「あほ言つな。これはどう見てもUN空軍上級士官御一行様だろうが。」

見渡す視界のなかの男性殆どが軍服である事に気付いて納得。
がやがやと歓談の中、一段高い中央でJJ将軍が声を発した。

「お集まりの諸君、我が家のささやかなホームパーティーにご参加いただき有難う。」

わっと周囲が沸く。

お義理に湧いているわけではなく、好意の色濃い歓声はしんそこJJ将軍が慕われている証拠だろう。

こんなに人気があるのに、僕を神輿に担ぎたいと言う気持ちがない。

「このたびの休暇にあわせて、我が息子とその仲間達がこのパーティーに駆けつけてくれた。中には驚くような人物も多いので紹介したい。」

ばつと将軍が手を差し伸べると、JJが背後から押し出された。
一歩前に出たJJが一礼をすると、背後から僕や皆も押し出された。

背後から押したのはパット先生。

今までスポットライトの外にいた僕たちが明かりの中に入ると、大きくどよめいた。

「そう、皆さんもご存知であろう、我が唯一の上司、無二の上官殿が、我が息子のチームメイトだったのです。」

おとおとざわめく声が大きく頂点に達し様としていた。

なんだかショーめいていて気分が悪いが、致し方ないのだろうと納得しておく。

僕が一礼をすると、周囲もそれに習った。

盛大な拍手に迎えられる中、「J」将軍に演台へ引つ張り出されてしまった。

「何は一言、お願いいたします。」

何を言えというのだろう、と思っただが、こういう席での台詞は典型的に決まっている。

・・・決まっているが、ね。

「・・・私、リヨウ・イズミの出身は日本ですが、実のところこの地アメリカに大きくかわりがあり、親愛の情を感じております。

幼い頃、家族の愛情を知らずに育った私に母の愛と隣人を愛する心を教えてくださった人は世界を旅するアメリカ人女性であり、アメリカという国の心だったのです。つい先日まで大恩のあるその女性が無処の誰だかわかりませんでした。わかった今、心からの感謝をもつて答えさせていただきますと思います。『あなたの育てたもう一人の息子も、壮健にしております』と。そして大恩のあるこの国USAに、心からの感謝を！」

大滝のような拍手が巻き起こり、演台に駆け寄る人々が握手を求めてきた。

にこやかに握手を返しているところ、一人がポツリと聞いた。

「その女性って、どなたなんですか？」

僕は意地悪そうに背後を振り返る。

「その女性は、ある事情で二年ほどの間、家庭も夫も全部放り投げて世界を旅なさっていた方なんですよ。」

すると年配の軍人達が息を飲んで一点を見つめた。

そこにはバツの悪そうな「J」将軍と、ぼろぼろと涙を流すパトリ

シアさんがいた。

「も、もしかして！」

小さく言葉を切った人に向かって僕はウィンク一つ。

「学園機密保持法に引っかけられますから、その先は秘密、ですよ。」

ニューヨークでのパーティーにもJJ將軍は参加するという事で、スーパージャンボの客席についていた。

ジャンボの運行自体UN空軍で行われているせいか、客室乗務員達が極めて緊張しているようだった。

少し考えれば、僕も上官なんだろうけど、機内の扱いはどちらかといえばお客様。

その違いはと考えてみたが、JJ將軍がことあるごとに細々とにらみを聞かせている所為かもしれない。

JJ將軍が五度目の怒りを見せた瞬間、JJが声を上げた。

「おやじ、もういいかげんにしてくれよ！ こつちとら、エレメンタリーの遠足に両親が同伴しているような居心地悪さがあるんだから！！」

びしつと指差した先にいた將軍は、決まり悪そうに頭を掻いて下を向いた。

夫をたしなめる婦人、にこやかな笑顔、はにかむような息子、僕は思わず苦笑してしまった。

なんとなくうらやましく思った僕は、両親のことを思ってみた。

が、どんなに思い返しても、僕の脳裏に両親の特徴も、長所も短所も思い浮かぶ事はなかった。

僕の知っている両親は、幼い頃に見たと記憶している遺影に写された笑顔しかなかったから。

「リヨウ。」

小さく囁くようにイブが言う。

そつと手を添えてきたので、何かと思ってそちらを見ると、ひど

く心配そうな顔をしていた。

何か不味い事があったのかと思った僕は、笑顔を浮かべて・・・。
いや、笑顔を浮かべるつもりが、なぜか頬を一筋の涙が伝っていた。

「あ、あれ？」

呟く日本語も、なぜか湿っている。

瞬間、自分で知らぬ間に涙を流している事に気付いた。

わ、わっと、湧き出す涙を止められず、おもわず飛び跳ねるようにトイレに走った。

トイレに据えられた鏡をのぞくと、ひどい顔をした自分が居た。

おもむろに眼鏡を取って顔を洗っても、まったく晴れる様子はない。
い。

「まいったなあ。」

最近では独り言も英語であったのに、今、口から出てくる言葉は日本語だった。

ぱんぱんと両頬を叩いて気合を入れる。

なんだかトンでもなく恥ずかしい所をみんなに見られてしまった
ような気がする。

いや、気がするどころの話ではない、自分の状況や、自分の生い
立ちに自己憐憫を感じて泣いてしまうなんて恥ずかしい、本当に恥
ずかしい限りだ。

僕はかわいそうなんですとか何とか言って、負けてしまう自分が
嫌だった。

両親等に負けぬほど愛情を注いでくれた人達に砂をかけるようで
恥ずかしかった。

もう、本当に恥ずかしすぎて気が変になりそうであった。

「だあ、もう、忘れる忘れる、忘れる！！！！」

涙の後を消して、かきむしった髪の毛を整えてキャビンに戻ると、
何となく気まずい雰囲気であった。

なんてことはないといった表情で戻ったのに、みんなの視線が痛かった。

可愛そうとか済まなかったと言う色合いの視線に堪えかねた僕は、一度は座った席を立ち上がり、全員に向けて頭を下げた。

「すみません！ 皆さんの楽しい雰囲気をぶち壊しにしてしまって、本当にごめんなさい！！・・・反省してるから、これ以上じろじろ見ないでください。」

もちろん、みんなの視線が非難の視線でない事ぐらいわかっている。

しかし、冷徹で計算高い嫌な部分の僕が、この台詞を言わせた。

「俺こそ、俺達こそ悪かった！」

そう言ったのは「」。こういう風に言う人間だと僕はわかっている。

「・・・リヨウの事、知っていたはずなのに、無神経すぎた！ 本当にごめん！！」

口々に謝る仲間、でも、僕はそれを押しとどめた。そのままにしていれば、計算道理に収まっていたはずなのに、・・・自分からずれてしまった。

「ちがう、違うんだ。僕には確かに両親はもう居ない、でも、両親以上に愛情を注いでくれた人たちがいっぱい居るんだ、それこそ本当にいっぱい！ だから、両親の事で自己憐憫を感じるなんていけないんだ、その人達に失礼なんだ！ 本当に悲しいだなんて感じていない、僕は可哀想なんかじゃないんだ！！」

自分でもどうしようもないほど思考が暴走していた。

こんな事を言うつもりは無かった。

僕自身がかわいそうだななんて思っただけじゃなかったわけじゃない。

同情を集めたかったわけでも、自分が不快な会話だといって非難していたわけでもない。

それなのに、無用に熱くなった言葉だけが漏れ出てしまった。

いかん、そう思っただけで片手で顔を押しえると、頬には滂沱の涙が流

れていた。

すべてが計算外、大暴投の自分を見つけた僕は、思わず再び逃げだろうとしたが、二人の少女に引き止められてしまった。

「いいの、泣いて、泣いていいのよ。」

レンファが優しく抱きとめた。

「私たちが家族で、私達が兄弟。・・・それでいいよね？」

イブの言葉が僕の体と心にしみていった。

幾分の時間をあけて僕は我にかえた。

そして急に自分の有りようが恥ずかしく、そして極めて都合が悪い事に気付いた。

二人に謝りながら体を離すと、やおら声を上げて宣言する。

「今より一時間ほどの監視記録と、バックアップの消去を命令します。」

チョット間を空けて機内放送で「了解」と返事が返ってくる。

その声はなんだか涙にぬれているような声であった。

「・・・やっぱり」

がつくり肩を落とす僕を、みんなは何事かと覗き込んでいる。

言おうかどうしようか迷っていたが、呟くように僕は口を開いた。

「・・・この機内の音声は、くしゃみの音から針が落ちる音に至るまで記録監視されているんだよ。」

それを聞いて將軍は真つ青な顔をする。

どうやら自分で命令した事なのに、完全に忘れていたらしい。

「じゃあ、今までの話は・・・。」

「三軍情報監視室まで筒抜け。さらに言えば、この機内にいる部隊全員が聞き耳立ててたんじゃないかな。」

はずかしい、本当に恥ずかしくて気が狂いそうになった僕は、うなだれて倒れるようにシートについた。

NYまでの道すがら、妙に無口になる乗客たちであった。

ここまで機体を操縦した兵達と、機体を降りる際に握手をしたが、なにやら二人とも厳つい顔に潤んだ目をしていた。

僕の横のクラウドディアさんも、なにやらウルウルしているものだから立場がないというか、居心地が悪いというか。

敬礼で別れるときに、機長・副機長・機関士が声を揃えて叫ぶ。

「元帥。我々も、我々全空軍兵も元帥の家族であります!!」

倒れるかと思った僕を、横に居たクラウドディアさんが支える。

「・・・私も、家族だと思っていいですか?」

頬を赤らめた彼女を見て、自らの迂闊さというか情けなさにのろいを唱えずに入られなかった。

暫く、この、とても恥ずかしい台詞を、何度も何度も聞かされ続けるのだらうと思うと、気が遠くなるようであった。

ニューヨークでの会場は、某ホテルのワンフロアをこの日のためにぶち抜いて作ったそうだ。

今回はホームパーティーとか言っていなかったもので、それなりに覚悟していたのだが、それでも来客の数に圧倒されていた。

UN軍関係者はもとより、モイシャン・鈴両家の関係者や、マック・ステイプなどの家族・関係者・来客などがひしめいていた。

各界の著名人も入りという話だが、その各界の著名人とやらに知り合いは殆どいないので安心して会場を練り歩いていたのだが、世の中はそんなに甘いものではなかった。

東京の通勤電車のような混雑振りの会場内を僕が歩くと、ひと三人分ぐらいの隙間が出来たり、僕に向かって視線を向けてひそひそやっていたりと意識の集中を大きく感じる。

そんな中でも周囲が気にならないのか、僕に話し掛けてくる男性／女性がいるが、殆どが昨年カナダで行われたパーティーの出席者で、グッテンねーさんに取り成しを・・・という申し入ればかりだ

った。

僕としては話ぐらいしてもいいのだが、グッテンねーさんはこういう人づての頼みごとを大きく嫌っているため、そのことを話すと意気消沈して離れていった。

十五人目におんなじ回答をしたところで、目麗しい女性たち五人に囲まれた。

にこやかな微笑みはいいのだが、彼女達の視線は極めて無遠慮なものだった。

上から下まで舐めるような視線は、あたかも奴隷の品定めをしているかのようにであり、頭からかぶりつく予定のチョコパフェを睨むようであり。

「ハイ、ご機嫌かしら？」

中央の女性が、上半身の殆どの肌を露出しているかのようなドレスで言った。

メツシユ地で肌の色の全体がわかる状態で、ごく一部しか完全に隠されていないその体を均一なプロポーションに保っているのは節制と管理なのだろうか？

そんなことをボーと考えている僕を見て、周囲の女性もクスクスと笑っている。

それがなんとなく癪に障る。

「何か御用ですか、お嬢さんがた。」

何の感情も含めない調子で言うと、明らかな女性たちは気分を害したようだった。

「いえ、学園生徒のガリベンさんに、このようなパーティーの作法はご存知ないかと思ったもので、親身に教えて差し上げようと思いましたがのよ。」

言葉ばかりは馬鹿丁寧だが、聊か何かを含む様子だった。

アメリカ関係のチーム関係者だろうか？

「それはあり難いですが、私も少々思うところあって無作法を演じさせていたいております。それが皆様の気分を害したようで、心

からの謝罪を。」

礼儀作法の一端を、グッテン姉さん仕込みで発揮すると、周囲の雰囲気は柔らかなものになった。

一応主催は身内なのだ、ぶち壊すようなことはできないものねえ。軽く一礼して離れようとする僕を、にやりと微笑んだ女性が僕の脇に来る。

「まあ、そうでしたの。こちらこそ失礼いたしましたわ。貴方がカナダくんだりの田舎者と肩を並べていたもので、私勘違いしておりましたの。物腰もおっしゃり様も極めて綺麗な言葉使い、ジエントルマンでいらっしゃいますのね。」

一転してこびた調子に、僕の頭の中の警報は最大音声で鳴り響く。カナダの田舎ものって、やっぱり彼女たちかなあ・・・ということは、彼女達と何らかの対立関係にあるんだろうに。

仲間の敵はやっぱり敵か、警報なるよなあやっぱり。

「いえ、私自身、極東の蛮国生まれですので、ジエントルマンには程遠い身分です。ですが、私に礼儀作法や言葉使いを教えて下さったのはとても気高い心をお持ちのアメリカ人女性で、彼女の薫陶あればこそ私の私なのです。」

まあ、と彼女は微笑んだ。

「では、その素晴らしき女性に乾杯いたしません事？」

彼女は手にとったグラスを自分と僕に握らせた。

僕は苦笑でそれを遮る。

「申し訳ありません、この記憶は乾杯のためのものではなく、私と私の家族のための記憶です。大変失礼なのは理解しておりますが、ご勘弁ください。」

幾分彼女の機嫌を損ねたのは解った。

これで離れてくれないか、と期待したが、彼女は再び微笑んだ。

「今この場にいない女性にも御やさしくらっさるのね。」

ほんの少しだけ考えた彼女は、とろけるような微笑を浮かべた。

「では、今宵、貴方と出会えたことを祝って乾杯させていただきますだけま

せん？」

さあ〜てつと、どうしたものでしょうか？

光の速度で思考した僕は、思った言葉を引つ張り出した。

「よろしいでしょう、貴女との出会いと別れに、乾杯。」

流れるように乾杯した僕たちだったが、彼女はちよつと眉を寄せていた。

「出会ったばかりで別れを口になさるのは、少々無粋ではありませんか？」

「人は必ず二度挨拶します。それは、出会った時と分かれたとき。出会いを祝し、別れを悲しむ。私は今、貴女と出会い、そして別れました。お互い再び会える事を祈りましょう。」

硬い笑顔で別れを言いわたし、背後から追いつぐとする彼女の気配を引き離し、その場を去った。

人垣が割れた先にいたのはモイシャン・鈴両家族。

二人の父親は驚嘆の瞳を僕に向けていて、二人の夫人も驚きを表情に表していた。

それより印象的なのは、張り付いたような笑顔でいる二人の少女の存在。

彼女達の視線は僕の背後に向かっており、僕の勘違いでなければ先ほどの女性を見ているのだろう。

「ね、ねえ、リヨウ。今の女性、誰だかわかっているの？」

レンファの台詞に僕は無防備に振り返ると、彼女が烈火のような視線でこちらを見ているのが見えた。

夜叉もかくやという視線に僕が肩をすくめて見せると、ゆっくりとイブがこちらを向いた。

「夜叉のようなあの女性は誰なんだい？」

「・・・北米社交界で最も有名な女性。」

「それって君たちのことじゃないの？僕はそう聞いているけどね。」

「ある意味、私たちの上に行く人。男性は一目でみんな骨抜きにされて、女性は一目で彼女のことが嫌いになるの。」

それは有名だろうなあ、と感心してしまった。

「僕もあんまり好きなタイプじゃないなあ。」

ともなると、僕は女性的なのだろうか？

それを聞いて、イブもレンファも絶句していた。

「あ、あのさ、リヨウ。彼女に近づくと、ぞぞぞってこない？」

「ぜんぜん。」

「じゃあ、彼女に近づかれたとき、頭の中が真っ白にならなかった？」

「全く。」

傍で聞いていた二組の夫婦は思わず感嘆の声を上げた。

なんでも、パーティー会場に限らず、彼女が歩く先には餓えた男の人垣が出来、彼女がその気になればどんな男であろうとも彼女に従ったとか。

政府官僚すら彼女のいのままで、今回のパーティーもその人脈を使っけて入り込んだらしい。

気の利いた人間なら絶対に近づかないという人間なのだが、無防備に僕が近づいてしまったのを見て関係者の誰もが臍を冷やしたという。

「ぞつとくるわけ、無いじゃない、彼女の意識誘導って未熟だもの。自分の容姿を中心にした不確実性の高い自己流だから、不発も多いんじゃないのかな？」

言われて二人の美少女は顔色をかえた。

改めて彼女たちが受講している分野の知識をもって周囲を見た途端、府に落ちたという表情になった。

「……意識誘導だったんだ……。」

呆然と呟くレンファ。

イブなど目をまん丸にしている。

「……で、でも、なんで。彼女結構な使い手だわ。」

僕からしてみれば、イブやレンファを越える使い手ではない。

「アマンダ研究所のお姉さま方に比べれば、お遊びみたいなものさ。」

「何せ僕らのチームは、学園内で最も危険な催眠意識誘導研究組織と友好があり、彼女たちの度重なる魔手を退けるために、自らの意識下へ対意識誘導プロセスを仕込んでいるのだ。」

そんなめんどくさい事を始めたのも、調整休暇での被害に基づくものであり、ルーキー以外の男子学園生徒の間でも使用者が拡大しつつある。

拡大しつつあるが、免疫性の無い人には禁止している「対意識誘導防壁」。

実は結構精神的な負荷が大きい。

あまりそれに頼ると、意識のギアが低いところで固定されてしまい「鬱」状態となる恐れがあるので多様は禁物だ。

とつとつと僕が語るその内容を聞いて、二人の美少女は目を丸めた。

実は彼女たちにも内緒にしていた話。

「・・・最近、リヨウの感応が鈍いのはそう言う所為なの？」

「いやあ、ほら、君たちも最近バリバリ意識催眠誘導かけてくるから、それなりに防御しないと・・・ねえ？」

むう、とむくれかけた少女であったが、気を持ち直した。

「じゃ、この会場内の国連学生全員、彼女の意識誘導にはひっかからないの？」

「そうだね、マツクの意識誘導防御が一番出来悪いけど、彼女程度では落とせないよ。」

につこり微笑んだ僕を、意地悪そうに見つめるイブとレンファ。こういう表情をするときの彼女たちってば、とっても怖いんだよねえ。

パーティーが終わる頃までに、この程参加していた国連学生男子全員が某女性に面会し、そして談笑のあと離れていったという。

誰も再度彼女に話し掛けることが無かった事に絶望した彼女は、

今までの名声も名前も捨てて修道院に入ったとか。
さぞや主も扱いに困るシスターが生まれる事だろう。

馬鹿なことをやっている傍ら、会場を回っている僕。

ぎとぎと親父と談笑は避けたいなーと思っていると、いくばくかの集団の中で、ちょっと浮いている空間を発見。僕はそこに身を寄せた。

「やあやあ、洋行さん。」

くいつと肩を掴むと、彼はビクリと体をふるわせた。

「なんだ、リヨウか。」

ほう、と息を吐いた洋行さん。その陰に隠れるようにしている初老の男女が居る事に気付いた僕は深々とお辞儀をする。

するとその男女も恐縮した風にお辞儀した。

「紹介するよ、俺の両親。」

照れくさそうにしている洋行さんの横で、男女は恐縮しきった様子でぺこぺことお辞儀を繰り返す。

「ご両親、そんなに頭を下げないでください。洋行さんには学園内でとてもお世話になっているんです。目下の、息子ほどの子供なんですから、気楽に話してやってください。」

につこり微笑んで2人に握手すると、緊張しきった様子であったのがほううつと抜けたようだった。

立食パーティーでもちゃんと休憩用のテーブルが用意されていたので、あれやこれやとテーブルに持ち寄って、ご両親と洋行さんとで話を始めた。

「おえらい元帥のお友達が居るといふから、どんな人かと思っていたが、ほんにいい人でよかったなあ。」「ああ、ほんによかったあ。」

「おかあ、おとう、おくに言葉まるだしだあ！」

「ええだよ、なあ、元帥さん。」「そうさあ、ここじゃあおくにも

くそもねえ。」

にこやかな笑みの2人を見て、僕はまるで囲炉裏を囲んでいるかのような気分になって、とても和んでしまった。

「そうですね。日本語どころか英語にだっておくに言葉があるんですから、気にしない方がいいですね。」

「ほんとなあ、元帥さん。」

「本当ですよ。英語を使う国には使う国特有の訛りがあるんです。だから気にしない方がいいんですよ。」

「なるほどなあ、さっすがは学園の学生さんだあ。」「おっとう、自分の息子もおんなじだあ。」

かっかつかと笑う二人を、恥ずかしそうに見ている洋行さんであったが、いつのまにか周囲に自分のチームが集まっている事に気付いた。

「ヨーコ、ご両親だって？紹介してくれよ。」

「J」がマツクがステイーブが、皆が洋行さんにひつついてゆく。

「あんれ、みなさんべっぴんさんばかりだなあ。」「男にべっぴんはないさあ。」

けたけたと笑うご両親の会話を通訳した僕の話の聞いて、チームは面白そうに笑っていた。真実に面白いと思えたのは、洋行さんも含めた全員が、本当に別嬪だったからに違いあるまい。

「よかったよう、勉強しかできねえいなかもんでも、こんなにお友達ができたんだなあ。」

「ああ、よかったよう、おとう。皆いい人見たいだなあ。」

純朴な笑顔の両親の前で、はにかむ洋行さんを見て、僕まで嬉しく思えてしまっていた。

油つけたつぶりの立食パーティーの後に行われたパーティーは、学園学生とその家族参加のこじんまりとしたものだった。

当然アメリカ力組に加え、洋行さんのご両親も出席したのだが、自

己紹介の席で僕は度肝を抜かれた。

洋行さんも目が点になっていた。

「はじめまして、私は洋行の父、重三郎と申します。星のめぐり合わせか地の導きか、このような席にお招きいただき、大変光栄に思っております。息子共々、これからよろしくお願いいたします。」

とても低く格好の良い声が響き、思わず眩暈を感じるような言い回しだ。

「はじめまして、洋行の母、フサと申します。主人共々旅館経営にいそしむ日々、このような晴れがましい席に及びいただけた事を、まことに嬉しく思っております。出来ましたら、この出会いをよりいっそうの喜びに換えられることをと神に祈り止みません。」

落ち着き払った淑女の弁に、僕と洋行さんの視線は泳いでしまっていた。

二人の挨拶の後、弁の立つ將軍や、モイシヤン・鈴両親をも喝采の拍手をしている。

言葉の内容もまとまっているが、その語調、表情などは、そのまま選挙にも使えるような好感に満ちたもので、先ほどのおくに言葉を連想も出来なかった。

音もなく指を痙攣させて洋行さんに『どういうこつた?』とモールズを送ると、彼も『わからん、わからん』を繰り返すばかりであった。

歓談を始めた周囲から人が立ち、洋行さんの両親を取り囲むと、2人とも流暢な言葉で応答を始めている。

時々ウィットに富んだジョークなどを交えている姿は、社交に長けた人たちに引けを取るものではない。

ちよつと考えていた僕の横でレンファがにこやかに言う。

「よくあることよ、話す言語によって人格が代わって言うのは。」
なんでも、英語やフランス語を始めて話す段階で、姿勢や言動の方向を教わったときに言語の性格が決まるそうだ。

多分ご両親は、とても古風な英語の使い回しを真剣に習ったのだ

ろうというのがレンファの予想だ。

「リヨウの英語も、とても古式ゆかしい言い回しだから、そのへんで教授陣の受けもいいらしいわよ？」

会話の基礎を叩き込んでくれたパットさんに感謝感謝。

そのパットさんは、楽しそうに洋行さんのご両親と話している。

彼女の話し方は、確かに僕も「自分と似ている」と思えるものだった。

「言葉の喋り方も、世界への見識も彼女が先生だね。感謝しても感謝しきれないよ。」

「・・・初恋の人かしら？」

「そのへんは秘密、だよ。」

にこやかに微笑んで、手元の料理を口にしようとした僕のほっぺたが引つ張られる。

いつもの笑顔であつたはずのレンファは、ちょっと頬を膨らませて僕のほっぺたを引つ張ってる。

「な、なにかにや？」

「やっぱり、リヨウって年上好きなのね。」

彼女の本気は目を見れば判る。

最近レンファのアイスビューティー然とした所が崩壊してきている気がするのはいけいだろうか？

まあ、それはそれで可愛いからいいんだけども。

眉を緩めた僕の苦笑で、何かを感じた彼女は頬から手を話す。

僕はゆっくりと耳元に口を寄せて囁いた。

「やっぱりさ、男の子っていうのは母親の影を追うものなんだよ。」

はっと彼女の顔色が変わる。

内緒だよ、と囁いて僕は席を立った。

（やっぱ、卑怯だったかなあ。）

そう思つて振り返ると、いつのまにかレンファはその席に居らず、僕の横に立っていた。

「あら？」

「・・・卑怯者。」

笑顔の彼女は多くの頬を引っ張る。

「でも、許してあげる。」

ぱつと離すと、その手を僕の腕にからめた。

魅惑の肉体を、これでもかと引っ付けてくるもので、僕はどきまぎとしてしまう。

「・・・両親も見ているのに、ちょっと大胆過ぎないかい？」

「パパもママも、・・・ほら、GOサインで応援してくれてるじゃない。」

どういう親だか、鈴夫妻は親指を立ててグツと下に向けて下げた。瞳は「狩れ！」とか言ってるし。

両親不在天涯孤独の若造に娘をけしかける親って、どんなもんよ？横ではモイシャン夫妻とイブが悔しそうに歯噛みしている。

なんでイブはこっちに来ないのかな？ と思っていると、その疑問をレンファが解消してくれた。

「イブとジャンケンして、勝ったほうが今日のリヨウを独り占めできるって事になってるのよ。 もちろん、間違いはお互いに起こさないって約束でね。」

何と言つか、恐ろしい女の子達だと思う。

その後押しをする親も親だな。

「・・・もちろん、リヨウがその気になったら話は別よ。」

肉食巨獣の色合いで僕を見る目、背筋が寒くなるのと同時に死への甘美な誘惑を感じないでもない。これは男性特有の感覚ではないかなあと感じたり感じなかったり。

「ま、フェアにいいこうよ。・・・僕はもう少しだけ時間が必要なんだ。」

きょんとした顔のレンファに僕は囁くように呟いた。

「あと二年もすれば元帥の役職から一般学生立場からも外れる。そのときに僕がこの学園に入った本当の目的を嫌でもわかと思うから。・・・そのときまで君達は待っていてくれるかな？」

僕の腕を彼女はぎゅっと抱きしめた。

その笑顔で答えを知った僕は、何となく気恥ずかしい思いで一杯になった。

しかし、モイシャン一家の炎のような視線は忘れやしない。

その視線だけで、世界を焼け野原に出来るような威力を僕は感じていた。

アメリカ国内での行事はこのパーティーで最後なのかと思いきや、けっかつちんのスケジュールがやってきた。

UN士官学校の卒業式への列席であった。

「いまだ、学園を卒業もしていない阿呆学生を来賓に呼んでどうしようって言うんですか」

「少なくとも、卒業士官の第一希望トップが元帥府所属なのですから、顔ぐらいはお見せしないと罰が当たりますわ。」と、クラウド・エアさんの弁。

がつくりうな垂れる僕の両脇に、二人の美少女が立つ。

「付き合ってあげる。」

イブとレンファは、まるで囚人を連行するかのように僕の両脇に立ち、ずるずるとひきずっていった。

残りのメンバーはニューヨーク見物とか。

あの人数で国連学生がNY見物って、パニックを演出しに行ったのだろうか？

気が知れない。

彼らは昨年の東京見物での騒動を忘れたらしい。

UN仕官宿舎に泊まる事になった僕たちは、その豪華さに目をむいた。

一流ホテルと遜色の無い室内に思わず身を引く。

いや、一流ホテルというものにも泊まった事無いけど。

ビジネスホテルの三部屋分はあるかという部屋を見回して感嘆の息を漏らしていたが、どうやら同規模の部屋が後二つくっついているとか。

そんなに部屋があつてどうするのかと思いきや、将官とその随行武官の部屋と応接室だそうだ。

なるほど、無駄に広いわけではないらしい。

宿舎の担当管は、自らの感動を何度も何度も繰り返しながら、僕とクラウディアさんのを部屋に案内する。

「ちよつちよつと！　じゃ、クラウディアさんリョウは同じ部屋だつて言うの！？」

目を三角にしたイブが、担当官に詰め寄る。

「当然、元帥と随行武官殿は同室です。」

何の疑問も無い答えに、血の赤の瞳をたたえた視線が僕を襲う。

「ま、まっつて、まっつてくれ。随行武官の部屋は、どちらかといえば部屋が繋がつてゐる別の部屋なんだよ、ドアで繋がつてゐるだけで、倫理に反する行為は絶対にしない、ほんと！」

とはいえ、いつも学園でも僕の着替え中だろうとなんだだろうとかまわすクラウディアさんは現れるわけだけど、そのへんは言わないほうが良いだろう。

「では、武官殿はこちらの部屋に、元帥閣下はこちらに。」

そう言つて通された部屋で、思わず感嘆していたわけだ。

「元帥、お茶でもお入れしましょう。」

そういつて担当官が備え付けの茶器で紅茶を入れてくれる。

暖かで芳醇な香りの紅茶を見て微笑んだ。

「いつから先行潜入しているんですか？　ミスズ曹長」

担当官はにやりと微笑み、一礼をする。

「御慧眼、恐れ入ります。」と。

あてずっぽうというわけじゃないけど、なんとなくそんな予感がしていたのでいつてみたただけなのだが、まーなんというか、期待を

裏切らない展開だ。

先ほどとは違い、まるで仮面のような顔で彼女は言う。

「・・・何処でお気づきに？ 聊かの不自然さもなかつたと自負しておりますが。」

先ほど感じた違和感を、口に出してみた。

「さっきの勢いでイブに絡まれて、一步も引かなかったのは不自然だったかな？」

「なるほど、参考になりました。」

そういつて彼女は音も無く瞬間的に消えた。

無論本当に消えたわけではない。

僕の錯角の方向に高速で移動したのだ。

つまり今彼女のいる方向は・・・

ぐつと椅子に座ったまま後ろを振り返ると、顔を真っ赤にした担当官がドアから出ようとしていた。

「・・・今度からは気付かないフリをしてください。」
了解。

一晩ゆつくりとしたかったけれども、そうそう休ませてくれる予定ではなかった。

ざつと身づくろいをしたところでクラウドディアさんからの呼び出しがかかった。

無論、これは初めから準備されていた公務。

開いたドアでは、さつと敬礼する姿を見ればわかるとおりの「軍人さん」モード。

僕も練習していたように軽く敬礼をしてそれを受ける。

「2300、晩餐会への参列へ同行いたします。」

「同行を許可します。」

あたかも自然に歩いているようで、歩幅やリズム全てに規定があり、地位が上がれば上がるほどそれを強要されている。

それが軍というものなのだそうだ。

歩き方や敬礼と言うこの練習と言う時間が毎日とられていて、全くをもって参った。

歩きつづけて十数分、会場の入り口にやってくると、四人の衛視が待ち構える。

陸軍空軍海軍の各隊と元帥府から一名が敬礼をしている。

「ご苦労様です。」

一声をかけて進み行くと、内側からドアが開いた。

内側にも四人の衛視がいて、敬礼している。

こんな事をさせるために研究職の皆様を呼んだわけではないのだが、彼らも面白いとばかりに参加しているらしい。

クラウディアさんから聞いただけなので、事の詳細はあとで確認しよう。

開かれた会場は既に開会されていた。

見渡す限りの会場に、士官候補生たちが着席している。

みな僕よりも年上のはずなのに、目下の僕がこんな偉そうでいいのだろうか？

疑問は感じたが考えないようにして中央を進むと、自然に周囲から拍手が沸き起こった。

なんでかなあ、という疑問もあるが、これも端っこに置く。

クラウディアさんとともに会场上座の席に着席すると、当施設の最高責任者が起立をした。

「さて、諸君。君たちがこの程無事卒業するにあたり、この会を盛り上げる人物を紹介しよう。君たちを含めた人事を直接操作してくれた国連三軍最高責任者だ。」

ぱっと広げた士官学校校長は、僕に向かって手を差し伸べた。

あわせてゆつくりと立ち上がると、自然にわきあがる拍手が会場を席巻する。

その拍手が収まるのを待って、校長は言葉を続けた。

「・・・以前、国連陸軍主計局参事官であった私を、この士官学校に前準備もなく移動させた暴挙は、聊か常軌を逸するものがあると

かたくなに信じていた。」

僕は心の中で冷や汗をかいた。

やっぱり不満に思っている人間がいらないなんてうそだよなあ、と。「国連軍を動かせる人間は、中核にいるべき人間は私しかないはずなのだ」と盲信していた。」

んー、たしかにこの人の事務能力は凄いものがあるって言う定評があった。

だから奇を狙い人事的な閑職とも言える士官学校の校長なんかにしたのだけれども、その本人に会う事になるとは思ってもいなかった。

やっぱり不満だよなあ。

握った拳が震えてるし。

「・・・しかし！」

どん、と力強く拳がテーブルに叩きつけられる。

「私は間違っていた、間違っていたのだ。」

熱く、熱く涙を流す校長は肩を震わせていた。

あたかも青春学園ドラマの先生のように！

「誰よりも軍を愛する私は、いま、この場にいることを心から感謝をする。」

ぱつと差し伸べられた右手は、無理やりに僕の右手を握っていた。「彼らの卒業を、彼らという素晴らしい原石に会わせて頂いたことを、心から感謝させていただきます！！」

ぶんぶんとシェイクハンドを繰り返す校長は夢を見るような表情で東陶と語りつづけた。

僕はというと、熱にうなされてういるときに見る悪夢を見ているかのような気分。

「・・・ああ、私にかけていたものがここにあり、彼らが求めるものを私が与える事が出来たのです。彼らは未熟だ、そして私も未熟だったのです。それを知る事が出来たのは、全てあなたのおかげです！！」

声を震わせて叫ぶように感謝を声にする校長を見て、規律と自制を旨とする士官候補生たちはどんな風に見ているかと思いきや、誰もが熱い涙を流しているのが見えた。

見渡す限り全員が！

・・・なんだなんだ、この性質の悪い宗教集団のような目は？選挙集会のような居心地の悪さは！！

そ、そこそこ、クラウドディアさん、うるうるどこっちを見ないよーに！

あ、あねさんも瞳をうるませて敬礼なんかするな！

モヒカンさん、あんたもぼろぼろ泣くなー！

あー、もう、俺をそんな目で見ないでくれ！

「イズミ元帥、我が子達をよろしくお願いしますー！」
がつつりと抱擁を決める校長の腕の中で、もうどうにでもしてくれと投げやりになっていた。

糸の切れたマリオネットのようになった僕は、機械的な動作で食事を終えて控え室へと移動した。

なんでも士官学校恒例のダンスパーティーがあるとかで、来客は強制参加だそうだ。

で、強制は良いんだけど、なぜか大量の奇妙な衣装の山が用意されていた。

「なんですか、このテレビ局の衣裳部屋みたいなのは。」

思わずクラウドディアさんに聞くと、彼女は苦笑を浮かべていた。

彼女の話では、例年来客としてくる三軍將軍たちが参加する際、この中の衣装から任意に選んで仮装するそうだ。

参加する士官候補生たちも思い思いの仮装をしているそうだという。

「J」空軍將軍は昨年マリリンモンローの仮装をして、好評を博したとか。

どこからか送風機を持ち込んで、スカート巻上げまで敢行し、大

ヒーローだとか。

趙陸軍將軍とシン海軍將軍は、氣恥ずかしさのために受けを取れなかった事を今を持って悔やんでいるとか。

とはいえ、僕がここで頑張っても意味が無い事なので、目下の衣装を検討。

やはり、白黒ネズミか？

いやいや、クラウディアさんを巻き込んでデユオな仮装も・・・。

・・・南洋の小美人はマニアックすぎるな。
しばらく夢想している僕を、背後から僕を取り押さえる人が多数。
何処から現れたか学園のチームのこ一行様。

「リヨウにはリヨウの仮装があるじゃない！」

そう言ってレンファが取り出したとランクケースは、ヒサナが研究室のロゴ入り。

「今回はばれてもいいから、人工声帯無しね。」

「ま、まで、まちなさいってば！ 流石にここではそんな格好はしたくないってばー！」

皆を跳ね除けようとする僕を、ミスズ軍曹が現れて制止する。

「元帥、この仮装パーティーには軍内不穏分子のいぶりだしの意味があります。頭部はお守りしますので、ヒサナガスーツで体の防弾を・・・。」

真剣なその表情に、僕は負けた。

彼女の口元が微妙につりあがっていたのは見なかった事にしようと思うことにした。

ばれる事が前提なのでウイグをつけず、化粧と仮装だけにした。

一応、短髪のままだとばれすぎるので、ちよつとだけ着け毛をしたけど。

小道具のかんざしを適当に挿して、七五三に着るような晴れ着を一気に袖に通す。

・・・が、ヒサナガスーツでは胸が大きすぎる。

しょうがなくタオルを総動員して形を整えた。

「ねー、リヨウ。草履が無いけどどうする？」

「いいよ、着物で足元隠すし。」

「ねー、着物なのに下着着てていいの？」

「あー、最近はいいの、最近はつけててもいいの。」

三人がかりで仕上げた着物は、本格的な和服でないものを本気で着たものになった。

ちぐはぐな仮装でも古式に則ってできれば、聊か羽目を外した格好になるが、ちゃんと和装になるものなのだ。

あとは、ちょこつと化粧と紅さしだけ。

「でーきたー！」

イブとレンファは出来上がりに喜んでいたが、僕自身は暗澹たる思いだ。

しかしながら、仮装衣装に防弾性は無いらしいし、ミスズ軍曹というプロの意見もあるのでいたしかたあるまい。

一応、学園内の試験では、対戦車ミサイルを直接叩き込んでも衝撃伝導率0だったものな！。

きゅつと姿勢を伸ばして正面を見据えた。

「じゃ、いきますか・・・。」

静々と歩みを進めつつ、会場へ続く通路を覗き込むと、そこはサバトであった。

魔女がいたヘラクレスがいた熊がいて猫がいた。

アメリカンコミックヒーローは言うに及ばず日本で見慣れたコミックキャラクターや、ウエスタンヒーローたちが嬌声を上げている男だったり女だったりどちらかわからなかったりと言うありさまで、続々と会場に正体不明な連中が流れ込んできていた。

例年、この人の流れの中に乗って来賓が入場していると言うので、僕も列の端っから参加した。

みんな軍人歩きなのですり足だと苦勞するなあ、とか思っている
と横にいたハンプティードンプティーが口笛を吹いた。

「ひゅう、こいつぁー驚いた！　すげー美人がいるじゃねーか！！」
ニヤニヤ笑いの猫が、その顔に驚きを浮かべる。

とんがり鼻の魔女（の格好をした身長2メートルの男）がなにやら叫び声を上げている。

「あ、あのさ、きみ、だれ？」

金髪のコミックヒーローが僕に覗き込んだ。

声を出してはばれるなあ、ばれるのはもう少し逃げたいなあとおもったので、困ったように微笑むと周囲はわっと声を上げた。

「うひゃー、かわいいー！」

「おいおい、こんな日系の女子っていたかよ！？」

「まてまて、和服なんて仮装で手配したなんて・・・」

整然と歩いていたはずの列が乱れたのを見て、歩哨の兵が声を上げる。

「総員、整然と歩け！！」

瞬間、今までの騒ぎが嘘のように消え、先ほどのように整然と兵隊歩き。

半ば安堵の息を漏らす僕を見た歩哨の兵は微笑んでいた。

モヒカンさんの顔で。

助かったよ、モヒカンさん。

でも、涙の跡は拭いておこうね。

全員が会場内に入ったところで始まった仮装パーティーは、大まかに分けて三つのグループに分かれている。

陸海空ではなく、女性・男性・異性・異性に仮装しているの三つ。

僕はと言うと、男性グループと異性に仮装しているグループの間に立っていたのだが、どうも両方から声をかけられて困る。

ダンスとかそういうものには向かない服装なので、壁の花として立っていればいいかと思っていたのに、思いのほか煩わしく会話をしてくる人間が多い。

やれ参謀本部への配属が決まって人生が約束されているとか、広

報関係でアパレル関係ともリンクが取れるとか、出身がどこかとか。

何処の隊の人間かとか配属はどこかとか言う質問は何度されたかわからないが、全て困ったように微笑んで切り抜ける。

こっちからはしゃべらないのだから、相手も諦めるかと思いきや、なぜか鼻高々と自分自慢を始める始末。

なにを思っただけの学歴や成績の話をしているのだらうと、思わず疑問を感じてしまう。

今までした事なんて関係ないのじゃないだろうか？

これからなにをするか、全てはそこにあるのだらう。

信用や実績はいつも付いて回るし、それ自体は軽いものじゃないけど、そればかり口にするのはどうかと思う。

まいったなあ、と思っただけで、津波のように人の波が押し寄せてきた。

境界線を割って現れた女性グループであった。

あれよあれよと言う間にらちられてしまい、女性グループのエリアまで連れ去られてしまった。

まいったなー、と思っただけで、このグループの首魁と思われるキャットピープルがにやりと微笑んだ。

「・・・イズミ元帥でいらつしやりますね？」

あちゃ、ばれちゃったよ。

思わず顔を顰めて片手で右半分の顔を隠すと、キャーとかわーとか言う嬌声とウソーとか凄いと叫ぶ声が上がった。

「ほ、ほんとうに、イズミ元帥閣下でいらつしやるのですか？」

驚きを隠せない顔でキャットピープルが言うので、僕の素顔的な苦笑で頷いた。

ほう、とため息を漏らした彼女は、ぎゅっと僕を抱きしめた。

ずるい！とかいう声と共に、わらわらと女性士官候補生が群がる。

「・・・あー、あんまり言うことは避けて欲しいなーと・・・。」
呟くように僕が言うと、キャットピープルににらまれてしまった。

「駄目です、駄目です、しゃべっちゃ駄目です！」

あー、なんだかなあ。

思わず僕は絶望的な思いで上を見上げてしまった。

代わりばんこの抱擁が済むと、いつの間にか女性グループの最深处に引つ張り込まれていた。

飲み物や食べ物や皆が持つてきてくれるので楽だが、全員の視線がぎらぎらとこちらを見ているのが怖かった。

「えーっと、こういうのって、招待客の正体が割れたところで開放してもらえると聞いているんですが……。」

「駄目です、しゃべっちゃ駄目です！」

ツインテールマーメイドがおいたおした子供をしかるように指を立てる。

何でしゃべっちゃだめかなあ、そう思っただけで声色を変えてみた。

最近では人口声帯を使っているので使わないけど、一時期これで実入りを支えていたのだ。

「ねえ、なんでしゃべっちゃいけませんの？」

ちょっと低い女性っぽい声でそう聞くと、ツインテールマーメイドは目を見開いた。

「ま、そう言う声ならいいですよ。」

にこやかなマーメイドは僕の横に座った。

「確かに例年なら、正体が割れた時点でご退場いただいています。」

各軍の将軍がいては、いくら無礼講でも盛り上がりには欠けるからだ。

さらにいえば、軍上層部の馬鹿な格好を着て乾杯し、その後は学生だけで盛り上がるというのも通例で。

「ならなんで僕は退場できないの？」

「良いじゃないですか、同年代の最高責任者なんて稀有の経験ですもの。私たちもこの無礼講をもっと楽しみたいんですよ。」

まーいいけど、と手渡された水に口をつけると……。

「ぐ……これ、ウォッカじゃありませんか？」

「ええ、これ幸いと元帥を酔いつぶしてしまおうかと思ひまして。」
にやりと微笑む女海賊。

「それでは、その挑戦お受けいたしましょう。」
にこやかに微笑む僕に、周囲がビールジョッキを運び始めた。

死ぬ寸前と言うものが存在する。

まさにろうそくの炎が燃え尽きる寸前に燃え上がるような。

ここ2時間ほどの記憶が無いのだけれども、意識を取り戻してみれば、一人中庭のベンチで日本酒を傾けていた。

いや、一人と言うわけではない。

ゲロまみれのバットマンや半裸のアマゾネス、60年代の宇宙飛行士に悪魔の格好の女の子。

さてさて、勝ったかまけたか？

「正気にお戻りですか？」

背後で聞こえるのはクラウドさんの声。

「ん、あ、うん。なんとか・・・意識が戻りました。」

ほう、と安心したかのようなため息が聞こえた。

「今夜の御乱行、伝説となるでしょう・・・。」

「で、でんせつ？ 御乱行？」

振り向くとそこには、いつもとは違った、とても可愛らしくメイクされたクラウドディアさんがいた。

「あれ、メイクイメージ変わりましたね？」

「これは元帥がなさったんです。」

え？ と思考を引っ掻き回すが記憶に出てこない。

不意に感じた気配に振り返ると、そこにはミスズ軍曹が。

しかし、このメイクは・・・。

「おばんでやす。」

極めてドスの聞いた声でミスズ軍曹はにこりともせずにはいた。

「あの、ミスズ軍曹？」

「おばんでやす。」

助けを求めるようにクラウディアを見ると、彼女も沈痛に眉を寄せていた。

「・・・彼女は、自らの正体を明かそうとする元帥を押えたまではいいのですが、そのかわりに元帥から花魁のようなメイクとウィグを強要され、さらに・・・」

涙を拭うクラウディアさんを見たあと、再びミスズ軍曹を見ると・

・

「おばんでやす。」

「ごめんなさい、もう深酒はいたしません。」

最後に收容された士官候補生は一時間も寝ていないであろうはずなのに、僕らが出立する朝食の席には全員がぱりつとした格好で臨んでいた。

無駄なく、機敏なその姿に感嘆の息を漏らすと、校長は満足そうに頷く。

「遊ぶときには死力を尽くし、仕事にも全力で臨む。これが実践できてこそ国連軍士官です。」

必死でにこやかな笑顔をうかがて頷くと、校長は満足そうに再び頷く。

「ときに元帥閣下は、どのような仮装をなさったのですか？」

公式には僕の仮装はばれていない事になっているが、女性士官の大半にはばれてしまっている。

視界の範囲の女性士官が肩を震わせているのは、なにも二日酔いが原因と言っただけではあるまい。

「あー、言わないと駄目ですか？」

「そうですね、毎年ばれていますので、出来れば教えていただければ嬉しいのですがね。」

僕が耳打ちをすると、愕然とした表情になった校長。

「で、では・・・あの、『中庭の沈黙の女神』が・・・。」

沈黙の女神？ んでしよう？

思わず小首を傾げる僕の耳元にクラウディアさんが囁く。

「会場から抜け出して、お一人で中庭でんでいる所、数々の男女が飲み勝負を仕掛けてきましたが返り討ちになさったのです。」

誰が、といえば僕なんだろうなあ。

唯一の僥倖は、僕自身が一言もしゃべっていない事。

「そ、そうですかあ、素晴らしい仮装でした、感動しました。」

「感動しなくても良いです。」

「いいえ、語り草になるでしょう。」

「語るなつて。」

思わずさくつと突っ込みを入れる僕だった。

ピンシャンとしたイブとレンファに引き立てられ、JFK空港に着いた僕らに合流したチームもなぜか寝不足の風であった。

理由は問うまい。

男というのは色々とあるのだよ、そんな顔で僕らは微笑みあった。

UNの航空機に乗った僕達であったが、その機体には僕達以外の乗客が乗っていることを知らされた。

泥酔状態のUN空軍少佐で、バカンスの途中、泥酔状態を理由に民間旅客機への搭乗を断られたために無理矢理同乗を押し通したそうだ。

さして狭いキャビンではないので、区分けを行ってキャビンを分けたのだが、その対応が気に入らなかったらしくアテンダントメンバーの軍曹達に当り散らしていた。

急場に設置した仕切りの為に、声もパーティーションに何かがつかる音も筒抜けで、最後には機長に会わせるだの、責任者出てこ

いだのと大騒ぎであった。

オートパイロットになったところで、『比翼の翼号』の機長は腕まくりでパーティーションの奥へ向かおうとしたが、僕はそれをさしとめた。

「元帥、何故です？」

ぼりぼりと頭を掻いた僕は、現在友軍機と交信している内容をキヤビンに流せばいいと言う。

「し、しかし、それはあまりにも・・・」

「精神安定上悪い、ですか？」

「はあ、はい。」

そっちの方が酔いが冷めるはずだと僕がいうと、周囲のチームを機長は見回した。

「彼らも国連学園の生徒ですよ。自らが置かれている状況を知っておいて損はありません。」

「わ、わかりました・・・。」

機内インターフォンでコックピットを呼び出した機長は、現在行われている通信の一部始終を機内放送し始めた。

『こちら「生贄の翼」、「ハウンド03」へ。敵機三時の方向より4、速度3・2。迎撃は不可能、至急回避されたし。』

『こちら「ハウンド03」、「生贄の翼号」へ。応えは否だ。最高の元帥閣下を見殺しにするぐらいなら、この身を盾にする所存だ。』

『「ハウンド03」、その心意気や良し！ 存分に死ぬ事を期待する！！』

ば、ばかな！ 僕は全力でインタフォンを筆取り、叫ぶように言う。

「こちら馬鹿なUN空軍の総大将、略して『空の馬鹿大将』のイズミ元帥！ 死ぬな、なんとしてでも死ぬんじゃない！！ マッハ3・2の敵といえは地対空ミサイルだろ？ 皆でよければ素通りだ！」「ひゅー、いいねえ、さすがはおれっちらの総大将だ。・・・「ハウンド03」了解。』

『・・・「生贄の翼」了解。』

がちやりとインタフォンを戻した僕は、機長を睨む。

「・・・我々には元帥をお守りする義務がございます。」

「誰かが死んだあとで残されても、全然嬉しくない。全員で生き残れるプラン以外は却下だ！」

だが、知っている。

いや、この段階で理解できている。

この旅行が終わったあとに何人もの殉死者のリストを見る事になるだろう事は。

今通信した相手が「ハウンド03」である事を、ハウンドリーダーでない事を考えれば、おのずと知れるというものだ。

しかし、今はそのことを言及する時間ではない。

「・・・解りました。」

苦々しい表情かと思いきや、機長の表情は晴れやかなものだった。『あと十五秒で当機は急上昇いたします。安全姿勢をおとりください。』

急いで全員がシートにつくと、瞬時に機体は「下降」した！

まっさかさまに落ちるかのような下降をした後、機体は再び急上昇、ミキサーのような期待操作のあとで、やっと機体は安定飛行に入った。

目を白黒させている僕たちの前に、再び機長が現れてにこやかな握手を求めてきた。

「いやはや、無事ミサイルをやり過ぎ事が出来ました。」

ぶんぶんと握手を上下にして言葉を繋いだ。

「驚かれたかとは思いますが、事前に我々の情報が外部にリークされている事態がわかりまして、とつさに操作を変更いたしました。」それが正解でよかったと喜んでいる。

「アジアではそれを『敵を欺くには、まず味方から』といっていますよ。」

「それはいい事を聞いた。この程の説明会では引用させていただきます」

たいと思います。」

にこやかな笑みの機長と共に、不意に区切られたパーティーションの向こうが気になった。

ゆっくりと開けて見ると、一人の男が大の字になって倒れていた。頭部などに傷が多い事から、安全姿勢をとらないで居た事がうかがえる。

「どうします？ 機長。」

「無論、大切なお客様である事には代わりませんので、ちゃんと手当てさせていただきますよ。」

彼が指を鳴らすと、床からか現れた重装備の降下隊達が男を縛り上げ、手早く床下に戻っていった。

「いいんですか？ こんな事をして。」

「もちろんいいに決まっています。当機は現在暫定的な元帥府でもあります。そこで元帥閣下に不敬を働いたのですから、それなりの罰を受けていただきますと。」

「エアフォースワンかい。」

思わず僕は呆れた眩きをしてしまった。

ドイツ首都ベルリンにあるUN空港に降り立つと、滑走路半分は使ったかのような隊列が並んでおり、全員が敬礼をしていたりする。彼らの制服の色でそれがUN空軍のものである事がわかり、そしてタラップ正面で待ち受ける人間数名が妙な格好である事がわかった。

なんというか、顔は男性の歴戦のパイロット然としているのだが、体の方が脳みそをかきむしるような女性的な曲線で終始しているのだ。

奇妙な表情にならないように苦勞して敬礼を返すと、割れんばかりの拍手が周囲に響き、僕たちを怯ませた。

それでも無様ではないように、ゆっくりとタラップを降りて正面

の半ヨーロッパ地区の局長である大佐へ握手をした。

「オドワルド」ステイ大佐であります。皆さんを歓迎させていただきます。」

きつちりとした姿勢で差し出された握手を返すと、ずっと大佐がその場を引いた。

すると、先ほど見えた珍妙な体型の兵達が一列に並ぶ。

総数20名。

全員がパイロットヘルメットを抱えている。

「ハウンドチームであります。」

敬礼の男は、ハウンドリーダーのコードネームを持つ男であった。

「元帥のお言葉、胸に刻ませていただきました。」

彼の言葉と共に全員が敬礼すると、それにあわせて全員の魅惑的な乳房がゆれる。

くらりとする眩暈の中、ある事に気付いた。

「・・・ヒサナガスーツ？」

「はい、見た目は『あれ』ですが、効果は絶大です。撃墜された友軍機は十機ですが、誰も傷ついておりません。傷一つないのです。」

差し出された手を握手すると、そのまま抱きすくめられてしまった。

「我々のチーム全員が無事なもの、いち早く元帥がヒサナガスーツを試験導入していただいたお陰です。いつもはGスーツを上に着ておりますが、今日このひからこの姿で勤務させていただきたいともいます！」

いやあ、それはどうかと思うけどなあ・・・と口には出さずに、ハウンドチーム全員と僕は握手をした。

結局、戦線離脱はしていたが「ハウンド」チームは誰も死んでいないという事だった。

各テログループのセクトに入り込んでいる情報員もヒサナガスーツのハードタイプを着ているそうで、重傷を負うものはいても死亡

者はまだでていないとの事だった。

幾分気が楽になった僕だったが、一応確認する。

「重傷者は……。」

「既に回収され、日常生活に支障ないところまでの回復の可能性は99%です。」

クラウディアさんの報告に僕はほっと一息を付いた。

空港内を移動中に出した質問が、空港を出る頃には帰ってくるという反応性のよさは驚きに値する。この有能さ、驚嘆の武官殿といえるだろう。

そんななか、ドイツでの式典のついでにゲオルグの実家に寄ろうという話になった。

ゲオルグの実家に顔を出す寸前の事で、超ロングなリムジンの公用車での護衛に気後れを感じていたものの、こういうデータがすぐに取り寄せられるのは嬉しく思った。

郊外のある町、その一室がゲオルグの実家だという。

2LDK程度のアパートメントに両親と三人の兄弟が住んでいた。「ただいま」と声をかけるとともに、一人の弟と2人の妹がドアから飛び出してきた、ゲオルグにかじりつくように抱きついた。

「おかえり」とか「あいたかった」とか「おみあげ」とかなんとか、凄い勢いで挨拶していたかと思うと、不意に僕らのほうを見て目をぱちくりさせていた。

じっと見つめた後、ペいっとゲオルグを押しやる。

テクテクと歩いてきた三人の子供は、僕らの顔を見上げてからごしよごしよと耳打ちをしあった。

で、しばらくして、2人の少女は僕の両足にへばりつき、少年は黄にへばりついた。

そしてやおらにくちを開く。

「おにーちゃん、どっちが『元帥』?」

苦笑のゲオルグが僕を指差すと、2人の少女は大きく喜んだ。

「ヘイゼル、ベリータ、なんでわかったんだ？」

「だって、おにーちゃん、元帥さんっていい男なんでしょ？」

「一番格好いいひとだもの、この人が一番。」

僕らは大いに笑い声を上げていた。

リビングに通された僕らは、家具をとっぱらったカーペットの上でみんな胡座や正座をしていた。

極めて自然に座った僕らを見てご両親は驚いたようだったが、僕らとしては毎回のようには寮で車座になって飲んでいるので、実に違和感が無い。

最初のうちは抵抗のあった人間も、最近ではじかに座る方が楽だとか言い出している。

「そうですか、こんなにたくさんのお友達が出来ましたか。」

初老を既に越えている父親は、孫と言ってもおかしくない小さな息子を膝に抱いたまま、にこやかに微笑んでいる。

「どうです、今夜は皆で飲み明かしませんか？　という提案でしたが、ご辞退申し上げるしかなかった。この後も予定があり・・・。」
「といっているところで、外で待機していたクラウドディアさんが飛び込んできた。」

「ご歓談中、申し訳ありません。少々事態が急変しましたので。」

そう言った彼女は、窓から隠れるように銃を構え、手鏡で外を見せた。

小さな鏡の視界には、全世界的に共通な形容の出来る少年達が屯しており、こちらを伺っている。

国連学生という存在は、実にこんな存在を招きやすい。

そのための警備だったはずなのにと手元の端末を弄ってみたが、何の警告も発せられていなかった。

好意的解釈をすれば、彼らは全く驚異ではないので警告を発していないといえる訳であるが、本気でそんなことを考えるほどおめで

たい性格でもない。

伸るか反るかの判断をしようとしたところで、ゲオルグが申し訳なさそうに手を挙げた。

みんなの視線の中、彼はばつが悪そうに頬をかきながらいう。

「あのさ、あいつら、おれの、ダチなんだわ。」

僕らは皆、目が点になっていた

一つの通りを会場にしたパーティーは、老若男女人獣お構いなしで入り乱れるサバトのようだった。

老婦人と少年が踊り、ネコと犬と少女が酒を酌み交わす。

老人と少年と中年がセッションしているのをBGMに、町が踊っているかのようにだった。

何も考えずに僕らはそれに乗り、大いに楽しむ事となる。

「ハイ！ 楽しんでる、彼氏？」

地毛ではない金髪の少女がしなだれかかってきた。

僕はにこやかに微笑んで、おでこを弾く。

「髪の毛をそんなに苛めたら、可哀想だよ、彼女。」

「いいのよ、金髪の方が受けが良いんだから。」

僕は手ぐしで彼女の髪の毛を梳かしながら耳元で囁く。

「僕は、髪をこうやって撫で付けたときに、気持ち良い方が大好きだよ。君の思い人もそうだと思うね。」

すると少女は真っ赤になって、その場から走っていった。

ちよつとやりすぎたかなと思っていたところで、背中が思いっきり叩かれた。

咽こみながら振り向くと、思いっきりパンクな格好の少年達が僕を取り囲もうとしている。

一難去ってまた一難かと思っているところで、一人の男が僕の肩を抱いてきた。

凄いメイクで僕を睨みながら、顔を近づけて一言。

「エイミーに何を言った？」

ああ、彼女は彼らのアイドルなんだろうなあと僕だったが、こういう時に言わなくてもいいことをいってしまう癖は健在だ。

「・・・彼女、絶対地毛の方が似合うよ。そう思わないかい？」

じつとこちらのほうを見ているので、口は止まらなかった。

「僕は、無理に染めている髪の毛よりも、櫛どおりのいい滑らかな自然な髪の毛のほうがいいと思うんだ。だからそう彼女に言ったんだけど、君達はどう思う？」

じつと僕のほうを見ていた彼らは、顔を引き攣らせた後、噴出すように笑い出し、終いにはそこいらでゴロゴロと転がりながら笑っている。

一人、僕は彼らを呆然と見ていたが、立ち上がった彼らはにこやかに微笑んで、ポンポンと肩を叩いた。

「いや、俺やGが何度言っても聞きやしなかったが、おめーさんみたいないい男にいわれれば、あの金髪もやめるかもしれないねーな。」

何でも、さっきの彼女は今僕の肩を抱いている男の妹だそうで、兄としては出来るだけ真面目に生きて欲しいと願っているそうだ。

不良の兄貴は皆そう言うよな、とか思う僕だった。

「リヨウ、揉め事か？」

ふらりと現れたゲオルグを、パンクの男達は苦笑で迎えた。

「揉め事じゃねーよ、G。俺の妹を改心させちまいそうない男に感謝してたのさ。」

風きり音がするようなストレートを交し合ったゲオルグとパンク男は、互いの腕を組んだ。

「ま、エイミーも無茶してなきゃ可愛いからな。」

そう言ったゲオルグの前に、金髪の少女が現れる。

同じ少女であったが、先ほどの金属的な金髪ではなく、どちらかと言うと日に焼けた麦藁帽子を連想させるような、そんな髪の毛だった。

滴る水滴をいとう事なしに現れた少女は、ゲオルグの前に立った後、宣戦布告のように声をあげた。

「東洋人。お前、この髪の毛の色をどう思う？」

僕を呼んでいるが、彼女の視線はゲオルグに釘付けだ。
いくら鈍い僕でも彼女の思いは知れる。

だから僕は、ゆっくりと深呼吸して、そして彼女に言葉をつむぐ。
「風と太陽がよく似合う、麦わら色の優しい色だね。」

半身でこちらを向いた彼女は、顔を真っ赤にした。

体を細かく振るわせた彼女、目だけでこちらを見てまた口を開く。
「今は、今は濡れてるからこんなだけど、乾けば爆発したみたいになる。コントで真っ黒になったコメディアンみたいな髪形になっちゃう！ それでも自然が一番か？」

「多分、君は可愛すぎるんだよ。皆が君の気をひきたいから余計な事を言ってしまうんだね。君の髪の毛は全てに負けないライオンヘアだ、獅子の王女って名乗れば良いさ。」

じわじわと彼女の瞳に涙が浮かぶ。

プルプルと震える彼女は脱兎の如くにその場を去った。
歓声を上げるパンクたちの中で、ゲオルグは力無くため息をついた。

「あのなー、リョウ。どこでもそこでも粉かけてまわるなよなー」
何の事やら理解できずに肩をすくめると、ゲオルグは再びため息をついて見せた。

ゲオルグ君、彼女は君にこの台詞を言ってほしかったんだよ？

夜半まで続く路上パーティーに地元警察の目が届いたのは自然な成り行きだろう。

町一番の目抜き通りを占有してのパーティーだ、まず不法占拠だなんだと……。

そんな風に道路の入り口を見てみると、現れた警察官たちは手に食料や酒を持ち込んでいた。

パトカーで道路封鎖して、ぱいりんで誘導標識なんて出して、完全な公私混同。

「ひゃっはっはっはっ！ Gがかえってきたってえー?!」

赤ら顔の大男が、げおるぐを抱きしめる。

制服姿の警察官たちが彼をもみくちゃにする。

「てめーら、職務つてやつはどうしたんだよ!」

「ばかいうな、非番のやつらしか着ちやいねーよ!」

「そうさ、当直のやつら、くやしがつてるぜ!」

町中が彼の帰りを喜んでいる、人々がげおるぐのかえりを喜んでいる。

それを見て僕も、僕らもうれしくなっていた。

もう朝になろうかというところで、パーティーは解散した。

すでに予定移動時間が過ぎていたためだ。

この先の予定も長く、潜入人員も多いだろうからという配慮もある。

半ば泥酔状態の人々と別れを告げつつ、その街を離れようとした僕たちに、一通の電話が入った。

赤い元帥府直通電話にかけてきたその人は、今一番話したくない相手であった。

「・・・ドイツにきていてあたしに話もなしとはいい度胸じゃないかい?」

その闊達な日本語は聞き間違うこともない老婆。

「ぐってんねーさん・・・。」

実のところ、このたびに出てからこっち、彼女にだけは今回の旅行がばれないようにとの特丸つきで情報規制を組んでいたのだ。

なにせ、この老人、押しが強くてお金持ち、さらにはた迷惑な権力も持っているというのだからできるだけかわりたくない。

もちろん、幼いころから目をかけてもらってきた恩があるが、それにしても彼女の立場というか、権力というか・・・はた迷惑なのだ。

「その上、三軍情報部に情報規制をかけた上で姿を消すたあ、あた

しを嫌つてのことかい？」

「あのねえ、ぐってんねーさん。僕だつて誘拐同然でつれてこられて、軍務半分なんですよ？ 巻き込みたくなかつたんですよ。」

口からでまかせだ。

「ほほーう？ 北米とヨーロッパのカウンターテロをパニックに陥れ、アジア地域の華僑まで動員して世界大戦クラスの紛争を起こしている元帥さまの意見としては聞いてあげてもいいんだけどもねえ。」

全部ばれればだ、筒抜けになつてゐるに違いない。

たらりと冷や汗をかいたところで視線の先の少女たちも冷や汗をかいているのが見とれた。

・・・情報筒抜けの理由、発見。

「・・・でもね、一言もなしつてのは個人的にいただけないねえ。」

「はあ、でも、このあとの予定が押してしまつてえ。」

「わかつてるよ。このあとイギリス、フランス、イタリアのあとで、台湾・香港の予定だろ？」

完全にばれてしまつていた。

「香港の黄家のパーティーにお邪魔するから、そのつもりでいるんだよ。」

壮絶な笑みを浮かべていることがわかる声で、電話が切られた。

日々、毎日のような軍関係者の公式行事の合間の友人宅訪問や将軍宅訪問は心落ち着くものがあつた。

全ては先行して地均しをしてきている先行部隊のおかげだ。

とはいえ、疲労は重なるし、かなり気分もささくれ立ちそうになるが、そこは我慢だ。

あたかも駆け足のような世界一周は終盤に差し掛かつていた。

そのためか、ずうんと胃袋が重い。

イタリアを飛び去る際、一枚の手紙を受け取ったのが原因だった。全員分の（同行している研究職員や武官のクラウドディアさんの分

まで）招待状で、重々しいサインがかかれていた。

主に漢字で「祝 二年目」。

「これって嫌味かなあ」

「まあ、そんなところだろうな。」

イブと僕は顔を突き合わせてため息をつく。

が、ヨーロッパ組は驚きが渦巻いていた。

良家の子女である彼らは「グランマ」の名の意味を知り、その上で恐れているのだから。

「な、な、なんで、あの影女王の招待状なんて来るんだ？」

アフランシが眩暈を起こしてシートに座り込む。

見た目平然としているのはイブとレンファのみ。

真っ青な顔の男集は、なにやら喧喧囂囂と意見を交わす。

しばらく目が泳いでいたようであったが、同時につつつつと僕のほうへ視線が集まる。

何気なくその場から離れようとした黄の腕をつかみ、引きつった笑みを浮かべる僕。

ため息と共に視線を泳がせると、JJがこちらを見ていた。

ゆつくりを焦点をあわせると、JJはニツカリと微笑む。

「なに？」

「いやさ、リヨウにも肉親がいたんだなってね。」

「あのねえ、ちゃんと僕には祖母が居るよ。」

「ドイツの？」

「それは、ばーちゃんの友達。」

ふーんと言った顔のJJだったが、眉をひそめた。

「祖母の親友が、わざわざお祝い？」

「家庭事情が複雑なんだよ。小さい頃にドイツに行って一緒に暮らさないかって誘われたのを、無下に断ってるんだ。だからちよつと顔を立てておかないといけないの。」

JJの眉毛がぴくんと上がる。

「一緒につて、おまえ、リヨウ！」

「養子縁組つてなるとさ、イズミの家がなくなっちゃうんだよね・・。」

なにやら興奮していたJJは、急に、本当に急に勢いを無くした。

「そうか・・・。」

「そうなのだ。」

幾ばくかの無言のあと、JJは呟く。

「ま、おまえさんには親がいつぱいだな。」

そうだな、と笑う。

写真の中の両親、祖母、墨田のじっちゃん、ぐってんねーさん・・。いつぱいだ。

「しかし、グランマの養子になれば、合法的に世界が手に入るぞ。」

「世界が欲しいのかい？ JJ」

「・・・わからん。でも、凄い権力に魅力を感じない男はいないと思うぞ。」

「僕だって、世界は欲しいけど、手に入れるにはこの世界は狭すぎるんだ。」

「え？」

JJの問いに僕は苦笑で応じた。

ちよつと口が滑ってしまった。

恐ろしい事に、香港におけるパーティー会場は今までの比ではなかった。

国連海軍最大の船である白亜の城、重装甲空母「モービテック」の甲板において行われる事となったのだ。

モービテックの艦長と黄家は極めて深い関係にあり、黄の凱旋パーティー開催の話を聞いた途端、誘致してきたのだそうだ。

無論、黄の一番上の姉がモービテック艦長の夫人であることも関係しているかもしれないが。

黄家の長男のチームメンバー全員が集合する際に失礼が無いよう

にとメンバー表を渡された瞬間、艦長は極めて深い恐れと感動を味わったという。

彼は感じていた、公私混同はなほだしいパーティー開催を決めた自分を最上位の上司に知られてしまう恐れと、香港支局の一介の事務局員であつた自分を海軍最大の空母艦長にしてくれた元帥へ謁見できる感動を。

彼自身、艦長就任は黄家の力添えに違いないと本気で思っていたが、世界規模のUN軍で同様の大抜擢が行われている中で自分の人事などまだまだだと思わされていた。

たとえば、自分の広報事務の後釜など、強面の海兵であるという。見ただけで子供は泣き、ひと睨みで人が殺せるのではないかという迫力、そして違法駐車のを軽々と移動させてしまう怪力は、どうかんがえても事務員のものではない。

他人事ながらやきもきしていた彼であつたが、一ヶ月もしないうちに評判が一転した。

彼の妻の第一子出産以降である。

鬼瓦のような顔での笑顔などさも怖かろうと思うのだが、近所の子供達には好評でUN広報香港支局は託児所の様相を見せ始めたという。

朝な昼なに集まる子供達の中にはUN軍に入隊する事すら志す子供も多く、数年後の新兵には困らないであろう事疑いない状態だという。

しかし、元空母勤務海兵は言う。

「君たちが大人になる頃には戦争の無い世界を作りたいと思つてゐる。だから軍人以外の仕事でなりたいたいものは無いかね？」

学者を志すもの、警官になりたいというもの、医者を目指すもの色々と発言され、そして一人一人にどんな勉強が必要かを諭していったという。

その真摯さに近所の父兄も諸手を上げた。

今ではUN広報香港支局は近所の警察よりも信頼が高く、地域住

民の頼りにされているのだそうだ。

彼がいた頃とは大違いであるし、広報支局としての活動としてどうかと思うが、この評判こそ三軍元帥の意図したところであろう事と知れる。

空母内にしてもその人事変更は恐ろしいほどで、徹底しきつていた。

内勤のものに一ヶ月で飛行編隊を組ませるように訓練させたり、甲板クルーであった人間や医療スタッフであった人間を寄せ集めて揚陸部隊を編成したり。

陸軍から出向してきたもの空軍から飛ばされてきたもの、様々な人間でパッチワークになったこの職場はスタート時点で最悪であったが、一カ月後には最高になっていた。

新たな規範の制定、戦略構想の一新、旧悪癖の一掃、母港である香港で最悪と呼ばれた「モービテック」は、いま白亜の城と呼ばれるほどに変わった。

誰も今を悪くしたくて活動しているわけではない。

しかし、今までの因習というものからは自由になりにくい。

その全てを断ち切った人事改革は、恐ろしいまでの周到さで適材適所が行われ、一人一人の個性にマッチした配置が行われている。

これを一人の少年がわずかの時間で行政し、そして強制執行したとは思えなかった。

信じられなかったが、信じる事が出来た。

彼は電子メールで送らなかった感謝を、直接手渡せる喜びに震えていた。

無礼講の謳い文句で始められたパーティーは、極めて参加者を多く抱えていた。

空母の主要幹部や非番のものもとより香港経済界の重鎮、はては世界経済会に名をとどろかす人物ですら既に集まっているうえに、

その婦人や娘・息子などが集まっていたからだ。

「甲板から落ちるんじゃないか？」

ノナルコールのシャンパンを舐めながら僕が言うと、横では黄ではなくレンファが答えた。

「まあ、甲板のすぐ下にネットが張ってあるから大丈夫でしょ？」

「・・・落ちるのが前提条件なのかい。」

聞いた話では、警備関係者の内輪で「どのネットに一番初めの人間が落ちるか・性別は？」などなど細かな条件付けで賭けられているそうだ。

まー、好きにやって頂戴というのが僕の感想。

半分涙目でイブが料理を取り分けて戻ってくると、そのあとを数々の男性たちが追ってきた。

僕のところにイブが行き着くと、さも残念そうに去って行く。

「・・・酷い目に会ったわよ・・・。」

何でも、ひっきりなしに声をかけられていたそうで、明らかに無視しているというのにしつこいそうだ。

彼らも香港経済界に君臨する名家の子息、この機会を物にしようかと必死なのだ。

とはいえ、黄家とつながりの深い僕とは事を構えるつもりはなく、僕の傍まで来れば安心という事らしい。

「まあ、男衆もいろいろなめにあってるからなあ。」

僕の視線の先では、名家の子女達の輪に囲まれた我らがチームがよく見える。

口々に褒め称えられていたり、持ち上げられたりと忙しいようだ。

「いいわよ、男連中なんて。女の子に囲まれて嬉しいぐらいにしか思っていないんだから。」

確かに。

「しかし、活気に溢れているわ。」

男の子も女の子も目の色が違う。

恋愛や色事にうつつを抜かしているわけではなく、将来という展

望に立つた戦略の一端なのだ。

こと、中国系の子女に多く見受けられる姿勢ではないかと僕は思う。

少子化政策の中国において、一人の子供はいずれ一族を支える立場になる。

結婚はお互いの一族を共に背負う事であり、一族の礎になることに相違ない。

どんなに強く否定しようとも、それは現実として存在しているのだ。

それゆえに彼ら彼女らの視線は熱く、そして強い。
全てが戦いなのだと思わせる、そんな思いだ。

経済界の人々や著名人と会話している中、一人の男が僕の背後に立った。

会話に一呼吸おき、僕は振り向きざまに拳を放つ。
心臓の位置に間違いなく吸い込まれたが、彼の右手がそれを止める。

「ご挨拶じゃないか、りょーちゃん」

拳を引き、ぐるとまわしげり。

しかしそれも受けられてしまう。

一呼吸で三発ほど拳を繰り出すが、軽くないなされておしまい。

「・・・へ、鍛錬怠ってるな、りょーちゃん。」

むっとした顔だった僕は、諦めて笑顔を浮かべる。

「君が強くなりすぎだよ、龍平。」

がっちりと握手をした僕と龍平を見て、何かのアトラクションかと思った周囲が拍手を送った。

「・・・ところで、おまえの両脇の美人は誰だ？」

「学園で同じチームの仲間。イブⅡステラⅡモイシャン嬢と鈴Ⅱレ
ンファ嬢だよ。」

ずっと居住まいを直した龍平は、ざつくばらんな英語で挨拶。

「・・・始めまして、俺はここにいるリヨウの幼馴染にしてライバルの大崎「龍平」です。」

「ライバル、ですか？」

よそ行きの声でイブが問うと、龍平が鼻息を荒くする。

「そう、そうっすよ、もう、こいつは絶対男の敵！俺の初恋をギタギタにしたうえにセカンドラブも邪魔する酷い男なんです！」

「そいつは言いがかりだ、初恋はおまえの勘違いだし、セカンドはおまえのアタック次第だと何度も・・・。」

そんな言い訳を聞かない龍平はいつもの事。

「きさまー！じゃあ、これを見てなんと言い開く！」

そういつて龍平は懷から写真を一枚。

げげ、まだこいつもってたのか！

「ばか！よこせ！」

「あほ、これは貴様の悪行の証だ、渡せるか！！」

もみ合う僕たちの脇からレンファがそれを手に入れた。

「あ、み、みちゃだめ！！」

「どうぞどうぞ、見てやってください！」

羽交い絞めにされた僕を誰も助けてくれなかった。

随行して身の安全を図ってくれているはずのミスズ軍曹ですら、

レンファの肩口からその写真を覗きこんでいる。

「うっわー、かわいいー！」

そう叫んだのは集まっている女性陣。

イブにレンファにクラウディアさんにミスズ軍曹。

「ね、ねね、この写真の女の子、だれなの？」

ぴっとレンファの見せた写真には、おかっぱ頭でミニサイズのドレスを来た子供が一人。

それを見た参加客の皆さんも歓声を上げてる。

「そらみたことか、貴様の悪行を皆様が知る事になったぞ！」

鼻高々の龍平を叩き潰し、僕はずんずんと写真に歩み寄って破ろうと手にとる。

が、それよりも一瞬早く写真を奪った人がいた。

「おや、懐かしい写真じゃないか。」

意地の悪い笑顔のその人は、世界で最も恐れられる老女。

「ぐ、ぐってんねーさん。」

「なつかしーねー、リヨウちゃん。」

「な、なんのことやら・・・。」

だらだらと汗を流す僕を両脇で押えてからイブとレンファがにこやかに聞いた。

「ところで、グランマ。その写真の女の子って誰なんですか？」

にやりと微笑んだ彼女はこう言った。

「もちろん、リヨウちゃんだよ。」

凄惨な歓声が上がる中、僕はがっくりと崩れ落ちた。

事の始まりはたいしたことじゃなかった。

グッテンねーさんの御見上げのお菓子を食べ尽くした僕は、もう少し食べたいと思ったのだ。

で、そのことをりょうこさんに言うと、自然とお菓子が集まる方法を教えてくれた。

「・・・この格好をして、公園で微笑んでいるといい。自然にお菓子が集まるよ。」

「それがこの格好？」

立食パーティーのはずがいつの間にか僕を中心にした車座が出来ており、女性出席者を中心とした座談会の様相を呈してきた。

今でもあの写真が回覧されており、コピーを取ろうとする人間まですいたとか。

さすがに国連情報機密保持法があるので閲覧までとなったらしい。

「で、集まったの？」

まあ、確かに集まった。

キャンディーにクッキーにチョコにガム。

市販されているお菓子の殆どを網羅するレベルになって、いつの間にか怪しげな大人に誘拐されそうになっていた。

それを助けてくれたのが龍平だった。

「龍平くんって、リョウが初恋だったんだ。」

へえーと感心したレンファだったが、不意に眉毛を上げた。

「じゃ、セカンドラブを邪魔してると？」

僕と同じように車座の中心に据えられた龍平は、涙ながらに冒頭陳述。

「そう、あれは謎の美少女の正体が男だと知って打ちひしがれていた頃、あの天使に出会ったんだ！」

まあ、ざつくばらんに言えば、僕らの遊び友達の中でいつこしたの女の子。

そう言ったところでイブが指を鳴らした

「ああ、ちーちゃんね。」

龍平は幼い千鶴にひとめぼれして、何度も何度もアタックしているが、全くなびかない。

それどころか、世界で一番好きなのは「おにいちゃん」とか当時の賜っていた。

ゆえに、あいつは僕をライバルと標榜し、あるところで男を磨く修行をしている。

世界で最もハードボイルドなところである事を最近知った。

「こいつは、こいつは、友達だけどライバルなんですよ！」

相叫んだ彼の言を聞き、周囲は暖かい拍手に包まれる。

大衆を味方につける手管、何処で学んだのやら。

思わず僕は龍平を睨んだ。

「おまえ、まさかまだ僕にほれているんじゃないだろうなあ？」

「ば、馬鹿言うな！俺はノーマルだあ！」

真っ赤になった奴の顔を見て僕はちよつとだけ背筋が寒い思いであつた。

とはいえ、いまだ千鶴にほれているのは間違いないところで、い

まだ約束は続行中だ。

龍平が修行に出るといったあの日、懇願のようにされたあの約束。「自分が一人前になるまで、千鶴には手を出さないで欲しい」

あの約束がなくても手を出すつもりは無いけど、ね。

東側経済界の魔窟のようなパーティーは、いつの間にかほのぼのとしたアットホームなものになっていた。

全ては経済関連交渉を全面とした男性側の思惑よりも、奥方などを中心とした女性陣の思惑が全てを押えたからだろう。

遅まきながら現れたグッテンねーさんが、その方向性を良しとしている事にも原因があるだろう。

なんにしる中心にいる人なのだ。

会場の中心を陣取ったネーサンは、どこかの女王のようにフリーでやってくる謁見者と対話している。

僕らチームは端っこのほうで一息つきつつその様子を眺めていた。「なーなー、リヨウ。あの方とどんな関係なんだ？」

リーガフは畏怖のこもった視線でグッテンねーさんをみている。

「んー？ ああ、ねーさんはうちのりょうこさんの子分。」

ざわつと仲間の表情が揺れる。

「な、何で教えてくれないんだよ・・・。」

引きつった顔のゲオルグは、眉が引きつっていた。

「俺の国じゃ、あの人に関わるのは阿呆のする事だつて・・・。」

「あのさ、僕とネーサンは他人だし、戸籍が一緒な訳でもないし、恋人ってわけでもないんだよ？」

「だけどな、りょう！ あの影の女王に関わって、何人もの人間が・・・。」

「・・・よく考えてよ、みんな。僕だつてあの人がどんな人か知らないし、結構酷い目に合わされてきたけど、結局はただの女性だよ。美容にこだわり年齢にこだわり、体重の話を下途端に悪鬼に変るってな普通の人なんだつてば。」

「……でも……。」

瞬間、ネーサンの周辺で大きな声が上がった。

見ていれば、香港経済人の子息の中でも顔がいい事が自慢したさにイブに擦り寄ってきた男が、グッテンねーさんに卍固めを食らっていた。

そこで僕は両手を沿えて叫ぶように実況する。

「でした！ 日本プロレス会に燦然と輝く伝説の大技、闘神アントニオ猪木が編み出したスペシャルホールド、オクトパスホールド……『卍固め』です……！！」

おお！ と歓声が上がりにそれにあわせてネーサンがひと絞め。ぎゃとか、ふぎゃとか言う声と共に、男は泡を吹き始めた。

見取ったネーサンは、素早く技を解き、男を放り出す。

「ばばーにはババーにしか出来ない生き方つてのがあるんだよ！」
びしつと中指一つ立てるグッテンねーさん。

いや、間違つても成人男性相手にオクトパスホールドを極めて失神させるような行為が老人の出来る生き方ではないことを誰もが知っている。

「な、なかなかアクティブな方……だな。」

いままで動揺していた仲間内は、全く別の意味で動揺し始めていた。

「僕も色々と技の実験台になったよ。」

「……そうなのか？」

ああ、頷く僕は、過去に実験された技を色々と説明。

「四の字固め、コブラスイスト、卍固め、チョークスリーパー、つり天井……。」

ああ思い出す、悪夢の日々よ。

少なくとも、彼女の同居の申し入れを断った理由の一つだ。

りようこさん詣出をしていた彼女の来日理由の一つがプロレス観戦であることを皆知らないのだろう。

プロレスがやらせであるという批評を彼女は鼻で笑っていた。

それでもアレがいいのだ、と。

そして感動のあまり僕で実験、と。

居たたまれない生活だ。

ああ、とため息のような歓声が再び聞こえたので見てみると・・・

「ぎ、ぎゃー！ まじジャイアントスイングなんかするなー！」

僕が叫んだ瞬間、にやりと笑ったネーサンは、未だ気絶している先ほどの男を放す。

充分な物理学的な運動量を得た男は、虚空に舞った後、甲板の端から落ちた。

「・・・あんたって人は！ そこまでやる事無いでしょ！！」

ダッシュでネーサンまで駆け寄った僕を、彼女は不敵な視線で見つめ返す。

「はん、人を貶める事でしか自分を高められない馬鹿なんて、この世から消えるべきさね。」

「それについては同感ですが、聊かやりすぎです。」

「いや、網があることを判ってて投げ捨ててやったんだ、意識をなくして投げ捨てただけでも優しさ満載さ。」

「そう言うことではなくてですね、大人として、もう少しやり様があるでしょお。」

「おや、りょうちゃん、随分と陰険になったものだねえ。」

「なにがですか？」

「この場合は笑って済ませてやって、あとで経済的にも社会的にも抹殺してやるうつて言うのかい？」

「だあ・・・そうじゃなくて！」

「あのねえ、りょうちゃん。あたしの世界での大人のやり方ってのはそう言うものさ。」

満足そうに微笑んだグッテンねーさんを、周囲の人は今までと違った視線で見始めていた。

それは敬意と親愛。

うちのチームも、ずいぶんと変わった視線で見ている。

好奇心と・・・なんだろう？

「何でもつと穩便に出来ないんですか」

「この世で二番目に大切なものを汚されたんだ、殺さなかっただけでもありがたいだろうってものさ。」

「この世で二番目？」

「そうさ、あの方の忘れ形見を、口汚く中傷したんだ。民族問題と自分の嫉妬を入れ替えて、恰も自分のほうが後継者として相応しいとね。」

みるみる表情をゆがめるネーサンは、どこから出したかオートマチックの拳銃を構え、スライドさせる動作で一個目の弾丸を発射体勢にする。

「あー！ やつぱりやめやめ、この世から抹殺決定！！」

ダッシュで駆け出そうとした彼女を、僕は急いではがいじめ。

「あああああ！ もう！ 龍平、手伝え！！」

「だめだな、執事としてマスターの思い優先だ。今この場でりょうちゃんを排除しないだけでも友情を感じる。」

影のように現れた龍平に、ネーサンは叫ぶ。

「りゅうちゃん、りょうちゃんをはずしな！」

「マスターそれは出来ません。契約違反です。」

「くっそー！ 契約更新の時間おぼえテロ！！」

「それは私の台詞ですよ、マスター」
につこり微笑む龍平。

かなり公私共に磨かれてるに違いない。

じたばたとあがいた彼女は、甲板に押しあげられて気がついた男が視界に入る。

「あー！ このくそ馬鹿やろう、息の根とめちやる！！」

めん玉つなかりの警官のように拳銃を乱射するネーサン。

男は這うように、ダッシュで会場を逃げ出した。

「くっそー！ 絶対に許さん！」

身長差からぶら下がるようになっていいるネーサンを下ろすと、彼女は凄い顔で僕を睨んだ。

「何で邪魔するんだい！！」

「僕はねーさんに人殺しなんかさせたくないんです！」

「あたしやーこの年になるまで何人だつて殺してきた、つい最近だつて何千人と首を切つて路頭に迷わせた、昔は戦争で直接この手で何人も殺したんだ！」

「それがなんだつて言うんです。今殺す理由になっていません！」

「あたしの大事なものが汚されたんだ、大事なもんが汚されたんだ！ それだけでも殺してやる理由にならないってのかい！」

「しません！ 絶対にしません！ 彼がどんなに悪党であろうと、どんなに愚か者であろうと、自滅する機会を失わせる権利は誰にもありません！」

不意にグッテンねーさんは静かになった。

そしてゆつくりと振り向く。

「・・・本当に陰険になったねえ、りょうちゃん」

「そりゃあ、もう、ネーサン仕込ですから。」

大急ぎでぐるりと回った世界一周の成果は、目の前の元帥執務室書類入れ「箱」に現れていた。

その量は、もう、なんというか、背筋が寒い。

「うつわー、この書類全部休み明け提出の日付ですよ？」

つまり、一ヶ月元帥府停止は守っているが、さっさと手から離したい書類は離すと言うことらしい。

「もういや、今からやつちやいましょ。」

「はい。」

夏休み半ばで学園に帰ってきた僕たちは、静かな夏休みを始めようとしていた。

無理なんだけど。

大浴場で広々入浴を楽しんだ後、自室で転寝していた僕はエマージェンシーコールで叩き起こされ、ダッシュで元帥職務室へのシューターに飛び込んだ。

数秒で目的地に達した僕は、端末に飛びつく。

背後には既にクラウディアさんが控えており、・・・というか元帥職務室を現在彼女に占拠されていたりする。

早めに書類処理をしている関係上、極めて有用なのだそう。

点滅する確認ボタンを叩くと、大型プラズマディスプレイに各種情報が表示された。

静岡国際空港にUN旅客機が次々と集まってきているのが判るのだが、何故集まっているのかが判らない。

管制官が忙しそうに誘導する中、僕はUN軍空港の責任者を呼び出した。

「・・・お休みのところ申し訳ありません、イズミ元帥。」

「いえ、おかまいなく。・・・それで、何が緊急事態なんですか？」

「はい、元帥。国連学生達が旅行先より緊急避難申請による学園退避を宣言しておりまして、元帥のご判断を仰ぎたくコールさせていただきます。」

つつと冷や汗一つ。

緊急避難申請といえば、現地状況が悪化したための申請で、それはUN軍の計画が全く機能していない事を意味する。

おかしい、前半の世界一周のカウンターテロ活動で危険要素はほぼ撲滅されており、続々と学生たちが帰ってくる状況なんてありえるはずがないのに。

「状況を確認します。三分待つてください。」

「了解いたしました。」

振り返ると、既にクラウディアさんが数枚の書類を構えていた。

「元帥、少なくとも、現在機能していないシステムはありません。また、計画が障害を起こしているという報告もありません。」

眉をひそめて一気に読み下し、そして現状の表示をディスプレイに呼び出して一息。

「緊急避難を許可しましょう。避難先は第二講堂及び学生寮および中央食堂。それ以外の出入りに付いては原則的に禁止です。」

それを聞いたクラウドさんは、にこやかに微笑んで命令を書面にした。

ささつと送信トレイに放り込むと、瞬時に空港から通信がオープンした。

「元帥閣下、本命令を施行します。命令施行に対し、二十名のUN空軍兵を随行させます。」

「判りました、では先行する兵にリニアホームより第二講堂へ誘導するようお願いします。」

「了解！」

ぴしつと敬礼した担当者の画面が消えるまで待つて、僕は第二講堂に急いだ。

開店休業状態であつたいつもの喫茶店の奥さんとご主人に無理を聞いてもらい、茶器やコーヒーマーカーを第二講堂に持ち込んだ。

電磁調理器やパンなどを中央食堂の冷蔵庫から引っ張り出し、いつでも火を入れられる当に準備。

元帥府に集まっていたメンバー総出で準備できたのも、クラウドエイさんが前もって根回ししてくれていたおかげ。

優秀な人はどこまでも優秀なのだと感心してしまう。

床下収納されている椅子をリモコンで適当に全面配置したのだが、その椅子が一杯になるとは考えもしていなかった。

先行した陸戦装備の兵が開いた扉を、ずらずらずらと人が流れ込んできたのだ。

それも第三礼服を来た国連学生ばかりではなく、壮年の男性や女

性、見るからに小さな子供や老人。

一固まりだったり、二固まりであったり。

総勢五百名に達する人数は、実はまだ第一陣だそうだと。ぼりぼりと頭を掻いて正面の国連学生に尋ねる。

彼は四月まで在学していたタカの友人で、多少の面識があったから。

「ね、ねね、何があったの？ エマージェンシーな出来事の報告って受けてないんだけど……」

その言葉に、にんまりと微笑を返す男。

「はっはっは、緊急だってばさー、緊急。なにせUN各軍が行く先々で護衛による過剰占拠、保護自宅及び訪問先を完全検疫ってな感じだぜえ？ これじゃあ何処にも行けないよ。」

げげつと僕は冷や汗。

「とはいえ、問題に対する緊急避難措置が許可されてるからね、緊急避難先の国連学園に転がり込んで学園祭以外の学園を家族にご案内といったところさ。」

再び冷や汗、というかいやな汗。

最近持ち歩いているPDAを引っ張り出して、現状の作戦進行状況を押えるものの全くシロ。

真っ白けの問題なしと出ている。

「ああ、こっちは苦情出してないし、地元の不満も押えたぜ。」
「なんで！」

「だって、アレだけのUNが来たんだ、地元経済も大活性化で大助かりだモノ。」

「そうなの？」

「……それって、元帥閣下の指令だって聞いてるぜ？」

いつの間にか隣にいたクラウドディアを見ると、うんうんと頷いている。

手元のクリップボードには何枚かの手書き命令書があり、全て僕の筆跡だった。

緊急避難申請という怒涛の表敬訪問に対し、学生寮と中央食堂の開放、国連軍空港宿泊施設解放で対応した一週間は、内外ともに一応の成功を収めた。

行きも帰りもUN予算で切り回されたこの一件でかなりの赤字が出たかというところでもない。

実際、宿泊施設はUN軍関係施設なので問題外だし、食事に至っては中央食堂を使ってもらったのだが、職員はおるか研究職まで追いついたせい、去年の夏よりも食費が少ないうらいたというのが概算だ。（所詮、食堂の経費は国連持ちで、維持費は毎月変わらずかかっているのだから使った方が得なのだそうだ。）

旅客機代も馬鹿にならないものだが、その辺は備蓄燃料の循環に一躍かかっているので不慮ばかりの出来事ではない。

全ては有能な元帥府スタッフが準備してくれたおかげである。深々とお礼をすると、彼らはきょんとしていた。

「元帥、ご自分の命令をお忘れですか？」

「え？ なに？」

「・・・計画に関する推考を行い、計画補強を元帥府で行うので準備しておいてくださいって・・・。」

すっと目を細めて、クラウディアさんに視線を送ると、彼女もこくこくと頷いている。

あ、れ？ そんな命令しましたか？

したしたと全員が頷く。

じつと考えたが全く記憶に無い。

「元帥、口頭命令に際しても命令書を作っておりますので、ご確認ください。」

すすつと差し出したクラウディアさんの命令書控えを見て眉をひそめる。

あ、れ？

この日って夏期休暇前の日付だけど、クラウディアさんに許可サ

インした計画書を渡した日で、喜び勇んで興奮して元帥府の皆と酒飲んで・・・。

時間を見ると日付が変わる寸前の23時59分。

「・・・このときつて、僕、飲酒してませんでした?」

「ベロベロでした、元帥。」

泥酔状態の僕が出した命令を遂行するのですか、君たちは。

頭痛を覚えて皆を見ると、イイ顔で微笑んでいる。

「有用な命令は泥酔状態でも有効です。」

・・・

「あのですね、じゃあ、僕が泥酔状態で皆さんにフレンチカンカンを強要したとして・・・」

「あ、それ面白いですね、やりますか?」

「おお、学園祭の余興で・・・」

「元帥府特選芸!!」

「おおおお!!」

「あああああああ! 命令してない、命令してない!!!」

「もう遅いですわ、元帥。彼らもまた国連学生であった事を思い出してくださいませ。」

ずががーんと絶望の表情の僕であった。

衣装の発注や学園長への交渉まで始めようかといったところで、一週間ぶりにエマ・ジョンシーコールになる。

今度は空中母艦「デンドロビウム?北回歸線航路」からのものであった。

「こちら学園元帥府」

流れるような手腕で、数人の研究員がテーブルにつく。

あわせ、ホロ画面が表示され、メインスクリーンに灯がともる。

「お楽しみのところ申し訳ありません、元帥」

楽しんでねーよ、と心の中で突っ込みを入れつつも向き合う。

「今から三分ほど前、アメリカ中央部から緊急要請が入りました。」

「誰からです?」

「現生徒総代、エメット」風御門氏から緊急救出要請です。」
思わず目が点になる。

確かあの人はちゃんと里帰りして、それで家についたことも確認されてて、更に言えば十数人の国連情報部が張り付いているはずだ。その事を言くと、相手はかすかに頷く。

「はい元帥、そのとおりです。」

「それで緊急救出要請ですか？」

「多分、情報局員には危険でないと判断されつつも、要救助者にとつては絶対危機なのでしょう。」

思わず上を見上げてしまった。

かの人の危機ってどんなんだ？

少なくとも学園最強にして最狂といわれるあの御仁のピンチ、想像もつかなかった。

「・・・ほおっておきましょうか？」

「それは出来ません、元帥。」

「だよねえ。」

ぼりぼりと頭を掻いた僕は、情報局員への協力依頼をした。

十分後、送られてきた映像は『戦争』だった。

夕闇で銃火が花開き、砲弾の疾風が大地を洗う。

怒声と罵声が渦巻く画面を見たとき、思わず僕は手元のPDAでテレビ番組表を見てしまった。

いや、ぜったいアメリカB級映画だっと思って。うって。

斜め前にいた兵士が迫撃砲を発射、直後凄惨な音が周囲に響く。

「・・・これは、どこの遊びですか？」

「ハイ、元帥。風御門氏の実家の映像であります。」

「あの人の家はいつから紛争地域になったんですか？」

「ハイ、元帥。いまから七十分前、次期党首を巡り婦女子が口論となり、暫くするうちに殴りあいとなり、最終的には戦争になりました。」

「どうやったら戦争になるんだ。」

「少なくとも、4家のお嬢様方が固有兵を持っていらつしやる事とエメット氏の妹君ステア嬢が過激に参戦なさった事が拍車をかけたものと推察されます。」

そういいながらサブスクリーンで戦略地図略図が展開された。

見事に五角形に散らばった軍は、お互いを攻撃しつつ、お互いを牽制しつつ。

明らかな消耗戦といえる。

「各軍の兵たちに引いてもらえるように説得できませんか？」

「各軍の彼らもわかつているらしく、怪我人が出ないように仲良く喧嘩しているようです。」

猫とねずみの親友ですか。

だから情報部は何の報告もなし、と。

でも、ミスターが緊急を言い立てる理由にはならないし、なあ。

「ミスターの実家に連絡つきます？」

「二分お待ちください。」

そういつて暫く消えたメインスクリーンに久しい美丈夫が映る。

「・・・おお、待っていたよ、元帥閣下！」

「何してるんですか？」

「なにもかにも、我が私有地内で限定戦闘が始まってしまったのだよ。」

「そんなことは判っているんですが、なんでその中心にいるんです？」

「そりゃ、彼女たちが均等距離で私を奪い合っているからだろう。」

「・・・なんで逃げ出さないんです？」

「防弾装備も何もかも取り上げられていてね、あの弾丸の嵐の中を歩き気などない。」

「先輩に変装させた人を囫にしてみてはいかがですか？」

「すでに家令に実行させたが、見向きもされなかった。」

万策尽きたという顔で、彼はこちらを見つめた。

「・・・そこで、学園内では女性関係処理の名手たる元帥閣下にお助けいただこうと・・・」

ああ、なんだか非常に気分が悪くなった。
とても意地悪な気分になってしまったなあ。

翌日。

真つ黒な論くコートを着た女性が、UN空軍兵に導かれるように現れた。

真つ黒な帽子から流れるような銀髪がはみ出している。
薄紅を引いた口は聊か怒りに震えていた。

「これはこれは、メイド長のミリアムさん、いらっしやい。」
僕が執務室手片手を上げると、彼女は被っていた帽子を叩きつけ、そしてコートも脱ぎ捨てた。

出てきたのはゴシックロリータなドレスと、布地では隠し切れな
い豊満な肉体。

思わず空軍兵たちはつばを飲み込む。

「き、きみは、いつもこんな準備をしているのかね?!」

高く響くような、悲鳴のような声すらも兵たちの心を奪う。

「いえいえ、勿論いつもじゃありませんよ、ミリアムさん。」

怒りとその他で真つ赤になった彼女は、盛大に地団駄を踏んでいた。
た。

彼女の怒りの原因は日本時間で昨日にさかのぼる。

ステルス爆撃機は、風御門邸を照準した。

誰も感知できない速度で近づき飛び去った後、一個の棺おけのよ
うなコンテナが邸内に打ち込まれていた。

地上戦ばかりに気を取られていた少女達は制空権を意識してい無
かったため、いささか間抜けた抜け駆けを喰らったわけだ。

館への直接攻撃を暗黙のうちに禁止と意識していた彼女たちは、

瞬時に停戦を交わし、状況の把握が行われる事となった。

目的は風御門氏の安否の確認である。

風御門家長女ステア嬢を先頭にして突入された館には、一人の女性立っていた。

流れるような銀髪は氏を思わせるものであったが、透き通るような色気と女性であつてもうらやむようなプロポーションは意識をどこかに飛ばされたかのようにであった。

館の従業員服とは違ったゴシックロリータな格好は、恰もメイド服のようであつたが、彼女のプロポーションのためにメイド服とは一閃画した、挑発的なドレスになっているかのようにであった。

「いらつしゃいませ、お嬢様方。」

涼やかな声を突入した女性陣が聞いた瞬間、彼女は流れるような礼をする。

「あ、あなたは誰なの！」

ステア嬢が叫ぶように言うと、女性はにこやかに微笑む。

「エメット坊ちゃまに仕えさせて頂いております、特命メイドのミリアムでございます。」

「知らないわ、そんな女！」

「勿論でございます、お嬢様。私は、大だんな様から特命を受けて、国連学園内すら潜入しております専属メイドでございますから。」

「な、なんですって！」

思わず周囲で声があがる。

良家の子女が多く通う国連学園にあつて、取り巻きや家令を送り込んだ例があつただろうか？

己が子すら入学させるだけでも充分な苦勞であるにもかかわらず、契約で繋がる家令すら入学させ、さらにそれに随わせているとは！

風御門家のその実力に、どこもが息を振るわせる。

しかし、長女ステラは真つ向否定。

「そんな話は聞いていないわ！ お父様に確認するわよ！」

そう言って彼女は懷から電話を取り出し、13桁の電話番号を押したあと、暫く待つ。

5コール目に相手が出たところ、瞬時に眉がひそめられた。

小首を可愛らしくかしげたあと、量目が驚きで見開かれ、そしてうずくまりつつ下を向いた。

震える声で「Yes」を何度か繰り返し、そしてゆっくりと電話を切る。

たっぷり一分うずくまっていた彼女であつたが、目を真っ赤にしてミリアムに向き直った。

「・・・じ、事情は、はあく、把握いたしました。」

何かをこらえるように声を詰まらせ、そして深呼吸のあと彼女は毅然と言う。

「あなたがいると言うことは、兄は既にここを発っているのですね？」

「はい、お嬢様。 坊ちやまはすでに先ほどのコンテナに隠れ、皆様が突入したのにあわせて脱出しています。」

「ばかな、私達の私有軍が完全包囲しておりますのよ！」

「いいえ、お嬢様方。 あなたたちの想像以上の科学力によつてステルス化したあのコンテナを、現行科学で追う事は出来ませんわ。」
ひきつと表情を曇らせた女性陣。

ステア嬢は諦めの表情で肩をすくめた。

「お兄様がいないとあれば、この騒ぎも暫くお開きですわね？」

「・・・そうですね。」

がつくりと肩を落としてその場を去る自称婚約者候補達を尻目に、ステア嬢はミリアムににじり寄った。

「全てをイズミ元帥にお聞きしましたわ、ミリアムさん。」

にんまりと微笑むステア嬢を、ミリアムは苦々しく見つめ返した。

と、まあ、その後、記念撮影や映像を撮られたあとで開放されたミリアムさんは、ゆうゆうとUN軍輸送機で国連学園にやってきた

というわけだ。

「何で、妹に正体をばらした!!」

「勿論そっちのほうが、おもし・・・事が簡単に進むからです。」

「いま、なんて言おうとした、なんて!」

未だ人工声帯をはずしていないものだから、妙齡の女性になじられてるように面白い。

「いや、だって、人工声帯とヒサナガスーツがあれば、絶対に別人を演出できますが、念には念を入れるべきでしょう?」

メイクを施した極薄のスキンフェイスフィルタを拭うように引っぺがして、再び叫ぶメイドさん。

「それにしても、もつとやりようがあつただろう!」

「事故も無く被害も無く、素晴らしいやり口であつたと自画自賛です。」

くう、と小さく唸ったメイドさんは、人口声帯を吐き出して呟いた。

「だから帰郷したくなかつたんだ・・・。」

「・・・ミスターが決まった人を連れて行けば、皆諦めるんじゃないんですか?」

恨みがましい視線でミスターは僕を見る

「誰にも決めていない君に言われたくない。」

まあ、確かに・・・と肩をすくめる僕。

「しかし、本腰を入れて、あの方を探すしかないか。」

ふと決意に燃えた視線のミスター風御門。

「・・・思いい人ですか?」

「まあ、そうだ。」

はにかんだような笑み、その先の思い人を知っているだけに、少々気が重かった。

「・・・ま、この格好も少々面白くあつたが・・・」

当惑したように自分の姿を、部屋の姿見で見るミスターは、僕のほうに向かって眉をひそめる。

「まさか、学園外に出ている全員分のスーツを用意しているわけは……」

「それは純粹に軍事秘密なのでお答えできませーん」
身震いのミスターを尻目に、僕はその場を後にした。

その後、緊急要請は一報も入らなかった。

折角色々と準備していたのに。

後ほど聞いたところ、よほどのことがない限り元帥府に緊急要請を入れると嫌がらせをされるという噂が、マコトシヤカにささやかれたとか。

失礼な。

冒険一杯の前半と、書類と格闘した後半でどうにか身も心も軽くなつた夏休み。

あければ学園全体をパニックに陥れる一大行事が待っている。

その名も「学園祭」

第十五話 夏休み・・・なのですよ（後書き）

どこかの2次小説で、主人公の条件というものがあり、天才だとか不幸だとか色々とかかれていました。かれは、詰め込みすぎでしたね（^^；

第十六話 学園祭（前書き）

さて、学園祭ですが、去年と違って在校生なので、ルーキーとはアプローチが違います。

その辺をお楽しみいただければ幸いです。

追記： 4万文字を超えていたため、残りを追加しました

第十六話 学園祭

山のような決済書類の中にそれは紛れ込んでいた。

反射的に決済していた中で異彩を放つそれを見た瞬間、僕は手を止めた。

餅つきの合いの手のように流れ作業に付き合っていたクラウディアさんが、不思議そうに僕を見る。

「どうなさいましたか？」

口元をムニムニとゆがめて、僕は内容を彼女に見せた。

「要請書、ですか？」

無言でうなずく彼女へ、金箔の縁取り・十三個の割り印・三個の紋章印・十二個の公証印が打ち込まれたそれを見せた。

じっとそれと呼んだクラウディアさんは、眉毛を八の字にして首をかしげる。

「え……と、つまり元帥は今年、学園祭に参加できないということですか？」

「ああ……うん、それに近い状態です。」

教授会十三人会と国連軍十二委員会と生徒総代と学園長からの要請に加え、元帥府の主だったメンバーからの連盟意見書まで添付されているそれは、リヨウ・イズミおよび彼らのチームのチーム企画を辞めてほしいという内容のもので、列記されたメンバーの個人企画も遠慮してほしいというものであった。

生徒総代からは、リヨウ・イズミの名前で出される全ての企画を

却下するという脅しが入ったし、教授会からはありとあらゆる手段を使って妨害を辞さないとか何とか。

「どうなさいますか？」

「・・・元帥府の連中なんかひどいもんですよねえ。」

自分たちは女装の男性仕官のみでフレンチカンカンの練習なんぞしているくせに、僕だけ仲間はずれで、警備上の理由のみで参加するな、だなんて。

ひらひらと要請書をちらつかせて、要請内容を読んだことを認める印を押す。

くやしいけど、完全に外堀を埋められてしまった。

「自分から進んで企画なんてやるつもりはなかったけど、ここまでされると悔しいですねえ。」

決済済みのトレイに要請書を放り込み、僕は腕組していた。

数日後。

すでにマイカー状態のアマンド研所属電気スクーターを駆る僕は、僕ではなかった。

今日はアヤの日なので、ヒサナガスーツを着てメイクを施した格好で教務塔にむかっていた。

とり急ぎの用があるのでシューターで地下へ移動したいのに、どうも今日はルーキーの目が多すぎて移動できないのだ。

いく先々でルーキーに絡まれてしまい、移動の時期を逸していた。

「そろそろ何か感づいたのかも知れんな。」

とのアマンド教授の台詞を思い出すまでもなく、僕ことアヤが神出鬼没である実態を統計的に調査した結果なのだろう。

データ統計が取れているという事は、僕の出現場所と時間の関係が有機的に繋がってきている事を示唆する事になり、ともなれば、教務等の前には・・・

「あ、アヤ先輩！」

すてててつと可愛い声の女子生徒と男子生徒が現れた。

ぺとつと僕の腕に絡みついた少女達は、にっこり微笑んで見せる。

「で、今日は何の遊び？ 私の行きつけの場所全部に網を張ってるのかしら？」

「！」

思わず目を見開いたルーキー達であったが、切り替えた表情で微笑む。

「・・・ばれました？」

「そりゃーね、これだけあからさまなら、解るわよ。」

僕は胸元からカメラを引っ張り出す。

ちっ、と小さな音を立てて、デジタルカメラが起動する。

「で、何の目的かしら？」

カメラ越しに少女達を覗き込むと、彼女達は頬を赤くする。

そのままパンして男の子達に向けると、まるで彫像のように固まった。

面白いのでそこいら中にカメラを向けると、向けた先々で人が固まっていた。

なんだろう、このカメラには新機能でもあるのか？
ひとしきり遊んだところで満足した僕は、少女達に微笑んだ。

「さーで満足したし、道を空けて頂戴。」

「ま、満足してません！」

反射的に応えるルーキー達。

ふむ、いつもならこの手でいけるのに。

デジカメを胸元にしまい、彼女達を覗き込む。

ちよつと下に顔を向け、のぞき上げるように見つめる。

顔をちよこつと赤らめて身を引きそうになる少女達であったが、それでも体を放さなかった。

ちっ、これも失敗。

どうも視覚誘導が研究されているようであった。

それとも耐性が出来たかな？　まあ、所詮は付け焼刃だから仕方ないか。

「・・・はいはい、で、何のようなのかしら？」

僕がそう聞くと、にこやかに彼女達は微笑む。

「お話させてください！」

どうやら着替えるタイミングは得られそうも無い。
急ぎの用は遅れそうだ。

男女合わせて十数人、これだけの人数を養う予算は無いので、と

つといつもの喫茶店に向かいことにした。

あそこにいるいつものメンバーにタカロウ。

そう思って行けば、やはりいつものメンバーがたむろしている。

「ハイ！」

僕が手を上げると、メンバーもそれに応えた。

「なんだ、また俺達にたかろうってか？」

「」の声に僕は投げキッス。

鼻息荒く任せると叫ぶので、僕ははまだ店内に入ってきていない十数名のルーキー達を呼んだ。

「ぎゃ、ぎゃゝ。」

「コーヒーだけよ」

そういいながら、僕はほそく笑んでいた。

「で、どこに座れば・・・」

店内は結構狭い。

メンバーがいつもたむろしている場所以外は、こまごまと人が座るようなスペースしかない。

が、そこはそれ、常連の強み。

サクサクとテーブルを入れ替えて、会議テーブルのようにしてしまった。

「と、言うわけで、奥さん、コーヒー人数分お願いします。」

「はい、」のつけね？」

「ひゃ〜〜〜」

なんとも間延びした会話が一段楽したところで、僕は少年少女たちに向き合った。

「で、お話の中身は何かしら？」

僕がそう聞くと、周囲でもじもじ始めた。
なんとも、こう、雰囲気がよくない。

「あのねえ、お話って君たちがしてくれるんでしょ？」

ちよこっただけ不機嫌そうに言うと、はっと顔を上げるルーキー達。

何かを言おうとワタワタとしている姿があまりにも面白くて、思わず笑ってしまった。

「あ、あの、アヤ先輩？」
「ん？」

にこやかに微笑んで少女に応えると、彼女は意を決したように声を出した。

「あ、あの、せんぱい！ 質問があります！！」
「なに？」

「先輩は、イズミ元帥にお会いしたことが無いというのは本当ですか？」

「ええ、以前子猫ちゃんに会えたとおり。一面識も無いわ」

「で、では、こんな噂をご存知無いでしょうか？ イズミ元帥が女装趣味だって。」

店内がドカンと湧いた。

主にチームの居るあたり。

涙を流して笑っていやがる。

・・・むかつく。

「・・・はい、コーヒーおまたせ。」

奥さんがコーヒーを持ってきたが、僕はみまちがえていない。
彼女の顔面がひくついているのを。

「ご存知ありませんでした・・・か？」

僕は最大限の精神力で声を出すことに成功した。

「・・・聞いたことは有るけど、事実かどうかはわからないわ。」

よし、よくやった、僕！

「じゃ、あの、元帥が女装すると、この世の人とは思えないほどに
美しいという噂も・・・。」

「ぶ！」

ふきました、ええ、思わず吹いてしまいましたわよ、あたくし。
気管にコーヒーが入って、思わず人工声帯を吐き出すかと思って
しまいましたわよ、ええ。

涙がちよちよぎれる程苦しいのを我慢して、僕は声を絞り出した。

「だ、誰からそんな話を？」

「は、はい、あの、チヅル」スミタという少女がイズミ元帥と同じ

学校出身で同じ演劇部に所属していて……。」

思わずため息一つ。

国連学園における情報統制の不備だ。

出る情報には厳しいが、入ってくる情報には甘すぎるのだ。
とはいえ、泣かす。泣かすぞ、ちーちゃん！

「で、私にどうしろって言うの？」

「は、はい、あの、イズミ元帥とアヤ先輩の二枚看板で演劇部を立ち上げたいんです……！」

がつんと視界が真っ白になった。

「お付き合いいただけないでしょうか……！」

僕の場合はそこいら中を舞っていた。

「あ、あたし、演技には興味ないからあ……。」

「そこをなんとか！」

一気にコーヒーを空ける。

反射神経だけで「考えさせて欲しい」と返事をして、僕はその場をダッシュで逃げ出した。

取り囲むルーキーの包囲網を突破して、逃げ出した先はアマンダ研究室。

研究員のおねーさまがた中を縫って、休憩室に転がり込んだ。

「ん、なんだ、急用が有ったのではないのか？」

紅茶をたしなむアマンド教授は僕を覗き込んだ。

頭をかきむしりばさばさ頭で教授に事の次第を相談すると、かのじよはけらけらと笑い出した。

あまりに幼い笑い方に、思わず見とれていると、それに気付いた教授は真っ赤になってみせる。

「ばか者、女の素顔を見るものではない」

「教授はちゃんと化粧してますよ。」

「・・・あほう。」

ぺちつとウエットティッシュが投げつけられた。

甘んじてそれを顔で受けると、教授は耳に指を突き立てた。ぴっぴつと何かのゼスチャーをされて始めて気付く。

（と、盗聴ですか？）（うむ）

ばばばつと身を探ってみると、出るわ出るわ発信機や盗聴器。本日接触してきたルーキー全員で仕掛けてきたようだ。

「まったく、乙女の秘密、高くつくわよ、と。」

そういつて僕はヒサナガスーツのアースコネクタを外して屈伸三回。

瞬時に僕の周辺で紫煙が上がる。

「おお、すごい、それがタイプ11か？」

「ええ、いまだ試作βタイプですが、十分ですね。」

そう言つて、僕は再びアースコネクタをつける。

「ふむ、それだけのエネルギーを散らすのは勿体無いな。」

「じゃ、教授が何か作ってくださいよ」

「ふむ。」

そのとき、にこやかな笑顔の裏に、あんな恐ろしいものがあるだなんて思っても見なかった僕だった。

「とはいえ、尋常ではないな」

はき集めた盗聴器を観察していたアマンド教授は眉をひそめる。
僕へゼスチャーで「生きてる」。

僕は「了解」。

「しかし、困りました。ルーキー達に演劇部に誘われましたわ。」

「ふむ、面白いな、演劇部か。」

「教授はご興味ありますか？」

「ふむ、これでも映像研究の一端を担っておるからな。」

「・・・私は演技には興味ありませんわ。」

「・・・面白い冗談だ。」

そんな会話の中、高速で手話のやり取り押していた。

アマンド研では手話が必須技能なのだ。

いや、音声関係の情報収集も行うので、マイクの周りでは必須とも言える。

ゆえに、デニモ教授とアマンド教授のところに出入りしている僕は、必然的に手話ができるというわけで。

「何処の盗聴器ですか？」

「わからん、しかしルーキーとは思えん技術だ。」

彼女が言うには、かなり高度なECCM機能があるそうだ。

『暫く会話したら、とっとと逃げますね。』

『了解だ。』

「・・・では、教授。また明日。」

「ふむ、今日は泊まらんのか？」

「ええ、ちょこつと隠れ家を作ったので。」

そう言つて僕は休憩室の電気を消す。

じつと耳を澄ませていると、どたどたと周囲を走り回る音が聞こえる。

何か声を掛け合っているところを見ると、随分な人数で走り回っているようだ。

さーてどうしたものかなあ、と思つているところで背後のドアに気配が近づいてきた。

音も無くドアの陰に隠れると、勢いよく扉が開く。

「完全に包囲されています！！　どうかお静かに！！」

ぜんぜん静かではない叫び声を上げて入ってきたのは、多分ルーキーだろう。

「何用だ、ここを女の園と知つての蛮業か？」

「まことに遺憾ですが、ご協力ください。」

彫りの深い顔は無表情にした少年は、休憩室の明かりをつけ、じつとアマンダ教授を見ているようだ。

「して、この暴挙の真意は何処にある？」

「硬く固辞なさつていらつしゃる、イズミィア先輩のミスコン参

加を承諾していただくため!!」

阿呆だ、阿呆が束になってやってきた。

十数人いる男たちがあけたドアの影から、僕はこの馬鹿どもをどうしようかと悩んでいた。

アマンド教授との押し問答の結果、彼らは盗聴器の全てを回収してその場を去った。

開きっぱなしのドアをゆっくりと閉めて、僕は教授に向き直る。

「いやー、まじまじに阿呆ですよ、あいつら。」

げんなりと僕が言っていると、教授はにやりと微笑んだ。

「いや、そうでもないぞ。その格好のおぬしは異彩を放った美しさを持っておる。いや、一種強制力があるといっても良いぞ。」

「オカマバーのNo.1ってだけじゃないですか。」

「ふむ、そうでもないのが恐ろしいところだな。」

そういつてアマンド教授は一つのファイルを取り出した。

「おぬしの素行調査の中で浮かび上がった事実なのだが・・・」

「素行調査って、あたしゃあ浮気夫ですか?」

「・・・ふつ。」

見事に鼻で笑われてしまった。

そんな教授がざーっと広げた書類をみると、僕は思わず眉をひそめる。

最近身についた技術のなせる技、傾向と内容を見渡して把握すると言うもの。

その中の内容は、アマンダ研究室の書式に則った内容であったが、規格外のデータであった。

「なんすか？ この身体外寸データつつのは？」

「最近確立したものでな、遠距離からでも目視サイズと補正値をデータ化する手法だ。」

「で、その手法で、僕をはじめた、と。」
「そう、だ。」

まあその内容たるや、頭痛を激しく呼び起こすものであった。
だって、ねえ？

僕の身体サイズ比が胸部特徴を除いて女性のものと同様である
と結論付けているのだから。

さらに阿呆に思えるのは、その比を指してこう表現しているのだ。
『黄金率』と。

「で、こんな阿呆なデータで何をおっしゃりたいと？」

「・・・光学映像分析において世界最高峰と自負する我が研究所が
導き出した結果に対する不遜な態度は許そう。しかし、この結論に
対する無理解さは我慢でんな。」

口をへの字に曲げたまま、アマンダ教授は広げられた用紙の端っ
こにチマチマと説明を書き始める。

これが始まると長いのだよ、うん。

小言と説明の中間のような長い話を要約すると、光学映像研究と
言う分野よりも、視覚誘導効果を研究している部門での反応の話ら
しい。

時代時代の黄金率に変化はあるが、現在の黄金率は世界的に見て

導き出されるそうで、その比率は全体的にやせ方らしい。

意識レベルと視覚レベルの差異から来る情報統計を行い、データ化したそのフォルムに僕のデータを入れると極めて近似的であることはわかったとか何とか。

「さらに驚くべき結果として、今貴様が着込んでいるその身体特徴データは、貴様の上に理想的な胸を重ねた形と言ってよい。」

かかかかかかかかと一気に書類の裏紙に図解したアマンド教授は、結果を言う。

「つまり、貴様の身体特徴は極めて久永スーツに近いものであり、無理の無い適合性を持っている。そのヒサナガスーツ自体の身体比率が黄金率に近いのならば、貴様の身体特徴もほぼ黄金率だといって良いだろう。」

・・・女性のね。

思わずがつくり。

「もし、本気でミスコンに出るのならば、このアマンド研究室が全面的にバックアップして視覚誘導技術を最高レベルで投入するぞ？」

真剣な表情の教授はすいっと顔を近づける。

「・・・いや、参加しろ、参加して我々の視覚誘導技術の有効性を証明するのだ！ 最近では研究室での実験に喜びを見出すムスメツコばかりでフィールドデータの集まりが悪い。そんな中、貴様は積極的に免疫の無いルーキーに実践しているではないか、これは我が研究室の一員と言って過言無い！！」

ぎらぎらと訴えるその目があまりに怖くて、二歩も三歩も引いてしまう。

「やれ、やるといえ、いつてしまえー！ー！」

ぶんぶんと僕を振り回すアマンド教授の目は、正気の色ではなかった。

その日、ルーキー達のマークは執拗を極め、日が変わるころになっても着替えるタイミングが無い。

どうしたものだろつか、うろつろと徘徊していると、背後から二人の少女が飛びついてきた。

「どーしたの、アヤ？」「急ぎの用があつたんじゃないの？」

口元は微笑んでいるけど目が笑っていない。

そりゃ怒るでしょう、彼女達つてば二時間以上も待ちぼうけだもの。

「・・・出入り口を押えられちゃった上に、ストークされてるのよ。」

ぴっぴっぴつと周囲に指をさすと、そこから男子生徒の一団が飛び出して逃げていった。

「ありやりや、今年的女子寮が安全なのは、アヤのおかげかしら？」
「なにそれ？」

「毎年、とちくるった若いエネルギー丸出しのお馬鹿が、トイレに忍び込んだり大風呂を覗いたりしているんだけど、今年はそういうの一件も無いのよ。」

去年もあつたのだろうか？ 何で誘われないかなあ・・・

「あ、いま、何で自分はそのことを知らないんだろうって思ったでしょう？」

ずばり、と顔に出してしまった。

「まあ、そういうことに参加するのは、女子寮の住人とはあまり縁の無い人たちだけって話よ。」

「つまり、うちのチームとかなんかには声がかからなかったわけね。」

むー、僕とて縁があるわけじゃないよなー。

「あ、今度は自分だって縁が無いとか思ったでしょ？」

・・・怖いね君たち。

「あなたが読まれやすいのよ、アヤ」

「そうそう、考えていることがすぐに顔に出るんだもの。」

ぐいっと両脇から僕を固めるイブとレンファ。

なんだろ、と思っているところで彼女達はぐいぐいと僕を引っ張って行く。

行き先は男子寮レクリエーションルーム。

最近の別名は元帥閣下の遊戯室。

よくよく僕たちのチームが占領している事をあらわす名前だ。

二人の美女と共にその場に入ると、黄と「」が机を並べてこちらに向いて座っていた。

二人とも伊達めがねをかけて、ニコニコ微笑んでいる。

「何してるのかしら？ お二人とも。」

レクリームの入り口からルーキーがのぞいている事を意識しての言葉使い。

「いえね、ちょっとした相談をしようと思って。」

そういった黄の目の前に僕は座らされた。

「なに？」

じつと見つめると、黄は何故か赤くなった。

この馬鹿たれめ、そう思って「」を見ると、彼は視線を外してそっぽを見ていた。

なんじゃ、こいつらは。

そう思っていたが、僕はおくびにも出さずに小首をかしげる。

何気なく用意されている椅子に座り正面を向くと、彼らは背筋を伸ばした。

何が始まるのやらと思っていると、彼らは口を開く。

「・・・じつは、教授会からと生徒総代からの要請が僕らのチームに来たんだ。」

そういつた黄は、懷から公式通達用紙を引つ張り出す。

豪華な縁取り、朱印割り印金印があらわれた正式通達要請書で、別名命令書。

そこにあるのは、イズミ「リョウチーム」の学園祭への参加中止を要請するものであつた。

先日、元帥執務室で見たものと同じものであつた。

とはいえ、僕は知つていてもアヤは知らないことなので韜晦して見せた。

「なんでかしら？」

「・・・んー、まあお客さんとしてならいいけど、チームとして研究発表や企画立案は控えて欲しいというものだな。」

「だから、なんでかしら？」

「はつきり言えば、うちの中心人物の権力が強大すぎて、どんなトラブルが巻き起こるかわからないってのが見解だよ。」

一介の生徒のつもりの僕だが、周りでそうと見てもらえないということだ。

たしかに、僕が動き回れば警備の人員もすごい事になるだろうし、恐ろしいまでのテロリストの侵入も考えられると言うわけ、だ。

「なるほどね。・・・で、私に何のよう？」

そう、その話を聞いた僕は『イズミ「リョウ」』ではない、イズミ「アヤ」なのだ。

見解自体は理解したが、それに対する意見は無い。

「あ、その、だな・・・。」

何かを言いにくそうにしている」から視線をそらし、僕は黄を見た。

すると彼はにこやかに微笑んでいった。

「そこで、リヨウ以外の僕たちチームは一時的に彼から離れて、君とチームを組みたいと思うんだけど、いいかな？」

すっと目を細める。
なるほど、と思う。

リヨウ「イズミを警備上の理由により学園の表舞台から引つ込めて、そのかわりにイズミ「アヤを引っ張り出そうと言うのだ。
イズミ「アヤを中心とさせたチームを構成し、要請書を切り抜けようということらしい。

それならば、いいかもしれない。
ほぼ強制的な要請書で縛ろうというのだ、それなりに反発させていたきたいもの。

「そうね、元帥閣下に異存が無ければ、私はいいわよ。」

事実上の了解を口にすると、彼らはホットー息ついていた。
と、ここで考える。

何か条件をつけておいたほうがよくないか、と。
急に浮かぶアイデアなんて大したものはないけど、なんとなくそう思った。

「・・・でも、二つだけ私の条件を守ってもらえるかしら？」

黄の目がすっと引きしぼられる。

何かを警戒するときの癖で、僕の発言自体が的を射ている証拠だろう。

「私だけじゃあ寂しいから、私のチームも仲間に入れてもらえるかしら？」

「君にチームがあるとは初耳だけど？」

「あら、有名じゃない？ ジェニーや洋子やミリアムなんて。」

ざっとJJの顔が青くなる。

にやりと微笑んだ黄は勿論良いと了承する。

「黄、きさま……。」

「当然良いに決まってるじゃないか、僕たち『リョウチーム』自体の活動が出来ないんだからね。」

ジェニーといえばJJ、洋子といえば洋行さん、ミリアムは……まあ交渉次第。

「ま、まってくれえ……。」

そう言っ出てきた我がチームたちを僕は微笑んでみる。

「何をするにしたって、動きやすいほうが良いでしょう？」

唯一、その輪から外れた黄以外、皆うな垂れていたのであった。

「後もうひとつは……。」

「な、なんだい？」

「ここでも思いつき。」

「企画内容は私に任せてね。」

実際、僕たちチームの活動が出来ないとすると、お客様になってみるしかないかといえはそう言うわけではない。

個人個人で他のチームや研究室の企画に参加すればいいだけの話なのだ。

本当ならそうすべきだろう。

教授会や生徒総代の意向ってやつはその辺にあるのは間違いないと思う。

そうしないのは教授会や生徒総代の意思に沿わないものだけれど、まあ楽しいなら良いでしょう。

で、元帥職務室は、僕らチームのにわかオカマバーになっていた。

「いや、実際、よくばけたわねえ……」

ルーキー以外の学園関係者には有名であるものの、アヤの日につからない姐さんはこの姿をよく知らなかったらしい。

「結構この格好でこの部屋にきてるんですけどねえ？」

アヤの格好で小首を傾げると、姉さんはなんだか赤い顔をした。

「ば、ばかやろう、女に愛想振り撒くな！」

「ああ、でも、この格好のときってこういう風に動くのが癖で。」

「おまえ、本当にイズミっリョウか？」

「勿論ですよ。」

そういつて、僕は人口声帯を吐き出した。

「ね？　いつもの声でしょ？」

「あ、ああ。しかし……。」

そういつて姉さんは僕の偽胸をもみしだく。

「この感触、絶対本物だあ！」

「偽モノですってば。」

そう言つて、僕は自分の首筋に指を当て、一気に引き剥がす。
これがヒサナガスータイプ11の脱ぎ方。

豊満な体の下からは、筋肉の薄い、貧弱な僕の体が現れた。

「ね？　こつちが本物。」

耳まで赤くなった姉さんは、脱兎のごとく部屋から飛び出した。

「ん？　どうしたんだろ、姐さんは。」

「あのねー、リョウ。姐さんもうら若き女性なのよ？　健康な男子の半裸をいきなり見せられたら動揺するわ。」

イブが後ろから、脱いだばかりのスーツを引っ張るように合わせる。

きゅ、とばかりに体にフィットして違和感が無くなった。

「さて、これがアマンド研及びボスコック研初共同作品だ。」

そう言つて現れたアマンド教授が手にしているのは、どう見ても用途の知れないものであった。

いや、見たままの用途ならば理解できるが、なぜ共同開発物でそ

れなのかが判らない。

真っ黒なそれを僕の胸に当て、アマンダ教授は何気なくタイプ1のアースラインをはずした。

見取ったチームは思わず一気に離れる。

このタイプ11、かなりの高機能の割には致命的な弱点がある。

それは、あらゆる衝撃を爆発的な電力に換えて発散してしまうと言うものだ。

その威力は電力換算で、最大22・6GW/秒というもので、近接したものは人だろうと物だろうと一瞬にして塵に換える。

それを微弱にまで押えているコネクターアースを、アマンダ教授は抜いてしまったのだ。

身の危険を感じて離れるのは当然だろう。

「きよ、教授！」

「まあ見とれ。」

そう言った教授は、何処から出したか判らない10番ゲージの暴徒鎮圧銃を出したかと思うとおもむろに発射した。

あつけにとられた周囲の人間は、自分の死を意識したものだだったが、次の瞬間に起きたのは死ではなかった。

彼らの目に入ったのは、僕の胸の上で淡く光を上げる黒いブラジヤーだった。

「どうだ、ボソソフルミオール変換素材を使った蓄電ブラジヤーだ！」

「・・・すごいっすよ、ほんと。」

「ふっふっふ、今だ試作で放電の際に10%ほどしか出せんが、今は十分であらう。」

「じゃ、あとの90%ってなにになってるんですか？」

「光だ。今淡く光っておるだろう。」

おお、と周囲が盛り上がる。

「おう、何の騒ぎだ？」

モヒカン男は部屋に入るなり鼻血を吹いて倒れる。

「あう？　なんで？」

「あのねえ、裸の女性がブラつけただけの格好で立ってれば、血気盛んな男の子は鼻血を出すわ。」

そういつてレンファが僕の下半身にタオルを巻いた。

あ、いかんいかん、スーツの上に何も着ていなかった。

さて、歯抜けぼろぼろのイズミリョウチームとアヤチームが何をするかと言えば、元帥職務室に集まった人間の格好を見れば一目瞭然であった。

極めて胸を強調したアメリカンな女性民族衣装。

フリルがフリフリ、激みじかのふわふわスカート。

「ねー、あや、これ何？」

「ああ、うん、喫茶店の店員の格好」

「・・・極悪」

その名も怪しき『麗人喫茶』。

英語でいうならビュティーズラウンジ。

カウンターの内側、レジの向こう、店員全てが美人で構成されると言うコンセプト。

無論その美人は皆男と言うさらに怪しい内容。

「で、私たちは何でこんな格好なのよ。」

そう言うイブとレンファは、男性ボーイのもので、きちきちに胸をサラシで締め付けた格好。格別のサイズを誇るイブなどかなり苦しそうであった。

「ふっふっふ、この企画の妙さ。男性陣は女装して美人に、女性陣は男装して麗人になってね。」

「きわめて学園祭っぽい企画だけど、誰の入れ知恵よ？」

眉をひそめるレンファに、衣装の送りもとの伝票を見せた。

「ま、またなのね、おかーさまたちってば」

イブもそろって覗き込んで肩を落とす。

「なんで、俺までこんな格好を……！」

黄はハンカチを咥えて身悶えている。

無論、黄も女装させられている。

お姉さんやおふくろさんにそっくりの化粧した顔は、妖艶な東洋系といった感じだ。

「えー、だってー、黄くんってばリョウチームの代表格だし。」

頭の悪そうな喋りのこの人こそ、今回の秘密兵器「ミリアム」だ。この久永スーツを初めて着たときは、極めてご立腹であったが、ずいぶんとなじんだらしい。

「あんだ、あんだだっていやがってただろうがぁ！」
「・・・結構悪くないと思うけど、にあってるぅ？」

長身・銀髪の彼女がくるりと回ると、黄以外のメンバーが盛大に拍手する。

「いやーん、癖になっちゃう。」

両手で顔を挟んだミリアムが、身悶えた。

姿見を前にして色々とポーズをとるミリアムは、視界のはしに映った僕に向けて手を振る。

「こんな事なら、幻美人企画は自分でやるんだったなあ・・・。」

そんな事まで言っているこの人物、リョウチームと同様に、個人的な企画も参加企画も禁止されている。

学園トップクラスの公人だけのことはあり、随分とストレスがたまっているようだった。

それを見取った僕が『麗人喫茶』に誘ったところ、初めはいいやながら顔を出し、今では一番乗りのりになっている。

「さつてと皆様、これより学園祭開始までの一週間、たびたびこの格好になっていただきます。」

そう言った僕は、懷から取り出した全員分の小冊子を渡す。

「これは？」

「ん？ ああ、アマンダ研推奨接客マニュアル。」

ぱらぱらと冊子を見た全員が、自分の格好を忘れて呟く。

「あ、・・・あざとい。」

「ばか者、華麗に格調高く『卑劣』といわんか。」

腕を組み胸をそらすアマンダ教授は、輝く笑顔で周囲を見回した。その表情を見て、誰もが思う。
女は怖い、と。

「というわけで、申し訳ないけど君たちと企画は出来なくなっちゃったの」

とあっけらかんとルーキー達に言う。

自分のチームやリヨウイズミたちのチームと企画を上げたので、参加できませんという説明は乱暴であつたかとくびをかしげ、相当食い下がるかと思いきや、誰も彼もが手放しで了承してくれた。り応援してくれたり。

なんだろう、全く。

背後の見えない不安が僕を襲っていた。

学園祭までの一週間、授業が無いのをいいことに、麗人喫茶メンバーの衣装時間を増やしてゆき自然に振舞えるようになりつつあった。

「・・・普段からこの格好の口調でしゃべりそうで、困っちゃう。」

ミリアムがため息と共に言う。

ちよつとした動きや動作の中にも催眠誘導が織り込まれており、何も知らない男が見ればグラグラくるだろう。

少なくとも、先日お会いした北米社交界に悪名高き某女史などはだして逃げ出すレベルだ。

「そーねー、本当にやんなっちゃうわ。」

チャイナ風に改造した制服を着たレイフォウが言う。

何のかんの言って、既にこの格好の口調と身振りを完璧にしているばかりか、毎朝のクンフーにも女性的な動きを取り入れているとか。

なんでも、女性的動作には受け流す動作が取り入れやすく、バランスが良いとか。

よくわからないけど、そういう動きが出来るのって、レイフォウの骨格が女性的だって事じゃないだろうか？

「へっ、みんなやる気まんまんじゃねーか。」

べらんめーな口調のジェニーは短いスカートなんかも気にしないで足を組んでいた。

「いけないなあ、お嬢さんがそんな口調じゃあ。」

すつとウォンが微笑む。

「そうだね、美しいお嬢様方は、にこやかな微笑むでいて欲しいと思うよ。」

金髪小柄なヴァンがジェニーをたしなめた。

二人は既にアマンダ研の催眠誘導と接客術を完璧としているが、誰がどう見ても売れっ子ホストにしか見えないな。

まあ、そりゃそうだろう、アマンダ研のお姉さま方が、自分たち

がして欲しい接客の全てを絞り込んだマニュアルなのだから、それなりの形になる。

で、さらに僕たちが行うマニュアルも、アマンド研のお姉さまたち女が、愚かなる男をだますために使う全てが絞り込んであったりする。

こんなのまともに読んだら、完璧な女性不信に陥るね、うん。たまにいつもの喫茶店で、アヤの格好で試してみると、ストーカーの山が出来たりするのが恐ろしい。

そんな生活も、明日から始まる学園祭を終えればさようなら、だ。幻美人計画においてもこの学園祭が最後と言う事になっている。よいきりだと真剣に思う。

皆と同じ格好の僕は、くると回ってみせて微笑んだ。

「さーみなさん、対抗模擬店の全てを、根こそぎ空にするわよ！」
「おー！！」

学園祭初日・準備公開日

何の制約もなく、お忍びも一人もなく身内だけの公開日が初日。それ以外の日には何かと例外的に外部の人間が入ってきている。で、身内だけでそれだけ人が集まるかというとなんかいいな。いいというのが通例だ。

だから初日は『準備公開日』などといわれているわけであるが・・・。

「・・・これは凄いな・・・。」

厨房方面から店内を覗いたアマンド教授は、感嘆の息を漏らす。

特殊授業用の一室を借り切ったはずの店内は、高級バーのような内装を無視した人口密度を誇っていた。

予定収容人数が単位時間あたり60人であったのにもかかわらず、現在300人ほどが店内で屯しており、一切店内から動こうとしている様子は無かった。

男性来客はくると動き回る店員達に目を奪われつつも、新たなオーダーをして店員の注意を引こうとしている。

コーヒーばかりを何杯も注文して、先ほど三人ほど救護室に送られたぐらいだ。

随所に設置されている催眠誘導効果をあげるための照明を避けながら、アマンド教授は店内を見回してチェックする。

「ふむ、予定効果以上の反応だな。」

店内の半分を占める女性客は、ヴァンとウォンの指名合戦でちのりを上げているし、その半分の男性は桃源郷に来たかのような笑顔でとろけているようだった。

「で、問題と言うのはなんなんだ？」

誘導効果で問題発生ということと呼ばれたアマンド教授は、どこに問題があるのだという顔をしている。

「・・・忙しすぎます。」

そう言った僕は、アヤの格好で腕組していた。

この格好で腕を組むと、胸の邪魔なこと邪魔なこと。

どうやっても腕が胸の下に入って様にならない。

「よい事だろう？ 始める際におぬしは他の模擬店を空にするとか

言ったじゃないか、いつそすがすがしいばかりの盛況ぶりに、私も感心しておるぞ。」

「教授、女性客の半分は、オタクの生徒さんです。」

「ふむ、結果は見えていたのではないか？」

半ば確信犯のアマンダ教授はニヤニヤ笑っている。

まあ、たしかに。

宝塚的な要素に弱いアマンダ研のお姉さまたちにしてみれば、ヴァンやウォンなど猫に鯉節、蚊に素肌だ。

ため息一つ上げたところで、がしゃんと大きな音が。

ワイングラスに入った紅茶を振りかざし、数十人の女性がもみ合っていた。

開店から四時間で何度目の騒ぎなんだか。

「痴情のもつれに嫉妬の嵐、なんと心温まるよい光景だ。」

冗談とも本気とも取れない口調に、僕は半ば眩暈を感じたが、それをフォローする人員が即座に投入される。

褐色の麗人『クロウ』。

音も無くその場に現れ、もめていた女性全てに瞬間的情熱的キスの爆弾を投入、その場は一瞬にして静寂となり、全てが収まった。

「・・・騒がしい女は嫌いだ、外で頭を冷やして来い。」

非道と言すべき冷たい言葉に女達は顔を上気させて従った。

四分の一の空間が空くと、一気に新規のお客さんが流れ込む。中には何度めかの来店と言う人もいたりする。

客を一瞥したクロウは、流れるようにその場を去り、厨房に入ってきた。

「サンクス、クロウ。大感謝！」

そう言って抱きついた僕だったが、クロウは無表情に言う。

「・・・感謝は元帥閣下から直接頂くとしよう、利子つきでな。」

思わず引きつって離れた僕に、クロウは素顔で微笑んだ。

「・・・冗談ですよ、元帥。」

麗人喫茶と言うこの店は、女性店員に比べて男性ホストが極めて少ない。

ゆえに、女性客にもウエートレスは女性（皮）店員が行くのだが、これが又恐ろしい事になる。

如何にヴァンやウオンを独り占めにするかと言う熾烈な争いをしている中、滑るように現れた女性店員が仲睦まじく会話をしながら離れて行くのだ。

その瞬間、視線だけで人が殺せるような嫉妬の嵐が吹き上げる。

「あ、アヤ、ご苦労さん。」

にこやかに微笑むを見て、われ先に女性側のウエートレスを引き受ける女性客達が続出。

既にどちらが客だかわからない状態だ。

女の嫉妬と競争心を煽り立てる、極めてナイフエッジなやり方と言えるだろう。

「ありゃあ、最悪の女誑しのでぐちよお」

と、敵情視察に現れたマギー・トレモイユは、客として入店できなかったため、有志のスタッフとして洗い物を手伝ってくれながら顔を顰める。

まあ、有志ですので、そのぐらいはやっていただいて良いかと。

「そうですか？ マニュアルどうりなんですが。」

「マニュアル？」

そういつて、カウンターの中に設置されている接客マニュアル『麗人編』に目を通した彼女は、がっくりと膝をついた。

「・・・なによ、これ。」

「アマンダ研究室推奨接客マニュアルです。」

「極悪の悪党の手口ね。」

まあ、異存は無い。

とはいえ、こんな面白い事を止めるつもりも無い。
ことは計画通りに進んでいるのだから。

「ですが、ご好評のため大混雑です。」

「まーねー、あなたの仲間のパンチアクションと悪党ホストの手口で集金力は凄いでしょうよ。」

ため息をつくマギー。

「でもねえ、評判悪いわよ、ここの店。」

「評判ですか？ でも、二度と来ないどころかリピーターばかりですよ。さらには、良心価格で明朗会計！」

「だから評判が悪いって言うの。喫茶店って、なんのひねりも無

い頭の悪い企画だつてというのが定番なのよ？クラスチームが集まって出来る唯一のネタなのに、ここまで研究室の技術を動員して・・・常識外よ。」

「それが私たちの売りです。イエーイ」

「あー、はいはい。」

降参とばかりに両手を上げたマギーは、先ほど入れてあげたコーヒーをすすり、目を細める。

「・・・なによ。コーヒーもおいしいじゃないの！」

「喫茶店ですから。」

「嫌味なこと。」

クラスチームで喫茶店をしていたマギー・トレモイユは、コーヒーの入れ方だけでも教えるところねて、もっとも上手くコーヒーを入れるミリアムを拉致する事に成功したが、ミリアムの正体はいつぞ気付く事は無かった。

彼女唯一の収穫だろう。

催眠誘導装置関係の電力は、厨房内でカウンター担当をしている人間のタイプ11を経由して供給している。

さすがに供給過多になってしまっているので、休憩と放電と息抜きをかねて、僕はアヤの格好のまま学園祭の中を歩き回った。

今日は初日なので、いまだ開店していない企画も多い。

そんななか、開店している店に毛筆で『甘味所』とかかれた看板があったため、思わずフラフラと入って行くと、入ったとたんに左右から押さえつけられてしまった。

「え？ な、なに？」

押さえつけたのは、金髪タテロールさんと黒髪クノイチポニーテールさん。

ともに東京都は伊豆諸島、八丈島の名産品を身につけている。

覚めるような黄色の生地から『黄八丈』といわれる着物で、結構ポップな色合いだ。

「チヅル、このひと・・・違うわよ。」「でもでも、飛んで火にいろ夏の中。」

「千鶴ちゃん、何の冗談かしら？」

「無理を承知で、手伝ってえ。」

ひょいっと僕を担いだチヅルは、店の三分の一を占めるカーテンスペースに僕を引き込んだ。

何かといえば、お茶の葉と急須がいつぱい。

「和菓子やみつめめやメカンなんかは何かかなるんだけど、皆がお茶が全然入れられないのお。」

うるうるとするチヅル。

「私だって暇じゃないわよお？」

「そこをなんとか！」

チヅルばかりか彼女とチームを組んでいる女生徒達まで拝み倒し。

「あー、もう、仕方ないわね。」

じゃあ、とばかりに急須を暖めたり湯のみを暖めたり茶の葉を蒸したり炒ったり。

ふわつと緑茶のいい香りが周囲に立ち込める。

「千鶴ちゃん、私のとこの店から『抹茶』のセットを持ってきなさい。」

「え、いいの？」

「いいわよ、どうせ抹茶を注文するようなやからは今の店には来ないから。」

そう、一般公開日ならまだしも、今はそんな客は居まい。

そんな僕に疑問の表情だった彼女であつたが、ひとつとびで籐の箱を持ち込んだ。

「さて千鶴ちゃん、覚えているわね？」

「えへへへ・・・。」

僕と共にばーちゃんから習った茶道、覚えてはいないだろう駄目なんだろうと思つたが、一応基礎を押えているのでよしとしよう、僕はそう割り切つた。

「和菓子には抹茶で御出しして。そのときは熱湯ではなくちよつと冷ましたお湯で入れるの。香りがすぐに飛んでしまわないように気をつけてね。」

ぴっぴつと話した後で言う事がなくなりその場を去ろうとすると、きゅつと女生徒に裾をつかまれた。

「なに？」

「本当に、本当にミスコンに出場なされないんですか？」

「私なんかより、あなたのほうがよっぽどお似合いよ。」

そういつて、その場を後にした。

まー、期待されるのは嫌いじゃないけど、妙な話は嫌いなんです。

「埋め合わせは必ず」

手を振るロリータを背に、僕は本格的な放電をするための場所を探した。

一日目の模擬店の売上として恐ろしいまでの金額に達した『麗人喫茶』であるが、評判は甚だ悪い。

やれ美人局だ風俗営業店だなんだと言う風評が耳に痛い。

もちろんそう言うコンセプトで始めたのだからその手の評判はそのままでもいい。

当初期間は性別反転阿呆企画でいくように始めたのだから、どうにでもなれというものだが、問題はもう一つのほうだ。

「回転率が悪すぎるんですって。」

終業会議と称して集まった全員に僕がそう言つと、全員が首をひねった。

「どういうこと?」

「ヴァン、素が出てるわ。」

「おおっと、・・・これはこれは。で、どういことなんだい、アヤ。」

僕は胸元から手書きの手帳を出す。

マンガなどではおなじみだが、本当に出来るとは思わなかった。

「んつと、ね。回転率って言うのは、単位時間あたりでどれだけのお客さんが来店したかってこと。つまり、売上は良いけど、来店できなかったってひとが不満を漏らしているのよ。」

確かに、初日終了の時間になっても店の外に人が離れる事無かった。

あまりの熱意に脱帽して、明日のための整理券を配り出したら4桁に達してしまって中断したぐらいだ。

「手段は少ないけど、いくつかプランは有るわ。」

洋子も胸元から手書きの手帳を出す。

「いま、私の把握している予定だと、午前中の中央講堂前と午前午後の第三大型プールが開いてるのよ。」

「・・・で？」

アーニーが微笑みつつ促す。

「で、そこを押えて分室を作ってはどうかしら？」

おお、と皆関心。

接客当番が回ってきたので僕は仮設厨房から飛び出す。

周囲からレーザーのような視線が集中するがまるつきり無視。

どんなにみられても、僕自身が見られているわけではなく、タイプ11とその上の水着が見られているだけなのだ、・・・き、気にするものか。

いくらプールだとはいえ水着と言う季節ではないが、無理に温水

化したプールに入りながらの入浴喫茶は結構繁盛していた。
いや、繁盛しすぎか。

第三大型プールが午前中から全日で押えられた僕たちは、戦力を半分に分けてプールと部屋に分かれた。

中央講堂前では双方の宣伝をするために、ヴァンとレイフォウが客引きしている。

ちょこつと見に行ってみたら、殆ど繁華街のキャッチャーといふかなんと言つか。

持ち場のプールで待っていれば、十分おきに客を連れたヴァンとレイフォウが現れては消えるという繰り返しだった。

で、プールサイドは既に満杯だと言うのに、客を連れてきてどうする！

「なに、私の仕事は、お客様をパラダイスに連れてくるということなのだからね。」

聞く耳は持たないということらしい。

「お客を捌くのは、こっちの仕事ってわけね。」

肩をすくめる洋子に僕は微笑んだ。

「なら、こっちにも考えはあるってことよ。」

始めはプールサイドのみのオープンテラスのつもりであったが、急遽大電力による温水化をはかり、温水プール・・・というか水着入浴喫茶として開店したところ、馬鹿みたいな人数が集まってきた。水着必須という病んだ企画の癖に、既に息切れが始まっている。

「ひー、たかが喫茶店なんだから、冷やかしていいのに・・・。」

プチモンブランとホットココアを山のように抱えた僕が、プールサイドを滑るように走ると、周囲から歓声が沸く。

客の全てがプールに入っているために、極めてローアングルからこちらが観察される事になるのだ。

「本当に、性風俗に詳しい方ですねえ。」

すれ違いざまにミリアムが暗い声で言う。

僕だってこんな事になるとは思わなかったんだい。

確かに、受け渡しのかげむから胸が強調されるし、すごいアングルになる事は認めるけど。

「よー、きたよー。」

楽器片手の女性達は、アマンド研究室のお姉さまがたご一行。

趣味のバンドの発表の場を探していらっしやったので、空いたプールサイドをご提供したのだ。

何でもどこかの研究室と合同企画でライブをやる予定だったのだ
が、いろいろあってぼしゃってしまたそうだ。

昨日の麗人喫茶内で最後に暴れたおねえさまがたが彼女達。

前もって配っておいたアマンド研究室協力感謝チケツトを初日早
々に使って現れてのご乱行に、僕らも冷や汗いっぱいであった。

不満戸口の嵐の中での話を覚えていたジーナが、今日の企画が決
まったところで渡りをつけたのだ。

「しかし、アヤ、こんなかつこうしなくちゃ駄目なのか？」

全員が全員、校舎でやっている麗人喫茶のウェイトレス制服を着

ている。

「そりゃそうですよ、麗人喫茶の企画内でやるんですから。」
「げー。」

眉をひそめるものの、やめるつもりはないらしく、彼女達は機器のセットを始めた。
セットを手伝っている傍ら、背後に熱い視線を感じたので振り向くと、炎のような熱い瞳の少女がいた。

「あ、あの、あのおねー様方は『アマンダシスターズ』じゃないんですか？」

プールの編み越しに女性生徒が聞いてきたので、反射的に僕は頷くとキヤーとか避けて消えた。
なんじゃ？　とか思っていたところで消えた少女は数十人の少女となって帰ってくる。

編み越しにおねーさまがたに狂喜する少女達に、リーダー役の女性マイクテスト代わりに言った。

「タダ見はごめんだよ。」

温水以外のホットな空気が、屋外麗人喫茶を席卷した。

校舎内の麗人喫茶本部も盛況を極め、温水麗人喫茶から流れたアマンダシスターズのおねーさまたちが大暴れし、店内は一種サバト状態になったとか。

ウェイトレスやホスト役がステージに引っ張り込まれ、床が抜けるほどの大騒ぎとなったとの事。恐ろしい話だ。

プール班で助かった。

「卑怯じゃないかね？」

そついい始めたのはボスコック教授。

研究室内の綺麗どころを集めて接客させるという、丸まるうちと企画が被る事をしていたわけだが、客引きはしない、おさわりなし、パンチラなしサービスも無しと言う引いた姿勢に客足が悪く、ここ二日ほどさんざんらしい。

基本的に美人ウエートレス喫茶なんていう企画は、一般公開日前までに準備が間に合わなかった研究室の定番だというだけなのだが、それでも根こそぎ客が来ないとなればモチベーションに関わるというわけだ。

とはいえ、僕らも学園長の後ろ盾もあって始めた事なので表立った抗議が出来ず、直接ネットで抗議と相成ったわけだ。

「教授、ここは格調高く『卑劣』とおよび下さいませ。」

にこやかに微笑む僕に向かい、教授はがっくりと肩を落とす。

「私たちは攻めの活動をしているだけで、なにも店の回転率を落とすためにサクラを用意したりいたしませんわ。」

僕のこの一言に表情が変わり、真っ青になった。

「むろん、何の証拠もない話です。」

学園長ヘリークも提訴もしないことを暗にほめかすと、彼の顔色は普通になった。

「……一部の人間が卑劣な行為に及ぼうとも、われわれが後に続くわけには行かない。」

「勿論です、教授。学園祭が低俗な性風俗街になってしまいますものね。」

「というわけで、君たちの自重を……。」

「それはなりませんわ、教授。これはアマンド研究室のフィールド実験でもありますのよ。じっけん、じっけん。」

かつと目を見開いたボスコック教授は、一瞬どこか遠いところを見た後、ふっと倒れてしまった。

さーてこれでよにんめつということで、次の通信に移った。

「お待ちせしましたエメツト教授、ご用件は？」

「……さわつていいよな？　そう言う企画なんだよな？」

このおっさん、本当に天才なのか疑いたくなるよ、本当に。

二日目のプールは盛況を極めたが、聊か卑怯のけらいがあるという事で翌日の使用申請をしなかったところ、同様異種の企画が突発で申し込まれ凄い騒ぎになたつとか。

雨だけのこのように企画が立ち上がったものの、派閥同士の連携が上手く行かずに難渋しているそうだ。

そんな情報をもたらしたミリウムは、キャラに会わない不敵な笑みをもらしている。

「……ま、所詮はお色気だけで攻めればばろを出すし、そうでなければ私たちには勝てないと言うジレンマで話は進むまい。」

ま、そのとおりなのだが、こっちはこっちで困った事が発生した。校舎で行っていた麗人喫茶の収容人数の飽和を対応できない事が判明したのだ。

今日一日でわかったのだが、収容している客層が違い、麗人喫茶に来たがっていた人たちは相変わらず麗人喫茶に通いつめ、第三大型プールに来た客層は別であつたのだ。

つまり、人員を分化してまでした客員分散化は、新たな客層を獲得すると言う恐ろしい誤算によって休憩時間も取れないような各個撃破状態にされてしまったのだ。

戦力の分散化は愚作と言う判断になったが、昨日までの客のリピートが有ったりすると厄介だ。

少なくとも、新規の客もあわせ、昨日からのリピート率を考えれば、麗人喫茶本部だけでは押えきれない。

でも、三日目の明日は全く空いてるスペースが無いときている。故あって、電子機器が全く使えない状態の僕たちは、呆然としていた。

「あのーよろしいですかあ？」

閉めていた教室の扉を開けた少女に僕は微笑んだ。

「あら、ロリータじゃない、元気？」

一分の隙も無い催眠誘導モーションで言うと、彼女は顔を真っ赤にした。

「よし、撃墜！」

「おお、みごとー！」

周囲から歓声が沸いた。

「あ、あの！」

盛り上がる僕たちを静めさせたロリータは、意を決したように口を開く。

「お店を開く場所をお探しと言う事を聞きまして、良いお話をお持ちしました！！」

・・・何処から聞いたのやら。

ロリータの持ち出した先は中央講堂。

各種演劇関係発表で一日中押えられているはずの場所だ。

洋子がそういうと、ロリータはにこやかに微笑んだ。

「正直なお話、演劇関係サークルでの集客能力は期待できません。」
「だから立ち退かせるの？」
「いいえ、皆さんの集客能力を利用させていただきたいのです。」

頭からハテナを出した僕たちに彼女は説明した。

「中央講堂全体に広げられている客席を全て撤廃し、テーブルと椅子に仕掛け換えまして・・・」

「・・・演劇喫茶にするってこと？」

「まあ、プラスアルファ、客席も舞台の一部にしたりお客様を激の一部にいれちゃったり。」

「もろ、大衆芸能だねえ。」

ぼりぼりと頭を掻くぼくは周囲をも見回した。

誰もが面白そうな事に目を輝かしていた。

どんな話になるかは知れたものだ。

終業会議はいつの間にか場所を移し、中央講堂で前準備を始めた演劇集団と交わすものとなった。

学園祭三日目・特別招待客日

演劇喫茶のほうに人員の大半がいつてしまい、麗人喫茶の店員は極めて少数となってしまった。

ミリアムと僕の二枚看板とヴァンが今の店当番。

後はほとんど全員演劇喫茶に投入だ。

当番ごとに出席表なるものを店の外に張り出したところ、三日目にして固定客が出来たらしく、好みのウエートレスの名前を聞いて所在を確認しようとした客達は、いっぱいのコヒーと引き換えに情報を受け取り演劇喫茶に進撃して行く。

アヤ・ミリアムファンといって良いのか、初日から行動を共にしている僕たちの追っかけのような存在も出てきているのがう雑多い。とはいえ営業時間のうちはお客様、にっこり微笑んで対応しますわよ、と。

微笑み片手にローラーブレードを履いた僕とミリアムが、広めの店内を疾走しまくる。

短いスカートをさらに短くして、ちよこつと風が吹けばスコートが見えてしまうような格好に異常加熱する店内。

反対に、砂漠の王か油田王かと言った風情のヴァンは、逆に客からサービスを受け、そのサービスに対する対価をキスや抱擁で支払っていた。

爛れた視線を受けた少女の一人など、そく失神したりなんかして恐ろしい限りだ。

「アヤ、交代よ！」

極超ミニの少女二人が、こちらもブレードを履いて現れる。

「ミアン、ケイト」

さつと手を合わせて選手交代。

僕は胸元のピンマイクのスイッチを入れる。

すると店内にあたかもプロ野球でのうぐいす嬢のような音声が響いた。

「選手交代をお知らせします、アヤ・ミリアムペアに代わりましてミアン・ケイト、ミアン・ケイトペア。」

わっ、と店内が熱気に溢れる。

キヤー、オネーサマーとか声が聞こえる。

待ってましたと声がかかり、交代にあわせて店外に出る人もしばしば。

「さー、オーダー聞いちゃうぞ！」

マイク片手にミアンが可愛くポーズをとると、「ラブリー」だの「アイドル」とかいう掛け声がかぶさる。

「だめだめ、みんな一斉に言ってもらっても解らないよお！」

ケイトが高い身長を縮めるように正面のテーブルに言う。

「……どうしたの？ 私に言いたい事があるのかしら？」

真っ赤な顔をした女子ルーキーを周囲がはやし立てる。
正常な風景じゃねーな」と苦笑している僕とミリアムだった。

ミリアムの表の顔で緊急事態があるという。

僕も僕のほうでかねてからの打ち合わせ道理に三軍将軍ご一行を
校内案内すると言う責務のため、一時素顔に戻る事となった。

化粧がガリガリになっているのを丁寧に落とし、シンナーくさい溶
剤でつめを落とし。

タイプ１１を蓄電下着と共に脱ぎ捨てて、かなり熱めのシャワー
を被る。

なれた調子で人工声帯を吐き出して、消毒ケースに収める。

鏡に映る自分の顔を見て、やっと我が家に帰ってきたかのような
気分になる。

ホッと一息といったところだ。

着慣れてしまったところか最近略章の所為で型崩れをはじめた元
帥服に着替え、身支度が終わる頃には部屋の入り口でクラウディア
さんが待っていた。

「元帥、そろそろ將軍達がりニアホームにおいでです。」

「うん、じゃ、行きましょうか。」

「はい。」

いつもの会話感覚、いつもの距離。

ここ数日無かったものだけに、結構新鮮だった。

「して元帥、お勧めの企画は何処ですか？」

「Ｊ」將軍の一言に肩をすくめてしまった。
お勧めとか言われても困る。

イズミ「リヨウとしてもアヤとしても学園祭を全く回っていないかったのだ。」

「皆さんに前もってお渡ししておいたパンフレットからご希望を。」

電話帳ほどもあるようなパンフレットをどうやって読んでか、色々と希望が出てきた。

・・・随行の奥様がたから。

なんでも、「Ｊ」將軍に続き陸軍將軍超氏・海軍將軍ムハマド氏のご子弟も学園に入学したとかで、自分の子供の晴れ姿を見たいという話だ。

唯一「Ｊ」將軍夫妻のみはその希望は無い。

なにせ、「Ｊ」將軍の息子である「Ｊ」は、我がチームの一員として企画参加が禁止されているからだ。

「では皆さんのご子息の出展に行った後、私のお勧めに参りましょう。」

まずは流体応用実験とは名ばかりの、空気砲による鬼当て。

ルーキー達が鬼として立てかけられており、その姿に海軍將軍は泣いていた。

いや、本当に涙を流す將軍と、けたけたと笑っている奥さんが印象的だった。

次に行ったのは恐怖屋敷コンバット。

クラスチームで出している企画で、蛍光塗料による３Ｄ映像結晶化技術や、遠近法を無視した直接視覚投影は極めて出来のよいものであった。

僕は感心していたのだが、顎が外れるほど驚いた陸軍將軍は息子

を引っ張り出して説教を始めたりする。隣で奥さんが泡を吹いていたりするのだから当たり前かもしれない。

で、最後に案内したのは、中央講堂「演劇喫茶」。

「ほほー、飲食をしながら演劇が楽しめると言う企画ですな。」

他の將軍の生の親子の対話に細く笑んでいるJJ將軍。

自分の息子の馬鹿な姿を拝まれる事が無い事を安心しての言葉だけれども、ねえ。

あらかじめリザーブしておいた席から見る店内は、極めて混雑超満員。

演目もバラエティーに富んでいて、面白い事請け合いだった。

「いらつしやいませ、八人さまですねえ。」

現れた大柄の女性に向かって僕が微笑むと、彼女は瞬間固まった。

「や、ジェニー、オーダーしてくれるかい？」

心なしかカタカタ震えるジェニーをみて、JJ將軍はにこやかに微笑む。

「美しいお嬢さん、この方は極めて有能ですが、あなたがむやみに恐れる人ではありませんよ。」

ダンディーな笑顔でそつと手を取る。

赤くなるかと思つて手をとったのに、ジェニーが青ざめたので將軍はいぶかしむ。

少なくとも、少女といわれる世代の少女たちの好みに会うナイスミドルを自称する彼には腑に落ちないものがあるらしい。

「あなた、『美しいお嬢さん』はあなたに怯えてるのよ、手をおはなしなさいな。」

パットさんの一言に傷ついた様子の將軍であつたが、今だ手を放さない。

「・・・君を見えいると懐かしい気分になるよ、ワイフとであつた頃、青春の日々が思い返される・・・、そう君のブローチ、この店の雰囲気にはぴったりのだけではない、郷愁と思い出は呼び覚まされるよ。」

ゆつくりとパットさんに視線を戻したJJ將軍は、不思議そうにジェニーとパットさんを見比べた。

「ふむ、きみはうちのワイフにとてもよく似ている。」

見ればパットさん、涙を浮かべて震えている。

どうやら真実に気付いて笑いを殺しているのだらう。

ジェニーの正体と僕のたくらみに。

女性と言うのは、なぜかくも鋭い観察眼を持っているのだろうか？

「す・・・す、すてきな、お、お、お店ですこと・・・。」

噴出す寸前のパットさんは、視線を泳がせて気を散らそうとしたのだが、視線の先のジャンヌとレイフォンを見た瞬間、ぱったりと突っ伏してしまった。

「奥様、ご気分が悪いのですか？」

「まー、パトリシアさん・・・。」

支えるように奥様方が集まったのを手で制して、パットさんが微笑みの表情で僕を見た。

「本当に楽しい出展ですけど、・・・元帥閣下のチームメイトは何処に？」

「あー、各々、各出展に参加してますよ、いろいろな形で。」

意地悪そうに微笑むパットさんは、ジェニーに向かって微笑んだ。

「ではお嬢さん、オーダーを受けていただけるかしら？」

「・・・はい。」

ジェニーは観念したかのような表情であった。

程なく始まった演目は『学園版金色夜叉・エスプラント語バージョン』。

なんつつか、極めてマニアックな内容だっただけにどんなものかと思っただが、思いのほか楽しめたといってもよいだろう。

その後に始まった元帥府男性研究員有志によるフルドレスのフレシカカンカン、あまりの錬度の高さに周囲の歓声を呼んだ。

三将軍や奥方の喜ぶ顔を見て成功だと思った。

無論、それとなく近づいてきたジェニーが似合わぬドスの聞いた声で『おぼえてろよ』の声を聞かなければ、ただれど。

オーダーした軽食を楽しんでいたなかで、次の演目時間になっても始まらない劇に周囲がいらだち始めた。

学園祭的トラブルで面白いのだけれども、長く続くといまいち面白とはいえない。

なんだろうなあ、と思っているところで背後に人影。

「元帥、少々お話が。」

その声で初めてその人に気付いた將軍達は目を剥いた。

「なんでしょう、軍曹。」

「実は、次なる演目でトラブルがあったようなのですが、その件で何故か」私の端末に連絡が入りまして。」

インビジュアルエッジとまでいわれた彼女の所在をつかむ人間って一体。

差し出された内容を見ると『次なる演目にて緊急事態につき、取り急ぎ元帥閣下に連絡されたし。ノロリータ』とある。

どうも、彼女は凄いスキルを手に入れているようだ。

ぱりぱりと頭を掻いてから、周囲に断りをいれつつ自分の学園製端末の着信規制を解くと、いきなり通話回線が開いた。

着信指令も何も入っていないのに。

『元帥いゝ、たすけてください。』

元帥回線に強制介入って、あなたどういう技術ですか？

「どうしたんだい、やぶから棒に。」

『主役が逃亡しちゃいました。』

おもわずじつと壁掛け時計を見る。

「あ、あと5分しかないのに！」

ゆつくりとドーランを塗る僕の後ろで明らかに下手な女装をした少年がいらだっている。

「せ、先輩、出来れば一幕目だけでも早く台本読んでくださいよお・
・・」

「あのねえ、きみ、もう君だって役を入れてないといけない時間だよ、僕にかまわず役に入ってなさい。さっき流してみたから大丈夫。」

片手で台本、英文版のメヌエットを叩く。

まったく、こんなものどこから仕入れたのやら。

・・・いやいや、仕入先なぞ限定できるか・・・。

「で、でも・・・。」

ふう、とため息をついた僕は、何度ともなしに繰り返した台詞を口にした。

『ああ、いとし子よ、いとおしき君よ、この胸のうちを焼き焦がし燃え盛る思いを支えし心の君よ、呪われしわが身をいとうことなく愛をささげてくれる我が君よ・・・。』

目が点になっている『我が君』役の少年が、思わず頬を赤くした。

「これでいい？」

「・・・はい。」

目をウルウルさせて、まるで少女のように頷く少年を見て、これで良いのか疑問を感じていた。

英語版と日本語版の差異はほとんど無かった。

あたかも、日本語訳を僕の言い回しで英訳したかのような内容で、思いつく日本語を自分訳すればよいだけと言うのはかなりラクだった。

そんな余裕があるせいで、客席がよく見える。

一番前のほうにロリータと何故かサングラスをした千鶴がかぶりつきで見ているし、劇の一部と化している町娘姿の麗人喫茶ウェイトレスたちは、劇の進行に合わせてこちらに掛け声などを出している。

でも、随分タイミングがよすぎるよなあ、やつら。

相手役の町娘なんか、全く役に入りきっていないし、他の役だつて錬度が低いくせにフレイバー少佐との絡みのときばかり熱が入ってるなあ。

冷静な思考が自分の背後に抜けて、あたかも自分の鳥瞰するように見え出したとき、視界の向こうでアマンド教授が満足そうに微笑んでいるのがわかった。

む？ おかしい。

麗人喫茶のほうは確かに教授の接客マニュアルが効いてるけど、こっちの演劇は……。

台本道理に幕袖へ引きながら、不意に鳥瞰状態が解け気付いた。

そう、まずい事に、極めてまずい事に、フレイバー少佐の格好で『アヤ』の催眠誘導を使っていたのだ、全力で！！

つまり、フレイバー少佐との絡みに熱が入っているのではなく、フレイバー少佐に役者がマジボレしているのだ。

そうか、それで教授はあんなにも満足そうに！！

……ん？

幕袖のプロンプタ原稿を見て眉を寄せる。

英訳されたその原稿、その内容、台詞の言い回し、そしてタイミ

ングのよすぎる声援。

なんだかいやな予感がするなあ。

ぼりぼりと頭を掻いた僕だったが、壇上でもわかるほど三軍関係賓客が喜んでくれているので良しとしようと思った。

劇終了と共に起きたスタンディングオベーションの後、見慣れた美少女が花束を持って現れた。

イブとレンファがささつと花束を渡し、僕の両脇に並び立つ。

何してるんだろう、と思っているところで、彼女達は恐ろしい事を言い始めた。

「今年から自由投票で候補者無しから始めた『ビューティーコンテスト』はいかがですかあ？」

「一度見かけた人でも、劇中の誰かでもかまいません、美しいと心騒いだ人の名前を用紙に記入して投票箱に入れてください。」

『あなたの心が、今年のモストビューティーを決めます！』

わーと声援と拍手が渦巻く。

僕のみ初耳の話は、どうやら周囲の誰もが知っていたらしい。

僕以外の誰もが。

もしかしてはめられたのだろうか？

学園祭四日目・一般招待日

四日目、この日は一般公開日を前にした一般招待客への公開日、生徒各々が三枚だけ発券できる特別優待券を持った人だけが参加できる公開日であった。

この三人という枠、恐ろしいまでの競争率である。

普通ならば両親＋一名となるわけだが、その一名が恐ろしいこと

になる。

友人知人が拳って奪い合い、死闘を演じることにもなるというのだから。

かく言う僕は去年、僕はキヨネセンセとじっちゃんちとチーちゃんを呼んだのだが、今年は政治的配慮による元帥枠もあるので結構な人数を呼んでしまっている。

清音センセとグッテンねーさんが個人枠で、元帥枠では昨日お呼びした三軍將軍やそのご夫人、あとは政治的な配慮でどうしても呼んでおかないとまずい人たち多数。

偉い人達との会合は、夜にでも合同パーティーを行うからいいとして、呼んでしまった個人枠の人たちをどうするかが問題だ。

そう思っていたのだが、すべては杞憂であった。

清音センセは突然現れたアマンダ教授と意気投合、すっぱりさっぱり消えてしまったし、グッテンねーさんにしても鈴・モイシヤン両夫婦に挟まれるように学園に消えていった

教授や両夫人のサインを見るまでもなく、頑張れと言う事だろう。さーで、どうしたものかなあ、とおもっているところで、ちーちゃんと共に半泣きの墨田のじっちゃんと秋野さんを発見した。

「じっちゃん、よくきたねえ！」

ぱんぱんと肩を叩き合う僕だったが、じっちゃんは感無量であるようだ。

「うちの千鶴とぼっちゃんが、こうして肩を並べて国連学園に入学するんなら夢のようであろ。」

「ほんとですよ、リヨウさん。」

いつもはクールな秋野さんも目元がウルウルしていたりする。

「これはこれは、墨田の親分」

流れるように現れた黄老人は昨年と同じように車椅子であった。

「これは黄大人、お久しぶりです。」

両手を交し合うその姿は、都心部を一手に占める実力者同士の握手ではない。

国連学園に自らの血筋を送り込んだ事を誇らしく感じている身内同士の共感であろう。

「どうですか？　一緒に回りませんか？」

そう言う黄老人に心地よく了承をしたじつちゃんは、後はよろしくとばかりに千鶴と僕に手を上げてその場から去った。

後につき従う秋野さんと黄家の女性達は楽しそうに語っていた。

「チーちゃん、この後の予定は？」

「生憎、ロリータの家族の案内があるの。」

「あつそ、なんだかなあ。」

思いつきり手持ち無沙汰になった僕は、麗人喫茶にすごすごと戻る事にした。

アヤの格好で麗人喫茶に入ると、そこは昨日までの陰鬱と退廃が支配する雰囲気はなく、光と静寂の支配する純和風のたたずまいである。

金髪銀髪の和服美人が、和風のテーブルにお茶やお菓子を静々と運んでいる。

かく言う僕もしつとりとした色合いの和服。

昨日までの雰囲気求めてきた客も今日始めてきた客も、ほおうつため息をつきつつ魅入られていた。

昨日までの営業はほぼ今日の今日の今日以降の布石といっている。俗悪と低俗の陰に隠れた魅力を、今日は前面に押し出したと言うわけだ。

ポイントはうなじ。

全員のウイグをアップでまとめ、首筋が露出するようにしている。毎日通っては尻をなでていたエメット教授でさえもセクハラ無しで神妙な顔で座っていた。

その表情に戸惑いはあっても嫌悪感はない。どちらかというと、知らなかった何かに感動して言うかのようなのである。

女性側の担当方面など、きびきびと動くヴァンとウォンに魅入られて凍り付いている。

厨房から覗いて僕は、思わず笑みをこぼした。

両親を連れてきた生徒も安心の店内構成に、昨日までの狂乱は見られない。

しかし、それは期待とのギャップに苦しんでいるわけではないのだ。

一面の光景に度肝を抜かれているのだ。

「なるほど、これが噂の『麗人喫茶』、ね。」

長身のポニーテールとアマンダ教授が入ってきた瞬間、僕は思わず目をそむけてしまった。

「ふふーん。」

絶対笑顔であろう事は間違いない声で、こちらをのぞきこんでいる。

駄目だ、絶対に視線を合わせちゃいかん。

「で、アマンダ教授。あなた一番のお勧めの生徒ってどなたですの？」

くつくくつと笑いながら近づく人の気配。
く、くるなー……。。

「このイズミ」アヤというのがここの首謀者でしてな。」

ぐつと引つ張られた拍子に体が反転。

思わず僕は豊満を誇る清音センセの胸に突っ込んでしまった。

「・・・ふーん、大胆な娘ねえ。」

「あ、あの、すみません、バランスが崩れちゃって・・・。」

ぱつと離れた僕を見て、にやりとセンセが微笑んだ。

あ、だめだ、絶対にばれた。

「そつかそつか、あれから癖になっちゃったのね？」

「な、何の事だか解りかねますわ、ミスキヨネ。」

底意地悪く微笑んだ清音センセであつたが、ぐつと僕の肩を引き寄せて耳元で囁く。

「今晚はお泊りだから、どこか部屋を用意しろよ、フレイバール少佐。」

完全にばれました、全くをもって隠しとおせませんでした。

「どうしたんですか？　アヤ先輩。」

どうしても手伝いたいとねじ込んできたテルマに僕は力なく微笑んだ。

バリバリ和装の僕たちに比べ、和装少女給仕風のテルマへ。

「あー、まー、人生において絶対に勝てない相手がいるって事ね。」

なんだかわからないという顔で、テルマは曖昧な笑みを浮かべていた。

自分の家族を呼んだメンバーが次々と交代で抜けて行く事を見越した僕達は、麗人喫茶の始めを動とするならば静を次なる段階とした。

静寂と静止の美。

日本様式における一つの究極美ともいえる形を再現する事は難しいが、その形を際立たせる事は容易だ。

おしゃまやおてんばを急に静かにさせればいいのだ。

しなもなく、一枚の絵のような静やかさでゆけばよい、涼やかな笑顔で微笑めばよいのだ。

今までが今までであっただけの事はあり、全く隙の無い女性像に人は敬服しか感じられないものだ。

そのせいか客離れがいい割には客足が途絶える事は無かった。

人気と客足のバランスが取れている証拠ともいえるだろう。

昨日までであったなら、いくらでも客足が止まっても言いが、きょうからはそうはいかない。

どんな風にしても一定上に忙しくなってもらっては困るのだ。

僕やミリアムはより一層表の顔が忙しくなるし、外来の客も飛び込みで来るために客足も多かるう。

チーム内の人間も男に戻る機会も多いときたものだ。

そんなわけで、風味中心の抹茶とお茶菓子是好評であるばかりか、昨日までセットを貸していた千鶴のチームもお手伝いに来てくれているのでかなり順調だった。

手伝いに来てくれたちーちゃんのチームに店を任せた僕は、アヤの格好のままうろつくこととなった。

放電を一定で行わないと、いくら蓄電ブラでもオーバーロードしてしまうから。

とはいえ、この格好のままで歩くのは気が乗らなかったなので開店休業のちーちゃんのチームの店に行った。

一休みさせてもらおうと入ったのだが、そこには、なぜかうちのチームとその家族が集まっていた。

何してるんだろう、と思ったが、よくよく考えればこの選択もやむ無しなのかもしれない。

今回の学園祭の喫茶店は、ミスコン出場を狙う猛者ばかりのお色気路線が主体で、ご家族向けの施設ではない。

しかしながら、物静かになったとはいえ麗人喫茶にはつれて行きたくないといったところ。

なにしろJJ將軍の夫人パトリシアさんに、一発で見抜かれた経緯があるからだ。で、安全なところは・・・と検索で引つかかるのがここだった訳だ。

よほど和服が珍しいか、店内がどよどよとよめく。

「あ、アヤ先輩、ちょっとお手伝いいただけませんか？」

アングロサクソン系の少女が、困ったような顔でこっちを見ている。

思いのほか客足がよくて、給仕に困っているとか。

ここ数日の客足を考えると、絶対にここまで混まないと思っていたらしい。

無論、彼女達のチームがやるべきなのだが、そのチームの人員は僕たちが奪ってしまっている。

ここはお手伝いすべきだろう。

にこやかに了承して、彼女に近づいた。

「ね、着替えたほうがいい？」

振袖をちよいとあげて小首をかしげる。

彼女達の店では、黄八丈の着物が制服になっていた。

「え、ええ、お願いできます？」

いいわよー、と気軽に衣装を担いで部屋の控えスペースに飛び込む。

運良く誰もいないので、ぱぱぱぱっと一気に着替える。

このヒサナガスーツの胸はデカスギで和装に合わないんだよねあ・・。

よく見れば、かんざしや髪留めなんて言うアイテムもあるので、ちよこつと留めてみた。

「よし」

戦闘準備完了、というわけで、僕は暫くお手伝いをする事にした。

結果的に、チーちゃんのところの人員と麗人喫茶が丸まる人員交換していたのだが、評判は良好。

麗人喫茶にも甘味所にもご家族連れが集まって盛況となった。

先日までのイメージで、色気たっぷりかと思いきや、ルーキーの女の子中心で明るい雰囲気、麗人喫茶には人が入りやすくなり、僕を中心にした女装チームが甘味所に乗り込んだのでこちらも盛況となったわけだ。

僕たちのチームは、元帥執務室でさつと軽く打ち上げをしていると、ふらりふらりと教授会の面々が集まってきた。

口々に「卑怯だ」「卑劣だ」「反則だ」などのたまわる姿は泥酔者のそれで、一様に敗者の色合いを醸し出していた。

おのおのの母国語で独白する集団つて、結構不気味悪いことが判明した。

「まま、教授方、ここはひとつパーっと・・・。」

突然現れた長身のくのいちポニーテール女教諭さんは、周囲の人々に素早いお酌。

注ぎはじめのスタートから一分も経たぬうちに全員が車座になっていた。

「では、迎え来る一般公開日を前にして決起の乾杯を・・・かんぱーい！」

勢いにつられた全員が乾杯し、そして瞬間的に昏倒した。

「・・・清音センス、何したんです？」

流れるようにして雪崩式宴会を敢行したセンスは、笑顔で微笑む。

「先ほど仕入れたボスコック研究室の飲料式無力剤のテスト。」

がつくり。

思わず肩を落としてしまった。

「素晴らしい誘導技術です、まこと見事な意識効果です！」

目をきらきらとさせたアマンド教授が、ずずずいつと清音セ
ンセににじり寄った。

「すばらしい、これほど見事に意識誘導と視覚効果を融合させた人
など見た事も無い！　ぜひとも学園で共に研究をいたしませんか！
！」

どんな冗談かと思ったが、アマンド教授は本気らしい。

「教授、何度も申し上げておりますが、私ごとき一教育者には研究
など身に余ること。　一人一人の生徒を導く仕事にも誇りを感じて
おりますのよ。」

柔らかな物言いに、アマンド教授は何処からか出したハンカチを
取り出して悔しがる。

「そこをなんとか、そこをなんとか！」

こんな食い下がるアマンド教授は目ずらしい。
もつと余裕ある人だと思っていたのだけどなあ。

「教授、貴女の生徒さん達がこちらを怪訝そうに見ていますよ？」
「いいのです、いいのです！　どのような狂態を見られても、あな
たを得られることを考えれば！」

ずいぶんとベタ惚れだ。

そつえば、アマンド教授の瞳が奇妙に潤んでいる気がする。
恋する乙女の瞳？

おもわずそういうと、それだ！とアマンド教授は叫ぶ。

「そう、そうなのです、そうなんです！ わたしはいま、猛烈に身を焦がすほどの恋に落ちているのです！！」

熱い瞳で熱弁を振るうアマンド教授に辟易としながらも、清音センセは僕をにらんだ。

『おぼえておれよ・・・』

へいへい、覚えておりますよ、とニコヤカニ微笑む僕を見て、彼女は怪訝そうな顔をしていた。

くつくつく、あなたの生徒は思いのほか腹黒くなったのですよ。

引き込み工作が一段落したところ、教授とセンセが僕らの輪に加わってきた。

最悪の悪党の手口と称されたアマンド研究室推奨接客マニュアルを見て、口をへの字にしていたセンセは、にやりと笑った。

「先生好みの悪党技でしょう？」

僕の問いにセンセは首を横に振る。

「そう見えて、貴方達をコントロールする事に腐心してるわ。」

こんとろーる、ですか・・・。

「あ、信じてないわね。」

にやりと微笑んだ清音センセは、二冊のマニュアルを広げ、どこ

から取り出したのか、色々な場所に赤線を引き出した。

「あなた方に渡った接客マニュアルを見せてもらったけど、ちゃんと足止めで耳目を止める方法の厳選によって、見れる人間を極少数にしているわ。接客の影響力をごく一部のものにして、その影響下にいる人間としない人間の温度差を作る事を意識してるのね。」

それにどんな意味があるのだろう、そう思っていると、何処から取り出したのか、ビールをセンセはすすりだす。

「つまり、熱狂的ファンと一般人を作る事でお互いを見つめさせて互いの冷静さを喚起するって言うことが出来るのよ。」

おもわず周囲がどよめいた。

そのどよめきは、どこからか現れたアマンド研究室のお姉さま方。

「みよ、少女たち！ そなた達が目論んだ真の意味を見破るほどの人物を活目せよ！」

全力で拍手するお姉さま方は、センセに抱きついてもみくちゃんに。

「教授、絶対に今期この人が必要です！」「今期以降、この方が居られれば……」「押さえましょう、今年度予算すべてを使ってでも！！」

轟々と吼える生徒たちに向かって、満足そうに微笑むアマンド教授。

その中で一人が聞く。

「この方のお名前は？」

それを聞いたアマンド教授は、至極満足そうに微笑み、そして静かにそれをはつきりといった。

「キヨネ「アマノガワ」

きゃーとかぎゃーとかすごい嬌声の後、センセを中心に上を下をの大騒ぎ。

「いやーすげーなー、いまだセンセのご威光衰えず、かあ。」

少しはなれたところで腕組していると、横で黄がため息ひとつ。

「リヨウ、少なくとも、彼女の名声の大半はあなたの所為なのよ？」

正面から睨むレンファの意見に僕は肩をすくめる。

「ま、申し訳ない思いもあるけど、今はそうも言っていられないんだ。」

「お仕事？」

イブがきゅっと僕の腕にぶら下がる。

「そ、学園恒例行事へ出席が強制されているんだけど・・・」

もみくちゃ状態で、半ば切れかかっているセンセを片目に僕は微笑む。

「同伴者はつれなくてよさそうなのが救いさ。」

その言葉ですべてを悟った仲間は、肉饅頭の真ん中のセンスを拝んでいたのだった。

常識と正常曲線の斜め上に行くセンスこと天野川清音教諭は、僕らのチームの制止を振り切って、着替え中の僕の部屋、元帥職務室に踏み込んだ。

「え、と、アマンダ教授と生徒さんたちは……。」
「全員酔い潰した。」

凄惨な笑みのセンスに僕は顔をしかめた。

「まったく、こちらの気遣いを無になさるとは……。」
「何が気遣いだ、こっちとら女同士の趣味はないワイ」
「はあ、もう、そういう意味じゃなくて、物理的に出席できないようにしたつもりだったんだけどなあ。」

ぼりぼりと頭をかく僕に向かって一歩足を進めたセンスを制止して、僕はテーブルの上のインターホンに向かって言う。

「クラウドディアさん、やっぱドレスが必要になりました。あとメイクの人たちを呼んでください。」

疑問顔のセンスに僕はいう。

「申し訳ないんですが、これから三時間ほどお時間をいただきます。」

「……あたしは眠い」

「ベット代です、気持ちよく時間を切り売りしてください。」

「きつたねー」

苦笑のセンスだったが、これから引き回される先を考えたら、きたねーどころではすむまいに。

23号講堂は、講堂の中でも一番狭いとされているところだが、格式は一番高い。

年に数えるほどしか使われないそこは、迎賓講堂とよばれるところで、各種レセプションに使われる専用スペースである。

去年はまったく関係なかったスペースであるが、今年は立場上顔を出さざる得なかった。

さらに、学園側から強制的にエスコート相手まで決められてしまい、参加を余儀なくされている。

「・・・というわけで、ここが第23号講堂です。」

軽く僕に腕を絡める清音センスは、半眼で僕を睨んでいる。

「ここでの任務は、鼻の下を伸ばした阿呆どもを悩殺することと、学園教授陣に勧誘してくる間抜けたちの猛攻を掻い潜る事にあります。」

じつと僕を覗き込む、センス。

「ミッションは約三時間。どこかの阿呆親父をテイクアウトした際は、明朝までが作戦時間になります。」

そこまで言ったところで、センスは薄気味悪い笑顔で笑う。胸元から取り出したのは一本のスプレー。

無地にボスコック研究室のマーク入り。

「無作為にこれが撒かれないように黙るのだ。」

「……」

口をつぐむ僕を満足そうに見たセンスは、腕を組む。

「所詮、手品の手の内を理解しただけの観客なのよ、私。」

国連学園受験を、手品と言い切りますか？ 普通。

「確かに、ナイスバディーで、イロツポくてうら若き女性ではあるけど。」

ちょこつとしなを作るセンスを、僕が半眼で睨む。

「……ふむ、それにしてもこのドレス、ぴったりね。」

胸に手を当てて、あげたり下げたり。

「それは、うちのスタッフがどこからかサイズを調べてきたんです」「優秀、ねえ？」

会場の片隅でそんな会話をしているところで、にこやかな微笑と共に幾人もの人が現れ、清音センセと会話してゆく。

パーティーの主役はいつだって女性なのだと、思わずにやつく。

「君のパートナーは人気者だな。」

銀髪的美丈夫、風御門先輩は、グラスを片手に現れた。

「ま、これだけ迫力のある美人ですから。」

「彼女と半年以上も一つ屋根の下で合宿状態だったんだって？」

「・・・ミスターが期待するような、つやつぱい話はありませんでしたよ」

「そりゃそうだろう。　そうでなければ、学園入学など実現できない。」

ひとしきり軽く笑ったところで、まじめな顔をする。

「・・・実は明日、私の招待で妹が学園に来ることになっている。」

「それはとても楽しみですねぇ」

にこやかに微笑むと、苦渋の表情のミスター

「とても言いにくいのだが、明日一日、ミリアムは存在できない。」

「ローテーションが狂いますよぉ。」

「しかし、しかし！」

ふるふるとグラスが揺れるミスター。

「冗談ですよ、そういうこともあると思って、あれはあの形になっているんですから」

「恩に着る。」

軽く頭を下げたミスター。

細く笑む僕は、結構悪党なことを考えていた。

学園祭五日目・一般公開日。

学園内を一種の戦闘状態にする怪事。

去年も凄い事になっていたが、おもいつきりミスコンに縛られていたので、そのすごさを体感することもできなかったが、今年はもう、なんというか、すごい。

すごい・・・臭いなのだ。

人の体臭にはある種の傾向がある。

日常食している食文化によって体臭は大きく違い、そして大きく違える。

かくいう日本も、海外の人間からすれば醤油の香りのする空間だとか。

納得のいく話だと思う。

各国の調味料はとりそろった中央食堂の倉庫など、もう、一種の危険地帯だ。

普段食べているものが違えば、体臭が違っても当然といったところだ。

そんな基本的な部分から違う体臭は、濃厚に交じり合うと悲劇を生み、そして惨劇を発生する。拳ひとつ振り上げることなく人を襲い、多くの人を打ちのめすのだ。

どんなに毎日の入浴をしていても、細胞単位に染み付いた生活体臭はなかなか抜けることがなく、そして交じり合えば最悪の事態を発生させる。

心底それを去年感じた僕は、僕たちは、学園に入り乱れる体臭の無香空間を作ることに関心した。

その実現のため、僕たちがここ二週間のうちに口に入れているのはある種のお茶とのお茶配合の食事だけで、苦くて食欲の落ちる味わいであったが、かなり効果があることは国連学園内元帥府職員で実験済みであった。

元帥府の人間も各国各文化の集合体であるために、事務部屋がす

ごい匂いになるときがあるのだ。

そんなときは一発逆転クサヤノヒモノかカレー臭で全てを塗り替えていたのだが、さすがに学園祭でそれは出来ないことも悟っている。

ともなれば、ということとでひそかにグッテンねーさんに手を回してもらい、格安でハーブティーを入手してもらったのだが、これが素晴らしいほどに効果的だった。

体臭はほとんどハーブ系のものになったし、汗や排出物の臭いも軽減されるしといい事尽くめ。

それを応用して、学園祭の一般公開日に目でもなく耳でもなく、鼻に訴える空間を作ろうということになったのだ。これ自体は麗人喫茶の主眼目的として書類作成されている。

僕たちは自分たちの体臭改善のためこの二週間、飲み物と食べ物全てにこのハーブを投入し、風呂に入るときにもぬか袋のようにハーブを詰めたクッションで体を磨いた。

その効果たるや、イブとレンファの喜びで全てがわかるだろう。

「卒業したら、このハーブで会社を作るわよ！ お父様たちの会社をすべてひっくりがえせるわ！」「世界中の女性全てにこれを届ける義務が私たちにあるわ！ ぜったいよ！」

タダでさえホルモン過剰気味で肌の荒れる年齢である彼女たちは、つるつるすべすべの肌になったことを感涙で語る。

アジア人のようなつやのある肌にあこがれていた彼女たちは、千金をもってもこのハーブを押さえ続けるのだろうなあ、とか何とか思う。

昨今、その肌艶のよさは女子寮でも評判で、かなりの問い合わせが彼女たちを集まっていたとか。

ともあれ、その評判と実力は、この一般公開日に全てかかっているといっただろう。

和服のジェニーこと」」は、隣のリーラことリーガフにささやく。

「ねえ、ほんとに呼び込みとかしなくていいの？」

小首をかしげるリーラ。

「最初の作戦どおりなら、立ってるだけで大丈夫って、アヤが言ってたわ」

眉を八の時にしてジェニーが困ったように微笑む。

「あの娘って、本当に秘密主義で困るわ」

「・・・私はなんとなくわかるわよ？」

リーラの真似をするように小首をかしげるジェニーに、リーラは手元の扇子を広げてジェニーの耳元でささやく。

「私たちの周囲に、ちよつとした空間が出来ているのはわかる？」

「ええ、なんだか疎外感があるわよね？　これだけ人があふれている正面正門の真ん中なのに。」

「誰も見ていないわけじゃないのよ？　それどころか、よく見たいから距離をとってるの。」

なるほど、とジェニーは思う。密着してては全身が見れない、か。

「で、ちよつと近づいて気づくのよ、私たちの周りの空気と自分の周りの空気に。」

「？」

「私たちの体臭って、限りなく無い上に、あのハーブの香りなの。」

でも、彼らは満員状態のリニアで体臭がごちゃ混ぜ状態でしょう？
近づいた瞬間に体臭の違いがわかってしまって、近づけないのよ」

・・・眉を寄せるジェニー

「じゃ、私たちの正面で、この場から去りたいけど去れない。人の流れに乗りたいたいけど動けないって状態の、あの阿呆集団って・・・」

「私たちの宣伝効果の標本みたいなものじゃない？」

がつくり肩を落とすジェニーは、イズミ「アヤが身内でよかったと胸をなでおろした。

校内の廊下をゆっくりと巡回する洋子こと洋行とレイフォウこと黄天翔は、こちらも何の宣伝もしていなかった。

ゆっくりと校内を練り歩き、何の宣伝もせずに誰にも声をかけずに歩くだけ。

「ね、レイフォウウ、歩いてるだけでいいの？」

「手鏡で髪を直すふりをしながら、後ろを見て御覧なさい。」

言われた洋子は胸元から出した鏡で背後をうかがって、瞬間、顔を引きつらせた。

「な、な、な、なんなの、あの、ゾンビの群れは。」

「歩行方法はアマンダ研究室の集大成で、そこいら中にチャームの魔法をかけながら歩いているようなものだし、一種臭気の坩堝の中のハーブ匂は麻薬にも似た親和性で体を蝕むわ。」

レイフォウのあまり穏やかではない表現の連続に、洋子は頬をゆがめた。

「だめだめ、洋子。そんな顔はあなたに似合わないわ。」

微笑みながらレイフォウが優しく洋子頬をなでる。

「やだ、レイフォウ。そういうのって後にしてよ。」

甘えるような台詞。

全てはアマンド研究室のマニュアルどおりなのだが、低い地響きのようなどよめきが、ゾンビの群れから発せられる。

（受けてるよん）気軽な黄に洋行は冷や汗。

（身の危険を感じるワイ）

まったく客寄せ行為なしで行われた客寄せは、店名すら明らかではないのに嗅覚へ訴えてみせた。

周回する客寄せ班が最終的に麗人喫茶に入ってゆくのを後から後から人がついてゆく。

これを称してだれかれとも無く「ハメルンの笛吹き」作戦といったが、絶妙な話だと誰しもが思った。

実の妹君をエスコートするミスターの元へ、何人もの女生徒が声をかけていった。

「あら、ミスター。かわいい方をお連れですね？・・・まあ、妹さんですか？　うらやましいですね、こんな素敵な妹さんがいて。」

「あー、ジェニー。君たちも忙しかろう？ 皆が待っているのではないかな？」

「やん、ミスター！ もお、また女の子と一緒にすのお？ あらやだ、妹さんですか・・・。どうりでそっくりい！」

「いやいやいやいや、リーファくん。君の待ち人が首を長くしているはずだから・・・。」

「んん？ これはこれはミスター風御門。 麗しいお嬢さんをご紹介いただけるかな？」

「ヴァン、君たち。私の妹を毒牙にかけないでくれたまえ！」

かわるがわるに現れる麗人たちを目の前にして、風御門ステア嬢は、半眼で兄を見る。

「おにいさま、とても素敵な交友関係をお持ちのようですね？」

「あー、その、なんだ・・・。」

ずいつと顔を寄せたステア嬢は、にやりと微笑んでささやく。

「専属メイドのミリアム嬢と、皆さんはどのような関係ですか？」

ざーと風御門の血の気が引く。

腰元のポーチからPDAを引っ張り出した彼女は、にんまりと微笑んで画面をタップする。

「たしか、麗人喫茶、とかいうんですのよね？」

「な、な、な、なぜえ？」

「先日、UNの秘匿回線で、差出人不明のメールが来ましたの。」

差出人は最高機密につき削除。

件名は国連学園祭についての秘匿事項。

内容は、各種検閲で消されているが、ただ一文だけ読めた。

「麗人喫茶にて、僕と握手」

真っ白になった風御門は、すうつと鋭い視線を校舎に向ける。

「……はっはっはっは……ステア、我が妹よ、よくお聞き。私は、一身上の都合が発生したので、この場から離れたいと思うのだが……。」

「だめだめですわ、お兄様。すぐにお兄様は逃げようとするんですもの。」

「しかし、妹よ。私はすぐにも決闘せねばならない相手が居るのだ。」

「駄目です、お兄様。わたしがビューティーコンテストに投票するまで待っていただかないと。」

がつくりとひざから崩れる風御門。

「投票……するのかい？ 妹よ」

「もちろんですわ、お兄様。」

にこやかに微笑む妹を見上げ、風御門は力なく微笑んだ。

ステア嬢は、その部屋に入るなり「まあ」と小さい驚きの声を上げた。

満席の店内はで頬を緩めるように微笑む。

「おにいさま、これがあの方の企画意図なのですね。」

深呼吸して、そしてウエートレス役のジルへ声をかけた。

「素敵なお店ですね。」

「ありがとうございます、ではこちらの席へどうぞ。」

窓際の明るい席へ風御門と共に通されたステアは、店内を見回しそして壁に注目した。

当番表となっているそれに、顔写真付の出席時間が書いてある。何人が居るその表の一番最後に注目したステアは、細く笑む。

「・・・あら、ミリアムさんにお会いできるかと思いましたが、今日はこの喫茶に出席なさらないようですね。」

だらだら汗を流すミスターは、小さく指を鳴らしオーダーを出した。

「・・・コーヒーを二つ。」

「はい、承りました。」

ジルが微笑みつつ、厨房へ消える。

「ねえ、お兄様。本当にミリアムさんには会えませんの?」

「・・・い、妹よ、なぜそのようなことを聞くのだ?」

「だって、とっても素敵な女性でしたので、ぜひともお近づきになりたかったんですもの。」

にっこりと微笑むステアに風御門は硬直した笑顔を浮かべる。

「おまちどうさまでした、ミスター」

そういつて給仕したところのジルに風御門が問う。

「・・・アヤくんは、いつだい？」

「アヤは・・・暫く出てきませんよ？」

ジル曰く、先日から呼んでいる招待客と共に練り歩いているとか。もちろん、表の顔で。

そう、そうだった、と思わずため息。

学園内で生徒総代と元帥といえはきわめて代表性の高い公人であり、一般公開日であればその自由はないに等しい。

風御門は地道な努力によりその責を元帥に振り分けたのであるが、元帥は己の責務と振り分けられた責務を一気にこなすつもりとの事。本日の時間はないに等しいことだろう。

この恨み、どこに持ってゆこうものか・・・。

暗い笑みを引きつらせて、細かく笑う風御門をステアは喜ばしそうに見ていた。

本日の招待客である今の首相とUN選抜委員長殿と静岡県知事と対面した。

はつきり言えば何の付き合いもない人間だが、元帥職と共に招待義務が生じた人間関係だ。

つまらない小僧が案内しても相手の不興を買うだけなので、リニア駅にてお出迎え・入り口で握手・学園マーク入り文具一式を何セットか紙袋に入れて渡したところ、大層喜ばれた。

なんでも、友人知人から何セットか頼まれていたのだが、この一般公開日ではそれも望めず、さりとて一番行きたい所が購買では格好も付かなかったというのが実際のところらしい。

公務に当たっては希望などいえたものではないのだが、ソレを汲み取ってもらえてうれしいとか何とか。

学園内に各々の行きたい所があるということがたので、それでは流れ解散にしますかといったところ、表立ってソレは不味いという。

公務だからなあ・・・とおもったが、ちょこつといい物を出す。

それは昨晩元帥府で余興に使ったサングラス。

三つほど出して小さな声で言った。

「お忍び、ですね。」

で、満面の笑みと共に流れ解散となり、僕はせいせいとしていた。これで何とか身内に時間が使えるというわけだ。

昨日は色々あった身内の案内を本日行おうと連絡したところ、嫌なメールが来た。

曰く「昨日は色々と回ったから、今日は『アヤ』さんに案内してほしいわー／清音＆グッテン 追伸：麗人喫茶にて待つ」

がつくりと肩を落とす。

何とか勘弁してほしいなーとメールしたが、まったく相手にしてくれる様子は無いようだ。

ああ、仕方ないなー、と顔をしかめてシューターを探した。

風御門はひどく驚いていた。

麗人喫茶入り口に現れた二人の女性を知っていたから。

一人は一昨年・昨年と世界の教育界を阿鼻叫喚に陥れ、学園受験における最大の謎といわれる在野の教師、キヨネ・アマノガワ。

そしてもう一人は西側経済会における最大の巨人、沈黙の老怪人、ドイツのあの人であった。

二人は談笑しつつ、風御門の席の隣に座る。

ミス清音が手元の端末で何かを打ち込んで、向かいに座るあの人に見せると、なぜか二人で笑いあう。

洋子にコーヒー二つをオーダーしたところで、初めてこちらに向かつて微笑んだ。

「あら、こちらは生徒総代の風御門さんですね？」

電話帳のようなパンフレットのはじめに書いてある挨拶の写真を引つ張り出して指差すミス清音。

ほほー、と覗き込むようにあの人が風御門を見つめる。

「じゃ、こっちの可愛い娘さんが、妹のステア嬢だね。」

しみのある笑顔で少女を見るあの人。

ステアはまるでコンクリートで固められたかのようにがちがちだ。

「ここでは顔は通っていないと思ったんだけどねえ？」

苦笑のあの人。

「無理ですわ、西側経済界に関わる方なら、当然ご存知の顔ですもの。」

ミス清音は笑顔で言うが、その先の言葉を聞いて風御門は耳を疑った。

「わたしは全日好きのドイツ人だとばかり思っていましたけどね、最近まで。」

「新日だって好きさ。・・・まあ、最近のリアル路線は好きになれないけどねえ。」

（全日？新日？　ね、なんなんだ？）

政党だろうかと思つてゐるところで、コーヒ―を持って来た洋子が風御門の耳元でささやく。

「全日・新日は日本のプロレスの団体です。ミスター」

目を見張つて洋子を見ると、彼女は苦笑で更に言う。

「グラマンは以前、空母の甲板で気に入らないやつをジャイアントスイングで海に叩き込んだことがありますから。」

目をぱちくりして風御門があの人を見ると、彼女は崩れた笑いで答える。

「信じられないかい？」

コクコクとうなずく風御門に向かい、老女は動いた。ソレはまるで疾風のごとくに。

軽やかな和装のアヤの格好で、急ぎ特殊教室に飛び込むと、凄い絶叫が響き渡っていた。

思わず眉を寄せ胸元のピンマイクのスイッチを入れる。

『お客様、おきやくさま。店内での暴行行為は禁じられています。速やかに暴力行為をおやめください……。コブラツイストはだめだつてばあ！』

そのアナウンスに答えるかのように絶叫が響く。

[XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX]

oooooooooooo!!」

「いやだねー、こんなの遊びだね。」

そう言った老女が、流れるように体勢を変える。

燦然と輝く日本プロレスの歴史の中で、栄光と歌われた芸術的スベシャルホールド。

オクトパスホールドといわれたその技が、店内で燦然と輝いた!

「これが、わたしの得意な『正固め』だぁー!」

「お、おにいさま、おにいさま、早くギブアップを!!」

びくびくと痙攣する生徒総代を見、思わず合掌。
成仏してください。

みれば、周囲の我がチームも手を合わせていた。

泡を吹くミスターをそのままステア嬢の横に座らせて、僕は二人の正面に座った。

無理やりくつつけた席で、ミスター・ステア嬢・グッテンネーサン・センセが座る。

そこで皆が深呼吸。

「いいじゃないか、りょうちゃん。」

「ええ、とても周りと違いますね。」

「・・・えっと、ねーさん。一応私は『アヤ』ということ。」

おもわずにやついたねーさんは、満足そうに頷く。

「え、っと、はじめまして、イズミィアヤさん?」

当惑がおのステア嬢に、僕は微笑んだ。

「こっちの顔でどころか、会話しかしていませんものね。はじめまして、ステアさん。」

お互い会釈の中、僕の背後から一人の男子生徒が現れた。交流はないが、顔見知りだ。

「あー、あやさん。」

につこり微笑む僕に、男子生徒は聞いた。

「ミリアムさんは、今日非番なんでしょうか？」

えらい爆笑が僕とステア嬢からはみ出たが、不思議そうな顔の男子生徒はソレを肯定ととったようだった。

「・・・できれば、彼女を、彼女を・・・」

「あー、むりむり。」

思わず言う僕に、男子生徒は絶望的な表情。

「・・・もう決まった人がいるんでしょうか？」

「んー、まあ、気になるなら彼女に投票してむるのね。絶対分かるから。」

「もう投票しました!!」

びしっと敬礼した男子生徒に、西側経済界の怪老人は聞く。

「・・・その、投票ってのは、何の話だい？」

異常なまでの気配に臆した男子生徒であつたが、ちよつと深呼吸してにこやかに答えた。

このへんは紳士教育の厳しい教育風土で育つたことが伺える。

「はい、今年行われる学園モストユーティーコンテストでは、出場枠を学園全員に広げ、完全推薦制で行われることになったんです。」
「ほお？」

先を続けるといふ仕草に、男子生徒は不思議と逆らえる気持ちを失わされていた。

「そこで、学園祭内で見つけた美しい人を、どこでいつ見つけたかを記入して投票することになったんです。それにより、学園の真なるモストビューティーを決めようというものです！」

「ほーほーほ、そうかいそうかいそうかい。」

きらりと光る瞳で、ねーさんは周囲を見回す。

「美しい人ねえ……。」

にやりと笑うねーさんは、僕の耳元でささやく。

「ねえリヨウちゃん。このなかにリヨウコさんが来れば、ソレはソレは美しいだろうねえ。」

なっ！！

思わず絶句の僕に、ねーさんは深い笑みを浮かべた。

第十六話 学園祭（後書き）

続きは一時間後の予定です

第十六話 - 2 学園祭続き（前書き）

今回はちょっと短めです。

第十六話・2 学園祭続き

僕・センセ・ねーさんと何故かステア嬢を伴って、正式ルートの元帥府事務室にやってきた。

そして僕たちは、専用エレベーターで元帥執務室にやってきた。最近の別名、宴会場なんです。

その仮眠室が現在センセが宿泊している部屋で、センセが普段使っている化粧品やなんかが色々とそろえられている。

そのなかで封印もあけていないトランクを引っ張り出したセンセは、にんまりと笑ってその中身を出す。

それは見慣れた黒いウイグと真っ白な着物セット。

「まあ、素敵な御衣装ですわ・・・」

感嘆の息のステア嬢であったが、僕はげんなりとしていた。

ああ、この衣装ってセンセが持っていたのね、と。

今年の凱旋休暇のときに引っ張り出したこの着物、その後家に寄ったときに見つからなくてどうしたものかと思っていたのだが。

それに、どこから持ってきたのか、リョウコさん愛用の日傘まで持ち出してますよ。

ああ、なんだかなあど頭を抱えたのだが、それよりもいやなことがある。

「この格好をして何か変わるんですか？」

「そりゃ変わるさ。わたしの知らない『イズミ』アヤ』なんていう小娘が投票されるより、わたしの大切なリョウコさんが投票されたほうが気持ちいいからさね。」

無茶苦茶自分本位ですよ、このひと。

「せんせ、なんでこんなものを持ってきてるんですか？」

「そりゃ、あたしが面白いからよ。」

・・・この人も自分本位、まんまなかだし。

「あ、あ、あの！　これをアヤさんが着るんですかあ？」

アー、その、どうへんじしようかなあ・・・そう思っているところで、ねじ伏せるようにセンセとグッテンねーさんがいう。

「あつたりまえじゃないか」と。

がつくりうなだれた僕だった。

気づいてみれば、そこは麗人喫茶の厨房の奥、シューターへの連絡部屋であった。

西側経済圏における最大の権力者によって落とされた彼は、軽い貧血を覚えていた。

頭を振り身を起こすと、そこには着替え途中の女性、いやいや女性に仮装中の男がいた。

「あ、ミスター。お気づきになりました？」

そういったのは、ジェニーへと変貌しつつある「」であった。

「あ、ああ。なんとか、正気になった気がするよ。」

深いため息と共に身を起こした彼であつたが、少しだけ頭が揺れていた。

「ミスター、もう少し休まれてはいかがですか？」

そうもいかない、と苦笑してその部屋を出ようとして、はたと気づく。

妹はどうしたものか、と。

「ああ、ステア嬢でしたら……」

人口声帯を吞んで、かわいらしい女性の声になったジェニーは言う。

「……グランマとミス清音と一緒に回ると伝えてほしいと伝言なさってましたよ？」

げふ、と思わずむせた。

苦しげにむせきつた後、助けを求めるようにジェニーを見ると、彼女は苦笑していた。

「ご安心できるかどうかわかりませんが、一応、一緒にアヤもついでいってますので、無茶はないかと……。」

それを聞いたミスターは、ばね仕掛けの人形のように跳ね上がり、部屋を飛び出した。

（学園で最も危険な人間がそばにいて、安心など出来るものか！）

こみ上げる声を飲み込んで、ミスターこと風御門は走った。

シューターから出ると、そこにはジェニーが立っていた。

呆然とした表情で僕を見ている。

その表情に何かを見取ったセンスとねーさんは、何故かハイタッチをしていた。

何だろう、と思った僕は隣のステア嬢を見ると、彼女は朱をさしたかのようなほほに手を当てて、忘我の視線をこちらに向けている。思わずため息をついたところで、ジェニーが驚きの声を上げた。

「りよ、りようか、リヨウなのか！」

完全に素が出ていたので、思わず僕は口を開いた。

「こらこら、ジェニー。素が出てるじゃないかい。それはメイクを落としたときだけってな約束じゃあなかったかい？」

あたかも頭の中にリヨウコさんがいるかのような台詞回しに、僕も驚いたがグッテンねーさんも驚いた。

「やだよ、ほんとにリヨウコさんじゃないか……。」

ちょっと涙ぐむ彼女を横に、ジェニーは顔を真っ赤にして風体を変えた。

「……あ、はい、えっと……了解です。」

ちゃ、と敬礼した彼女は、あたかも女性仕官のような身振りであ

った。

どうやらこの格好で練習していたらしい。

「あたしゃあ、ちよつくら身内とお客さんの相手をしてるから、店のほうは気を入れておやりよ。」

につこり微笑んで僕が言うと、真っ赤になったジェニーが「了解」という掛け声と共に店へと飛び出していった。

「うつわー、凄い威力じゃないですか。リョウコさんで、こんな凄い人だったんですか？」

清音センセの問いに、嬉し涙のねーさんが僕の腕にかじりつきながら答える。

「そうさ、そうだよ、これだよこれなんだよあー。」

ぶんぶんと身を振るねーさんは、まるで少女のような喜びを表している。

「あ、あ、あのー！」

「なんだい、ステアじょーちゃん。」

反射的に僕が答えると、彼女は全身真っ赤になったかのような表情で聞いた。

「・・・おば様と反対の手、お借りしてもいいでしょうか？」

悪いはずもなく、僕が手を差し出すと、彼女は気絶寸前の調子で手を握り、ひられるままに後を突いてき始めた。

このまま男子トイレにはいつても気づかないだろうなあ。

どこを探しても、リヨウ・イズミの一派は見当たらなかった。

奥の手であるアマンド教授にたよったものの、今日は一度もインターセプトしていないとのことだった。

イブやレンファも同様だそうだが、彼女たちは既にミスコン投票数上昇のための運動にかかわっているのです、探すこともままならないそう。

なんとも不気味な話だ。

本来なら、本日より政財界関係者のエスコートをしているはずのリヨウ・イズミは、ふらりとアヤとして現れ、そして妹をさらっていった。

調べてみれば見るほど恐ろしいことで、政財界関係者は、こぞつてリニアホームから先の所在を消失させている。

全てはあの男の差し金だろう。

ふらふらと巡回するよりも、個人個人でお楽しみいただけるプランを用意しましたとか何とか言っ、マーカーや監視の目をジャミングさせているに違いない。

そのくせ国連三軍の情報部で所在は押さえているのだろうことが疎ましい。

なんと悪辣な人間に権力を与えてしまったのだろう。

そのうえ、我が妹まで毒牙にかけようとしているのだとすれば・・・。

「……指の一本でもつめてもらわねばなるまい……。」

最近好んでみている仁侠映画を思い出し、暗い笑いを浮かべたところで、移動する人ごみを発見した。

その中心では、ひときわ高い位置に黒髪をまとめた人がいる。間違いあるまい、そう思い、力強くその人ごみを掻き分け始めた。

麗人喫茶から出て練り歩くと、面白いぐらいに人ごみが出来たが、なぜか三人分ぐらいの空間が周囲に出来ていた。

ミスズ曹長によるものか、とも思ったが、そういうわけでもないことを思い出した。

そう、僕の体臭によるバリア効果というやつだ。

なるほどなるほどとニヤニヤ笑うと、何故かこちらを見ている人間も微笑んでいる。

「なんだい、あんたら。なんかようかい？」

そう問うと、問われたあたりでぶんぶんと首を振る。

まあいいさ、としやなりしやなりと歩みを進めると、左右の女性もそれに付き従う。

方や、西側経済界における最大の巨人、方や、恐怖の生徒総代が妹。

で、背後には人間山脈系の美女がいる。

ひと、集まるわなあ……。

で、そんなまったりした集団を書き分ける人影を見て、僕は内心呻いた。

あの煌くばかりの銀髪は……

声も出さぬ間に現れた人影は、びしっ！と此方を指差して叫ぶ。

「我が妹を毒牙にかけんとする不埒もの！ この場で成敗してくれ……」

最後まで言い切る前に、彼は固まった。

ぶるぶる震えているのは、どんな感情ゆえだろうか？

ゆっくり、ゆっくり、指差す姿勢のまま近づいてきた彼は、震える声でその名を呼んだ。

「りよ、りようこ・・・りようこさま・・・？」

苦笑で笑むと、男は飛び上がった。

正面に向かって両手を広げ。

背後の台詞が『ふじこちゃ〜ん』とかになっているのがわかる調子で！

げっ、と思わず顔をしかめた僕と同時に、二人の人影は動く。

方や、空中からの彼を、そのままに地面へ叩きつける老婆。

方や、叩きつけられた彼を、ストンピングし続ける少女。

凄い息の相方だよ、きみたち。

ひとしきり彼、ミスターがボロ雑巾のようになったところで、老婆と少女が手を握り合う。

世界一怖いたったね、あなたたち。

元帥府専属の医療部門にて治療をされたミスターが目を覚ましたとき、彼は涙ぐんでいた。

夢ではない、と何度も繰り返すその姿に同情をするが、こっちもいろいろと事情を持っているので素直に受け入れてもあげられない。

「で、誰と似ているんですか、ミスター？」

人口声帯を入れていない肉声で声をかけると、彼はびっくりと体を震わせて此方を向いた。

ごしごしと顔を拭いた後、じっくりこっちを見て、そして掠れる声で聞いた。

「……リヨウイズミ……か？」

ええ、と頷くと、彼はこの上もなく沈み込んでいった。

「で、誰に似てるんです？ この格好」

ため息と共に、一昨年東京であった「リヨウコ」という女性に似ていたのだと言った。

「ああ、その人、多分、僕の母ですよ。」

そういったところ、びっくりと身を起こして此方を向いた。

「あのひとつてば、凄い面白がりで。一昨年、凱旋休暇したときにイブとレンファの入学記念パーティーにもぐりこんだんですけど、やりすぎたって言うてどこかに雲隠れしましたから。」

ふらふらしていたミスターの頭は、ぴたりと止まった。
聡明な瞳に戻っていた。

「リヨウイズミ。……彼女の夫は素晴らしい人かね？」

「さあ？ 僕も幼いころに死に別れていますんで、どんな人は……」

小首を傾げた僕の両手を、ミスターはぎゅっと握って涙を流していた。

「それは寂しかっただろう、それは辛かっただろう！」

ぶんぶん握った両手をシェイクして、まじめな顔で彼は言う。

「これからは、僕が君の父となるう。」

は？

「いやいや、遠慮することはない。このところ君からのアプローチの多さに何かあるものと思っていたが、君自身が気づかぬとしても私にはわかる。君はまだ見ぬ父性を求めているのだよ。」

輝く笑顔で、歌うかのように、軽やかな笑顔で踊りだすミスター。

「さ、遠慮なく僕の胸に飛び込んでおいで!!」

思わず一步引いた僕の横から、一条の矢が彼を襲う。

矢の名はステア。

弓の名はグッテンねーさん。

見てないけど間違いあるまい。

あたかも空気の抜けたゴム鞠のように、何度もいびつにバウンドするミスターを見て、僕は再び合掌した。

完全推薦性という馬鹿みたいなシステムのせいで、集計は凄い手間取っていた。今年度はじめから始まったファンクラブ連合

の総力をもって、最終時間に間に合いつつあった。

本日はじめから集計リストトップにいたのは、ミスコン例年上位のマギー＝トレモイユであったが、彼女自身はトップでいることに不満であった。

なにせ、彼女にはわかっていたのだ。

いまだ分類不明で集計結果に結びついていない他の人間への投票が喰っていることを。

しかし、その日の昼間では、上位ランクの大半をミスコン喫茶のトップビューティーが占めていたので、多少の安心があった。

が、午後二時を越えた時点で得票集係数が凄い勢いで競りあがってゆき、それにあわせて凄い勢いで名前が上がってきた人間がいた。その名も『イブ』ステラ』モイシャン』『リン』レンファ』

今年のミスコンの啓蒙活動に出ていた彼女たちは、その活動中に培った得票により一気に順位を上げていたのだ。

いまだトップテンに入ったという程度だが、マギーは全く安心できなかった。

なにせ、得票内容を見てみれば、その内容は全て『イブ』『レンファ』と完全に分類できるものばかりであったから。

（ヴァンとウォンの投票がつかっていないなら、半分も入っていないのと一緒に！）

そう、この学園祭の中で、ほとんどあの二人は男装でいたのだ。その得票が全く表に出ていないのなら、本当の得票数とはいえない。

さらにもっと不気味なのは、『イズミ』アヤ』の存在だ。

学園内で爆発的な人気があるはずの彼女の得票数が、全く見えていないのだ。

マギーの概算では、この一般公開日に至る前で既にトップスリーに入っていないはずなのにはずなのに。

なぜ、と思っているところで知らぬ名がトップテンに入ってきた。

「・・・麗人喫茶のミリアム」

そう、初日にコーヒーの入れ方を教授してきたメンバーだ。

対外のリヨウチームと女装キャラとの関連付けが出来ているはずなのに、彼女だけが正体知れずであった。

その彼女が、ぐいぐいと得票を伸ばしている。

多分、麗人喫茶ファンによる組織票だろう。

ふと見てみれば、麗人喫茶メンバーが何人もトップ20に入ってきている。

これだ、これがイズミ・リヨウチームの怖いところだ。

既存の常識を破った研究室技術の大量投入と、異性同姓の嗜好を極限まで意識したプロデュース。明らかにオーバークオリティなのだ。

その結果が着々と得票となって出ている。

悔しいが、来年以降は裏方に回って戦ってみたい相手である。

半死半生の表情で、中央広場の電光掲示板を見上げるミリアムは、ぐいぐい順位を上げる自分の名を半ば誇らしそうに見ている。

アヤの名がまだトップ20にも入っていないのを見て、僕もちよつと嬉しかった。

やはり性反転馬鹿企画の中に身をおけば、僕の魅力などないに等しいわけだよ。

からんかからんか笑っていたのだが、隣のねーさんは不満そうであった。

「なんでリヨウコさんの名前が無いんだい？」

結構むっとしているところで、ミスコン運営委員のやつらがフラリと僕の目の前に会われる。

「あの、お写真、よろしいでしょうか？」

ん？ と小首をかしげたところで、ぱしゃ、と一枚。
そのうえで名前を聞かれたので答えると、いきなり電光掲示板に
それが現れた。

「ミセス リョウコ」

順位は・・・9位。
げえ・・・。

思わず顔をしかめると、その横のねーさんも苦り顔。

「なんだい、9位程度かい。」

いやいやいや、今日一日だけの活動でこの結果は恐ろしいんです
が。

そうささやく僕に、ねーさんはささやき返す。

「そんなのはわかりきってるんだよ。それでもリョウコさんはトッ
プじゃないといけないんだい。」

駄々っ子の言い分であつたが、ねーさんの思い入れの深さなのだ
ろうと言うことで放置した。

「あれ、イズミ」アヤちゃんの名前が無いんだけど？」

そういったのはセンス。

「まあ、性反転企画のオカマバーにいれば、いやでも鍍金が剥がれ
ますって。」

そんなことないわよーと言いつつ、センスは携帯片手にどこかと

会話していた。

「・・・あ、あなたですか！写真提供者は！！！」

そういつて現れたミスコン運営委員会は、先生の携帯に自分の携帯を向けた。

「・・・はい、確かに！」

そういつて走り出すと、すぐに順位へ反映された。

「イズミ」アヤ（ディフェンディングチャンピオン）」「二位」

・・・二位ですって？

思わず倒れそうになったところで、運営委員会からの説明。

「今まで、本人確認が出来ない状態でしたが、写真による複合情報確認の結果、イズミ」アヤ得票の大量認知にいたしました。現状、情報確認が出来ていない人もおりますので、どんどん写真情報をお寄せください。」

すると、みるみるイブとレンファの順位が上がっていった。

ともすると、いつの間にかアマンダ教授の姿もランクに入っている。

去年の再来か？ と思っているところで、思わぬ人物も入ってきた。

「ドロレスファイランドアース」「18位」

「テルマ」フレイッシュ」「19位」

ああ、ロリータはコアファンが多いからなあ・・・

そう思ったが、テルマもファンが多いのかな、と思う。

さてさて、誰が優勝するのやら、と思っていたところで、いやな名前が順位外に入っていた。

「あ、なーんだ。やっぱりやってたんじゃない。」

センセの視線がそこでとまっているのを、苦笑で僕は見ていた。そこには「フレイバー少佐」とあった。

集計が進むにつれ、混乱は混乱を呼んだ。

まず、混乱の原因は表の顔と裏の顔、さらにもっと裏の顔のある人物が多すぎるのだ。

イブやレンファはもとよりうちのチームは完全に二人分の顔があるし、僕にいたっては、ドンナ得票を得ているのかもわからない状態だった。

とはいえ、完全なトレーサーがあるわけではないので、意思表示や行動発言を集計した結果、マギートレモイユはかなりの得票を伸ばしていた。

主に一般参加人員からの得票で、道を案内したり老人を介護したりという行動がプラスになっていた。

既に2位の「いずみ」あや」とはトリプルスコアで引き離しており、何年かぶりの女王に返り咲くのかと思われたそのとき、凄いサイレンが鳴った。

「発表です！ ビューティーコンテストの趣旨に合わないという理由から排除されていた得票が生まれました！！ 得票『ヴァン』は『イブ』ステラ『モイシヤン』、得票『ウォン』は『リン』レンファ』であることが確認されました！」

おおおおお、と低いどよめきと共に、電光掲示板の順意表が入れ替わる。

得票数の桁がそろって、1位マギー、2位レンファ、3位イブとなっていた。

すげー、デットヒート。

そう思っていたところで、運営委員会のルーキーがひょっこり現れた。

「あのお・・・もしかして、リヨウコさんって、アヤ先輩ですか？」

目ざとい人間がいるものだと感じて頷くと、凄い勢いでルーキーが走り、そして再びサイレンが鳴る。

「ニユースです、発表です！！　今までなその人物とされていたビューティーの正体が知れました！！　なぞの貴婦人リヨウコさんは、なんとイズミィアヤ先輩でした！！！」

きゃーとかぎゃーとか言う声と共に、何人もの婦女子に囲まれてしまった。

「きゃー、せんぱいすてきですう」「いやあ、せんぱいってばうるわしい〜」

耳がつぶれるかと思う嬌声が、瞬間的にやんだ。
見れば凄い目でねーさんが周囲をにらんでいる。
こえー。

「・・・そこで、順意表には連名で加算させていただきますー！」

そう言った発表と共に、僕の順位もあがった。

1位マギー、2位レンファ、3位イズミィアヤ 4位イブとなっていた。

あ、会場の端からイブがこっちをにらんでる。こえー。

とはいえ、得票の取りまとめはこんなところでおしまいかと思っ
ていたところで、協議を始める運営委員会。

なぜかルーキーをどこかに押しやっている。
いやな予感がするなあ。

全ての集計が終わって、演台に呼び出されたトップテン。
面白いことに知っている顔ばかりであった。

トップのマギーに加え、我がチームのイブ・レンファ。

さらに加えて、ジェニーと洋子、レイフォウが入っているのが笑える。

そして僕（イズミィアヤ）とアマンダ教授が在校生組みだとすると、それに加わるニューエイジは心強かった。

勝負宣言をしたテルマと、妹分ともいえるロリータがはいっていた。

この演台に上がる段階で順位が隠されていたが、事前情報を考えれば、1位マギーで決まりだろう。

これで目の敵にされることがなくなるかと思うと嬉しい限りだ。

下位から発表される順位は、10位ジェニー、9位洋子、8位ロリータであった。

三人そろって並び、客席に向かって礼をすると、一人ロリータが泣きじゃくり、二人の女装が慰めていた。

ルーキーは女の友情と思っているが、内情を知っている人間でロリータを思っている男子はどう思っているのやら。

さらに続く発表で、7位レイフォウ 6位テルマ 5位アマンダ教授 が発表され、テルマは負けたとうなだれた。

残る発表で、すぐさま呼ばれたのは僕、「イズミィアヤ」だった。当然の結果に安堵した僕であったが、イブもレンファもマギーも不満そうだった。

いや、不満と言うよりも納得がいかない風だった。

いいじゃないか、本当のミスが決定するんだから。

そう思ってたニコニコしているうちに、3位がイブと発表された。

悔しそうにしていたのは一瞬で、僕の横に立ってにやにやしていた。

そして、ミスが発表される。

真っ暗になった周囲、響き渡るドラムロール。

盛大なファンファーレと共に発表されたその名は・・・

「マギートレモイユ!!」

鳴り響く拍手、盛り上がる会場。

マギーも嬉しそうに・・・していなかった。

はいはい、静粛にと手を皿いだ彼女は、マイクを手にした。

「じゃ、これで『幻美人』プロジェクトは終わりね?」

その言葉に答えたのは、審査委員長席に座った学園長であった。

「そうだな、そのようだ。」

がつくりうなだれた彼女は、運営委員会を指差す。

「じゃ、さくつとつなげて。」

けだるそうな手振りに合わせて、マスクされていた電光掲示板が表示された。

発表どうりの内容であつたが、10位以下の名前が煌く。

「フレイバル少佐」「11位」

「イズミ・リョウ元帥」「13位」

「名称不明」「14位」

チラッと電光表示を見たマギーは、マイクに向かっていった。

「まず、名称不明のこれは、ルーキーの『甘味所』に出向していた『イズミ・ミアヤ』だから加算して！」

たん、とドラムひと叩きで、イズミ・ミアヤに加算された。
すると『アヤ』の順位が一つ上がる。

「で、このフレイバル少佐っていうのは、演劇喫茶で上演された役だけど、中身はイズミ元帥なので、加算」

ルーキーたちの「えー！」というBGMを背後に、ドラムがだんだんと叩かれた。

すると「リョウ・イズミ」の名前がトップ5入りする。

・・・ざつと計算し始めた僕は、血の気が引いた。

前に出ようとしたところで、両脇に立っていたイブとレンファに抑えられる。

「・・・さて、ここまでの順位はたいした波が無いけれど、ここでもう人波乱起こしましょう。」

そう言って指を鳴らすマギー・トレモイユにあわせ、イブとレンファが僕を押し出した。

「なんと、この『イズミ』アヤ』は・・・。」

むりやり剥ぎ取られる「おかっぱウイグ」。背中を叩かれて吐き出された人口声帯。

すばらしい早業でかけかえられたメガネ。

あ、いかん、もう成されるがままジャン。

最後に両方から押されて、とつとつとマギーの隣まで前に出た僕は、既にあきらめていた。

何せ、これで最後なもの。

すつと背を伸ばし、マギーから渡されたマイクを片手ににっこり微笑む。

「あー、楽しんでもらえたかな？」

きゃーだかぎゃーだかわからない悲鳴の後、僕の背後に寄ったレイフォウ・洋子・ジエニーも人口声帯と鬘をはずす。

「や、今回は審査員が出来なくて残念。」「どうだあ？ いるぽかつたかあ？」「ちよつとくせになりそうだね、これって」

再び悲鳴渦巻く会場は、ここ以外への情報持ち出し禁止が声明されるまで、大混乱が渦巻いていた。

学園内から来賓が退去した後、校内全員に向けて放送があった。それは今年度当初から続いていた隠し課題の終了宣言であった。隠し課題の存在とその目的、そしてそれに対する姿勢など云々かんぬんが学務教頭から話されたが、その焦点は僕にとって全て一つに絞られる。

そう、『アヤの日』終了であった。

もう二度と嫌な格好で愛嬌を振りまかなくていいかと思うと、学園祭の騒動など軽いものであった。

たとえば、あの時以降、ステア嬢とねーさんが意気投合し、なにやら怪しいことをたくらんでいようと、パーティーのあと以降、教授陣の清音先生への視線が異常に熱かったことなんかも気にしないのだ。

いやーへいわってすばらしい。

平和ついでに、麗人喫茶の性転換メンバー当てクイズを学園Web上で行ったところ、誰一人正解者はいなかった。うちのチームの殆どはわかったらしいのだが、一人だけわからないとの事。

最も正解者のいなかった、いや、誰もがその正体をわからなかったミリアムについての怪情報は暫く収まることが無かった。

第十七話 元帥閣下のご乱心（前書き）

学園祭に比べると分量が無茶苦茶少ないです。

それでもアップしちゃいましたw

第十七話 元帥閣下のご乱心

「酷いです！！ あんまりです！！」

いつもの喫茶店で紅茶を飲んでいると、いきなり現れたテルマが叫びを上げた。

何事かと思っていると、彼女の背後にどやどやと人ごみが現れる。みなルーキー達で、女子も男子も入り混じっていた。何が酷いのが理解できなかったので、聞いてみると・・・

「なんでイズミ」アヤの日をなくしちゃうんですか！」
僕および周囲の仲間は絶句。

「は？」

「先輩は学園長の指示で、イズミアヤになる日を作っていらつしたはずです。でも、なんでそれをやめてしまうんですか？！」

「あー、どうも理解できないんだけど、どういうこと？」

そう言っただけでイブやレンファを見たが、まったく彼女たちも理解できないという表情であった。

「私たちのイズミ」アヤを返してください！！」

涙乍らの彼女の意見は、彼女の背後に控えるルーキー達の総意であるようだった。

僕はというと、思わず頭痛を覚え、こめかみを押さえていた。何と言ったものかと首を傾げたが、疑問が口からこぼれてしまった。

「君達は、僕とイズミ」アヤが同一人物だってわかってるんだよね？」

しぶしぶながら、本当にしぶしぶながらテルマは頷いた。

「で、この前のビューティーコンテストで隠し課題である『幻美人プロジェクト』が終了したのも知ってるよね？」

「我々は納得してません！！」

鼻息も荒く、テルマはずずいつと前に出る。
それにあわせてレンファが身を乗り出した。
最近彼女のクールな部分が消え始めている気がする。
それはそれで可愛いんだけども。

「あのね、テルマ。あなた達は、学園に挑んで負けて、イズミ」アヤに挑んで負けたのよ。その上で何を求めようというの？」
「私たちは飽く事無く挑みつづけます、それはイズミ元帥がお認め下さったことです！」

レンファとテルマが、視線で火花を散らしたが、僕がそれに加わることは無かった。

なにせ、今年度に入って、学園祭が終わるまでの間は全く気の休まる事が無い日々が続いていたのだから。

が、『幻美人プロジェクト』が終わったとたん、なんとも開放的な生活が待っていたのだ。これならば書類がちょこっと増えても文句は無い。

とはいえ、夏休み以降、元帥書類専門事務局が国連学園事務局に隣接されたため、仕事が減ったのなんのって。

今処理している書類の数を数えてみれば、・・・あれ？ クラウ

ディアさんが着任した当初程度の量だ。

なんだ、随分と書類を処理する速度が上がったなあ。

自分ひとりの世界にはまっている僕が、我に帰ると、いつのまにかテルマ達をひょいっと押しのけてクラウドディアさんが立っていた。以前ならば学園での立場は部外者だということで、学園生徒に対して一歩も二歩も引いていたが、今ではその面影も無い。まあいいことだろう。

「元帥、お時間です。」

書類整理の合間の休み時間が終わったのだといいにきたのだ。それでも後一時間も机に座っていれば仕事が終わる。なんと嬉しい環境だろう。

ニコニコしながら席を立つと、その前をルーキー達が固める。テルマや他の女の子達が涙を浮かべている。

「もう、イズミ！アヤ先輩にはあえないんですか？」

どうやら彼女達は、女装した僕を意図的に別人として扱っているようだ。

頑迷な話だと思う。

愚かしいまでの純真さは、いとおしくもある。

しかし甚だ迷惑だ。

でも、ここで声高に迷惑だといえない自分が恨めしい。

「そうだ、ね。ビューティーコンテストのディフェンディングチャンピオン再出場制度は廃止したし、入学式のホスト役もバーターで飛ばした。君達の隠し課題としての『幻美人プロジェクト』も終了してるからね。」

今にも泣き出しそうな彼女を正面に見据えて覗き込む。

「与えられたものに縋るものではないよ、テルマ。挑む相手は何も目に見えるものばかりではないのだから。」

その言葉に何を思ったかは解らない。

僕としては「イズミリア」に拘らず、新た強い人間関係に挑みなさいといったつもりだった。

しかし彼女は深く深く考える姿勢を見せていた。

元帥執務室で最後の書類を吟味していた。

二人の老人は、元帥府の事務処理組織の長的な扱いで執務室には常駐していない。

始めてこの部屋を使い始めたところと同じで、最近はクラウドИАさんと僕だけであることが多い部屋だ。

とはいえ、幻美人開始と共に使い始めていたので、よくよく教授連中が来ていたものだが、最近はおみかぎりである。

彼らが欲する書類の大半が初めに僕のほうへ来なくなったのだから当然かもしれない。

そんなこんなで僕の元帥職務は思いのほか楽になっていた。

「元帥、よろしいでしょうか？」

最後の書類をチェックしていた僕へ、クラウドИАさんが覗き込む。

「なんででしょう？」

「・・・元帥は、もう女装なさらないんですか？」

がつくりと僕は倒れこんだ。

「・・・とてもよくお似合いでしたのに・・・。」

「お似合いでもなんでも、僕はあのカツコウが嫌いなんですよ。」

「そうですか・・・。」

とても残念そうに、本当に残念そうに彼女は俯いた。

思わず何か声をかけようと思ったが、ここで何か声をかけようものなら、自分の立場が悪くなること請け合いなので、ぐっと我慢している、じっと彼女は見上げるように僕を見る。

「・・・本当に、ほんとうに、あのかっこうなさらないんですかあ？」

ぐっと眩暈のような何かを感じたが、頭の中でかにかが警報を上げる。

『危険、危険！』

この種の危険は数々潜り抜けてきているが、今まで同種の危険を感じたことが会った気がする。

いや、これはおぼえのある危険だ。

瞬間、この警報の大元を思い出す。

「あ・・・、アマンダ教授の差し金ですね!!」

「ばれちゃいましたか。」

てへへと微笑む彼女は、今までの危険な雰囲気を感じなかった。

「元帥は手の内をご存知なので、十分気をつけるように言われているんですが、やっぱり引っかけりませんでしたねえ。」

なんてこった、元帥府内部にも敵が居たとは。

とつと書類をまとめて逃げ出すように部屋を出ると、外ではアマンダ教授が無表情に立っている。

「失敗、か。」

「失敗かじゃないでしょ！ 機密漏洩もはなはだしいんじゃないですか？！」

「果敢なる挑戦だよ、うん。」

「それはルーキーの合言葉です。」

がつくり肩を落とす僕の背後からクラウディアさんが微笑むを浮かべて現れた。

「もう少しだったんですよ。」

「ふむ、これから手を変えねばならんな」

あれやこれやと話し合う、二人の女性の背中を見て、僕がげっそりとしてしまった。

「単位不足？」

教授会に呼び出された僕は、思わず聞き返した。

「そうだ、君の取得単位が不足する可能性が高い。」

な、なんで！ と僕は手元の手帳を引っ張り出して、一気に単位

計算を行った。

しかしどう計算しても取得している授業単位に不足は見られないが、教授会が提示した単位は目を剥くものであった。

「な、なんですか？このアマンダ研授業出席単位不足というのは！」

「君自身は取得していない単位だがね、もう一人の君が受講しているではないか。」

「あ、あれは、別人でしょう！！」

「いや、君は君自身の発言で彼女が君自身であるといっている。昨年彼女が得た単位軽減考慮も君自身が得ている。ならばその逆もしかりだろう。」

「な、な、そんなあゝ。」

無茶苦茶である。

「とはいえ、本気で我々も受講せよというつもりは無い。我々は君自身には多くの借りがあり、それを返せる機会を虎視眈々と狙っているのだからな。」

「わざわざ波風立てて、助けてやるから恩に着ろというのはどうでしょうねえ。」

「ふむ、そういう見解もあるかな？」

「まあ、一見解のひとつにすぎんな」

いつもは顔を真っ赤にして怒鳴りあう教授たちが、にこやかに微笑みあって互いの意見を肯定しあっている。

なんとも気味の悪い光景だ。

そんな教授たちの中で最も背筋の冷たい表情をしているアマンダ教授は言う。

「なに、そんな難しい話ではないのだよ、リヨウ・イズミ。我々の学習能力上昇計画に一口乗ってくれるだけでいいのだ。」

「ご存知の通り、わたくしリヨウ・イズミは、元帥職務遂行と学業推進のために、極めて多忙な日々を送っております。」

「ふふふ、貴様・・・最近時間に余裕があることは調べがついておるぞ。」

そういつて取り出したのは、アマンド教授の下部研究組織の報告書まとめであった。

「ここ数週間平均で一日の元帥拘束時間は5時間半、それも飛び飛びに入っている。それもこれもクラウディア女史の配慮によるもので、実際はもつと短くなるであろう事は重々理解できる。・・・最近仕事も無いのに元帥職務だといって逃げ出して、職務室で惰眠をむさぼっておることも調べがついておる。」

ぶつ、と思わず吹くと、アマンド教授が満足そうに微笑んでいる。

「僕の人事権を教授会は左右できません。」

いまさらながらの一言を言ったが、全く応えている様子は無い。

「なに、貴様が惰眠をむさぼっておる時間を、可愛い後輩のために使えといっておるだけだ。」

「だーからー、プライベートな僕の時間というものがですねえ。」

「やかましい、とつとこの皮を着ろ。」

ぺしつと投げ渡されたのは、久永タイプ11。
着慣れたきぐるみだ。

「それを着て受講すれば、双方の単位を認めよう。」
「そうそう、我々も依存は無い。」

ちかづいて、ヒサナガスーツの尻を撫でるエメット教授。
このおっさんは全く応えていない。

「思いつきり僕の単位を教授会全員で人質に取るうって言うんですね？」

「人聞きの悪いことを。」

「勝手に在籍させた教授会と学園長の策謀を、あたかも僕の責任かのように見せて。」

「・・・ひ、人聞きが悪い・・・」

「一般の学生の生活が無茶苦茶にして・・・」
『きみきみ、自分の立場を考えたまえ』

全員で僕に突っ込みが入る。

「？」

「我々教授会が人事権を持っていない人間など、この学園で君たちのチームだけだ。さらに言えば、元帥称号を持っているのは君だけだし、次期生徒総代に押されているのは君だけなんだ。」

「生徒総代については、風御門先輩の思惑であって、僕の立場とは別です。」

「君は、自分や自分の周りを不当に低く評価しようとする傾向があると報告を受けているが、本当にそうだな。」

「ごしごしと顎をさするチャン教授。」

「君、及び君の仲間は、いま学園内で最も注目されている集団であることに間違いない。外の柵を加えてみれば、君たちの動き一つで

世界自体が動くといえるだろう。」

「お、大げさな話は・・・」

「君の縁者、西側経済界のトップたる彼女の存在だけでも、UN三軍は君を手放さないだろう。」

「・・・・・・・・」

「学園から出て行く情報は硬く閉ざされている。しかし、学園に入ってくるデータはいかなようにもできる。知ることができる。」

君の縁者自体の存在がなぞであったので判らなかつたが、この春から精力的な活動を始めたので分かつた次第だ。我々は君が思うほど無能ではないのだよ。」

つまり、情報のもとは国連情報局ではないということだ。
秘匿性が極めて高いことが知れる。

「さらに言えば、君の祖母にあたる『リヨコウサン』なる人物についても極めて興味深い情報が集まっている。」

おもわず咽てしまった。

「記録で一番古いのは明治当初の横浜。成人女性の姿での写真が残っているので生まれはそれ以前だろうが、恐ろしいことにそれ以降の写真は全て同じ姿であつた。」

ずらりと並べられた写真は全てバーちゃん。

黒髪であることや、きりりと結い上げられた姿などは昔風だが、顔かたちは今にいたるまで変わらない。

「君の祖母は何者だね？」

「りょうこさんですが。」

「・・・・」

会話になっていないことは自覚していたが、それで彼らは反論を窮した様だった。

りようこさん関係の一切の究明行為の停止と引き換えに、いやいやながら僕はある現実を受け入れざる得ない状況になりつつある。苦い顔でいつもの喫茶店に居ると、いつものメンバーが集い始めた。

左右に腰掛ける美少女二人は、苦笑のまま何も話しかけてこない。求めず、さりとて冷たくなり。恐ろしいまでに配慮が行き届いた人間関係。ありがたいやら、信じられないやら。

「・・・なんで思い通りにいかないのかなあ。」

呟く僕にイブは言う。

「面白い遊びを面白いルールで子供に見せれば、何度でもせがまれるのが道理よ。飽きるまでね。」

「僕は、僕の最善を選択しただけなんだ。もちろん、何もしないっていう選択もあったかもしれないけど。」

ちよこつと上を向いたレンファは、ゆっくりと僕のほうを向く。

「あなたって、最高のエンターテナーなのよ。皆を、とっても楽しくさせる。私たちも夢中だもの」

「・・・笑われてる自覚はあるけどねえ。」

「もう・・・似合わない落ち込みはやめて！　あなたは飄々とみんな

なの思惑の斜め上を行っていてくれなくちゃ！」

思わず、苦笑でイブを見る。

「なんだか過分な評価だねえ。」

「あなたが自分をどう思っていても関係ないわ。今までがそうだし、これからもそうだと確信してるもの。私たちは、私たちが思うあなたと共に行くわ。」

うつわーと思わず日本語でうめいてしまった。

つまるところ、私たちは、私たちが思うところのあなたと見つめる、苦しかったら這い上がりなさいってなわけだ。

本来ならそういう人間関係なしで学園生活を送っているはずだったのに。

いやいや、楽しいよ、こういう関係って。

自分を相手に独占される喜びというのを、彼女たちのおかげで知ったようなものだもの。

これを称して『愛』という清音センスが独身なのは、いささか腑に落ちない現実だと思う。

「・・・ごめんなさい、こういうこと言うつもりは無かったの。」

二人はうなだれる。

こういう風に言われては、男として動かないわけには行かない。たとえ彼女たちの背後に誰が居ても。

「悔しいなあ、僕はこうやって君たちに思い通りに動かされちゃう。」

笑顔で言う僕へ、二人の美少女は悔恨の表情を浮かべていた。

「いいよ、いいさ、君たちが差し伸べた手なら、迷わず握るよ」

ぽんつと二人の肩をたたく僕。

「りよ、りよう……。」

半ば涙も浮かべた彼女たちに微笑む。

「もちろん、斜め上に行かせてもらおうよ？」

柔和な笑顔を引く付かせた美少女というのは、間違いなく見物であつた。

こうなれば、破れかぶれ、だ。

そんな気持ちで僕は久しぶりのヒサナガスーツに袖を通す。

あつらえたような寸法で一体化。

女性の表皮器官全てを再現したかのようなそれは、ちよこつとバージョンアップしていた。

「耳まで覆うとは……。」

今まではあごの線まで覆っていたヒサナガスーツであつたが、とうとうあごの線から耳まで覆うこととなった。

顔は一切覆っていないので奇妙な装着感であつたが、耳の形が代わったのが面白い。

どこかで見た耳の形だなあと思っていたが、どうもリョウコさんの写真から形成したものらしい。

なんとなく覚えている形と一緒にだもの。

鏡に映るスーツの耳は望郷を感じさせたが、それはそれ、これはこれ。

さーて、はじけちゃうからな。

イズミ「アヤ再来を叫ぶ声が学園中に響き渡ったのはある朝のこと。」

すでにアヤの席として誰も座ろうとしない中央食堂の一角に人影を見たとの情報が舞って直ぐの事であった。

真っ黒なブラックコーヒーにトーストというスタイルは、在りし日を思い起こさせるものであったが、過去と違うものもあった。

彼女の横には元帥府所属の武官殿があり、すらりとした足を組みながら何らかの書類を処理していた。

あたかも一枚の絵のようなその姿に誰もが胸を詰まらせ、そして近づけないで居た。

「・・・では、また後ほど。」

一礼と共に武官殿が居なくなった途端、どっと人の波が押し寄せた。

「アヤ先輩！」

テルマは涙と共にイズミ「アヤを抱きしめる。

「わたし、わたし、とてもとても会いたくて、とっても会いたくてえ・・・・・・・・！」

滂沱の涙の少女。

その周りに何人もの少女が集まり、イズミ「アヤを取り巻く。彼女の号泣はテルマの頭を優しくなでるイズミ「アヤの姿と一枚になった。

完全なる復活、誰かが呟く。

そして誰かが叫ぶ！

「イズミ「アヤのふつかつだぁ！」

驚いたように顔を上げるテルマは、左右を見たあとで抱きしめたその人を見上げ、そして再び涙した。

航空物理学教室は、一種の躁状態になっていた。

イズミ「アヤがイズミ「アヤのままの格好で、イズミ「リヨウの席に座り受講していたからだ。

的確に、明確に応答する姿は一種感動であり、感涙しているものすら居た。

「まてまて、中身は・・・」

「中の人など居ない！」

黄の言葉に誰もが電光石火の対応をする。

「しかしだなあ・・・。」

「ばかもの！ これでイズミ「アヤが航空物理学研究教室のチームメイトであるという既成事実が！」

「・・・だめだ、話にならん。」

がつくりうなだれる黄。

ひそやかに汗を流し、薄着で肌を露出させるイズミ「アヤ。
冶金学の実習中、何の躊躇も無くもろ肌を脱いだ彼女を前にして
三人の生徒が鼻血を吹いて倒れた。
きよとんとするアヤを、何人もの女生徒が取り囲みつつ、女性の
壁の中でイズミ「アヤの実習が続く。

「ね、ねえ、アヤ。あなたのプロポーションって、どうやって維持
してるのかしら？」

思わず聞く女生徒に苦笑のアヤ。
中身の人を思い至った女生徒は、ただただ困惑、であった。

今まで、イズミ「アヤは元帥服をまとうことは無かった。
当然のことながら、元帥とイズミ「アヤの姿を同一させないため
の配慮である。

しかし、今日の元帥はイズミ「アヤ。
黙々と庶務をする元帥職務室に、ちょこちょこ書類の質問が現
れては消える。

「みなさん、その程度は、ご自分の判断でなさってください。」

硬い表情で言うクラウディアさんであったが、元帥府所属の研究
員たちは後を絶たず、苦笑で迎えるイズミ「アヤの表情見たさに通
うものすら居たという。

すっかり恒例の宴会にも、イズミ「アヤ」が登場であった。
上品に微笑むイズミ「アヤ」。

何の抵抗も無くお酌をして回るイズミ「アヤ」。
つまみが切れる前に、部屋付属の小さなキッチンでつまみを作る
イズミ「アヤ」。

ほろ酔い気味でほつれ髪のイズミ「アヤ」。
宴会メンバーはいつものチームばかりではなく、どこからか男子
寮・女子寮から人間が集まりつつあった。

「ま、なんだか大勢になってしまいましたね？　じゃ、食堂に移動
しましょう」

ぼむつと手を叩くイズミ「アヤ」。

人々は盲目にその言葉に従っていた。

なんの積もりかはしれないが、イズミ「アヤ」はここ数日アマンダ
研究室につめていた。

十年來の研究者のようなその素振りはいしたものだ、アマン
ダ教授は何らかの違和感を感じていた。

あれほどまでにリヨウ「イズミ」が嫌っていたイズミ「アヤ」の姿を、
ここ毎日見ているばかりではなく、中身の人は熱心にアヤをロール
しているのだ。

中身を良く知る教授ですら、はるか過去からイズミ「アヤ」の存在
と触れていたかのように思えている。

「教授？　どうなさいました？」

柔らかに微笑むアヤ。

抱きしめたくなる気持ちを抑えて、教授はにこやかに言う。

「では、行くぞ。」

そう、助教授格の人間が、研究室にいつまでも居ていいはずもあるまい。

研究資料をまとめて授業中研究室へ先に行くアヤを見送り、アマンド教授は晴れ晴れとした気持ちで周囲を見渡した。

きわめて良好なイメージと、そして爽快な授業であったことを誰もが共有していたはずであったから。

見渡し、見つめ、言葉を発しようとした瞬間、彼女は大きな違和感を感じた。

何かがおかしい、何かが変わだ、と。

あたかも………

見つめる、見つめる、見つめる。

そして見つける。

いつもならば最前列に居るはずの、二人の少女たちが、極めて遠い席に座っていることを。

顔色悪く、絶望的な思いを顔に出していることを。

「イブ・ステラモイション、リン・レンファ。君たちに何があった？」

存分に将来を期待していたし、彼女たちが望むのならば必ず研究室入りを許可するつもりであった二人は、思えばここ数日はれない表情をしていなかったであろうか？

思い起こせば思い起こすほどに腑に落ちない。

それは絶対に忘れてはいけないものを忘れてしまっているかのような、靴の上からつま先を搔くかのような、いらだたしい感覚。

アマンダ教授の表情を見て、二人の少女は今にも泣き出しそうなそれでいて安心したかのような顔をする。

「さすがは教授。完全にはかかっていらっしやらないようですね。」

真っ青であった表情に、ささやかな血の気を戻したレンファは、少しずつ教授に近づく。

しかし、いつも一緒であるかのように振舞うイブは、離れた席から動こうとしていなかった。

何があるのか、そう思っているところで、レンファは教授の手を握り、指を絡めた。

不意にそれが対意識誘導研究の成果の一部であることに気づいた教授であったが、再び開く教室のドアを見つめた瞬間、その思考が飛んだ。

「あら、レンファ……。どうしたの、ひどい顔色。」

ずっとアヤがレンファの頬に触れると、にこやかな笑みでレンファが微笑む。

「うっん、なんでもないの。今月、ちょっと重くて……。」

恥ずかしげに頬を染めるレンファの顔色は、先ほどと違って晴れやかなものであった。

そういえばと視線を送った先にイブの姿は無かった。

女子寮大浴場。

唯一アヤが出現しないそこで、イブとレンファはため息をついていた。

先ほどまで正気を失っていたレンファを、イブは無理やり対意識誘導し、湯船に放り込んで正気に戻したのであった。

リヨウ＝イズミによる斜め上宣言に後、彼は恐ろしいほど精力的に活動し、彼の目標とした作戦目標を達成しようとしていた。

現在正気を保っているのはイブとレンファ、黄、あとは避難中の学園長と生徒総代のみである。

イブとレンファは、彼の発言以降で何かあるものと準備していたが、黄は独自の感覚で何かを察知し、生徒総代と学園長の避難を促した。

さすがリヨウ＝イズミに一番近いところに居る男、といったところであろう。

彼が何を行うつもりかを、いち早く察知し、彼がもつとも重点目標とするべくした人間を避難させたのだから。

しかし、学園の大半と生徒の大半を抑えた現時点で、彼の目標は達成されていると見て間違いない。

それはアマンド研究室下、通称ファンクラブ連合の情報集積にも現れている。

いままで一番情報が厚かった「イズミ＝リヨウ」に関するレポートが姿を消し（そう、まったくなくなつたのだ、書庫欄すら！）、多くの情報が「イズミ＝アヤ」になっていたのだ。

「恐ろしい人よ、彼。」

「本気になった彼って、本当に怖いわ。」

苦笑の二人。

怖い怖いといいながら、恐怖よりも別の何かのほうに気になって

いたから。

「意識しないと、こっちだって忘れそうだもの『イズミィリヨウ』を。」

「・・・さっきは半分飛ばされたわよ、もう。」

頬を膨らませるレンファは、大浴場に一人の女性が入ってきたのを見取った。

「あら、教授。お珍しいですねえ。」

先ほどの授業とは打って変わった険しい顔。
奥歯に何かが挟まったまま、どうしても取れないふうの顔だ。

「少女たち、何かが変だ、何かが変なのだ!」

頭をかきむしる美貌の教授の手をレンファはとった。
むにむにとマッサージしているうちに、教授の顔色が変わる。
あたかも雷撃に打たれたがごとく!

「・・・ぬ、ぬかった!!!」

どすどすとシャワーに向かったアマンダ教授は、冷水のシャワーの中で己が感覚を反芻した。

今までの違和感と、今の意識と、そして一人の生徒に出し抜かれた屈辱とを。

鼻歌を歌いながら、かぜを従えて長髪のそれが歩む。

対意識誘導フィルター越しにも心が揺れそうになる。

口ずさんでいる鼻歌だって、フィルターごしなのに心を蝕む。

（短期決戦しかあるまい）

声なく呟いて、その人影はイズミ「アヤ」の前方10mに降り立った。

まるでアポロ時代の宇宙服のようなその姿をみてアヤは小首をかしげる。

「まで、イズミ「アヤ」・・・いや、リョウ「イズミ」！ そなたには学園征服容疑がかかっておる！」

再び小首をかしげるアヤは、二歩散歩と近づいたが、その宇宙服は飛び退る。

「一歩たりとも動くな！ そなたの足元には光学粒子捕縛網が張り巡らされておる！！」

驚いたように周囲を見た後、恨めしそうにアヤは宇宙服を睨む。ぐらりと揺れた宇宙服であったが、がんと頭をたたき、アヤへ指差す。

「きかん！ きかんぞ！！ そなたの有効射程および対抗意識操作も実行中だ！」

んー、と何かを考えていたふうのアヤは、ふつと苦笑い。ずるりとウイグを脱いで両手を挙げた。

「はい、降参。」

にっこり微笑むその顔は、懐かしきリョウ・イズミのものであった。

「なんだか軍事法廷のようですねえ。」

思わず呟く僕に、にっこりもしない教授陣。

肩をすくめる僕に、多くの教授たちがつばを飛ばして激を放つ。全てはネット経由でアクセスしており、スクリーンも全て空間投影によるものだ。

そんな彼らの表情の表すところ、それは罪を問うものであり、裏切りを詰るものであり、怒りをあらわにするものであった。

馬耳東風とばかりに聞き流した僕は、にっこり微笑んで一言。

「楽しかったでしょ？」

ぐぐつと言葉に詰まる教授陣。

たしかにここ数日の授業も研究も飛躍的にのびていた。

「しかし！ それは君の洗脳効果によるハイ状態なだけだ！」

まあ、それはそうなんだけどね。

「・・・楽しくありませんでしたか？」

にんまり微笑む僕を見て、数人の教授がフェードアウト。

擬似スクリーンのノイズが強化され、視界も音も遮られた空間で鎮静剤を打たれている。

「リョウ・イズミ君が行った意識誘導は巧妙にして過酷、犯罪的であり暴力的だ。」

「ええ？ 僕は単に皆さんのご要望道理に……。」

「我々は、君に一種のピエロとなってもraithつつ、事態収拾を狙っていたに過ぎん。」

「それが甘アマンなんですけどね。」

ふう、とため息をして僕は周囲に視線を送る。

「確かに面白かったでしょうし、楽しかったでしょう。しかし、その楽しさの裏にどんな危険があるかも考えずに何度も味わおうとするのは、モルヒネの鎮痛作用を忘れて違う目的に使っているようなものですよね？」

「きみのそれは、高純度の合成麻薬よりもたちが悪い。」

宇宙服の向こうでアマンダ教授が腕組をしている。

「確かに我々は悪乗りしていたようだ。 各々の研究結果や途中経過が君の下を通り過ぎていくにもかかわらず、君自身を一般生徒に毛が生えた程度と侮っていたのだ。」

「そんなことは無いでしょ？ わたしはどこまでも一般生徒ですよ？」

僕の一言にアマンダ教授は腕振りひとつで答える。

「もう、騙されん。その誘導には対抗措置を行っている！」

すると新たなスクリーンに幾つもの研究室の名前が並んだ。

「意識誘導の助長のために、何個の研究室の技術が使われているか、

我々が気づかぬはずが無かろう？　これだけの研究結果を有機的に複合できる人間が一般生徒か？」

「ちえー、もう少しで上手くいったのに。」

僕がふざけ半分で言うと、宇宙服のヘルメットを取ったアマンダ教授が、僕をじっと見詰めた。

「ああ、少なくとも学園内の人員98%までにその効果は及ぼされ、君の意図道理、特殊視されていたイズミ」リヨウの存在全てが抹消されつつあったよ。」

そう、僕は、このアヤの扮装を通して、現状特別視されている僕の立場全てをアヤにおつかぶせ、僕自身は静かな学園生活を送ろうと思ったのだ。

そのために、意識誘導ばかりではなくエアコンヘガスの混入や飲料水への薬剤の混入、照明の点滅周波数変更や端末へ意識外意識の刷り込みなども多用し、リヨウイズミへの特殊視をなくそうとしたのだ。

黄の裏切りとイブ・レンファの活躍により、ずいぶん早くばれてしまったけど。

「本来なら、学園法規による在籍抹消処置もありえるところであった。」

まあ、学園を辞めてしまうのが一番の早道なんだけど、目的達成のために色々としがらみが多くなるのでやめることも出来ない。

ならば裏切り者として追われるならば・・・そういうのも考えていなかったわけではないけど、そうなる本来の目的から遠ざかってしまふ。

悩みところ、である。

「しかし、この目的への有機的なアプローチは我々教授会の想像を超え、無限の可能性の示唆を感じさせるに十分なものであった。」

なるほど、美味しいネタだとももう、ということかな？

「そこで、教授会は、リヨウイズミに今回の計画書の提示を求めるものであるが、了解してもらえるかな？」

・・・ここまできて、僕の自主性が尊重されている気がする。
逆さ貼り付けの上、打ち首獄門なんていうのも考えていたんだけどなあ。

「・・・了解してもらえんか？」

「アマンダ研究室のE A 0 1 2 2フォルダを展開してください。全てが入っていますから。」

僕がそういうと、スクリーンの向こうの人間や、目の前のアマンダ教授が端末にかじりついた。

数分ほどして、ボスコック教授が震える声を上げる。

「りよ・・・リヨウイズミ！ き、き、き、君の書いたこの書類の巻末についている『教授会性格診断アナグラム』というのはなんだねえ！」

それは、僕の演技指針であり、意識誘導効果を上げるために分解した教授陣の多面性格グラフのための資料だ。

まあ、簡単に言えば、教授陣がイズミ・アヤに対してどのような劣情を抱くかというものの簡易図ともいえる。

たとえば、この図から某教授はイズミ・アヤに対しセクハラし放

題ながら、たまに厳しいお仕置きをしてくれて、さらに時々耳元で「もう、教授のえっち」とかささやいてくれるのが最高であると読み取れる。

事実、あからさまな情報に、何人もの教授がスクリーンの前から消えている。

さつくり精神洗浄中なのだろう。

ボスコック教授はむつつり助平タイプで、イズミィアヤは異性に対してガードが甘く無防備なシャッターチャンスがあふれていると感じていたことが暴露されていて、ばれない範囲で小型カメラによる撮影が数度行われることを明記されている。

「・・・青筋立ててがなるな、ボスコック。そんなお遊びの部分までもが我々に興味深い真相研究結果とも言えるだろう？」

「・・・む、うむ。」

あれ？　ここで凄い怒声と罵声が渦巻く予定だったんだけどもなあ。

急いで仕込んできた部分なので、けっこう粗が大きいから、挑発がばれたかな？

「はつきり言おう、君のようなムラのある人物は学園で制御し切れん。しかし、君のような人材を外に放出する積もりも一切ない！」
「・・・合成麻薬みたいな人間を、いま、この学園において置けますか？」

にやりと笑うアマンダ教授。

「無論、一時的に放逐せねば、学園内の精神洗浄もままならん。・・・そこでだ。」

発表された新たな単位は、すでにある程度の人員が決まっていた。

リョウチームの面々などなど。

知る人はそれを「学園所払い」とか言うとか言わないとか。

この制度は長く続くかにおいて疑問があるが、真相については長く語り継がれることは必死だった。

なにせ、悪名高き中間試験が中止になったのだから。

第十八話 学園所払い中（前書き）

はっちゃけすぎて所払い。

これで退学にならないのは学園の目的が教育ではないからです。
奇人変人でも優秀ならOK。

まあ、ミスターがやりたいほうだいしていたぐらいですからw

第十八話 学園所払い中

四畳半一間、クーラーつき、風呂トイレ別。

これが今僕が住んでいる教員寮の部屋だ。

流れ込んでくる元帥職務一式がなければ、これが分相応の生活という気もする。

隣の女子寮の部屋はもっと広いそうなのだが、突発的に決まった事だけに文句は言えないし、風呂トイレが付いていて、エアコンまでついているのだから文句も無い。

ちゃぶ台で今日の授業結果と来週の授業計画書をまとめていると、腕時計がピヨピヨなり始めた。

ぐつとひと伸びをして立ち上がる。

そろそろ宿直の、校内巡回の時間なのだ。

外務研修という単位が今年から開始された。

学園内でこもりつきりなのは問題だ、知の集約は新たな戦火を生むとか何とかいうどうでもいい理由が上がって来て、実験的に始められたものだ。

まあ、凱旋帰郷の拡大版だと見れば間違いないのだが、国連学園学生による準備校への情報漏えいは厳罰に値するので、帰郷とは程遠い。

実際のところは、全学園を巻き込んだ僕の情報操作が明るみになるにつれ、あらゆる学園法規を超えて研究室への勧誘が激化し、恐ろしいまでのことになっていることに起因する課題であった。

そそろやってこないのはアマンダ研・エメット研・ヒサナガ研ぐらいなもので、その勧誘たるや眩暈を誘発するレベルだ。

最近、学園内の居心地が悪くなってきているので、ひとまず冷却期間が欲しかった僕は、一にもなくその研修に参加する事にした

のだが、事は結構大事になった。

まず、僕が普段こなしている元帥府職務がある。

さらに随行人員を選別しなければならない。

次に突然短期赴任する職員として不足ない学力が必要になり、最後にはいつの間にか赴任先が同じ人間がチームで占められていた。

職務事情により僕の赴任先は日本国内になったのだが、行く先が問題だった。

静岡県の山向こう、長野県の山村、明治大正の昔から続くミッシヨンスクールの最高峰と呼ばれるA E ミッシェル女学院であった。その女学院、小中高校の一環全寮制生活のうえ付属女子大学があるという超強力な女の園で、学院長以下教員・職員殆どが女性という狂気の世界だ。

戦後の開明の流れに乗って共学にするという話もあったそうだが、OG連合会の力強い反対にあい、今をもって女学院が続いているそう。

学校の目的や親の目的で考えても、純粹培養のお嬢様が精製される環境なのだろうなあとため息ひとつ。

そのため、僕の随行人員の殆どが女性となった。

シスターとして元帥職務補佐であるクラウディアさん、心理学療養師としてイブ、理数学強化教師としてレンファ、そして僕は外国語指導なのだそう。

「実際さあ、問題ない？ 日本人の僕が外国語教育って。」

「この前、研修前に面接があつたでしょ？ あの時の会話で最も綺麗な発音だったって話よ？」

レンファの言葉に思わず眉をひそめた。

それは向こうの学院の趣味にあつたということかな？

会話で人に気に入られるということを考え、パット先生に感謝、かな？

殆ど男がいないこの学院、全寮制とはいえ一応、申し訳程度には

男性施設がある。

学院施設に隣接した宿直塔がそれであり、学院内にある宿直室がそうだ。

トイレも風呂もあるが、女性の侵攻はなはだしく、教務関係施設以外の男子施設で死守出来ているのは僕の宿泊室のみというありさまだ。

とはいえ、侵攻はなはだしい彼女たちも女性という性別から逃れられるはずもなく、警備上の不安を一手に引き受けてくれる存在を必要とする。

それが学院の男子職員の役目だ。

というか、僕と用務員のおじさん二人の仕事なのだが。

「じゃあ、せんせ、三階をお願いいたします。」

にこやかな微笑みに僕も目礼で答え、三階の教室の見回りを始めた。

2・3歩足を進めたところで、正面から人の気配が近づいてくるのを感じた。

多分、斜め前の教室に人がいるのだろう。

念のために懷からスタービジョンフィルタグラスを出すと、教室の窓からこちらを伺う人影が・・・五人。

（どうしたものか、な。）

彼女たちは多分、見慣れない男に対する興味と、こどもばい悪戯心で僕を驚かしに来たのだろう事は間違いない。

しかし、この時間の彼女たちがこの場所にいるということは、三つの校則と23の寮則に違反している事になる。

仮にも、教職にいる人間に見つかのだから、それなりに覚悟してもらわないといけないんじゃないだろうか？

いやいや、まてよ・・・。

思い直した僕は数歩あるいたところで、ごん！と何かにぶつかったようなパントマイムをして見せた。

ぺぺぺっと両手で壁をくって見せて、ごんごんと叩く。

試案をするポーズ。

そして結論とポーズ。

くるりと背を向けてもとの廊下を行こうとした。

「！」

はっと息を飲み、身を乗り出す気配に合わせて、僕は振り返った。
「今、何も言わずに寮に戻るならよし。・・・私は何もみなかったよ。」

ごそごそつという気配と共に、ドアから人が離れていった。
はなれていったが、なぜか一人だけ窓にいる。

しつこいな、そう思った僕は、今度は何も気にしないでそのまま
その場を通り過ぎようとして、窓の正面から見た。

真っ暗な中、驚いたような少女が一人。

『2 - B 出席番号13番、神奈川 秀美さん、君は君の思っ罰を
受けなさい』

ほとんど学園で無意識に使っている英語、ゆっくりと彼女に言い
聞かせるように僕は言った。

彼女は気付いていない。

僕がサングラスモドキの所為で昼のような視界を得ている事を。
彼女が一つの校則を守って、校舎内の制服着用と名札の着用して
いたことで僕が見ていることを。

ミッションスクール勤務でありながら、僕は朝のお勤めを免除さ
れている。

無論、宗教的理由ではなく、学園側で若い男性が彼女らの言うところ、
公衆の面前に同席する事を嫌っての事だ。

若い男性といっても、設定上は24〜5歳なので、どのへんに相
手の警戒心を与えているかが不明だ。

僕にしても「キリスト教」系の神様にはあまり馴染みが無いので、
どっちでもいい話なのだけれども。

そんなことを、ボーっと考えながらゆっくりとシャワーを浴びた

あと、身支度を整えて職員室に行くと、一人の生徒が学院長の横に立っていた。

昨日の「神奈川秀美」嬢だ。

殆ど無視して僕は自分の席に座ると、学院長と少女がすべるように近づいてきた。

学院長は無言で僕を立たせる。

何事だろうと様子を見てみると、こほんと咳払いひとつで学院長は言葉をつむぐ。

「みなさん、本日はひとつ良いお知らせがあります。ここにいらっしゃる外国語指導担当をなさっていらつしやるミスターイズミに、専任助手をしたいと言つ生徒が現れました。」

思わず僕が学院長を見ると、彼女は「よかったですねえ。」とばかりの表情だった。

専任助手とは、授業以外の時間で奉仕活動とは別に学校運営の補佐をする生徒のことで、大概の教師や教員に一人以上ついている。

ただ、僕の存在自体が学院内で異例中の異例であったため、その制度が有名無実化していた。が、学院長もそれでよいとは思っていなかったらしく、生徒側に自主的な立候補を求めていたそうだが、着任して一週間、全くそのなり手はいなかったそうだが、今日、それが現れたという。

学院長の横でニンマリと微笑む神奈川秀美。

奉仕とかそういう感覚とは程遠い表情に見える。

「自制と博愛の心が皆様に祝福あらんことを。」

アーメンとか何とか始めている中で、見知った三つの視線が僕を刺していた。

そんなに怒るなよ、僕だって希望したわけじゃない。

外国語研究室という部屋が僕の常勤場所で、授業時間になると生徒たちがわらわらと入ってくる。

あと五分ほどで授業開始となるところで、準備室へ一人の少女が

現れた。

神奈川秀美嬢である。

「あ、あの、ミスターイズミ。遅くなりました！」
びし！と直立するその姿に、僕は声をかけた。

「君は、何故私の専任助手に立候補したのだね？」

この部屋での会話は英語が基準となるよう取り決められている。
それを暗に示唆すると、深呼吸をした彼女は言った。

「わたくしは、みずからの罰として、貴方の助手となる事が相応しいと考えました。」

「私の助手という仕事は、そんなに過酷な仕事かな？」

「いいえ、仕事としてはラクだと考えます。ただし、助手として得られる特典の少なさから見れば、罰としての要素が高いと考えます。」

助手としての得点というのは、専属先での単位確保、成績への奉仕内容の反映、などなど、長期に渡るものであれば極めて有用といえるものなのだろう。

しかし、短期とわかっている僕への助手は今一価値が低い、というものらしい。

まあ、同じように短期であるイブやレンファの元には何人も助手は溢れているというが、そのへんは彼女たちの魅力によるところが大きいだろう。

昨夜の忠告を彼女は律儀に守ったというところか。

「了解、君が専任助手である事を認めましょう。今日の君のクラスの授業準備は既に出てきている。準備してあるフリップを順番に渡してくれたまえ。」

偉そうにいう僕は、彼女も見ずに準備部屋を出た。
考えても見れば、彼女と僕は同い年なんだよなあ。

滞りなく済んだ授業の最後で、ミスターイズミは言った。

『君たちに、己の言葉はあるかね？ 何でもいい、これだけはみんなに言っておきたいという言葉が。誰かに伝えておきたいという言葉が。 来週までにその言葉を見つけてきて、そしてこの場で語ってもらおうと思う。』

この課題は難しいものだろう。

好きである言葉を好きな理由と共に英語で語る、というものだから。

ざわつく教室に背を向けて、彼は準備室に帰ってしまった。

冷笑も怒りも無い、完全な無表情であつたが、彼の表情がそればかりではないのを私は知っていた。

あの夜、新任の冷徹な外国語担当を驚かしてやろうと、用務員のおじ様を巻き込んで校内に潜んでいたのだが、あっさりとばれてしまった。

さらに言えば、こちらからだつて殆ど解らないような真つ暗な中を歩いてきたかと思うと、笑いを含んだ声で自分の名前を言い当てた。

そのときの声を聞いて、彼女は絶対に彼の笑顔を見たと思った。

あの整つた冷徹な顔に、どんな笑顔が浮かべられるのか、とても気になった彼女は、ミスターイズミの専任助手に立候補したのであつた。

間近で聞く彼の声は、表情無しでなら心に優しいと思う。

しかし一旦顔を見ると眉をひそめてしまう。

極めて無表情で、極めて無感情だから。

着任して暫くは騒いだ子も多かったが、あまりの冷たい感じに一気に人が離れていった。

一週間もするうちに、彼の周りには誰もいなくなつたかのように見えたが、同時期に着任したミス鈴とミスモイシヤンはよく彼の周りで見られた。

彼女らほどの美貌を持つものだから、冷血漢に付きまとう事は無いだろうにと噂が飛ぶが、私としては別の興味があつた。

あれほどの美女をひきつけるミスターイズミとは、どんな人間なのか、と。

どうも周囲が不穏だ。

クラウディアさんは目を三角にして「お若い助手がついてよろしかったですね」とかいつているし、イブもレンファも「若いこにでれでれして・・・」とかいつている。

おかしな話だが、年齢的には僕も助手殿も同い年。

若い子もくそも無いだろうに。

とはいえ、無表情に、周囲を見渡しながら授業を続けるなかで、ある種安堵感をおぼえている。

学園の中とは違い、愛想もなければ親愛も示さない僕に、関係維持に多大なるコミュニケーションを必要とする女子高生は寄り付かず、極めてクリーンな気分を味わっている。

勉学に勤しむとはこういう事なのだろうと、思わず頬が緩みそうになってしまった。

いかんいかん、と黒板に向き合い、そして深呼吸。

『諸君、人でありつつけるならば守るべき規範がある。それは己が決めたものでもあり神々定めしモノでもある。しかし、それを守らぬからといって火を見るかごときの罰はない。ゆっくりと心が腐り落ちて行くかのような自分こそが罰となるのだ。己の心のうちも結構、神が定めし自分も結構。しかし、己に恥じぬ自分でありつつけることを希望する。』

気恥ずかしかったので、無表情に小難しい事をいってみると、いささかいつもと視線が違っていた。おかしい、何かと小難しい説教する男というのは嫌われるはずなのに。

なんだかいやな感じがするので、ちやっと片手で挨拶をして準備室に去った。

準備室のテーブルにあるゼファーマのポットを手にした。

手早くポットに入れてあるコーヒーをついで一呼吸したところで、隣の外国語指導教室が割れるような歓声に包まれた。

きゃーとかわーとかいう声が何かに恐怖しての奇声じゃないのはわかったが、何のこえだかわからなかった。

ためにハックした防火用のカメラで覗いて見ると、少女達が集まってきやいきやいっている。

中心には神奈川嬢。

「ね、ねね！ ミスターイズミって凄く格好いいことおっしやいますわあ！」

「そうそう、本当に格好良かったですわ！」

「あーん、うらやましいですわあ秀美様。あんな格好の良い素敵な方と二人つきりで・・・。」

む、と自らの顔を鏡で見る。

ちゃんと大きめの丸メガネはしている。

おかしい、受けるはずも無いのに。

「いつも無表情になさっているときは、とても冷たそうな方なのに、授業のときにお話になると、とても心に響く声でいらっしやいますわあ。」

な、なに？ おかしいぞ、アマンダ研究室ご推薦の好感度の低い話法を試しているのに！

「とても熱い心を押し隠しているような雰囲気がたまりませんわ・・・。」

ぬ、つまり話法が失敗しているという事？

まいった、まいりました。

思わず僕は頭を書いて天井を見上げると、なぜかそこには見知った顔が。

『ミスズ曹長、ナニをなさっていらっしやるのですか？』

『勿論元帥閣下の護衛でございます。』

『ここは、全寮制の女の園、危険なぞありませんよ』

『はい、いいえ。先ほどの授業は、とっても危険な授業でした。』

難しい顔の曹長はちよいちよいと外を指差す。

そこにはなぜか花壇に隠れてこちらを覗き込む女生徒が数名。視線が合うと『きゃー』とかいつて走っていった。

『・・・少なくとも、人気が出る要素を排斥して生活しているんですが、どうなっていると思います？』

つん、とすまし顔になった軍曹は、瞬時に視界から消え、気配も消えた。

「不可解だ。」

つぶやいた一言は誰も聞いていなかった。

『つまるところ、身についた癖だな。』

教員寮の一室の、端末の画面でアマンド教授が面白そうに微笑んでいた。

『癖、ですか？』

『そうだ、癖だ』

そういうアマンド教授の横に新たなウィンドウが開く。

そこには僕の正面写真が現れた。

『まず、姿勢だが、数ヶ月ほど行ったあやの日と学園祭のウエイトレス訓練の成果によって、きわめて線の柔らかな姿勢となっている。』

『ぴぴつと音がしたかと思うと、正面写真の姿勢が微妙に変わる。』

『さらに、ヒサナガスーツの鑄型効果によって、四肢のバランスが完全に女性型になってしまっている。』

僕は思わず咽た。

『最後に声だ。催眠誘導に極めて適した声帯は以前からだ、四肢の補完により耳によくつく声になっているのだ。』

『つまるところ？』

『何をしゃべっていても好感度は時間と共に上昇するというわけだ。きわめて興味深いので、このまま回線をつないでおけよ。研究するからな。』

にんまりと笑う教授。

『た、対策は？ 対処は？』

『無いな・・・、うん、無い。』

さくつと軽く否定した後、さらに駄目押しで否定。

完全無欠の否定に僕はがつくりうなだれる。

『・・・とはいえ私と君の仲だ、ちよつとぐらいは手を貸してもいいが？』

『！ いいアイデアですか？』

『無論、全面解決には程遠いが、かなり効果的だぞ。』

笑顔のアマンダ教授に感謝満載であったが、その笑顔が悪魔の笑みであることに気づかなかった僕だった。

目新しい数々の発音課題と会話課題を打ち出すミスターイズミの授業だったけど、今週に入って更に異彩を放つ内容になった。

『よい発音はよい姿勢から、よい声はよい面持ちから、よい声はよい交流を生む。』

流れるような発音で言ったミスターイズミは、教室の前に三人ほどの生徒を立たせた。

自然にたつ女生徒たちを軽く抑えるように姿勢を正せる。

・・・セクハラ、と思ったけれど、触られているほうは神妙なおもちであった。

思うに任せる罪というものは、思われなければ罪ではないのだから。

『見据えなさい、行く末を。 貫きなさい、つよき意思を。』

ずっと胸を張った三人の女子は、瞬時にイメージが変わった。

あたかも神が降りた聖女のごとくに。

『・・・説きなさい、神の愛を。』

彼女たちは黒板に書かれた聖書の一節を原文で歌い上げた。

それはどんな聖歌にも負けない感動となって私たちの涙をぬらした。

発音が素晴らしかったわけではない。
彼女たちが美しかったわけではない。

ただ、目で見、耳に届くそれは、信仰を忘れて久しい心に再びア
ガペイの風を吹き込む。

アマンド教授の提案は効果的な結果を生んだ。

僕が担当した授業毎に数人の指導を行い、簡単な意識誘導の手ほ
どきを行い、魅力の分散化を行ったのだ。

散漫で無意識な僕の意識誘導より、賛美歌などの宗教要素のみと
はいえ全力で打ち出された意識誘導のほうが力強く、生徒たちの意
識を奪った。

うなぎのぼりに思えた僕への視線は、一気に歌う少女たちへ向
かった。

そんな報告を回線越しに教授に行くと、豊かな胸を揺らせて教授
は大喜び。

「さすが、我が研究室の逸材だ！」

「教授、あたしゃー、どこの研究室にも所属してませんか？」

「少なくとも、お前のチームと一番親交が深いのはうちだと思っ
てるが？」

それを盾にして所有権を主張されるのも面白くない。

「うちの催眠誘導を無意識下まで身につけていて、さらにわずか数
日で素人に催眠誘導を指導できるような人間を部外者とは思いたく
は無いな。」

ぐっと言葉に詰まったが、ひとまずそれはさておき、だ。

「しかし、すごい威力ですよ、賛美歌。」

姿勢や発声は指導したが、賛美歌を歌わせてみるというのはアマ
ンド教授の提案であった。

「まあ、ミッシェン系の学校は、基礎生活の中に神が居るからな。
最も移ろいやすく力強いのが神だ。疎ましく思ふのも、心のより

どころになるもの神なのだよ。」

ちよつと自慢げな教授。彼女もまたキリスト系宗教文化圏の人間だったのだと意識させられる瞬間だった。

「まあ、価値観の薄いジェンダーよりも、絶対的な価値のある神を押さえたのだ。そっちの安全は確実だろ？」

にこやかな教授に僕も親指を立てて答える。

それが無茶苦茶樂觀的な発想であつた事を知るのは数日待つことが必要であつた。

日曜日。

心の平安日である今日は、実際の宗教的にはどうなんだろうと思う。

礼拝に行ったり、教会のお掃除をしたりと生徒は大変であるから。教師はどうかというと、これも実は大変。

予習復習に忙しい生徒たちの相手をするために、教師の大半が職員室や準備室に勤務しており、いつ来るとも知れない生徒を待ち続ける義務を負っている。

まあ、現実的には午前中全ての時間で礼拝なので、それに参加しない僕は準備室でマツタリしてられるのだけでも。

準備室備え付けのキッチンで、ざつとご飯を炒めながら口笛ひつつ。

火力が足りないキッチンだが、ちよつとした工夫でいろいろと料理は出来る。

こういうときは黄から借りた鉄なべをつかつて、ちゃっちゃんと焼き物炒め物。

一気に作ったカニもどきチャーハンとソーミンチャンプルー。

中華スープの元と香料で作った似非中華スープ。

同じなべで作るから、結構味が混ざっていて面白い。

さて、ではでは朝ごはん、といったところで準備室がノックされる。

料理中はずしていた眼鏡をはめて、僕は『どうぞお入りください』と声をかけた。

静々と入ってくる女性が学院長であることを見て首をひねる。
今は礼拝中だよな、と。

「いかなさいましたか、学院長」

一応生徒相手ではないので日本語で話しかける。

礼拝参加中のはずの学院長は、目をウルウルさせている。

む、と、自分の手元を見て考える。

生徒が居ないとはいえ、ここで朝食はまずかったかな？

「えー・・・と。」

「よくぞ、よくぞ・・・！」

ボロボロと涙を流して机越しに僕の手を握る学院長。

「知っているつもりでした、わかっているつもりでした、理解して実践しているつもりでした！」

握った手をぶんぶんとふる学院長。

「ええ、心なんです、心のありようじゃありませんか、はじめから美声じゃなくてもいいのです、心のありようが神を感じさせるのですよね！」

何かに感極まった学院長。

本気で何が起こっているかわからない僕は、思わず素で質問をしてしまった。

「あ、あの、何のことでしょうか？」

さつと自分の涙をぬぐった学院長は、恥ずかしげに自分の両頬にてをあてる。

「あ、あ、そ、そうですね、何も特別なことをしているわけではないのですね、ミスターイズミにとってはそれが当たり前のことでしたのですね・・・。」

恥じ入るように顔を伏せた学院長は、きつと口元を引き締め、頷いた。

「わかりました、あなたが男性でありながら国選で紹介された理由

がやっとわかりました。旧弊的な我が学園が忘れていたことを、教えていただくことができた事を、心から感謝いたします。」

ぺこりと頭を下げ部屋から去った学園長を見送り、僕は呟くように言う。

「……どうなってるんだ？」

「……自業自得という状態です」

音も無く現れたミスズ曹長。

振り向けばそこにいる。

とはいえ、いまさら驚きもしないけど。

「自業自得？」

「ええ。」

彼女はさきほどまで礼拝堂を偵察していたそうだ。

そこで最後のプログラムとして聖歌隊を前方に配した形で参加者全員による合唱が行われたそうなのだが、合唱が半ばを過ぎるころになって異変は起こったという。

まず最初に正面に整列した聖歌隊が口をつぐんだという。

次に前列の人間が、そしてそれが伝わるかのように沈黙が広がった。

最後にはほとんどの人間が口をつぐむ中、数名の人間が歌を口ずさんでいた。

背を伸ばし、りりしくたおやかに、優しく軽やかに、いとおしく切なく。

英文版で歌う数名を、全員が聞いていた。

広い礼拝堂で歌う少女たちは、歌うことを心から愛していることが知れた。

いや、以前から知られていた。

熱心に歌っていたし誰もがそれを感じていたが、元来の声質に恵まれなかったために、聖歌隊の選から漏れていた。

しかし、いま、その心が花開いたことを感じている。

声質ではない何かが、心の扉の鍵穴にマスターキーを差し込んで

開いたかのもうであつた。

技術ではない何か胸の向こうを熱くしていた。

思わず涙を流す学院長は、歌いきった数名を集めて心から感じていた疑問を口にしたところ、彼女たちの答えを聞いて赤面したそう
だ。

『行く末を見据え、つよき意思を貫き、神の愛を説きなさい。』とある教師に指導されたと答えられたからだ。

それを教えることをもつとも大事にしていた学院の教師ではなく、礼拝にも参加させてもらえない一教師にそのことが説かれたから。

もつとも大事なことを実践させることが出来たのを、彼女がその目で見れたから。

「・・・そんなこんなで、現在、元帥の評判は鰻上りです。」
がつくりと肩を落とす僕。

「おつかしいなあ・・・、彼女たちが人気者になつておしまいじゃなかったのかよ・・・」

不満げに顔をゆがめる僕にミスズ曹長は肩をすくめた。

「閣下は、そういう星の下に生まれたのかもしれないね。」

すつと近づいて、おいてあつたスプーンでチャーハンをひとすくい。

さつとつまんだ軍曹は、思わず頬を緩める。

「あら、おいしいじゃありませんか・・・。」

もう一すくい華やかさを口にする。

「元帥は、本当に人に嫌われる行為に嫌われておられますね。」

笑顔のまま視界から消えたミスズ軍曹。

僕はがつくりと肩を落とした。

あけの月曜。

僕は睡眠不足である。

理由はいろいろある。

まず、先日午後はずうと生徒が詰め掛けてきた。

聖歌隊の生徒たちが指導を求めてきたり、英会話の発音指導を受けに來たり、英文法の参考意見が聞きたいと英語教員が詰め寄って來たり。

やっとなさ相手し終わったかと思いきや、僕の部屋にはイブとレンファが待つていて散々説教があつて。

おりしも端末に接続してきたアマンド教授はその状況から結果を察し、大成功であると満面の笑み。

最初っから教授の策略であつたらしく、戦闘レベルを僕に信じさせ戦略レベルで事を進めていたらしい。

思わず声を荒立てて怒ろつかというところで、ノック三回。

ささつと身支度を整えた僕たち三人。

どうぞのこえも聞かずに扉を開けたのは学院長。

なんでも明朝より礼拝に参加してほしいとの事であつた。

快く了解して出てつてもらおうと思つたのだが、イブとレンファが居ることに眉をひそめる学院長。

そんな時、要領のよい二人はすかさず今日の賛美歌の感動を分かち合いにきたことを言つと、学院長は再び目をウルウルし始めて・・。

朗々と感動を述べる学院長、それにお追従をするイブとレンファ。

それは深夜まで及んで。

そのあとで元帥職務と相成つたわけで。

寝たのがAM4時。

起きたのは5時。

シャワーで身を濯ぎ部屋を出たのは6時。

そして朝の礼拝に参加となつたわけだ。

礼拝はじめ、教師たちが列を成して礼拝堂に入る。

礼拝堂の壁の両脇を教師たちが固めたところで、三々五々に生徒たちが入場する。

遅刻するような娘はいないが、ゆっくりと歩くその姿は優雅で、

さすがはお嬢様学校だと感じさせる。

とはいえ眠い。

あくびをかみ殺して鉄仮面をかぶったかのような無表情を決めているのだが、両脇に立つイブとレンファが生徒たちに愛想を振りまいているせいか視線がちらちらとこちらへ向く。

イブとレンファの専従助手生徒が挨拶にやってきて、今日の指示を受けていた。

ふむ、私の専従助手は・・・と視線を動かすと、視線の先に神奈川君が小さく手を振っている。

こちらに顔を出す風は無いので視線をはずし正面を見た。

するとその視線を追いかけるように彼女は現れ、すくりと直立。

「今日の授業予定と方針をお願いいたします。」

まるで秘書が付いたみたいだと思ったが、僕は懷からメモを出して渡す。

「かくのごとき行いたまえ」

極めて無表情無感情の僕の台詞に、彼女は頬を染めて生徒たちの群れに戻る。

それをみた両脇のチームメイトが小さくささやく。

「・・・女たらし」

「・・・泣くわよ、この場で。」

あー、何でそういうことなのかなあ。

思わず見上げたくなる素振りを必死に抑えてささやき返す。

『昨日のカニチャーハンはおいしかったなー・・・また作ろうかな・・・三人分。』

瞬間、両脇からなんとなく暖かな波動が。

一応安心はしたが、まったく、心休まらない日々だ。

午後の授業が早めに終わった僕たち三人は、外国語研究室準備室に集合していた。

各々食材を持ち寄っていたのだが、キッチン自体が小さいために

僕が調理を担当することになった。

昨日、うつすらと油を引いた鉄なべを再び使おうとコンロに火を入れる。

全体に熱がたまるのを待ちながら、食材に刃を入れる。

いつもより小さめに、だけど姿が崩れたりしないように。

彼女たちの口に入りやすいように。

「リヨウ、テーブル準備しておくわね。」

「じゃ、私はホットプレートで中華スープもどきでも・・・」

レンファは相変わらず料理の類が一切駄目だが、イブはそれなりに「洗う・切る・煮る」という段階をクリアしている。

ゆえに、彼女たちの自炊は必ず「煮」中心となるのだが、鍋ばかりではなくスープなども守備範囲となり、よく中華スープもどきや味噌汁もどきを作っている。

栄養素が全て液化しているのだから、その効率たるや・・・とか言ったイブの目を見て、僕も黄も背筋が寒い思いをしたもので。まあ味への栄達も約束されているので、問題はないんだけどもね。

「ほいほいっと、ほい。」

ちやちやつと炒めたカニモドキチャーハンは、なんと六人前。

「え・・・、こんなに食べられないわよ？」

レンファの台詞に、僕はにこやかな笑みで全てを盛る。

お皿は六つ。

イブの作ったスープも小分けにして六人分にすると、するりと現れるクラウディアさん。

「失礼します、ミスターイズミ。少々ご相談が・・・」

そう言って現れた彼女は、テーブルの上の料理を見て眉を緩める。「まあ、元帥のお手料理ですね？」

「はっはっは、こういうときは予想される人数全員が現れるという元帥府お約束が働きますからねー」

「じゃ、おすそ分けいただけますの？」

といいつつ、彼女はひとつの席に腰を納める。

その姿を見た後、僕は表情を硬化させ、感情を無感情にギアチェンジして直立する。

その途端、ドアがノックされた。

『どうぞお入りください。』

「ミスターイズミ、失礼しますわ。」

一礼と共に現れたのは学院長。

「新しい事務員の方がいらっしゃったのですが、なんでもミスターイズミと御同郷だとかいうお話ですので、よろしければ学院のご案内を・・・」

一礼をする学院長の横に居るのは、僕の良く知るインビジブルエツジさん。

『はじめまして、ミスターイズミ。わたくし、ミスズ・フミと申します。』

流れるような英語を聞いて、学院長も関心。

『今から私たち、ミスターイズミのお誘いで、昼食をご馳走になります。皆さんも一緒にいかがですか？』

レンファの言葉に、学院長は小首をかしげるようなしぐさで僕を見る。

半ば無表情に肩をすくめると、彼女も苦笑でそれに応じた。

「なんだか、初めからこの人数がわかっていたかのようなテーブルですわねえ？」

「はい、学院長。じつは私とミスターイズミの教区は同じだったのですが、彼が珍しく誰かのために料理をすると、いつの間にか予期せぬ大人数になっているというジンクスがありまして、彼がフライパンを振るときは大めに作っておくということになってますのよ。」
にこやかにクラウディアさんは言う。

まあ、そういう設定だが、教区の話ではなく元帥府の話なんだよねえ。

「まあまあ、それは素敵なことです。」

心からの微笑を浮かべた学院長は、僕らと昼食を共にしたのであった。

最近、ミスターイズミと私の関係は良好の一途をたどっていたものと思っていた。

学業資料整理や授業準備で戸惑うことや間違えることも無くなった。

これはひとえにミスターイズミの思うところを察しようとしている私の努力結果といっていい。

しかし、なんだかへんなのだ。

彼の言いたいことはわかるし、彼が望んでいる事はわかるのに、彼が何を考えているのかわからない。

このまへの英会話に関する課題『自分が言いたい言葉』に関する発表は、成功に思われたにもかかわらず彼は無表情であった。

『・・・』

そう、いつもの無表情の中にも感情というものがあるように思っていたのに、今日はまったくそれが見えなかった。

そんな素っ気無い素振りもたまらないという娘たちもいたが、私はどうも理解できない。

いや、理解したくないというのが本当だ。

彼の鉄仮面の向こうを知りたいのに、その向こうの顔を知りたいのに。

そんな思いをぶつけようと昼休みに準備室へ行ってみると、楽しそうな老女の声がした。

（あれ、学院長？）

耳を澄ませばもっと別の女性の声も。

（え、っと・・・ミスイブとミスレンファとシスタークラウドディア？）

思わず彼女たちの顔を思い出して胸が高まる。

素敵な女性たちで、思わずお近づきにありたいタイプだが、どう

やって近づいてよいか想像も付かないタイプだ。

（ど、どうしよう・・・。）

思わずときどきしつつも、とてもこおばしいかおりが鼻をつく。
おいしそうな匂いに誘われて、ふらふらと扉に手をかけようとして学園長の言葉に気が付いた。

「・・・そこで、皆さんに当学園への就職をお勧めしたく・・・」
シュ、就職？

「臨時でいらっしやったにも拘らず、みなさまはとても学園のために尽力していただきました。国選である事実や実績を鑑みれば、必ずやOG連も納得してくれるでしょう。」

突然の学院長の提案は、思わず目が点になる僕。

イブもレンファも同様であった。

クラウディアさんなど聞いていなかったようで、ニコニコとチャハンを頬張っている。

「ええ、何としても皆さんには学園に残っていただきたいのです。」

自信満々の学院長。

あのー僕たちって、本当は教員免許もないし・・・。

そう思って、何かを言おうとしたところで、準備室の扉が開く。

「賛成です、同意です、激しく協力させてください！」

仁王立ちの神奈川秀美嬢。

「まあ、神奈川さん。立ち聞きはいけませんわよ。」

「その件につきましては、のちほど十二分に謝罪させていただきます。」

ぴつと綺麗な礼をした後、流れるように歩み寄り、学院長の手をとった。

「私たち生徒も、いえ、少なくとも私は大いに賛成です。」

熱烈な勢いに学院長も圧倒されていたようであるが、すぐに持ち

直したようだ。

「このとおり、必ず理解されるものと信じております、ええ！」

どう答えたものかと思っているのは僕ばかりではないと思ったが、他の人間はあまり関知している様子ではなかった。

「素敵なお話なので申し訳ありませんが、我々も国選で巡回している身ですので。」

困ったような顔でいうレンファだったが、すかさずクラウドディアさんが学園長に耳打ち。

「じつは、私とミスイブ・ミスレンファは別々の教区から派遣されており、ミスター泉がどこにも勧誘されないように監視しあっているんです。」

まあ、と大きく目を見開く学院長。

「彼の所属に関しては、出身地である我が教区の重きがあるのですが、活動や布教に関しては各教区から引っぱりだこ、引き抜き合戦が応酬されて・・・」

まあまあ、と目を見開いて僕を見る学院長。

「最終的に司教クラスの会合で、一時冷却期間を保つということで布教巡回を行うことになりました・・・」

なるほどと頷く学院長。

あわせて頷くイブとレンファ。

どこでそういう話ができたのやら、と思ったが、後ほど聞いてみれば全て学園の内情を言い換えただけとか。・・・教区は研究室、司教は教授ですか。まあ、確かにどこの研究室にいるかといえば「元帥府」、に所属というわけですがね。

「はあ、残念ですね。ミスターイズミが所属していただければ、本学園も更なる飛躍が望めますのに」

ほお、とため息をつく学院長であったが、いきまぐ神奈川嬢。

「ならば、今の所属は何処でもないという事ではないでしょうか？」
え、と視線を交し合う僕たち。

「本来ならばミスタークラウドディアと同じ教区がご活躍の場なので

しょうが、話の流れでは今後の活躍の場でお困りのようで。それならば、当学院こそ皆さんの柵が無いという意味で最もミスターイズミの活動にふさわしいのではないでしょうか!!」

「まあ、素敵なご意見ですことね、神奈川秀美さん!」

ぼむ、と手を合わせた学園長は、らんらんとした瞳でこちらを覗き込んだ。

「どうでしょう、お話にあった冷却期間を、当学院でお過ごしになつては?」

どうしてもNOといえない雰囲気にあるのを感じていた。

「さてさて、どうしたものかね?」

通信ウィンドウの向こうで、首をかしげる国連学園長がこちらをみた。

「どうでしょう・・・」

熱心な学院長のプッシュは幹旋先を通して国連学園まで伝わっており、教授会どころか学園長すら困惑させているとか。

まあ、背後に面白がったアマンド教授の存在があるのだけでも、その辺は了解済みらしい。学園長の向こうでアマンド教授がシユンとしているのがみえる。

直接呼び出されて、説教を食らったということだろう。まあ、自業自得というものだよね。

「さすがに身分を明かして国連情報機密を盾にして逃げ出すわけにはいきませんよねえ。」

「いかなあ・・・。」

うむと腕を組む僕と学園長。

向こうの話では既に何人も正体がばれて学園に戻ってきているそうだから、正体をばらして戻るといふ方向は間違っていないのだが・・・。

「既に学院外に君の評判がもれ伝わっておるのだ。」

そう、そうなのだ、妙な噂が学院外に漏れ伝わり、県教育委員会からの視察が行われることとなってしまったのだ。

事と次第によっては県側からの要請により、指導巡回してほしいということにもなるという。すでに学院長のほうでは名誉なことだということ容認しており、GOすら出ればどうなるやら。

「どうだね、半年ほどでそのへんの收拾をしてくるかね？」

「無茶苦茶いますねえ。」

がつくり肩を落とした僕へ、学園長は言う。

「まあ、少なくとも二月いっぱいまでは学園に戻ってもらえないというのが、教授会の見解だね。」

なんでも、冬期休暇までに完了するはずであった学園全体の精神洗浄は遅々として進まず、終わりに見えない作業に教授会は燃え上がり、洗浄方法の内容で大いに紛糾しているそうだ。

そのため、最速でも2月いっぱいまで帰還まかりならぬということらしい。

「なんなら、僕がずばずばとやっちゃいますか？」

「ずばずば、かね？」

「ええ、ずばずば」

「・・・自重してくれたまえ。」

というわけで、今年一杯であった任期が、学園からの通達により二月末まで延びた。

とまれ、神奈川秀美嬢が言うように、冷却期間をこの学院で過ごすこととなりそうだ。

なんだかなあ。

学院を一種の躁状態にするイベントがクリスマスだ。

一夜限りのイベントと、一日限りの学園祭。

そして翌日の片づけをさんでの終業式。

寮に残る人も残らない人も、ずいぶんと浮かれている。

今、僕の授業中でも、ごそごそと内職している人や、手紙をやり取りして打ち合わせをしている人などが殆どだと言う状態が、それを表している。

兎角うるさい教諭陣も、このときばかりは見てみぬ振りをするのがルールなのだそう、僕も気づいてはいるが無視している。

いちおう、発表されている課題は十分なものだし、手抜きであることは無かったから。

『ミスターイズミ、ちょっといいですか？』

小声でささやく神奈川秀美嬢をみると、少々顔が赤い。

風邪かな？

小首を傾げると、彼女はささやきを続ける。

『今日の課題の「同性の友達を情熱的にデートに誘うとき」という内容なんですが・・・』

『何か不満でも？』

『これって異性にも使いませるんですか？』

ふと、今までの誘い方を思い返してみて。

『応用が必要ですが、言い回しには問題ないでしょう。』

それを聞いた秀美嬢は、ちいさく『Yes!』とつぶやいてこぶしを固める。

どうやら誰かを誘いたいらしい。

それも、異性。

この学院でどんな異性と接点があるかはわからないけれど、果敢なチャレンジャーであることが知れた。

たいしたものだと思いつつ、授業を続ける僕だった。

自室状態の宿直室で授業計画とイロモノ課題のネタ探しにネットをアクセスしていたところ、ノック三回がドアに入る。

暗号なしのこのポーズは、学園の連中ではない。

「はい、お入りください。」

その声に誘われて現れたのは学院長であった。

「ごきげんよう、ミスターイズミ」

ちよこつと会釈して現れた学院長に、僕は座布団をお勧めして座することを促した。

対し、学院長はそつと微笑み、座した。

目の前に出された湯飲みに口をつけると、顔を軽く苦くした。

「少し、癖のあるお味ですね？」

正直に不味いと言わないのが上品なところに思えた。

「申し訳ありません学院長。手元に薬用茶しかなかったもので。」

「あら、漢方ですね？」

「いいえ、どちらかと言うとドルドイの魔女系統です。」

暗にハーブであることを示すと、感心したようにお茶を見つめた。

「それで、このお茶の効能は？」

「新陳代謝の向上と体臭の減退です。」

「まあ」と目を丸くする彼女に僕は苦笑する。

「そういう年齢ではありませんが、男性の出す匂いの中には無条件で女性や少女を不快にするものがありますから。」

なんとという御心使い、感極まったかのような様子で学院長は何秒か静止していた。

しばらくして何かを思い出したかのような学院長は、ぼむと手を合わせた。

現在、日本国籍停止中の僕に正式な運転免許なんてものは本来ない。

ましてや高校二年程度の年齢で日本の自動車運転免許は交付されない。

ではどうするかと言うと、学園内の運転許可証を国際免許扱いにしているのだ。

一応、電動軽自動車や電動バイクなどはいつも乗っているので問題あるまいが、今から乗ろうとしているものは毛色の違うものだった。

た。

外観で言うのなら、車名をこうあらわす。

「ケンターハム・スーパーセブン」

低い重心のスポーツオープンカーなのだが、幌をつけると視界最悪というしろもの。

低い天井と高いボンネットの隙間から覗き込むかのような運転感覚は、あたかもシュミレーターに乗っているかのようなだった。

いや、いちおう、この車に乗ることは考えられたので、学園でもシュミレーターに入れて練習はしてたけど。

しかし、ほんとうにこれに乗ることになるとは・・・

ちよつと小さなハンドルを子気味よく左右にきり続け、最寄の駅へとついた。

学院から自転車であれば二十分ほどで到着するが、全て下りだからこそそんな時間で到着するのだ。帰りは上り。

歩きでは本日の到着も覚束無いだろう。

そんなわけで、本日、クリスマススイブの特別公演に来てくれるというお客様をお迎えにきたわけだ。

学院長の話では、今日来るお客様は大変優秀な学院のOGだそうで、世界的に著名なえらい人なのだそうだ。

世界的に認められている日本人で、学院のOG・・・。

そういう御偉い女性とは肌が合わないんだよなあ。

鼻持ちならないというか、そりが合わないというか。

真っ黒なスーツと真っ赤なネクタイを締めた僕は、情報補助用のデータサングラスをかけた。

着色硬化フィルムを何層か重ねた中に液晶フィルムを入れたそれは、胸元のPDAと同期して任意のデータを表示してくれる。

データグラスの表示では電車はあと二分ほどで到着すると言うタイミングで、急に車が駅駐車場に集まりだした。

見渡してみると、次々とデータがヒットし、データグラスを通して車の所属が発覚。

県教育委員会、県庁職員、市役所、市教育委員会・・・。

物々しい人物の登場、と言うわけか。

思わずため息をついた僕であったが、県教育委員会の一人が僕のことを知っているらしく、偉い人っぽいおっさんをつついて、僕を指差した。

僕が会釈をすると、相手は不快そうに鼻を鳴らした。

どうも僕が県内巡回を断ったことを根に持っているらしい。

無表情に肩をすくめてしまった。

肩をすくめたのは反射だが、これ幸いと周囲を見回してみれば、どうも所属不明の車が多いことに気づいた。

無論、僕自身のUN三軍護衛がいるのだけれども、それ以外の所属不明車両が多い。

推測出来る範囲で見れば、データグラスでアクセスできるサーバーで検索できないぐらい機密性が高い関係者の護衛に機密性の高い部隊が出てきていると言うことだろう。

学園サーバー経由でアクセスできないということは、UN情報局か他国の情報局ということになる。

各セクターの情報局がけん制している人物が、地方の単線に乗ってやってくる。

なんともきな臭い。

どうしたものかと首をかしげているところで、一両だけの鈍行列車が駅に入ってきた。

ゆっくりと減速し、駅で停車した車両から、ピンポンという電子音。

それと共にドアが開くと、そこから一人の女性が降り立った。

真っ黒なスーツに真っ赤なネクタイをしたその女性は、顔の半分を覆うかのような真っ黒なオーバーグラスをかけていた。

やわらかく、流れるように歩むその人は、周りに集まった役所の人間を見回していった。

「私の出迎えは、あなた達ではないはずですが？」

引きつった笑みの中年男性は、ひとめご挨拶だけでもとか、県庁関係者との会食をお願いできないかとかなんとか擦り寄っていた。

互いに引かない押し問答をにこやかに行う人々を見ていて、僕は思わず帰ろうかと思ってしまった。

なんで、そうなんであの人がここにいるんだ、という思いと共に。とはいえこの場ら逃亡したとなれば、今後どういう目にあうかわかったものではないので、致し方なく押し問答の現場に押し入った。『ミス、お迎えに参りました』

目の前で一礼する僕を見て、彼女は、クノイチポニーテールさんは酷く驚いていた。

しかし、何かを飲み込むように笑顔を浮かべ、僕の腕を取り歩き出した。

「ちょ、ちょっとお待ちください、清音先生！！」

縫うとする役所職員たちを、どこからか現れた緑の制服の一段が取り押さえる。

「・・・彼女の身は、三軍元帥の命により保護されております。」

僕の腕を抱きこんだ彼女、清音センセは、僕の耳元でささやいた。「どこにも付いてくるから、ナンパも出来ないぞ。」「あー、うー」

冗談よ、とささやいた彼女は、華麗な身体裁きでスーパーセブンの助手席に滑り込んだ。

いやはや、凄い人です。

イグニッション一発でエンジンをかけた僕は、まずのところ車をスタートさせる。

ちよつと遠回りして走り始めると、横の清音センセはサングラスをはずして僕に向き合った。

「ね、なんでリョウくんが出迎えなのよ？」

「はあ、まあ、色々とありまして、現在身分を偽って学院の先生をしています。」

ざつと事情を説明すると、げたげたと笑い始めるセンセ。

「・・・だから最近、ミスアマンダからの電話が無いんだ。」

なるほどねえ、というセンスに今度は僕から質問をした。

「で、なんでセンスが講演なんかするんですか？」

「あら、知らなかったの？ 私は学院のOGなのよ？」

うわー納得いかない。

AE学院といえ、良家の子女で、箱入り娘で、お上品ですよ？
思わず顔をしかめる僕であつたが、センスは気分を害した様子もなく、微笑んでいた。

「しかし、いま学院で大評判の美形教師がりょうくんとはねえ。」
だいひょうばんって、いたい・・・。

「あら、凄い勢いでOG連合会に知れ渡っていて、私に偵察任務が下ったぐらいなのよ？」女の園にふさわしき、夢を与える美形かどうか？』ってね。」

あの一、それって積極的に手を出せってことですか？

僕の問いにセンスが苦笑い。

「違う違う。女の子の欲望の一手前で踏みとどまって、甘美な憧れだけを残せる聖職者かどうかってあたり・・・かな？」

・・・怖いこと言われている気がするんですが。

思わず顔をしかめる僕に、清音センスはけたけたと笑う。

「不合格ならば学院祭で追い出すって息巻いてるわよ、お姉さま方は。」

追い出す・・・。

様々な手法でいじめられる自分を思い、ちよつとだけ僕は震えた。

「ああ、大丈夫よ。そっちはね。」

え、と思わずセンスを見ると、彼女は苦笑していた。

一応、センスの協力もあって、僕とセンスは顔なじみであるということにした。

幼少のみぎり、日本国内にいたときのご近所さんで、仲良しこよ

しであるとセンセは説明した。

しかし、それって同年代ってことだよねえ、と思わず苦笑。

「まあ、それで本日はペアルックで？」

ペアルック、と言うくだりで、思わず再び苦笑。

「本当に何の打ち合わせもしていないんです。」

とはいうものの、僕が学校駐車場へ現れ、助手席のセンセを引き上げたとき、校舎のほうから凄惨な歓声があがった。

学院長曰く、「生徒が鈴なりでした」とのこと。

何に歓声を上げていたのかと思ったが、そういうことですか、とがつくり。

ふと、背後の気配に気づいて足を忍ばせてドアに近づく。

何事かとこちらを見たセンセと院長へ人差し指を立てて「しつ」と小さく一声。

両手で自分の口を押さえた院長の動作に可愛さを覚えたが、それはさておき、一気にドアを開けた。

すると雪崩くる生徒たち。

「きゃああああ！」

それを見て思わず眉をしかめる院長であつたが、センセは嬉しそうに微笑んでいた。

「で、少女たち。君たちはこの場をどうするのかな？」

そう言った僕に対して、にっこり微笑んでこういった。

『我々は、我々が思う罰を受けまゝす』

啞然としていた僕に対し、学院長はケタケタと笑い始めた。

僕の準備室でその話の意味を聞いたセンセは、こちらもケタケタと笑つた。

「なによ、じゃあ、彼女たちはリョウくんの手助になりたいのかしらっ。」

「どつてでしょう。」

「だって、君の助手の神奈川秀美ちゃんは、それが罰だって言うてるんでしょ？」

と、視線のさきにはカチンコチンに緊張して座っている神奈川秀美嬢。

センセの視線を受けて、真っ赤になっていた。

「ね？」と同意を求められたところで、彼女は真っ赤になりつつコクコクと頷いた。

よほどの質問じゃなければ、なんでもうなづく状態だな。

「あー、専任助手殿。」

「な・名ななななな、なんでしょうか？」

むちゃくちゃなドモリ方でこちらを向いた彼女に僕は首をかしげた。

「君はなぜここにいるんだい？」

「・・・えつと・・・」

思わず彼女は身じろぎをした。

つ、と視線の先に意識を向けると、なにやら人影がふむ、そういうことか、と僕は軽く何度か机を叩く。

すると、それを待っていたかのように準備室へ現れた人影。

『・・・ミスターイズミ。事務所にお電話ですわ』

『ミスズサン、ありがとうございます。』

軽く会釈する僕に、曹長は微笑んだ。

「お話の途中ですが、ちょっと中座します。」

「・・・ああ、なら私も付いていくわ。多分私に関係ある電話だから」

にこやかな笑みと共に準備室を出る僕たち。

取り残された神奈川秀美嬢へ、僕は一声かけた。

「ああ、準備室は施錠しておいてくれたまえ。」

は、はい・・・と小さく返事をした彼女を僕は放置状態でその場を去った。

宿直室に集まったのはいつものメンバー。

イブとレンファはセンセとの再会を喜んでいたし、クラウドディアさんはミスズ曹長と共にその光景を喜んでいるようだった。

『まあ、それじゃありヨウとペアルックで現れた超美人って、ミス清音でしたのね』

『もう、だれなのかって、やきもきましたあー!!』

『いやあ、あたしも全く同じ格好になるとは思わなかったのよ』

ケタケタと笑う姿は、本当に昔からの知り合いであるかのようにであつた。

『で、OG会のお姉さま方から何を言いつかってきたんですか?』

その僕の一言で、センセは押し黙った。

『ミス清音?』

レンファの言葉に引きつった笑みのセンセ。

『・・・実はさあ・・・』

何十秒もの逡巡の後に話し始めたセンセの話は驚くべきものであつた。

なんと。

『・・・良さそうな教員だったら、この学院祭の時間を使って落とす?』

こつくりと頷くセンセ。

『心身ともに?』

ちよつと赤くなつて頷くセンセ。

『・・・落ちませんよ?』

僕がそういうと、不本意そうにはほを膨らませるセンセであつたが、イブとレンファがさも当然とばかりに頷いていた。

『でも、私だけでは力量を問うということで、OG連合のお姉さま方が身内の綺麗ドコロを大挙でつれてくるらしいのよ。』

苦々しく言うセンセであつたが、僕は心底うんざりとしていた。

『じゃあ、在校生にもその辺の情報は・・・。』

『行つてると思つわよ? 母親や祖母がOGっていうのはよくある

話だし、娘や孫娘の話を聞いて腰を上げたというOGも多いもの。』
うつわ、と思わず小さく声を上げてしまった。

『逃げるしかないなあ……。』

片手で顔を半分隠しつつ、上を向くと、未だかけていたデータグラスが不穏な情報を映し出していた。

（・・・やばっ、盗聴だ！）

手話でイブとレンファに合図すると、彼女たちも顔色を変えた。
アマンダ研究室やデニモ研究室に出入りしている僕たちは、独自の手話が必須となっている。

（会話は続けて。でも核心部分はばやかして）

（了解）（わかったわ）

ちやかちやか手話をしながらセンセと会話を続けるイブとレンファは、空いた手でゆっくりと空中に文字を書き始める。

それを読み取ったセンセは、げげっという表情。

クラウディアさんと曹長は懐を探り始めた。

お互い、PDAで探りあった後、周囲の人間と壁を探り始めた。

しばらくしてドアを探り始めた曹長であったが、何かを見つけたらしく僕に擦り寄ってきた。

（ドアにピッキングの後がありました）

眉を寄せる僕であったが、その視線の先でテレビを指差すクラウディアさん。

（そこ？）（ええ。）

がつくりうな垂れた僕は、14インチのテレビをそのままかついで、ユニットバスの湯船に放り込んだ。

ガシャンとかガツンとかいう音を立てたそれに向かって、僕はたつぷりとお湯をかけ始めた。

ぶしゅつとかぐしゃつとか言う音と共に、何かがこげる匂いがしたが全て無視。

浴室を覗き込んだ女性陣は、顔をしかめていた。

『りよ、りよう？ ちよつとやりすぎじゃないかしら？』

いえいえ、やりすぎなんてことはないですよ。

『学校施設に対し、ピッキングなどと言う不埒な行為を働いた拳句に盗聴などと言う卑劣な行為をしている人間への配慮など必要ないのですよ』

『とか何とか言ってるけど、その盗聴器を元から証拠隠滅してくれるんだから、いいセンセよねえ。』

苦笑のセンセに、僕は顔をしかめた。

そんなんじゃない、と言いたかったが、僕は黙っていることにした。

そんな最中、浴室で湯船に沈むテレビからは、タンタルコンデンサが燃える匂いがいつまでももしていた。

苛烈、その一言に尽きた。

ミスタイズミがエスコートしてきた美女の招待は何者か！という疑問と情報が入り乱れた最中、その探査任務を三年のお姉さま方から仰せつかった。

実のところ、仰せつかるとうかが、これは命令であった。

致し方なく学院長室へと向かったのだが、いち早く立ち聞きしていた人間が退散していった。

進退窮まり準備室で本人を待っていると、そこに現れた美女を見て驚いた。

我が学院において伝説的なOGは多いのだけでも、最も新しく、最も凄いOGが現れたのだ。

その名も『天野川 清音』。

在野の一般中学校から二人もの生徒を国連学園に押し込んだ、世界的有名人だ。

各国の国連学園入学準備校からの勧誘も激しく、彼女の周りでは世界大戦クラスの情報戦が行われているそうだ。

『この少女は、だれ？』

気軽にミスターイズミへと話しかけた彼女は、何の感情をも込めないミスターイズミの返事を聞いてにんまりと微笑んだ。

『そっかぁ。専任助手ね。』

さすがOG、この学院の事情を十分理解しているようであった。

それなりに事務作業をしている振りをして、その場の話に聞き耳をたてちたのだが、ミスターイズミに感付かれてしまい、早々に退去されてしまった。

そんなこんなをお姉さま方に報告したところ、かなりほめられてしまった。

どういうことかと聞いてみれば、なんと私がミスターイズミとミス清音にかまつている間に、ミスターイズミのお部屋に盗聴器を仕掛けたと言うのだ。

なんとも信じられない事をする。

冷や汗をかきながら彼女たちに『そんなことをしてもいいんでしょうか?』と柔らかく聞いたところ、彼女たちは声をそろえて言った。

『愛ゆえに』と。

かなり性能の良い盗聴器を使っていたらしく、ミスターイズミの部屋の様子が手に取るようにわかったのだが、急に音声が途絶えた。何事かと思っているところで、凄い音が中庭から聞こえた。

重いものを高いところから落としたかのような音で、見てみるとそこには四散したテレビが落ちていた。

ずぶぬれになって、そして木っ端微塵になったそれをみて、お姉さま方は真っ青になっていた。

「ど、どうしましたの?」

「・・・ミスターは、機敏にお気づきになった上で、」

「うえで?」

「・・・かなりお怒りのようですわ。」

そりゃ、当たり前だ、と思ったが、彼女たちは継りつくように此方を見る。

「何をご期待かは知りませんが、淑女としての嗜みを忘れた行為の罰は受けるべきではないでしょうか？」

「あ、あなたとて同罪でしょう!!」

「少なくとも、私は、お姉さま方がなさった行為を存じませんでし
たし、容認も出来ません」

ぐつと言葉に詰まった彼女たちは、しばらくするとオイオイ泣き
始めた。

この世の終わりとばかりに泣き始めた彼女たちに対して背を向け
るのは簡単だ。

それが出来ない、損な役回りだと思う。

かなりささくれ立った気分だったので、センセのお相手をイブと
レンファに任せ、僕は一人で準備室で事務処理をしていた。

いや、何かいいいたげなクラウドディアさんや曹長の視線は感じるが、
まるつきり無視していた。

『あのお・・・ミスターイズミ?』

『なんですか? シスタークラウドディア』

『あのお・・・』

言葉でかけられた思いは答えなければならない。

そういうルールが僕にあるので彼女に向き合つと、彼女はちょっ
とだけひくついた。

『何ですか、シスター』

もじもじした後彼女は、何かを言おうとしたが何もいえなかった。
ふと、僕がかなり理不尽な怒りを彼女にぶつけていることに気づ
き、頭をかきむしった。

『・・・すみません。子供みたいにシスターへ当たってしまいました。
た。』

ぺこりと頭を下げる僕へ、やっとクラウドディアさんが口を開いた。
『ミスターイズミ。どうか、寛容の心を彼女たちにも・・・』

わかる、わかるですよ、その意味も必要性も。

今日はイブ、明日に向かって楽しい雰囲気盛り上げるのが大人の仕事でしょう。

しかし、しかし、ピッキングと盗聴？　どこの盗賊団ですか？

『私としては、いかな理由があろうとも、矛先を緩めるわけには行かないのです。』

『しかし、ミスターイズミ……。』

ため息の僕は、背を伸ばした。

顎を引き、そして言い放つ。

『アテイション！』

あわせ、曹長およびクラウドディアさんが直立で敬礼した。

『何を寝ぼけたことを言っているのですか。　僕の言葉と情報が流出しようとしていたんですよ？　その現実には彼女たちはいかな罪に問われるかを思い出してください』

すつと軍人たる顔になった二人は、徐々に青い顔になった。

『今のところ情報の流出はありませんし、懸案にする必要はないでしょう。しかし再発した場合、大きな力による浄化が行われるのです。』

そこまで聞いてクラウドディアさんと曹長は顔を赤くした。

『申し訳ありませんでした！』

ふと気づけば、ドアの向こうに誰かが来たようだ。

そのことを僕が促すと、二人の軍人は二人の職員へと戻った。

『だれだい？』

僕の一言に、ドアの向こうで少女が答えた。

『……神奈川秀美です。』

重苦しい雰囲気の間で、何か大きな叫びとそれに返事する声が聞こえた。

ぼそぼそと会話しているようであったが、ソレ二聞き耳を立てるほど恥知らずではないつもりであった。

その会話が一区切りしたところで、私はドアの前に立った。
人の気配に聡いミスターイズミから声がかかったのにあわせ名乗った。

初めて感じるようなぴりぴりした空気は、私が入室するのと同時に和らいだ。

多分、ミスターイズミが意図的に自分を抑えたのだろう。
今、私に不機嫌をぶつけても八つ当たりにしかならないから。
個人的にはそういう弱いところを見せてもらっても構わないのだけれども、あの苛烈な行動を見るとちよつと腰が引ける。

が、ここまでできたのだから、引かない。

『ミスターイズミ、お時間をいただけないでしょうか？』

『何だね？ 神奈川秀美君』

にこやかな口調であるが、いささか不協和音が聞こえるようであった。

やっぱり先ほどのことでお怒りのようであった。
当たり前だけど。

『先ほど、自室から何かを放り投げていらつしやっていましたが・・。
』

すると彼はちよつとうつむいてから、視線を上げた。

『少し、衝動的に虫のことが厭わしくなってしまうてね。反射的に投げてしまったのだよ』

どうにか言い分けた、そんなしぐさに一步踏み込まなければなら
ない事を、私は恥じた。

『では、あの散乱した危険物を、早急に始末していただけませんか
？』

ちよつと意表をつかれた風のミスターイズミが、くるりと背を向
けた。

しまった、さらに怒らせたかと思つたが、震える肩を押さえ込み、
そして此方を向いた。

『・・・わ、わかりま、した・・・』

そういつて、ミスターイズミが颯爽と準備室を出たとたん、背後に控えていた女性たちが近寄ってきて色々とはめてくれた。

おのが怒りにとらわれて、色々と見落としていたような気がする。盗聴だってピッキングだって学園ではされたけど、それを乗り越えてきた自分を忘れていた気がする。

正面きつて対処してしまったけど、それだってもっと面白おかしく出来たはずなのに。

（教師つて、思考を狭くするなあ。）

ため息と共に向かった先は、自分の部屋の外。散乱するテレビの残骸を片付ける少女たちを見つけた。

ふと、その少女たちが盗聴を仕掛けた当本人たちであることが知れたので、僕は何のことはない調子で声をかけた。

『ああ、すまない。私の癪癪で放置された残骸の掃除などさせてしまった。』

真っ青になった少女たちへ僕は手を一振りした。

「あ、あの・・・わたしたち・・・」

「いやいや、お手伝いいただくのは申し訳ないのだが、これは私の責任なのでね。」

そういつて少女たちをその場から追い立てる。

何かいいたげにズルズルと押しやられる彼女たちに僕はいった。

「何も無かった。僕が癪癪を起こしただけだ。・・・いいね」

潤んだ瞳で少女たちは頷いた。

一礼と共にその場を去ろうとした少女たちへ、僕は一声だけかけた。

『次からは、もっと上手くやりましたまへ』

失笑の僕を彼女たちは呆然とした顔で見送った。

イブの式典は莊嚴の一語に尽きるものであった。

鳴り響く鐘の音と合わさった聖歌は、生涯心の奥底に残るような感動を生んでいた。

両親の意向のみで進学した学院であったが、このイブに出会った
びに感謝の念が頭をもたげる。

ましてや今年はミスターイズミという特異な教師の専属助手とな
れたことで波乱の日々を送ることが出来た。これは何よりも収穫
だろう。

この感動を誰を分かち合えるのだろうか？

いや、もったいなさ過ぎる。

この思いと感動は、ひとりかみ締めるに限る。

思わず忍び笑いの私、神奈川秀美を、周囲の旧友たちは奇妙なも
のを見るかのような目で見ていたのであった。

教会の端っこで紐を定期的に引く役目をおおせつかったのは、先
ほどの罰との事。

まあ、宿直室からテレビを投げ捨てるなどと言う暴挙は処罰の対
象だよなあ、とため息。

正面の楽譜にあわせて紐を引くわけだが、これが結構難しい。

紐を引いてから鐘が鳴るまでタイムラグがあるので、楽譜道理に
鳴らない感じがするのだ。 厳密に正確にする必要はないと苦笑の

学院長が言っていたが、僕的には正確をきしなかった。

思わずタイミング調整に余念のない僕であった。

前夜祭と称して開催されたセンセの公演会は万雷の拍手によって
幕を閉じた。

僕は調子の乗ってがんばりすぎた鐘鳴らしのせいで疲労困憊にな

つていたので見れなかったのだけれども。

さすがに寝込むほどではなかったけど、だらしく座り込んでしまいそうだったので、舞台裏に回してもらった。

熱心な拍手を背に舞台袖に降りてきたセンセを何人もの生徒たちが取り囲み、惜しみない賞賛を口にし、敬意の視線で彼女を射抜くと休ませてね」と言つて特設の休憩室にもぐりこんだ。

既に僕とイブ・レンファは休憩室で待っていた。

「参ったわよ、ほんとにもう。」

苦笑の清音センセは、僕の手元の髪にメモを走らせる。

（盗聴は大丈夫？）（盗聴器はありませんが、壁の向こうでみんな聞き耳を立ててます）

その筆談でお互いため息をついた。

「お疲れ様です、ミス清音」

「感動的な公演でしたわ」

にこやかな笑みと共に紅茶を入れるイブ。

レンファはお茶菓子を用意していた。

「感動、ねえ？」

苦笑いで僕を見るセンセは、カンペを胸元から引っ張り出した。

「演説や講演なんていうものは、短いにこしたことはないというのが、ミスターイズミのご意見らしいけど？」

どうやら学園の入学式典で僕がした挨拶の話らしい。

「対話が求められる空間ならば、時間をかける意味があるでしょう。しかしおのが意見を人に押し付ける場であるのなら時間は短いに越したことはありません」

演台から挨拶するのと授業とは違うと言つてみると、センセは満足そうに微笑んだ。

「さすがはミスターイズミ。優秀ねえ。」
肩をすくめるセンセ。

この人に優秀とか言われるのはこそばゆいのだが、なんだか身内

にほめられている気がするの嬉しい。

思わず、ちよつと顔をゆがめて微笑むと、周囲から凄く低いざわめきが響く。

あ、やば・・・。

思わず反射的に無表情になったのだが、時既に遅し。

地響きのようなざわめきが周囲から近づいてきている。

『な、なに？ これ？』

『盗聴だけじゃなくて、盗撮があつたみたいです。』

無論、データに残せるような施設は風潰しにミスズ曹長がつぶしているが、単に見ているだけの機械についてはノーマークなのだそうだ。

まいったなあ、と内心苦笑していると、地響きのような雰囲気が行儀よくノックされるドアに向かって僕は観念することにした。

休憩室前でとまった。

昨晩は凄いことが発生した。

サイボーグかと思わせる無表情魔人のミスタイズミが微笑んだのだ。

事の始めは古くからの友人であるというミス清音と休憩室で歓談していたところから始まる。

防犯上の理由によりお姉さま方が監視カメラをつけて、さらにその映像を録画しない条件で学院内放映することが内密に許可されたため、プロジェクトを借り出して講堂で放映し始めたのだ。

音声までは引っ張ってこれなかったが、上映された映像の中で、確かにミスタイズミが微笑んだのだ。

あたかも少年のような笑顔に、周囲は叫び声を上げようとして自らの口をふさいだ。

これがばれてしまったら元も子もない。

さて、このお宝映像を胸に秘め、ベッドの中で反芻しようと腰を

あげたところで、周囲の視線が集中していることに気づいた。

見ている人、ほぼ全員。見られている人、私、神奈川秀美。

無言で集まったお姉さま方は、私を盾にするように押し出して、ずいずいと休憩室に向かった。

何をさせるつもりかと振り向くと、そこではお姉さま方が血走った目をしている。

彼女たちの目が言う「あける」と。

この人たちには逆らえない私は、仕方なくドアをノックする。

「・・・神奈川秀美です。よろしいでしょうか？」

その声を聞いて、中では苦笑は広がっていた。

どうやら此方の動向は筒抜けらしい。

暫く苦笑が気配で感じられたが、それが収まったころ声がした。

「入りたまえ」

その声は、男性の声であり聞きなれた声であったが、聞きなれない調子であった。

笑いを含んだ、そんな声。

失礼に当たらないよう、ゆっくりと扉を開けると、そこには黒のスーツと赤いネクタイをして、顔半分を覆うようなオーバーグラスをした男性がいた。

ほかにも人はいた、しかし目に入ったのは彼だけだった。

彼は口元を緩めつつ、いや、微笑んでいた。

「・・・」

背後のお姉さま方同様、呆然と彼に見入っていると、彼の隣から軽い笑い声が響いてきた。

みれば、そこには彼と同じような格好をした長身の女性、ミス清音。

「やっぱり、表情殺しておいたほうが良かったでしょ？」

答えるのは彼。

「ええ、この調子では授業になりませんからね。」

え、と混乱した頭で考える。

そして即座に反応した。

「ば、馬鹿にしないでください！ 色男の一人や二人で授業に穴などあけません！」

この笑顔がみらえなくなるぐらいなら、夜中十勉強してでも成績は落とさない。

そんな確信をこめた反応に、お姉さま方も頷いている。

「・・・やっぱ、だめよ。君の笑顔って、そこいら中のフラグを無用に立てているだけだもの。」

ぐつと言葉に詰まる私たち。

そして助けを求めるように彼を見ると、苦笑を浮かべて肩をすくめていた。

「まあ、教育方針は自らの手で示しますよ。」

それを聞いてミス清音は苦笑い。

しかし、私たちは見た。

本当の彼の笑顔を。

それは何よりもクリスマスパゼントであった。

そしてその笑顔は全校生徒の胸に直撃し、こう確信した。

「よそ者にはやれない」

そう、それがたとえOGでも。

確証とその連帯感は学院生徒を一丸とし、翌日の学院祭に向かわせた。

一晩中続いた会議は、あたかもベンチャー企業の企画会議課のような活気にあふれ、そして当日に開花するだろう。

眠い目をこすりつつ、私たちは持ち場に向かって走った。

AE女子学院の学園祭は、一日だけ、クリスマスの日に行われる。完全全寮制ミッションスクールという敷居の高さの上に良家の子女が集っているレアさから、その招待券にはプラチナチケットと呼ばれている尊称を受けている。

近隣学校の男子生徒たちにはどのような手を使っても手に入れないチケットという評価を受けているとか。

実は僕にも事前に招待券が受け渡されていたのだが、その使い道があるうはずもなかった

なにせ、身内は呼べないし、その他の呼べそうな人員も全員学園関係者だし、センセは既に講演からこっち一泊しているので関係ないし、というわけだ。

・・・のだが。

昨夜、その話を聞きだした美貌の若年教授様がズビ！と画面の向こうから指をさす。

「予約！」

「は？」

「そのチケット、予約！！」

「・・・ええゝ・・・。」

散々な交渉の上、学院でのバーター棒引きを条件にチケットを渡すことにした。

いささか策略めいた陰謀を仕掛けられた支援であったが、全く役立たなかったわけではないし、学園長からの介入があつてからは非常に助かっていたし。

どうやって受け渡すか、と首をひねっていたところ、ノックと共に合言葉。

振り返ればそこにはミスズ曹長が立っていた。

「御用を承るべく参上いたしました」

うつわあゝ、どこぞの忍びですか、あなたは。

「そのような御用でも承ります。」

にこりと微笑むミスズ曹長にチケット袋を渡したところ、彼女は首をかしげた。

「あの、お一人ですので、一枚でよろしいのでは？」

「いいよあ、適当で。何枚あつても使えないんだし。」

「は、はい。適当、了解いたしました」

ぴつと敬礼した彼女は、瞬間的に姿を消す。

あわせ、ウィンドウの向こうのアマンダ教授はにっこりとわたつら。

「ふむ、何枚くるか判らんが、こっちで適当に処分しておこう」

「ああ、そうですね、一応、常識的に」

「ふむ、常識的に。」

聊か間の抜けた話だが、僕はそのとき彼女の常識を疑いすらしていなかった。

学園で何度も味合わされた彼女の常識を。

昨夜の出来事を思い返しつつ、僕は小さくあくび。

片手で押さえられるあくびをかみ殺し、せいぜいまじめな顔をしておいた。

今まで目の前に流れた内容かというと、講堂での礼拝、学院長の長話、今後の予定の発表、なんていうものが終わってから初めて学園祭の開会となるわけだ。

そんなものを、お客様がいらつしやり始める八時前に配置できるように早朝からはじめるというのだから眠くないはずがない。

全寮制でなければ実現不可能なことだと思う。

「ね、リヨウ。あなた、チケットはどうしたの？」

隣からささやくレンファに「僕はアマンダ教授に預けた」と答えたところ、彼女の顔は引きついた。

ふと気付いたので反対側を見るとイブも引く付いている。

どうしたの？ という僕の問いに、彼女たちは小さく答えた。

『私たちもチケットを預けている』と。

さあ考えてみよう。

教員用に配給されているチケットは約三枚。

僕たち三人が全て預けたチケットの総数は9枚。

自ら出向く数を引けば八枚ものチケットが彼女の手元に渡ったこ

とになる。

「・・・僕は、教授と愉快的仲間たちが来たら逃げるよ。」

「な、なにいつてるのよ。教授はあなたの誘導結果を見に来るに違いないわ。」「そうよ、本人がいなくなつて良い訳がないじゃない」

「・・・君たちだつて、同性に受けが良い誘導をバリバリ使つてくせに。」

「私たちのは教授の元で培つた学習成果ですもの。」「そうそう、何も目新しいことはないわ」

つまり、教授の興味は引くまいということらしい。

「君たち、閉鎖空間で対抗措置のされていない子羊たちの精神がどのように変質してるかつてな話を、あの教授が興味を持たないわけがないと思いませんか？」

僕の意見を聞いて、彼女たちはブルブルツと背筋を震わせた。

「少なくとも、ラボのお姉さまたは興味深々だと思つよ。」

無言でその言葉を無視する二人。

核心を突いた話に違いない。

聖書の解釈とその情景を描いた絵画の模写を主題にした『聖書の時代のあれこれ』は、展示がメインの企画ではない。実際に聖書が描いている時代の食事を再現して試食会をするというのが主眼だ。

ずいぶんと突飛な企画なので許可が下りるか不安だったけれど、衛生許可を取り実行できた。

食べ物企画の許可は降りにくく、手を変え品を変えて企画されているが、今年の我がクラスの企画は秀逸であるとの評価を周囲から得ている。

このくどいまでの絡めてはミステ리즈ミから得た薫陶によるものだと私、神奈川秀美は思っている。

クラス自体も彼を副担任であると思つている節があるので、その考え方には賛成なのだそうだ。

実行可能な内容の組み合わせで自分の希望と要望を通すと言う手法は、きわめて社会的なもので宗教方面に進む予定のない生徒たちには好評だと言う。

もちろん、実行可能と許可される内容には隔たりがあるので、そこらへんは自らの経験をもって知らなければ鳴らないだろうけど。ともあれ、朝早めから来校しているOGのお姉さま方からきわめて高い評価を感想ノートにいただいていた。

「うつわぁ・・・OG連合会最高顧問って、あの？」

感想ノートに記帳されている名前を見て、私は、神奈川秀美は眉を寄せた。

「・・・緊張で死ぬかと思ったわよ。」

ルームメイト殿は未だ青い顔だ。

学院のOG会にはいくつもの派閥があるが、その派閥を超えた連合組織の会長こそ現文部教育省長官婦人である鬼怒川ももえ様である。

そのももえ様ご記帳のノートを見て、私は首をかしげた。

「達筆すぎて読めないわよ。」「学無さすぎ」

思わずにらむと、ルームメイト殿はメモ帳に楷書で書き直してくれた。

曰く「小癪な小手先の業なれど、小娘にしては天晴れ」だそうだ。「・・・けんか売ってるのかしら?」「認めたんでしょ? あなたのこと、結構詳しく聞いてたし。」

は? と聞きなおすと、どうやらこの企画を進めた人間の名前や人物像を詳しく聞いていたそうだ。

「それで、教えたの?」「当たり前じゃない。」
「やぁ~~~~」

思わず叫んでしまった私を、発酵パンをかじった見学者が見つめていた。

最近、生徒会のお姉さま方にもミスターイズミの専属助手としての注目が高まっているし、今日に至ってはももえ様の視線が掠めて

いたりする。

平凡平穩こそが望みの生き方のはずなのに、ここ数ヶ月は波乱に富んだ毎日のような気がする。

「ん？ 我が専属助手殿。何か悩んでいるのかな？」

軽やかな声を聞けば姿を見ればわかる人物、我が師ミスターイズミが立っていたが、見慣れぬ人たちが彼に続いていた。

はじめに視界に飛び込んだのは、真っ白な司教服に身を包んだ銀髪の美丈夫。

その隣に真っ赤な髪の毛を腰までたらし、真っ黒なスーツに身を包んだ美女。

さらに、真っ白で長い髪の毛と真っ白で長い御髭を蓄えた、丸レンズのサングラスをした老人。

続いて司教服に身を包んでいるのだが、絶対に宗教関係者には見えない「アインシュタイン」風の風貌の老人。

そして最後は若々しい風貌であるものの、深みの在る無表情は、赴任当初のミスターイズミを思わせる司教服のアジア人。

「ミスターイズミ。この方々は？」

「ああ……、私の活動教区の方々、です。」
なるほど、と見回した。

そして精一杯の礼儀と笑顔で挨拶をすることにした。

「ようこそおいでくださいました、皆様。わたくし、本校においてミスターイズミの専属助手をさせていただいております神奈川秀美と申します。」

一礼の少女を見て「おお」と声を上げるのはアマンダ教授。

多分、僕が指導して覚えさせた「受動的対精神誘導」の状態に気付いてのことだろう。

今まで研究していた「対精神誘導」は、アクティブに精神状態を変化させるために、発動条件によって精神がLowな状態で暫く固

定されてしまうという弊害があった。

しかし今研究している手法では、Low固定の心配が殆どない。
無論問題はある。

強力に、専制的に誘導された意識誘導にある程度影響されてしま
うのだ。

ただし、精神汚染を目的としているわけではないのだから通常の
誘導など「受動」で受け流すことが出来ること請け合いだ。

『なるほど、素晴らしい成果ではないかね？ ミスターイズミ』

さらさらした瞳で見ているアマンダ教授は、この成果についての
開示を求めているに違いない。

とはいえ今は身分を隠している身なので、それとなく神奈川秀美
嬢と挨拶してる。

『君の周りには綺羅星ばかりが集まるね。』

苦笑の風御門生徒総代は僕にささやいた後、神奈川秀美嬢と握手。

『・・・久しぶりに離れてみて判るけど、やっぱり騒動の中心はそ
っちだな』

わがルームメイトは苦笑いで僕と握手。

『てやんでえ、学園でも騒動ばかりだつてきいてっぞ？』

小声で返すとルームメイト殿も負けてない。

『はあゝん？ どうかの馬鹿やろうが仕掛けた精神トラップが発
動しまくって、フラッシュバックの連続でい。』

ぎりぎりと握手に力を入れる僕と黄を周囲はニヤニヤと見ていた
が、珍しいものと見るかのように神奈川秀美嬢が覗き込んでいると
ころを感じてわれに返った。

「あ、あああ、すまんね。彼は親友なものだから、旧交を温めてい
たのだよ」

少年のような表情と、それを取り繕うかのような大人びた笑顔。
ダブルパンチに彼を視界に納めていた在校生はグラグラと揺れて

いた。

私は何とか踏みとどまって、その笑顔を迎え撃ったが、その姿を見取った色気満載の女性が興味深そうに私を覗き込んでいる。

「神奈川秀美さん、あなたはとても意志が固いようですね？」

何を指しているのかと思ったが、彼女の言わんとしている所は理解できた。

なにせ周囲の生徒・OG・教員全てがメロメロであることが知れるから。

私はどちらかというとその状態を超越しているのであって、メロメロでないわけではない。むしろそんなことを教えるつもりはないので、苦笑しか出ない。

「俗世間に疎い私たちにとって、隔絶された世界で彼を見れば想像以上の効果があるのでしょーけど、興味があることは別ですから。」

そう、彼をものにしたとかそういう理由ではないのだ。

彼氏にしたいとか夫にしたいとか言うことではなくて、彼に興味があるのだ。

それは恰も彼から吹き出す不思議な風の色を知りたいとか、彼からあふれ出す泉の色を知りたいとかそういう感情なのだ。

欲情と肉欲はがないわけではないけど、其れよりも溢れる好奇心が留められない気がするのだ。

だからそんな思いを彼女に伝えると、面白そうに私を覗き込む。
「なるほど、パーソナリティーの上書きね」

そんなことを呟いて彼女はミスターイズミを見ると、彼は苦笑で両手を上げた。

「面白いわ。」

そんなことを呟いて、ミスターイズミのご親友の首根っこをつかむ。

「ミ、ミスアマンダ・・・なにを？」

「こんな面白いところを小出しで見ではツマラン。集中的に見るから手伝うのだ。」

「や、でも、ほら……。」

「ん？ 嫌だ嫌だといつても、心根はそういつておらんぞ？」

抱きこむようにご親友の頭を小脇に抱えると、ズイズイと廊下を突き進む彼女。

『む、胸が、し、しげきが……』

『はっはっはっはっは、うれしかろう』

聊か聖職者にあるまじき言動と行動に思えないこともないけれど、そういう敷居の低い集団であることはミスレンファやミスイブなどの言動から知れる。

学園の連中を学院で案内するというのは奇妙なもので、なんともくすぐったい気持ちでした。

「して、ミスターイズミ。そこもとが指導したという成果は如何なる発表の場を得ておるのかな？」

まん丸サングラスの学院長は珍妙な日本語で話しかけてきた。

「ああ、彼女たちは正式な聖歌隊ではありませんので、今回発表の場はありませんよ？」

「何ともつたいない。」

とはいえ、彼女たち自身各々の発表の場や時間が存在しているのだし、練習だつてしているわけではないのだから、無理強いは出来ません。

そんなことを言う僕を専属助手殿が覗き込んだ。

「なんだね、神奈川君？」

「ミスターイズミ、あなたのご指導なさった生徒の合唱を御所望でしょうか？」

おもわず頷くと、彼女はおもむろに懷からトランシーバーを出す。トークスイッチを押し込むと浪々と歌いあえた。

「使徒より金子羊に伝令、使徒より金子羊に伝令。勅命は下った、勅命は下った、直ちに総員は位置につけ」

音楽的な響きを感じさせる彼女の声が終わったと同時に、周囲の教室から何人もの少女たちが走る。

『本日、学院祭に御出での皆様にご連絡します。ただいまより緊急企画、「子羊達の午後」を開始いたします。準備も含め20分後に開始しますので、どうかお誘いあわせの上、校庭側に面した展示教室窓側にお集まりくださいませ』

え、とおもわず神奈川秀美嬢を見ると、彼女はよく見知った笑顔で微笑んでいた。

それは学園でみんながよく笑っていた、してやっつたりの笑顔。

衣装もまちまち、並び方もまちまちであつた彼女たちが、伴奏もなく会場もなく校庭の一角に並んだ瞬間、嬌声と歓声が校舎から溢れた。

淑女としての成り立ちについて聊かの文句の在るOGたちは眉を寄せたものであつたが、無限に拡散する校庭の音響環境を無視した指向性で詠われた成果を聞いて口を、言葉を無くす。

声が響く、詩が響き渡る、想いが伝わり伝播してゆく。

雪の消音効果を越えて、広がる空間の障害を越えて、神の愛がその場で音律となって現れる。

「あ」の音律が校庭から響くと、同じく「あ」の音律が校舎中から響く。

「あ」が世界を肯定してゆく様が視覚に訴えるが如くの密度で聴覚を占めてゆく。

「あ」の音律の海の中で「ら」の漣が南国の海のように青く澄み心地よい何かを感じさせる。

その彼方から歌われる神の愛の歌。

ひと時でも神の家に暮らし学んだことのある少女であつた女性たちは、はらはらと涙を流した。

遠く過ぎ去つた時間と時代を思い返し、それ以上に古式ゆかしい

今を楽しんでいる少女たちを思い、胸を熱くした。
したたかに、それでいて純粹に思いを歌い上げるその少女たちを
視界に納めて涙を流した。

不意に現れ、隣にたったアマンド教授は一人だった。

「黄はどうしました？」

「そんなことはどうでもいい。」

つぶやくが如くに言う彼女は、至極真剣な視線をしていた。

「恐ろしいまでの集団誘導だぞ、これは。」

眉間をしごく彼女はささやく。

「少なくとも、かなり危険なレベルだ。」

再び眉間をマッサージする。

言葉なく見つめ、そしてマッサージ。

繰り返しの動作は対抗処置のようだが、どうも効果が薄いような
ので、受動的対抗措置を害具から施すことにした。

アマンド教授の腕の一部に手を添えて、もにゅもにゅとマッサージ
すると、表情が晴れやかになっていった。

「・・・対抗措置まで研究済みか・・・。」

苦笑のアマンド教授は魅惑の歌を聞ききつて、ため息をついた。

「リョウ＝イズミ、この学校をウチの分室にするつもりか？」

「いいえ、そんなつもりはありませんが、其れを企む人はいるら
しいですね」

「馬鹿いうな。ここまで恐ろしい展開など意図しておらん。」

「意図せずとも、圧力を加えると弾ける馬鹿の存在を忘れていま
せんか？」

「・・・忘れていたよ、本当に」

「それに、ここは極めて閉鎖的で宗教色の濃い異空間です。聊か問
題はありますが、この後の冬期休暇でリセットされるでしょう。」

「なるほど、そこまで見据えたものか。」

ふうと汗を拭うアマンド教授であつたが、終了した歌を見て首をひねる。

「・・・冬期休暇如きで忘れられるような一体感かな？」

「そりゃあ、地元に戻って羽を広げれば、窮屈な学校生活なんて・・・ねえ？」

より深く首をひねるアマンド教授であつた。

計画しただけで、何の練習もしてなかった企画「子羊たちの午後」は大盛況のうちに終わった。

ミスターイズミの指導によって歌唱力を挙げたメンバー中心の聖歌企画だったが、極めて好評の意見が集まつた。

少なくとも、教区間でミスターイズミの取り合いをしているという司教クラスの方々にはよい印象を与えたものと思う。

学院祭終了と共に三々五々二お帰りになった皆さんの中で、ひときわ美貌に輝く人々であるミスターイズミに関係者に直接ほめてもらったのは嬉しかったのだけれども、赤いスーツの女史に「ぜひともいずれの面会を」といわれたのは怖かつた。

が、すべて終了の校内放送があつた時点で忘れることにした。

今までの人生の中で最大の一体感を胸に秘め、冬休みに突入するために。

学院祭が終わり、寮生たちが明日の帰郷にあわせて荷作りをはじめたところ、僕は学院長に呼び出された。

かしこまって並んだ僕、イブ、レンファに加えて、クラウドディアさんが部屋に居たが、思わぬ人と対面させられた。

その人は、現役文化教育大臣夫人であつた。

一礼の老女に僕らも合わせたが、にっこりと微笑む相手に合わせ

かねていた。

なにせ、かなり腹黒い邪悪な笑顔だったから。

「お初にお会いします、モモエと申します。」

「はじめまして、リヨウ・イズミと申します。」

礼儀に適った挨拶の応酬はここまでで、続いて出てきた言葉にひくついた。

「で、滝浪の衆が、なぜここに？」

滝波というのは、過去、井川周辺山間部に多かった苗字で、政府などで学園を指す隠語となっている。

まあ、以前対面したことの在る老女だし、隠語を使って「はじめまして」といつているぐらいだからばらすつもりはないのだろう。

そう判断した僕は、にこやかに微笑んだ。

「実は、地元での布教活動の際、色々と問題が発生しまして、一応事態收拾と私の所属権に関する問題収集のために外部研修中なので。」

暫く考えた風の老女は、なるほど、と呟いた。

「で、ミスター・イズミは、何時までいてくれるのかい？」

「三月中ごろまでお邪魔していようかと思いますが、ご迷惑ですか？」

「いいや、二年でも三年でも居て欲しいし、こっちとしては何時居てもらったほうが都合がいいかねえ？」

にやりと微笑む老女は、どうも僕の周辺にいる凄い人たちに合い通じるものがあるものと感じる。

「・・・さすがに長逗留は教区が黙っていません」

二三言葉を交わした後で、老女は背後で押し黙っていた学院長に言う。

「そんなわけで、OG連合はこの人たちの確保を断念するよ」

「・・・そ、そんな・・・」

縋りつくような学院長を、老女は笑顔で抑える。

「だめだよ、学院長。この人たちを押さえるにはあたし達じゃ目方

が足りないんだ。」

首を鳴らしてコリをほぐした老女は、つかつかと近づいて僕の手を取る。

「しかし、当学院は、そっちと縁が出来たもんだと考えていいだね？」

苦笑で頷く僕を、老女は微笑んで頷き返したのであった。

真っ白な校舎、真っ白な寮。

しばしの別れに涙が出てきている生徒も多いが、教員たちにとっても貴重な休みだ。

大手を振って学院を去る集団に手を振りつつ、僕は小首をかしげる。

この冬、何処に行こうかしら、と。

第十九話 冬休み機甲

1. タイコンデカル口北回帰線

軽く伸びをする。

移動型の執務室は、初めて使うとは思えないほどの使い心地のよさで、違和感のなさは折紙付きであった。

今、僕が寝泊りしている「タイコンデカル口北回帰線」は、資材として飛翔させられて以来から二度と地上に降りない定めにある航空『空中』母艦である。

UN軍航空機の整備や補給を行える母港であり、遊戯施設や休憩宿泊施設があるホテルであり、地上での指揮不能状態となったときに使われる司令部でもあった。

で、実のところ僕は、現在地上での指揮が不能な状態なのだ。

学園は今年度、かつてないほどの閉鎖状態であった。

其れもこれも全て、一人の生徒の実力を見誤って遊んだ結果であることは明白であった。

結果ゆえ、一切の講義も試験も全て停止状態の中でも来年度に向けての受験準備は着々と進んでいた。

ひとえに身についた本能ゆえの行幸であろう。

本来であれば正気であるところの僕も試験作成準備に加わるべきところなのだが、行状が行状なので学園への帰参が叶わず、処払いが継続中である。

ともなると冬期休暇中の居場所に困るというわけだ。

学園は処払い中なので無理、実家では何処で「学院」生徒と合うかわからないので無理、そして海外保養も同様の理由で行くに行けないというわけだ。

無論、A E学院も無人になるので居つけないというと、何処に行つたらいいのかも解らない状態。

さてさて、どうしたものかと首をかしげているが、学院に在籍中、表の顔のミスターイズミは各方面からのアプローチが尽きない。

新年ミサに同行して欲しいという生徒もあれば、学習要領のまとめを付き合つて欲しいという教師も居たわけだが、身内の視線が怖くて全員を断つた。

企画も招待もない冬休み、何処に行くべきか・・・。

そんな遊びの算段をクラウディアさんが豪快にひっくり返した。

「元帥、指揮所を開設していただかないと、全軍停止します!!」

ああ、とおもわず相槌。

なるほど、遊んでいるわけには行かない。

そんなわけで、年も押し迫つた時期に三々五々の調査を行い、現在の地上で元帥府を開設することが可能な施設が一切ないことが判明した。

裏技を使ってA E学院の宿直室を占拠するか、とまで追い詰められた僕にむにゅむにゅと口元をゆがめたクラウディアさんがこう聞く。

「元帥、北と南、どちらがいいですか？」

「北」

そう即答した僕が、僕に加えてイブやレンファが連れ込まれたのが航空空中母艦「タイコンデカル口北回帰線」であつた。

ミニジェットで移動中参照した資料によると、タイコンデカル口には「北回帰線」と「南回帰線」があり、その名のとおりに「回帰線」上を周回している。

この二機は三軍兵力を迅速に世界展開できる機動力の源であり、国連空軍の要といつてもいいだろう。

が、つい一年前までは廃棄処分前だったとか。

こんな便利なものをどうして、と思つたが、整備工数の多さやコストの高さは全軍一だそうで、厄介者扱いをされていたという。

聞けば聞くほど不遇な身の上だなあとおもっていたのだが、それもこれも夏期休暇を前にして一転したそう。

士気の高い整備兵、事務能力の高い職員、豊富な予算、豊富な人材、全てが同日一斉に配備され、一気に状態改善が行われた結果、全軍で最も運用効率のよい部署と謳われ、既に高かった士気をさらに上げたという。

その辺のデータを見せられて、おもわず「すげー」とか呟く僕を、クラウドディアさんは呆れ顔で覗き込んだ。

「元帥？ 何を感じしてるんですか？」

「え？ だって、凄いいつかなんと云うか、信じられないてなみだなあ、と」

なぜか何かに絶望したかのような表情のクラウドディアさんは、ため息一つ。

「えつと、なにか、もんだいが？」

「その一斉配備は元帥閣下の人事接收処理の結果なんですよ？」

あ、忘れてました、というか忘れていたかった。

おもわずクラウドディアさんを覗き込むと、彼女はこみ上げる何かをねじ伏せるように言葉を発する。

「・・・北回帰線機長以下全兵挙げての歓迎会が準備されていますので、十分に気をつけてくださいね」

えー、とおもわず嫌そうな顔をした僕にクラウドディアさんは言う。「元帥閣下が『本当に』お忘れのようですのでご忠告いたしますが、北回帰線兵員は『女性』のみ、南回帰線兵員は『男性』のみとなっておりますので。」

瞬間、両脇に居た美少女は僕をつねった。

思い出した、というか思い出さされた。

航空機として登録されている割には、嫌になるほど男性ばかりで、嫌になるほどトラブルの多い機体があったのだ。

二機共に延命修理しかされていないので、整備兵のいいところ全てをつぎ込んでやろうと軽く思ったのだ。

ただ、UN内での男女比率について色々物議をかもし規定があるので、その辺を全く無視した人事を押し通したのに、何でうまく行くかな、とは思っていたんだ。

思っていたんだけど、抗議一つ上がってこなかったたので気にしていなかったのだが、気にするべきだったといまさらながら思う。

ジャンボが三機ほど駐機できるエプロンハンガーで、乱痴気騒ぎの女性たちはもう男と大して変わらない大騒ぎであった。

同性だけの集団って怖いなーと思っていると、ほぼ半裸の整備兵が何人も押しかけてきて抱きしめたりキスしたりとやりたい放題。

よくイブもレンファも黙っているなあ、と思ってみると既に二人はつぶれていた。

聞けば、なんでも、極めて高高度を飛行しているタイコンデカル口機内では、酒精に対するガードが誰もが低くなるそうで、地上のつもりで酒を飲むとおおよその人がつぶれるとか。

整備兵のお姐さん方の大騒ぎも、この辺に理由があると思える。

「・・・いや、でもね、この職場は最高だよ」

イブとレンファを軽くどかして僕の隣に座ったタイコンデカル口北回歸線の機長、メイム・ヒュレイカ大佐は言う。

最高のチームで最高のスタッフで、最高の環境だ、と。

悪いところは思い至る部分で殆どなく、よいところは列挙しても追いつかないとか。

「あと、あの対Gスーツ、最高ですよ!!」

ゲラゲラと笑いながら、僕を叩く機長は、何かを視界の端に捉えて指差す

「そ、そうそう、あれあれ、さいこー!」

見れば、久永スーッタイプ9。

それを身につけた女性たちが、軽くしなをつけて僕にウィンク。あちゃー、とおもわず苦笑すると、真剣な顔で彼女は僕を見た。

「あのスーツと高圧縮落下傘に何人の仲間が助けられたか解りません。」

すっと僕の手を取った機長は、自分の胸元に引き寄せ、抱きしめた。

「何処よりも多く、何処よりも早く、このタイプ9を支給してください。さったご恩を忘れません。」

深い胸の谷間に抱かれた瞬間、おもわず頭の中が真っ白になりそうになったが、一寸違和感。

「・・・あれ？ タイプ11？」

するとどうだろう、機長はいたずらっ子のような笑顔で僕を見た。

「あ、やっぱりバレマシタか。」

お茶目な人だなあ、と思って笑うと、周囲の女性へいたちが目を丸くした。

「機長、ずるーい！！ 先駆け無用だっていったのは機長じゃないですか！！」

「な、何を言う、高級仕官同士の、その、じゃれあい、だ」

「じゃ、わたしたちは『同世代』同士のじゃれあい！！」

きゃーとかわーとかいう女性の波に、僕は飲み込まれていた。いかん、正気が保てそうもない・・・。

気付けばイブとレンファに連れられて、僕は自室にあてがわれたゲストルームの前に立っていた。

ふたりに支えてもらっているものと思ったが、逆に僕が二人を支えていることに気付いた。

おや、と思って二人の少女を覗き込むと、顔を朱に染めて視線をふらふらさせていた。

ゆっさと揺ると、二人の視線は急遽焦点を結ぶ。

瞬間、ぱっと僕から離れた二人は、なぜか下を向いていた。

あれ、と思って左右を見回して気付く。

視界に見慣れたフレームがない！！

やばい、と思つて懷を探ると、透過アルミニウム製のケースに入つた予備眼鏡。

急いで掛けなおしたところ、気配でそれを感じた二人の少女は、がくがくとひざを震わせて座り込む。

「あ、あの・・・」

「黙つて、今は黙つてて！」

絶叫にも近い二人の声に僕も驚く。

暫く呆然と立っていた僕に、二人はそつと寄り添つた。

「ごめんね、リヨウ。私たちの所為なのに、私たちが何とかする問題で当り散らして」

「もう大丈夫だから、本当に大丈夫だから、許してね。」

そつと僕は抱きしめて、そして声を殺していった。

「・・・えつと、あの宴会場での記憶が途中から無いんですが・・・」

真つ赤になつた二人の少女は、同時に僕の頬を平手で襲う。

精神的に落ち着いた二人の話、酩酊状態から復帰して初めて見たのは人の海にもまれる僕だったという。

顔を真つ赤にして半ば意識を途絶えさせかけている姿を見て、不味い状況である事が知れたという。

こんな状況になる前に何とかするはずの人はと探してみれば、クラシックな複葉機のコックピットで酔いつぶれているクラウディアさんを発見。

至福の姿を見るまでも無く状況介入には役立つまいと判断したという。

ならばどうする、視線を交し合う二人の目の前で、一陣の風が吹いた。

どんな種類の風かはわからないが、その風が偶然持ち上げられた

僕の横つ面をねじ切ったそうさ。

瞬間、どこかに吹っ飛ぶ伊達眼鏡。

やばい、とおもって意識のギアを切り替えた瞬間、それは起きた。音も無くずれ落ちる女性兵たち、つややかな呻き声と共に身を震わせる女性兵たち、人波が消えたところに殺到しようとして崩れ落ちる運命に殉じた女性兵たち。

僅か数分のうちに会場は静寂に包まれたという。

やばい、本気で思う事だがイブもレンファも意識のギアの入れどころを間違えて金縛りにあってしまった。

あわや、学園に送り返されるのか、と思っているとここで近づいてくる人、一人。

うつろな瞳とうつろな笑顔で覗き込むリョウイズミ。

直接的に笑顔で叩きのめされた彼女たちは、無言で二人をいざなう僕に連れられて部屋の前まで来たとの事だった。

さすがに初交渉が二人一緒というのは受け入れがたかったのですが、どうにか反撃の茶菓を狙っていたのだが、自室の前で何とか意識を取り戻してくれて助かったというのが話の締めくくり。

「リョウウってばはっちゃけすぎ！」

というのが二人の意見なのだが、その日以降のタイコンデカル口北回歸線は、非常に静かな世界になった気がする。

そう、赴任当初のA E学院の校舎内にも似た雰囲気にも思える。

まあ女子校の校内に似ている軍隊というのはどんなものかとも思うが、よい所が似ているのはいいことだと思う。

それはそうと、タイコンデカル口北回歸線をベースにして各軍基地に訪問しているのだが、出て行く時は涙半分で機長が握手を求め、帰ってくる度に整備兵全員整列で出迎えるのはやめて欲しい。

まるで毎回別れの杯を交わしているかのようなものだもの。

2・ゾンビの園からこんにちわ

冬期休暇中とは思えないほどの人口密度の中央食堂で黄はため息をついていた。

リヨウから預かっているPDAには、黄宛の要請メールがひしめいていたから。

事の起こりは「幻美人プロジェクト」にあったことは間違いない。教授会のバカ騒ぎに学園長も悪乗りしたのが相乗効果となり、あれよあれよという間に大暴走だ。

無論、親友「リヨウイズミ」こそが問題の根幹であるともいえる。

しかしあの男を周囲の人間が嘗めすぎていた事にも問題があるだろう。

あの男はサービス精神の塊で、周囲の人間の思惑を軽く斜め上に行く。

それも思ってもいない角度で。

ゆえに、リヨウが起こした行動は教授会の思惑である「幻美人プロジェクト延長戦」では無く「幻美人プロジェクト徹底抗戦」であった。

いや、幻美人プロジェクトで生まれた公人を正面に立てて自分が雲隠れしようという凶悪なものであった。

意識誘導とは名ばかりの洗脳を潜り抜けた美少女二人の活躍で頓挫した計画だったが、学園内には大きな傷跡を残している。

それが周囲のゾンビたちである。

第一段階の洗脳解除でどうにか存在していた人間としていなかった人間の線引きが完全に行われたというが、その線引きされた世界のどちらに自分が属していたかがわからない状態になっているという。

ゆえに現実への希薄感から多くの人間がゾンビのようにゆらゆらとしているとか。

一応教授会は第二段階への経過と完了をもって通常状態への復帰を宣言するつもりらしいが、そのハードルは高く険しい。

少なくとも、昨日の会議では予定工数が三倍に伸びていたし段階も細かく四段ぐらい増えていた。

それほどに悪魔的な爪あとの癖に、つめを使った人間は必要とされている。

なんとも恐ろしい男だな、と思う。

リヨウチームと認識される人間で学園に残っているのは黄だけだった。

唯一、洗脳を受けていない存在であり、きわめてリヨウイズミに近い人間であるという事から、リヨウの代役として多くのことを望まれていた。

元帥府関係は外で活動中の本人が何とかしているらしいのだが、学園関係の事象の殆どは黄の目の前を通り過ぎていた。

そしておもう。

（気が狂うな、実際）

内容、密度、方向性、すべてに統一性は無く漫然としたすべてを正しく理解して処理しなければならなくて、普通無理、というのがこの冬期休暇の結論だった。

一介の学生が処理すべき内容ではないのだが、教授会も含めて正気を保っている数少ない人間の一人として多くに関わらざる得ない。うらむぞー、というのが最近の口癖だった。

漫然としていた方針にひとつの方向性が打ち出された。

それは黄からの一部情報開示に端を発する。

曰く、「リヨウイズミには元より他人から好意を引っ張り出す気質がある」というもの。以前からアマンダ教授より報告のあった

「ひとたらし」才能が本人も自覚する程度で存在し、強力なセルフコントロールで抑えられているが、今回の騒動で一部暴走したというのがおよその流れである。

それを聞き教授会は一度紛糾したが、そのすべての情報の持ち出し厳禁が宣誓され、ひとつの方針が決定した。

ざつくばらんにまとめると「リヨウにしろアヤにしろ『特別』なのは当たり前なのだから弄る必要は無い。どっちも存在するって事で。」というおそろしいものだった。

およそ投げやりに放り投げられたかのように見える方針だが、それは急速に事象をまとめていった。

日本で言うところの松の内を過ぎるころ、ゾンビの群れは消えていた。

既に多くの人間が「リヨウイズミ」にしてやられたことを正常に認識しており、そのしてやられていた時間のことすら楽しげに話せるようになった。

恰も二重記憶のように思い返すことが出来るそうだが、その処置を受けていない黄にはわからない楽しさだった。

「黄さん、元帥はいつお帰りなんでしょうねえ？」

リヨウと、いやアヤと親しかったルーキーたちの多くが、代償行為として黄を求めて日参している。

代償行為であることや一度ともなしに会話したことが無い相手であつたことなど疑問にも感じないようだった。

そのへんの不整合性を見ると、未だ第二段階も中ほどなのだと思う黄だった。

いまだ半生のゾンビが徘徊する学園の奥底から空を見上げ呟く。

（気が狂うぞ、実際）

3・リアルBLは生臭いに違いない

まあ、とぼつちりだな、と思う。

リヨウチームの一員であることに自負はあるけれど、この派遣先は無かるう、と頭痛がする。

文句なしの学園征服行為が行われた事態收拾のために外部研修という名のところ払いが行われたのだが、そのはじき出し名簿の中に自分の名前を見た瞬間「とぼつちり」という単語が浮かんた。

如何せん、教授会は「うち」のリヨウを舐めすぎているのだ。

過分な評価はあいつをしりこませるが、異常な状況はあいつを輝かせるのだ。

リーガフが暗黒の太陽だとかいつていたのを思い出す。

まさにそのとおり、ヤツは周囲を巻き込む暗黒の太陽なのだ。

ただその騒動に巻き込まれた連中が迷惑に感じているかということでもない。

明らかな矛盾はあるのだが、それすらヤツの魅力になっている。

空恐ろしい話だ。

なにせ自分も、JJもとぼつちりと思いつつも仕方ないと苦笑しているのだから。

スイス山間部の寄宿学校に派遣されたのは外部研修発生後すぐだった。

アジア圏での言語に精通しているヨーコとペアでの派遣であったが、それはそれは恐ろしいところに派遣されたものだと言筋を冷たくしている。

この学校、世界各国から男子生徒を集めた寄宿学校なのだが極めて全時代的な校風というか先進的な校風が根付いていた。

それは作業助手制度だ。

聞けばリヨウの赴任した女子高でも同じような制度があるらしいのだが、こちらはもつとまずい制度だ。

感覚的には中世の騎士と従者の関係に似ている。

飯の上げ膳据え膳から風呂の背中流し、部屋の掃除や洗濯などなど。ほとんど教師の生活の殆どを助手役の生徒が率先して行うのだ。

で、もつとも不味いのが聊か生臭い部分の世話までさせることが出来る、という。

いや、もちろん、衆道的なルールやエチケットには興味ないし関わるつもりは無い。

しかし、しかし、助手役の生徒から日々熱い視線を送られる毎日には辟易とさせられているのだよ、本当に！！

ヨーコなど助手役の生徒に日々背後を狙われる気配を感じるところばしているし。

ああ、リヨウもミスターから狙われていたとき、こんな苦勞していたのかなあ！？

「リヨウよりかは安全だろう？」

教師用の喫茶室でコーヒーをすするヨーコは自分に話しかける。

どうやら独り言を言っていたらしい。

「でもなあ、あいつは結構うまく立ち回ってるぞ？」

「それでも、無理やり夜這いかけてきたり襲い掛かってきたりされないだけ俺たちのほうがマシ。」

確かに、そのとおりだけさあ・・・。

「でも、さすがに発情しきった視線と態度で擦り寄られるのは、いやだよねえ。」

思わず顔をしかめるヨーコは、喫茶室の外に視線を走らせる。

そう、それこそが問題なのだ。

何故か知らないけれど、助手の生徒ばかりではなく教諭の中でもモーションをかけてきやがる馬鹿が多いのだ。

ちくしょー、この際だから身分をばらして逃げようかしら。

そんな愚痴を呟くと、ヨーコは苦笑い。

「さすがにそれは、ね。でも、今の状況の責任は、いずれリヨウにとつてもらふよ」

え？ という思いを込めてヨーコをみると、彼は苦々しく腕を軽くふる。

「こんな動作の一つ一つに至るまで、無為意識下に女性的動作を仕込んだリヨウにね。」

あつ、と自分の動作を意識して驚いた。

わずかな間だけだったはずの麗人喫茶練習は、骨格の線を変えるほどの効果を示していたとアマンダ教授に言われていたことを思い出したからだ。

「・・・やべえ・・・、俺達って実は回り中にモーションかけていたって事？」

「否定できないなあ・・・」

ぐわあ！ リヨウイズミ許すマジ！

4・タイコンデガル口南回歸線

なんというか、すごく清潔なんです。ええ。

軍という特質上男性ばかりである事は間違いなく異常ではないんだけど、視覚出来る範囲での全てがきれい過ぎるのです。

北回歸線に居を一時的に構えている関係上、南回歸線にも表敬訪問すべきであるものと考えた僕は、時間を見て顔を出したところ、同型のタイコンデガル口南回歸線デッキに完全正装した全仕官が待って居たりした。

一部の隙も無い敬礼に答礼したところ、耳を引き裂くがごときのファンファーレとクス球横断幕、紙ふぶきとクラッカーで大騒ぎ。隣のクラウディアさんはなれているようだが、思わず僕は身構えてしまった。

びっくり顔の僕に向かって、初老の紳士が右手を差し出す。

「その紳士たる行いを誇りに思います。元帥閣下」

紳士の行いというのは、多分、反射的にクラウドディアサンの前に出たことを行っているのだろう。

「しかし、女性とは言え部下のために上司が死んでは、軍機能が麻痺しますぞ？」

差し出された右手を受けながら僕。

「好きな人を守れないような小僧を戴いて置けるほど我が軍は温い環境ではないと確信しています。」

瞬間、驚いた風の紳士だったが、軽やかに笑う。

「いかにも。あなたを戴く我らは淑女を守る盾でもあります。しかしあなたが死に瀕する状況では、貴方が好きな人たちも死を目の前にしているでしょう。」

互いに握る手に力を入れる。

「ならば、そんな状況自体も吹き飛ばしましょう、それが我らです。」

「いかにも、其れが我らです。」

乱痴気騒ぎの北回帰線とは違い、南回帰線は極めて理性的な立食パーティーであった。

この手のパーティーというとそれなりに波乱に飛んだものしか経験していなかったため、いささか嬉しかった。

同行の女性は全てエスコートしてもらっているせいか、僕は貴重とともに歓談する時間をもらえた。

「元帥閣下の配下には美しい女性が多く、とてもうらやましい」

「・・・それは暗に北回帰線との人員交流を要望なさっているらしいやる？」

「いやいや、紳士にして騎士たる我らは、敬うべき御婦人はいても愛すべき女生はいないので。」

どうということかなあ、と考えていると一例を出してくれた。

「元帥閣下は、」將軍の御内儀をご存知かな？」

にこやかに頷くと、機長は詠う様に言う。

「かの人は、麗しき芳しく。かの人は、美しくたおやかで……。確かに言葉のはしはしが美しくて、彼女の教えてくれた英語のおかげで色々な人との会話で好感を持ってもらえている。」

「……。ほお、元帥はあの奥様とお知り合いで？」

「チームメイトに」將軍の息子さんがいます。」

まあ、この辺の情報は將軍のプライベートに関わるし……。

「いえいえ、お聞きしていますよ？『もう一人の母』と。」

あははははは、やっぱり有名なのね。

「その心こそ、我が女性を敬う心の根幹です。」

なるほど、と感心している僕の視線の先で、歓待を受けるイブやレンファは女性接待というよりも世話を焼かれているとも見える。

クラウドディアサンなんかは空軍士官であることも影響してか、何人も乗組員が入れ替わり立ち代りで。

「まあ、ミス クラウドディアは人気の急先鋒ですから、下心無しとは言いがたいですな。」

あ、やっぱり。そう言う顔で機長を見ると、彼もクラウドディアサンを視線で追っていた。

「……。機長も、彼女が気になりますか？」

「あ……。そうですね。年甲斐も無いといわれそうですが、心騒ぐ相手ではありません。」

少年のように頬を朱に染めた紳士というのも面白い。

とは言え、そんな台詞を言わせてしまった責任を持つことにした。近くに巡回してきた彼女を呼びとめ、機長殿のお相手を指名。

「まあ、よろしいのですか？ 名立たる空軍パイロットのお話をお聞きしまして？ こんな機会はもう何度ありませんわよ？」

「そのへんは、クレイジークラウドディアにもお分けしないとね。」

元帥の意地悪、とたたき出されて会場のイブとレンファに合流。周辺の仕官の人たちとともに大いに盛り上がった会場だった。

久しく本当に久しぶりに女性ののしらない部屋で寝ることが出来たのだが、寝入りばなにノックがされた。

クラウドディアサンたちと決めている暗号ノックじゃないところを見ると機内の人間なのだと思うのだけれども、どうにもこうにも切迫感が有る。

さーて何事かな、とおもってドアの隣に立つ。

「・・・誰かな？」

小さくささやくように言うと、ノックは止み向こうからも声が聞こえる。

「ご相談したいことがありまして出向きました。」

何でも、僕が同行した女性が乱交パーティーを開催しているという。

紳士の仕来りを厳守する南回帰線乗員としては容認できないので止めてほしいというもの。

衝撃的な話だなあ、と思ったが、彼らが何故そんなうそを言うのかが判らない。

先ず、彼女たちがそんな行動を起こすだなんて事はないので事は一切ない。

これは僕にとっての完全肯定の前提条件だ。

次に、彼女たちが何か騙されて同様の状況になっている、というものもない。

というか、僕の隣の部屋にいて、同行仕官部屋にいるのだから。試しに続き扉を少し開けて隣を覗き込んでみたところ、三人仲良く眠っている。

ふむ、と首をかしげて同行仕官部屋の続き扉をパスロックした。

僕の指紋によるロックだけど、暗証番号と合わせればほぼ外側からの開錠は不能。

之でパニックスペースである隣室の彼女たちに加わる危険のほと

んどがなくなつたといえる。

「・・・君たちは誰だい？」

「フエンリー曹長であります」

僕が片手を挙げると、それに添えるようにあわせる手が出現。
やっぱりいた、と苦笑い。

指信号で会話。

『反乱の可能性はありや？』『否』

『同行の女性に被害の可能性は？』『否定できず』

『外にいる人数は』『10人以上』

『物理的にここが破られる可能性は？』『ほぼ0%』

手を下ろしたそのときには既に周辺から彼女の気配は無くなった。
流石はインビブルエッジ。

「まず、君たちが何故私の同行者を貶める発言をするのかわから
ん。」

「・・・信じてください。私たちは確かにこの目で・・・」

「君達は私の同行女性が何処で寝ているか知っているというのかね
？ 私にすら秘密で選定されているしんしょに誰かが招かれたとい
うのかね？」

「はい、元帥にはお気の毒ですが、女性であるがゆえに。」

「うわー、いやな予感がするなあ。」

そんな思いで眉を寄せると、壁の向こうではざわざわと女性不信
の怨嗟の声が渦巻いていた。

「元帥には感謝してもしたりないのです。このような最高の環境を
頂いて以降、誰も転属や下船をしていません。最高純度の城です。
しかし、そんな城にも不純なる想いが持ち込まれれば染まってしま
うものもいるのです。なにとぞ、なにとぞ！」

さーて、外でナニが準備されてるのかなあ。

のぞき穴一つ無いドアの向こうを想像すると、いささか胸糞の悪
くなる感覚がある。

女性を敬愛しているという言葉には裏がないと思うけど、こつ

う歪んだ視界を持っているのはどうかと思う。

すすんで誤解を解いてやるつもりは無いけど、身内に危害が加わることに手加減をしない。

「君達の意見について内容の精査はしない。しかし、君たちは私の同行した身内を言葉で汚した事実のみが残る。その一事のみは容認できんぞ。」

ぐつと言葉に詰まる外。

「・・・出来ますればその一事をご確認ください!」

悪意満載だよなあ。

どうにかして扉を開けさせたいらしいし。

再び手を挙げると、一拍遅れて手が添えられる。

『敵対の意思はありや?』 『否』

『遊び?』 『半ば肯定』

『仕官参加は?』 『否』

つまり、下士官以下が遊んでほしいと言っているというのかな? そんな風に耳元にささやくと、困惑顔のインビブルエッジさんが頷いた。

なんとも回りくどい。

こんな風に誘い出せば、全員粛清が待ってるのになあ。

「君達が悪ふざけをしている気持ちについては推察できるが、初めから「遊びましょう」と声をかけなかったことを不満に思う。君たちがこの場のうそを私が信じなければ指揮系統における欠点をあげつらうのだから、信じれば直属の部下のことを信じていないと糾弾するのだろう。そんな遊びに付き合うほど睡眠時間が溢れているわけではない。遊び相手を選んで手段を講じなさい。ではお休み」

そんな事を言った途端、小さな拍手が廊下に溢れた。

「見事な切り替えし、大変満足がいきました」

「だったら直ぐに逃げ出さない。今この場で扉を開ければ、全員銃殺だよ。」

ざわつと声上がる。

「・・・あの、本気ですか？」

ちよこつと開けた扉の隙間からMP5の銃口を見せる。

「安全装置をはずしているぐらいに本気」

反乱準備罪から始まる該当軍法を思い当たるかぎり読み上げていると、凄い勢いで駆け足が聞こえ、周辺全てから音が消えた。

さーで、これで静かに寝れるなあ、と思ったところ、扉の隙間に一人の人影。

敬礼の姿勢のまま直立している。

重厚を目の前にしていい根性だなあ、と感心していたが、どうやら気絶中らしい。

「どうなさいますか、元帥閣下？」

「そりゃあ、いたずらするっきゃないでしょ」

下着から帽子に至るまで女性仕官の格好で放置された下士官は、元帥命令でおよそ一ヶ月の間、その格好での勤務となった。死刑よりマシだね。

5 .

元帥府開設以来、頑なに固辞していることが幾つかあった。

その中でも専用の元帥府スタッフの固辞はうやむやになってしまったし、従軍スタッフのほうもかなりの人数になってしまって拒絶の意味がなくなってしまった。

しかし、唯一拒み続けていたことがあったのだが、どうも誤解と曲解がそれと現実のものにしようとしていた。

その名も直参直営部隊。

元帥府からの各軍への出向依頼ではなく、直接手元の軍備を持つ

ことによる高速対応が行えるという面では有効なのだが、そんな兵を持っては辞任しにくい。

そんなわけで固辞していたのだが、いつの間にかタイコンデカル口北回帰線に元帥府スタッフが出入りし始めていた。

さらに元帥府スタッフの持ち回り業務にタイコンデカル口北回帰線のクルーが混じり始めたのだ。

どういうことかとメイム・ヒュレイカ大佐に質問したところ・・・

「現段階の指揮所はタイコンデカル口北回帰線であり、施設責任者は私です。その私の判断において施設への出入り人員の増加よりも職務の代行が望ましいものと判断しました」

とのことだった。

半ば飛行要塞であるこのメガ航空機も、実際は揚力や燃料補給と無縁ではない。

常時出入りしている航空機はあるが、元帥府職務用の人員を抱えるほどの余裕は無いという。つまり、最低必要人員以外は北回帰線内でまかなうことが有用だという。

連絡人員、補給人員、警備人員・・・。

「警備？」

「はい。」

嬉しそうに微笑むメイム大佐。

しかし、うちの部署で警備部隊はなかったと思うなあ。

そう呟くと、彼女は言う。

「学園の警備部がそのまま元帥府の警備部になります」

あーなるほど。

「その警備部と元帥府から依頼で、現在わが部隊は警備部および元帥府の実務代行をしております」

なるほどなるほど。

思わず頷くと、更に嬉しそうにする大佐。

「元帥閣下にもご容認いただきましたので、正式に組織化したく思います。」

思考の範囲内で問題あるかなあ、と首をひねったが思い当たらなかったのであつた。

すると彼女は胸元から一枚の書類を引っ張り出す。

部隊名や紋章やチームマークやらナンやらを細かく記した書類は準備がよろしすぎるくらいであつた。

「・・・こんなの作つてる予算あるの？」

「もちろんです、はい！」

少女のように微笑む大佐を見て、まあいいかと思う僕だったが、実際はあまりよくなかつたのであつた。

陸軍將軍と海軍將軍から猛抗議の通話が入る。

何でもかんでも空軍を贖身し過ぎだという。

何のことかと思つてみると、元帥府直参部隊が空軍のみで組織されてることに關してだという。

直参部隊なんかもつていないのに、と思つてみると、透過スクリーンに最新の人事表が現れて、タイコンデカル口北回歸線の人員がそのまま直参部隊として二重登録されていた。

そうか、そう言うことですか、と苦笑い。

正式な組織化をするという彼女の言葉を容認した僕の負けらしい。まいったなーと頭をかいてみると、両將軍が画面いっぱい顔を寄せる。

『我々の軍からも直参部隊を派遣させていただきますぞ！！』

「すでにタイコンデカル口北回歸線だけでも人員飽和してるんですが。」

『しかし、それではずるすぎます！！』

あんたら子供かよ。

思わず肩を落とす僕だつた。

あれよあれよという間に直参部隊という名の集団が大量に出来てしまつた。

空軍からは「タイコンデカル口北回帰線」および「生贄の翼」号、海軍からは巨大空母「父と子の大地」。

陸軍からはUN静岡空港地上部隊および国連学園警備部隊が登録されてしまった。

今まで遠慮がちに警備していた警備部隊が、大手を振って僕に付き従うことになるそうだ。

「ですが、いままで借り物の部隊ばかりでしたので、直属指揮系統が出来れば迅速な事態解決が出来ましてよ？」

クラウドディアさんの言葉を聞いても、いまいち実感の無い僕だった。

6.

長々と居座っていた「タイコンデカル口北回帰線」であつたが、冬休み終了とともにAE学園への帰参が行われることになった。

すでに帰着用のジェットをつれてきたインビジュアルエッジさんの誘導で機内に入った僕だったが、外の風景に頭痛を覚える。

滂沱の涙を流す兵達と、オリジナルエンブレムを胸にした士官たち。

「すぐに部隊を率いて警備管理を行います」と書かれた横断幕を見て、更に頭痛が深まる。

「元帥が直属部隊を認めていただけるとは・・・感激です。」

僕の向かい合わせに座った空軍中尉、ミモザIIアライア殿はこのまま学園まで同行するという。

しかしこの身は教師を偽装しているわけで。

「ご心配いりません。潜入護衛任務には心得がありますので。」

・・・そう言うことが得意な人は、既にいるんだけどなあ。

「はい、元帥、いいえ。人員の重複は余裕の根本であり運用の要です。」

なるほど、つまり交代人員は必要ってこと？

「まさしく。」

なるほどね、と感心するが、指揮系統ってどうなるんだろうかという疑問を感じてPDAを覗き込むと、僕の下にクラウドイアサンが居て、後は殆ど横並びの直属部隊のみの編成になっていた。

横にスクロールしようとしても、終わらない終わらない。

「・・・一介の小僧に、こんな戦力も足せてどうしようって言うんでしょかねえ・・・。」

頭痛を伴う眩きをもらしつつ、学院の誰よりも早く帰参した僕だった。

始業式。

というか今年初のミサで、院長の左右に並ぶ人々を見てめまいを感じた。

今期より交換実施という形でシスターや保健用務員の交換研修を開始したという。

「まず、保健全般を管理していただけますキムさんです。」

長身のめがね美女がにやりと笑って頭を下げる。

「続きまして、UN従軍教会から研修でいらつしやいました、シスターミモザ、シスターアルマルカ、シスターウルライナ。」

完璧にシスターの格好だけど、肩口のチャペルシンボルがUN各軍の意匠を基にしているのがよくわかる。

思わず背中に大量の汗が流れるのを感じた。

あからさまな人員投入に生徒たちの疑問が爆発するかと思いきや、概ね好評なことだけが救いに思う。

なんでだ？

いやはやナンというか、あからさまな人員投入だ。

予期はしていたけれど、学院側でミスター泉の死守意思を見せたためか、彼を取り巻く教会勢力が威圧戦力による包囲線を開始したのだ。

聞くところによると、今回交換研修にいらしたシスターの殆どはシスタークラウディアとほぼ同郷・同教区だそうで。

つまりミスターイズミの教区が、短期集中で彼の懐柔と学院との隔絶を狙っていることと読み取れる。

新規にいらしたシスターたちの周辺に向ける視線はまるで殺し屋のようだが、ミスターイズミに向ける視線は恋する乙女そのまま。

先鋭的で狂信的な信者が投入されたと見える。

そんな分析をシスタークラウディアにぶつちやけたところ、彼女は大いに動揺してくれた。

一端なりにも真実があることがうかがえる。
なるほど、なるほど。

そうになると、彼の役職が問題だ。

彼が極めて高い役職にあった場合、現状こそがクルティカルな状況であって、学院に残留することすらかなわない立場である可能性もあるのだ。

無論、将来有望な人員というだけの可能性もあるが、先日学院祭にいらっしゃった方々を見るとミスターイズミの評価と地位はきわめて高いものと考えざる得ない。

そういえば、日本語で彼を語るシスタークラウディアは、なにかと「G」の発音をしたがる。

教会関係者で「G」発音の階位、または敬称……。

「卿下……」

思わずつぶやいてしまってから背筋が凍る。

卿下、といえば、かの宗教団体特有の尊称である。

その地位は高く、その発言力は高く、その尊敬は高すぎて上限なし。

つまり枢機卿……？

まさかまさか、キリスト教というのは保守的な組織なので、さすがにあの年齢で其れは無い。

それは無いんだけど、きになるなあ。

聞くところによると、どうやらやばい所まで嗅ぎ付けられているらしい。

神奈川秀美嬢を筆頭にした閉鎖空間的女子の試行能力は空前のものであり異次元的でもあった。

少なくとも表面上の説明から真実の一端を引き出しているらしいとクラウディアさんからの報告だった。

まあ、面白おかしく軍事行動をすること自体には文句無いのだけれども、小僧一人を理由に遊ぶのは感心しない。

各軍シスターたちが代わる代わる外国語指導準備室にやってくるのを、学院の生徒たちが牽制していたり、イブやレンファが牽制したりと刺激が強いなのって。

派遣シスターたちも結構なお年のはずなんだけど、この空間では周辺の女子高生と変わりないらしい。

人なりというものは周囲環境が作るものなのだ、と確信してしまった。

周囲環境という話で見れば特殊環境の学院だけれども、JJと洋行さんは学院とは正反対の特殊環境に身をおいているという。

生徒職員すべて耽美系のゲイゲイ空間だとか。

そっちのほうが気楽ジャン、とは思うけど言葉にはしない。

なにせこちらでは貞操の危機は無いけど、向こうじゃあ……ねえ……。

「ミスタイズミ、少々お時間をいただけますか？」

にこやかで上品な言葉をかけてきたキム姐さんをみて、いろいろと背筋が寒くなった僕だった

表情からそれを読み取ったキム姐さんは、表情を固める。

「・・・てめーが面倒くせえことするから、こっちはいい迷惑だ・
・」
どすの聴いた言葉で囁くキム姐さん。
「しかし、キム姉さんの上品な言葉深いつて、全くに合いません
ね」

2・学園生徒母の会

人の口には戸を立てられぬ、と古来言われるが、学園では極めて厚い壁がある。

情報防壁における学園は常に最新であり、常に最強であつた。
しかしながら、商用的にも政治的にも民間的にも一切情報が漏れ
出てこないなどという事態は異常であり、緊急事態ともいえた。
それどころか、移動する人員の少なさは異常ともいえるほどで、
何かをたくらんでいるかのようだと誰かが言った。

そんな一言を聞き漏らすはずも無い反学園勢力は、この冬におけ
るUN軍稼働率と国連学生の渡航実態をネットで発表し、今期にお

ける勝利宣言をした。

無論、彼らの目的は国連学園自体の消滅なのだから、国連学生が
いかに渡航をしていなくても彼らの目的には一切関係が無いはずな
のだが、彼らの言葉を借りるのならば「我々の活動に恐れをなして
引きこもった」となるらしい。

いささか子供じみた発想だが、人様の神経を逆なでする役目には
たっているらしく、タイコンデカル口北回帰線の回線を圧迫するほ
どの上申書と作戦案と計画書が上がってきた。

中身は殆ど「殲滅」「締め上げ」「狩り」と某超大国を彷彿とさ
せるものばかりなのが頭痛の元だ。

もう少し面白いものが無いものかね、と思っていると、ちょっと
へんな特別予算請求書が大量に入ってきた。

それは主に光熱費と食費と人件費と・・・。

とてもとても信じられない話に思える量なのだが、どこかで見た
ような数値にも思える。

なんでしょうねえ？　とおもっていると、秘書もどきを買って出
たレンファが明確な答えを出してくれた。

「これって、元帥府スタッフ全員の月費用相当じゃない？」

さらにもう一人の秘書もどきも頷く。

「そうね。予算規模からすると、各基地に一ヶ月ほど滞在している
って予算かしら？」

つまり、ウチのスタッフが学園を出て一ヶ月ほど順番にお邪魔し
ているぐらいの人数やデータのやり取りがあるってことか？

何でそんなことを・・・と思っていると、予算の元となる作戦が
あったので紐解く。

手元のPADで探ると、なんと僕の手前で承認された全世界作戦
ということらしい。

作戦製作は「戦史研究室」。

承認は三軍將軍。

写しぐらいは元帥府まで上がってきているものの、ルカ力さんの

ところでデータバンクに差し込まれていた。

つまり、僕には見せないで行うアニバーサリー企画のようだ。

「・・・これってさ、リヨウがどこに雲隠れしてもいいように準備だけしてたって事?」「どちらかというと、外部に対する迷彩よね。何処にいるか予算的にはわからないし」

どちらの意見ももっとも。

が、僕はこの冬、対国連学園系テロ各セクトを混乱に陥れるプランを思いついた。

「・・・と、いうわけで、外線電話をかけまゝす」

にこやかに宣言をする僕を、イブとレンファが半眼で見つめた。

「まあまあまあ、ぼっちゃま。おひさしぶりです」

「パット先生、お久しぶりです」

電話の相手は「J」マザーにして「J」將軍婦人、パトリシアさんだ。折り目正しい挨拶と会話はパット先生から学んだ英語の一部であり、文化と精神のバックボーンであった。

この精神的な背骨があるこそ、僕は僕でいられるものと思う。

そんなことを御礼で言う間柄ではないので、一応本題を切り出すとすると、彼女は將軍が現在休暇中で自宅に居ないことや、息子も学園から帰ってきていないことを申し訳なさそうに説明した。

もちろん、ご子息の学園の友人であるところの僕が「J」未帰宅を知らないわけが無いし、形式上とはいえ上司であるところの僕が「J」將軍の自宅不在を知らないわけが無い。

そんなことを簡単に話すと、彼女は喜色に溢れる声を放つ。

「じゃあ、四方山話のためにお電話をいただきましたの? うれしい」

電話の向こうでは多分身もだえをしていることだろうが、実際のところ重要な用件があるのだ。

「あら、なんでしょう?」

「じつはですね……」

外線電話を切った後、目の前の作戦表示パネルに赤い線が走った。アメリカ西部湾岸の赤い点が、三つに分かれて線になり、さらにそこから三つに四つに分かれてゆく中で、少しずつ青い線がまじり、ばらける。

瞬間的に広がり、そして沈静化してゆく赤い線に比べ、青い線は活発に全米を走り、そして地球規模に走り始める。

海底ケーブルを走り、衛星回線を走り、インターネット回線を伝い、無線回線を走った。

青い線が一通り沈静化した後で、今度は緑色の線と茶色の線が走り始める。

緑色の線は通信回線で、茶色の線は人の流れ。

全ての準備が終わったのは地球が三周する頃。

その頃には、作戦要項の全てが全軍に「手紙」で配布され終わっていた。

其れを見て、各軍、各基地の司令官達は苦笑いだろう。

何せ、この作戦は、三軍のトップの殆どを通さずに、僕から仕官以下に伝令されたアニバーサリー作戦なのだから。

妻からの電話があった。

何でも、実家のほうで息子のチームの奥様方を呼び集めて女だけのパーティーを開くので、暫く帰宅しないで欲しいというものだった。

元帥閣下への秘匿作戦が進行中なので帰宅できるわけではないのだが、それでも愛しい妻に言われる台詞の中で厳しいものの一つに思える。

聞けばチャンもシンドラも同じように言われているらしく、三

軍の長ともに恐妻家だと三人で笑った。

進行中の作戦では、十分なく乱とストレスをテロセクトに与えることがわかる。

全く渡航情報が漏れ聞かない国連学園生徒。

現れては消える元帥閣下。

普通に移動しているはずなのに予想外なところで検問をはるUN。検挙率は去年実績から30%増し。

これがサラリーマンなら、ボーナスの査定を期待できすぎる結果だろう。

満足そうに微笑んでしまった私に一報が入った。

なんと、大量の国連学生が極秘に帰郷している動きがある、というのだ。

寝耳に水、どころの話ではない。

散開しているテロセクトの鼻先を掠めるように現れる国連学生帰郷情報、

無人のAE学院を徘徊するわけにも行かない僕は、この冬をどう過ごすかを悩んでいたのだが、凄い勢いで準備をするイブとレンファに巻き込まれ、静岡空港に行き着いていた。

すでにクラウディアさんとの打ち合わせが済んでいるということ、そのまま旅客機に放り込まれた。

それは夏にずつつと乗っていたUN所属機「永遠の翼」号に相違なく、乗務員たちが嬉しそうに迎えてくれた。

「お久しぶりです、元帥！！」

熱い抱擁を交わした後で、定位置となった席に座ると両脇に美少女が座る。

一息ついたところで、すぐの発進となり、三分後には機上の人となった。

そこで僕は咳払い一つ。

「あ、ああ、で、僕は何処に向かっているのかな？」

その言葉に、喜色満面の少女たちが何枚かの書類を出す。

書類には「元帥府冬季休暇のお知らせ」とあった。

緊急事態や非常事態を除き、一切の元帥業務停止と休暇についての日程がかいてあったのだ。

おもわず背後を振り向くと、そこに居るクラウドさんがピースサイン。

何でも本来であれば元帥による新年巡回が予定されていたそうなのだが、クラウドディアさんを筆頭にした元帥府スタッフとイブやレンファの活躍により阻止したそうだ。

その代わりといっっては何だが、各將軍たちが巡回しているという。

「つまり、完全な休暇なの！！」

すんごく嬉しそうな二人。

至極やり遂げた表情のクラウドディアさん。

僕は非常に感謝していたが、反面「完全に休暇をとるためにどれだけの努力が必要なんだ、僕は」と暗い気持ちがちらほらとしていた。

「そんなわけで、元帥府一同および有志による慰安旅行とあいなつたわけだ」

突如現れた元帥府医療部門の金女史。

「あ、金ねーさん、お久しぶりです」

ちゃきつと手を上げる僕に、彼女は全力の梅干攻撃。

「きさま、私が誰のために派遣されたのかを忘れておらんだろうなあ〜？」

「いたい、いたい」

「勝手に処分されて、勝手に居なくなつて、私の仕事の分際で何処に行つておつた!!」

「いたいいたい」

「貴様がない間、私が何をさせられていたか解つておるのか!!」
急遽やんだ梅干攻撃の間隙で僕は答える。

「保健室のエロエロ先生」

「叩き潰す!!」

顔を真つ赤にした金女子に追われつつ、僕は機内を走り回つていた。

実際、元帥府スタッフの皆さんには悪いことをしたと思つている。僕の斜め上行動の影響で精神面での負担を抱えている人は少なくないし、僕が居ないことで存在意義に対する疑問を内在してしまい、随分と津愛思いをさせてしまったとの事だ。

そんなこんなを考えれば、この慰安旅行は大変素晴らしい企画であるとも言える。

仮設元帥部屋から飛び出して、後部スペースに滑り込んだ僕は元帥伏すタフの皆さんにもみくちゃにされる。

久しぶりとか何処に行つていいのかとか叩かれたり抱きしめられたりで、こんな荷にも心配を掛けていたのかと苦い思いをしていた。そんななかで、さめざめと泣く女性が一人。

真つ赤な長い髪をした女性。

「あ、あ姐さん」

周囲のスタッフが励ますように方を叩くのにあわせ、がばりと顔を上げた彼女の顔は流れた化粧でどろどろに。

「リョウウイズミ!!我々になんの断りもなく出奔とは良い度胸だ!!」

ずびつと指差すあ姐さん。

「い、いや、ほら、元帥である前に学生なんすよ、僕」

するりと動いた姐さんは、がっちりと僕を羽交い絞め。

「それでも、それでも、私たちにだけは明かすべきだ、知らせるべきだ！ 私たちは最も近くに居る部下なんだから！！」

そうだそうだと口々に声を上げて僕を叩くスタッフ。

ああ、この旅行中、ずうつとこんな感じなんだろうなあ。

聊か諦め気味にため息をつく僕だった。

機内で既に酒盛りが始まったあと、何時間もしないうちに殆どの人間がつぶれた。

目的地に到着するまでこのままにしようと思った僕は、自分の席に戻ったところ、暫くたってクラウディアさんが現れた。

「元帥、ご苦勞様です。」

「うん。」

両脇に二人が寄り添って寝ているのを気にしながら、小声で話す。
「チームの皆さんには悪いと思いましたが、私たちが元帥を独占させていただきました」

ささやかな独占だ。

なにせ元帥府スタッフだけでも200人からの人間が居て、随行している警備人員だけでもその三倍はいるのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9346/>

空想科学学園都市 井川

2011年5月3日16時50分発行